Kitabatake, Chikafusa
Jinno shotoki

顧問
井上通泰先生
山田孝雄先生
新村出先生

正宗敦夫 編纂 校訂

神皇正統記 元元集

合資會社 日本古典全集刊行會壽梓

北畠親房卿系譜略

- 村上天皇
  - 具平親王
    - 源師房 右大臣 賜姓
      - 俊房 左大臣 堀河
      - 顯房 左大臣 六條
        - 雅實 太政大臣 久我
          - 顯通 大納言 久我
            - 明雲 天台座主
          - 雅定 右大臣 中院
            - 雅通 内大臣 久我（實顯通子）
              - 通親 内大臣 土御門
                - 通光 太政大臣 久我（中院正統）
                - 通方 大納言 土御門
                  - 雅家 權大納言 北畠
                    - 師親 權大納言
                      - 師重 權大納言
                      - 親子 護良親王母
        - 顯子 白河中宮 堀河國母

親房○○
- 顯家○○　中納言　北畠
- 顯信　右大臣　士御門
- 顯能　右大臣　北畠
  - 顯俊　中納言
  - 顯泰　大納言　伊勢守 ― 滿泰　左中將 ― 滿雅　左中將　伊勢守
    - 教具　權大納言　伊勢守 ― 政鄉　左中將　伊勢守 ― 材親　權中納言　伊勢守 ― 晴具　權中納言　伊勢守 ― 具教　權中納言　伊勢守 ― 具房　左中將　伊勢守
- 顯雄
- 顯子　後村上中宮

女子○○　護良親王妃

北畠親房卿年譜略

大納言師重卿長男。母は入道左少將藤原隆重朝臣女なり。祖父入道權大納言師親卿養ひて子となす。

(天皇)	(年號)	(月)	(日)		(年齢)
伏見、	正應六、	正、	廿九	生る。(准后傳)	(一)
		六、	廿四	敍爵(從五位下)	
	永仁元、			(八、五、改元)	
	二、	正、	六	從五位上	(二)
	五、	二、	廿八	正五位下	(五)
	六、	五、	廿三	從四位下	(六)
後伏見、	正安二、	正、	五	從四位上(新院當年給)	(八)
		閏七、	十四	兵部權大輔　元服(准后傳)	
後二條、	嘉元元、	正、	廿	左近衛少將	(十一)
		十二、	十七	正四位下	
		十二、	卅	右近衛中將	
	三、	十二、	卅	權左少辨(父師重權大納言を辭して申し任す。)	(十三)

（月日、准后傳による。師重の辭任に符合する故）

德治元、十二、廿二　左少辨　（十四）

二、七、廿八　家督に立つ。（父師重出家に因る。准后傳）　（十五）

十一、一　左少辨を辭し、彈正大弼に任す。（賴俊朝臣、辨に加はる間暫立之餘云々）

花園、延慶、元、十一、八　從三位　（十六）

三、三、九　正三位　（十八）

十二、十一　參議に任ず、彈正大弼故の如し。

三、卅　彈正大弼を止め、備前權守を兼す。

四、正、十七　兼左近衞中將　（十九）

應長元　（四、廿八改元）

七、二十　兼左兵衞督を兼し、檢非違使別當に補す。

十二、廿一　權中納言に任ず、別當、督故の如し。

正和元　（三、廿、改元）

二、三、十五　別當、督を止む。　（二十）

八、十　從二位

四、四、十六　服暇（祖父入道權大納言師親卿薨ず、父喪に准じて籠り服解す。）　（廿三）

（月日は尊卑分脈准后傳による）

四、十七　權中納言を止む。　（廿四）
五、正、五　正二位
後醍醐、文保二、十二、十　權中納言に還任す。　（廿六）
（此歲）　世良親王を養君として預けらる。（准后傳）
元應元、八、五　中納言　（廿七）
二、十、廿一　淳和院別當に補す。　（廿八）
元亨二、正、十三　父入道大納言師重卿の喪に遭ふ。　（三十）
（但、亡祖父の命に依り、重喪の儀に非ず、然而五旬中籠居）
三、六　除服出仕宣下、
四、五　右衞門督に任じ、檢非違使別當に補す。
三、正、十三　權大納言に任ず、淳和院別當故の如し。　（卅一）
五、　奬學院別當に補す。
六、十五　陸奧出羽按察使を兼す。
六、　中殿詩御會、詩人卅餘輩を召す、親房卿其隨一なり。（准后傳）
十二、廿三　拜賀啓陣に大納言七人を越えたり。（准后傳）
四、三、廿　八幡行幸、親房卿事を行ふ。　（卅二）
大納言に任ぜられし事此年に在らむ。（公卿補仕此年佚す、而して
明年既に大納言としてありて任日を注せざればなり。）

正中元（十二、九改元）

二、正、七　內敎坊別當に補す。　（卅三）

三、二、九　按察使を辭す。（息顯家を右左衛中將に申し任ず）　（卅四）

嘉曆元（四、廿六改元）

二、閏九、卅　法勝寺上卿。　（卅五）

元德二、二　中殿歌御會、親房勅を奉じて和歌序を書く。題は契花萬春（准后傳）　（卅八）

九、十五　太宰帥世良親王薨ず、親房卿之を歎いて出家せんとす。天皇其の志を感じ給ふ。（准后傳）

九、十六　從一位（准后傳。諸書、親房卿の一位に叙する年月を記せず。されど出家のまゝ叙位の事あるべからず、必ず出家前にあるべきなり。故に准后傳によりてここに掲ぐ。）

九、十七　官を辭して出家す。法名宗玄又覺空

元弘元、八、廿四　（天皇笠置に潜幸す。）　（卅九）

二、四、　（北條高時、天皇を隱岐に遷す。）　（四十）

三、五　（北條氏亡ぶ。）　（四十一）

六、五　（天皇京都に還幸、親政あり。）

十、二十　顯家を陸奧守に任じ、義良親王を奉じて、陸奧出羽を鎭せしむ。親房共に赴いて之を輔佐す。

建武二、十一、　　　（足利尊氏叛す。）　（四十二）

十二、　廿二　顯家、親王を奉じて陸奥を發して行々賊を破りて鎌倉に入り、遂に尊氏を追うて西上す。

三、　正、　十　（尊氏京都を侵す、天皇東坂本に幸す。）　（四十四）

正、　十三　顯家、親王を奉じて行在に詣る。親房卿行を倶にして至る。（梅松論による、准后傳は十月に親房卿上洛とす。）

正、　三十　（官軍尊氏を敗り、天皇京都に還幸。）

二、　十二　（尊氏、鎮西に走る。）

延元元　（二、廿九改元）

三、　十　顯家再義良親王を奉じて任國に赴く。

五、　廿五　（尊氏東上し、官軍この日兵庫に拒ぎて利あらず、楠正成戰死し、新田義貞退いて京都に入る。）

五、　廿七　（天皇再山門に行幸。）時に親房卿病みて宇治に在り。（准后傳）

六、　親房卿伊勢國に赴き、次男顯信以下從ふ、愛洲矢野等を催して山門を援けんと欲す。（准后傳）

十、　十　（天皇京都に還幸あり、尊氏花山院亭に幽し奉る。）

十一、　二　（尊氏、天皇に逼り、神器を其の主に授けしめ奉り、強ひて太上天

皇の號を上る。）

十二、廿一　（天皇神器を奉じて吉野に潜幸す。）

親房卿、伊勢光明寺をして祈禱せしむ。

二、正、一　親房卿、書を結城宗廣に與へ天皇の南狩を告げ、且つ陸奥の事を囑す。　（四十五）

春　天皇親ら年中行事三卷を撰し、又親房卿に命じて延元禮節三百六十箇條を撰せしむ。（准后傳）

八、十一　（顯家、親王を奉じて陸奥靈山を發し、後鎌倉に入る。）

九、廿六　親房卿志摩の軍勢を催す。

三、正、二、（顯家、親王を奉じ、鎌倉を發し西上す。）　（四十六）

二、廿一　（顯家、奈良に入る賊軍逆へ撃ち、顯家敗れて廿八日河內に走り、義良親王吉野に入り給ふ。）

五、廿二　顯家、和泉に戰死す、年二十一。

閏、七、廿六　顯信、陸奥介鎭守府將軍に任じ、義良親王を奉じ、往きて陸奥に鎭し、親房卿をして之を輔けて行を倶にせしむ。

八、十七　義良親王、宗良親王、伊勢を發して東國に航せらる。親房、顯信等從ふ。

九、十一　海上颶に遇ひ、義良親王、顯信は共に伊勢に還り、宗良親王は遠

江に、親房卿は常陸に著く。（月日准后傳）これより後親房卿、常
陸小田城に在り。

四、春 （義良親王吉野に歸り東宮に立ち給ふ。） （四十七）

後村上、 八、十五 （天皇讓位）

八、十六 （後醍醐天皇崩ず。）

秋 常陸小田城に在りて神皇正統記を著す。

五、二 職原抄を著す。（同上） （四十八）

興國元 （四、廿八、改元）

五、十六 親房卿、奥方の諸氏の請に依り、一軍將をして己に代りて赴かしむ。

二、六、十六 （高師冬、小田城に逼る、爾後屢戰あり。） （四十九）

十一、十 小田城主小田治久、賊に通ず、親房卿關城に移る、高師冬轉じて
また之に逼る。

四、八、十九 是より先、親房卿小田城に入りてより屢書を結城親朝に贈り、そ （五十一）
の父兄の功勳を告げ、來り援ふことを促ししかど、親朝依違して
應ぜず、ここに於て終に賊に通じて叛す。

七 神皇正統記を再び修治す。（關城に在り）

十一、十一 常陸關大寶の二城陷る。親房卿以下伊勢に還る。（但その月日未詳）

五、春 （この頃吉野に還るか、准后傳には准三宮の宣旨を下し和州宇陀 （五十二）

郡を領せしむとあり。されど、この後興國七年の日本紀正平三年の願文に儀同三司（准大臣の唐名）の自署あれば、未だ准后たらざること明かなり。而して准大臣の宣ありし年月また明かならず、恐らくは准后傳、准大臣と准三宮とを混同せしならむ。然らば准大臣の宣或はこの時の事か。）

是歳　元元集七卷を撰す。（准后傳）

六、　是歳　熱田本紀一卷を撰す。（准后傳）　（五十三）

七、十一、十三　日本書紀を寫して顯能に授く。（宮内省藏本奥書）　（五十四）

正平元（十二、八改元）

是歳　東家祕傳、神敎祕傳各一卷を撰す。（准后傳）

二、春　天皇、親房卿に命じて古今集新注二卷を撰せしむ。　（五十五）

三、二、廿四　（高師直、吉野を侵し行宮を燒く、天皇紀伊に幸し、尋いで大和賀名生に遷幸して皇居とす。）　（五十六）

八、廿二　願文を觀心寺に納めて興隆を祈る。

十一、十一　（花園法皇崩ず）

五、　河内國細代莊地頭を領せしめらる、十二月にこれを河内敎興寺に寄附す。　（五十八）

六、四、四　醍醐寺僧房玄、賀名生に參り、親房卿に面して事書を進す。（此　（五十九）

事書は蓋し南北講和の條件か。)

五、十五 朝廷、足利氏進する所の事書を卻く、親房卿等の之を非とするに依る。和親の議止む。

十、廿四 (尊氏、義詮の降を許す。)

十一、七 (北朝の天皇及皇太子直仁親王を廢す、延元元年より十五年にして天下一統す。)

十二、廿三 (北朝の神器を賀名生行宮に收む、親房卿この事に關る。)

(准三后宣下この前にあるべし、太平記に六年の事とし、園太曆この時の記事に准后と記す。)

七、二、廿八 (天皇、住吉に幸す。) (六十)

閏、二、十九 (天皇、八幡に幸す。)

二、廿四 親房卿、京都に至り、顯能に代りて京都の事を行ふ。

四、一 安藝海莊地頭職を高野山に寄附して祖考及子顯家の冥福を祈る。

五、十二 (是より先、義詮反し、八幡を攻むること急なり、此日八幡陷り、官軍退き、天皇賀名生に還幸す。)

多 親房卿に勅し、先帝御撰の年中行事を書寫せしめ、親ら校合し給ふ。

八、六、九 (官軍京都を復す。) (六十一)

九、二十一 (尊氏義詮率兵京都に入る。)

是歲　賀名生行宮千首和歌御會．親房卿亦詠進す。

九、九、十五　大和宇陀郡福西莊灌頂寺阿彌陀院に閑居して薨ず。（准后傳）　（六十二）

（常樂紀に四月十七日……於紀州賀名生圓寂と記す。然れども、此書尊氏の母の死を二月も先だちて記せる如き、杜撰往々あれば、必ずしも信ずべからず、ここにも賀名生を紀州とせる杜撰あり。）

右年譜、北畠准后傳に據る所少からず。この書、その時代を明かにせねど、室町時代の著なるべく、中に親房の日記などを材料とせるあり、悉く信ずべからずと雖も、全然無稽のものにあらず。この書傳本稀なりといふ、余が藏するものは故男爵北畠治房氏の時に手づから寫して余に與へられしものにして、その原本は田中勘兵衛氏の藏書といふ。その福西莊灌頂寺にて薨すといふ傳の如きは無稽の語にあらざらむ。この寺と親房卿との關係は瑚璉集の奧書にても推知しうべし。又卿の著書に就いて僞書說行はるれども、確證なき限り、漫然否定するは學者の道に非ず。故に、今これを收錄して後の研究に待つ。

昭和七年四月十二日

山田孝雄

神皇正統記諸本解説略

> 今ここに述ぶる所は、余が實査せしものを主としたるものにして、余の實見せざるものは、ただそを略述し、且つその出を明言しおけり。

第一　白山本

一　白山比咩神社藏本（國寶）　四册　（完本）

美濃判袋綴にして、竪八寸八分横約六寸。墨書片假名交りにして宣命書に似たる所少からず。一頁八行に書く。

第一册は表紙に（これらの表紙は後に加へしならむ）

　　神皇正統記　一

と記し、內題なし。紙數三十六枚。神代にて終る。第二册は表紙に

　　神皇正統記二

とあり、次の紙に

　　神皇正統記皇世第一

と記し、その紙の末行に

　　神皇正統記二

と記し、次の紙より本文を書く。本文は四十五枚、文武天皇にて終る。第三册は表紙に

神皇正統記　三

とあるのみにして、次の紙より直ちに本文を書く。本文は四十四枚、堀河天皇にて終る。第四册は表紙に

神皇正統記　四

とありて、本文は直ちに書きつゞく。五十七枚ありて、鳥羽天皇よりはじむ。かくて第五十枚裏四行にて後村上天皇の條を終へ、次の行より、次の文を書く。

此記者去延元四年秋爲示或童蒙所馳老筆ヲ也旅宿之間不審。一卷之文書纔ニ尋最略皇代記任彼篇目粗勒子細畢　其後不能再見已ニ及五稔不圖有展轉書寫之輩云々　驚而披見之處錯亂多端矣未秋七月聊加修治以此可爲本以前披見(實)之人莫嘲哢聞(耳)

この文は德富氏應永本、清家本の卷首、池田氏青蓮院本の卷末にあると同じ文にして、一二字の異同あるに止まるものなり。かくて、この文よりかきつづけにして次の文あり。

右本兩帖者北畠源准后法名宗玄御筆也延文元年之比大和國信貴山居住之時以彼家僕瀧口左衛門尉基邦之本令寫畢

とあり。この延文元年は北朝の年號にして著者親房卿の薨ぜし正平九年より二年の後(正平十一年)なるが、正統記寫傳の奥書としては現今知られたる中に於いて最も古きものなり。加之北朝側の人の早くもこれを書寫し傳へたることは本書の歷史上の位置を考ふるものにとりては重要なる事實たり。本書にはなほこの次に行を改めて、

第九十六代光嚴院云々(三行)

第九十七代後醍醐還淸云々（二行）
第九十八代光明院云々（二行）
第九十九代崇光院云々（三行）
第百代後光嚴院云々（三行）
第百一代後圓融院云々（三行）
第百二代後小松院云々（三行）
第百三代稱光院云々（三行）

の記事ありて終る。この増補の部は續神皇正統記の源をなせるものと認めらる。

本書は上述の如く四册に分ちたれど、その内部には卷を分つこと九なるが、その分ち方は何によるものか詳ならざるのみならず、その境目の不明瞭なるものあり。

本書には處々に奥書の如きもの又樂書に似たる記入あり。その文を見れば頗る無稽の語を弄するものあり。今憚る所あれは、一々これをのせず。ただその書寫の年代を知らむ料として數個をあぐべし。第一册の末の文には二行の文ありて、

永享十年初夏書寫之
同校了

とあれど、それの筆者の名なし。第二册の末にも

永享十年孟夏天書寫之
同校合了

と記し、第四册の末には

享祿十年五月　椿原親王御子孫

白山神主

と記せり。この椿原親王とあるは第四册の將門亂の邊の記入に

葛原新王十五代後胤

上道氏

とあるを以て見れば、葛原親王の末なる上道氏といふが白山神主たりしものありて、その某が、永享十年に書寫せしことと考へらる。本書には、この外に又第一册の末に、上の奧書の次に、

享祿二年三月廿五日行年五十九歲

白山西神主上道氏榮

の識語ありて、これを抹消せり。而してこの筆蹟を以て本文に比するに異筆とすべからざるに似たり。恐らくはこれ享祿の傳寫本にあらざるか。なほこの外第三册の內部の「神皇正統記六」と記せる次に

寬政六甲寅年五月下旬受之

上道相傳建氏

と記せり。これは本書の傳來を語るものならむ。卷末に嘉永元年七月廿三日の森田頁見の跋文三枚を加へて、その傳來を考證せり。本書には本文に假名をつけたれど、杜撰多し。而して全體にわたりて誤脫頗る多く、學術上の價値多からず。ことに花園院の條に

第四十九代花園院……五十一歲ヲマシ〳〵キ

と書ける如きは決して原本のまゝにあらずして、正平三年花園院崩御の後の改竄なること著しきものなり。されどその延文の奥書は本書の爲に重要なる史料たりといふべし。

本書は昭和八年四月に島連太郎氏これを寫眞複製して世に布けり。

第二　應永本

一 德富氏藏應永本　　二册（完本）

美濃判袋綴、上、六十五枚、下、五十八枚

一面十一行、漢字片假名交りにて書く。

各册、卷末表紙内面に「登壽院藏」とよまるゝ朱長方印を捺す。

上册は第一枚に「神武天皇」乃至「陽成天皇」の御名を記す。蓋し目次ならむ。第二枚に

一本奥ニ有之

此記者去延元四年秋爲レ示ニ或童蒙一所レ馳ニ老筆一也。旅宿之
間不レ齊ニ一卷之文書一纔ニ得ニ最略之皇代記一任ニ彼篇
目一粗勒ニ子細一畢。其後不レ能ニ再見一、已及ニ五稔一不ニ圖有ニ展
轉書寫之輩一云々驚而披見之處錯亂多端。癸未秋
七月聊加ニ修治一以レ此可レ爲レ本。以前披覽之人莫ニ嘲哢一
ニ可耳

自天祖至地神五代爲甲帖

自神武至淳和爲乙帖
自仁明至安徳爲丙帖
自後鳥羽至當―爲丁帖

の文をその表面に書き、第三紙より本文を記す。そのはじめは第一行に

神皇正統記一　甲帖

とあり、次行より本文となる。

上册本文はその目錄の如く陽成天皇の記事を以て終れるが、それは第六十四枚の表第二行にて終り、その次一行空白にしてその次に

日本紀八仲哀云々（四行）
又云筑紫　伊都縣主祖云々（六行）
愚案云々（二行）
伊勢御祭　九月十六日外宮　同十七日内宮　熱田大神事　二月午日　十一月卯日

の文を載せ、次二行空白にして、その次に

日本紀云々
續日本紀云々
日本後紀云々

の文を記し、最後の一枚には四行にわたりて

續日本後紀云々

文德實錄云々

三代實錄云々

外記番記云々

の文を記し、以下空白なり。その裏に貼紙ありて、それに

「勞ヲツミテ」云々より「常ノ官位上ルニ」までの下卷の末つ方にある文を記せり。

下册第一枚には上册の如く、日次として「光孝天皇」乃至「後村上天皇」の御名を記す。第二枚に

神皇實錄云々（三行）

神皇系圖云々（　行）

天口事書云々（三行）

の文ありて、以下空白なり。第三紙の第一行には「神皇正統記」とのみありて、第二行より本文をかく。その次第は目次に一致す。本文は第五十五枚表第九行にて終り、以下空白なり。第五十六枚には「關白始事」とかきはじめ、その文は第五十八枚表第二行までつづく。その裏に

應永四年丁丑十二月上旬　書之。此本少年之時　書

寫僻字落字等可在之。此記者北畠大納言親房

卿於南方書進　後村上院云々深祕于函內輙勿出

四旬老士實位

の奧書あり。本書には往々誤寫ありて、これを朱にて訂せると墨にて訂せるとあり、又藍にて訂せるあり。朱にて訂せるには、たゞ訂せるものと「イ」と注せるとあり。

この書、下册第四十二枚の表第七行より第四十八枚裏第一行までの間錯簡たり。その復舊せるさまを記せば次の如し。

自四十七枚裏十一行「勞ヲ積テソ理運ノ………
至四十八枚裏一行　………位ノ外ニ」　（約十二行）

自四十七枚表八行「勳位ト云シナヲ…………
至四十七枚裏十一行………ニハ義朝左馬」　（約十四行）

自四十六枚裏五行「頭ニ轉シ淸盛…………
至四十七枚表八行………檢非違使ニテヤ」　（約十五行）

自四十六枚表二行「範賴カ參川守…………
至同裏五行………諸社ニ……箭ニモ其日」　（約十四行）

自四十五枚表十一行「イケル箭ニモ…………
至四十六枚表二行………才用ヒトシケ」　（約十四行）

自四十四枚裏七行「レハ勞效アルヲ…………
至四十五枚表十行………上古ニ及難キ事ヲ恨」　（約十四行）

自四十四枚表四行「ヤカラモアレト…………
至同裏七行………大上中下ノ四ノ功ヲ立テ」　（約十五行）

自四十三枚裏一行「田ヲアカチ給キ…………
至四十四枚表四行………此費ヲキカセ」　（約十四行）

自四十二枚裏十行「給テ記録所ヲ……………　（約十三行）
至四十三枚裏一行　………モ競申ケリ」
自四十二枚表七行「トソ納マラムトテ………　（約十四行）
至同裏十行　………コトワサニハ」
自四十八枚裏一行「一タヒ軍ニカケ………

今これを以て考ふるに、その錯簡は十箇にわかれ、それが後より次第に逆に連絡する所を以て見れば、これはその原本胡蝶装の本なりしならむが、そのうちの五紙一折（木口十枚）をば逆に折り違ひて綴ぢたるものをば、復寫の際に、そのまゝ書き延べたるが爲にかゝる姿を呈せしものと考へらる。ここにこの應永本の原本は胡蝶装のものなりしこと疑なき事となる。

二　池田龜鑑氏藏青蓮院本　三册　（殘闕）

美濃判斐紙袋綴丁子引紙表紙。外包の疊紙あり。それに

青蓮院尊純法親王奧書

神皇正統記　　三册

と記す。然れども、然見ゆる奧書は無し。或はこの本の原本にありしものか。

本文は行草體漢字平假名交りにて書く。

上卷には

神皇正統記自神武至尓（ここに稱德の二字あるべきなれど、字形頗缺く）

の外題簽ありて、その下に「上」の文字を記せり。この題簽は本文の同筆と見ゆ。禮紙一枚、次に目次一枚、

この目次の表に「青蓮王府」の朱方印あり。本文は初行より

人皇第一代　云々

と書きて内題なし。目次にある通り稱德天皇の條にて終る。本文終りて後附錄として

日本紀曰云々(これ德富德永本の附錄十二行の文に略同じ)

の文一枚、

當帖篇目條々事

と題する文二枚ありて次に禮紙一枚あり。その附錄第一枚の餘白に、德富本附錄の

イ本
伊勢御祭云々より

「外記番記光孝以後」まで

の文を記し、「イ本」と肩書せり。又末の禮紙に

イ本
神皇實錄曰云々

の記入あり。末に朱にて「一校了」と記す。又「源隨印」の朱方印を捺す。

中卷も體裁略同樣にして、これには外題に「自光仁至安德」と記し、本文これに一致す。目錄の紙に青蓮王府の朱印あり。末には

當帖篇目條々事

と題して記せるもの二枚あり。禮紙一枚、その表の端に近く

寛永第七臘十有七校合了

の朱書及び「源隨」印の朱印あり。

下巻も略同様にして後鳥羽天皇の記より後村上天皇の記に至る。はじめに禮紙一枚、目錄一枚あること上に同じ。但し、この目錄には印なし。本文第一枚の表に「青蓮王府」の朱印あり。本文の後に

當帖篇目條々事

と題しての記入一枚、次に奥書を記せるもの一枚。これには表面に、德富氏應永本の上册第二枚にある

此記者…………莫嘲哢耳

の文を記す。これは「最略之皇代記」「書寫之體」の「之」字なきと「披覽之人」の「覽」字が「見」字になれると、末の「耳」の字が正しく書かれたるとの異あり。次にその裏面に德富本の下册の末にある奥書と同じ文を載せ、それに「本云」と肩書せり。その文は略同じけれど、これには末を

勿出𨵡外

と記せり。蓋しこの「𨵡外」は「閫外」の訛寫にして、德富本は書寫の際に、これを脱し、この本はこれを誤れるものならむ。この次に禮紙ありて、これには表の初に

或本イ

押紙云親房卿制作伊勢國司先祖也神風和氣同作
本云清外記以本朱點校合等畢後伏見院以後不見又神代之儀今度寫之加之也 甲一帖

慶長十二年七月九日

と記し、このうち「或本イ」と「本云淸外記云々」以下とは朱なり。又表の端に稍近く

寛永七年臘月十有一校合了

と記し、前の奥書の下に近く「淸隨印」の朱印あり。これによれば本書は後にいふ淸家本を以て寛永七年に

校合せしものたること明かなり。本書は上の如く神代巻を缺けるものなり。慶長の奥書にこれを寫し加へたる由に見ゆれど、今存せず。本文には朱にての校合と墨字にての校合とあり。朱にてのものは慶長の時の清家本との校合ならむ。本文はこの校合の外に誤字脱行ある點まゝあり。

この本は正統記研究史上名高き本にして、明治時代に出でし正統記の善本と目せられしものすべて本書を準據とせり。されど、そはいづれも秘閣に存する寫本よりの傳寫によれるものなり。しかもそれらの寫本は決して善本とたたへつべきものにあらずして吾人をして、失望せしむること久しかりしが、偶池田龜鑑氏の藏にその原本の存するを知りて、はじめて、ここに青蓮院本の正しきものを見得たり。この本は德富氏本と略一致するものなるが、德富本の如き錯簡の存せざるを見れば、その源とする本は、同一にあらずして、應永以後各別の傳本ありて各それらより傳寫せしものの如し。

附

三　彰考館藏應永本　四册　（完本、未見）

袋綴　漢字片假名交りにかく。

第一册　神代より允恭天皇まで

第二册　安康天皇より陽成天皇まで

第三册　光孝天皇より四條院まで

第四册　後嵯峨院より後村上天皇まで

二種の奥書は青蓮院本に同じ。而して後醍醐天皇の條の錯簡は德富本に一致す。なほこの本には六藏寺本を以て校合せし朱の記入あり。

（右文學士永井行藏氏報を略取す。）

四　平松家本神皇正統記　京都帝國大學圖書館寄託）　二册　（完本）

德富本に略一致し、後醍醐天皇の條の錯簡も一致す。（永井行藏氏報告）

第三　猪熊本

一　猪熊信男氏藏　聖護院舊藏本　三册　（完本）

大美濃判紙、袋綴、外題に「神皇正統記上」（中、下）と記す。內題なく、又尾題なし。本文一頁十二行、漢字片假名交に記す。

毎册卷頭に第一行の頭に「聖護院藏書記」の文字ある圓形朱印あり。その右下方に又楕圓形の小き朱印を捺す。その印文は三字にして中の字は錫とよまるれど、上下は明白ならず。又同じく卷頭の第一行より第二行にかけて、下より一字半ばかり上に「樟陰山房」の朱方形印あり。

上卷は本文四十枚卷頭初行よりかきはじめ、宣化天皇までを記し、中卷は本文四十枚欽明天皇より堀河院までを記し、下卷も本文四十枚、鳥羽院よりはじめて、後村上天皇に至る。その四十一枚目に

本云

親房卿建武三年叡山臨幸時於行宮叙一位出家

此記上中下三卷北畠大納言入道之後云々其後於南朝芳野殿蒙准三宮宣旨云々於南山述作之

とあり。これについて、この書をば芳野にて著せるものにして、常陸に於ける軍陣中の筆錄にあらずとする人あり。南山はただ、南朝といふにことならず、これを南方の芳野山の義とするが如きは「南山」の文字に拘泥するものにして、共に古を語るに足らざる輩の言なり。この書寫は室町時代の中期頃のものなるべ

くして、正統記傳寫本中古くして信憑すべきものの第一に位す。但し、誤脱も往々見ゆれば、この本にのみよること能はざるものあり。この本には裏書あり。この本蓋し、次の德富氏梅小路本の原本となりしものならむ。

二　德富氏藏梅小路本　　三册（完本）

本書は卷頭上部に「梅小路府」の方形朱印及び、下部に「定編」の白字朱印あるによりて名とす。大美濃判紙袋綴。外題なし。本文一頁十二行、漢字片假名交に記す。上卷には先、禮紙一枚、次に德富氏應永本の第二枚にある

此記者……

自後鳥羽至當――爲丁帖

と記せるもの一枚あり。これには明かにその文の末を「莫嘲呀可」と記せり。本文は初行より書きはじめ、その初行の上旁に

神皇正統記イ　イ甲帖（朱）

と小く書けり。宣化天皇の條にて終り、別に一枚の紙を加へて、

諸神秘抄之事

熊野神靈驗新ニ坐ス……

の文を記す。

中卷は禮紙一枚、本文四十枚。欽明天皇にはじまり、堀河院に終る、下卷には本文四十枚、鳥羽院よりはじまる。終に禮紙二枚、その初の禮紙表に次の奧書あり。

官本云 本云

此記上中下三卷北畠大納言入道親房卿建武三年叡山臨幸時於行宮叙一位出家之後云々其後於南朝芳野殿蒙准三宮宣旨云々 於南山述作之

この本には墨のかなつけあり。朱の校合あり。誤寫と思しきもののまま見ゆ。本書下卷の襯紙に德富蘇峯氏が昭和三年一月二十日御進講の際にこの書を用ゐし旨の識語あり。この本は蓋し、猪熊氏本を寫して、それを應永本に照し、應永本に存して猪熊氏本に無きものを寫し添へ、且つ或る二三の本にて校合せしものならむ。

三 なほこの外に同じ系統の本新しきものとして京都伏見稻荷神社に委託せられたる森本本（袋綴上一册のみ存す）ありとこれも永井氏の報告にあり。

四 宮內省御藏神宮八神主舊藏本 五册（完本）

これは伊勢神宮八神主の藏せしものを宮內省に獻ぜしものといふ。一二の二卷は古寫にして他は加へしものならむ。

卷五の末に

此一二之卷足代草鹿寄附也北畠准后御筆下三札後ニ書加 度會朝臣朝貞書

とありて、一二の二冊は「北畠准后親筆」といふ一樂軒の極札ありといふ。その一卷は神代にして二卷は齊明天皇に至るとい 。その卷頭に應永本などの卷頭にある文あり、それ即ち著者の自筆の序文なりといふ。これは佐伯三木菊氏の標注神皇正統記の卷頭に模刻を載す。北畠治房氏はこれ親房の筆に非ずと斷ぜり。恐らくは然らむ。本書は未見の書なれど、故井上頼圀氏が、群書類從本にその異同を注記しおかれしもの無窮會に藏す。今

その校合によりて推考するに、この書は群書類從本白山本の系統にあらずして、應永本梅小路本の系統に屬し、特に梅小路本に最も近きものと思はる。この故に姑くここに附說す。

第四　清家本

一　村岡典嗣氏藏清家本　壹册（殘缺）

美濃紙袋綴。中味八十八枚。澁紙表紙。

外題に

（慶長二年十月寫）朱書

神皇正統記　全

とあり。第一枚に應永本白山本梅小路本の首書と同じ文を載す。但そのうちの「癸未」の文字を「癸未」に作れり。

一頁十三行漢字片假名交りに書けり。但雄略天皇の邊には平假名をも用ゐる。さて第一枚初行に

神皇正統記一甲帖

と記し、第二行より本文を書きつづく。處々假名付あり。又朱にて旁に書き入れたる部分あり、墨にての異本の校合あり。第十八枚裏にて神代を終る。その第十二行に

甲帖終

と記し、「諸神秘抄之事」と題し、次一枚半にわたり、梅小路本第一册の末の文と同じ文を載す。その次半枚空白。第二十枚初行に

神皇正統記二乙帖

と記し第二行より神武天皇の條を記す。孝安天皇の條中注文「說文云々」の末「若取此義歟」の次に

快賢ム云从大从弓者夷此文字之支節之了見者僻案也

とあり。この快賢といふ人は本書の傳來に關係ある人ならむ。第五十四枚裏第六行にて淳和天皇の條を終ふ。その六行と七行（仁明天皇の條）との間の上欄に

丙帖

と記せり。それより三枚（第五十七枚）裏五行にて陽成天皇の條を終へ、以下空白。次の一紙に應永本第一册の末にあると同じ文を記す。この次に白紙一枚ありて半面空白なり。これを以て推すに、以上は應永本上册に大體一致するものなり。

かくて上の白紙の裏面に

神皇實錄云々

の文あり。これは應永本下册第二紙なると同じ。第六十枚第一行に

神皇正統記

とのみありて、「三」とも「丙」ともなく、次行より光孝天皇の條をかきはじむ。この點も應永本に似たり。第七十七枚裏五行にて安德天皇の條を終へ、六行より後鳥羽天皇の條にうつる。その五行六行の間の上欄に

丁帖

と記入せり。第八十七枚裏第九行は

第九十二代後伏見院諱ハ胤仁伏見第一ノ子御母（以下五六字分空白）

と書きさしてその下は書かず。（この紙、以下四行分空白）これ即ち本書を跋體と目する所以なり。最終の紙の第一行に

押帋ニ云親房卿制作伊勢國司先祖也神風和氣同作

と記し、その裏の第一行より

右一册〔墨ケシ〕（青松軒）之御本於神護寺令書寫畢

慶長二年十月　日　少内記賢好

と記せり。その墨消の下を透し見れば「國賢朝臣」とよまる。これは蓋し淸原國賢をさせるならむ。國賢は慶長十二年十一月廿七日從三位に叙し、廿八日に薙髮の爲高尾に登山する由慶長日件錄にみえ、慶長十九年十二月十八日に歿す。時に年七十一歳。この筆者少内記賢好といふ人は系統未だ精査せねど、國賢の一族なるべし。本書を書寫せし慶長二年の頃は國賢は五十四歳にして從四位上たり。この時にその藏書を高尾山神護寺に於いて書寫せしとは如何なる事情によるか。國賢が薙髮の際に高尾山に登りしを見れば、この寺と國賢とは特別の由緒ありしこと推察せらるべきが、それの最も著しく見ゆるは國賢の弟眞海が、高尾山法身院權僧正としてそこに住せしことなり。或はこの書の原本がその眞海の許に保管せられてありし時に書寫せしにあらざるか。

この本に、後伏見院のはじめを記して以下を記さざるは如何なる理由なるか、今にしてこれを知るを得ざる次第なれど、これにつき考へらるべき事情は二あるべし。一は以下が原本に缺けてなかりしか、一は以下が、錯亂ありて、書きつゞくるに堪へざりしか、この兩者の一を出でざるべし。若し、その錯亂の爲と

あらば、これはその原本が、徳富氏應永本の如き錯亂ありし爲なるべきか。しかも徳富氏本の錯亂に後醍醐天皇の條の中頃よりなれば、その錯亂によりて、この邊より書寫を中止すべき理由なし。然るに徳富氏應永本は、恰もこの邊の處より筆蹟を異にして、他の本を以て補ひしかの疑あり。かたがたかの本とこの本とは或る種の深き關係ある本なりといふことを知らる。

本書の奥書には又池田氏青蓮院本とも關係深きものなり。彼の本の奥書にある

　押帋（或本イ）云云々

は本書の「押帋云云々」の同じ文なり。而してその次の「本云淸外記以本云々後伏見院以後不見云々」とある慶長十二年七月九日の奥書に見ゆる淸外記の本といふものは、本書若くはその原本たる青松軒本をさせること明かなり。而して、本書を以て、青蓮院本の朱字の校合に照すに、多少齟齬する所あれど、大體一致するなり。卽ちその齟齬は校合の粗漏より生じたるものと推せらる。

本書と同じ性質の本は從來花山院本と稱せられたれど、本書は最も基礎的のものなれば、今淸家本の名を以てよぶこととせり。

二　靜嘉堂文庫藏淸家本　壹册（殘闕）

美濃紙袋綴

この本、大體一の村岡氏藏本におなじ。ただ、最後の奥書は

　押帋ニ云親房卿御作伊勢國司先祖也神風和氣同作

とあるのみにして他になきことのみなり。この書には卷首に「高崎文庫」の印あり、末に「瑞乾家藏」の印あり。書寫は村岡本より下らず、或はやゝ古からむか。

三　無窮會藏花山院本　壹册　（殘闕）

美濃紙袋綴

この本、大鹽村尙氏本におなじ。

この本には次の奥書あり。

右册者以花山院殿之本於城都令書寫畢但後伏見以下者以異本可寫者也一校合畢

慶安元年三月吉辰　加茂淸雄（花押）

卽ち、その慶安の書寫本なり。原本たる花山院家の本今ありや無しや。その原書の如何を知らず。この故に、今、同系統の本をその來歷の明かなる本によりて淸家本と稱し改めたり。內容に於いては三本同一といひても差支なき程度のものなり。

この本井上賴圀氏の舊藏にして世に名高き本なるが、今無窮會に藏せり。

四　久原文庫本　二册　（滋野井公澄の藏書印あり。中册を缺き、下册の下缺くといふ）

五　刈谷文庫本　一册　（淸家本として略缺なきものといふ）

この二種は未見。永井行藏氏の報告によりこの種なるを知る。

第五　小槻本

一　帝國圖書館藏小槻本　四册　（完本）

この本は末に續神皇正統記を併載す。

第一第二册は二卷本の上卷に當り、第三第四册は下卷に當る。第四册の後村上院にて終り、次に

神皇正統記終

と記し、次に

古語拾遺記云第七伊弉諾陽神云々

の文ありて、末に「評任師諫師釋書」と記し、次に

神皇實錄曰云々

神皇系圖曰云々

天口事書曰云々

の文あり。これらは前述の諸本のにおなじ。次に

第九十六代光嚴院云々

の文より

第百代後花園院云々

の條までを書き、末に

當今

と標記せり。これらの部分は即ち續神皇正統記の文なりとす。かくて最後の奥書は

神皇正統記全

後醍醐院令錄之全部也

光嚴院以來續補添加註之爲老後之忘氣也

匪敢番續集矣　小槻宿禰判

右慶長壬子夷則下澣以仙洞御本令謄寫者也

中大夫　清原朝臣

とありて慶長書寫の實物と考へらる。慶長壬子は十七年にして中大夫は從四位下なり。而してこの時清原氏にして從四位下たる(秀賢この年正月に叙す)ものは秀賢なれば、この人の書寫と認めらるべきものなり。この本の小槻宿禰の奧書は本書と續神皇正統記とにわたりたるものにして、その原本たる仙洞本の奧書なり。これによりて考ふれば、この本の原本は既に小槻家に傳へしなり。續神皇正統記は後土御門天皇の御宇に著したること著しく、その著者は三條西實隆公記には小槻宿禰晴富作とせり。今本書を見るに、原本以外の文の記入と覺しきもの少からず。たとへば各天皇の記事の末に往々「或本云」と題して帝皇退位御出家崩御等の年月、山陵の所在等を注するが如し。而して文章も稍亂れて確證とはしがたく見ゆ。

本書は又後嵯峨院の條よりして世數をかぞふることを除き、まま「亦曰云々」として天皇の名の下に世數を加へたり。これを摘出すれば次の如し。

第八十七後嵯峨院(第四十六世を除く)

第八十九龜山院　亦曰第四十七世

第九十代後宇多院　亦曰第四十八世

第九十五代後醍醐天皇　亦曰第四十九世

第九十六代後村上院天皇

即ち、これは南朝の正統なる由を著者が世の次第にて示さむとせるを北朝の正統をいはむとて、試に除き

しか、さりとて除きも了せずして「亦曰云々」として加へしものにして、本書が、著者の原本のままのものにあらざること火を睹るよりも瞭かなり。なほこの外に

　第九十四代の天皇

とあるを

　第九十四代萩原院

とし、

　第九十六代第十五世の天皇

とあるを

　第九十六代後村上院天皇

とせるなどは、いづれも後人のさかしらなり。本書の正しからぬことは其の他の點にも少からず存す。然れどもなほ古體を存し、群書類從本の如き甚しき杜撰はなきものなれば、參考とする價値あり。

二　故北畠治房氏藏中原本　二册（完本）

美濃判袋綴。

外題は各

　「北畠一畝乾」「北畠一畝坤」

と記し、襯紙に「一畝」と記す。卷首に  の印と「中原」の文字ある欵防あり。卷末に  の印あり。即ちこれもと中原職忠の所藏たりしこと知らる。職忠は萬治三年に八十一歳にて歿したる人なるが、この本の書寫の時代はそれよりも古く、慶長以前かと思はる。

この本は文章を省略せる所少からず。村上天皇の條中の「皇孫にはあまたあり」より「愼み思へ給ふべき事也」までの文、冷泉院の條の末の尊號論の文章、後三條院の條の天皇の賢明にまします事、鳥羽院の條の大部分、後白河院の條の大内の事等、土御門院の條の「太弟にゆづりて」より「玉石ともにこがれて」まで、後堀河院の條の異例の院政の事、後嵯峨院の條の御生立の事、政道論の部分、末の院政の記事、後宇多院の條の帝皇の學問の論、伏見院の條の記事の大部分、後醍醐天皇の條の政道論の後半「人をえらびもちゐられし日云々」より「有かたきならひなりけんかし」まで臣道論の末の「又直實といひけるものに云々」より「都の中はえ〳〵しくこそはべりけれ」までを脱せり。これらは決して原本に無かりしものにあらずして、この本に省略せしものなることは疑ふべからず。

この本は應永本以下の諸本に似たる點少からねど、帝國圖書館藏の小槻本に最も近きものと認めらる。その宣化天皇の條を終へたる後に應永本の卷首にある文をば、

寫本云此記者云々

と記しはじめて載す。然らばその本はここを以てある卷の末とせるものにして、猪熊本のここを以て卷上の末とせるに一致す。しかもこの本が小槻本の一類なる事はかの後嵯峨院以下の世數を除きたる點なり。而して少しく異なるは

第九十六代後村上院天皇亦曰第五十世

とある點のみなり。且つ又「第九十四代萩原院」「第九十六代後村上院天皇」とある點も一致せり。なほその他の仔細に於いても二本一致せる點にして上述の他の諸本になきもの少からず。この故に、この本は小槻本の一類と認むべきものなり。

三　朝事片玉所收大慈峰本　二册　（完本）

これは帝國圖書館藏朝事片玉と題する叢書中に收むるものにして上下二卷の本なり。上卷卷頭に序文あり、これは應永本等にあるもの、二三の異同あれど同文なるが、それには

神皇正統記序

と題せり。奥書には

延德貳庚戌夏五廿有三於防州大慈峰書之

此本上卷之端五六枚定林寺背湖西堂之墨跡也其餘當國之僧侶書之以證本再三令校合而已

延德二年季冬日

とあるなれど、その書寫は寛文頃のものなり。

この本は北畠家中原本と甚しく似たるものなれば、その系統に屬すべきものなり。

下卷の終りに「父母」「兄弟」等の文字凡二十一語を記してよみ方をつけたり。

四　故大澤清臣氏藏本　（未見）

この本實見せざれど、佐伯三木兩氏の標注神皇正統記の例言に

大澤清臣氏の所藏に係る古寫本なり。奥書なし。故に其年代を詳にする事能はざれども頗る善本なり。

といへり。故男爵北畠治房氏曰はく「大澤本正統記は壬生官務の本にして余が藏本に似たり」と。これにより て思ふに、北畠家の中原本に似たるものならば、小槻本の系統に屬すべき筈なり、而して壬生官務家は即ち、小槻氏なれば、かの續神皇正統記の著者の家に傳へたる本なること明かなれば、この類に入るべきものなり。

第六　天文本

一　高野山遍照院天文本　參册（完本）

この本未見。雜誌ピタカの報ずる所によりて梗概を記す。まづこの本には、下卷の奥に

此記者去延元四年秋爲示或童蒙所馳老筆也。旅宿之間不蓄一卷之文書纔尋得最略皇代記任彼篇目粗勒子細畢　其後不再見已及五稔不圖有展轉書寫之輩云々　驚而披見之處錯亂多端　癸未秋七月聊加修治以可爲本以詞披覽之人莫嘲哢耳

といふ跋ありて、更にその次に、

本云明德五季甲戌三月十二日於東坂本田中宿所書寫之點校之、輙不可流布之、敢不可處聊爾者也

法橋春全四八藏判

とあり。なほその次に、

于時天文拾四年乙巳十二月十八日書寫畢佐竹寶鏡院御留主ニ踞申候而當用如形書之久他見之嘲無面目候靑柳之住淸導之

とありといふ。而してその一部の寫眞を見るに天文の實物たりとして疑を容るべきにあらざるのみならず、雜誌記者はそれを天文の實物といへれば、これを信じて可なり。

この本は天文書寫のものなるが、その底本は明德五年春全書寫の本なるが如し。この春全本は常陸國六地藏寺舊藏の大永本の底本とせし所なれば、その大永本の行方不明となりし今日に於いては神皇正統記の傳本として貴重すべきものといふべし。

二　群書類從本　參册（完本）

この本は塙保己一編の群書類從巻第廿九に收めたるものにして世の熟知せる所なれば、ただ必要の點のみを說く。

この本に注意すべきは、その奥書なり。曰はく

明德五年甲戌二月十二日於坂本田中宿所書寫畢點校了輙不可流布之敢不可處聊爾者也

法橋春全藤四八判

大永八年戊子六月廿三日書之惠潤廿三歳

とありて、その末に

右神皇正統記以常陸國六段田六地藏寺本書寫校合

とあれば、この群書類從本はその六地藏寺本を刻せしものと見らるるなり。然るにその六地藏寺本の原本は今存否を知らずといへば、本書が六地藏寺本のそのまゝなりや否やを詳かにすること困難なり。この本如何なる理由を以て群書類從に收めしか明かならずといへども、蓋し善本と認めしが爲なるべし。然れども、本書には杜撰なる事少からず。その最も甚しきは後深草院を

第八十八代第四十七世後深草院

と記し、龜山院の第四十七世を削りて、單に

第八十九代龜山院

と記せることとなり。若しこれを追ひて行かば、後宇多院の「第四十八世」後醍醐天皇の「第四十九世」及び、第九十六代の天皇の「第五十世」の文字を削り、伏見、後伏見の御世數を記すべきに、かゝる事をもせず。然らば、何の爲に龜山院の世數を削り、後深草院の上にのみ世數を加へたるか殆どその理由を知るに苦むものな

り。これ恐らくは、小槻本と精神同じくして方法反對に出で、北朝の正統を世次にて示さむとて先づ、その源たる後深草院の條に世を加へたれど、その次々を動すこと能はず、そのまゝにせしものなるべし。次に杜撰なるは白山本と同じく

第九十四代花園院……五十一歳をましましき

とあることにして、これは白山本と同じく後人のさかしらなり。その他の杜撰は一々あぐることをせず。世人のこの本を善本と信ずるは痛ましきことなりとす。諸傳本中の最も惡しき本なり。

第七　慶安版本

版本としては慶安本を最も古しとす。群書類從本も版本たれど、既に述べたれば、これを除き、その他のものをあぐ。

一、慶安二年風月宗知刊行本　六册

誤脫少からねど、群書類從本の杜撰なるにはまされり。

二、標註校正神皇正統記　川喜多眞彥注　六册

慶安本を底本として評注を頭に加へ、慶應二年九月に出版したるものなり。この本は美濃判なるを明治十五年に半紙判六册に縮刻せるものあり。大阪人の伊藤猪次郎といふ者の縮刻なり、

以上の外に

守矢氏藏本　神代卷のみの殘闕　一册

阿刀氏藏本　神代卷及神武天皇までの殘闕一册あり。

これはいづれも室町時代の古寫本にして、零本なりといへども、神皇正統記の研究上重要なるものなり。
これが寫本は永井行藏氏の好意によりて見るを得たれど、實物は未見のものなれば、說き及ぼさず。

神皇正統記論

神皇正統記の如何なる書なるかは世の熟知する所にして、ここに事々しく論ずるを要せざるものの如し。然れどもその本旨と特色とについてはなほ論ずべき餘地ありと思ふが故に、ここに管見を叙して世の教へを請はむと欲す。

一　本書の本領

世には本書を以て、歷史の一なりと說くもの少からず。如何にも國家創生のはじめより當代までの天皇を標出して、その時代にかけて意見を述べてあるが故に、その體裁より見れば歷史といはばいはれざるものにあらずといへども、これを歷史として見る時は頗る粗略にしてしかも往々誤謬あるものなり。その誤謬の點は著者匆卒の起稿なれば記憶の誤に出でたるものにして深く咎むべからざるものなるべしと思へども、歷史といふものの性質より見れば、かくの如きは看過し得べからざるものなり。かくの如く粗略にしてしかも誤謬あるものは果して歷史として十分の價値を與へうべきものなるか。然るにも拘らず、本書の信用と價値とは依然として千古に輝くものあり。これは單に歷史たりといふ事の爲にあらずして、本書の本領他に存するが故なることといふまでもなし。多少の錯誤はもとより瑕瑾として惜むべきことなれど、その本領とする點に照して考ふれば、その錯誤は大なる累をなすものにあらざるによりて本書は燦然たる光輝を以て千古を照すものにあらずや。本書を以て歷史なりとするものは一を知りて未だ二を知らざるものといふべし。

世には又この書を以て所謂文明史なりと說く者あり。而してこれを本邦に於ける文明史の嚆矢なりと論ずる

なり。然れども本書は果して文明史なりといひうべきものなりや。如何にも本書には多少文化の由來を說き、文明の源委を述べたる點なきにあらずといへども文明史、文化史を以て目すべき一貫の理路は決して見るを得べきにあらざるなり。本書を目して文明史なりといへる論者は著者親房の偉大なる識見を賞揚せむが爲なるべからむとも思はれざるにあらねど、かくの如く見られては著者は寧ろその本旨の沒却せられたるを遺憾とすべきなり。

或は又本書を以て、史論となすものあり。如何にも本書は一面は歷史の如くにして到る所に自家の所見を披瀝してその史實を論じてあれば、史論といふ名目は毫も該當せずといはれざるなり。されど、史論とは何ぞや。世相一般につきてその推移の流れを論ずるものにあらずや。今この意を以て本書を見れば本書は如何にも治亂興敗の迹を論ずる點多きを以て一種の史論といはばいはれざるが如きものにあらず。然れどもこれを史論として見れば、本書は頗る不十分のものたりといふを免れず。たとへば大化の改新の如きは一言これを說かず、又その改新を誘ひたる源と目すべき氏族制度より官職制度にうつり行く世相の一大變更の如きも亦これに觸れたる點を見ざるにあらずや。若し史論として本書を見るときは、その價值甚だ高きものとはいふべからず。しかも本書はその偉大なる識見を盛りたるが爲に燦然として千古を照すものたり。

されば、これを歷史とし、文明史とし史論として見るが如きは未だ本書の本旨と本領とを十分に認めたるものにあらずといふべきなり。

この書の本旨と本領との世に十分に認められざる事は上に述べたる如きさまなり。果して然らば本書は何を本旨とし、本領とするものなるか。

世には本書を以て皇統の正閏を論ずるものとし、これを以て本領と認むるもの少からず。この論をなす人の

その精神は諒とすべきものあり。然るに本書一部を通じてこれを見るに皇統の正しき事と當に正しかるべき事とは到る處にこれを論說すれども、正と閏とを分つが如き相待的態度をとれる點は一も存することなし。著者の態度は一意皇統の正を闡明するにありて、閏と正とを甄別せよといふが如き、薄弱なる言論は一毫もこれを見ず、徹頭徹尾堂々たる絕待的態度を以て臨めり。されば、後人がこの書の說く所を以て皇位の正閏を識別する尺度としてこれに準據せしはこれもとより當然にして然るべき事なれども、本書を以て正閏を論じたりといふは、その見甚だ徹底せざるものなり。たとへば、これを卑近なる一例を以てせむか。ここに一の定規あり。この定規を以て吾人はある線の曲直を檢する標準とするを得む。然る時にその定規を用ゐて曲直を檢したりといふ事は考へらるれども、定規そのものが、曲直を檢したりとはいひうべきにあらず。それと同じく、本書の說く所によりて吾人は皇統の正と閏とを判別することを得べし。されど、それと本書自身が正閏を判別したりといふこととは同一にあらず。今本書を見るに先にもいふ如く、皇統の正しき事と當に正しかるべき事とは直言憚らざるものなれば、若し、著者が、相待的態度を以て臨めるものならば、決してその閏なるものにつきて論破するを辭せざりしならむ。たとへば安德天皇の末と後鳥羽天皇の初との間には大いに論議すべき餘地あるに關せず、著者はこれを論ぜず。或る點より見れば、ここに著者に對して異議を呈すべき餘地の存するものなり。然るに著者はこれに論及せざるなり。これ蓋し最初より正統といふことを主眼として、その他を顧みるが如きことはもとよりその胸中に無かりしものならむ。これ一は著者の信念の確乎不拔にして他を顧みるが如き、薄弱なる思想の存せざりしが爲なるべく、一はもとより純一なるわが皇統の本質必ずかくあらざるべからざるが爲なりしなるべし。この故に皇統の正閏を論ずるを目的としたりといはば、著者は地下に於いてなほその本旨の十分に認られざるを遺憾とすべきなり。

然らば本書の本旨と本領とは如何なる所に存するか。この事は著者が、その著の中に明かに言へる所なり。曰はく、

　神代より正理にて受傳ふる謂を述べん事を志して常に聞ゆる事をば載せず。然れば神皇の正統記とや名け侍るべき

と。これ即ちこの著作の精神なり、はた目的なり。即ち著者は皇統の正しく繼承せらるるいはれを宣べんことを志して、普通に知られてある事實は載せずと明言せるなり。即ち本書は史實を詳かに述ぶるを目的とせるにあらず。況んや、博識を衒ふが如きをや。當時兵馬倥偬、矢石の間に死生を賭せる際、あに閑人の閑事業に類する如きことを敢へてすべき餘裕あらんや。されば、本書ははじめより歴史として著したるものにあらざるや明かなり。これを文明史といはむも史論といはむも論ずる人の心々にまかすべき事ならむが、著者の本旨は然るものにあらざるはいふまでもなし。

惟ふに著者の一意心ざしたる所は、皇統の正しき事實と正しく繼承せらるべき道理とを明かにせむとするにありしならむといふことは、本書を熟讀せばおのづから領會せらるべきなり。

本書著作の精神はた目的は上の如くに明かなり。これを具體的に實現せむが爲に著者は如何にその說を述べしか。今これらの點につきて考察を試みむとす。

著者が本書に於いて說かむとしたる要旨は一言すれば、皇位の繼承は神代の昔より一に正理によりて行はれたりといふにあり。ここに直ちに考へらるべきことは、この尊嚴なる皇位のよりて起る所の國體と、その皇位繼承の正しといふことの事實と道理とにあり。ここに問題は大局より見て國體論と皇位繼承論との二方面に展開すべし。ここに先づそが國體論より觀察せむ。

二　國體觀

著者の國體觀は本書の最初に喝破せる、

大日本者神國也

の一言に盡きたりといふべし。この言簡にして要を得たりといへども、これを明細に示すにあらずば人をして首肯せしめ難かるべし。即ちこの意を明細に示せるもの、この一卷の書なりといはばいはるべし。しかも、そがうちに國體の尊嚴に主力を注ぎて說けるは初頭の數章なり。著者はわが國體の特色はわが國家が神成のものにして人爲にあらず、從つて他の諸國と建國の初より異なりといふことを力說せり。これ本書の初頭數章を費して印度及び支那の創世說をあげたる所以なり。然るにその印度の創世說を比較的に詳細に說けるを以て、著者を目して佛敎思想に惑溺せりと批議せるもの往々存す。然れどもこれ本書を熟讀せざるによるの罪に屬す。かく印度支那の創世說をあげたるものはこれを以てわが國家の創生と彼れらの創生說との區別をあげて內外國體の差異を示し、よりて以てわが國體の特色を明かにせむとの用意に出でたるものなるが、支那には創世說といふべき程のものなければ說くこと委しからぬなり。而してこれらの說をなさむとして先づ揚言して、

天地開闢の始は何くもかはるべきならねど三國の說各異也。(三國とは日本、支那、印度にして、當時知られたる世界のすべてなり)

といひ、わが國體と印度とを比較しては

我朝の始は天神の種を受けて世界を建立する姿は天竺の說に似たる方も有るにや。されども是は天祖より以來繼體違はずしてただ一種ましますこと天竺にも其類无し。

といひ、支那の國體に對しては一言を以て

　伏犧氏の後天子の氏姓を替へたる事既に三十六、亂の甚しさいふに足らざるものをや。

と斷じたる所を見ても著者の本意は知らるべし。かくて神代の卷の最終に

　窮あるべからざるは我が國を傳ふる寳祚也。仰ぎて尊み奉るべきは日嗣を受けたまふ皇になんおはします。

といへる、その本意の存する所甚だ明かなりといふべし。然るにこの周到なる用意を認むること能はずして印度思想に惑溺せりと論ずるは、これ實に本書をよく讀めりとはいふべからざるなり。

　按ずるにかく、支那印度の國體と比較してわが國體の特色を說くことは、本書にはじまるにあらずして、本書よりも約二十年前に成りて乙夜の覽に供せし元亨釋書に既に存するところなり。その王臣篇の小序中に

　予博見二印度支那之諸籍一未レ有二此方之醇淑一也。何者神世一百七十九萬二千四百七十餘歲、人皇二千年。一刹利種系聯禪讓未二曾移革一。神胤亦然。閻浮界裏豈有下如レ是至治之域上乎。

といひ、篇末の論の中にも

　吾讀二國史一邦家之根基根二於自然一也。支那之諸國未二曾有一矣。

といひ、支那は中國といひ文物の國といふともわが國に及かざるを論じ、又印度の國體を論じて

　天竺者閻浮之本邦也。猶有二此等篡亂一。況諸夷乎。

と斷じ、

　夫有レ國以來不レ嬰二蠻夷之攘奪一者未レ有レ如二吾國之純全一矣。

といひ、或は

我見二竺支之事一如三我國之運厚一者未三之有一矣。

といへり。されば、かく比較して論ずることは著者の獨創にあらずといへども、この方法はその意見が獨斷にあらざるを示すと共に、認識の基礎は差別に存すといふ理法にかなへるを以て、その論の內容は時世につれて進展すべしといへども、この論證の方法は今日に於ても合理的の方法として批難を加ふべき餘地なきものなり。

著者の國體論の方法につきては一往の論を經たり。次に論ずべきはその內容なり。

按ずるにわが國を神國なりとする思想は日本紀に既に見え、降りては貞觀十一年に伊勢大神宮石淸水八幡宮の二神宮に獻られし告文にも見え、又長元四年八月の宣命(小右記)等にも見え、その他、太神宮諸雜事記、東大寺要錄、平戶記、玉葉、玉蘂、吾妻鏡、平家物語等にも見えたれば、新らしきことにはあらず。然れども從來の神國といふ觀念は茫漠たるものに止まりて、要するに神明の擁護したまふ國といふ程の意に解せられたりしが如し。然るに著者のいふ所の神國の意義はさる淺薄なるものにあらずして、

天祖始て基を開き、日神長く統を傳へ給ふ。我國のみ此事有り。異朝には其類无し。此故に神國と云ふ也。

と說明し、又これを要約して、

神明の皇統を傳へ給へる國也。

と說けり。これ實に著者が主張せる神國の意義にして、この神國たりといふこと卽ちわが國體の特色たりといふことに歸す。おもふに、神國といふ思想の中核はまさに著者の說ける所の如きものにして、古來の人々も、これを感じてはありしならむ。若し然らずして神明の擁護したまふといふ程の意のみならばいづれの國か神國といひ得ざらむ。然るに古來わが國を神國なりと自重し來りし所以は、その根柢にこの思想が存したりしによ

るものならむ。然れども、これを明かにするもの一人も無かりしが、ここに著者の喝破によりてはじめて神國といふことの眞意をさとるに至りしならむ。この點より見れば、恐らくは著者は國體學の史上空前の境地を開拓せしものといひて可なるべし。

著者が國體學史上空前の境地を開拓せしものなりといふことはそれが先蹤をなすもの無きにあらずといふにあらず。たとへば、比較研究によりてわが國體を正當に認識せむとするが如き方法は、恐らくは元亨釋書の蹤をふめるものなるべし。されど、釋書に於いては神國の說明を見るを得ざるなり。これ吾人が先蹤あるべきを認めつつも、かの神國の意義に於いては著者がはじめて喝破したるものと信ずるものなり。

この先蹤につきて事の序に一言すべきことは、世には本書を目して日蓮の影響を受けたりとか、若くはその後塵なりと論ずる點なり。本書の說く所は日蓮の說く所などとは日を同じうして語るべき程度のものにあらざるのみならず、日蓮が如何程わが國體の眞義を知りて在りしかは一の疑問なれど、今は之を論ずべき際にあらねば默すべきが、この著者が、日蓮といふ人物の存在を知りしか否かは一の疑問なり。假りにその人の存在を知りたりとしてもこれを認めしか否かは明かに疑問なり。著者の主義として佛教の盛衰の大綱は洩すことなくこれを記せる筈なるに、日蓮の名も主張も宗義も更に言及せるを見ず。この故に、大町桂月はこれらの點を評して、

> 佛臭の親房が傳教弘法を力說するはさもあるべし。傳教の天台、弘法の眞言を說くついでに傳來せる諸宗を說いてその要を得たり。獨り怪む、傳來の諸宗のみを說いて一言も淨土、眞、日蓮の三宗に及ばざるは、知らざりしか、輕視したりしか、ひろく諸宗を容れよと說きながら自家撞着に陷る、惜むべき哉。

とまでいへるなり。然れども、これも今を以て古を論ずるものにして、本書よりも約二十年前に成れる佛教史

專門の書たる元亨釋書にもこれらの三宗を認むることなく、その祖たる三人のうち、法然のみは傳もあれど、他の二人は傳だになきなり。されば、これらは當時未た勢力微弱にして一部の信者間には傳りたれど、弘く世に認められざりしものならむ。これを以て親房を責むるはもとより酷に過ぐるが、それはさておき、本書を讀まむものは、その日蓮の思想が本書に影響したりといふべき餘地の存せぬを認むるをうべし。

要するに著者の神國の說明はこれ獨特のものにして又破天荒ともいひつべきものなるが、それと同時に最もよくわが國體の特色を發揮したるものといはざるべからざるなり。

三　神道觀

著者の國體論は「神國」の一語に盡くともいひうべきこと上に說ける如し。而してこの神國といふ思想の一方面は神道にあり。ここに國體と神道とは二にして一なる關係の存するを認むべし。この故に國體論はその源に溯れば勢、神道論に入らざるべからず。これを以て著者は到る所に神道論を說けり。これ決して好事の爲にも、博識を衒ふが爲にもあらずして必至の勢なればなり。この故に著者曰はく、

　是、併ら神明の御誓新にして餘國に異なるべき謂れ也。抑、神道の事は容易く顯はさずと云ふ事有れども、根元を知らざれば、叨しき端とも成りぬべし。其の弊を濟はん爲に、聊か勒し侍り。

と。これ即ち國體の基は神道にありて、神道を知らざれば國體の根元を知るを得ずとするによるなり。然らば、本書に說く所の神道は如何なるものぞ。

今この問題を提げて本書を檢するに、その說、隨處にあらはれてあれど、一系統をなしてこれを明かにせりとはいひうべからず。されど、著者の神道に關する識見は、元々集、東家祕傳、廿二社註記によりてこれを具

體的に見るをうべく、而してそれらに說く所と本書に說く所と一致する點を見れば、著者の神道觀は本書に就かむよりも上の諸書に就くを捷徑とすべきなり。然れども、今ここに一二の要點をいはむか、著者の奉ぜし神道は所謂度會神道にして外宮の祭神につきては通說と異なる說あるものなり。本書雄略天皇の條にこの異說をあげたり。かくの如きはもとより採るべき說にあらず。然れども、當時最も進歩せりと思はるる神道はこの度會神道なれば、著者がこれを學び、それを學びたるによりて多少偏する點ありしことは勢已むを得ざることなりとす。

次に當時の神道は所謂純神道にあらずして佛法に習合せるところあり。度會神道の基づく所の神道五部書をはじめ、親房が親しく披閲したる類聚神祇本源の如きみなこの傾向あり。ことに八幡大菩薩に關する種々の事項の如きは佛教の思想を以て神道に附會したるものたるは顯著なりとす。その八幡の名稱を八正道に融合せる點など附會の說たることは疑なしといへども、それやがて八正の道德修養に資する點大なりしことを思へば、この附會は無意義無效力のものにはあらざりしなり。なほ又この度會神道は同時に支那傳來の陰陽五行說、及び宋學の理氣說にも影響を受くること少からざるものなり。而して度會神道は後世の所謂純神道に比ぶれば、甚だ雜駁なるものなれど、佛教、道教、儒教を包含して、その長をとりて以て自家の藥籠中のものとせむとするその態度は、全然排斥すべきにあらず、一面よりいへば、神道が學的組織をなさむとする當初に於いては已むを得ざりしものなるべく、又汎く思想的に見れば、かくの如き包容的の態度は自ら大に至らむと欲するもののとるべき態度なるべきか。

かくの如くなれば、著者の神道說は一見甚だ雜駁なりといふべきなり。然れども、その中心思想は儼然として動かざるを見る。この神道は佛教に習合し、本地垂迹の思想も明かに存し、佛を抑へて神道を揚ぐる思想は

未だ見ずといへども、然も佛を主にして神道を抑ふることは毫もこれを見ず。はた愚管抄の如く佛法を主とし王法を客とする思想は全くこれを見ず。いづこまでも國體と神道とを中心とせることは明かなり。ただその神道といふ、內部に佛教の或るものが要素として含有せられてありといふに止まり、佛法の思想を以て國體に逼るが如き態度は一毫もこれを見ざるなり。道教儒教とても大體かくの如き關係にあるものなり、されば、この神道はその內包には佛、道、儒の三教の或る要素を含むといへども、神道がその中心となり、主となりて、それらを補助分子として含めるものなれば、主客を顚倒せるが如き錯誤は無しとす。

著者は上の如く神道觀の上に著しき特色を有せるが、しかも、漫然たる神秘說に對しては斷としてこれを排斥せり。たとへば、村上天皇の天德年中の宮中の火災に內侍所が類火にあひ給ひし時の事なりといふ（平家物語等にある）俗說をば

　此時に神鏡の南殿の櫻にかゝらせ給ひけるを小野宮の實賴のおとゞ袖に受けられたりと申す事あれど僻事をなん云ひ傳へ侍る也。

と否認せるが如きその一例なり。

又當時もさま〳〵の神道ありしなるが、著者はそれらの雜說に惑はされず、一意純正なるものに就かむとせしことは次の言にてこれを推知すべし。曰はく、

　凡神書にさま〳〵の異說有り。日本紀舊事本紀古語拾遺等に載せざらん事は末學の輩偏に信用し難かるべし。彼の書の中に猶一決せざる事多し。況や異書に於きては正とすべからざる歟。

ここに舊事本紀をあげて、古事記をあげざるは遺憾なきにあらずといへども　それは時世の未だ到らざるものとして、著者を責むるに躊躇せざるべからず。とにかくに著者が正しき古典以外に據るべからずとせる態度は、

學問的に見て正々堂々たるものにして、その精神に於いては後世の純神道家と一毫も讓らざるものあり。
以上の如き態度をとれる神道說、以上の如き精神によれる神道觀をもつて臨めるものなれば、その說嚴肅なるが如しといへども毫も國體に累を及ぼすことなく、よく國體の本源を明かにし得たるものとす。
さて又その神道論は一面に於いて下に論ずべき神器論に密接の關係を有し、一面に於いてこれも下に論ずる君德論、政道論と關係を有するものなり。かくの如くにして著者の本書に說く所は思想的には結局一丸となるべきを豫想しうべし。
著者の國體觀とその基たる神道觀とは大略上の如し。次に論ずべきは皇位繼承論なり。

四　皇位繼承論

皇位繼承論は本書にいふ神皇正統の論なり。而してこれが本書の本領にして書の名もこれによりて起れり。この事は既に上に引ける著者の語にて明かなるが、後醍醐天皇崩御の事を記したる後に、

　昔仲尼は獲麟に筆をたつとあれば、ここにてとどまりたく侍れど、神皇正統の横しまなるまじき理を申し述べて素意の末をもあらはさまほしくてしひて注しつけ侍る也。

かく首尾一貫して、

　天地開けし始めより今の世の今日に至るまで、日嗣を受け給ふ事邪ならず。

といふ事を事實上より說明し、又理論上より說明せむと企てたるもの即ち本書なりといふべきなり。要するに、本書一部の本旨、本領はここにありといふべきなり。
ここに考ふべきは、わが國の古より皇位の繼承につきて時には多少の問題も在りしならむに、正統といふ語

を以て論をなししものを見ず。かの持統天皇朝の葛野王の論（懷風藻を見よ）稱德天皇朝の和氣淸麿の復奏等はもとより皇位繼承の本義につきて千古に輝く正論なれども、未だ正統の語を以てこれを論ぜしを見ず。今著者はこれを以て一書を著せり。これは何によるか、その理由と考ふべきものありや如何。

從來、本書の著者を論ずる人々、著者が程朱の學をまなび、又資治通鑑宋朝通鑑等を繙きしこと（尺素往來による）の傳說あるに基づきて、本書を目し、宋の儒學及び朱熹の通鑑綱目にあらはれたる史學に由來する正統論などの感化を受けたる結果として生じたるものとせり。この論一往は首肯すべきが如くにして實は必ずしも當らざるなり。

抑も通鑑綱目は宋の朱熹が春秋の義に本づき舊史の書法を正して前代君臣の事蹟を褒貶せむと欲し、資治通鑑によりてつくりしものにして、その二三朝併立せるものにつきては正と不正とを區別し、正統を立てて綱とし僭と僞とはこれを分注するに止めて、一目瞭然たらしめたるものなり、その書法嚴密にして、深く春秋の法に合するものとして朱學に於いてはこれを尊ぶこと經典に異ならざるものなり。しかも、これは朱熹にはじまるものにあらず。ただ朱熹に於いてこの事頗る嚴正にせられたりといふに止まるものにして、その基づく所の資治通鑑が、春秋左氏傳の續編として編纂せられしを見ても思半にすぐべきなり。

今本書を見るに、その正統といふ語及びそれに該當する觀念は或はこれらより得たりしならむ。然れども、朱熹の所謂正統なるものは、帝王の血統の連續にもあらず。又帝王の位の正しき授受をいふにもあらずして、天下一統の世をさし、若くは數朝併立の際に正朝と立つべきものを論定したるに止まりて、たゞ理論上の事に止まり、わが國の如く一系相うけて永く正統を傳へらるるものとは全然異なるものなれば、若し朱熹の正統論の影響をば本書が受けたるものとせば、そはたゞ「正統」といふ語と、これを强調すべきことを學びたりとい

ふべき程度のものなり。而してその精神とする所を按ずるに、本書は朱熹若くは司馬光の末流を汲むにあらずして直ちにそれらの源頭たる春秋の精神によれりといふを妥當なりとす。もとより本書に載する秦漢以後の事蹟等は司馬光、朱熹等の著書より學び得し所も少からざりしならむが、精神は寧ろ春秋に在りしことは疑ふべからず。大義を明かにし、名分を正すこと、内を尊び外を卑むこと、王を尊び覇を賤しとすること、これ明かに春秋の精神にして通鑑綱目によりてはじめて明かになりしものにあらざるはいふまでもなし。ただそれらを以て、これらを強調すべき模範とせしことは必ずしも無かりきとはいふべからず。

以上の外正統論を強調せしことはこれ時世の急調に迫られし結果なりしならむ。本書が皇位の正閏を論定せむといふ如き薄弱なる精神にあらざることは既に述べたる所なるが、當時足利高氏が、正統を無視して逆を以て世を蹂へむとせしによりて正統の天皇ここにましますといふことを強調すべき必要に迫られしが爲にこの論をなすに至りしならむ。この故に本書は正統論に言及する毎に光焔萬丈、あらゆる邪說僻見を燒き盡さずんばあらざる概あり。其の言壯烈、千歲の後、人をして感奮興起せしめずんばおかざるものあり。明治維新の原動力この一書に存すといはるることもとより當然にして、その原動力のやどるところこの正統論にありといふべきなり。

さてここに考ふべきはその正統といへるは如何なる意義あるかといふことなり。これには皇位の繼承といふ事とその繼承の正しかるべき事といふ二の觀念を含めるものなり。然らば、この皇位繼承の正しと目せらるべき點は如何なるものか。

わが皇位の尊嚴なることは本書にも引けるかの天壤無窮の神勅により明かなることなるが、これを演繹すれば、その神勅の本旨によりてこれが無限に開展し行くべきもの、これその天壤無窮の本旨なりといふべきな

り。されば、歴代の天皇はこれ天照大神の無窮の延長の其の一節にましまし、天祖の神意を體してこれを實現せらるべき方々にますといふことは明かなり。ここに於いて正統といふことは血統の上にては天祖の純なる尊嚴崇高なる血脈をうけられ、精神の上には天祖の神意を受けて、これを基として國家を統治せらるべきことをさすといふこと明かなり。ここに於いて正統といふことは、これ天照大神の御本意の發露といふことなりといふべき論を生ずべし。然もこの正統の論は、その正統が、事故なくして繼承せらるる時には一毫もこれを論ずる必要を感ぜず。この故に本書も亦この正統の論をなせる所は繼體天皇、光仁天皇、光孝天皇の如く、皇位繼承の上に重大事件の存したりし時に關してのみいへり。たとへば繼體天皇の條に

　但、皇胤絶えぬべかりし時群臣擇び求め奉りて賢名に依りて天位を傳へ給へり。天照大神の御本意にこそと見えたり。

といひ、光孝天皇の條に、

　我國は神國なれば、天照大神の御計ひにまかせられたるにや。

といへり。これによりて考ふれば著者が正統といへることは祖神の神慮によりて定まるものといふに似たり。然れどもわれら凡人は神慮をはかり知ること能はず。凡人として皇統の正しく繼承せらるることを明かにせむには如何にすべきか。ここに著者はその神慮にかなはせらるべき條件として、道德を修め政治を正しくせらるべきを強調せり。たとへば、武烈天皇の條に、

　仍りて天祚も久しからず、仁德さしも聖德御座しか共此皇胤爰に絶えにき。……先祖大なる德ありとも不德の子孫宗廟の祭をたゝん事疑なし。

といへり。これによれば、天祖の神慮を體して聖德を世々につぎたまはば天壤無窮の神勅にかなひてここに萬

世に傳はらむといふに似たり。果して然らば、著者は支那流の有德爲君の思想を以てわが皇統繼承の第一義とせるものなるか。

今著者の論を見るに、到る處に帝德論、道德政治論を鼓吹して、皇位の實質としては、天皇に道德ありて、よく道德政治を實現するに在りと主張するものゝ如し。もとより不德の君主不德の政治にては君主も國家も存續しうべきものにあらざれど、これが唯一絕待の條件ならば、わが特異の國體の意義も支那の政治思想と何等の差異なきに到らむ。著者は果してかゝる思想を主張せしかといふに必ずしも然らず。繼體天皇の條に曰はく、

皇統に其人ましまさん時は賢き諸王おはすとも爭か望を成したまふべき。皇胤絕え給はんにとりては賢にて天日嗣にそなはり給はん事則又天のゆるす所也。

と。これによれば、皇胤を根本の條件とし、その正統にてつぎ給はむときは、賢さの度を以てこれを次第し奉るべきにあらずとせり。ここに於いてその皇統の正とは何をさすかといふ問題生ず。これにつきて著者は如何に說けるか。著者曰はく、

只我國のみ天地開けし始めより今の世の今日に至るまで、日嗣を受け給ふ事邪ならず、一種姓の中に於ても自傍より傳へ給ひしすら猶正に歸る道有りてぞ持ちましましける。

といへり。ここに傍より正に歸る道ありといへるは如何なる事をさすか。これはたとへば、光仁天皇の即位を論じて、

天武世をしり給ひしより爭ひ申す人なかりき、然れども天智御兄にて先日嗣をうけ給ふ。當初逆臣を誅し、國家を安くし給へり。此君のかく繼體に備り給ふ猶正に歸るべき謂なるにこそ。

といへる如く、一時旁系にうつる事ありとも、所謂天定まつて人に勝つの理にていつしか正系にかへるといふ意なるが如し。而して、かの景行天皇の次に日本武尊立ち給ふべきに早世ありしかば、成務天皇傍より立ち給ひしかど、その次に日本武尊の御子仲哀天皇の立ち給ひしが如きをさせり。著者はかく傍正の系統を明かに示さむが爲に、仲哀天皇の時より以後天皇の代數と世數とを區別せり。これ一はその所謂正統こゝに在るを一目瞭然たらしめむが爲の用意と思はれたり。

かくて考ふべきはその系統の正と傍とは何によりて判別せりやといふ事なり。著者が後一條天皇の條に、

冷泉は兄にて御末も正統とこそ申すべかりしに云々。

といへるを見れば、正統といふは主として皇長子とその直系の方々との相繼がることにありとするを原則とするものゝ如し。この原則は實に萬世一系の皇統を永遠に持續せしむる根本原理にして、時に變ありて止むを得ざる場合の外はこの原則は嚴重に守らるべきものなり。然るにこの原則をば著者が嚴重に考へたりやといふに、必ずしも然らざるの疑あるを見る。これ余輩が、著者の偉大なる識見と功績とをば讃嘆するに於いて人後に落ちざらむことを期しつつも、この點に就いて少しく異論なきこと能はざる所以なり。

凡そ系統の傍と正とは、それが直系相續くか、兄弟相及ぼすかによりて區別するを根本義とすべきは著者をまたずして明かなり。今わが國が萬世一系の皇統を戴きたりとするはわれらの世界萬國にむかつて誇りとする所なるが、若し直系の子孫ましますに兄弟相及ぼすに及はば、二系より三系に及び、こゝに亂の階となるべきなり。事實上、わが國史を見るに、兄弟相及ぼされたる後には必ず國威を墮せるを見る。今少しくこれを說かむ。仁德天皇の後、履仲、反正、允恭三帝兄弟を以て相及ぼされてより後、紛亂の端を開き、骨肉相殺すの悲劇を演ずること一再ならずして、皇統漸く微にして、遂に、越前の田舍より繼體天皇を迎へ奉るの一大事件を呈せり。

しかも繼體天皇の後また、安閑、宣化、欽明の三帝・兄弟を以て相及ぼされ、欽明天皇の後又敏達・用明、崇峻の三帝兄弟を以て相及ぼされ、内亂相つぎ國威漸く縮まり、天智天皇の時三韓を放棄する端既になれり。天智天皇一旦、皇太弟を立てらるや、壬申の亂階こゝに生じたりといふべし。桓武天皇の後平城、嵯峨、淳和の三帝また兄弟を以て及ぼしたまひしかば、その間に藥子の亂あり、又皇太子の廢せらるるもの二人、この間に立ち漁夫の利を占むる藤原氏既に專權の端を得て、終に陽成天皇の廢立を斷行する如き勢に至れり。村上天皇の後は兄弟相及ぼさるゝこと恒例の如くなりて、皇統の純一こゝに保たれず、藤原氏の專横その極に達せり。後三條天皇より四代一系相續されしによりて天下暫く平かなりしが、崇德、近衞、後白河三帝相及ぼされて、終に保元平治の大變を起して皇威ますます衰へ、土御門、順德二帝又兄弟を以て相つがれしが爲に朝廷に二黨を生じ承久の一擧かへりて皇威を失墜せしめ、後嵯峨天皇の後又後深草、龜山の二帝兄弟相及ぼされて、こゝに南北朝の大亂を誘ふ因となれり。これを以て見れば、正統を論ずるものは第一に先づ直系繼承を根本義とすべく、その他のものは第二義とすべきなり。然るに著者はこの根本義を嚴密に認めたりやといふに、余は未だこれを知らざるなり。著者の說く所を見るに、かへりてこの兄弟相及ぼされたるを以て謙讓の美德を發揮せられたりとするものの如し。たとへば、嵯峨天皇の淳和天皇に讓位ありし際の事を敍して、

> 一旦國を讓り給ひしのみならず、行末までも授けましまさんの御志にや、新帝の御子恆世親王を太子に立て給ひしを親王又固く辭退して世を背き給ひけるこそ有難けれ。上皇深く謙讓しましけるに、親王又かく遁れ給ひける、末代までの美談にや。昔仁德兄弟相讓り給ひし後には聞かざりし事也。

といへるにてもその一端を知るべし。もとより謙讓は、兄弟相爭ふに比すれば、倫を絕する美德なれど、皇位の繼承は國家の一大公事にして區々たる私德を以て律すべきものにあらず。はた又皇位の繼承は天皇の祖宗に

對せらるゝ第一の本務にして、私的の權利にあらず。然るに著者はこの根本義にふれず、區々たる私德を以て、この一系相承の道の亂れむとする階梯を讃美するは何事ぞや。余はこの點に於いて、著者の正統論は第一義に於いて正鵠を失へるものなりと認め、深く惜むべきものなりと思ふ。

正統記の名を標榜せるこの書が正統の第一義に於いて當を失せりと認むること上の如し。この點に於いては吾人は葛野王の言に

高市皇子薨後、皇太后引二王公卿士於禁中一。謀レ立二日嗣一。時群臣各挾二私好一衆議紛紜。王子進奏曰、我國家爲レ法也。神代以來子孫相承以襲二天位一。若兄弟相及則亂從レ此興。仰論二天心一誰能敢測。然以二人事一推レ之聖嗣自然定矣。此外誰敢間然乎。（懷風藻）

といへるものに及ばざること遠きを遺憾とするなり。然れどもこれ或はこの論をなす余輩の偏見にして著者の譏を受くべきならむも知られず。今ここに方向を轉じて、その正統を繼がれたることを如何にして表明するかといふ問題にうつらむ。

五　神器論

わが皇位の尊嚴なるは、神代以來天祖の神勅のまにまに一系相承けて、かつてあやまらざるにあり。而してその尊嚴にして一系相承けてかはらざる事實を表明するものは實に三種の神器にあり。道理を以て皇位を繼承せられたる天皇は必ず、その皇位繼承の實を證する爲に道理を以てこの神器を受けらるゝ事、わが國家創生以來かつてかはらざる事實なり。神國の實を目前に標示するものは實に神器にあり。この故に、著者は、

天地も昔にかはらず、日月も光を改めず、況や三種の神器世に現在し給へり。窮り有るべからざるは我

國を傳ふる寶祚也。

といひ、又。

此國は三種の正體を眼目とし、福田とする事なれば日月の天を廻らん程は一も缺け給ふまじき也。天照大神の勅に寶祚のさかえまさん事天地と極りなかるべしと侍れば、爭か疑ひ奉るべき。今より行くさきもいと憑敷くこそ思ひ給ふれ。

といひて、神器に就いて論議する所頗る詳かにして、神器につきての重大なる事故は必ず記して世人をして惑なからしめむとせり。これ蓋し深く慮る所ありての事なるべし。

今著者がこの神器に關して說く所を觀察するに、まさしくその史實の記述と著者の神器觀との二方面ありと考へらる。

神器に皇位繼承の標識として傳へられしものなれば、この神器の由來を明かにせば、自然に皇位繼承の事實と皇統と同時に正統觀の誤らざるものとを得べきは見やすき理なり。この故に著者は論より證據の態度を以てこの史實を明確に傳へむと企てたるものゝ如し。

即ちその三種につきて各その起原と由來とを明かにし、これが、皇位の標識として授受せられしこと、崇神天皇の御世に寶劍を模造せられしことよりして、その一方は伊勢神宮、熱田の神と開展し行く次第、又その神器の神代以來今に儼然と傳はれる所を敍し、一方は宮中なる內侍所及び劍璽の史上の事實を敍して毫末もそれらを曲筆して人を誤るが如き事なきは、實に偉大なる見識といふべし。たとへば、天曆の時內裏炎上ありて神鏡災にかゝらせられし事を敍してこの時神鏡が南殿の櫻にかゝらせ給ひたるを小野宮右大臣が歎き申しければ、その袖にとび移らせ給ひたりといふ俗說の以前より行はれたりしを僻事なりと否定するが如きは、既にいへる

如く公平なる態度といふべし。かくして叙し來りて、著者の當時この神器が後醍醐天皇より後村上天皇に正しく傳へられて芳野の宮に存すといふことを明かにし、よつて以て芳野の朝廷が正統たることを斷ぜり。本書の最後の到達點正しくこゝに存す。

神器の重きこと、又重んずべきことはもとより著者をまちてはじめて知らるべき事にはあらねど、著者がこの神器につきて本書に說く所は詳細にわたれり。これもとより然るべきことにして、この神器なくんば、何によりて皇位の正統を明かにし得べけむや。而して著者が神器の正しく授けられたるか否かを見てその皇位を正しく繼承せられたるか否かを判別すべきことを明かにせるは、かの天壤無窮の神勅を受けられたる瓊々杵尊の條に論ずる所に明かなり。

　吾勝尊下り給ふべかりし時は天照大神三種の神器を傳へ給ふ。又後に瓊々杵尊にも授けましまししに饒速日尊は是を得給はず。然れば日嗣の神にはましまさぬなるべし。

これ、瓊々杵尊と饒速日尊とのいづれが正統にましますかを三種の神器を傳へられたるか否かによりて判別したるものにして、皇統のはじめに於いてこの論をなすもの、眞意まことに明かなりといふべし。

抑も著者のこの論はその源、舊事本紀に饒速日尊を以て瓊々杵尊の兄たりとするに基づくものにして、舊事本紀を信じたる點に於いて著しき弱點あるなり。然るに、著者はかく饒速日尊を以 皇兄なりと信じつゝもなほ三種の神器を授けられぬを以て天日嗣にあらずと斷ぜる、その確乎たる識見は實に偉大なりといふべく、この精神即ちこの著一卷の精神といひて決して過言にあらざるべく、神皇正統の實はこの神器の授受によりて、はじめて明かに示されたるものなり。されば著者が、この神器に關する事實の記述に力をこむることもとより然るべきことなり。

要するに、神器の授受を正しくすることとこれ神皇正統の根本義たるを儼然たる態度を以て宣言せるもの即ち本書なりとす。

著者は上の如く神器の由來と實體とを明かにして世の蒙を啓かむとせるが、他面に於いてこの神器によりて示されたる思想をあげ示せり、これを著者の神器觀とす。

この三種の神器は皇位の絶對標識なると同時に、これは天皇の德と道とを示されたるものなりとすることこの著者の意見なり。即ち著者はこの三種の神器を以て儒教の所謂知仁勇の三德に該當するものを表象せられたりとしてこれを說くこと詳かにして、事に觸れてこれを述べざるなし。而して同時にこれを以て道德政治を行ふべき規範を示されたるものとせり。著者のこの論に似たるもの、むしろこの種の見解の萌芽ともいふべきものは日本紀に既に見えたるものにして、これは決して著者の獨創にあらざるべしといへども、これをかくの如く明かにせるは著者を以て濫しとす。僧師錬の著したる元亨釋書中三種神器を論ずることありて、これが神聖を說くこと力めたりといへども、未だ著者の如き論に觸れず。この點に於いて又著者は破天荒の地位に立てりといふべし。

顧みれば、この神器觀は一面著者の神道論に基づくものたるべきは疑ふべからず。而してその神道論は國體論と表裏の關係にあり、又この神器觀は神道論に基づき、その神器の神聖なるは國體の第一義たる皇位繼承の上に絶對的の關係あるものなれば、ここにこれらの意見はすべて渾然として一となるべきものなり。

かくしてこの神器觀として述ぶる所は帝德論となり、皇道論となり、更にこれを敷衍すれば、一般の道德論となり、臣道論ともなり、又一般の政治論ともなる。こゝに於いて著者の意見は一面に於いて國民道德論の源をもなすに至れり。

六　道德論

抑も著者の道德觀政治觀その要をとへば、すべて三種の神器によりてこれを表明せられたるものとするを見る。著者は先づ神器の道德的意義を說きて曰はく、

鏡は一物を貯へず、私の心无くして萬象を照すに是非善惡の姿彰はれずと云ふ事无し。其姿に順ひて感應するを德とす。是れ正直の本源也。玉は柔和善順を德とす。慈悲の本源也。劒は剛利決斷を德とす。智慧の本源なり。此の三德を翕せ受けずしては天下の治らん事誠に難かるべし。

これは一面は著者の抱ける德治主義の一端を說けるものと見らるれど、主とする所は著者の神器觀卽ち道德觀を表明せりとも見らる。かくてこの三德中いづれが最も重きかといふに、著者は、

中にも鏡を本とし、宗廟の正體と仰がれ給ふ。鏡は明を形とせり、心性明らかなれば、慈悲決斷は其中に有り。

といへり。これ鏡の德たる明卽ち正直を其の中心とすることを明言せるなり。この事は著者が、本書に反復して說ける所なり。たとへば應神天皇が八幡の神とあらはれ給ひて八正道を說き給ふとせるが、それにつきても

凡そ心正なれば、身口は自ら淸まる。三業に邪なくして內外眞正なるを諸佛出世の本懷とす。神明の垂迹も又是が爲なるべし。

といひ、

天照大神も只正直をのみぞ御心としたまへる。

といひ、更に又この正直の敎は神道の極致とする所以を切言せり。曰はく、

されば二所宗廟の御心をしらんと思はゞ只正直を前とすべき也。大方天地の間ありとある人陰陽の氣を受けたり。不正にして立つべからず。殊更に此國は神國なれば、神道に違ひては一日も日月を戴くまじき謂れ也。

といへり。

然らばその正直とは如何なる事をいふか。著者曰はく、

　但、其末を學びて源を明めざれば、事に望みて覺えざる誤あり。其源と云ふは、心に一物を貯へざるを云ふ。然も虚無の内に留るべからず。天地あり、君親あり、善惡の報影響の如し。己が欲をすて、之を利するを前として境に對する事蹟の物を照すが如く明々として迷はざらんを誠の正道と云ふべきにや。

と。誠を說きて、かくの如く、切實周到なるもの蓋し稀なり。まことに至言といひつべし。

然らば、その正直の德を養ふ道如何。著者曰はく、

　少しの事も心にゆるす所あれば大きに誤まる本と成る。周易に霜を履て堅氷至ると云ふ事を孔子釋しての給はく、積善の家に餘慶あり、積不善の家には餘殃あり。君を弑し父を弑する事も一朝一夕の故に非ずと云へり。毫釐も君をいるかせにする心をきざす物は必ず亂臣となる。芥蔕も親をおろそかにする形在る者に果して、賊子となる。此故に古の聖人、道は須臾も離るべからず、離るべきは道に非ずと說けり。

と。修德の心得としてはこれ亦間然する所なし。而してその修德のはじめとして言語を愼むべきことを諭せるは誠に肯綮にあたれりといふべし。曰はく、

　言語は君子の樞機なりといへり。白地にも君をないがしろにし、人におごることはあるべからぬことにこそ。先に注し侍りし如く、堅き氷は霜を踏むよりいたる習なれば、亂臣賊子と云ふものは其始心ことば

をつゝしまざるより出て來るなり。

といへり。

凡そ著者のこれらの論、儒佛に於ける道德說の精要を摘みて、以て道德の根柢、修德の心得として言は簡なりといへどもよく要を得て、今日といへども、これ以上の理なく、又これを用ゐて盡くることなきなり。ことに人臣たる者の道を說けること又至れり。その後嵯峨天皇の條下に曰はく、

增して人臣として、君をたふとみ、民を哀み、天にせくぐまり、地にぬき足し、日月の照すを仰ぎても心の黑くして光に當らん事をおぢ、雨露の施すを見ても、身のただしからずして惠に漏れむ事を顧るべし。朝夕に長田狹田の稻の種をくふも皇恩也。晝夜生井榮井の水の流を吞むも神德也。これを思ひも入れず、在るに任せて慾を恣にし、私を前として公を忘るゝ心在るならば、世に久しき理侍らじ。況んや國柄を取る仁に當り、兵權を預る人として、正路を踏まざらむにおきてはいかでか其運を全くすべき。

と。更に後醍醐天皇の條に至れば、人臣の道を說くこと反覆丁寧にして一々これをあぐるに遑なし。今その要を摘めば、

さればよく先蹤を辨へ得失を勘へて身を立て家を全くすることこそ道なれ。愚なる類は淸盛賴朝が昇進をみて皆あるべき事と思ひ、爲義義朝が逆心をよみして亡びたるゆゑをしらず。

といひ、

中古までは人のさのみ豪强なるをば誡められき。豪强に成りぬれば、必ずおごる心あり。果して身を亡し家を失ふためしあれば誡めらるるも理也。

といへるが如き、いづれも、人臣の心得を說けるものなるが、そのうちにも、著者の一門たる源氏の論にその

適切なる言の多きを見る。

皇胤の苗裔より出でぬる人、藤を濫へて、いと才なども無く、あまさへ、人に驕り物に慢ずる心も在るべきにや。人臣の禮に違ふ事在りぬべし。寬平の御記に其端の見え侍りしなり。後をも能々鑑みさせ給ひけるにこそ。皇胤は誠に他に異なるべき事なれど、我國は神代よりの誓にて君は天照大神の御末國をたもち、臣は天兒屋の御流れ君を助け奉るべき器となれり。源はあらたに出でたる人臣也。德もなく功もなく高官に昇りて人に驕らば、二神の御とがめ在りぬべき事ぞかし。

と。これ己が一族にさとすを主としたる言なるべきが、一般に人臣として心得べき事なるはいふをまたず。著者自らがその一族をさとす上述の言を見ても、著者が如何に敬虔忠誠の人たりしかを見るに足るべし。かかる敬虔忠誠にしてはじめて言々句々人の肺腑に入ることをうるなり。

ことにその臣道の根本精神を論ずるに當りては眞に天地の神明の託宣をきくが如き概あり。曰はく、

凡そ王土にはらまれて忠をいたし、命を捨つるは人臣の道なり。必ず、これを身の高名と思ふべきにあらず。

その言簡なれども精。道德の本性たる、道なるが故に行ふといふ眞理を一言にして喝破せるものにして、光焰萬丈千古を照すといふべし。これを以ても著者が優越せる道德觀を有せしを見るべし。

更に又世の善惡を判斷すべき原理を道德に求むべしとせることは著者が 屢々 所謂末世といふものの意義を說けるにて知らる。曰はく、

世の中のおとろふると申すは日月の光のかはるにもあらず、草木の色のあらたまるにもあらず。人の心の惡しくなり行くを末世とはいへるにや。

といへり。然り而して、世の治亂は畢竟この德敎の行はるるか否かによるといふことを著者は信ぜり。故にかの保元の亂に朝廷よりして義朝に命じて爲義を斬らせられしことを論じて、後

保元平治より以來、天下亂れて武用さかりに、王位輕く成りぬ。未だ太平の世に歸らざるは名行の破れ初めしに依れる事とぞ見えたる。

といへるはこれ亦至言にして、治亂の機一に德敎にかかりて存することを知れるものにあらずばいひ得ざる所なり。

以上の如くなれば、著者はその當時の世相に對してはその道德の敎の地におちたることをいたく憤りもし、又憂へもしたることは明かなるが、然らば著者はこれを悲觀せしかといふに、決して然らず。

代下れりとて自賤むべからず。天地の初は今日を初とする理あり。加之す、君も臣も神を去る事遠からず、常に冥の知見を顧み、神の本誓を覺りて正に居せん事を志し、邪なからん事を思ひ給ふべし。

と。これ豈に悲觀論者の言ならんや。又、後村上天皇の御世を申すとて、

いまの御門又、天照大神よりこのかたの正統を受けまし〱ぬれば、この御光にあらそひ奉る者やはあるべき。中々かくてしづまるべき時の運とぞ覺え侍る。

著者のこの信念は短日月の間に容易に實現することを得ざりしが如くなれど、數百年を經て、今日の聖世を導き出したる、その原動力は著者のこの思想の力なれば、決して著者の勞は效なくして終れりといふべからざるなり。

七　帝王の修養

以上述べ來りて、著者の論の根本とする部分は略これを窺ひたり。然れども上述の目的の外に加へて帝王の學と道とを說き、又政治の要道を述べ、又臣たるものの道を論ぜり。今これらの方面につきて一往の觀察をなさむとす。而してこれらのうちに於いて帝王の學と道とを說くことは特に丁寧なりと思はるるが故に、先その點より說かむ。

惟ふに帝王學といふものありや否や、われこれを知らず。然れども、帝王をして君たる德を備へしめ、帝王をして帝王たる道を行はしめむことを說くものあらば、これを帝王學といひても可ならむ。かくの如き意を以てすれば、本書は帝王學の教科書といひても可ならむ。

先づその國體と皇位繼承との重大なる所以と事實とを知ること、もとより帝王に絕待的必要の事件なり。本書はこれを明かにするを目的とせること既に說ける所の如し。更に進みては本書は帝王たるものの德を修むべきことを力說せり。この事はかの三種神器の條にも力說せるが、更に、八幡大神の條の八正道の說明に於いてもこれを強く說けり。曰はく、

又此鏡の如くに分明なるを以て天下に照臨し給へ。八坂瓊のひろがれるが如くに曲妙を以て天下をしろしめせ。神劍を提げては不順ふ者を平げ給へと勅しまし〳〵けるとぞ。此國の神靈にして皇統一種正しくまします事誠に是等の勅に見えたり。

又曰はく、

此三種に就きたる神敕は正しく國を持ちましますべき道なるべし。

かくの如くにして祖宗の御精神を體してこの國に君臨せらるべきものなりとするが、著者の本旨なりと觀察せらる。著者曰はく、

我國は神國なれば天照太神の御計ひにまかせられたるにや。され共、其中に御誤あれば、曆數も久しからず、又終には正路に歸れ共一旦も沈ませ給ふためしもあり。是は皆自らなさせ給ふ御科也。

と。又曰はく、

十善の戒力にて天子とは成り給へども、代々の御行迹善惡又まち〳〵也。かゝれば、本を本として正に歸り、元を元として邪を捨てられん事ぞ祖神の御心には叶はせ給ふべき。

といへり。かくの如く、帝王たる實をあげられむにはその德を十分に供へられむことを必要とせり。この故に

聖德は必ず百代にまつらるとこそ見えたれ共、不德の子孫あらば、其宗を滅すべき先蹤共多し。

といひ、

かゝれば、先祖大なる德ありとも不德の子孫、宗廟の祭をたたん事疑なし。

といひて、反省を王者に求むること切實なり。

著者のこの著又君德の修養に資せむとする願切なればにや、帝王の統の更迭する場合には必ず修德の論をなさざることなし。そのうち最も著しきは光孝天皇の條なりとす。或は君德の修養に缺けたる點ある場合は忌憚なく批難せり。たとへば九十四代の天皇(花園)の條に

法皇(御父伏見法皇)かくれ給ひても諒闇の儀無かりき。上皇(後伏見上皇)御猶子の儀とぞ。例なきこと也。

といへるが如き、これなり。なほ又宇多法皇後宇多天皇等の御事を委しく說けるは君德修養の模範にましますが故なりけり。

かくの如くにして著者は帝王の學の第一として修養を勸むること丁寧到らざるなし。然らば、この修むべき

德は如何なるものかといふに、汎く人としての德すべてこれ帝王も修むべきものにして、その一般性につきていはゞ、特に帝王の德といひて狹くすべきにあらねど、帝王の帝王たる所以はその廣大覆はざるなき絕大なる地位にあれば、この德の大、その道の大は臣民などの局部に偏せるものと同日にして論ずべきにあらず。これ著者が、その帝王の德の修養にことに力を注げる所以なるべし。然らば帝王の德の修養は如何。

この事も亦一般の修養と同一にして特に帝王の修養としてあぐべき點なきが如しといへども、しかも帝王がその地位よりして往々陷り易き點あるにつきて著者は頗る力を致してこれを說けり。それは何ぞといふに、往往にして臣下の爲にその明を蔽はるるが如き弊あることなり。この點につきては著者は頗る苦心せる所ありと見らる。應神天皇が讒を信じて武內宿禰を誅せむとしたまひし事を叙しては、

上古神靈の主猶かゝるあやまちまし〳〵しかば末代爭かつゝしませ給はざるべき。

といひ、又菅公左遷の事に關しては、

猶御幼年の故にや左相の讒にも迷はせ給ひけん。聖も賢も一失は有べきにこそ。其趣經書に見えたり。されは曾子は吾日ニ三タビ省ニ吾身ヲと云ふ。季文子は三思とも云ふ。聖德の譽御座さんに付ても猶愼みますべき事也。

といひ、到る所に帝王修德の心得を說けり。然してその具體的の御訓としては主として宇多天皇御遺誡をあげたり。これ亦もとより當然の事として用意周到間然すべき所なしといふべし。

帝德論に次いでは帝王の學問の必要を論ずること頗る丁寧なり。これも亦寬平の遺誡を基として論ぜるが、後宇多天皇の條に於いて、最も詳かにこれを痛論せり。ことに、

唐に仇士良とて近習の宦者にて內權を取り、極めたる奸人也。其黨類に敎へけるは人主に書を見せ奉る

な。はかなき遊び戯れをして御心を亂るべし。書を見て此道を知り給はば、我輩は失せぬべしと云ひける、
今も在りぬべき事にや。

といへる、その言痛烈、奸佞の徒をして膽を寒からしむるものあり。ことに末の一言は千古にわたりて人主たるものの顧るべき要點たり。而して又帝王輔佐の大臣の恒に紳に書して忘るべからざる金言たり。

かくの如くにして著者は帝王の學問の必要を到る處に力說せるが、その學問が一に偏するを不可として諸道を弘く知らるべきを論ぜり。この事は嵯峨天皇の條に說く所最も著しとす。その中に曰はく、

且は佛教にかぎらず儒道の二教乃至諸の道賤き藝までもおこし用ゐるを聖代と云ふべき也。

この事は單に帝王の學たりといふに止まらず、王道としてかくあるべきを、その本源たる神道の精神よりしても著者は信ぜるなり。著者は神皇正統の道を說きて、さて曰はく、

此理を悟り、其道に違はずば内外典の學問も此に窮まるべきにこそ。されど此道の弘まるべき事は内外典流布の力也と云つべし。魚を得る事は網の一目によるなれど、衆目の力无ければ、是を得る事難きが如し。應神天皇の御代より儒書を弘められ、聖德太子の御時より釋教をさかりにし給ひし、是皆權化の神聖にましませば、天照大神の御心を受けて我國の道を弘め深くし給ふなるべし。

といへり。これ即ち儒佛二教を以て皇道の羽翼とすべきことを主張せるものにして、帝王の學もまたこの態度に出づべきを精神とせり。かくてその學問は儒教のみならず、佛教にもわたるべく、佛教に於いても諸宗を洽く知りたまはずば、帝王の道にたがふとして、これを說くこと一斑ながら、諸宗にわたれり。從來の學者、著者のこの用意を顧みずして、著者が佛道に偏せりとなす。余惟ふに、これ決して偏せるにあらず。當時人心のつながる所主としてこの佛教各宗にあれば、それらの宗教の如何を知らずしてわが國を治めむこと難かりしなら

む。著者の見る所は單に信仰よりのみいふにあらずして、平々蕩々たる帝王の一視同仁の精神よりして洽く諸宗にわたり、諸道に通じてましますべきを主張とせる爲なり。

著者は上の如き精神を以て音樂よりはじめ諸藝諸能につきても決して疎にせらるべからざるを論ぜり。かくの如き見地より見れば、著者が、支那の歴代を概說せること、又儒教佛教道教の祖とその教の大旨を說くことの如きは神皇正統の本旨より見れば、殆ど無用の言の如く見ゆることとなれども、實は帝王の學として必要の事たることを知るべきなり。著者のこの精神を酌まざるものには、又上述の支那歴代の興亡の如きは無用の言を弄するが如くに見ゆべきなり。

かくの如く支那歴代の興亡につきて注意を怠らざる著者が、わが國の政治上の治亂興敗に注意を怠らずしてその要をあげてこれを論ずることあるはもとより當然の事といふべし。これ一面より見れば、政治史、文明史の如く見ゆる點にして、本書が歴史なりと論ぜられたる點ここにあれど、これはもとより史論をなさむが本旨にあらずして、この治亂興敗の跡を論じて以て君德輔導の一端に供せむとせしものと見らる。この故にその論は單なる放言にあらずして　この治亂興敗の跡を顧みて以て政治を行はるべきを到る處に切言せるなり。

八　政治論

この治亂興敗の跡を論ずるは上述の如く、帝王學の一端として述べたりと考ふべきものなれど、その言を見るに、同時に執政輔佐の任に當るものの鑑戒とせよと論ずるところ少からず。これこの書が、帝王のみならず、執政輔佐の任に當るべき人にも參考になれかしと冀ひて編せるが故なるべし。而してその治亂興敗の跡を論じてこれを判ずるには一定の標準なかるべからず。ここにこれが標準としたる著者の政道論を一瞥せむとす。

先づ著者が政道の指針をいづれに求めたるかといふに、既にも述べたる如く、これを三種の神器によりて示されたりとするなり。そはかの正直慈悲智慧の三德を叙したる後に、

此の三德を翕せ受けずしては天下の治まらん事誠に難かるべし。神勅明かにして詞約かに旨廣し。剰へ神器に彰れ給へり。いと忝なき事にや。

といひ、又、

凡、政道と云ふ事は所々に注し侍れど、正直慈悲を本として決斷の力あるべき也。

といへり。言簡なれど、政道の要をつくせり。正直は誠なり。誠ならざれば、すべての行動一切虚僞なり。虚僞にして天下の治まるべき筈なし。されど、誠は一切の道の根柢にして特に政治の道にかぎるべからず。政治の道としてはその決斷にあることといふまでもなし。決斷なくして何の政治あらんや。著者の言簡にして要を得たりといふはこの故なり。

さてその決斷即ち政道の要諦は何かといふに、著者は曰はく、

決斷と云ふにとりてあまたの道あり。一には其人をえらびて官に任ず。官にその人ある時は君は垂拱してまします。されば本朝にも異朝にも、是を治世の本とす。二には國郡を私にせず、分つ所必ず其理のままにす。三には功あるをば必ず賞し、罪あるをば必ず罰す。これ善をすゝめ惡をこらす道也。是に一もたがふを亂政とはいへり。

と。これ即ち政治の實地の方途を示せるものにして、一國の治亂興亡は一にこの三者の正しく行はるるか否かにかかりて存す。かくしてそれの詳細にわたりて論ずる所反覆丁寧にして治國の要諦をつくし、ことにかの建武中興の成敗に論及せる所、爲政者の服膺して常に鑑むべき所たるやいふまでもなし。ただその言、頗る忝し

くして一々これを引用し得ざるを遺憾とす。しかも讒奪と尸祿とを戒むること痛切に、功を賞すると官に任ずるとを鑑別すべきことを論じて濫賞を戒めたる如き、現代に於いてもまさしく服膺せらるべき金石の言たりとす。

以上叙する所は主として政治の形式なり。ここに其政治の實質につきて著者の論ずる所を見む。この政治の實質は即ち三種の神器の德の一として示されたる慈悲の政にあり、仁政にあり。この故に曰はく、

かくのごとく様々なる道を用ゐて民の憂を息め、各の諍なからしめん事を本とすべし。民の賦斂を厚くして自の心を恣にする事は亂世亂國の基也。我國は王種のかはる事はなけれども、政亂れぬれば、暦數久しからず、繼體も違ふためし所々に注し侍りぬ。

といひ、

神は人を安くするを本とす。天下の萬民は皆神物也。君は尊くましませど、一人を樂しましめ萬民を苦むる事は天も許さず、神も幸せぬ謂れなれば、政の可否に隨ひて御運の通塞在るべしとぞ覺え侍る。

といへり。

かくの如き見地に立てる著者の興亡史論は、そのかゝる所の一半はこの仁政如何によりて歸趨する所を示すものなり。この故に武家の政治につきても、著者は一概に否認すること能はざるなり。かの建武中興の成敗を論ずるうちに於いて曰はく、

凡保元平治より以來の亂りがはしさに頼朝と云ふ人もなく、泰時と云ふ物なからましかば、日本國の人民いかゞ成りなまし。此謂を能く知らぬ人は、故もなく、王威の衰へ武備のかちにけると思へるは誤也。

といひ、さて、王政の復古につきて、それに該當すべき實績あるべきを主張せり。即ち、

所々に申し侍る事なれど、天日嗣は御譲に任せ、正統に歸らせ給ふに取りて用意在るべき事の侍る也。

といひ、

我國は神明の誓ひ掲焉くして上下の分定れり。然も善惡の報明かに、因果の理り空しからず、且は遠からぬ事共なれば、近代の得失を見て將來の鑑誡とせらるべき也。

といふなり。この用意は如何なる事かといふといふに、著者が承久の變の論の中にいへる言に、

先誠の德政を行はれ、朝威をたて、彼を尅する計の道在りて其上の事とぞ覺え侍る。且は世の治亂の姿をも能く知らせ給ひて私の御心なくば、干戈を動かさるる歟、弓矢をさめらるるか、天の命に任せ人の望に隨はせ給ふべかりし事にや。

とあり。即ち民政に於いて眞に民心の悅服する所無くば、決して、眞の王政復古は得られずとするものたるや明らかなり。

かくの如き見地に立ちては勢やむを得ず、賴朝泰時が民政上の功を認めざるを得ざりしならむ。古來著者の賴朝泰時論は、識者の論議する所にして、かの伴蒿蹊の如き人をして「あやしぶに足れり」と評せしむるにまで至れるなり。神皇正統の記にして、又上下の分を正しくせむを本旨とする本書にして、上の如く、不臣の賴朝、泰時等を謳歌する如く思はしむる言議あるは、恐らくは著者の本旨にあらざるべし。然れど、時世の變、若し、これらの人々なくば、「日本國の人民いかになりなまし」と思ふ時に、自然にこの論に出でざるを得ざりしなるべし。而してこれ實に王者たるもの、又、その輔佐の重臣に、仁政を施すにあらずば、決して君たるの實を完くするものにあらざるを教導せむが爲の苦衷より出でたる微言に外ならじ。この苦衷の微言を察せず、表面の語のみにて著者を論ずるが如きは未だ著者の本旨をさとらぬものにあらざるか。この見地よりして余は大町

桂月の見を以て群を絶せりとす。曰はく、

この一節仁政を力說す。頼朝泰時は虛にして仁政は實也。親房の頼朝泰時を褒むるは即ち仁政を褒むる也。千古の公論なり。

と。

抑も武家政治はわが國體よりして見れば決して容認すべからざる變態なり。この故に著者はその創始者たる頼朝に對しては、

自ら權を恣にす。

と斷言し、又

保元平治より以來天下亂れて武用さかりに、王位輕くなれり。

と慨嘆せり。惟ふに武家政治の起れる源は、源平二氏が武門の棟梁となりしに基づくものなるは明かなり。而してその源平二氏が武門の棟梁となるに至りしは、一は大化以來の文治主義と、清和天皇以後の攝關政治との馴致せしところならむ。その故如何といふにわが國の古にありては文武は二途にあらずして、一に天皇の大權として親ら掌握せられ、事故ある時は皇后、皇太子代りて軍隊を統帥せられたりしが、大化以後支那の風に倣ひ、文武の官を分ち專ら文治を主として武事を輕んぜられたり。その事の卑近なる例證は延喜式五十卷の中兵部省は僅に一卷に止まるにても知らるべし。かく武事が中央の政權を離れたるはこれ武人の罪にあらずして大化以來の國家の法度の缺陷に基づくものなり。而して攝關の政治は藤原氏をして權を專らにせしめたれば、皇室の支流たる源平等は中央にありて藤原氏の頤使に甘んずること能はず、地方に分散して士民の推戴を受くるに至りぬ。而して古來武事は皇室の掌握せられしところなれば、地方の武人はおのづから皇室の裔たる貴族源

氏平氏等を推戴してその盟主とするに至りしものとす。かくの如くにして地方豪族の間に於ける實權は源平二氏の掌中に屬したればその實權を基として下より築き上げられたりしものが、一定の組織をなすに至れるものこれ卽ち武家の政治なり。武家政治の成立の勢はかくの如く如何にも止むを得ざるより生じたるものならむといへども、もとより容認しうべきものにあらざるなり。建武の中興はこの變態を正しきにかへし、天皇親政の古にかへされたるものなり。然れども、この武家政治の基礎なほ下に牢たるものあり、且つは又天皇親政に相當する實質を政治の上に、具へずして失敗せるなり。目のあたり、この事實に直面せる著者の胸裡果して如何なるものありしか。今よりして想像すること能はざる程の苦悶ありしならむ。而してこの變態を惹き起せる史觀は著者をして如何なる意見をはかしめたるか。

抑も天皇親政の政治の上に著しき變態を生じたるは藤氏の攝關政治を以てはじめとす。著者はこれを如何に觀じたるか。著者は淸和の御時藤原良房が人臣にして攝政たることの始を敍したる條に、

此天皇の御時良房大臣の攝政よりしてぞ正しく人臣にて攝政する事は始まりける。

とはいひたれど、これにつきて何等の批評を下さず。藤原氏が國政をとるは神代以來の宿命なりとするものの如し。されどかくの如きはもとより藤原氏一家の言にして公論にあらず。著者がこれを論議せざるものは時世上已むを得ざりし事なるべけれども、もとより公正といふべからざるなり。更に又基經の廢立の如きも決して臣節を盡したりといふを得ざるなり。しかも著者また之を是認して、「いと目出度し」と賛せり。かくの如くにして著者の攝關政治に對する議論は公正なりといふことは躊躇せざるべからざるなり。

かくてこの攝關政治の弊に堪へずしてこれを打開せむとせられしが後三條天皇なり。天皇はよく藤原氏の專橫を抑へ給ひしかど、不幸にして世を早くしまして、親政の基をかたくし給ふ遑あらざりき。白河天皇その後

をうけて親政の實をあげられしかど、讓位の後院中にて政を知り給ふこと四十餘年。ここに前代未聞の院政といふ變態を起されたり。

院政についての著者の評論は肯綮にあたれり。曰はく、

　　増して此御代には院にて政をきかせ給へば、執柄は只職に備りたる計に成りぬ。されども、是より又古き姿は一變するにや侍りけん。執政世を行はれしかども、宣旨にてこそ天下の事は施行せられしに、此御時より院宣、廳下文を重くせられしに依りて在位の君又位に備り給へる計也。世の末に成れる姿なるべきにや。

と。この言、僅かに一二言せるに止まるやうなれど、能く味へば、千萬の言を費せるよりも有力なる批難なり。抑も攝關の政治は如何にも大權を干せる如くなれど、それは内部にての事にして、その行ふ所は一々悉く勅命及び、勅命によりて委任せられたる太政官の公式によりて執行せるものなれば、法規上一點の批議すべきものなし。これ筆者がこれを容認するを得し所にして、この點より見れば、われらも亦同じく然りといふに躊躇せず。即ちその頃は藤原氏專橫の實ありといへども、勅命を經るにあらざれば、一毫も自由にこれを行はざりしなり。即ち藤原氏は專橫なりといへども一天の君の主權を干犯することなかりしなり。

　凡そ國家の主權が至高唯一絕待のものなる以上、在位の天皇の上にありてこれを左右するものの存すべき理なし。この故に、天皇讓位の後は、當代の天皇は血統上卑屬にましますといへども、唯一絕待の天位にまします以上、法理上、上皇、法皇は臣下の地位にありといふべき關係にあり。この故に宇多法皇の如きは御子たる當代の君に上表して臣某と稱せらるるに至れり。かくの如きは臣民たるものより彼是の論議を加へ奉るべきものにあらざるべしといへども、法理の上より論ずれば、まさしく然るべきなり。随つて遜位の上皇が政治に喙

を容れらるるが如きことは存すべからざるものとせり。然れば著者は曰はく、

　おりゐにて世を治らせ給ふ事昔はなかりし也。孝謙脱屣の後にぞ廢帝は位に居給ふ計と見えたれども、古代の事なれば確ならず。嵯峨、淸和、宇多の天皇も只讓りてのかせ給ふ。圓融の御時はやうやう知らせ給ふ事も在りしにや、院の御前にて攝政兼家のおとど承りて源の時仲の朝臣を參議になされたるとて小野宮實資大臣なんどは傾け申されけるとぞ。

と。これ在位の天皇の上に加ふるものある時は天皇の神聖はここに害せられ、主權の唯一絕待の地位は保たれざるが爲にして天皇を至上とすることは千古不磨の公規たり。然るに、この院政は天皇の上に院といふ實權者ありてこれを左右し、勅宣、太政官符の上に院宣、院廳の下文といふものあり、その勢力これを左右するものあり、ここに天皇以上の實權者あらはれたることとなる。これもとより攝關の專橫を抑へて、皇室に政權を回收せられむが爲の擧なることは明かなりといへども、天皇の法理上の大權が害せられたることこれより甚しきはなし。これ著者が、白河天皇の條にこれを痛論し、終に

　世の末に成れる姿なるべきにや。

と浩嘆せる所以なり。

　かくてこの弊政はついで起れる武家政治と內外相應じて天皇親政の本義を破壞すること多年終に帝位に卽かざる親王(後堀河の父入道親王守貞)が院號をうけて後高倉院と稱して、院政を行はるるに至れり。衰世の極といふべきなり。かくの如きはもとよりこの院一代に限りたれども、しかもこの院政といふ弊は著者の時まで繼續せり。この故に本書を見ても

　戊午の年卽位。己未の夏四月に改元、元應と號す。始つかたは後宇多院の御政なりしを中二とせ計有り

てぞ譲り申させ給ひし。（後醍醐天皇の條）

とあるが如く、御即位と、御政とは別途になりしなり。かくの如きは、これ豈に變態といはざるべけんや。而してこの始は白河天皇の院政にはじまる。わが皇位の輕くなりしはまさしくこの時にあり。著者がこれを極言せしはもとより當を得たりといふべきなり。

かくの如き變態政治の行はれたるはこれはもとより著者の主張する如く、人心の惡しくなれる結果に外ならず。論ずるまでもなく、この白河院の時よりわが國家は有形無形に變態を起したりしなり。これが爲に一轉して保元平治の亂となり、ここに平氏專權のはじめをなし、平氏の專權が因となりて反動的に源氏の勃興を促し、ここに武家政治といふ一大變態を生じ、公家の院政と内外相應じて、わが國家をば未曾有の變態政治に導きたるなり。この變態政治はもとより天皇親政の根本義に牴觸すること甚しといへども、勢蓋し已むを得ざるものありしならむ。

武家政治につきては著者はその創始に關して、

平氏滅亡してしかば、天下本の如く、君の御まゝなるべきかと覺えしに頼朝勳功誠に様（タメシ）なかりければ自らも權を恣にす。君も又打任せられにければ、王家の權は彌々衰へにき。

といひて一旦にこれを批難せるが、しかも勢の已むを得ざる所ありとしてこれを認めざるを得ざることをいへり。その承久の亂の論の中に曰はく、

頼朝勳功は昔より類無き程なれど偏へに天下を掌にせしかば、君としてやすからずおぼしめしけるも理也。況や其跡絶えて、後室の尼公、陪臣の義時が世に成りぬれば、彼跡を削りて御心のまゝにせらるべしと云ふも一往の謂なきに非ず。然れども白河鳥羽の御代の比より政道の古き姿やう／＼衰へ、後白河の御

時兵革起りて姦臣世を亂る。天下の民ほとほと塗炭に落ちにき。賴朝一臂を振ひて、其亂を平げたり。王室は古に復るまでなかりしかども、九重の塵も治り、萬民の肩も息まりぬ。上下堵をやすくし、東より西より其の德に伏せしかば實朝なくなりても背く物ありとは聞えず。是にまさるほどの德政なくして爭でたやすく覆さるべき。

著者の武家政治に對する態度はまさにかくの如し。要するに武家政治は名敎の廢れに因するものとして著者の根本主義よりいへば、もとよりこれを否認するものなりといへども、その民政は、當時の公家政治より遙にまされりとするものなり。この故に實際上、これにとりてかはるべきものの存在せぬ以上、王政復古の實はあがるべからずとするもの、これ著者胸中の積鬱なりしならむ。

抑も著者の抱懷せし政治は如何なるものなりしかと忖度するに、著者は上の如く院政を否定して天皇の親政を主張せり。而して天皇の親政は當然攝關政治を否認せざるべからず。著者はこれが否定を公言せざれども、著者が推戴せし後醍醐天皇は事實上攝關の政治を否認せられたり。而して其の政治の理想とせられし宇多、醍醐、村上の三朝いづれも攝關を置かれざりしを以て見れば、その本意いはずして明かなりとす。かくして文武の道二なるべからず、昔は皇子皇孫もしは執政の大臣の子孫のみこそ多くは軍の大將にもさされしか。今より武をかねて藩屛たるべし。

とある處、文武を一にするものにして、これ實にその政治の要諦にありしならむ。しかもこれを建武の中興に實現することを得ずして、空しく言に寓して後代の知己を待てる、著者の苦衷を思へば、感慨無量なるものあり。然れども、著者のこの苦衷は六百歳の後にしてはじめて報いられたり。然らば著者のこの書を著ししもの決して徒勞に終らざりきといふべきなり。

著者の政治論は一面帝王の參考に供せむが爲のものにして、一面に執政輔佐の任に立つ者の訓誡とせるものあり。ここにその臣道を說ける方面につきてなほ一往の觀察を施さむ。

著者は政治論を說く每に、この執政の臣に注意を與ふることをば決して忘れざるなり。曰はく、

　國の主ともなり、輔政の人ともなりなば、諸教を捨て機を漏さずして得益のひろからん事を思ひ給ふべき也。且は佛教にかぎらず、儒、道の二教乃至諸の道賤しき藝までもおこし用ゐるを聖代と云ふべき也。

といひ、又、

　我國は王種のかはる事はなけれども、政亂れぬれば、曆數久しからず、繼體も違ふためし、所々に注し侍りぬ。況や人の臣として其職を守るべきにおきてをや。

といへるが如きこれなり。

かくて一般に人臣の道を說けることは既にいへる如く、後嵯峨天皇の條下にあり、又後醍醐天皇の條に反覆丁寧に之を說けるが如し。

九　思想

著者の國體觀、道德觀、政治觀は略これを述べたり。而してこれらの源泉たるべき著者の思想を考ふるに、その內容甚だしく多樣にして包容力の大なることは、蓋し比類稀なるものなるべし。

著者の思想は既に述べたる如く、神道佛教儒教道教諸般の學藝一切を攝取してすてざらむとする態度に出でたるものなれば、その內容の多樣なると共に雜駁の弊を生じ易きなり。而もその思想を見るに、多少不純の嫌

なきにあらざるは時世の罪としてこれを看過すべきものなるべし。而してその內容をなす主たるものは神道と佛敎と儒敎との三者なりとす。かくてこの三者の關係を見るに、著者は能くその主客の別を心得てありきと思はる。

佛敎と著者との關係は甚だ深く、著者は壯年にして既に佛門に歸し、爾來世を終ふるまでこれを棄てざりき。而して佛敎につきての造詣の深きことは本書を一閲しても知らるべし。この故に論者往々著者を目して佛に佞せりとするものあり。然れども、余輩を以て見れば、著者が佛に佞せりとする處は一も發見せざるのみならず、かへりて反對の現象の存するを見る。この事は慈鎭和尙の愚管抄と比較する時に最もよく了解しうべし。

本書と愚管抄との關係につきては世に往々本書を以て愚管抄の亞流若くは後繼者の如くに說く者あり。然れども愚管抄の本旨と本書の本旨とは本質的に相容れぬものあれば、この說は決して當らざるものなり。もとより博覽なる著者が愚管抄を見ずとはいひ難く、强記なる著者が讀みたらば、その要を記憶したりしなるべく、又その襟度の廣き著者が、その意見の賛すべきはこれをとるに躊躇せざりしならむ。この故に愚管抄の言に似たる點の往々存するはもとより否定すべきにあらねど、本質的に異なること、下におのづから論及する如くなれば、これが後繼者たりといふは愚管抄をも味讀せざるものの臆斷に止まれり。

愚管抄と本書との思想上の著しく別なる點をいはゞ、愚管抄は王法佛法相互に助くるものとせるが、寧ろ佛法を重くし、それを以て王法を第二位におきて論ずる所少からず。本書が佛法を輕視せざるは勿論なれど、それはもとより神道を助け、皇道の羽翼たるものとして、とれるが爲にして皇道が主となりて佛法を攝取すといふ態度に出でたり。この故に一毫も佛法の理によりてわが神皇の道を曲解せむとしたる態度を見ず。次に愚管

抄は佛者の所謂末世思想を以て當代に臨み、著しく悲觀的退嬰的なり。本書の末世の解釋の如き、又

代下れりとて自賤むべからず。天地の初は今日を以て初とする理あり。

といへるが如きは佛者の所謂末世末法の思想儒教の澆季說とは氷炭相容れざるものにしてそれらの思想を有するものの夢想だになし得ざる堂々たる態度たり。又

葺不合尊八十三萬餘年ましましに、その御子磐余彥尊の御代よりにはかに人王の代となりて曆數も短く成りにける事疑ふ人も有るべきにや。されど神道の事抑して計り難し。眞に磐長姬の詛ひけるまゝに壽命も短く成りしかば、神の振舞ひにもかはり、軈て人の代と成りぬるにや。天竺の說の如く次第有りて減じたりとは見えず。

といへるが如きは毫も印度の創世說に累せられてあらぬを知るに足るべし。又

又百王ましますべしと申める、十々の百には非るべし。極りなきを百と云へり。百官百姓など云ふにて知るべき也。

といへる所は愚管抄の退嬰的悲觀的限定的の百王の解釋とは對角線的に反對せりといふべきなり。加之その名分論に於いては愚管抄は頗る糢糊たるものありて本書の公明正大なるものにはかけても及ぶべからず。更に又愚管抄は「道理」といふ曖昧なるものを捻出して時世變遷の解釋の原理とせるが、本書が正統と神器と仁政とを以てこれを論ぜるものと同日を以て論ずべきにあらざるなり。

次に儒教との關係如何。著者が儒教の影響を受けたることは著しきものあり。ことに宋學の影響を受けたることはその神道說の上にも見えたるが、春秋の本旨を體して大義名分を正しうし、內を尊び、外を卑むこと、王道を尊び、覇道を斥くるが如きは朱熹の學風によれる點もなしとせず。しかも朱學よりはその長を採れるもの

にして、その學風の陷り易き繁文縟禮の弊を受けざりしは多とすべきなり。抑も儒學をなすものの最も陷り易き弊はその學を貴ぶあまりに支那を尊び、わが國を輕んずることにあり。今著者はかゝる弊なく、よく內外の輕重を知れり。たとへば、孝靈天皇の條に、

　異國には此國を東夷とす。此國よりは又彼國をも西蕃と云へるが如し。

といへる如き一言にして、よく內外の別を明かにせりといふべし。

以上說く所の如く著者のわが國體を失墜せざらむ用意到る處に瞥見するをうべし。然りとて著者は自國を故らに誇大する精神は決して有せざりしなり。たとへば、扶桑國の名につきて、

　又扶桑國とも云ふ名もあるか。東海の中に扶桑の木有り。日の出る處也と見えたり。日本も東に有れば、よそへて云へるか。此國に彼木ありと云ふ事聞えねば確なる名には非ざるべし。

といへるが如き、その公平なる態度を見るべきなり。

　この國名につきてなほ一言すべきことあり。本書のはじめにわが國の名につきて縷々述ぶる所ありてその言頗る委し。これ何の爲ぞといふに、儒教に所謂正名の精神より出でたるものにして、名の義を正しくすることは、一面、古の精神を正しく傳ふることとなればなり。かくてかの百王の解釋の如き、愚管抄などの佛教惑溺者流の言と相距ること天地の差あるに至れるなり。

　この正名につきては吾人はなほ一二論ずべき點あるを思ふ。本書を繙くものはわが國の主權者の名目として神代よりは「神」を以て標とし、神武天皇以降に「天皇」を以て標とせるが、その間に「神功皇后」を一代として加へたることは不徹底なり。されど、天皇として卽位せられたるにあらねば、これを「皇后」として標出せることは當を得たりといふべし。かくて、村上天皇までは皆「天皇」を以て稱し奉るに、次代よりは冷泉院、圓融院の

如く院を以て稱し奉り、天皇を以て稱し奉れるものは安德、後醍醐の二帝に限れり。これ著者の私意にあらずして、その頃よりの稱謂かくの如くにありしなり。この故に著者は冷泉院の條下に

此御門より天皇の名を申さず、又宇多より後諡を奉らず、遺詔在りて國忌山陵を置かれざる事は君父の賢き道なれども、尊號をとどめらるゝ事臣子の義に非ず。神武以來の御號も皆後代の定也。持統元明より以來避位或は出家の君も諡を奉る。天皇とのみこそ申すめれ。中古の先賢の議なれども、心の得ぬ事に侍る也。

と痛論せり。これ亦至當の論にして、名教の廢せむとするや先づ、名の正しからざるよりはじまる。而して、又名教を興さむとするや、先づ名を正しくするよりはじめざるべからず。かく、天皇の名稱を以て標出し奉れる安德天皇は御生前、院に在しまさず、又某院と稱すべしとの御遺詔も在しまさず。これによりて諡號に基づきて、安德天皇と申し奉りしことは著者の記したる事にて明かなり。後醍醐天皇に至りては、かく天皇と稱し奉るべきことはこれ御遺詔に基づくものなること著者の告ぐることにて明かなり。ここにまた五六百年間の名分の紊れを矯正せられしことを見て、吾人は欣喜の情に堪へざるなり。この天皇にしてはじめて、王政復古の實義を名に於いて正したまひたりといふべく、この臣にしてよくこの正名を千古に傳へたりといふべし。本書を讀まむ人この重大事を輕視することなかれ。

著者の正名の態度は、臣下の名を記する上に於いて嚴肅なり。今 後醍醐天皇の條について例をあげむか、四位五位の人につきては某朝臣といひ（義家朝臣、平義時朝臣等）三位以上の人につきては某卿（頼朝卿、源顯家卿）といふ。これ皆朝廷の公式に基づくものなり。かの己が子を源顯家卿といふが如きは、名分を心得ざるものには或は異樣の感を與へむか。されど、これは朝廷の公事にして家庭の私事にあらず。官職の尊重すべき事

を知らば、この公と私との差別によることを正しく認識すべきなり。されば、かの新田義貞の如きも、そのはじめには源義貞と記し、官位進みて後には義貞朝臣と記す。すべてかくの如し。されば足利高氏の名をば決して尊氏と書かざりしことは、これ亦かれが謀反せし以上、後醍醐天皇より賜はりし「尊」の字は當然召しかへされたるによるものなり。その記述に名分を正したりしことこれらの例にて知るべきなり。而してこれまた一面、春秋の名分を正す精神に基づく所ありといひて可なり。

要するに著者が儒敎より受けたる所も概してその長を採りて短を棄てたりといふべきが、ただ一事、たとへばかの嵯峨天皇の條に見ゆる、皇位を相讓らるゝことを以て美德とするが如きは、かの泰伯の三讓を義なりとする精神より出づるものにして、王位を私物と見る支那には美德とせるならむが、要するに私德にして國家の大位をこれにて律するは不條理にして、わが國體の根本主義と容れざること既に論ずる所なり。然るに著者はこれを賛美せり。さればこの點に於いて著者また支那思想に累せられたる點なしとせざるなり。

なほこれらの外著者の態度に吾人の慊らざるものをあげむか。たとへば神功皇后を攝政としたるは（清和の條）もとより當然なるが、かくいひながら、これを第十五代としたるは矛盾と評する外なく、後鳥羽天皇の神器なくして踐祚ありしを是認するが如き、仲恭天皇をば代數にかぞへ奉らざるが如き、いづれも神皇正統の本義より見れば、著者の態度は不徹底と評するの外なし。

著者の論ずる所は概していはば、包括的積極的にして、それが爲に多少不純の嫌はあれど、排他的消極的の弊なく、概して日本思想の正系を得たるものと評しつべきなり。ことに如何に苦境に陷るとも悲觀を抱かず、自暴自棄に陷らず、あくまでも罪惡と戰ひて、正義の勝利を前途に認むるもの。これ眞に日本思想の正系たり。著者はその正義の一時行はれざるさまに見ゆることにつきて說いて曰はく、

人は昔を忘るゝ物なれど、天は道を失はざるべし。さらば、など天は正理のまゝには行はれぬと云ふ事うたがはしけれど、人の善惡に身づからの果報也。世の安からざるは時の災難也。天道も神明もいかにともせぬ事なれど、邪なる者は久しからずしてほろび、みだれたる世も正にかへるは古今の理也。

と。これまさしく正義が終局の勝利を占むべきを確信せるものにして、やがて、王政の復古を導く原動力となれるものなり。

以上論ずる如く、著者に對しては吾人は徹頭徹尾讃辭を呈しうるものにあらずといへども、その功績はこれを缺點に比較すれば、もとより論ずるまでもなく偉大にして、その偉大なる功績は永く感化を後世に及ぼして人心をして國體につきて純正なる觀念に目を醒さしむるに至れるその原動力まさしく本書にあり。

要するに、本書は國體の眞髓を明かにして、これに對して正しき判斷を加へ確かなる信念を樹立するを目的とせるものといふべく、わが國體思想の發達に一大時期を劃したる大著と許すべきものにして、著者のこれを著せる事情を見れば、昔、孔子が、天下を周遊して、その道の容易に行はれざるを見て、退いて七十子の徒と、五經を修め、春秋を筆削して天下萬世の懼ふ所を知らしめたるにも似たりといふべし。

十　結論

以上、略、本書に說く所を論じたれば、こゝに余が一家の結論をあげむ。

要するに本書は歷史としては必ずしも正確といふべからずしてその誤謬又は俗傳をとれりと許すべき點少からず。又その識見の間にも多少の議すべきものなきにあらざるは既に論ずる所の如し。然れども、本書は元來、史實を詳に述ぶるを目的とせるものにあらざるなり。著者がこの著をなしゝは常陸國小田城に在りて、死

生の衢に馳驅せし時にして、同時に芳野朝廷より後醍醐天皇晏駕の悲報の到りし時に在り、これを草しつゝ在りし當時の著者の胸中果して如何ぞや。內には絕世の英主と仰ぎし天皇に別れ奉り、新帝輔佐の大任を果しうべき臣僚果して誰ぞやの懸念あり。外には足利一黨のます〳〵跋扈せむの惧ありて、神皇正統の大義殆ど地に墜ちたるかの觀ありし時にこの一篇を草せしものなり。吾人が多少の缺陷をとりて本書の批評をなすが如きは思へば僭越の事といはざるべからず。あゝ、若しこの時に於いて本書出でずんば、わが國體は果して如何なる事になりたりしぞや。

按ずるに、當時一般の思想界は恐らくは暗黑の一言を以て評しうべきものなりしならむ。かの慈鎭流の百王思想は當時の思想界を風靡し、彼の一派の人々に尊王の權化の如くにいはるる日蓮の如きも、その立正安國論、三澤抄、諫曉八幡抄等に於いてこの限定百王說を唱へたるなり。されば、九十五代六代とまさに世の終りに近づかむと考ふる悲觀說を以て人心を紊亂せしめしこと甚しかりしならむ。或は又太平記(卷十九)に

　あはれ此持明院殿ほど大果報の人はおはせざりけり。軍の一度もし給はずして將軍より王位を給はらせ給たりと申沙汰しけるこそをかしけれ。

といへるが如き愚人、又著者が

　此比のことわざには一たび軍にかけあひ、或は家子郞從節にしぬる類あれば、我功におきては日本國を給へ。若は半國を給ひても足るべからず

といへる如き私利私慾の徒輩が、天下に充滿せる世にありて、著者の如き純正なる思想家の卓然として存することを見るは寧ろ驚くべき奇蹟ともいひつべきものなり。かくの如き世なれば大聲は俚耳に入らずの諺の如く、到底この衰運を直ちに挽回すること能はざるは止むを得ざりし狀勢といふべし。

然れども著者の公明正大なる識見はかゝる愚昧の輩の良心をも覺醒せしめずば止まず。本書一たび成つて芳野朝廷に獻せられ世に傳はるや、天下の少しく良心あるものみなわが國體の本義をさとりしなるべく、北朝の臣僚將士、外面強硬なる如く裝ふものも內心、自ら疚しとせざるもの無かりしならむ。かくの如くにして南朝は漸く勢威を失ひたるが如くなれど、神皇正統の大義は本書によりて漸くに世に明かになりしその事證は歷々として存す。

今加賀國白山比咩神社に傳ふる神皇正統記を見れば、著者の薨後二年に北朝方の某なるものが、著者の家臣よりこの書を借りて傳寫せることを知る。本書がかく北朝側に傳へられしに及びては、早くもこれに對抗せむといふ企てのありしものゝ如し。かの群書類從本の神皇正統記の如きは龜山院の上たる第四十七世の文字を削りてこれを後深草院の上に加へたるものの、その後を如何ともすること能はずして止める滑稽を演出せり。又かの白山本の末には「光嚴院」乃至「稱光院」の略記を加へたれど、本書の文を如何ともすること能はざりき。又後土御門院の時に小槻晴富が編せる續神皇正統記は白山本の追加の順序を追ひて後花園院を加へて記事稍細かに、後土御門院を「當今」と標記せるものなるが、正閏を論ずることとなし。

かくの如く北朝の系統に於いて種々の企てを行へりといへども結局は本書の主張を左右すること能はざりしなり。これもとより當然の事にして、本書の說く所は天理の當然をいへるに止まりて、人爲の事にあらざればなり。かくの如くにして本書は結局、足利氏の幕府時代を通じて天下人心の標準となりしは甚だ奇異なる現象といふべきに似たり。たとへば彼の文安年中に撰せし太子傳玉林抄の如き又同じ頃に觀勝寺の僧行譽が撰せし壒囊鈔は室町時代の常識教科書といふべきものなるが、それに本朝の史籍として主として引けるが本書なりしこと、又彼の生前自ら當公にまされりと傲語せし一條兼良が將軍足利義尙の爲に治道を說ける樵談治要の如

き本書の影響を蒙れりと認むべきものなきにあらざるは人の知る所なり。

今本書が後世の思想界に影響せることの如何を見るに、その方面多端にして決して一二の問題に止まらざるが、その著しき點を少しくいはむか。先づかの限定百王說は本書によりて粉碎せられ、爾後またかゝる僻說を唱ふるものを見ず。その證はかの北山親證寺の僧行譽の手に成れる壒嚢鈔に百數といふ事の說明に

都テ百姓ト云百ニ可限非ス。旁以難レ思。親房卿ノ記ナントモ只充ル數ト註サレタリ。誠ニ爾アルヘキヲヤ。百王ノ義又以同之。神器爭カ百代ニ窮マリ給ハンヤ。今已ニ餘レリ。敢テ十々ノ數ヲ不レ可レ執。

と說けるにてその一斑を見るべし。

なほ又、本書が室町時代の思想界はた外交界に重大なる影響を與へしを見る。その證は先づ善隣國寶記を見れば知らるべし。

善隣國寶記は我國の外交史の最初のものにして、後御土門天皇の文正元年に僧周鳳の編せしものなり。その序の中に曰はく、

或問此記之首略述ニ神代事一何也。曰、此方學徒讀ニ震旦書一者知ニ其國山川人物一、讀ニ天竺書一者亦然。吾雖レ有ニ六國史等書一而讀者鮮矣。故知ニ本國事一者幾希矣。捨レ近取レ遠無乃左乎。今錄ニ兩國相通之事一先當レ令ヘ人知ニ吾國之爲ニ神國一之由上故述ニ十一二一耳。此皆神皇正統記中所載也。其記過半倭字改作ニ漢字一矣。

とあり。この言恰も現代人の弊を論ずるに似たれば、さる方にても讀者の一顧をわづらはすべき價値ありとす。

かくてその首章は本書の國家の創始と國號の說明とを漢文に譯出したるものなり。而して曰はく、

右神皇正統記所レ載大概如レ斯。

と。かくて、本書を引用せる所、なほ少からず存す。

周鳳は瑞溪と號し臥雲山人の名を以て世に知られたる五山の名僧なり。足利將軍義教の歸依をうけ永享十二年に相國寺に住持たり。嘉吉元年には將軍義政の請に應して鹿苑寺(即ち俗稱金閣)に住して僧錄司となり、翌年これを罷め、康正二年再び鹿苑に住して僧錄司となり職に在ること五年。應仁元年、また僧錄司となる。時に年七十七。文明三年後土御門天皇の召によりて戒法を授け奉れり。之を以て見れば周鳳は一代の宗師として世に重んぜられし事を見るべし。而してその僧錄司の職たるや、天下の僧侶をすぶる所にして、同時に當時の外交文書を管理する職たり。これこの善隣國寶記の著ありし所以なり。當時僧侶は智識階級の第一に位したるものにして、五山はまさにその首位にあり。而して周鳳の地位はその最上にあり。かくの如き當時の思想界の第一人者にして宛然正統記の著者の更生せる如き態度をとれるを見れば、本書の思想が、室町時代の思想界の主位に据ゑられてありしを見るべきなり。即ち世相はます〱甚しく亂れたる如しといへども、思想界の歸趨點は著者の時代よりもかへりて明かに示されたりといふべきに似たり。而してこの思想が、當時の外交文書を掌れる五山の僧徒の間に彌漫し、かれらの間に純正なる國體思想を植ゑつけたるものとは思はるるが、ここに外交の文書に於いて、わが國體を堂々と宣言せるものをも生じたる所なり。豐臣秀吉の臥亞の總督に與へし書の冒頭に曰はく

日本者神國也。神卽天皇、天皇卽神也。全無レ差。

と。これ明かに善隣國寶記に據るものにしてその基は神皇正統記にあること斷じて疑ふべからず。然らば豐臣氏の外交の精神またこの記に負ふ所あるや明かなりといふべし。

一般の歷史家は室町時代を以て暗黑時代なりとせり。而して應仁亂後ことに甚しとするなり。然れども、余

證を以て見れば、室町時代中期以後の一般の國民の國體に關する意識は鎌倉時代の一般の武士よりは遙に公正なりしことを覺ゆ。その證は明の謝肇淛の著せる五雜俎卷四に

倭奴亦重二儒書一信二佛法一。凡中國經書皆以二重價一購レ之。獨無二孟子一云。有下携二其書一往者上舟輙覆溺此亦一奇事也。

といひ、同じく明の茅元儀の武備志にもその日本考の嗜好の條中に

古書五經則重書禮而忽易詩春秋、四書則重論語學庸而惡孟子

といひ、又全浙兵制の附錄たる日本風土記にも略同じことをいへるを見て知るべし。さてこれは如何なる理由なるかと考ふるに、これ蓋し孟子が禪讓放伐の思想を露骨に言明せるを忌みたるによること疑ふべからず。この禪讓放伐の思想はわが國體と絕待的に相容れざるものなれば、當時の支那貿易に從事せし徒が、この惡思想の國內に入るを忌みて、この書を輸入するを肯んぜざりしものならむが、ここに思ふべきは、この外交はた貿易に關せる人々は如何なる人々かといふに五山の僧徒か、若くは何時にても所謂倭寇に變じうる如き商估の徒なりしならむ。それらのものは、一は思想界の尖端に立てるものにして、當時の新知識と目すべきもの、一は利の爲に生命をも的にかけ、一朝變じて寇賊となるをも辭せざる徒なり。かくの如きものどもの間に孟子の忌まれたりしは、これ實に奇といはば奇といふべきものなり。而して顧みて、孟子は古來わが國になかりしかといふに然らず。既に宇多天皇の頃の日本國見在書目錄にも見え、平安朝頃より讀まれたりしものなるのみならず、宋の程子がこれを四書のうちに編入してよりわが國にもその新注渡來して虎關これを推重し、玄惠これを後醍醐天皇に進講せしものなり。本書の著者も亦孟子を大賢なりといひて、その言を引用せるなり。されば孟子排擊の思想は室町時代中期頃よりの事にして、そのかく遽かにこれを排するに至りし原因は、一は孟子を四

書としたるより生じたるものなるべし。即ち従来孟子は子書にしてそれを批判品隲するは自由なりしが、これを經書の列に入るるときはこれを批判するよりも、金科玉條として遵奉せざるべからざることとなり、かくて、禪讓放伐の思想を以て仁義道德と同一に尊奉することは到底國民として認容せらるべきものにあらざるが故ならむ。一は、當時國家の綱紀紊れて所謂群雄ただ力を以て相爭ふが如き時世を現じたれば、ここに國體の觀念の活潑なる生動を要求し、苟くも、如何なる英雄も豪傑もこの國體を確認せざるものの如きは、一般國民の決して服するものにあらざるを示さむとせるものと思はる。この二者要するに一にして、當時それら僧侶庶民の間に國體觀の峻嚴なるもの生じたることを證すといふべきものなるが、その五山の僧徒又外交文書と善隣國寶記との關係を思ひ來れば、その源が、神皇正統記にあること殆ど疑ふべからざるべし。

かくの如くにして著者の國體論は漸くに世に認められて、進んで大日本史となり、明治の維新の原動力ともなりしなり。更に又著者の神道論も一條兼良等によりて繼承せられて、漸次に改善せられ、著者の道德論も亦林羅山、熊澤蕃山、雨森芳洲等によりて繼承せられ、漸次に改善せられて今日に至れり。されど、それらの事は今一々說く遑を有せず。

顧みて、著者が室町幕府時代の思想界に於ける待遇を見るに、三光院大臣(三條西實枝)が北畠具房に著して與へたる三内口訣を見るに、曰はく、

於二南朝一昇進之人一切不レ用レ之候。然處此親房卿計北畠准后天下稱レ之候。御家規模無二比類一事候。廣才博覽所二世之推一候。

といひ。又、小槻晴富の著したる續神皇正統記にも

抑此記は北畠准后親房卿南朝までも准后の號ゆるされしなり南朝の寵臣として錄出せり。

といひたり。これは南北合一後南朝にての官位は一切認められざりしが、たゞ親房一人のみは、これを認めたることをいふにあるが、三内口訣も續神皇正統記もその理由をいはず。按ずるに、これたゞ、著者が博學廣才なるによるのみにあらずして、著者の主張は、如何にしてもこれを否定すること能はずして、實に萬代の指南たりしが故なるべし。果して然らば、著者の主張は既に一世を風靡したるものにして、著者はまさしく國體思想上の宗師たりしものなりといふべきなり。

ただ著者の論に於いて余が不滿足を感ずるは萬世一系の本義に徹底せずして兄弟相及ぼすを美としたることの一點にあり。これ一に支那の思想の弊を受けたるものにして深く遺憾とする所なり。然れどもこの事を除きては著者は支那思想の長をとりて以てわが短を補はむとせり。佛教思想に於いてはこれを包含してしかも殆ど全くその弊を受けず。要するに著者は偏狹なる國家主義者にあらずして、包容的進歩的の理想家たること著しく、わが思想史上空前の偉人にして、又永く後世を指導する偉人なりといふべし。而して、日本帝國の運命この一書にかゝりて存したりしを見るべく又道德修養の資としても本邦に於いて從來かつてなかりし偉大なる書にして、今に至りてもなほ十分に指導者たる價値に富めるものなりとす。

本書は又教育といふものが、如何に偉大なる影響を世に與ふるものなるかの事實を示したるものとしてことに刮目して見るべきものあり。著者はかの保元平治の亂を叙して後、歎じて曰はく、

未だ太平の世に歸らざるは名行の破れ初めしに依れる事とぞ見えたる。

と。これ本書の大眼目にして、名教が正義の勝利を導くべき唯一の指導原理たることを喝破せるものなるが、この保元平治の亂もその源は攝關政治の創始の頃より萠せるものなれば、まさしく著者の時代より五六百年の昔に發せしものなり。かくて著者の時より五六百年の後にしてはじめて、眞正の意義に於いての皇政に復古し、

國體の觀念も明かになれり。これを以て見れば、わが國史はこの前後一千年許の間に於いてこの一巻の神皇正統記を標識として一大回轉をなせりといふべきに似たり。この書を讀まむ人宜しく眼を高處に置きてこの理を達觀し、名教の興廢が如何に偉大なる力を有するかを鑑むべきなり。

神皇正統記のはしに

神皇正統記は我が國民の一般の誰もが熟讀せざるべからざる典籍であるから、本全集に加へたのであるが、此の書は明治時代になつてからも、かなり開板せられてゐて、本集の購讀者諸君中にはかなり迷惑に感ぜられる方々も有る事であらうと考へる。然しよく考へて見ると、此の書も明治時代式の本はいくらも出てゐるとした處で、古寫本に據つた確かな飜刻は餘り出來てゐぬから、此度山田先生に御願ひして校訂をして頂いて、善本を世に公にするのである。先づ山田先生より猪熊信男氏の藏本の影寫本を借用して底本とし、應永本によつて其の誤脱とおぼしき處を訂し、猶足らざるは白山本等其他の諸本を參考して先づ草稿を作り、其から山田先生に御校訂を願つたのである。先生は御多忙中をくり合せて自から筆を執つて校訂をして給はつた。諸本の解説も、正統記論も添へて投じ給うた。謹みて深謝の意を表するのである。

校訂上の形式の事を申し添へて置く必要がある

本文は猪熊本に據つた。さて其の誤とおぼしき處には左傍に△の印を附し、下に〔　〕をして訂正を加へた。其の訂正は應永本に據つた。應永本以外の本に據つた處は其の訂正字の下に右寄せに小字を以て其の本の畧符を記した。されば何の印もないのは應永本によつた訂正である。應永本の次には白山本を多く用ゐた。是れは白の字を附記した。其他も其れに準じて考へられたい。補入は〔　〕印を用ゐた。其の証本の畧符は誤字のと同じ形式を用ゐてある。假字、漢字は底本のまゝである。假字遣ひももとより底本のまゝで歷史假字に改めなぞはせず、一に底本にしたがつた。たゞ句讀點を加へ、濁點もほどこした。是れは讀過に不便な

爲に、此のさかしらを敢へてしたのである。されば句讀點、濁點は學問上の問題にはならぬのであるから、無い物として考へられたい事を申添へておく。

猶終に白山本の事である。此の本は三秀舍主、島連太郎氏がコロタイプ版で複製して一本を惠まれたのを座右に備へて置いて參考した。附記して謝意を表する。

昭和九年八月廿八日　　正宗敦夫

神皇正統記　上（題箋ニアリ）

大日本者神國也。天祖ハジメテ基ヲヒラキ、日神ナガク統ヲ傳給フ。我國ノミ此事アリ。異朝ニハ其タグヒナシ。此故ニ神國ト云也。神代ニハ豐葦原千五百秋瑞穗國ト云。天地開闢ノ初ヨリ此名アリ。天祖國常立尊陽神陰神ニサヅケ給シ勅ニキコエタリ。天照太神天孫ノ尊ニ讓マシ〳〵「玉」シ（ニモ）此名アレバ根本ノ号ナリトハシリヌベシ。又ハ大八洲ト云。是ハ陽神陰神此國ヲ生給シガ、八ノ嶋ナリシニヨテ、名ケラレタリ。又ハ耶麻土ト云。是ハ大八洲ノ中國ノ名也。第八ニアタルタビ天ノ御虛空豐秋津根「分」別ト云神ヲ生給フ、コレヲ大日本豐秋津洲トナヅク。今ハ四十八ケ國ニワカテリ。中州（洲）タリシ上ニ神武天皇東征ヨリ代々ノ皇都也。ヨリテ其名ヲトリテ餘ノ七州（洲）ヲモスベテ耶麻土ト云ナルベシ。（唐ニモ）周ノ國ヨリ出タリシカバ天下ヲ周ト云、漢ノ地ヨリヲコリタレバ海内ヲ漢ト名ヅケシガ如シ。耶麻土ト云ヘルコトハ山迹ト云也。昔天地ワカレテ泥ノウルヲヒイマダカハカズ、山ヲノミ往來トシテ其跡オホカリケレバ、山迹ト云。或（ハ）古語ニ居住ヲ止ト云。山ニ居住セシニヨ

リテ山止ナリトモ云ヘリ。大日本トモ大倭トモ書コトハ此國ニ漢字傳テ後國ノ名ヲカクニ、字ヲバ大日本ト定テ、シカモ耶麻土トヨマセタルナリ。大日孁ノシロシメス御國ナレバ、其義ヲモトレルカ、ハタ日ノ出ル所ヲカケレバシカイヘルカ。義ハカヽレドモ字ノマヽ、日ノモト、ハヨマズ、耶麻土ト訓ゼリ。我國ノ漢字ヲ訓ズルコト多ク如レ此。ヲノヅカラ日ノ本ナドイヘルハ文字ニヨレルナリ。國ノ名トセルニアラズ。

裏書云、日ノモト、ヨメル哥万葉云

イザコドモハヤ日ノモトヘヲホトモノミツノハマ松マチコヒヌラン

又古ヨリ大日本トモ若ハ大ノ字ヲクハヘズ、日本トモカケリ。州（洲）ノ名ヲ大日本豐秋津トイフ。懿德、（孝靈）孝元[開化]等ノ御諡ミナ大日本ノ字アリ。垂仁天皇ノ御女大日本姫ト云。コレミナ大ノ字アリ。天神饒[ノ]速日ノ尊天ノ盤船ニノリ大虛ヲカケリテ虛空見日本ノ國トノ給。神武ノ御名神日本盤余彥ト号シタテマツル。孝安ヲ日本足、開化ヲ稚日本トモ号、景行天皇ノ御子小碓ノ皇子ヲ日本武ノ尊トナヅケ奉ル。是ハ大ヲ加ザルナリ。彼此同クヤマト、ヨマセタレド、大日孁ノ義ヲトラバ、オホヤマト、讀テモカナフベキカ。其後漢土ヨリ

（見の傍訓ミルとあり今訂す）

字書ヲ傳ケル時倭ト書テ此國ノ名ニ用タルヲ即領納シテ又此字ヲ耶麻土ト訓（ト）ジテ、日本ノ如ニ大ヲ加ヘテモ、又ノゾキテモ同訓ニ通用シケリ。漢土ヨリ倭ト名ケヽル事ハ昔此國ノ人ハジメテ彼土ニイタレリシニ汝ガ國ノ名ヲバイカヾ云ト問ケルヲ、吾國ハト云ヲキヽ、テ即倭ト名ヅケタリトミユ。漢書ニ樂浪ノ（彼土ノ東北ニ樂浪邦（郡）アリ）海中ニ倭人アリ、百餘國ヲワカテリト云。モシ前漢ノ時スデニ通ケルカ。（一書ニハ秦ノ代ヨリスデニ通トモミユ。下ニシルセリ。）後漢書ニ大倭王ハ耶麻堆ニ居スト見エタリ（耶麻堆ハ山トナリ）コレハ若スデニ此國ノ使人本國ノ例ニヨリ大倭ト稱スルニヨリテ、カクシルセルカ。（神功皇后ノ新羅百濟高麗ヲシタガヘ給シハ後漢ノ末ザマニアタレリ。スナハチ漢地ニモ通ゼラレタリト見タレバ、文字モ定テツタハレルカ。一説ニハ秦ノ時ヨリ書籍ヲ傳トモ云。）大倭ト云コトハ異朝ニモ領納ノ、書傳ニノセタレバ、此國ニノミホメテ稱スルニアラズ。（異朝ニ大漢大唐ナド云ハ大ナリト稱スルコヽロナリ。）唐書（ニ）高宗咸亭（亨）年中ニ倭國ノ使始テアラタメテ日本ト号ス。其國東ニアリ、日ノ出所ニ近ヲ云ト載タリ。此事我國ノ古記ニハタシカナラズ。推古天皇ノ御時モロコシノ隋朝ヨリ使アリテ書ヲオクレリシニ倭皇トカク。聖德太子ミヅカラ筆ヲ取テ返牒ヲ書給シニハ、東天皇敬白西皇帝トアリキ。カノ國ヨリハ倭ト書タレド、返牒ニハ日本トモ倭トモノセラレズ。是ヨリ上代ニハ牒アリトモミエザル也。唐ノ咸亭（亨）ノ比ハ天智ノ御

代ニアタリタレバ、實ニハ件ノ比ヨリ日本ト書テ送ラレケルニヤ。又此國ヲハ秋津洲トイフ神武天皇國ノカタチヲメグラシノゾミ給テ、蜻蛉ノ臀呫（呫）ノ如クアルカナトノ給シヨリ此名アリキトゾ。シカレド、神代ニ豐秋津根ト云名アレバ、神武ニハジメザルニヤ。此外モアマタ名アリ。細戈ノ千足國トモ磯輪上ノ秀眞ノ國トモ玉垣ノ內ツ國トモイヘリ。又扶桑國ト云名モアルカ。東海ノ中ニ扶桑ノ木アリ日ノ出所ナリトミエタリ。（日本モ）東ニアレバヨソヘテイヘルカ。此國ニ彼木アリト云事キコエヌバタシカナル名ニハアラザルベシ。凡內典ノ說ニ須弥ト云山アリ、此山ヲメグリテ七ノ金山アリ。其中間ハ皆香水海ナリ。金山ノ外ニ四大海アリ。此海中ニ四大州（洲）アリ。州（洲）ゴトニ又二ノ中州（洲）アリ。南州（洲）ヲハ贍部ト云。又閻浮提云。同コトバノ轉之。是ハ樹ノ名ナリ。南州（洲）ノ中心ニ阿耨達ト云山アリ。山頂ニ池アリ。阿耨達コヽニハ無熱ト云。外書ニ崑崙トイヘルハ即コノ山ナリ。池ノ傍ニ此樹アリ。迊七由旬高百由旬ナリ。一由旬トハ四十里也、六尺ヲ一歩トス。三百六十歩ヲ一里トス。コノ里ヲヘ（以）テ由旬ヲハカルベシ。此樹州（洲）ノ中心ニアリテ寂モ高シ。ヨリテ州（洲）ノ名トス。阿耨達山ノ南ハ大雪山、北ハ葱嶺ナリ。葱嶺ノ北ハ胡國、雪山ノ南ハ五天竺、東北ニヨリテハ震旦國、西北ニアタリテハ波斯國也。此贍部州（洲）ハ縱横七千由旬、里ヲモチテカゾフ

秀眞の傍訓ホコマと誤る今訂す

レバ二十八万里、東海ヨリ西海ニイタルマデ九万里、南海ヨリ北海ニイタルマデ又九万里。天竺ハ正中ニヨレリ。ヨテ贍部ノ中國トス也。地ノメグリ又九万里。震旦ヒロシト云ヘドモ、五天(竺)ニナラブレバ、一邊ノ小國ナリ。日本ハ彼土ヲハナレテ海中ニアリ。北嶺ノ傳教大師南都ノ護命僧正ハ中州(洲)也トシルサレタリ。シカラバ、南州(洲)ト東州(洲)トノ中ナル遮摩羅ト云州(洲)ナルベキニヤ。華嚴經ニ「東北ノ海中ニ山アリ。金剛山ト云二(ト)アルハ大倭ノ金剛山ノ事也トゾ。サレバ此國ハ天竺ヨリモ震旦ヨリモ東北ノ大海ノ中ニアリ、別州(洲)ニシテ、神明ノ皇統ヲ傳給ヘル國也。同世界ノ中ナレバ、天地開闢ノ初ハイヅクモカハルベキナラネド、三國ノ説各コトナリ。天竺ノ説ニハ世ノ始リヲ劫初ト云フ。劫ニ成住壞空ノ四アリ。各廿ノ増減アリ。一増一減ヲ(一)小劫ト云。廿ノ増減ヲ一中劫ト云。四十(中)劫ヲ合テ一大劫ト云。光音ト云天衆空中ニ金色ノ雲ヲオコシ、梵天ニ偏布ス。即大雨ヲフラス。風輪ノ上ニツモリテ水輪トナル。増長シテ天上ニイタレリ。又大風アリテ沫ヲ吹立テ空中ニナゲヲク。即大梵天ノ宮殿トナル。其水次第ニ退下テ欲界ノ諸宮殿、乃至須弥山、四大州、鐵圍山ヲナス。カクテ万億ノ世界同時ニナル。是ヲ成劫ト云之。此万億ノ世界ヲ三千大千世界トイフ(光音ノ白)天衆下生シテ次第ニ住ス。是ヲ住劫ト云。此住劫ノ間ニ二十ノ増減アルベシナリ。

トゾ。其劫（初自）ニハ人ノ身光明トヲク照メ、飛行自在之。歡喜ヲ以食トス。男女ノ相ナシ。後ニ北（地）ヨリ甘《カン》泉涌出ス。味酥《ソ》蜜《ミツノ》（蜜自）ゴトシ。（或ハ地味トモ云。）コレヲナメテ、味着ヲ生ズ。仍神通ヲ失ヒ、光明モキエテ世間大ニクラクナル。衆生ノ報シカラシメケレバ、黒風海ヲ吹テ日月二輪ヲ漂出ス。須彌ノ半腹ニヲキテ四天下ヲ照サシム。是ヨリ始テ晝夜晦朔春秋アリ。地味ニ耽シヨリ顔色モカジケヲトロヘテ（キ）、地味又ウセテ林藤ト云物アリ。（或ハ地皮トモ云。）衆生又食トス。林藤又ウセテ自然ノ稅《セイ》（秔）稻アリ。諸ノ美味ヲソナヘタリ。朝ニカレバ夕ニ熟ス。此稻米ヲ食セシニヨリテ身ニ殘穢《サムエ》イデキヌ。此故ニ始テ二道アリ。男女ノ相各別ニメ、ツイニ婬欲ノワザヲナス。夫婦トナヅケ、舍宅ヲ搆テ共ニ住キ。光音ノ諸天後ニ下生スル者女人ノ胎《タイ》中ニイリテ胎生ノ衆生トナル。其後稅（秔）稻生ゼズ。衆生ウレヘナゲキテ、各境ヲワカチ田種ヲ施シウヘテ、食トス。他人ノ田種ヲサヘウバイヌスム者出テ、互ニウチアラソフ。是ヲ決スル人ナカリシカバ、衆共ニハカラヒテ一人ノ平等王ヲ立。名テ刹帝利《セツテイリ》ト云。（田主ト云心ナリ。）其始ノ王ヲ民主王ト号シテ（キ）。十善ノ正法ヲオコナヒテ、國ヲオサメシカバ、人民是ヲ敬愛ス。閻浮提ノ天下豐樂安穩ニメ病患及ビ大寒熱アルコトナシ。壽命モ極テ久、无量歳ナリキ。民主ノ

子孫相續ノ久ク君タリシガ、漸正法モ衰ショリ壽命モ減ノ八万四千歳ニイタル。身ノタケ八丈ナリ。其間ニ王アリテ、轉輪ノ果報ヲ具足セリ。先ヅ天ヨリ金輪寳飛降テ王ノ前ニ現在ス。王出給コトアレバ、此輪轉行(ノ)モロ〳〵ノ小王ミナムカヘテ拜ス。アヘテ違者ナシ、即四大州(洲)ニ主タリ。又象馬珠玉女居士主兵等ノ宝アリ。此七寳成就スルヲ金輪王トナヅク。次々ニ銀銅鐵ノ轉輪王アリ。福力不同ニヨリテ、果報モ次第ニ劣レル也。壽量モ百年ニ一年ヲ減ジ、身ノタケモ同ク一尺ヲ減テケリ。百廿歳ニアタレリシ時釋迦佛出給。或ハ百才時トモ云。是ヨリサキニ三佛出玉キ。十歳ニ至ラン比ヲヒニ小三災ト云コトアルベシ。人種ホト〳〵盡テ各一万人ヲアマス。ソノ人善ヲ行テ又壽命モ増シ、果報モス、ミテ二万歳ニイタラン時、鐵輪王出テ南一州(洲)ヲ領スベシ。四万歳ノ時、銅輪王出テ東南二州(洲)ヲ領ス。六万歳ノ時銀輪王出テ東西南三州(洲)ヲ領シ、八万四千歳ノ時金輪王出テ四天下ヲ統領ス。其報上ニ云ルガ如シ。カノ時又減ニムカヒテ弥勒佛出給ベシ。八万才ノ時トモ云。此後十八ケノ増減アルベシ。カクテ大火災ト云コトヲコリテ色界ノ初禪梵天マデヤケヌ。三千大千世界同時ニ滅盡スル、コレヲ壞劫ト云。カクテ世界虚空黒穴ノゴトクナルヲ空劫ト云。カクノ如スルコト七ケノ火災ヲヘテ大

〔ノは傍書なるを下に入る〕

盡の傍訓ツクルとあり今訂す

水災アリ。コノタビハ第二禪マデ壞ス。七々ノ火（災）七々ノ水災ヲヘテ大風災アリテ、第三禪マデ壞ス。是ヲ大ノ三災ト云也。第四禪已上ハ内外ノ過患(ケン)アルコトナシ。此四禪ノ中ニ五天アリ。四ハ凡夫ノ住所、一ハ淨居(コ)天トテ證果ノ聖者ノ住處也。此淨居ヲスギテ摩醯(マケイ)首羅(シユラ)天王ノ宮殿アリ。大自在天トモ云。色界ノ寂頂ニ居シテ大千世界ヲ統領ス。其天ノヒロサ彼世界ニワタレリ。下天モ廣狹ニ不同アリ。初禪ノ梵天ハ一四天下ノヒロサナリ。此上ニ無色界ノ天アリ。又四地ヲワカテリトイヘリ。此等ノ天ハ大小ノ災ニアハズト云ドモ、業力ニ際限アリテ、報盡(ツキ)ナリ〔バ〕退沒スベシト見ヘタリ。震旦ハコトニ書契ヲコト、スル國ナレドモ世界建立(コン)ヲ云ル事タシカナラズ。儒書ニハ伏犧氏ト云王ヨリアナタヲバ云ズ。但、異書ノ說ニ混沌(コントン)未分(ミ)ノカタチ、天地人ノ初ヲ云ルハ神代ノ起ニ相似タリ。或ハ又盤古ト云王アリ、目ハ日月トナリ、毛髪ハ草木トナルト云ル事モアリ。ソレヨリシモツカタ天皇地皇（人皇）五龍等ノ諸氏ウチツヾキテ多ク（ノ）王アリ。其間數万歲ヲヘタリト云。我朝ノ初ハ天神ノ種ヲウケテ、世界ヲ建立スルスガタハ天竺ノ說ニ似タル方モアルニヤ。サレドコレハ天祖ヨリ以來繼躰タガハズメ、タヾ一種マシ〳〵〔マス〕コト天竺ニモ其類ナシ。彼國ノ初ノ民主（王）モ衆ノタメニエラビタテラレシヨリ

相續セリ。又世ノクダリテハソノ種姓モオホクホロボサレテ、勢力アレバ下劣ノ種モ國主トナリ、アマサヘ五天竺ヲ統領スルヤカラモ有キ。震旦又コトサラミダリガハシキ國ナリ。昔世スナホニ道タヾシカリシ時モ賢ヲエラビテサヅクルアトアリシニヨリ一種ヲサダムル事ナシ。乱世ニナルマヽニ、力ヲモチテ國ヲアラソフ。カヽレバ民間ヨリ出テ、位ニ居タルモアリ。戎狄ヨリ起テ國ヲ奪ヘルモアリ。或ハ累世ノ臣（ト）ノ其君ヲシノギ、ツイニ讓ヲエタルモアリ。伏犧氏ノ後天子ノ氏姓ヲカヘタル事（スデニ）三十六。乱ノハナハダシサ、云ニタラザル者哉。唯我國ノミ天地ヒラケシ初ヨリ今ノ世ノ今日ニ至マデ日嗣ヲウケ給コトヨコシマナラズ、一種姓ノ中ニヲキテモヲノヅカラ傍ヨリ傳給シスラ猶正ニカヘル道アリテゾタモチマシマシケル。是併神明ノ御誓アラタニメ、餘國ニコトナルベキイハレナリ。抑神道ノコトハタヤスクアノハサズト云コトアレハ（ド自）、根元ヲシラザレバ、猥シキ始（端）トモナリヌベシ。其ツ井エヲスクハンタメニ聊勒シ侍リ。神代ヨリ正理ニテウケ傳ヘ（ツ）ルイハレヲ述（ベン）コトヲ志キ（テ）常ニ聞ユル事ヲバノセズ。シカレバ神皇ノ正統記トヤ名ケ侍ベキ。夫天地未レ分ザリシ時混沌トメマロカレルコト雞（鷄）子ノ如シ。クヽモリテ牙（ヲ）フクメリ

キ。コレ陰陽ノ元初未分ノ一氣也。其氣始テワカレテ、キヨクアキラカナルハタナビキテ天ト成リ、ヲモクニゴレルハツヾキテ、地トナル。其中ヨリ一物出タリ。カタチ葦牙ノ如シ。即化シテ神トナリヌ。國常立尊ト申。又ハ天ノ（御）中主ノ神トモ号シ奉ツル。此神ニ木火土金水ノ五行ノ徳マシマス。先、水徳ノ神ニアラハレ給ヲ國狹槌尊ト云。（次ニ火徳ノ神ヲ）豐斟渟尊ト云。天ノ道ヒトリナスユヘニ純男ニテマス。純男トイヘドモソノ相アリトモサダメガタシ。次、木徳ノ神ヲ埿（沵鷖反）瓊尊、沙土瓊尊ト云。次、金徳ノ神ヲ大戸之道尊、大苫邊尊ト云。次ニ、土徳ノ神ヲ面足尊、惶根ノ尊ト云。天地ノ道相交テ各陰陽ノカタチアリ。シカレドソノフルマイナシト云リ。此諸神實ニハ國常立ノ一神ニマシマスナルベシ。五行ノ徳各神トアラハレ給。是ヲ六代トモカゾフル也。二世三世ノ次第ヲ立ベキニアラザルニヤ。次ニ化生シ給ヘル神ヲ伊弉諾尊伊弉冊尊ト申ス。是ハ正ク陰陽ノ二ニワカレテ造化ノ元トナリ給フ。（上ノ）五行ハヒトツヅヽノ徳之。此五徳ヲアハセテ万物ヲ生ズルハジメトス。コヽニ天祖國常立尊、伊弉諾伊弉冊ノ二ノ神ニ勅メノ給ハク、「豐葦原ノ千五百秋ノ瑞穗ノ地アリ。汝往テシラスベシ。」トテ即天瓊矛ヲサヅケ給。此矛又ハ天ノ逆戈トモ天魔返ホコトモイヘリ。二神コノホコヲサヅカリテ天ノ浮橋ノ上ニ

タ、ズミテ矛ヲサシヲロシテカキサグリ給シカバ、滄海ノミアリテ（キ）。ソノホコノサキヨリシタ、リヲツル潮コリテ一ノ嶋トナル。コレヲ磤馭慮（蘆）嶋ト云。此名ニ付テ秘說アリ。神代實語ニカヨヘルカ。其所モアキラカニ知人ナシ。大日本ノ國宝山ナリト云口傳アリ。二神此嶋ニ降居テ即國ノ中ノ柱ヲタテ八尋ノ殿ヲ化作メトモニスミ給。サテ陰陽和合ノ夫婦ノ道アリ。此矛ハ傳（テ）天孫シタガヘテアマクダリ給ヘリトモ云。又垂仁天皇ノ御宇ニ大和姫ノ皇女、天照太神ノ御ヲシエノマヽ、ニ國々ヲメグリ伊勢國ニ宮所ヲモトメ給シ時、大田ノ命ト云神マイリアヒテ五十鈴ノ河上ニ靈物ヲマボル（リ）ヲケル所ヲシメシ申シニ、カノ天ノ逆矛、五十鈴、天宮ノ圖形アリキ。大和姫ノ命ヨロコビテ、其所ヲサダメテ、神宮ヲタテラル。靈物ハ五十鈴ノ宮ノ酒殿ニヲサメラレキトモ（云フ）。又瀧祭ノ神ト申ハ龍神ナリ。ソノ神アヅカリテ地中ニヲサメタリトモ云。一ニハ大和ノ龍田ノ神ハコノ瀧祭ト同躰ニマス。此神ノアヅカリ給ヘル也。ヨリテ天柱國柱ト云御名アリトモ云。昔、磤馭慮（盧）嶋ニ恂（持）クダリ給シコトハアキラカ之。世ニ傳ト云事ハヲボツカナシ。天孫ノシタガヘ給ナラバ、神代ヨリ三種ノ神器ノゴトク傳給ベシ。サレハ（シ）ハナレテ五十鈴河上ニ有ケンモオボツカナシ。但

底本「ガ神書ニサマ〳〵ノ異説アリ」を割注とす今訂す

止は古事記により上の誤として訂す

天孫モ玉矛者ミヅカラシタガヘ給ト云事見タリ。古語拾遺説ナリ。シカレド、矛モ大海（汝）ノ神ノタテマツラル、國ヲタイラゲシ矛モアレバ、イヅレト云事ヲシリガタシ。宝山ニトヾマリテ不動ノシルシトナリケンコトヤ正説ナルベカラン。龍田モ宝山チカキ所ナレバ龍神ヲ天柱國柱トイヘル深秘ノ心アルベキニヤ。凡神書ニサマ〳〵ノ異説アリ。日本紀、舊事本紀、古語拾遺等ニノセザラン事ハ末學ノ輩ヒトヘニ信用シガタカルベシ。彼書ノ中猶一決セザルコト多シ。況異書ニヲキテハ正トスベカラズ。カクテ此二神相ハカラヒテ八ノ嶋ヲウミ給フ。先淡路ノ洲ヲウミマス。淡路穗之狹別ト云。次伊与ノ二名ノ洲ヲウミマス。一身ニ四面アリ。一ヲ愛比（上）比賣ト云。コレハ伊与也。二ヲ飯依比賣ト云。是ハ讃岐也。三ヲ大宜都比賣ト云。コレハ阿波之。四ヲ速依別ト云。是ハ土左之。次筑紫ノ洲ヲウミマス。又一身ニ四面アリ。一ヲ白日ノ別ト云。是ハ筑紫之。後ニ筑前、筑後ト云。二ヲ豐日別（ト）云。コレハ豐國之。後ニ豐前、豐後ト云。三ヲ盡（晝日）日別ト云。是ハ肥ノ國之。後ニ肥前、肥後ト云。四ヲ豐久士（士）比泥別ト云。是ハ（日向也）。後ニ日向、大隅、薩摩ト云。筑紫豐國肥ノ國日向トイヘルモ二神ノ御代ノ始ノ名ニハ非ル歟。次壹岐ノ國ヲウミマス。天比登都柱ト云。次對馬ノ洲ヲウミマス。天之狹手

依比賣ト云フ。次隱岐ノ洲ヲウミマス。天之忍許呂別ト云フ。次佐渡ノ洲ヲ生マス。建日別ト云フ。次大日本豐秋津洲ヲウミマス。天御虛空豐秋津根別ト云フ。スベテ是ヲ大八洲ト云之。此外アマタノ嶋ヲ生給。後ニ海山ノ神、木ノヲヤ、草ノヲヤマデ悉ウミマシテケリ。何レモ神ニマセバ、生給ヘシ〔ル〕神ノ洲ヲモ山ヲモツクリ給ヘルカ。ハタ洲山ヲ生給ニ神ノアラハレマシケルカ。神世ノワザナレバ、マコトニ難レ測。二神又ハカラヒテノタマハク、「我スデニ大八洲ノ國ヲヨビ山川草木ヲウメリ。イカデカアメノ下ノキミタルモノヲウマザラムヤ。」トテマヅ日神ヲ生マス。此ミコヒカリウルハシクメ、國ノ內ニテリトホル。二神ヨロコビテ天ニヲクリアゲテ天上ノ事ヲサヅケ給。此時天地アヒサルコトヽヲカラズ。天ノミハシラヲモテアゲ給。コレヲ大日孁ノ尊ト申。孁字ハ靈ト通ズベキナリ。陰氣ヲ靈ト云トモ云ヘリ。女神ニマシマセバ自ラ相叶ニヤ。又天照大神トモ申。女神ニテマシマス之。次月神ヲ生マス。其光日ニツゲリ。天ニノボセテ夜ノ政ヲサヅケ給。次ニ蛭子ヲ生マス。ミトセニナルマデ脚タヽズ。天ノ盤樟船ニノセテ風ノマヽハナチスツ。次素戔烏尊ヲ生マス。イサミタケク不忍ニメ父母ノ御心ニカナハズ。根ノ國ニイ子トノ給フ。コノ三柱ハ男神ニテマシマス。ヨリテ一女三男ト申之。スベテアラユル神ミ

ナ二神ノ所生ニマシマセド、國ノ主タルベシトテ生給シカバ、コトサラニ此四神ヲ申傳ケルニコソ。其後火神軻遇突智ヲ生マシノ〳〵（シ）時陰神ヤカレテ、神退給ニキ。陽神ウラミイカリテ火神ヲ三段ニキル。ソノ三段ヲ（ノ）ノ〳〵神トナル。血ノシタヽリモソヽイデ神トナレリ。經津主ノ神（齋主ノ神トモ申。今ノ檝取ノ神）。健甕槌神（武雷ノ神トモ申。今ノ鹿嶋ノ神（也）。）（ノ）祖也。陽神猶シタヒテ黄泉マデヲハシマシテ、（サマ〳〵ノ）チカヒアリキ。陰神ウラミテ此國ノ人ヲ一日ニ千頭コロスベシトノ給ケレバ、陽神ハ千五百頭ヲ生ベシトノ給ケリ。ヨリテ百姓ヲバ天ノ益人トモ云。死ルモノヨリモ生ズルモノヲホヽ也。陽神カヘリ給テ日向ノ小戸ノ河（橘）檍ガ原ト云所ニテミソギシ給。コノ時アマタノ神化生シ玉ヘリ。日月神モコヽニテ生給ト云說アリ。伊弉諾尊神功スデニヲハリケレバ、天上ニノボリ、天祖ニ報命申テ即天ニトヾマリ給ケリトゾ。或說ニ伊弉諾、伊弉冊ハ梵語ナリ、伊舍那天、伊舍那后ナリト云。

地神第一代大日孁尊是ヲ天照太神ト申。又ハ日神トモ皇（祖）トモ申之。此神ノ生給コト三ノ說アリ。一ニハ伊弉諾、伊弉冊尊アヒ計テ天下ノ主ヲウマザランヤトテ先日神ヲウミ、次ニ月神、次蛭子、次素戔烏尊ヲ生給トイヘリ。又ハ伊弉諾ノ尊左御手ニ白銅ノ鏡ヲトリテ大

日孁ノ尊化生シ、右御手ニトリテ月弓ノ尊ヲ生、御首ヲメグラメカヘリミ給シアヒダニ素戔烏尊ヲ生トモイヘリ。又伊弉諾尊日向ノ小戸ノ川ニテミソギシ給シ時左ノ御眼ヲアラヒテ天照太神ヲ化生シ、右ノ御眼ヲアラヒテ月讀ノ尊ヲ生、御鼻ヲ洗テ素戔烏尊ヲ生シ給トモ云フ。日月神ノ御名モ三アリ、化生ノ所モ三アレバ凡慮ハカリガタシ。又オハシマス所モ一ニハ高天ノ原ト云。二ニハ日ノ小宮ト云。三ニハ我日本國コレ也。八咫ノ御鏡ヲトラセマシ〳〵テ、ワレヲミルガ如クニセヨト勅給ケルコト和光ノ御誓モアラハレテコトサラニ深道アルベケレバ三所ニ勝劣ノ義ヲバ存スベカラザルニヤ。爰素戔烏尊父母二神ニヤラハレテ根國ニクダリ給ベ(カ)リシガ、天上ニマウデ、姉ノ尊ニミエタテマツリテヒタブルニイナント申給ケレバユルシエ(ツ)トノ給。ヨリテ天上ニノボリマス。大ウミカ(ト)マロキ山ヲカナリホヘキ。此神ノ性タケキガシカラシムルニナム。天照太神ヲドロキマシ〳〵テ兵ノソナヘヲメ待給。カノ尊黑心ナキヨシヲオコタリ給フ。サラバ誓約ヲナシテ、キヨキカキタナキカヲシルベシ。誓約ノ中ニ女ヲ生セバキタナキ心ナルベシ。男ヲ生セバキヨキ心ナラントテ素戔烏(尊)ノタテマツラレケル八坂瓊ノ玉ヲトリ給ヘリシカバ、其玉ニ感メ男神化生シ

給。スサノヲノ尊悦テマサヤアン(レ)カチヌトノ給ケル。ヨリテ御名ヲ正哉吾勝々ノ速日天ノ忍穗耳ノ尊ト申。コレハ古語拾遺ノ說。又ノ說ニハ素戔烏尊天照太神ノ御クビニカケ給ヘル御統ノ瓊玉ヲコヒトリテ天ノ眞名井ニフリス、ギコレヲカミ給シカバ、先吾勝ノ尊ウマレマシマス。其後猶四ハシラノ男神生給。物ノサネワガ物ナレバ、我子ナリトテ天照太神ノ御子ニナシ給トイヘリ。コレハ日本紀ノ一說。此吾勝尊ヲバ太神メグシトヲボメツ子ニ御ワキモトニスヘ給シカバ腋子ト云。今ノ世ニヲサナキ子ヲワカコト云ハヒガ事之。カクテ、スサノヲノ尊ナヲ天上ニマシケルガ、サマ〳〵ノトガヲ、カシ給キ。天照太神イカリテ天ノ石窟ニコモリ給。國ノウチトコヤミニナリテ晝夜ノワキマヘナカリキ。モロ〳〵ノ神達、ウレヘナゲキ給。其時諸神ノ上首ニテ高皇產靈尊ト云神マシ〳〵キ。昔天御中主ノ尊ミハシラノ御子ヲハシマス。長ヲ高皇產靈トモ云、次ヲバ神皇產靈、次ヲ津速產靈ト云トミエタリ。陰陽ノ神コソ、ハシメテ諸神ヲ生ジ給シニ、直ニ天御中主ノ御子ト云コトヲボツカナシ。此ミハシラヲ天御中主ノ御コト、云事ハ日本紀ニハミエズ、古語拾遺ニアリ。此神天ノヤスカハノホトリニノ、八百万ノ神ヲツドヘテ相議シ給。其御子ニ思兼ト云神ノタバカリニヨリ石凝姥ト云神ヲシテ日神ノ御形ノ鏡ヲ鑄セシム。ソノハジメナリタリ

明の傍訓アクルとあり。訂す。

シ鏡諸神ノ心ニアハズ。紀伊國日前ノ神ニマス。次ニ鑄給ヘル鏡ウルハシクマシノヽケレバ諸神悦アガメ給。初ハ皇居ニマシノヽキ。今ハ伊勢國ノ五十鈴ノ宮ニイツカレ給、コレナリ。 又天ノ明玉ノ神ヲシテ八坂瓊ノ玉ヲツクラシメ、天ノ日鷲ノ神ヲシテ青幣白幣ヲツクラシメ、手置帆負、彦狹知ノ二神ヲシテ大峽小峽ノ材ヲキリテ瑞ノ殿ヲツクラシム。コノホカヲ〔ク〕サ〳〵アレドシルサズ。 其物スデニソナハリニシカバ、天ノ香山ノ五百箇〔箇〕ノ眞賢木ヲネコジニシ、上枝ニハ八坂瓊ノ玉ヲトリカケ、中枝ニハ八咫ノ鏡ヲトリカケ、下枝ニハ青和幣白和幣ヲトリカケ、天ノ太玉ノ命高皇產靈神ノ子ナリ。ヲシテサヽゲモタラシム。天ノ兒屋(根)ノ命津速產靈ノ子或ハ孫トモ(云フ)。興台產靈ノ神ノ子之(ト云フ)。ヲシテ、祈禱セシム。天ノ鈿目ノ命莫〔眞〕辟ノ葛ヲカツラニシ、蘿葛ヲ手繦〔繦〕ニシ、竹ノ葉飫憩〔惡〕木ノ葉ヲ手草ニシ差〔著〕鐸ノ矛ヲモチテ石窟ノ前ニメ俳優ヲシテ、相トモニウタヒマウ。又庭燎ヲアヽラカニシ常世ノ長鳴鳥ヲツドヘテ、タガヒニナガナキセシム。コレハミナ神樂ノ起ナリ。 天照太神キコシメシテワレコノゴロ石窟ニカクレオリ。葦原ノ中國ハトコヤミナラン。イカゾ天ノ鈿女ノ命カクエラグ〔スル〕ヤトヲボシテ御手ヲモテホソメニアケテミ給。コノ時ニ、天手力雄ノ命ト云神。思兼ノ神ノ子。磐戸ノワキニ立給シガ、其戸ヲヒキアケテ新殿ニウツシタテマツル。中臣ノ神天兒屋(根)命ナリ。忌部ノ神天ノ太玉ノ命之。

シリクベナワヲ日本紀ニハ端出之縄トカケリ。注ニハ左縄ノ端出セルト云。古語拾遺ニハ日御縄トカク。コレ日影ノ景〔像〕ナリトイフ。ヒキメグラシテ、ナカヘリマシソト申。上天ハジメテハレテモロ〳〵トモニ相見。面ミナアキラカニシロシ。手ヲノベテ哥舞テ、アハレ天ノアキラカナルナリ。アナヲモシロ、古語ニ甚切ナルヲミナアナト云。面白（トハ）モロ〳〵ノヲモテ明ニ白キ之。アナタノシ、アナサヤケ、竹ノハノコエ。ヲケ。木ノ名之。其ハヲフルコエ〔聲〕之。天ノ鈿目ノ持給ヘル手草之。カクテツミヲ素戔烏ノ尊ニヨセテ、ヲホスルニ千座（チクラ）ノ置戸（ヲキト）ヲリ〔以〕テ、首ノカミ、手足ノツメヲヌキテアガハシメ、其罪ヲハライテ神ヤラヒニヤラハレテ〔キ〕。カノ尊天ヨリクダリテ出雲ノ簸ノ川上ト云所ニイタリ給。其所ニ、一ノヲキナトウバトアリ。一ノヲトメヲスヱテ、カキナデツ、ナキケリ。素戔烏尊タヅト、ヒ給フ。ワレハコレ國神之。脚摩乳（アシナツチ）、手摩乳（テナツチ）ト云。コノヲトメハワガ子ナリ。奇稲田姫（クシイナダヒメ）ト云。サキニ八ケノ少女アリ。トシゴトニ、八岐ノ大蛇ノタメニノマレキ。今此ヲトメ又ノマレナントスト申ケレバ、尊我ニクレンヤトノ給。勅ノマ、ニタテマツルト申ケレバ、此ヲトメヲ湯津ノツマクシニトリナシミヅラニサシ、ヤシホヲリノ酒ヲ八ノ槽（フネ）ニモリテ待給ニ、ハタシテカノ大蛇キタレリ。頭ヲノ〳〵一槽ニ入テノミエヒテネブリケルヲ、尊ハカセル十握ノ劔ヲヌキテツタ〳〵ニキリツ。尾ニイタリテ劔ノ刄スコシカケヌ。サキテミ

給ヘバ、一ノ劔アリ。ソノ上ニ(つねに有イ)雲氣アリケレバ、天ノ叢雲ノ劔ト名ク。(日本武ノ尊ニイタリテアラタメテ草ナギノ劔ト云。ソレヨリ熱田社ニマス。)コレアヤシキ劔ナリ。ワレナゾアヘテ私ニヲケランヤトノ給テ、天照太神ニタテマツリ上ラレニケリ。其ノチ出雲ノ清ノ地ニイタリ宮ヲタテ、稻田姫トスミ給、大己貴ノ神ヲ(大汝トモ云。)ウマシメテ、素戔烏尊ハツヰニ根ノ國ニイデマシヌ。大汝ノ神此國ニトヾマリテ(今ノ出雲ノ大神ニマス。)天下ヲ經營シ葦原ノ地ヲ領給ケリ。ヨリテコレヲ大國主ノ神トモ大物主トモ申。ソノ幸魂奇魂ハ大和ノ三輪ノ神ニマス。

(栲の傍訓タ、とありタクと訂す)

(靈の傍訓ツキとありオキに訂す)

第二代正哉吾勝々速日天忍穗耳尊高皇產靈ノ尊ノ女栲幡千々姫ノ命ニアヒテ饒速日尊瓊々杵尊ヲウマシメ給テ(フ)。吾勝尊葦原中州(洲)ニクダリマスベカリシヲ、御子ウミ給シカバ、カレヲ下スベシト申給テ、天上ニトヾマリマス。マヅ饒速日ノ尊ヲクダシ給シ時、外祖高皇產靈尊十種ノ瑞宝ヲ授給。瀛都鏡一、邊津鏡一、八握劔一、生玉一、死反玉一、足玉一、道反玉一、蛇比礼一、蜂比礼一、品ノ物比礼一、コレナリ。此ミコトハヤク神サリ給ニケリ。凡國ノ主トテハクダシ給ハザリシニヤ。吾勝尊クダリ給ベカリシ時天照太神三種ノ神器ヲ傳給。ノチニ又瓊々杵尊ニモ授マシ〳〵(シ)ニ、饒速日尊ハコレヲエ給ハズ。シカレバ日嗣ノ神ニ

ハマシマサヌナルベシ。此事舊事本紀ノ說也。日本紀ニハミエズ。天照太神吾勝尊ハ天上ニ止リ給ヘド、地神ノ第一、二ニカゾヘタテマツル。其始天下ノ主タルベシトテウマレ給シユヘニヤ。

第三代天津彥々火瓊々杵尊、天孫トモ皇孫トモ申。皇祖天照太神　高皇產靈尊イツキメグミマシノヽキ（テ）、葦原ノ中州（洲）ノ主トシテ、天降給ハントス。コヽニ其國邪神アレテタヤスク下給コトカタカリケレバ、天稚彥ト云神ヲクダシテミセシメ給シニ、大汝ノ神ノ女下照姬ニトツギテ返コト申サズ、ミトセニナリヌ。ヨリテ名ナシ雉ヲツカハシテミセラレシヲ天稚彥イコロシツ。其矢天上ニノボリテ、太神ノ御マヘニアリ。血ニヌレタリケレバ、アヤメ給テナゲクダサレシニ、天稚彥新甞（シ）テフセリケルムネニアタリテ死ス。世ニ返シ矢ヲイムハ此故也。サラニ又クダサルベキ神ヲエラバレシ時、經津主ノ命檝取神ニマス。武甕槌神鹿嶋ノ神ニマス。ミコトノリヲウケテクダリマシケリ。出雲國ニイタリ、ハカセル劍ヲヌキテ地ニツキタテ、其上ニヰテ、大汝ノ神ニ太神ノ勅ヲツゲシラシム。ソノ子都（美）波八重事代主ノ神今葛木ノ鴨ニマス。アヒトモニ從中、又次ノ子健御名方刀美ノ神今諏方ノ神ニマス。シタガハズメ、ニゲ給シヲスワノ湖マデウ（逐）ヒテセメラレシカバ、又シタガヒヌ。カクテモロ〳〵ノ惡神ヲバ、ツミナヘ、マツロヘルヲ

バ、ホメテ天上ニノボリテ返ゴト申給。大物主ノ神（大汝ノ神ハ此國ヲサリヤガテカクレ給ト見ユ。コノ大物主ハサキニ云所ノ三輪ノ神ニマスナルベシ。）事代主ノ神相共ニ八十万ノ神ヲヒキヰテ天ニマウヅ。太神コトニホメ給キ。宜八十万ノ神ヲ領テ皇孫ヲマボリマツレトテ先カヘシクダシ給ケリ。其後天照太神、高皇産靈尊相計テ皇孫ヲクダシ給。八百万ノ神、勅ヲ承テ御共ニツカフマツル。諸神ノ上首卅二神アリ。其中ニ五部神ト云ハ、天兒屋命（中臣ノ祖）天太玉命（忌部ノ祖）天鈿女命（猨女ノ祖）石凝姥命（鏡作ノ祖）玉屋命（玉作ノ祖）之。此中ニモ中臣忌部ノ二神ハムネト神勅ヲウケテ、皇孫ヲタスケマボリ給。又三種ノ神寶ヲサヅケマシマス。先アラカジメ皇孫ニ勅テ曰、葦原千五百秋之瓊〔瑞〕穗國是吾子孫可レ主之地之。宜尒皇孫就而治焉。給行矣。宝祚之隆當下与天壤一無中窮上者矣。又太神御手ニ寶鏡ヲモチ給皇孫ニサヅケ祝テ吾兒視ニ此宝鏡一當レ猶レ視レ吾。可下与同レ床、共レ殿以爲中齊〔齋〕鏡上ト。ノ給。八坂瓊ノ曲玉、天ノ叢雲ノ劒ヲクワヘテ三種トス。又此鏡ノ如ニ分明ナルヲモテ天下ニ照臨給へ。八坂瓊ノヒロガレルガ如ク曲妙ヲモテ天下ヲシロシメセ。神劒ヲヒキサゲテハ不順ルモノヲタイラゲ給ト勅マシマシケルトゾ。此國ノ神靈トシテ、皇統一種タヾシクマシマス事マコトニコレラノ勅ニミエタリ。三種ノ神器世ニ傳コト日月星ノ天ニアルニヲ

ナジ。鏡ハ日ノ躰ナリ。玉ハ月ノ精也。劔ハ星ノ氣也。フカキ習アルベキニヤ。抑彼ノ宝鏡ハサキニシルシ侍石凝姥ノ命ノ作給ヘリシ八咫ノ御鏡「ハ」（八咫ニ口傳、裏書云、咫説文云「中ニ」婦人手長八寸謂之咫周尺也、但今ノ八咫ノ鏡事ハ別口傳アリ。）玉ハ「八坂瓊ノ曲玉、々屋ノ命（天明玉トモ云。）作給ヘルナリ。（八坂ニモ口傳アリ）劔ハスサノヲノ命ノエ給ヘル〔テ〕太神ニタテマツラレシ藂雲ノ劔也。此三種ニツキタル神勅ハ正ク國ヲタモチマスベキ道ナルベシ。鏡ハ一物ヲタクハヘズ、私ノ心ナクシテ万象ヲテラスニ、是非善悪ノスガタアラハレズト云コトナシ。其スガタニシタガヒテ感應スルヲ徳トス。コレ正直ノ本源ナリ。玉ハ柔和善順ヲ徳トス。慈悲ノ本源也。劔ハ剛利決斷ヲ徳トス。智恵ノ本源也。此三徳ヲ翕（アハセ）受ズシテハ天下ノヲサマランコトマコトニカタカルベシ。神勅アキラカニノ詞ツヾマヤカニムネヒロシ。アマサヘ神器ニアラハレ給ヘリ。イトカタジケナキ事ヲヤ。中ニモ鏡〔ヲ〕本トシ宗廟ノ正躰トアフガレ給。鏡ハ明ヲカタチトセリ。心性アキラカナレバ、慈悲決斷ハ其中ニアリ。又正ク御影ヲウツシ給シカバ、フカキ御心ヲトヾメ給ケンカシ。天ニアル物日月ヨリアキラカナルハナシ。仍文字ヲ制スルニモ日月ヲ明トスト云ヘリ。我神、大日ノ靈ニマシマセバ、明徳ヲモテ照臨シ給コト陰陽ニヲキテハカリガタシ。冥顯ニツキテタ

「中ニ」白本によりて削る

ノミアリ。君モ臣モ神明ノ光胤ヲウケ、或ハマサシク勅ヲウケシ神達ノ苗裔也。誰カ是ヲアフギタテマツラザルベキ。此理ヲサトリ其道ニタガハズバ、内外典ノ學問モコヽニキハマルベキニコソ。サレド、此道ノヒロマルベキ事ハ内外典流布ノ力ナリト云ツベシ。魚ヲウルコトハ網ノ一目ニヨルナレド、衆目ノ力ナケレバ、是ヲウルコトカタキガ如シ。應神天皇ノ御代ヨリ儒書ヲヒロメラレ、聖徳太子ノ御時ヨリ釋教ヲサカリニシ給シ、是皆權化ノ神聖ニマシマセバ、天照太神ノ御心ヲウケテ我國ノ道ヲヒロメフカクシ給ナルベシ。カクテ此瓊々杵ノ尊天降マシヽニ、猿田彦ト云神マイリアヒキ。コレハチマタノ神之。テリカヾヤキテ目ヲアハスル神ナカリシニ、天ノ鈿目ノ神行アヒヌ。又皇孫イヅクニカイタリマシマスベキト問シカバ、筑紫ノ日向ノ高千穗ノ(槵)觸ノ峯ニマシマスベシ。ワレハ伊勢ノ五十鈴ノ川上ニイタルベシト申。

コレハチマタノ神之を今割註に改む

彼神ノ申ノマヽニ槵觸ノ峯ニアマクダリテ、シヅマリ給ベキ所ヲモトメラレシニ、事勝國勝ト云神コレモ伊弉諾尊ノ御子、又ハ塩土ノ翁ト云。マイリテワガ井タル吾田ノ長狹ノ御崎ナンヨロシカルベシト申ケル。ソノ所ニスマセ給ケリ。コヽニ山ノ神大山祇二ノ女アリ。姉ヲ磐長姫(イハナガヒメ)ト云。コレ磐石ノ神ナリ。妹ヲ木ノ花開耶姫ト云。コレハ花木ノ神ナリ。二人ヲメシ給。ア子ハカタチミニクカリケレバ返シツ。

イモウトヲ止メ給シニ、盤長姫ウラミイカリテ、我ヲモメサマシカバ、世ノ人ハイノチナガクテ盤石ノ如クアラマシ。タヾ妹ヲメシタレバ、ウメラン子ハ木ノ花ノ如クチリヲチナムトトコヒケルニヨリテ、人ノイノチハミジカクナレリトゾ。木ノ花ノサクヤヒメ、サレテ一夜ニハラミヌ。天孫ノアヤメ給ケレバ、ハラタチテ無戸室（ウツムロ）ヲツクリテ、コモリ井テミヅカラ火ヲハナチシニ、三人ノ御子生給。ホノヲノオコリケル時生マスヲ火闌降（ホノスセリ）ノ命ト云。火ノサカリナリシニ生マスヲ火明命（ホノアカリノ）ト云　後ニ生マスヲ火出見ノ尊ト申。此三人ノ御子ヲバ、火モヤカズ、母ノ神モソコナハレ給ハズ。父ノ神悦マシ〳〵ケリ。此尊天下ヲ治給事、三十万八千五百卅三年ト云ヘリ。自是サキ天上ニトヾマリマス神達ノ御事ハ年序ハカリガタキニヤ。天地ワカレシヨリ以来ノコトイクトセヲヘタリト云コトモミエタル文ナシ。抑天竺ノ説ニ人壽無量ナリシガ、八万四千歳ニナリ、ソレヨリ百年ニ一年ヲ減メ、百廿歳ノ時（或百才トモ〔云〕）尺迦佛出給ト云ル、此佛出世ハ鸕鷀草葺不合尊ノスエザマノ事ナレバ、（神武天皇元年辛酉、佛滅後二百九十年ニアタル。已〔是ヨリ〕上ハ〔ヘ〕ガソフベキ之。）百年ニ一年ヲ増メコレヲハカルニ、此瓊々杵ノ尊ノ初ツカタハ迦葉佛ノ出給ケル時ニヤアタリ侍ラン。人壽二万歳ノ時此佛ハ出給ケリトゾ。

第四代彦火々出見ノ尊ト申。御兄火ノ闌降ノ命海ノ幸マス。此尊ハ山ノ幸マシケリ。コヽロミニ相カヘ給シニ、各其幸ナカリキ。弟ノ尊ノ弓箭ニ、魚〔兄ノ命〕ノ鈎鉤ヲカエ給ヘリシヲ、弓箭ヲバ返ツ。ヲトヽノ尊鉤ヲ魚ニクワレテ失ヒ給ケルヲアナガチニセメ給シニ、センスベナクテ、海邊ニサマヨヒ給キ。塩土ノ翁（此神ノ事サキニミユ。）マイリアヒテアハレミ申テ、ハカリゴトヲメグラシテ、海神綿積命（小童トモカケリ。）ノ所ニヲクリツ。其女ヲ豐玉姫ト云。天神ノ御孫ニメデタテマツリテ、父ノ神ニツゲテトヾメ申ツ。ツイニ其女トアヒスミ給。ミトセバカリアリテ、故郷ヲオボス御氣色アリケレバ、其女父ニイヒアハセテカヘシタテマツル。大小（ノ）イロクヅヲツドヘテ、トヒケルニ、口女ト云魚ヤマヒアリトテミエズ。シキテメシイツレバ、ソノ口ハレタリ。是ヲサグリシニ、ウセニシ鉤ヲサグリイヅ。（一ニハ赤女ト云。又此魚ハナヨシト云魚トミエタリ。）海人〔神〕イマシメテ口女イマヨリツリクフナ。又天孫ノ饌ニマイルナトナン云フクメケル。又海神ヒル珠ミツ珠ヲタテマツリテ兄ヲシタガヘ給ベキカタチヲオシヘ申ケリ。サテ故郷ニカヘリマシテ、鉤ヲ返ツ。滿珠ヲイダシテ子ギ給ヘバ、塩ミチキテ、コノカミヲボラレヌ。ナヤマサレテ俳優ノ民トナラントチカヒ給シカバ、ヒル珠ヲモチテ塩ヲシリゾケ給キ。コレヨリ

天日嗣ヲツタヘマシマシケル。海中ニテ豐玉姫ハラミ給シカハ、産期ニイタラバ、海邊ニ產屋ヲ作テ待給ヘト申キ。ハタシテ其妹玉依姫ヲヒキヰテ海邊ニ行アヒヌ。屋ヲ作テ鸕鷀ノ羽ニテフカレシガ、フキモアヘズ御子ウマレ給ニヨリテ、鸕鷀草葺不合尊ト申ス。又產屋ヲウブヤト云事モウノハヲフケルユヘナリ。サテモ産ノ時ミ給ナト契申シヲ、ノゾキテ見マシケレバ龍ニナリヌ。ハヂウラミテワレニハヂミセ給ハズハ、海陸ヲシテ相カヨハシヘダツルコトナカラマシトテ御子ヲステヲキテ海中ヘカヘリヌ。後ニ御子ノキラキラシクマシマスコトヲキヽ、（テ憐ミ崇メテ、妹ノ玉依姫ヲ奉リテ養ヒ）マイラセケルトゾ。此尊天下ヲ治給コト六十三万七千八百九十二年ト云ヘリ。震旦ノ世ノ始ヲイヘルニ、万物混然トシテアヒハナレズ。是ヲ混沌ト云。其後輕清物ハ天トナリ、重濁物ハ地トナリ、中和氣ハ人トナル。コレヲ三才ト云。コレマデハ我國ノ初リヲ云ニカハラザルニ。其ハジメノ君盤古氏、天下ヲ治コ（コ歟）ト一万八千年。天皇、地皇、人皇ナド云王相續テ九十一代、一百八万二千七百六十年。サキニアハセテ一百十万七百六十年。コレ一說ナリ。實ニハアキラカナラズ。廣雅ト云書ニハ開闢ヨリ獲麟ニ至テ二百七十六万歲トモ云。獲麟トハ孔子ノ在世、魯ノ哀公ノ時ナリ。日本ノ懿德ニアタル。シカラバ、盤古ノハジメハ此尊ノ御代ノスエツカタニアタルベキニヤ。

廣雅云々より懿德ニアタルまで今割注に改む

訓キ、をイツに改む

第五代、彦波瀲（瀲）武鸕鷀草葺不合尊ト申。御母豊玉姫ノ名ヅケ（申ケ）ル御名ナリ。御姨玉依姫ニトツキテ四ハシラノ御子ヲウマシメ給フ。彦五瀬命、（稲飯命、）三毛入野命、日本磐余彦ノ尊ト申ス。磐余彦尊ヲ（太子ニ立テ、）天日嗣ヲナンツガシメマシ〳〵ケル。此神御代七十七万余年ノ程ニヤ、モロコシノ三皇ノ初、伏犧ト云王アリ。次神農氏、次軒（轅）氏、三代アハセテ五万八千四百四十（二）年。一説ニハ一万六千八百二十七年。シカラバ、此尊ノ八十万余ノ年ニアタル之。親經中納言ノ新古今ノ序ヲ書ニ伏犧ノ皇徳ニ基メ四十万年ト云リ。何説ニヨレルニカ無覺束事也。　其後ニ少昊氏、顓頊氏、高辛氏、陶唐氏、（堯也）有虞氏（舜之）ト云五帝アリ。合テ四百三十二年。其次夏殷周ノ三代アリ。夏ニハ十七主、四百三十二年、殷ニハ三十主、六百二十九年。周ノ代ト成テ第四代ノ主ヲ照（昭）王ト云キ。ソノ廿六年甲寅ノ年マデハ　周ヲコリテ一百二十年、コノトシハ葺不合尊ノ八十三万五千六百六十七年ニアタレリ。コトシ天竺ニ尺迦佛出世シマシマス。同ヽ八十三万五千七百五十三年ニ佛御年八十ニテ入滅シマシ〳〵ケリ。モロコシニハ昭王ノ子穆王ノ五十三年壬申ニアタレリ。其後二百八十九年アリテ庚申ニアタル年此神カクレサセマシマス。スベテ天下ヲ治給コト八十三万六千四十二年ト云リ。コレヨリ上ツカタヲ地神五代トハ申ケリ。一代ハ天上ニトヾマリ給。下三代ハ西ノ洲宮ニテ

多ノ年ヲオクリマシマス。神代ノコトナレバ其行迹タシカナラズ。葺不合ノ尊八十三万余年マシ〳〵シニ、ソノ御子磐余彥尊ノ御代ヨリニハカニ人王ノ代トナリテ曆數モ短クナリニケルコト疑フ人モアルベキニヤ。サレド、神道ノ事ヲシテハカリガタシ。マコトニ磐長姫ノ詛ケルマヽ、壽命モ短クナリシカバ、神ノフルマイニモカハリテ、ヤガテ人ノ代トナリヌルカ。天竺ノ說ノ如ク、次第アリテ、減タリトハミエズ。又百王マシマスベシト申メル、十々ノ百ニハ非ルベシ。窮ナキヲ百トモ云リ。百官百姓ナド云ニテシルベシ。昔皇祖天照太神、天孫ノ尊ニ御コトノリセシニ寶祚之隆當下与二天壤一無窮上トアリ。天地ニ昔カハラズ、日月モ光ヲアラタメズ。況ヤ三種ノ神器世ニ現在シ給ヘリ。キハマリアルベカラザルハ我國ヲ傳ル寶祚也。アフギテタトビタテマツルベキハ日嗣ヲウケ給スベラギニナンヲハシマス。

人皇第一代　神日本磐余彥天皇ト申。後ニ神武トナヅケタテマツル。地神鸕鷀草葺不合ノ尊ノ第四ノ子。御母玉依姫、海神小童第二女也。伊弉諾尊ニハ六世、大日孁ノ尊ニハ五世ノ天孫ニマシマス。神日本磐余彥ト申ハ神代ヨリノヤマトコトバナリ。神武ハ中古トナリテモロコシノ詞ニヨリテサダメタテマツル御名也。又此御代ヨリ代ゴトニ宮所ヲウツサレシカ

ハ其所ヲ名ヅケテ御名トス。此天皇ヲバ橿原ノ宮ト申、是也。又神代ヨリ至テ尊ヲ尊ト云、其次ヲ命ト云。人ノ代トナリテハ天皇トモ号シタテマツル。臣下ニモ朝臣宿禰臣ナド、イフ号イデキニケリ。神武ノ御時ヨリハジマレル事ナリ。上古ニハ尊トモ命トモ兼テ称ケルトミエタリ。世クダリテハ天皇ヲ尊ト申コトモミエズ、臣ヲ命ト云事モナシ。古語ノ耳ナレズナレルユヘニヤ。此天皇御年十五ニテ太子ニ立、五十一ニテ父神ニカハリテ、皇位ニハツカシメ給。コトシ辛酉ナリ。筑紫日向ノ宮崎ノ宮ニオハシマシケルガ、兄ノ神達ヲヨビ皇子群臣ニ勅シテ、東征ノコトアリ。此大八州(洲)ハ皆是王地也。神代幽昧ナリシニヨリテ、西偏ノ國ニシテ、オホクノ年序ヲオクラレケルニコソ。天皇舟檝ヲトヽノヘ甲兵ヲアツメテ、大日本洲ニムカヒ給。ミチノツイデノ國々ヲタイラゲ大ヤマトニイリマサムトセシニ、其國ニ天ノ神饒ノ速日ノ尊ノ御スヱ宇麻志間見命ト云神アリ。外舅長髓彦ト云。天神ノ御子兩種有ムヤトテ軍ヲオコシテフセギタテマツル。其軍コハクシテ皇軍シバ〳〵利ヲウシナフ。又邪神毒氣ヲハキシカバ、士卒ミナヤミフセリ。コヽニ天照太神健甕槌神ヲメシテ、葦原ノ中ツ洲ニサハグヲトス。汝ユキテタイラゲヨトミコトノリシ給。健甕槌ノ神申給ケルハ、昔

國ヲタイラゲシ時(ノ)劍アリ。カレヲクダサバ、自ラタイラギナント申テ、紀伊國若草ノ村ニ高倉下(タカクラジノ)命ト云神ニシメシ此劍ヲタテマツリケレバ、天皇悦給テ、士卒ノヤミフセリケルモ、ミナヲキヌ。又神魂ノ命ノ孫武津之身命大烏トナリテ、軍ノ御サキニツカフマツル。天皇ホメテ八咫烏ト号シ給。又金毛ノ鵄(トビ)クダリテ皇弓ノハズニ井タリ。其光テリカヾヤケリ。コレニヨリテ皇軍大ニカチヌ。宇麻志間見ノ命其舅ノヒガメル心ヲシリテタバカリテコロシツ。ソノ軍ヲヒキ井テシタガヒ申ニケリ。天皇ハナハダホメマシ〱テ天ヨリクダレル神釼ヲサヅケ、其勳ニコタフトゾノタマハセケル。此釼ヲ豐布都(トヨフツ)ノ神ト号ス。ハジメハ大和ノ石上(イソノカミ)ニマシ〱キ。後ニハ、常陸ノ鹿嶋ノ神宮ニマシマス。彼宇麻志間見ノ命ハ饒速日(ニギハヤヒ)ノ尊天降シ時、外祖高皇産靈ノ尊サヅケ給シ十種ノ瑞寶ヲ傳モタリケルヲ天皇ニ奉ル。天皇鎭魂(ミタマシヅメ)ノ瑞寶也シカバ、其祭ヲ始ラレニキ。此寶ヲモ即宇麻志間見ニアヅケ給テ、大和石上ニ安置ス。又ハ布瑠(フル)ト号。此瑞宝ヲ一ヅ、ヨビテ、呪文ヲシテフル事アルニヨレルナルベシ。カクテ天下タイラギニシカバ、大和國橿原ニ都ヲサダメテ、宮ヅクリス。其制度天上ノ儀ノゴトシ。天照太神ヨリ傳給ヘル三種ノ神器ヲ大殿ニ安置シ、床ヲ同クシマシマス。皇宮神宮一ナ

リシカバ、國々ノ御ツキ物ヲモ齊(齋)藏ニオサメテ、官物神物ノワキ(タ)メナカリキ。天兒屋根命ノ孫天種子ノ命、天太玉ノ命孫天富ノ命モハラ神事ヲツカサドル。神代ノ例ニコトナラズ。又靈畤ヲ鳥見山ノ中ニタテ、天神地祇ヲマツラシメ給。此御代ノ始、辛酉ノ年、モロコシノ周ノ世第十七代ニアタル君、惠王ノ十七年也。五十七年丁巳ハ周ノ廿一代ノ君、定王ノ三年ニアタレリ。コトシ老子誕生ス。是ハ道教ノ祖之。天竺ノ尺迦如來入滅シ給ショリ元年辛酉マデハ二百九十年ニナレルカ。此(天)皇天下ヲ治給コト七十六年、一百廿七歳ヲハシキ。

第二代、綏靖天皇（コレヨリ和語ノ尊号ヲバノセズ。）神武第三御子。御母鞴五十鈴姫、事代主神ノ女也。父ノ天皇カクレマシテ、ミトセアリテ即位シ給。庚辰年之。大和葛城高岡ノ宮ニマシマス。廿一年庚戌ノ(歳)モロコシノ周ノ廿三代(ノ)君靈王ノ廿一年之。コトシ孔子誕生ス。自是七十三年マデヲハシケリ。儒教ヲヒロメラル。此道ハ昔ノ賢王、唐堯、虞舜、夏ノ初ノ禹、殷ノハシメノ湯、周ノハジメノ文王、武王、周公ノ國ヲ治メ民ヲナデ給シ道ナレバ、心ヲ正シクシ、身ヲナヲクシ、家ヲ治メ、國ヲ治メテ、天下ニヲヨボスヲ宗トス。サレバコトナル道ニハアラネド

國ヲタイラゲシ時(ノ)劍アリ。カレヲクダサバ、自ラタイラギナント申テ、紀伊國若草ノ村ニ高倉下命ト云神ニシメ〆此劍ヲタテマツリケレバ、天皇悅給テ、士卒ノヤミフセリケルモ、ミナヲキヌ。又神魂ノ命ノ孫武津之身命大烏トナリテ、軍ノ御サキニツカフマツル。天皇ホメテ八咫烏ト号シ給。又金毛ノ鵄クダリテ皇弓ノハズニ井タリ。其光テリカヾヤケリ。コレニヨリテ皇軍大ニカチヌ。宇麻志間見ノ命其舅ノヒガメル心ヲシリテタバカリテコロシツ。ソノ軍ヲヒキ井テシタガヒ申ニケリ。天皇ハナハダホメマシ〳〵テ天ヨリクダレル神劍ヲサヅケ、其勳ニコタフトゾノタマハセケル。此劍ヲ豐布都ノ神ト号ス。ハジメハ大和ノ石上ニマシ〳〵キ。後ニハ、常陸ノ鹿嶋ノ神宮ニマシマス。彼宇麻志間見ノ命又饒速日ノ尊天降シ時、外祖高皇産靈ノ尊サヅケ給シ十種ノ瑞寶ヲ傳モタリケルヲ天皇ニ奉ル。天皇鎭魂ノ瑞寶也シカバ、其祭ヲ始ラレニキ。此寶ヲモ即宇麻志間見ニアヅケ給テ、大和石上ニ安置ス。又ハ布瑠ト号。此瑞宝ヲ一ヅ、ヨビテ、呪文ヲシテフル事アルニヨレルナルベシ。カクテ天下タイラギニシカバ、大和國橿原ニ都ヲサダメテ、宮ヅクリス。其制度天上ノ儀ノゴトシ。天照太神ヨリ傳給ヘル三種ノ神器ヲ大殿ニ安置シ、床ヲ同クシマシマス。皇宮神宮一ナ

リシカバ、國々ノ御ツキ物ヲモ齊（齋）藏ニオサメテ、官物神物ノワキ（タ）メナカリキ。天兒屋根命ノ孫大種子ノ命、天太玉ノ命ノ孫天富ノ命モハラ神事ヲツカサドル。神代ノ例ニコトナラズ。又靈畤ヲ鳥見山ノ中ニタテ、天神地祇ヲマツラシメ給。此御代ノ始、辛酉ノ年、モロコシノ周ノ世第十七代ニアタル君、惠王ノ十七年也。五十七年丁巳ハ周ノ廿一代ノ君、定王ノ三年ニアタレリ。コトシ老子誕生ス。是ハ道教ノ祖之。天竺ノ尺迦如來入滅シ給シヨリ元年辛酉マデハ二百九十年ニナレルカ。此（天）皇天下ヲ治給コト七十六年、一百廿七歲ヲハシキ。

第二代、綏靖天皇（コレヨリ和語ノ尊号ヲバノセズ。）神武第二御子。御母鞴五十鈴姫、事代主神ノ女也。父ノ天皇カクレマシテ、ミトセアリテ即位シ給。庚辰年之。大和葛城高岡ノ宮ニマシマス。廿一年庚戌ノ（歲）モロコシノ周ノ廿三代（ノ）君靈王ノ廿一年之。コトシ孔子誕生ス。自是七十三年マデヲハシケリ。儒教ヲヒロメラル。此道ハ昔ノ賢王、唐堯、虞舜、夏ノ初ノ禹、殷ノハシメノ湯、周ノハジメノ文王、武王、周公ノ國ヲ治メ民ヲナデ給シ道ナレバ、心ヲ正シクシ、身ヲナヲクシ、家ヲ治メ、國ヲ治メテ、天下ニヲヨボスヲ宗トス。サレバコトナル道ニハアラネド

モ、末代トナリテ人不正ニナリシユヘニ、其道ヲオサメテ儒教ヲタテラル、之。天皇天下ヲ治給コト、三十三年、八十四歲ヲマシマシキ。

第三代、安寧天皇ハ綏靖第二ノ子。御母五十鈴依姬、事代主ノ神ノヲト女也。癸丑ノ年即位。大和ノ片鹽浮穴（カタシホノウクアナ）ノ宮ニマシマス。天下ヲ治給コト、三十八年。五十七歲ヲマシマシキ。

第四代、懿德天皇ハ安寧第二ノ子。御母渟名底（スナソコ）(中)媛（ヒメ）、事代主ノ神ノ孫也。辛卯年即位。大和ノ輕（カル）ノ曲峽（マガリヲ）ノ宮ニマシマス。天下ヲ治給コト、卅四年。七十七歲ヲハシマシキ。

第五代、孝照(昭)天皇ハ懿德第一ノ子。御母天豐津（トヨツ）姬、息石耳ノ命ノ女之。父ノ天皇カクレマシテ、一年アリテ、丙寅ノ年即位。大和ノ掖ノ上池ノ心ノ宮ニマシマス。天下ヲ治給コト、八十三年。百(十)四歲ヲハシマシキ。

足の傍訓タリとあるをタラシに改む

第六代、孝安天皇ハ孝昭第二ノ子。御母世襲（ヨソ）足（タラシ）ノ姬、尾張ノ連ノ上祖、(瀛)津世襲ノ女也。乙丑ノ年即位。天(大)倭秋津嶋ノ宮ニマシマス。天下ヲ治給コト、一百二年。百廿歲ヲマシマシキ。

第七代、孝靈天皇ハ孝安ノ太子。御母姉押姬。天足彥國押人命ノ女也。辛未年即位。大和ノ

〔方リ傍訓ホオ、オホウに訂す〕

黒田廬戸ノ宮ニマシマス。卅六年丙午ニアタル年、モロコシノ周ノ國滅メ秦ニウツリキ。四十五年己〔乙〕卯、秦ノ始皇即位。此始皇仙方ヲコノミテ、長生不死ノ藥ヲ日本ニモトム。日本ヨリ五帝三皇ノ遺書ヲ彼國ニモトメシニ、始皇コト〳〵クコレヲヲクル。其後卅五年アリテ、彼國、書ヲ焼、儒ヲウヅミニケレバ、孔子ノ全經日本ニトヾマルトイヘリ。此事異朝ノ書ニノセタリ。我國ニハ神功皇后三韓ヲタヒラゲ給シヨリ、異國ニ通ジ 應神ノ御代ヨリ經史ノ學ツタハレリトゾ申ナラハセル。孝靈ノ御時ヨリ此國ニ文字アリトハキカヌ事ナレド、上古ノコトハ慥ニ注トヾメザルニヤ。應神ノ御代ニワタレル經史ダニモ今ハ見エズ。聖武ノ御時吉備大臣入唐メ、傳タリケル本コソ流布シタレバ、コノ御代ヨリ傳ケン事モアナガチニ疑マジキニヤ。凡此國ヲバ、君子不死ノ國トモ云也。孔子世ノミダレタル事ヲ歎テ、九夷ニヲラントノ給ケル、日本ハ九夷ノ其一ナルベシ。異國ニハ此國ヲバ東夷トス。此國ヨリハ又彼國ヲモ西蕃ト云ルガゴトシ。四海ト云ハ、東夷、南蠻、西羌、北狄也。南ハ蛇ノ種ナレバ、虫ヲシタガヘ、西ハ羊ヲノミカウナレバ、羊ヲシタガヘ、北ハ犬ノ種ナレバ、犬ヲシタガヘタリ。タヾ東ハ仁アリテ命ナガシ。ヨリテ大弓ノ字ヲシタガフト云ヘリ。裏書云、夷說文曰、東方之人也、以〔从〕大双〔从〕弓。徐

〔徐〕氏曰唯東夷以大弩仁而壽有君子不死之國不仁而壽未合弖字之義以近窮違也云若取此義歟　孔子ノ時スラ、コナタノコトヲシリ給ケレバ、秦ノ世ニ通ジケンコトアヤシムニ足ヌコトニヤ。此天皇天下ヲ治給事、七十六年。百十歳ヲハシマシキ。

第八代、孝元天皇ハ孝靈ノ太子。御母細媛、磯城縣主ノ女也。丁亥年即位。大倭ノ輕境原ノ宮ニマシマス。九年乙未ノ年、モロコシノ秦滅テ、漢ニウツリキ。此天皇天下ヲ治給コト五十七年。百十七歳ヲマシ〱キ。

第九代、開化天皇ハ孝元第二ノ子。御母、鬱色謎姫、穗積ノ臣上祖鬱色謎〔雄命〕妹也。甲申年即位。大和ニ春日率川ノ宮ニマシマス。天下ヲ治給コト、六十年。百十五歳ヲマシ〱キ。

第十代、崇神天皇ハ開化第二子、御母伊香色謎姫、初ハ孝元ノ妃ト〆彥太忍信ノ命ヲウム。太綜麻杵ノ命ノ女也。甲申ノ歳即位。大和ノ磯城ノ瑞籬ノ宮ニマシマス。此御時神代ヲサル事、世ハ十ツギ、年ハ六百余ニナリヌ。ヤウヤク神威ヲオソレ給テ、即位〔六十〕六年、己丑年神武元年辛酉ヨリ此己丑マデハ六百二十九年。神代ノ鏡造ノ石凝姥ノ神ノハツコヲメシテ、鏡ヲウツシ鑄セシメ、天目一箇ノ神ノハツコヲシテ、劔ヲツクラシム。大和宇陀ノ郡ニシテ、此兩種ヲウツシアラタメラレテ護身ノ璽ト〆、同

殿ニ安置ス。神代ヨリノ寶鏡ヲヨビ靈劔ヲバ、皇女豐鋤入姫ノ命ニツケテ大和ノ笠縫(縫)ノ邑ト云所ニ神籬ヲタテ、アガメ奉ラル。コレヨリ神宮皇居各別ニナレリキ。其後太神ノヲシヘアリテ、豐鋤入姫ノ命神躰ヲ頂戴(シ)テ所々ヲメグリ給ケリ。十年ノ秋、大彦命ヲ北陸ニ遣シ、武渟(淳)川別ノ命ヲ東海ニ、吉備津彦命ヲ西道ニ、丹波ノ道主ノ命ヲ丹波ニ遣ス。トモニ印綬(綬)ヲ給テ將軍トス。將軍ノ名ハジメテミユ。天皇ノ外(叔)父、武埴安彦ノ命、朝廷ヲカタブケントハカリケレバ、將軍等ヲ止テマヅ追討。冬十月ニ將軍發路ス。十一年ノ夏四道ノ將軍戎夷ヲ平ヌルヨシ復命ス。六十五年秋、仁(任)那ノ國、使ヲサシテ、御ツキヲタテマツル。筑紫ヲサルコト二千余里ト云。天皇天下ヲ治給コト、六十八年。百廿歲ヲマシ〳〵キ。

第十一代、垂仁天皇ハ崇神第三ノ子。御母、御間城姫、太(大)彥ノ命孝元ノ御子女也。壬辰ノ年即位。大和ノ卷向ノ珠城ノ宮ニマシマス。此御時、皇女大和姫ノ命、豐鋤入姫ニカハリテ天照太神ヲイツキタテマツル。神ノヲシヘニヨリ、ナヲ國々ヲメグリテ、廿六年丁巳冬十月甲子ニ伊勢國、度會郡五十鈴川上ニ宮所ヲシメ、高天ノ原ニ千木高知、下都磐根(ニ)大宮柱廣敷立テシヅマリマシ〳〵ヌ。此所ハ昔天孫アマクダリ給シ時、猿田彥ノ神マイリアヒテ、ワレハ伊

勢ノ狹長田ノ五十鈴ノ川上ニイタルベシト申ケル所也。大倭姫ノ命宮所ヲ尋給シニ、大田ノ命ト云人、又興玉トモ云。マイリアヒテ、此所ヲオシヘ申キ。此命ノ昔ノ猨田彥ノ神ノ苗裔ナリトゾ。彼川上ニ五十鈴、天上ノ圖形ナドアリ。天ノ逆戈モコノ所ニアリキト云說アリ。八万歲ノアヒダマボリアガメタテマツリキトナン申ケル。カクテ中臣ノ祖大鹿嶋ノ命ヲ祭主トス。又大幡主ト云人ヲ太神主ニナシ給。コレヨリ皇太神トアガメ奉テ、天下第一ノ宗廟ニマシマス。此天皇天下ヲ治給コト、九十九年、百四十歲ヲマシ〳〵キ。

第十二代、景行天皇ハ垂仁第三ノ子。御母（日）葉洲媛、丹波道主ノ王（の女）也。辛未年即位。大和ノ纏向ノ日代ノ宮ニマシマス。十二年秋、熊襲ソムキテミツキ奉ラズ。八月ニ天皇筑紫ニ幸ス（シテ、）是ヲ征シ給。十三年夏コト〳〵ク平グ高屋ノ宮ニマシマス。十九年ノ秋筑紫ヨリ還給。廿七年秋熊襲又ソムキテ邊境ヲオカシケリ。皇子小碓ノ尊、御年十六、ヲサナクヨリ雄略氣マシテ、容貌魁偉、身ノ長一丈、力能カナヘヲアゲ給ヒシカバ、熊襲ヲウタシメ給。冬十月ヒソカニ彼國ニイタリ、奇謀ヲモテ梟師（帥）取石鹿父ト云物ヲ殺給。梟師（帥）ホメ奉テ、日本武トナヅケ申ケリ。悉餘黨ヲ平テ、歸給。所々ニノ、アマタノ惡神ヲ

コロシツ。廿八年春カヘリ(コト)申給ケリ。天皇其ノ功ヲホメテメグミ給コト諸子ニコトナリ。四十年ノ夏、東夷ヲホク背テ、邊境サハガシカリケレバ、又日本武ノ皇子ヲツカハス。吉備ノ武彦、大伴ノ武日ヲ左右ノ將軍トシテ、アヒソヘシメ給。十月ニ狂(枉)道シテ伊勢ノ神宮ニマウデ、、大和姫ノ命ニマカリ申給。カノ命神劍ヲサヅケテ、ツ、シメ、ナヲコタリソトヲシヘ給ケル。駿河ニ（駿河日本紀說、或相摸古語拾遺說、）イタルニ、賊徒野ニ火ヲツケテ害シタテマツランコトヲハカリケリ。火ノイキヲイマヌカレガタカリケルニ、ハカセル叢雲ノ劍ヲミヅカラヌキテカタハラノ草ヲナギテハラフ。コレヨリ名ヲアラタメテ草薙ノ劍ト云。又火ウチヲモテ火ヲ出テムカヒ火ヲ付テ、賊徒ヲ燒コロサレニキ。コレヨリ船ニ乘給テ、上總ニイタリ轉ノ陸奧國ニイリ、日高見ノ國（ソノ所異說アリ。）ニイタリ、悉(コト〴〵ク)蝦夷ヲ平ゲ給、カヘリテ常陸ヲコヘ、甲斐ニコエ、又武藏上野ヲヘテ碓日坂ニイタリ、弟橘媛ト云シ妾ヲシノビ給。（上總ヘ渡給シ時風波アラカリシニ、尊ノ御命ヲアガハントテ海ニ入シ人ナリ。）東南ノ方ヲノゾミテ吾嬬者耶(アヅマ)トノ給シヨリ山東ノ諸國ヲアヅマト云之。コレヨリ道ヲワケ、吉備ノ武彦ヲハ越後國ニ遣シ不順者ヲ平シメ給。尊ハ信濃ヨリ尾張ニイデ給。カノ國ニ宮簀媛ト云女アリ。尾張ノ稻種宿祢ノ妹也。此女ヲメシテ、淹留(トゞマリ)給アヒダ五十葺ノ山ニ荒

神アリトキコエケレバ、釼ヲバ（宮）簀媛ノ家ニトヾメテカチヨリイデマス。山神化メ小蛇ニナリテ、御道ニヨコタハレリ。尊マタ（ギ白）コエテスギ給シニ、山神毒氣ヲ吐ケルニ、御心ミダレニケリ。ソレヨリ伊勢ニウツリ給。能褒野ト云所ニテ御ヤマイハナハダシクナリニケレバ、武彦ノ命ヲメ、天皇ニ事ノヨシヲ奏メ、ツイニカクレ給ヌ。御年卅也。天皇キコシメシテ悲給事限ナシ。群卿百寮ニ仰テ、伊勢國能褒野ニオサメタテマツル、白鳥ト成テ、大和國ヲサシテ琴彈原（コトヒキノ）ニトヾマレリ。其所ニ又陵ヲツクラシメラレケレバ、又飛テ河内布市ニトヾマル。ソノ所ニ陵ヲ定ラレシカバ、白鳥又飛テ天ニノボリヌ。仍三ノ陵アリ。彼草薙ノ釼ハ宮簀媛アガメタテマツリテ尾張ニトヾマリ給。今ノ熱田神ニマシマス。五十一年秋八月、武内ノ宿祢ヲ棟梁ノ臣トス。五十三年秋、小碓ノ命ノ平シ國ヲメグリミザランヤトテ東國ニ幸ヒ（シ）給。十二月アヅマヨリカヘリテ伊勢ノ綺（カハタ）ノ宮ニマシマス。五十四年秋、伊勢ヨリ大和ニウツリ、纏向ノ宮ニカヘリ給。天下ヲ治給コト六十年。百四十歳ヲマシ〱キ。

第十三代、成務天皇ハ景行第三子。御母八坂入姫、八坂入（彦王）ノ皇子崇神ノ御女（子）女也。日本武尊日嗣ヲウケ給フベカリシニ、世ヲハヤクシマシ〱シカバ、此御門立給。辛未歳、即位。近江

ノ志賀高穴穗ノ宮ニマシマス。神武ヨリ十二代大和國ニマシ〳〵キ。（景行天皇ノスヱツカタ此高穴穗ニマシ〳〵シカドモ定ル皇都ニハアラズ、）此時ハジメテ他國ニウツリ給。三年ノ春武内ノ宿禰ヲ大臣トス。（大臣ノ號コレニハジマル。）四十八年ノ春、姪仲足彥ノ尊（ヲ）（日本武尊ノ御子）タテ、皇太子トス。天下ヲ治給コト六十一年、百七歳ヲマシ〳〵キ。

第十四代、第十四世、仲哀天皇ハ日本武尊第二ノ子、景行御孫也。御母兩道入姫、垂仁天皇女也。大祖神武ヨリ第十二代景行マデハ代ノマヽニ繼躰シ給。日本武尊世ヲハヤクシ給シニヨリテ、成務是ヲツギ給。此天皇ヲ太子トシ、ユヅリマシ〳〵シヨリ代ト世トカハレル初也。コレヨリハ世ヲ本トシルシ奉ベキ也。（代ト世トハ常ノ義差別ナシ。然ド、凡ノ承道（運）トマコトノ繼躰トヲ分別セン爲ニ書分タリ。但字書ニモソノイハレナキニアラズ。代ハ更ノ義之。世ハ周礼ノ註ニ父死テ子立ヲ世ト云トアリ。）此天皇、御カタチイトキラ〳〵シク御タケ一丈マシ〳〵ケル。壬申ノ年即位。此御時熊襲又反乱シテ朝貢セズ。天皇軍ヲメシテミヅカラ征伐ヲイタシ、筑紫ニムカヒ給。皇后息長足姫尊ハ越前ノ國笥飯ノ神ニマウデ、ソレヨリ北海ヲメグリテ行アヒ給ヌ。コヽニ神アリテ皇后ニカタリ奉ル。コレヨリ西ニ宝ノ國アリ。ウチテシタガヘ給ヘ。熊襲ハ小國之。又伊弉諾、伊弉冊ノウミ給ヘリシ國ナレバ、ウタズトモツヰニシタガヒタテ

マツリナントアリシヲ、天皇ウケガヒ給ハズ、事ナラズシテ橿日ノ行宮ニシテカクレ給。長門ニヲサメ奉ル。是(ヲ)穴戸豐浦ノ宮ト申ス。天下ヲ治給コト、九年。五十二歳ヲマシ〳〵キ。

第十五代、神功皇后ハ息長ノ宿祢ノ女、開化天皇四世ノ御孫也。息長足姫ノ尊ト申ス。仲哀タテ、皇后トス。仲哀神ノヲシヘニヨラズ、世ヲ早クシ給シカバ、皇后イキドヲリマシテ、七日アテ別殿ヲ作リイモホリコモラセ給。此(時)應神天皇ハラマレマシ〳〵ケリ。神カヽリテサマ〳〵道ヲオシヘ給フ。此神ハ表筒男、中筒男、底筒男ナリトナンナノリ給ケリ。是ハ伊弉諾尊、日向ノ小戸ノ川、檍ガ原ニテミソギシ給シ時化生シマシケル神也。後ニハ攝津國住吉ニイツカレ給神コレナリ。カクテ新羅百濟高麗（此三ケ國ヲ三韓ト云。正ハ新羅ニカギルベキカ。辰韓長(馬)韓弁韓ヲスベテ新羅ト云之。シカレドフルクヨリ百濟高麗ヲクハヘテ三韓ト云ナラハセリ。）(ヲ)ウチシタガヘ給キ。海神カタチヲアラハシ、御舩ヲハサミマボリ申シカバ、思ノ如ク彼國ヲ平ゲ給。神代ヨリ年序久クツモレリシニ、カク神威ヲアラハシ給ケル、不レ測御コトナルベシ。海中ニシテ如意ノ珠ヲ得給ヘリキ。サテツクシニカヘリテ皇子ヲ誕生ス。應神天皇ニマシマス。神ノ申給シニヨリテ是ヲ胎中ノ天皇トモ申。皇后攝政ノ辛巳年ヨリ天下ヲシラセ給。皇后イマダ筑紫ニマシ〳〵シ時、皇子ノ異母ノ兄、忍熊ノ

王謀反ヲオコシテ、フセギ申サントシケレバ、皇子ヲバ武内ノ大臣ニイダカセテ紀伊ノ水門ニツケ、皇后ハスグニ難波ニツキ給テ、程ナク其乱ヲ平ゲラレニキ。皇子ヲトナビ給シカバ、皇太子トス。武内大臣モハラ朝政ヲ輔佐シ申ケリ。大和ノ磐余稚櫻ノ宮ニマシマス。是ヨリ三韓ノ國年ゴトニ御ツキヲソナヘ、此國ヨリモ彼國ニ鎮守ノツカサヲヲカレシカバ、西蕃相通テ國家トミサカリナリキ。又モロコシヘモ使ヲツカハサレケルニヤ。倭國ノ女王遣レ使テ來朝スト後漢書ニミエタリ。元年辛巳年ハ漢ノ孝獻帝廿一年ニアタル。漢ノ世始リテ、十四代ト云シ時 王莽ト云臣、位ヲウバヒテ、十四年アリテ(キ)。其後漢ニカヘリテ又、十三代孝獻ノ時ニ漢ハ滅ヌ此御代ノ十九年己亥ニ獻帝位ヲサリテ魏ノ文帝ニユヅル。是ヨリ天下三ニワカレテ、魏蜀呉トナル。呉ハ東ニヨレル國ナレバ、日本ノ使モマヅ通ジケルニヤ。呉國ヨリ道々ノタクミナドマデワタサレテ(キ)。又彼國ニモ通ゼラレケルカトミエタリ。四十九年乙酉ト云シ年、魏又滅テ晉ノ代ニウツリニキ。(蜀ノ國ハ三十年癸未ニ魏ノタメニホロボサレ、呉ハ魏ヨリ後マデアリシガ、應神十七年辛丑晉ノタメニホロボサル。)此皇后天下ヲ治給コト六十九年。一百歳ヲマシ〳〵キ。

第十六代、第十五世、應神天皇(八)仲哀第四ノ子。御母神功皇后也。胎中ノ天皇トモ又ハ

譽田天皇トモナヅケタテマツル。庚寅年即位。大和ノ輕嶋豐明ノ宮ニマシマス。此時百濟ヨリ博士ヲメシ、經史ヲツタヘラレ、太子以下コレヲマナビナラヒテ此國ニ經史及文字ヲモチヰルコトハコレヨリハジマレリトゾ。異朝ノ一書ノ中ニ日本ハ呉ノ太伯ガ後之ト云トイヘリ。返々アタラヌコトナリ。昔日本ハ三韓ト同種也ト云事ノアリシ、カノ書ヲバ桓武ノ御代ニヤキステラレシナリ。天地開テ後、スサノヲノ尊韓ノ地ニイタリ給キナド云事アレバ、彼等ノ國々モ神ノ苗裔ナラン事アナガチニクルシミナキニヤ。ソレスラ昔ヨリモチヰザルコト也。天地神ノ御スヱナレバ、ナニシニカ、代クダレル呉太伯ガ後ニアルベキ。三韓震旦ニ通ジテヨリ以來、異國ノ人ヲホク此國ニ歸化ス、秦ノスヱ漢ノスヱ、高麗、百濟ノ種、ソレナラヌ蕃人ノ子孫モキタリテ、神皇ノ御スヱト混乱セシニヨリテ姓氏錄ト云文ヲツクラレキ。ソレモ人民ニトリテノコトナルベシ。異朝ニモ人ノ心マチ〳〵ナレバ、異學ノ輩ノ云出セル事歟。後漢書ヨリゾ此國ノコトヲバアラ〳〵シルセル、符合シタルコトモアリ、又心エヌコトモアルニヤ。唐書ニハ日本ノ皇代記ヲ神代ヨリ光孝ノ御代マデアキラカニノセタリ。サテモ此御時武內大臣筑紫ヲオサメンタメニ彼國ニツカハサレケル比、ヲトヽノ讒ニヨリ

テ、スデニ追討セラレシヲ、大臣ノ僕眞根子ト云人アリ。カホカタチ大臣ニ似タリケレバ、アヒカハリテ誅セラル。大臣ハ忍テ都ニマウデ、トガナキヨシヲ明メラレニキ。上古神靈ノ主猶カヽルアヤマチマシ/\シカバ、末代爭カツヽシマセ給ハザルベキ。天皇天下ヲ治給コト四十一年。百十一歳ヲマシ/\キ。

欽明天皇ノ御代ニ始テ神トアラハレテ、筑紫ノ肥後國菱形ノ國池、ト云所ニアラハレ給。ワレハ人皇十六代譽田ノ八幡丸ナリトノ給キ。譽田ハモトノ御名、八幡ハ垂迹ノ号、後ニ豐前ノ國宇佐ノ宮ニシヅマリ給シカバ聖武天皇東大寺建立ノ後巡礼シ給ベキヨシ託宣アリキ。仍威儀ヲトヽノヘテムカヘ申サル。又神託アリテ御出家ノ儀アリキ。ヤガテ彼寺ニ勸請シ奉ル。サレド勅使ナドハ宇佐ニマイリキ。清和ノ御時大安寺ノ僧行教宇佐ニマウデタリシニ靈告アリテ今ノ男山石清水ニウツリマシマス。尓來行幸モ奉幣モ石清水ニアリ。一代一度宇佐ヘモ勅使ヲタテマツラル。昔天孫天降給シ時御共神、八百万アリキ。大物主ノ神シタガヘテ、天ヘノボリシモ八十万ノ神ト云リ。今マデモ幣帛ヲ奉マツラル、神三千餘坐也。シカルニ、天照太神ノ宮ニナラビテ、二所ノ宗廟トテ八幡ヲアフギ申サルヽコト、イトタウトキ

御事ゝ。八幡ト申御名ハ御託宣ニ得道來不レ動ニ法性一、示ニ八正道一垂ニ權迹一、背（皆）得ニ解ニ脱苦衆生一、故号ニ八幡大菩薩一。トアリ。八正トハ内典ニ、正見、正思惟、正語、正業、正命、正精進、正定、正惠是ヲ八正道ト云。凡心正ナレハ、身口ハヲノヅカラキヨマル。三業ニ邪ナクメ、内外眞正ナルヲ諸佛出世ノ本懐トス。神明ノ垂迹モ又コレガタメナルベシ。又八方ニ八色ノ幡ヲ立ルコトアリ。密教ノ習、西方阿彌陀ノ三昧耶形也。其故ニヤ、行教和尚ニハ彌陀三尊ノ形ニテミエサセ給ケリ。光明、袈裟ノ上ニウツラセマシ／＼ケルヲ頂戴メ、男山ニハ安置シ申ケリトゾ。神明ノ本地ヲ云コトハタシカナラヌタグヒヲホケレド、大丼ノ應迹ハ昔ヨリアキラカナル證據ヲハシマスニヤ。或ハ又「昔於ニ靈鷲山一説ニ妙法華經一」トモ或ハ弥勒ナリトモ大自在王丼ナリトモ託宣シ給。中ニモ八正ノ幡ヲタテ、、八方ノ衆生ヲ濟度シ給本誓ヲ能々思入テツカフマツルベキニヤ。天照太神モタヾ正直ヲノミ御心トシ給ヘル。神鏡ヲ傳マシ／＼（マ）スコトノ起ハサキニモシルシ侍ヌ。又雄略天皇廿二年ノ冬十一月伊勢ノ神宮ノ新甞ノマツリ夜フケテカタヘノ人々罷出テ後、神主物忌等バカリ留タリシニ、皇太神豐受ノ太神、倭姫命ニカヽリテ託宣シ給シニ、人ハスナハチ天下ノ神物ナリ。心神ヲヤブルコトナカレ。

神ハタルヽニ祈禱ヲ以テ先トシ、冥ハクハフルニ、正直ヲ以テ本トストアリ。同廿三年二月カサネテ託宣シ給シニ、日月ハ四州([illegible])ヲメグリ、六合ヲ照スト云トモ、正直ノ頂ヲ照スベキ之。大方(サレバ[illegible])、二所宗廟ノ御心ヲシラント思ハヾ、只正直ヲ先トスベキ之。大方天地ノ間、アリトアル人陰陽ノ氣ヲウケタリ。不正ニメハタツベカラズ。コト更ニ此國ハ神國ナレバ、神道ニタガヒテハ一日モ日月ヲイタヾクマジキイハレナリ。倭姫ノ命人ニヲシヘ給ケレ(ル)ハ、黒心ナクシテ、丹心ヲモテ清潔ヲ(ク)齊愼、左ノ物ヲ右ニウツサズ、右ノ物ヲ左ニウツサズシテ、左ヲ左トシ、右ヲ右トシ、左ニカヘリ、右ニメグルコトモ(ナク)、万事タガフコトナクシテ太神ニツカフマツレ、元々本々、故ナリトナム。マコトニ君ニツカヘ、神ニツカヘ、國ヲオサメ、人ヲオシヘンコトモカヽルベシトゾオボエ侍。スコシノ事モ心ニユルス所アレバ、ヲホキニアヤマル本トナル。周易ニ霜ヲ履堅氷ニ至ト云コトヲ孔子尺メノ給ハク、積善家ニ餘慶アリ。(積)不善ノ家ニ餘殃アリ。君ヲ殺シ、父ヲ殺スルコト一朝一夕ノ故ニアラズト云フ。毫釐モ君ヲイルカセニ(スル)心ヲキザスモノハカナラズ乱臣トナル。芥蔕モ(親ヲ)ヲロソカニスルカタチアルモノハ果メ賊子トナル。此故ニ、古ノ聖人、道ハ須

臾モハナルベカラズ、ハナルベキハ道ニアラズト云ケリ。但、其ノ末ヲ學源ヲ明メザレバ、コトニ其道ヲ〔望テ〕覺エザル過アリ。其源ト云ハ、心ニ一物ヲタクハエザルヲ云。シカモ虚無ノ中ニ留ルベカラズ。天地アリ、君臣アリ。善惡ノ報影響ノ如シ。己ガ欲ヲステ、人ヲ利スルヲ先トシ、境〻ニ對スルコト鏡ノ物ヲ照スガ如ク、明々トシテ迷ハザランヲマコトノ正道ト云ベキニヤ。代クタレリトテ、自ラ苟ムベカラズ。天地ノ始ハ今日ヲ始トスル理ナリ。加之、君モ臣モ神ヲサルコト遠カラズ。常ニ冥ノ知見ヲカヘリミ、神ノ本誓ヲサトリテ正ニ居セシ〔ン〕コトヲ心ザシ、邪ナカランコトヲ思給ベシ。

第　七代、仁徳天皇ハ應神第一ノ御子。御母仲姫ノ命、五百城入彦皇子女也。大鷦鷯ノ尊ト申。應神ノ御時、菟道稚皇子ト申ハ㝡末ノ御子ニテマシ〱シヲウツクシミ給テ、太子ニ立ムトヲボシメシケリ。兄ノ御子達ウケガヒ給ハザリシヲ此天皇ヒトリウケガヒ給シニヨリテ、應神悅マシテ、菟道稚ヲ太子トシ此尊ヲ輔佐ニナン定メ給ケル。應神カクレマシ〱シカバ御兄達太子ヲ失ハントセラレシヲ、此尊サトリテ太子ト心ヲ一ニシテ彼ヲ誅セラレキ。爰太子天位ヲ尊ニ讓給、尊堅クイナミ給。三年ニナルマデ、互ニ讓テ位ヲ空ス。太子ハ山城ノ

宇治ニマス。尊ハ攝津ノ難波ニマシケリ。國々ノ御ツキ物モアナタカナタニウケトラズメ、民ノ愁トナリシカバ、太子ミヅカラ失給ヌ。尊ヲドロキ歎給コトカギリナシ。サレドノガレマスベキミチナラネバ癸酉ノ年即位。攝津國難波高津ノ宮ニマシマス。日嗣ヲウケ給シヨリ國ヲシヅメ、民ヲアハレミ給コトタメシモマレナリシ御事ニヤ。民間ノ貧キコトオボシテ、三年ノ御調ヲ止ラレキ。高殿ニノボリテミ給ヘバ、ニギハ、シクミエケルニヨリテ「高屋ニノボリテミレバ煙立民ノカマドハニギハヒニケリ」トゾヨマセ給ケル。サテ猶三年ヲ許サレケレバ、宮ノ中破テ、雨露モタマラズ。宮人ノ衣壞テ其ヨソホヒ全カラズ。御門ハ是ヲタノシミトナムヲボシケリ(ル)。カクテ六年ト云ニ、國々ノ民各マイリ集テ大宮造シ、色々ノ御調ヲ備ヘケルトゾ。アリガタカリシ御政ナルベシ。天下ヲ治給コト八十七年。百十歳ヲマシ／＼キ。

第十八代、履中天皇ハ仁德ノ太子。御母磐余〔之古記〕姫ノ命、高城ノ襲津彥ノ女也。庚子ノ年即位。又大和ノ磐余稚櫻ノ宮ニマシマス。後ノ稚櫻ノ宮ト申。天下ヲ治給コト六年。六十七歳ヲマシ／＼キ。

第十九代、反正天皇ハ仁徳第三ノ子、履中同母ノ弟也。丙午年即位。河内ノ丹比ノ柴籬ノ宮ニマシマス。天下ヲ治給コト、六年。六十歳ヲマシ〳〵キ。

第廿代、允恭天皇ハ仁徳第四子、履中反正同母弟（也）。壬子ノ年即位。大和ノ遠明日香ノ宮ニマシマス。此御時マデハ三韓ノ御調年々ニカハラザリシニ、コレヨリ後ハツネニヲコタリケリトナン。八年己未ニアタリテ、モロコシノ晋ホロビテ、南北朝トナル。宋・齊・梁・陳アヒツギテ起ル。是ヲ南朝ト云。後魏・北齊・後周ツギ〳〵ニオコレリシヲ北朝ト云。百七十余年ハナラビテ立タリキ。此天皇天下ヲ治給コト四十二年。八十歳ヲマシ〳〵キ。

第廿一代、安康天皇ハ允恭第二ノ子。御母忍坂大中姫稚渟野毛二流〔派〕ノ皇子（ノ）〈應神御子〉ノ女也。甲午年即位。大和穴穗宮ニマシマス。大草香皇子〈仁徳御子〉ヲコロシテ、其妻ヲトリテ、皇后トス。彼皇子ノ子眉輪ノ王ヲサナクテ母ニシタガヒテ宮中ニ出入シケリ。天皇高樓ノ上ニ醉臥給ケルヲウカヾヒテサシコロシテ大臣葛城ノ圓ガ家ニニゲコモリヌ。此天皇天下ヲ治給コト三年。五十六歳ヲマシ〳〵キ。

第廿二代　雄略天皇ハ允恭第五子、安康同母ノ弟也。大泊瀬尊ト申。安康コロサレ給シ時、眉

輪ノ王及円ノ大臣ヲ誅セラル。アマサヘ其事ニクミセラレザリシ市邊押羽皇子ヲサヘニコロノ位ニ即給。コトシ丁酉ノ年也。大和ノ泊瀬朝倉ノ宮ニマシマス。天皇性猛マシ〳〵ケレドモ、神ニ通ジ給ヘリトゾ。廿一年丁巳冬十月ニ伊勢ノ皇太神、大和姫ノ命ニヲシヘ給、丹波國与佐ノ魚井ノ原ヨリメ豊受ノ太神ヲ迎ヘ奉ラル。大和姫ノ命奏聞シ給シニヨリテ、明年戊午ノ秋七月ニ勅使ヲサシテムカヘタテマツル。九月ニ度會ノ郡山田ノ原ノ新宮ニシヅマリ給。垂仁天皇ノ御代ニ、皇太神五十鈴ノ宮ニ遷ラシメ給シヨリ四百八十四年ニナムナリニケリ(ルヽ)。神武ノ始ヨリスデニ千百餘年ニ成スルニヤ。又コレマデ、大倭姫ノ命存生シ給シカバ、内外宮ノツクリモロノ小宮ノ圖形久(文)形ニヨリテナサセ給ケリトゾ。抑此神ノ御事異説マシマス。外宮ニハ天祖天御中主ノ神ト申傳タリ。サレバ、皇太神ノ詫宣ニテ此宮ノ祭ヲ先ニセラル。神(ヲ)拜奉ルモ先ヅ此宮ヲ先トス。天孫瓊々杵ノ尊此宮ノ相殿ニマシマス。仍天兒屋ノ命、天太玉ノ命モ天孫ニツキ申テ相殿ニマス之。コレヨリ二所太神宮ト申。丹波ヨリ遷ラセ給コトハ昔豊鋤入姫ノ命天照太神ヲ頂戴メ丹波ノ吉佐ノ宮ニウツリ給ケル比此神アマクダリテ、一所ニテハシマス。四年アリテ、天照太神ハ又大和ニカヘラセ給。ソ

レヨリ此神ハ丹波ニトマラセ給シヲ道主ノ命ト云人イツキ申ケリ。古ハ此宮ニモ御饌(ミケ)ヲトヽノヘテ內宮ヘモ毎日ニヲクリ奉テ(シヲ)、神龜年中ヨリ外宮ニ御饌殿ヲタテ、內宮ノヲモ一所ニテ奉トナン。カヤウノ事ニヨリテ御饌ノ神ト申說アレド、御食ト御氣トノ兩義アリ。陰陽元初ノ御氣ナレバ、天ノ狹霧國ノ狹霧ト申御名モアレバ、猶サキノ說ヲ正トスベシトゾ。天孫サヘ相殿ニマシマセバ、御饌ノ神ト云說ハ用ガタキ事ニヤ。此天皇天下ヲ治給コト廿三年。八十歳マシ／＼キ。

第二十三代、淸寧天皇ハ雄略第三ノ子。御母韓媛。葛城ノ圓(ツブラ)ノ大臣ノ女也。庚申ノ年即位。大倭ノ磐余甕栗(ミカクリ)ノ宮ニマシマス。誕生ノ始白髮ヲハシケレバ、シラカノ天皇トゾ申ケル。御子ナカリシカバ、皇胤ノタエヌベキ事ヲ歎給テ、國々ヘ勅使ヲツカハシテ皇胤ヲ求ラル。市邊ノ押羽ノ皇子、雄略ニコロサレ給シトキ、皇女一人、皇子二人マシケルガ、丹波國ニカクレ給ケルヲ求出テ、御子ニシテヤシナヒ給ケリ。天下ヲ治給コト五年。卅九歳ヲマシ／＼キ。

第廿四代、顯宗天皇ハ市邊押羽ノ皇子第三ノ子、履中天皇孫也。御母、弟媛(ヲトヒメ)、蟻(アリ)ノ臣女也。白髮天皇養テ子トシ給フ。御兄仁賢先位ニ即給ベカリシヲ相共ニ讓マシ／＼シカバ、同母ノ御

姉飯豐ノ尊シバラク位ニ居給キ。サレドヤガテ顯宗定リマシ〳〵シニヨリテ飯豐天皇ヲバ日嗣ニハカゾヘタテマツラヌ也。乙丑ノ年即位。大和ノ近明日香八釣ノ宮ニマシマス。天下ヲ治給コト三〔十〕年。四十八歳ヲマシ〳〵キ。

第廿五代、仁賢天皇ハ顯宗同母ノ御兄也。雄略ノ我父ノ皇子ヲコロシ給シコトヲウラミテ、御陵ヲホリテ御屍ヲハヅカシメントノ給シヲ、顯宗イサメマシ〳〵シニヨリテ德ノヲヨバザルコトヲハヂテ顯宗ヲサキダテ給ケリ。戊辰ノ年即位。大和石上廣高ノ宮ニマシマス。天下ヲ治給コト十一年。五十歳ヲマシ〳〵キ。

第廿六代、武烈天皇ハ仁賢ノ太子。御母大娘ノ皇女、雄略ノ御女也。己卯ノ年即位。大和ノ泊瀬列城ノ宮ニマシマス。性サガナクマシテ、悪トシテナサズト云コトナシ。仍天祚モ久カラズ。仁賢(德)サシモ聖德マシ〳〵シニ、此皇胤コヽニタエニキ。聖德ハ必百代ニマツラル春秋ニミユ。トコソミエタレド、不德ノ子孫アラバ、其宗ヲ滅スベキ先蹤甚ヲホシ。サレバ上古ノ聖賢ハ子ナレドモ慈愛ニヲボレズ、器ニアラザレバ傳コトナシ。堯ノ子丹朱不肖ナリシカバ、舜ニサヅケ、舜ノ子商均又不肖ニテ、夏禹ニ讓ラレシガ如シ。堯舜ヨリコナタニハ猶天下ヲ私

天下ヲ治給コト、廿五年。八十（八十二イ）歳ヲマシ〳〵キ。

第廿八代、安閑天皇ハ繼躰ノ太子、御母ハ日（目）子姫、尾張ノ草香ノ連ノ女也。甲寅年即位。大和ノ句倉（勾ノ金橋）ノ宮ニマシマス。天下ヲ治給コト二年。七十歳ヲマシ〳〵キ。

第廿九代、宣化天皇ハ繼躰第二ノ子、安閑同母ノ弟也。丙辰ノ年即位、大和ノ檜隈廬入野ノ宮ニマシマス。天下ヲ治給コト四年。七十（三）歳ヲマシ〳〵キ。

第三十代、第廿一世欽明天皇ハ繼躰第三ノ子。御母皇后手白香ノ皇女、仁賢天皇ノ女也。兩兄マシ／＼シカド、此天皇ノ御スヱ世ヲタモチ給。御母方モ仁徳ノナカレニテマシマセバ、猶モ其遺徳ツキズ〆カクサダマリ給ケルニヤ。庚申年即位。大倭磯城嶋ノ金刺ノ宮ニマシマス。十三年壬申（十）月ニ百濟ノ國ヨリ佛法僧ヲワタシケリ。此國ニ傳來（ノ始也）。釋迦如來滅後一千（十六）年ニアタル年、モロコシノ後漢ノ明帝永平十年ニ佛法ハジメテ、彼國ニツタハル。ソレヨリ此壬申ノ年マデ、四百八十八年。モロコシテ（ニ）ハ北朝ノ齊（ノ）文宣帝即位三年、南朝ノ梁（ノ）簡文帝ニモ即位三年也。簡文帝ノ父ヲ武帝ト申キ。大ニ佛法ヲアガメフレキ。此御代ノ初ツカタハ武帝同時也。佛法ハジメテ傳來セシ時、他國ノ神ヲアガメ給ハンコト我國ノ神慮ニタガフベキヨシ群臣カタク諫申ケルニヨリテステラレニキ。サレド此國ニ三寶ノ名ヲキクコトハ此時ニハジマル。又私ニアガメツカヘ奉ル人モアリキ。天皇聖徳マシ／＼テ、三宝ヲ感ゼラレケルニコソ。群臣ノ諫ニヨリテ其法ヲタテラレズトイヘドモ、天皇

ノ叡志ニハアラザルニヤ。昔佛在世ニ、天竺ノ月蓋長者、鑄タテマツリシ弥陁三尊ノ金像ヲ傳テワタシ奉リケル。難波ノ堀江ニステラレタリシヲ善光ト云者、トリ奉テ信濃ノ國ニ安置シ申キ。今（ノ）善光寺コレ也。此御時八幡大菩薩始テ垂迹シマシマス。天皇天下ヲ治給コト卅二年。八十一歳オマシ〳〵キ。

第卅一代、第廿二世、敏達天皇ハ欽明第二ノ子。御母石媛ノ皇女、宣化天皇ノ女也。壬辰年即位。大倭磐余譯語田ノ宮ニマシマス。二年癸巳年、天皇ノ御弟、豐日皇子ノ妃御子ヲ誕生ス。厩戸ノ皇子ニマシマス。生給シヨリサマ〴〵ノ奇瑞アリ。タヽ人ニマシマサズ。御手ヲニギリ給シガ、二歳ニテ東方ニムキテ南无佛トテヒラキ給シカバ、一ノ舍利アリキ。佛法流布ノタメニ權化シ給ヘルコト疑ナシ。此佛舍利ハ今ニ大倭ノ法隆寺ニアガメ奉ル。天皇天下ヲ治給コト十四年。六十一歳オマシ〳〵キ。

第卅二代、用明天皇ハ欽明第四ノ子。御母堅塩姫、蘇我ノ稻目大臣ノ女也。豐日ノ尊ト申。厩戸ノ皇子ノ父ニオハシマス。丙午年即位。大和ノ池邊列槻ノ宮ニマシマス。佛法ヲアガメテ我國ニ流布セムトシ給ケルヲ、弓削守屋ノ大連カタムケ申。ツ井ニ叛逆ニオヨビ又（ヌ）。

厩戸ノ皇子、蘇我ノ大臣ト心ヲ一ニシテ誅戮セラレ(ル)。スナハチ佛法ヲヒロメラレニケリ。天皇天下ヲ治給コト二年。四十一歳オマシ／＼キ。

第卅三代、崇峻天皇ハ欽明第十二ノ子。御母小姉君ノ娘、コレモ稲目ノ大臣ノ女也。戊申年即位。大和ノ倉橋ノ宮ニマシマス。天皇横死ノ相ミエ給。ツヽシミマスベキヨシヲ厩戸ノ皇子奏給ケリトゾ。天下ヲ治給コト五年。七十二歳オマシ／＼キ。或人ノ云、外舅蘇我ノ馬子大臣ト御中アシクシテ彼大臣ノタメニコロサレ給キトモイヘリ。

第卅四代、推古天皇ハ欽明ノ御女、用明同母ノ御妹也。御食炊屋姫ノ尊ト申。敏達天皇ニ后トシ給。仁徳モ異母ノ妹ヲ妃トシ給コトアリキ。崇峻カクレ給シカバ、癸丑即位。大倭ノ小墾田ノ宮ニマシマス。昔神功皇后六十餘年天下ヲ治給シカドモ、攝政ト申テ天皇トハ号シタテマツラサルニヤ。此ミカドハ正位ニツキ給ニケルニコソ。即厩戸ノ皇子ヲ皇太子トシテ万機ノ政ヲマカセ給、攝政ト申キ。太子ノ監國ト云コトモアレド、ソレハシバラクノ事也。コレハヒトヘニ天下ヲ治給ケリ。太子聖徳マシ／＼シカバ、天下ノ人ツクコト日ノ如ク、仰グコト雲ノ如シ。太子イマダ皇子ニテマシ／＼(シ)時、逆臣守屋ヲ誅シ給シヨリ佛法始テ流布シキ。マシテ政ヲシラセ

給ヘバ、三宝ヲ敬、正法ヲヒロメ給コト佛世ニモコトナラズ。又神通自在ニマシ〳〵キ。御身ヅカラ法服ヲ着ノ、經ヲ講ジ給シカバ、天ヨリ花ヲフラシ、放光動地ノ瑞アリキ。天皇群臣タウトビアガメ奉ルコト佛ノゴトシ。伽藍ヲタテラル、事、四十餘ケ所ニヲヨベリ。又此國ニハ昔ヨリ人スナヲニノ法令ナンドモサダマラズ。十二年甲子ニハジメテ冠位(クワンヰ)ト云コトヲサダメ、冠ノシナニヨリテ上下ヲサダムルニ十八階アリ。十七年己巳ニ憲法十七ケ條ヲツクリテ奏シ給。内外典ノフカキ道ヲサグリテム子ヲツヾマヤカニシテツクリ給ヘル也。天皇悦テ天下ニ施行セシメ給キ。此コロオヒハモロコシニハ隋(ズイ)ノ世也。南北朝相分シガ、南ハ正統ヲウケ、北ハ戎狄(ジユウテキ)ヨリオコリシカドモ、中國ヲバ、北朝ニゾオサメケル。隋ハ北朝ノ後周ト云シガ、ユヅリヲウケタリキ。後ニ南朝ノ使（陳）ヲウチタヒラゲテ、一統ノ世トナレリ。此天皇ノ元年癸丑ハ文帝一統ノ後四年也。十三年乙丑ハ煬(ヤウ)帝ノ即位元年ニアタレリ。彼國ヨリハジメテ使ヲオクリヨシミヲ通ジケリ。隋帝ノ書ニ皇帝恭問(ツヽシムデトフ)ニ倭皇ニトアリシヲコレハモロコシノ天子ノ諸侯王ニツカハス礼儀ナリトテ、群臣アヤシミ申ケルヲ太子ノ、給ケルハ皇ノ字ハタヤスク用ザル詞ナレバトテ、返報ヲモカ、セ給、サマ〳〵饗祿ヲタマヒテ、使ヲカヘシツカハサル。是ヨリ此國

ヨリモツ子ニ使ヲツカハサル。其使ヲ遣隋大使トナムナヅケラレシニ、廿七年己卯ノ年、隋滅テ唐ノ世ニウツリヌ。廿九年辛巳ノ年、太子カクレ給。御年四十九。天皇ヲハジメタテマツリテ、天下ノ人カナシミオシミ申コト父母ニ喪スルガゴトシ。皇位ヲモツギマシマスベカリシカドモ、權化ノ御コトナレバ、サダメテユヘアリケンカシ。御諱ヲ聖德トナヅケ奉ル。コノ天皇天下ヲ治給コト卅六年。七十歲オマシ〳〵キ。

第卅五代、第廿四世、舒明天皇ハ忍坂大兄ノ皇子ノ子、敏達ノ御孫也。御母糠手姬ノ皇女、コレモ敏達ノ御女也。推古天皇ハ聖德太子ノ御子ニ傳給ハントオボシメシケルニヤ。サレドマサシキ敏達ノ御孫、欽明ノ嫡曾孫ニマシマス。又太子御病ニフシ給シ時、天皇此皇子ヲ御使トメトブラヒマシヽニ、天下ノコトヲ太子ノ申付給ヘリケルトゾ。癸丑年即位。大倭ノ高市郡岡本ノ宮ニマシマス。此即位ノ年ハモロコシノ唐ノ大宗ノハジメ、貞觀三年ニアタレリ。天下ヲ治給コト十三年。四十九歲オマシ〳〵キ。

第卅六代、皇極天皇ハ茅停〔渟〕ノ王ノ女、忍坂大兄ノ皇子ノ孫、敏達ノ曾孫也。御母、吉備姬ノ女王ト申キ。舒明天皇々后トシ給。天智、天武ノ御母也。舒明カクレマシテ、皇子オサナク

〔蝦夷の傍訓エビスとありエミジと訂す〕

オハシマシ、カバ、壬寅ノ年即位。大倭明日香河原ノ宮ニマシマス。此時ニ蘇我蝦夷(エミシ)ノ大臣馬子ノ大臣ノ子。ナラビニソノ子入鹿(イルカ)、朝權ヲ專(モハラ)ニシテ皇家ヲナイガシロニスル心アリ。其家ヲ宮門ト云、諸子ヲ王子トナム云ケル。上古ヨリノ國紀重寶ミナ私家ニハコビヲキテケリ。中ニモ入鹿悖逆(ハイギャク)ノ心ハナハダシ、聖德太子ノ御子達ノトガナクマシ〳〵シヲホロホシ奉ル。コヽニ皇子、中ノ大兄ト申ハ舒明ノ御子、ヤガテ此天皇御所生也。中臣鎌足(カマタリ)ノ連(ムラジ)ト云人ト心ヲ一ニシテ、入鹿ヲコロシツ。父蝦夷モ家ニ火ヲツケテウセヌ。國紀重寶ハミナ燒ニケリ。蘇我ノ一門久ク權ヲトレリシカドモ、積惡ノユヘニヤミナ滅ヌ。山田石川丸ト云人ゾ皇子ト心ヲカヨハシ申ケレバ、滅セザリケル。此鎌足ノ大臣ハ天兒屋根ノ命廿一世孫也。昔、天孫アマクダリ給シ時、諸神ノ上首ニテ、此命殊ニ天照太神ノ勅ヲウケテ、輔佐ノ神ニマシマス。中臣ト云コトモ二神ノ御中ニテ、神ノ御心ヲヤハラゲテ申給ケルユヘトゾ。其孫天種子ノ命神武ノ御代ニ祭事ヲツカサドル。上古ハ神ト皇ト一ニマシ〳〵シカバ、祭ヲツカサドルハ即政ヲトレル也。政ノ字ノ訓ニテモ知ベシ。其後天照太神始テ伊勢國ニシヅマリマシ、時、種子ノ命ノスエ大鹿嶋ノ命祭官ニナリテ、鎌足大臣ノ父、小德冠御食子マデモソノ官ニテツカヘタリ。鎌足ニイタリテ大勳

ヲタテ、世ニ寵セラレシニヨリテ、祖業ヲオコシ、先列(烈)ヲサカヤカサレケル。無レ止コト也。カツハ神代ヨリノ餘風ナレバ、シカルベキコトハリトコソオボエ待(侍)レ。後ニ内臣ニ任ジ、大臣ニ轉ジ、大織冠(トナル)正一位ノ名ナリ。又中臣ヲアラタメテ藤原ノ姓ヲ給ル。内臣ニ任ゼラル、事ハ此御代ニハアラズ。事ノ次ニシルス。此天皇天下ヲ治給コト三年アリテ、同母ノ御弟輕ノ玉(王)ニ讓給。御名ヲ皇祖母ノ尊トゾ申ケル。

第卅七代、孝徳天皇ハ皇極同母ノ弟也。乙巳年即位。攝津國長柄豐崎ノ宮ニマシマス。此御時ハジメテ大臣ヲ左右ニワカタル。大臣ハ成務ノ御時武内ノ宿禰ハジメテコレニ任ズ。仲哀ノ御代ニ又大連ノ官ヲヽカル。大臣大連ナラビテ政ヲシレリ。此御時大連ヲヤメテ左右ノ大臣トス。又八省百官ヲサダメラル。中臣ノ鎌足ヲ内臣ニナシ給。天下ヲ治給コト十年。五十(九)歳オマシ〳〵キ。

第卅八代　齊明天皇ハ皇極ノ重祚也。重祚ト云コトハ本朝ニハコレニ始レリ。異朝ニハ殷大甲不明ナリシカバ、伊尹是ヲ桐宮ニシリゾケテ、三年政ヲトレリキ。サレド帝位ヲスツルマデハナキニヤ。大甲アヤマチヲ悔テ、徳ヲオサメシカバモトノゴトク天子トス。晋世ニ桓玄

ト云シ者、安帝ノ位ヲウバイテ八十日アリテ、義兵ノ爲ニコロサレシカバ、安帝位ニカヘリ給。唐ノ世トナリテ、則天皇后世ヲミダラレシ時、我所生ノ子ナリシカドモ、中宗ヲステ、廬陵王トス。オナジ御子豫王ヲタテラレシモ、又ステ、ミヅカラ位ニ井給。後ニ中宗位ニカヘリテ唐ノ祚タエズ。豫王モ又重祚アリ。是ヲ睿宗ト云。コレゾマサシキ重祚ナレド二代ニハタラ〔テ〕ズ。中宗睿宗トゾツラ子タル。我朝ニ皇極ノ重祚ヲ齊明ト号シ、孝謙ノ重祚ヲ稱徳ト号ス。異朝ニカハレリ。天日嗣ヲオモクスルユヘ歟。先賢ノ議サダメテヨシアルニヤ。乙卯年即位。コノタビハ大和ノ岡本ニマシマス。後ノ岡本ノ宮ト申。此御世ハモロコシノ唐高宗ノ時ニアタレリ。高麗ヲセメシニヨリテスクイノ兵ヲ申ウケシカバ、天皇皇太子ツクシマデムカハセ給。サレド三韓ツ井ニ唐ニ属シヽカバ、軍ナカヘサレヌ。其後モ三韓ヨシミヲワスルヽマデハナカリケリ。皇太子ト申ハ中ノ大兄ノ皇子ノ御事也。孝徳ノ御代ヨリ太子ニ立給。此御時ハ攝政シ給トミエタリ。天皇天下ヲ治給コト七年。六十八歳オマシ〳〵キ。

第卅九代、第廿五世天智天皇ハ舒明ノ御子。御母皇極天皇也。壬戌年即位。近江國大津ノ宮

ニマシマス。即位四年八月ニ内臣鎌足ヲ内大臣大織冠トス。又藤原朝臣ノ姓ヲ給。昔ノ大動ヲ賞(シ敢)給ケレバ、襃奬ナラビナシ。先後封ヲ給コト一万五千戸ナリ。病ノアヒダニモ行幸ノトブラヒ給ケルトゾ。此天皇中興ノ祖ニマシマス。光仁ノ御祖ナリ。國忌ハ時ニシタガヒテアラタマレドモ、コレハナガクカハラヌコトニナリニキ。天下ヲ治給コト十年。五十八歳オマシマシ〳〵キ。

第四十代、天武天皇ハ天智同母ノ弟也。皇太子ニ立テ大倭ニマシ〳〵キ。天智ハ近江ニマシマス。御病アリシニ太子ヲヨビ申給ケルヲ(近江ノ)朝廷ノ臣ノ中ニツゲシラセ申人アリケレバ、ミカドノ御意ノオモフキニヤアリケン、太子ノ位ヲミヅカラシリゾキテ、天智ノ御子、太政大臣大友ノ皇子ニユヅリテ、芳野宮ニ入給。天智カクレ給テ後、太友ノ皇子猶アヤフマレケルニヤ、軍ヲメシテ、芳野ヲ、ソハントゾハカリ給ケル。天皇ヒソカニ芳野ヲイデ伊勢ニコエ、飯高ノ郡ニイタリテ太神宮ヲ遙拜シ、美濃ヘカヽリテ東國ノ軍ヲメス。皇子高市、マイリ給シヲ大將軍トシテ美濃ノ不破ヲマボラシメ、天皇ハ尾張國ニゾコエ給ケル。國々シタガヒ申シヽカバ、不破ノ關ノ軍ニ打勝ヌ、則勢多ニノゾミテ合戰アリ。皇子ノ軍ヤブレテ、皇子

コロサレ給ヌ。大臣以下或ハ誅ニフシ、或ハ遠流セラル。軍ニシタガヒ申輩、シナ〲ニヨリテ其賞ヲオコナハレ(ル)。壬申年即位。大倭ノ飛鳥淨御原ノ宮ニマシマス。朝進(廷)ノ法度オホクサダメラレニケリ。上下ウルシヌリノ頭巾(カフリ)ヲキルコトモ此御時ヨリハジマル。天下ヲ治給コト十五年。七十三歳オマシ〲キ。

第四十一代、持統天皇ハ天智ノ御女也。御母越智娘、蘇我ノ山田石川丸ノ大臣ノ女也。天武天皇、太子ニマシ〲シヨリ妃トシ給。後ニ皇后トス。皇子草壁(カヘ)ワカクマシ〲シカバ、皇后朝ニノゾミ給。戊子年也。庚寅ノ春正月一日即位　大倭ノ藤原ノ宮ニマシマス。草壁ノ皇子ハ太子ニ立給シガ、世ヲハヤクシ給。ヨリテ、其御子輕ノ王ヲ皇太子トス。文武ニマス(シ)マス。前ノ太子ハ後ニ追号アリテ、長岡天皇ト申。此天皇天下ヲ治給コト十年、位ヲ太子ニユヅリテ太上天皇ト申キ。太上天皇ト云コトハ異朝ニ漢高祖ノ父ヲ大公ト云。尊号アリテ太上皇ト号ス。其後後魏ノ顯祖、唐高祖・玄宗、睿宗等也。本朝ニハ昔ハ其例ナシ。皇極天皇位ヲノガレ給シモ、皇祖母ノ尊ト申キ。此天皇ヨリゾ太上天皇ノ号ハ侍ル。五十八歳オマシ〲キ。

第四十二代、文武天皇ハ草壁ノ太子第二ノ子、天武ノ嫡孫也。御母阿閇ノ皇女、天智御女也。後ニ元明天皇ト申。丁酉年即位。猶藤原ノ宮ニマシマス。此御時唐國ノ礼ヲウツシテ宮室ノツクリ、文武官ノ衣服ノ色マデモサダメラレキ。又即位五年辛丑ヨリ始テ年号アリ。大寶ト云。コレヨリサキニ孝徳ノ御代ニ大化、白雉、天智ノ御時、白鳳、天武ノ御代ニ朱雀、朱鳥ナンド云号アリシカド、大寶ヨリ後コ(ニ)ソタエヌコトニハナリヌル。ヨリテ大寶ヲ年号ノ始トスル也。又皇子ヲ親王ト云コト此御時ニハジマル。又藤原ノ内大臣鎌足ノ子不比等ノ大臣、執政ノ臣ニテ律令ナンドヲモエラビサダメラレキ。藤原ノ氏此大臣ヨリイヨ〳〵サカリニナレリ。四人ノ子オハシキ。是ヲ四門ト云。一門ハ武智麿ノ大臣ノ流、南家ト云。二門ハ参議中衛大将房前ノ流、北家ト云。イマノ執政大臣オヨビサルベキ藤原ノ人々ミナコノ末ナルベシ。

字の傍訓ノキは本のまゝ

三門ハ式部卿宇合(ノキアヒ)ノ流、式家ト云。四門ハ左京大夫麿ノ流、京家トイヒシガ、ハヤクタエニケリ。南家式家モ儒胤(ジュイン)ニテイマニ相續スト云ドモ、タゞ北家ノミ繁昌ス。房前ノ大將人ニコトナル陰徳コソオハシケメ。又不比等ノ大臣ハ後ニ淡海公ト申也。興福寺ヲ建立ス。此寺ハ大織冠ノ建立ニテ山背ノ山階ニアリシヲコノオトゞ平城ニウツサル。仍山階寺トモ申

也。後ニ玄昉ト云僧唐ヘワタリテ法相宗ヲ傳テ此寺ニヒロメラレシヨリ、氏神春日ノ明神モ殊ニ此宗ヲ擁護シ給トゾ。春日神ハ天兒屋ノ神ヲ本トス。本社ハ河内ノ平岡ニマス。春日ニウツリ給コトハ神護景雲年中ノコト之。シカラバ此大臣以後ノコト也。又春日第一ノ御殿常陸鹿嶋神 第二ハ下総ノ香取神、三ハ平岡、四ハ姫御神ト申。シカレバ、藤氏ノ氏神ハ三御殿ニマシマス。　此天皇天下ヲ治給コト十一年。二十五歳オマシ〱キ。

〔底本シカラバよりマシマスまで本文とす今訂す〕

第四十三代、元明天皇ハ天智第四ノ女、持統異母ノ妹。御母（蘇我）嬪、コレモ山田石川丸ノ大臣ノ女之。草壁ノ太子ノ妃、文武ノ御母ニマシマス。丁未年即位。戊申ニ改元。三年庚戌、始テ大倭ノ平城宮ニ都ヲサダメラル。古ニハ代ゴトニ都ヲ改、スナハチソノミカトノ御名ニヨビ奉リキ。持統天皇藤原宮ニマシ、ヲ、文武ハシメテ改メタマハズ。此元明天皇平城ニウツリマシ〱シヨリ又七代ノ都ニナレリキ。天下ヲ治給コト七年。禪位アリテ太上天皇ト申シガ、六十一歳オマシ〱キ。

第四十四代、元正天皇ハ草壁ノ太子ノ御女。御母ハ元明天皇、文武同母ノ姉也。乙卯年正月ニ攝政。九月ニ受禪。即ノ日、即位。十一月ニ改元。平城宮ニマシマス。此御時百官ニ笏ヲモタシム。五位以上牙笏。六位ハ木笏。　天下ヲ治給コト、九年。禪位ノ後、廿年。六十五歳マシ〱キ。

哲の傍訓テキとあるを今「テチ」に改む・

第四十五代、聖武天皇ハ文武ノ太子。御母皇太夫人藤原ノ宮子、淡海公不比等ノ大臣ノ女也。豐櫻彦ノ尊ト申。ヲサナクマシ、、ニヨリテ、元明、元正マヅ位ニ井給キ。甲子年即位改元。平城宮ニマシマス。此御代大ニ佛法ヲアガメ給コト先代ニコエタリ。東大寺ヲ建立シ、金銅十六丈ノ佛ヲツクラル。又諸國ニ國分寺、及國分尼寺ヲ立テ、國土安穩ノタメニ法華、最勝兩部ノ經ヲ講ゼラル。又オホクノ高僧他國ヨリ來朝ス。南天竺ノ波羅門僧正〈菩提ト云。〉林邑ノ佛哲、唐ノ鑒眞和尚等是也。眞言ノ祖師、中天竺ノ善無畏三藏モ來給ヘリシガ、密機イマダ熟セズトテカヘリ給ニケリトモイヘリ。此國ニモ行基菩薩、朗弁僧正ナド權化人也。天皇・波羅門僧正・行基・朗弁ヲバ四聖トゾ申傳タル。此御時太宰少貳藤原廣繼ト云人〈式部卿宇合ノ子ナリ。〉謀叛ノキコエアリ追討セラル。〈玄昉僧正ノ讒ニヨレリトモイヘリ。靈トナル。今ノ松浦ノ明神之。ここ。〉仍祈禱ノタメニ、天平十二年十月伊勢ノ神宮ニ行幸アリキ。又左大臣長屋王〈太政大臣高市王ノ子、天武ノ御孫ナリ。〉ツミアリテ誅セラル。又陸奥國ヨリ始テ黄金ヲタテマツル。此朝ニ金アル始ナリ。國ノ司ノ王、賞アリテ三位ニ叙ス。佛法繁昌ノ感應ナリトゾ。天下ヲ治給コト廿五年、天位ヲ御女高野姫ノ皇女ニユヅリテ太上天皇ト申ス。後ニ出家セサセ給。天皇出家ノ始也。昔天武東宮ノ位ヲノガレテ御グシオロシ給ヘ

リシカド、ソレハシバラクノ事ナリキ。皇后光明子モオナジク出家セサセ給。此天皇五十六歳オマシ〳〵キ。

第四十六代、孝謙天皇ハ聖武ノ御子。御母、皇后光明子、淡海公不比等ノ大臣ノ女也。聖武ノ皇子安積親王世ヲハヤクメ後、男子マシマサズ。仍コノ皇女立給キ。己丑年即位、改元。平城宮ニマシマス。天下ヲ治給コト、十年。大炊ノ王ヲ養子トメ皇太子トス。位ヲユヅリテ太上天皇ト申ス。出家セサセ給テ平城宮ノ西宮ニナムマシ〳〵ケル。

第四十七代　淡路癈（廢）帝ハ一品舍人親王ノ子、天武ノ御孫也。御母上總介、當麻（タヘマ）ノ老（ヲユ）ガ女也。舍人親王ハ皇子ノ中ニ、御身ノ才モマシケルニヤ、知太政官事ト云職ヲサヅケラレ、朝務ヲ輔（佐シ白）給ケリ。日本紀モコノ親王、勅ヲウケ玉ハテエラビ給。後ニ追号アリテ盡敬天皇ト申。孝謙天皇御子マシマサズ、又御兄弟モナカリケレバ、癈（廢）帝ヲ御子ニメ、ユヅリ給。タヾシ年号ナドモアラタメラレズ、女帝ノ御マヽ、ナリシニヤ。戊戌年即位。天下ヲ治給コト、六年。事アリテ淡路國ニウツサレ給キ。卅三歳オマシ〳〵キ。

第四十八代、稱德天皇ハ孝謙ノ重祚也。庚戌年正月一日更ニ即位。同七日改元。太上天皇ヒ

ソカニ藤原武智麿ノ大臣ノ第二ノ子、押勝（ヲシカツ）ヲ幸シ給キ。大師（其時太政大臣改テ大師ト云。）正一位ニナル。見給ヘバ、エマシキトテ藤原ニ二字ヲソヘテ藤原惠美（エミ）ノ姓ヲ給キ。天下ノ政シカシナガラ委任セラレニケリ。後ニ道鏡ト云法師（弓削ノ氏人也。）又寵幸アリシニ、押勝イカリヲナシ、癈（廢）帝ヲス、メ申テ、上皇ノ宮ヲカタブケントセシニ、コトアラハレテ誅ニフシヌ。帝モ淡路ニウツサレ給、（カク）テ上皇重祚アリ。サキ（ニ）出家セサセ給ヘリシカバ、尼ナガラ位ニ井給ケルニコソ。非常ノ極ナリケンカシ。唐ノ則天皇后ハ太宗ノ女御ニテ才人ト云官ニ井給ヘリシガ、太宗カクレ給テ、尼ニ成テ感業ト云寺ニオハシケル（ヲ）高宗ミ給テ、長髮セシメテ、皇后トス。諫申人オホカリシカドモ用ラレズ。高宗崩メ中宗位ニ井給シヲシリゾケ、睿宗ヲ立ラレシヲ又シリゾケテ自帝位ニツキ、國ヲ大周トアラタム。唐ノ名ヲウシナハント思給ケルニヤ。中宗睿宗モワガ生給シカドモ、ステ、諸王トシ、ミヅカラノ族、武氏ノトモガラヲモチテ國ヲ傳シメムトサヘシ給キ。其時ニゾ法師モ官（宦）者モアマタ寵セラレテ世ニソシラル、タメシオホクハベリシカ。コノ道鏡ハジメハ大臣ニ准メ（日本ノ准大臣ノハジメニヤ。）大臣禪師ト云シヲ太政大臣ニナシ給。ソレニヨリテツキ（く）ヽ納言參議ニモ法師ヲマジヘナサレニキ。道鏡世ヲ心ノマヽ

ニシケレバ、アラソフ人ノナカリシニヤ。大臣吉備ノ眞備ノ公、左中弁藤原ノ百川ナドアリキ。サレドチカラヲヨバザリケルニコソ。法師ノ宮（官）ニ任ズルコトハ、モロコシヨリ始テ僧正僧統ナド云事ノアリシ、ソレスラ出家ノ本意ニハアラザルベシ。イハンヤ俗ノ官ニ任ズル事アルベカラヌ事ニコソ。サレド、モロコシニモ南朝ノ宋ノ世ニ惠琳ト云シ人政事ニマジラヒシテ黑衣宰相トイヒキ。（但コレハ官ニ任トハミエズ。）梁ノ世ニ惠超ト云シ僧、學士ノ官ニナリキ。北朝魏ノ明元帝ノ代ニ法杲（果）ト云僧、安城公ノ爵ヲタマハル。唐ノ世トナリテハアマタキコエキ。肅宗ノ朝ニ道平ト云人、帝ト心ヲ一ニメ、安祿山ガ乱ヲタヒラゲシ故ニ、金吾將軍ニナサレニケリ。代宗ノ時天竺ノ不空三藏ヲタフトビ給アマリニヤ、特進試鴻臚卿ヲサヅケラル。後ニ開府儀同三司肅國公トス。歸寂アリシカバ、司空ノ官ヲオクラル。（司空ハ大臣ノ官ナリ。）則天ノ朝ヨリコノ女帝ノ御代マデ六十年バカリニヤ。兩國ノコト相似タリトゾ。天下ヲ治給コト五年。五十七歳ヲマシ／＼キ。天武聖武、國ニ大功アリ、佛法ヲヒロメ給シニ、皇胤マシマサズ。此女帝ニタエ給ヌ。女帝カクレ給シカバ、道鏡ヲバ、下野ノ講師ニナシテ、ナガシクダサレニキ。抑此道鏡ハ法皇（王）ノ位ヲサヅケラレタリシ猶アカズメ皇位ニツカントイフ心ザシ

アリケリ。女帝サスガ（ニ）思ワヅラヒ給ケルニヤ。和氣清丸ト云人ヲ勅使ニサシテ、宇佐ノ八幡宮ニ申サレケル。大菩薩サマ〴〵託宣アリテ更ニユルサレズ。清丸歸參ノ、アリノマヽニ奏聞ス。道鏡イカリヲナシテ清丸ガヨホロスヂヲタチテ、土左國ニナガシツカハス。清丸ウレヘカナシミテ大菩薩ヲウラミカコチ申ケレバ、小蛇出來テソノキズヲイヤシケリ。光仁位ニツキ給シカバ、即メシカヘサル。神威ヲタウトビ申テ河内國ニ寺ヲ立テ神願寺ト云。後ニ高雄ノ山ニウツシ立。今ノ神護寺コレナリ。件ノコロマデハ神威モカクイチジルキコトナリキ。カクテ道鏡ツヰニノゾミヲトゲズ、女帝モ又程ナクカクレ給。宗廟社稷ヲヤスクスルコト八幡ノ冥慮タリシウヘニ、皇統ヲサダメタテマツルコトハ藤原百川朝臣ノ功ナリトゾ。

第四十九代、第廿七世、光仁天皇ハ施基皇子ノ子、天智天皇ノ御孫也。（皇子ハ第三ノ御子ナリ。追号アリテ田原ノ天皇ト申。）御母贈皇太后紀旋子、贈太政大臣旅人ノ女也。白壁（シラカベ）ノ王ト申キ。天平年中ニ御年廿九ニテ從四位下ニ叙シ、次第ニ昇進セサセ給テ、正三位勳二等大納言ニ至給キ。稱德カクレマシヽカバ、大臣以下皇胤ノ中ヲエラビ申ケルニ、ヲノ〳〵異議アリシカド、參議百川ト云シ人コノ天

皇ニ心ザシタテマツリテ、ハカリゴトヲメグラシサダメ申テキ。天武世ヲシリ給シヨリアラソヒ申人ナカリキ。シカレド天智、御兄ニテ、マヅ日嗣ヲウケ給。ソノカミ逆臣ヲ誅シ、國家ヲモ安シ給ヘリ。コノ君ノカク繼躰ニソナハリ給、猶正ニカヘルベキイハレナルニコソ。マヅ皇太子ニ立、スナハチ受禪（御年六十二）。コトシ庚戌年ナリ。十月ニ即位。十一月改元。平城宮ニマシマス。天下ヲ治給コト、十二年。七十三歳ヲマシ〳〵キ。

第五十代、第廿八世、桓武天皇ハ光仁第一ノ子。御母、皇大后高野ノ新笠、贈太政大臣乙繼ノ女也。光仁即位ノハジメ、井上ノ内親王（聖武御女）ヲモテ皇后トス。彼所生ノ皇子、澤（早）良ノ親王、太子ニ立給キ。シカルヲ、百川朝臣、此天皇ニウケツガシメタテマツラント心ザシテ、又ハカリゴトヲメグラシ、皇后オヨビ太子ヲステ、ツ井ニ皇太子ニスヘタテマツリキ。ソノ時シバラク不許ナリケレバ、四十日マデ殿ノ前ニ立テ申ケリトゾ。タグヒナキ忠烈ノ臣也ケルニヤ。皇后前太子セメラレテウセ給ニキ。怨靈ヲヤスメラレンタメニヤ太子ハノチニ追号アリテ崇道天皇ト申。辛酉ノ年即位。壬戌ニ改元。ハジメハ平城ニマシマス。山背ノ長岡ニウツリ十年バカリ都ナリシガ、又今ノ平安城ニウツサル。山背ノ國ヲモアラタメテ山城ト

葛野の傍訓カツラノとあり今訂す

云。永代ニカハルマジクナンハカラハセ給ケル。昔、聖徳太子蜂岡ニノボリ給テ（大秦コレナリ。）イマノ城ヲミメグラシ、四神相應ノ地也。百七十餘年アリテ、都ヲウツサレテ、カハルマジキ所ナリトノ給ケリトゾ申傳タル。ソノ年紀モタガハズ、又數十代不易ノ都トナリヌル。誠ニ王氣相應ノ福地タルニヤ。コノ天皇大ニ佛法ヲアガメ給。延暦廿三年、傳教、弘法、勅ヲウケテ、唐ヘワタリ給。其時スナハチ唐朝ヘ使ヲツカハサル。大使ハ參議左大弁兼越前守藤原葛（カド）野麿朝臣也。傳教ハ天台ノ道邃（イ）和尚ニアヒソノ宗ヲキハメテ、同廿四年ニ大使ト共ニ歸朝セラル。弘法ハ猶カノ國ニトヾマリテ大同年中ニ歸給。コノ御時東夷叛（ホン）乱シケレバ、坂上ノ田村丸ヲ征東大將軍ニナシテツカハサレシニ、コト〲クタヒラゲテカヘリマウデケリ。コノ田村丸ハ武勇人ニスグレタリキ。初ハ近衞ノ將監ニナリ、少將ニウツリ、中將ニ轉ジ、弘仁ノ御時ニヤ、大將ニアガリ、大納言ヲカケタリ。文ヲモカ子タレバニヤ納言ノ官ニモノボリニケル。子孫ハイマニ文士ニテゾツタハレル。天皇天下ヲ治給コト、廿四年。七十歳オマシ〳〵キ。

第五十一代、平城天皇ハ桓武第一ノ子。御母、皇大后藤原ノ乙牟漏（オトムロ）。贈太政大臣良繼ノ女也。

丙戌年即位。改元。平安宮ニマシマス。コレヨリ遷都ナキニヨリテ御在所ヲシルスベカラズ。天下ヲ治給コト四年。太弟ニユヅリテ太上天皇ト申。平城ノ舊都ニカヘリテスマセ給ケリ。尙侍藤原ノ藥子ヲ寵（シ）マシケルニ、其弟參議右兵衞督仲成等申スヽメテ逆乱ノ事アリキ。田村丸ヲ大將軍ト〆、追討セラレシニ、平城ノ軍ヤブレテ上皇出家セサセ給。御子東宮高岡ノ親王モステラレテオナジク出家弘法大師ノ弟子ニナリ、眞如親王ト申ハコレナリ。藥子、仲成等誅ニフシヌ。上皇五十一歲マデオマシマシ〱キ。

第五十二代、第廿九世、嵯峨天皇ハ桓武第二ノ子、平城同母ノ弟也。太弟ニ立給ヘリシガ、己丑年即位、庚寅ニ改元。此天皇幼年ヨリ聰明(ソウメイ)ニ〆、讀書ヲ好、諸藝ヲ習給。又謙讓(ケンジヤウ)ノ大度モマシマシケリ。桓武帝、鍾愛(シヨウ)無雙ノ御子ニナンオハシケル。儲君ニ井給ケルモ父ノミカド繼躰ノタメニ、顧命(コメイ)シマシ〱ケルニコソ。格式ナドモ此御時ヨリエラビハジメラレニキ。又深佛法ヲアガメ給。先世ニ美濃國神野ト云所ニタウトキ僧アリケリ。橘太后ノ先世ニ子ムゴロニ給仕シケルヲ感〆相共ニ再誕アリトゾ。御諱ヲ神野ト申ケルモ自然ニカナヘリ。傳教、御名最澄弘法御名空海兩大師唐ヨリ傳給シ天台眞言ノ兩宗モ、コノ御時ヨリヒロマリ侍ケル。此兩師、

直也人ニオハセズ、傳教入唐以前ヨリ比叡山ノ〔ヲ〕ヒラキテ、練行セラレケリ。今ノ根本中堂ノ地ヲヒカレケルニ、八ノ舌アル鎰ヲモトメイデ、、唐マデモタレタリ。天台山ニノボリテ智者大師（天台ノ宗オコリテ四代ノ祖ナリ。天台大師トモ云）六代ノ正統道邃和尚ニ謁メ、ソノ宗ヲナラハレシニ、彼山ニ智者歸寂ヨリ以來鎰ヲウシナヒテヒラカザル一藏アリキ。心ミニ此鎰ニテアケラル、ニトゞコホラズ。一山コゾリテ渴仰シケリ。仍一宗ノ奧義ノコル所ナク傳ラレタリトゾ。其後慈覺智證兩大師又入唐ノ天台眞言ヲキハメナラヒテ叡山ニヒロメラレシカバ、彼門風イヨ〳〵サカリニナリテ天下ニ流布セリ。唐國ミダレシヨリ經教オホクウセヌ。道邃ヨリ四代ニアタレル義寂ト云人マデタ、觀心ヲ傳テ宗義ヲアキラムルコトタエニケルニヤ。吳越國ノ忠懿王（姓ハ錢名ハ鏐。唐ノ末ツカタヨリ東南ノ吳越ヲ領ノ偏ニ一國ノ主タリ。）此宗ノオトロヘヌルコトヲナゲキテ、使者十人ヲサシテ我朝ニヲクリ教典ヲモトメシム。コト〳〵クウツシヲハリテカヘリヌ。義寂コレヲ見アキラメテ更ニ此宗ヲ再興ス。モロコシニハ五代ノ中、後唐ノ末サマナリケレバ、我朝ニハ朱雀天皇ノ御代ニヤアタリケン。日本ヨリカヘシワタシタル宗ナレバ、此國ノ天台宗ハカヘリテ本トナルナリ。凡傳教彼宗ノ秘密ヲ傳ラレタルコト（唐台州刺〔刺〕史陸諄〔淳〕ガ官記ノ文ニアリ。）コト〳〵クー

宗ノ論疏ヲウツシ國ニカヘレルコトモ（釋志磐ガ佛祖統記ニノセタリ。）異朝ノ書ニミエタリ。弘法ハ母懷胎ノ始、夢ニ天竺ノ僧來リテ宿ヲカリ給ケリトゾ。寶龜五年甲寅六月十五日誕生。コノ日唐ノ天〔大〕曆九年六月十五日ニアタレリ。不空三藏入滅ス。仍カノ後身ト申ス。カツハ惠果和尚ノ告ニモ我ト汝ト久契約アリ。誓テ密藏ヲ弘（ヒロメン）トアルモソノユヘニヤ。渡唐ノ時モ或ハ五筆ノ藝ノホドコシ、サマ〴〵ノ神異アリシカバ、唐ノ主順宗皇帝コトニ仰信シ給キ。彼惠果（眞言第六ノ祖不空ノ弟子。）和尚六人ノ附法アリ。劔南ノ惟上、河北ノ義圓、（金剛界ヲ傳。）新羅ノ惠日、訶陵ノ辨弘、（胎藏界ヲ傳。）青龍ノ義明、日本ノ空海（兩部ヲ傳。）義明ハ唐朝ニテキテ灌頂ノ師タルベカリシガ、世ヲハヤクス。弘法ハ六人ノ中ニ瀉瓶タリ。（惠果ノ俗弟子吳殷カ纂ノ詞ニアリ。）シカレバ、眞言ノ宗ニハ正統ナリトイフベキニヤ。コレ又異朝ノ書ニミエタル也。傳教モ不空ノ弟子順曉ニアヒテ、眞言ヲ傳ラレシカド、在唐イクバクナカリシカバ、フカク學セラレザリシニヤ。歸朝ノ後、弘法ニモトブラハレケリ。又イマコノ流タエニケリ。慈覺智證ハ惠果ノ弟子、義操法潤トキコエシガ弟子法全ニアヒテ傳ラル。凡本朝流布ノ宗、今ハ七宗也。此中ニモ眞言天台ノ二宗ハ祖師ノ意巧、專鎭護國家ノタメト心ザヽレケルニヤ。比叡山ニハ（比叡ト云コト、桓武傳教、心ヲ一ニシテ興隆セラレシユヘナヅクト彼山ノ書稱之。シカレド舊事本紀ニ）

比叡ノ神ノ御コトミエタリ。顕密ナラビテ紹隆ス。殊ニ天子本命ノ道場ヲタテ、御願ヲ祈ル地ナリ。コレハ密ニツ
タハク（ベシ。）又根本中堂ヲ止觀院ト云　法華ノ經文ニツキ、天台ノ宗義ニヨリカタ〴〵鎭護ノ深義ア
リトゾ。東寺ハ桓武遷都ノ初、皇城ノ鎭ノタメニ、コレヲタテラル。弘仁ノ御時、弘法ニ約テ
ナガク眞言ノ寺トス。諸宗ノ雜住ヲユルサヾル地之。此宗ヲ神通乘ト云。如來果上ノ法門
ニ〆、諸教ニコエタル極秘密トオモヘリ。就レ中我國ハ神代ヨリノ縁起、此宗ノ所説ニ符合セ
リ。コノユヘニヤ、唐朝ニ流布セシハシバラクノコトニテ、則日本ニトヾマリヌ。又相應ノ
宗ナリト云モコトハリニヤ。大唐ノ内道場ニ准〆、宮中ニ眞言院ヲタツ。モトハ勘解由使ノ廳ナリ。大師奏
聞〆、毎年正月、コノ所ニテ、御修法アリ、國土安穩ノ祈禱、稼穡豐饒ノ秘法之。又十八日ノ觀
音供、晦日ノ御念誦等モ宗ニヨリテ深意アルベシ。三流ノ眞言イヅレト云ベキナラネド、眞
言ヲモテ諸宗ノ第一トスルコトモムネト東寺ニヨレリ。延喜ノ御宇ニ綱所ノ印鎰ヲ東寺ノ
一阿闍梨ニアヅケラル。仍法務ノコトヲ知行〆、諸宗ノ一座タリ。山門寺門ハ天台ヲムネト
スルユヘニヤ、顕密ヲカネタレド、宗ノ長ヲモ天台座主ト云メリ。此天皇諸宗ヲ並テ興セサ
セ給ケリ。中ニモ傳教弘法御歸依フカヽリキ。傳教始テ円頓戒壇ヲタツベキヨシ奏セラレ

シテ、南京ノ諸宗表ヲ上テアラソヒ申シシカド、ツ井ニ戒壇ノ建立ヲユルサレ、本朝四ケ所ノ戒場トナル。弘法ハコトサラ師資ノ御約アリケレバ、ヲモクシ給ケルトゾ。此兩宗ノ外、華嚴三輪ハ東大寺ニコレヲヒロメラル。彼華嚴ハ唐ノ杜順和尚ヨリサカリニナレリシヲ、日本ノ朗辨僧正傳テ東大寺ニ興隆ス。此寺ハ則此宗ニヨリテ建立セラレケルニヤ。大華嚴寺ト云名アリ。三論ハ東晉ノ同時ニ後秦ト云國ニ羅什三藏ト云師來テ此宗ヲヒラキテ世ニ傳タリ。孝徳ノ御世ニ高麗ノ僧惠規（灌日本紀）來朝シ、傳始ケル。シカラバ、最前流布ノ敎ニヤ。其後道慈律師請來シ、大安寺ニヒロメキ。今ハ花嚴トナラビテ東大寺ニアリ。法相ハ興福寺ニアリ。唐玄奘三藏、天竺ヨリ傳テ國ニヒロメラル。日本ノ定惠和尚（大織冠ノ子ナリ。）彼國ニワタリ、玄奘ノ弟子タリシカド、歸朝ノ後、世ヲハヤクスル。今ノ法相ハ玄昉僧正ト云人入唐シ、泗州ノ智周大師（玄奘ニ世ノ弟子。）ニアヒテ、コレヲ傳テ流布シケルトゾ。春日ノ神モコトサラ此宗ヲ擁護シ給ナルベシ。此三宗ニ天台ヲクワヘテ四家ノ大乘ト云。倶舍成實ナムト云ハ小乘也。道慈律師オナジク傳テ流布セラレケレドモ、依學ノ宗ニテ、別ニ一宗ヲ立コトナシ。我國大乘純熟ノ地ナレバニヤ。小乘ヲ習人ナキ也。又律宗ハ大小ニ通スル也。鑒眞和尚來朝シヒロメラ

レシヨリ東大寺ナヨビ下野ノ藥師寺・筑紫ノ觀音寺ニ、戒壇ヲタテ、此戒ヲウケヌモノハ僧籍ニツラナラヌ事ニナリニキ。中古ヨリ以來其名バカリニテ、戒躰ヲマボルコトタエニケルヲ南都ノ思円上人等章疏ヲ見アキラメテ戒師トナル。北京ニハ我禪上人入宋シ彼土ノ律師（法ヲ）ウケ傳テコレヲヒロム。南北ノ律再興シ彼宗ニ入輩ハ威儀ヲ具スルコト、フカ（ル）キガゴトシ。禪宗ハ佛心宗トモ云、佛ノ教外別傳ノ宗ナリトゾ。梁ノ代ニ天竺ノ達磨（磨）大師來テヒロメラレシニ、武帝ニ機カナハズ。江ヲ渡テ北朝ニイタル。嵩山ト云所ニトヾマリ面壁ノ年ヲオクラレケル。後ニ惠可コレヲツグ。惠可ヨリ下、四世ニ弘忍禪師トキコエシ。嗣法南北ニ相分ル。北宗ノ流ヲバ、傳教、慈覺、傳テ歸朝セラレキ。安然和尚慈覺ノ孫弟教時諍論ト云書ニ教理ノ淺深ヲ判スルニ、眞言、佛心、天台トツラ子タリ。サレド、ウケ傳人ナクテ、タエニキ。近代トナリテ南宗ノナガレオホクツタハル。異朝ニハ南宗ノ下ニ五家アリ。ソノ中臨濟宗ノ下ヨリ又二流トナル。コレヲ五家七宗ト云。本朝ニハ榮西僧正、黄龍ノ流ヲクミテ、傳來ノ後、聖一上人石霜ノ下ツカタ、虚丘ノナカレ無準ニウク。彼宗ノヒロマルコトハ此兩師ヨリノコトヽ。ウチツヾキ異朝ノ僧モアマタ來朝シ、此國ヨリモワタリテ傳シカバ、諸

家ノ禪オホク流布セリ。五家七宗トハイヘドモ、以前ノ顯密權實等ノ不同ニハ相似ベカラズ。イヅレモ眞（直）指人心、見性成佛ノ門ヲバイ（デ）ザル之。弘仁ノ御宇ヨリ眞言天台ノサカリニナルコトヲ聊シルシ侍ニツキテ大方ノ宗ニ傳來ノオモムキヲ載タリ。極テアヤマリオホク侍ラン。但君トシテハイヅレノ宗ヲモ大概シロシメシテ捨ラレザランコトゾ國家攘災ノ御ハカリゴトナルベキ。菩薩大士モツカサドル宗アリ。我朝ノ神明モトリワキ擁護シ給教アリ。一宗ニ志アル人餘宗ヲソシリイヤシム、大ナルアヤマリ之。人ノ機根モシナ〲ナレバ、教法モ無盡ナリ。況、ワガ信ズル宗ヲダニアキラメズ、イマダシラザル敎ヲソシラム極タル罪業ニヤ。ワレハ此宗ニ歸スレドモ、人ハ又彼宗ニ心ザス。共ニ隨分ノ益アルベシ。是皆今生一世ノ値遇ニアラズ。國ノ主トモナリ、輔政ノ人トモナリナバ、諸教ヲステズ、機ヲモラサズメ得益ノヒロカランコトヲ思給ベキ之。且ハ佛教ニカギラズ、儒道ノ二教、乃至モロ〲ノ道、イヤシキ藝マデモオコシモチ井ルヲ聖代ト云ベキ之。凡男夫ハ稼穡ヲツトメテヲノレモ食シ、人ニモアタヘテ飢ザラシメ、女子ハ紡績ヲコトヽメミヅカラモキ[衣]、人ヲシテアタヽカナラシム。賤ニ似タレドモ、人倫ノ大本也。天ノ時ニシタガヒ、地ノ利ニヨレリ。

此外商沽ノ利ヲ通ズルモアリ。工巧ノワザヲ好モアリ。仕官ニ心ザスモアリ。是ヲ四民ト云。仕官スルニトリテ文武ノ二ノ道アリ。坐テ以道論ズルハ文士ノ道也。此道ニ明ナラバ、相トスルニタヘタリ。征テ功立ハ武人ノワザナリ。此ワザニ譽レアラバ、將トスルニタレリ。サレバ文武ノ二ハシバラクモステ給ベカラズ。世ミダレタル時ハ武ヲ右ニシ、文ヲ左ニス。國オサマレル時ハ文ヲ右ニシ、武ヲ左ニストイヘリ。（古ニ右ヲ上ニス。仍シカイフ之。）カクノゴトクサマ〴〵ナル道ヲモチヰテ民ノウレヘヲヤスメ、ヲノ〳〵アラソヒナカラシメン事ヲ本トスベシ。民ノ賦歛ヲアツク〆、ミヅカラノ心ヲホシキマヽニスルコトハ乱世乱國ノモトヰ之。我國ハ王種ノカハルコトナケレドモ、政ミダレタレバ、曆數ヒサシカラズ、繼躰モタガフタメシ所々ニシルシ侍リヌ。又イハンヤ人臣ト〆其職ヲマボルベキニヲキテヲヤ。抑民ヲミチビクニツキテ諸道諸藝ミナ要樞也。古ニハ詩書礼樂ヲモテ國ヲ治ル四術トス。本朝ハ四術ノ學ヲタテラルヽコトタシカナラサレド、紀傳、明經、明法ノ三道ニ詩書礼ヲ攝スベキニコソ。筭道ヲ加テ四道ト云。代々ニモチヰラレ、其職ヲ置ルヽ、コトナレバ、クワシクスルニアタハズ。醫、陰陽ノ兩道又コレ國ノ至要也。金石絲竹ノ樂ハ四學ノ一ニテモハラ政ヲスル本也。

今ハ藝能ノ如クニ思ヘル、無念ノコトヽ。風ヲ移シ俗ヲカフルニハ樂ヨリヨキハナシトイヘリ。一音ヨリ五聲十二律ニ轉ジ、治亂ヲワキマヘ、興衰ヲ知ベキ道トコソミエタレ。又詩賦哥詠ノ風モイマノ人ノコノム所、詩學ノ本ニハコトナリ。シカレド、一心ヨリオコリテ、ヨロヅノコトノ葉トナリ、末ノ世ナレハ〔ト〕、人ヲ感ゼシムル道也。コレヲヨクセバ、僻ヲヤメ、邪ヲフセグヲシヘナルベシ。カヽレバイヅレカ、心ノ源ヲアキラメ、正ニカヘル術ナカラム。輪扁ガ輪ヲケヅリテ、齊ノ桓公ヲオシヘ、弓工ガ弓ヲツクリテ、唐ノ大宗ヲサトラシムルタグヒモアリ。乃至圍碁彈碁ノ戯マデモヲロカナル心ヲオサメカロ〱シキワザヲトヾメンガタメナリ。タヾシ其源ニモトヅカズトモ、一藝ハマナブベキコトニヤ。孔子モ飽食テ終日ニ心ヲ用所ナカランヨリハ博奕ヲダニセヨト侍メリ。マシテ一道ヲウケ、一藝ニモ携ラン人、本ヲアキラメ、理ヲサトル志アラバ、コレヨリ理(世)ノ要トモナリ、出離ノハカリゴト、モナリナム。一氣一心ニモトヅケ、五大五行ニヨリ、相尅相生ヲシリ、自モサトリ、他ニモサトラシメン事、ヨロヅノ道、其理一ナルベシ。此御門誠ニ顯密ノ兩宗ニ歸(シ)給シノミナラズ、儒學モアキラカニ、文章モタクミニ、書藝モスグレ給ヘリシ。宮城ノ東西〔面〕ノ額モ御ミ

ヅカラカ、シメ給キ。天下ヲ治給コト、十四年。皇太弟ニユヅリテ太上天皇ト申。帝都ノ西、嵯峨山ト云所ニ離宮ヲシメテゾマシマシ〳〵ケル。一旦國ヲユヅリ給シノミナラズ、行末マデモサヅケマシマサンノ御心ザシニヤ。新帝ノ、御子恒世ノ親王ヲ太子ニ立給シヲ、親王又カタク辞退ノ、世ヲソムキ給ケルコソアリガタケレ。上皇フカク謙讓シマシケルニ、親王又カクノガレ給ケル、末代マデノ美談ニヤ。昔、仁徳兄弟相讓給シ後ニハキカザリシコト也。五十七歳オマシマシ〳〵キ。

第五十三代、淳和天皇、西院ノ帝トモ申。桓武第三ノ子。御母贈皇太后藤原ノ旅子、贈太政大臣百川ノ女也。癸卯年即位。甲辰ニ改元。天下ヲ治給コト、十年。太子ニユヅリテ太上天皇ト申。此時兩上皇マシマシ〳〵ケレバ、嵯峨ヲバ、前太上天皇、此御門ヲバ、後太上天皇ト申キ。嵯峨御門ノ御子ヲキテニヤ、東宮ニハ又此帝ノ御子恒貞親王立給シガ、兩上皇カクレマシ、後ニ、ユヘアリテステラレ給キ。五十七歳オマシマシ〳〵キ。

第五十四代、第三十世、仁明天皇、(御)諱ハ正良コレヨリサキ、御諱タシカナラズ、オホクハ乳母ノ姓ナドヲ諱ニモチヰラレキ。コレヨリ二字タヾシクマシマサ〔セ〕バノセタテマツル。深草ノ帝トモ申。嵯峨第二ノ子。御母皇太后橘ノ嘉智子、贈太政大臣清友女也。

癸丑年即位。甲寅ニ改元。此天皇ハ西院ノ御門ノ猶子ノ儀マシ〳〵ケレバ、朝覲モ兩皇ニセサセ給。或時ハ兩皇同所ニ〆覲礼モアリケリトゾ。我國ノサカリナリシコトハコノ比ヲヒニヤアリケン。遣唐使モツ子ニアリ。歸朝ノ後建礼門ノ前ニ彼國ノタカラ物ノ市ヲタテ、群臣ニタマハスルコトモ有キ。律令ハ文武ノ御代ヨリサダメラレシカド、此御代ニゾエラビトヽノヘラレニケル。天下ヲ治給コト、十七年。四十一歲オマシ〳〵キ。

第五十五代、文德天皇、諱ハ道康、田村ノ帝トモ申。仁明第一ノ子。御母(太皇)太后藤原順子五条ノ后ト申。左大臣冬嗣ノ女也。庚午年即位。辛未ニ改元。天下ヲ治給コト八年。三十三歲オマシ〳〵キ。

第五十六代、淸和天皇、諱ハ惟仁、水尾ノ帝トモ申。文德第四ノ子。御母、皇太后藤原ノ明子、染殿ノ后ト申。攝政太政大臣良房ノ女也。我朝ハ幼主位ニ井給コトマレナリキ。此天皇九歲ニテ即位。戊寅年也。己卯ニ改元。踐祚アリシカバ、外祖良房ノ大臣ハジメテ攝政セラル。攝政ト云コトモロコシニハ唐堯ノ時虞舜ヲ登用テ政ヲマカセ給キ。コレヲ攝政ト云。カクテ卅年アリテ、正位ヲウケラレキ。殷ノ代ニ伊尹ト云聖臣アリ。湯(タウ)及大甲(カウ)ヲ輔佐ス。是ハ保衡(ホウカウ)ト

云（阿衡トモ云）。其心ハ攝政也。周ノ世ニ周公旦又大聖ナリキ。文王ノ子、武王ノ弟、成王ノ叔父ナリ。武王ノ代ニハ三公ニツラナリ、成王ワカクテ、位ニツキ給シカバ、周公ミヅカラ南面〆、攝政ス。（成王ヲ負テ南面セラレケリトモミエタリ。）漢昭帝又幼ニテ即位、武帝ノ遺詔ニヨリ博陸侯霍（クワク）光ト云人大司馬大將軍ニテ攝政ス。中ニモ周公霍氏ヲゾ先蹤（セウ）ニモ申メル。本朝ニハ應神ウマレ給テ、襁褓（キヤウホウ）ニマシ〳〵シカバ、神功皇后天位ニ井給。シカレド攝政ト申傳タリ。コレハ今ノ儀ニハコトナリ。推古天皇ノ御時廐戸皇太子攝政シ給。コレヲ（ヘヅ）帝ハ位ニ備テ天下ノ政シカシナガラ攝政ノ御マヽナリケル。齊明天皇ノ御世ニ御子、中ノ大兄ノ皇太子〔三〕攝政シ給。元明ノ御世ノスヱツカタ皇女淨足姫ノ尊（元正天皇ノ御コトナリ。）シバラク攝政シ給キ。コノ天皇ノ御時良房ノ大臣ノ攝政ヨリノゾマサシク人臣ニテ攝政スルコトハハジマリニケル。但、此藤原ノ一門、神代ヨリユヘアリテ國主ヲタスケ奉ルコトハサキニモ所々ニシルシ侍リキ。淡海公ノ後、參議中衛大將房前、其子大納言眞楯（タテ）、ソノ子右大臣内麿（閑院ノ左大臣ト云。）コノ三代ハ上二代ノゴトクサカヘズヤアリケム。内麿ノ子、冬嗣ノ大臣（後ニ贈太政大臣。）藤氏ノ衰ヌルコトヲナゲキテ、弘法大師ニ申アハセテ、興福寺ニ南円堂ヲタテ、祈申サレケリ。此時明神役夫ニマジハリテ、補陀落ノ南

ノ岸ニ堂タテ、今ゾサカヘン北ノ藤浪。ト詠給ケルトゾ。此時源氏ノ人アマタウセニケリト中人アレド、大ナルヒガゴト也。皇子皇孫ノ源ノ姓ヲ給テ高官高位ニイタルコトハ此後ノコトナレバ、誰人カウセ侍ベキ。サレド彼一門ノサカヘシコトマコトニ祈請ニコタヘタリトハミエタリ。大方コノ大臣トヲキ慮オハシケルニコソ。子孫親族ノ學問ヲス、メンタメニ、勸學院ヲ建立ス。大學寮ニ東西ノ曹司アリ。菅江ノ二家コレヲツカサドリテ人ヲ教ル所也。彼大學ノ南ニコノ院ヲ立ラレシカバ、南曹トゾ申メル。氏長者タル人ムネトコノ院ヲ管領シテ興福寺及氏ノ杜ノコトヲトリオコナハル。良房ノ大臣攝政セラレシヨリ彼一流ニツタハリテタエヌコトニナリタリ。幼主ノ時バカリカトオボエシカド、攝政關白モサダマレル職ニナリヌ。ヲノヅカラ攝關ト云名ヲトメラル、時モ內覽ノ臣ヲオカレタレバ、執政ノ儀カハルコトナシ。天皇オトナビ給ケレバ、攝政マツリゴトヲカヘシタテマツリテ、太政大臣ニテ白河ニ閑居セラレニケリ。君ハ外孫ニマシマセバ、猶モ權ヲモハラニセラルトモ、アラソフ人アルマジクヤ。サレド謙退ノ心フカク閑適ヲコノミテ、ツネニ朝參ナドモセラレザリケリ。其比大納言伴善男ト云人寵アリテ、大臣ヲノゾム志ナンアリケル。時ニ三公闕ナカリキ。太政大臣

良房、左大臣信、右大臣良相。信ノ左大臣ヲウシナイテ其闕ニノゾミ任ゼントアヒハカリテ、マヅ應天門ヲ燒シム。左大臣世ヲミダラントスルクワダテナリト讒奏ス。天皇オドロキ給テ、糺明ニオヨバズ、右大臣ニ召仰テスデニ誅セラルベキニナリヌ。太政大臣コノコトヲキヽ、驚遽ラレケルアマリニ烏帽子直衣ヲキナガラ、白晝ニ騎馬シテ馳參シ申ナダメラレニケリ。其後ニ善男ガ陰謀アラハレテ流刑ニ處セラル。此大臣ノ忠節マコトニ無止コトニナン。天皇佛法ニ歸給テ御子ニ脫屣ノ御志アリキ慈覺大師ニ受戒シ給。法號ヲ授奉ラル素眞ト申。在位ノ帝、法號ヲサヅキ給コト、ヨノツネナラヌニヤ。昔隋煬帝ノ晉王ト云シ時、天台ノ智者ニ受戒シ惣持ト云名ヲツカレタリシ、ヨカラヌ君ノ例ナレド、智者ノ昔ノアトナレバ、ナゾラヘモチヰラレニケルニヤ。又コノ御時、宇佐ノ八幡大菩薩皇城ノ南、男山石清水ニウツリ給。天皇聞食テ勅使ヲツカハシ、ソノ所ヲ點ジ、モロ〱ノタクミニオホセテ、新宮ヲツクリテ宗廟ニ擬セラル。鎮座ノ次第ハ上ニミエタリ。天皇天下ヲ治給コト、十八年。太子ニユヅリテシリゾカセ給。中三トセバカリアリテ出家、慈覺ノ弟子ニテ灌頂ウケサセ給。丹波ノ水尾ト云所ニウツラセ給テ、練行シマシヽガ、ホドナクカクレ給。御年卅一歳オマシ〱キ。

第五十七代、陽成天皇諱ハ貞明、清和第一ノ子。御母皇太后藤原高子、二条ノ后ト申。贈太政大臣長良ノ女也。丁酉年即位、改元。右大臣基經攝政シテ、太政大臣ニ任ズ。此大臣ハ良房ノ養子ナリ。實ハ中納言長良ノ男。此天皇ノ外舅之。忠仁公ノ故事ノゴトシ。此天皇性惡ニシテ人主ノ器ニタラズミエ給ケレバ、攝政ナゲキテ癈立ノコトヲサダメラレニケリ。昔、漢ノ霍光昭帝ヲタスケテ攝政セシニ、昭帝世ヲハヤクシ給シカバ、昌邑王（ヲ）立テ天子トス。昌邑不德ニシテ器ニタラズ。即癈立ヲオコナヒテ宣帝ヲ立奉リキ。霍光カ大功トコソシルシ傳ハベルメレ。此大臣マサシキ外戚ノ臣ニテ政ヲモハラニセラレシニ、天下ノタメ大義ヲオモヒテサダメオコナハレケル。イトメデタシ。サレバ、一家ニモ（人コソ）オホクキコエシカド、攝政關白ハコノ大臣ノスエノミゾタエセヌコトニナリニケル。ツギツギ大臣、大將ニノボル藤原ノ人々モミナコノ大臣ノ苗裔ナリ。積善ノ餘慶ナリトコソオボエハベレ。天皇天下ヲ治給コト八年ニテシリゾケラレ、八十一歳マデオマシマシキ。

第五十八代、第卅一世、光孝天皇、諱ハ時康、小松御門トモ申。仁明第二ノ子。御母、贈（皇）太后藤原ノ澤子、贈太政大臣總繼ノ女ナリ。陽成シリゾケラレ給シ時、攝政昭宣公モロモロノ

皇子ノ(ヲ)相(シ)申サレケリ。此天皇一品式部卿兼常陸太守トキコエシガ、御年タカクテ、小松ノ宮ニマシ〱ケルニ俄ニマウデヽ、見給ケレバ、人主ノ器量余ノ皇子タチニスグレマシケルニヨリテ、スナハチ、儀衛ヲトヽノヘテ、ムカヘ申サレケリ。本位ノ服ヲ着シナガラ鸞輿ニ駕メ、大内ニイラセ給ニキ。コトシ甲辰年ナリ。乙巳改元。踐祚ノハジメ、攝政ヲ改テ關白トス、コレ、我朝關白ノ始ナリ。漢ノ霍光、攝政タリシガ、宣帝ノ時政ヲカヘシテ退ケルヲ万機ノ政猶霍光ニ關白シメヨトアリシソノ名ヲ(取リテ)、サヅケラレニケリ。此天皇昭宣公ノサダメニヨリテ、立給シカバ、御志モフカヽリシニヤ。其子ヲ殿上ニメシテ、元服セシメ、御ミヅカラ位記ヲアソバシテ、正五位下ニナシ給ケリトゾ。久絶ニケル芹川ノ御幸ナドアリテフルキアトヲオコサル、コトヾモキコエキ。天下ヲ治給コト三年。五十七歳オマシ〱キ。大カタ、天皇ノ世ツギヲシルセルフミ、昔ヨリ今ニ至マデ、家々ニアマタアリ、カクシルシ侍モサラニメヅラシカラヌコトナレド、神代ヨリ繼躰正統ノタガハセ給ハヌ一ハシヲ申サンガタメナリ。我國ハ神國ナレバ天照大神ノ御計ニマカセラレタルニヤ。サレド其中ニ御アヤマリアレバ、暦數モ久カラズ。又ツ井ニハ正路ニカヘレド、一旦モシヅマセ給タメ

シモアリ。コレハミナミヅカラナサセ給御トガナリ。冥助ノムナシキニハアラズ。佛モ衆生ヲミチビキツクシ、神モ万姓ヲスナヲナラシメントコソシ給ヘド、衆生ノ果報シナ〲ニ、ウクル所ノ性、オナジカラズ。十善ノ戒力ニテ天子トハナリ給ヘドモ、代々ノ御行迹、善悪又マチ〱之。カヽレバ、本ヲ本トシ正ニカヘリ、元ヲハジメトシ邪ヲステラレンコトゾ祖神ノ御意ニハカナハセ給ベキ。神武ヨリ景行マデ十二代ハ御子孫ソノマヽ、ツガセ給ヘリ。ウタガハシカラズ。日本武ノ尊、世ヲハヤクシマシヽニヨリテ、御弟成務ヘタヽ（陟）リ給シカド、日本武ノ御子ニテ仲哀傳マシ〱ヌ。仲哀應神ノ御後ニ仁德ツタヘ給ヘリシ、武烈悪王ニテ、日嗣タエマシヽ時、應神五世ノ御孫ニテ、繼躰天皇エラバレ立給。コレナムメヅラシキタメシニ侍ル。サレド二ヲナラベテアラソフ時ニコソ、傍正ノ疑モアレ。群臣皇胤ナキコトヲウレヘテ、求出奉リシウヘニ、ソノ御身賢ニシテ、天ノ命ヲウケ、人ノ望ニカナヒマシ〱ケレバ、トカクノ疑アルベカラズ。其後相續デ、天智、天武御兄弟立給シニ、大友ノ皇子ノ乱ニヨリテ天武ノ御ナガレ久傳ラレシニ、稱德女帝ニテ、御嗣モナシ。又政モミダリガハシクキコエシカバ、タシカナル御讓ナクテ絕ニキ。光仁又カタハラヨリエラバレテ立給。コレナン

又繼體天皇ノ御コトニ似玉ヘル。シカレドモ、天智ハ正統ニテマシ〳〵キ。第一ノ御子大友コソアヤマリテ天下ヲエ給ハザリシカド、第二ノ皇子ニテ施基(シキ)ノミコ、御トガナシ。其御子ナレバ、此天皇ノ立給ヘルコト正理ニカヘルトゾ申侍ベキ。今ノ光孝又昭宣公ノエラビ(ニ)テ立給トイヘドモ、仁明ノ太子、文德ノ御ナガレナリシカド陽成惡王ニテシリゾケラレ給シニ、仁明第二ノ御子(ニ)テ、シカモ賢才諸親王ニスグレマシ〳〵ケレバ、ウタガヒナキ天命トコソミエ侍シ。カヤウニカタハラヨリ出給コト、是マデ三代ナリ。人ノナセルコトヽハ心エタテマツルマジキヿ。サキニシルシ侍ルコトハリヲヨクワキマヘラルベキ者哉。

光孝ヨリ上ツカタハ一向上古也。ヨロヅノ例ヲ勘モ、仁和ヨリ下ツカタヲゾ申メル。古スラ猶カヽル理ニテ天位ヲ嗣給。マシテ、スエノ世ニハマサシキ御ユヅリナラデハタモタセ給マジキコトヽ心エタテマツルベキヿ。此御代ヨリ藤氏ノ攝籙ノ家モ他流ニウツラズ、昭宣公ノ苗裔ノミゾタヾシクツタエラレニケル。上ハ光孝ノ御子孫、天照太神ノ正統トサダマリ、下ハ昭宣公ノ子孫、天兒屋ノ命ノ嫡流トナリ給ヘリ。二神ノ御チカヒタカハズシテ上ハ帝王三十九代、下ハ攝關四十餘人、四百七十餘年ニモナリヌルニヤ。

第五十九代、第卅二世、宇多天皇、諱ハ定省、光孝第三ノ子。御母、皇太后班子ノ女王、仲野親王桓武ノ御子。女也。元慶ノ比孫王ニテ、源氏ノ姓ヲ給ラセマシマス。ソノカミツチニ鷹狩ヲコノマセ給ケルニ、アル時賀茂大明神アラハレテ皇位ニツカヒ給ベキヨシヲシメシ申サレケリ。踐祚ノ後彼社ノ臨時ノ祭ヲハジメラレシハ大神ノ申ウケ給ケルユヘトゾ。仁和三年丁未ノ秋、光孝御病アリシニ、御兄ノ御子タチヲ、キテ、讓ヲウケ給。先親王トシ、皇太子ニタチ、即受禪。同年ノ冬、即位。中一トセアリテ己酉ニ改元。踐祚ノ初ヨリ太政大臣基經又關白セラル、此關白薨テ後ハシバラクソノ人ナシ。天下ヲ治給コト十年。位ヲ太子ニユヅリテ太上天皇ト申。中一トセバカリアリテ出家セサセ給。御年卅三ニヤ。ワカクヨリソノ御志アリキトゾ仰給ケル。弘法大師四代ノ弟子益信僧正ヲ御師ニテ、東寺ニメ、灌頂セサセ給。又智證大師ノ弟子、增命(僧)正ニモ于時法橋之、後諡云靜觀。比叡山ニテウケサセ給ヘリ。弘法ノ流ヲムネトセサセ給ケレバ、其御法流トテ今ニタエズ、仁和寺ニ傳侍ハ是ナリ。オヨソ弘法ノ流ニ廣澤仁和寺小野醍醐寺勸修寺ノ二アリ。廣澤ハ法皇ノ御弟子、寛空僧正、寛空ノ弟子寛朝僧正敦實親王子、法皇御孫之。寛朝廣澤ニスマレシカバ、カノ流ト云。ソノヽチ代々ノ御室相傳テ、タヾ人ハアヒマジハラズ。法流

ヲアヅケラレテ師範トナルコトハ兩度アリ。サレド御室代々親王ナリ。小野ノ流ハ益信ノ相弟子ニ聖寶僧正トテ弘〔知〕法無双ノ人アリキ。大師ノ嫡流ト稱スルコトノアルニヤ。シカレド年戒オトラレケルユヘニヤ、法皇御灌頂ノ時ハ色衆ニツラナリテ嘆徳ト云コトヲツトメラレタリキ。延喜ノ護持僧ニテ、コトニ崇重給キ。其弟子觀賢僧正モアヒツイテ、護持申。オナジク崇重アリキ。綱中法務ヲ東寺ノ一阿闍梨ニツケラレシモコノ時ヨリ始ル。正ノ法務ハイツモ東寺ノ一ノ長者ナリ。諸寺ニナルハミナ權法務ナリ。又仁和寺ノ御室惣ノ法務ニテ綱所ヲ召仕ル、コトハ後白川以來ノ事歟。此僧正ハ高野ニマウデ、大師入定ノ崫〔窟〕ヲ開テ、御髪ヲ剃法服ヲキセカヘ申シ人ナリ。其弟子淳祐石山ノ内供ト云相伴ハレケレドモ、ツヰニ見奉ラズ。師ノ僧正ソノ手ヲトリテ御身ニフレシメケリトゾ。淳祐罪障ノ至ヲナゲキテ卑下ノ心アリケレバ、弟子元杲僧都ニ延命院ト云許可バカリニテ授職ヲユルサズ。勅定ニヨリテ法皇ノ御弟子寛空ニアヒテ、授職灌頂ヲトグ。彼元杲ノ弟子仁海僧正又知法ノ人ナリキ。小野ト云所ニスマレケルヨリ小野流ト云。シカレバ、法皇ハ兩流ノ法主ニマシマス之。王位ヲサリテ釋門ニ入コトハ其例オホシ、カク法流ノ正統トナリ、シカモ御子孫繼躰シ給ヘル、有ガタキタメシニヤ。今ノ世マデモカシコカリシコトニハ延喜天暦ト申ナラハシタレド、此御世コソ上代ニヨレ、〔リ〕シ無為ノ御政ナリケン

（ト）ヲシハカラレ侍ル。菅氏ノ才名ニヨリテ大納言大將マデ登用シ給シモ此御時之。又讓國ノ時サマ〴〵ヲシヘ申サレシ寛平ノ御誡トテ君臣アフギテミタツルコトモアリ。昔、モロコシニモ天下ノ明德ハ虞舜ヨリ始ルトミエタリ。唐堯ノモチ井給シニヨリテ、舜ノ德モアラハレ、天下ノ道モアキラカニナリニケルトゾ。二代ノ明德ヲモテ此御コトヲシハカリ奉ルベシ。御壽モ長テ朱雀ノ御代ニゾカクレサセ給ケル。七十六歲オマシ〳〵キ。

第六十代、第卅三世、醍醐天皇、諱ハ敦仁、宇多第一ノ子。御母贈皇太后、藤原ノ胤子、内大臣高藤ノ女也。丁巳年即位。戊午ニ改元。大納言左大將藤原時平・大納言右大將菅氏、兩人、上皇ノ勅ヲウケテ輔佐シ申サレキ。後ニ左右ニ（ノ）大臣ニ任テトモニ万機ヲ內覽セラレケリトゾ。御門御年十四ニテ位ニツキ給。オサナクマシ〳〵シカド聰明叡哲ニキコエ給キ。兩大臣天下ノ政ヲセラレシガ、右相ハ年モタケ、才モカシコクテ天下ノヽゾム所ナリ。左相ハ諸第ノ器也ケレバ、ステラレガタシ。或時上皇ノ御在所朱雀院ニ行幸、猶右相ニマカセラルベシト云サダメアリテスデニ召仰玉ヒケルヲ右相カタクノガレ申サレテヤミヌ。其事世ニモレニケルニヤ、左相イキドヲリヲフクミサマ〴〵讒ヲマウケテツ井ニカタブケ奉リ　コトコ

ソアサマシケレ。此君ノ御一失ト申傳ハベリ。但菅氏權化ノ御事ナレバ末世ノタメニヤアリケン、ハカリガタシ。善相公清行朝臣ハコノ事イマダキザヽザリシニ、カネテサトリテ、菅氏ニ災ヲノガレ給ベキヨシヲ申ケレド、サタナクテ、此事出來ニキ。サキニモ申ハベリシ、我國ニハ幼主ノ立給コト、昔ハナカリシコト之。貞觀元慶ノ二代始テ幼ニテ立玉ヒシカバ忠仁公、昭宣公攝政ニテ天下ヲ治フル。此君ゾ十四ニテウケツギ給テ、攝政モナク御ミヅカラ政ヲシラセマシ／＼ケル。猶御幼年ノユヘニヤ、左相ノ讒ニモマヨハセ給ケン。聖モ賢モ一失ハアルベキニコソ。其趣經書ニミエタリ。サレバ、曾子ハ吾日三省吾躬ト云。季文子三思トモ云。聖德ノホマレマシマサンニツケテモイヨ／＼ツヽシミマシマスベキコト也。昔應神天皇モ讒ヲキカセ玉ヒテ、武内ノ大臣ヲ誅セラレントシキ。彼ハヨクノガレテアキラメラレタリ。コノタビノコト凡慮ヲヨビガタシ。ホドナク神トアラハレテ今ニイタルマデ、靈驗無双ナリ。末世ノ益ヲホドコサンタメニヤ。讒ヲ入シ大臣ハノチナクナリヌ。同心アリケルタグヒモミナ神罰ヲカウブリニキ。此君久ク世ヲタモタセ給テ德政ヲコノミ行ハセ玉フコト上代ニコエタリ。天下泰平、民間安穩ニテ本朝仁德ノフルキ跡ニモナゾラヘ、異域

堯舜ノカシコキ道ニモタグヘ申キ。延喜七年丁卯年モロコシノ唐滅テ梁ト云國ニウツリニケリ。ウチツヾキ後唐、晋、漢、周トナン云五代アリキ。此天皇天下ヲ治給コト卅三年。四十四歳オマシ〳〵キ。

第六十一代、朱雀天皇、諱ハ寛明、醍醐十一ノ子。御母皇太后藤原穏子、關白太政大臣基經ノ女也。御兄保明ノ太子諡ヲ文彥ト申。早世。ソノ御子慶頼ノ太子モウチツヾキカクレマシ、カバ、保明一腹ノ御弟ニテ、立給。庚寅年即位。辛卯ニ改元。外舅左大臣忠平昭宣公ノ三男、後貞信公ト云。攝政セラル。寛平ニ昭宣公薨テノチニハ延喜御一代ニ(マヽ)デ攝關ナカリキ。此君又幼主ニテ立給ニヨリテ故事ニマカセテ万機ヲ攝行セラレケルニコソ。此御時平ノ將門ト云物アリ。上総介高望ガ孫也。高望ハ葛原親王孫、平姓ヲ給ル。桓武四代ノ御苗裔ナリトゾ。執政ノ家ニツカウマツリケルガ、使(ノ)宣旨ヲ望申ケリ。不許ナルニヨリイキドヲリヲナシ、東國ニ下向メ、叛逆ヲオコシケリ。マヅ、伯父常陸(國)ノ大掾、國香ヲセメシカバ、國香自殺シヌ。コレヨリ坂東ヲ、シナビカシ、下総國相馬郡ニ居所ヲシメ、都トナヅケ、ミヅカラ平親王ト稱シ、官爵ヲナシアタヘケリ。コレニヨリテ天下騒動ス。參議民部卿兼右衛門督藤原忠文朝臣ヲ征東大將軍トシ、源經基清和ノ御スヱ、六孫王ト云。輔義、義家

（先祖之。）藤原仲舒（忠文ノ弟之）ヲ副將軍トシテ、サシツカハサル。平貞盛（國香ガ子）藤原秀鄕等心ヲ一ニシテ、將門ヲホロホシ、其首ヲ奉リシカバ、諸將ハ道ヨリカヘリマイリニキ。（將門承平五年二月ニ事ヲオコシ、天慶三年二月ニ滅ヌ。其間六年ヘタリ。）藤原純友ト云物、カノ將門ニ同意シ、西國ニテ叛乱セシカバ、少將小野好古ヲ遣テ追討セラル。（天慶四年ニ純友ハコロサルトゾ。）カクテ天下シヅマリニキ。延喜ノ御代サシモ安寧ナリシニ、イツシカ、此乱出來。天皇モオダヤカニマシ〱ケリ。又貞信公ノ執政ナリシカバ、政タガフコトハハベラジ。時ノ災難ニコソトオホエ侍ル。天皇御子マシマサズ、一腹ノ御弟太宰帥ノ親王ヲ太弟ニタテ、天位ヲユヅリテ尊号アリ。後ニ出家セサセ給。天下ヲ治給コト十六年。卅歲オマシ〱キ。

第六十二代、第卅四世、村上天皇、諱成明、醍醐十四ノ子、朱雀同母ノ御弟也。丙午年即位。丁未ニ改元。兄弟相讓セ玉ヒシカバ、マメヤカナル禪讓ノ礼儀アリキ。此天皇賢明ノ御ホマレ先皇ノアトヲ繼申サセ給ケレバ、天下安寧ナルコトモ延喜延長ノ昔ニコトナラズ、文筆諸藝ヲ好給コトモカハリマサヾリケリ。ヨロヅノタメシニハ延喜天暦ノ二代トゾ申侍ル。モロコシノカシコキ明王モ二三代トツタハルハマレナリキ。周ニゾ文、武、成 康、（文王ハ正位ニツカズ。）漢ニ

ハ文、景ナンドゾアリガタキコトニ申ケル。光孝カタハラヨリエラバレ立給シニウチツヾキ明主（王）ノ傳リ給シ、我國ノ中興スベキユヘニコソ侍ケメ。又繼躰モタヾコノ一流ニノミゾサダマリヌル。スヱツカタ、天德年中ニヤハジメテ內裏ニ炎上アリテ、內侍所モ燒ニシガ、神鏡ハ灰ノ中ヨリイダシ奉ラル。円規損スルコトナク〆、分明ニアラハレ出給。見奉ル人驚感ゼズト云コトナシトゾ御記ニミエ侍ル。此時ニ神鏡南殿ノ櫻ニカヽラセ給ケルヲ小野宮ノ實頼ノオトヾ袖ニウケラレタリト申コトアレド、ヒガ事ヲナン云傳侍也。應和元年辛酉年モロコシノ後周滅テ、宋ノ代ニサダマル。唐ノ後五代、五十五年ノアヒダ彼國大ニ乱テ、五姓ウツリカハリテ、國ノ主タリ。五季トゾ云ケル。宋ノ代ニ賢主（王）ウチツヾキテ三百廿余年マデタモテリキ。此天皇天下ヲ治給コト廿一年。四十二歲オマシ〳〵キ。御子オホクマシ〳〵シ中ニ、冷泉円融ハ天位ニツキ給シカバ、申ニオヨバズ。親王ノ中ニ、具平親王（六条ノ宮ト申。中務卿ニ任給キ。前ニ兼明親王名譽オハシキ。仍コレヲバ後中書王ト申。）賢才文藝ノカタ代々ノ御アトヲヨク相繼申玉ヒケリ。一条ノ御代ニヨロヅ昔ヲオコシ、人ヲ用マシ〳〵ケレバ、コノ親王昇殿シ給シ日、清涼殿ニテ作文アリシニ、（中殿ノ作文ト云コトコレヨリハジマル。）所レ貴是賢才ト云題ニテ、韻ヲサグラルヽコトアリ。此親王ノ御タメナ

ルベシ。凡諸道ニアキラカニ佛法ノ方マデクラカラザリケルトゾ。昔ヨリ源氏オホカリシカドモ、此御スヱノミゾイマニ至マデ、大臣以上ニ至テ相繼侍ル。源氏ト云コトハ嵯峨ノ御門世ノツイエヲオボシメシテ、皇子、皇孫ニ姓ヲ給テ、人臣トナシ給。スナハチ御子アマタ源氏ノ姓ヲ給ル。桓武ノ御子葛原親王ノ男、高棟、平ノ姓ヲ給ル。平城ノ御子阿保親王ノ男、行平、業平等在原ノ姓ヲ給ルコトモ此後ノコトナレド、コレハタマ／＼ノ儀也。弘仁以後、代々ノ御後ハミナ源姓ヲ給シナリ。親王ノ宣旨ヲ蒙ル人ハ才不才ニヨラズ、國々ニ封戸ナド立ラレテ世ノツイヘナリシカバ、人臣ニツラネ、官學ノ、朝要ニカナヒ、器ニシタガヒ、昇進スベキ御ヲキテナルベシ。姓ヲ給ル人ハ直ニ四位ニ叙ス。皇子皇孫ニトリテノ事也。當君ノハ三位ナルベシト云。カヽレド其例マレナリ。嵯峨ノ御子大納言定卿三位ニ叙セシカドモ當代ニハアラズ。カクテ代々ノアヒダ、姓ヲ給シ人、百十余人モヤアリケン。シカレド、他流ノ源氏、大臣以上ニイタリテ二代ト相續スル人ノ今マデキコエヌコソイカナルユヘナルランオボツカナケレ。嵯峨ノ御子姓ヲ給人廿一人。コノ中、大臣ニノボル人、常ノ左大臣兼大將、信ノ左大臣、融ノ左大臣、仁明ノ御子ニ、姓ヲ給人十三人、大臣ニノボル人、多ノ右大臣、光ノ右大臣兼大將。文徳ノ御子ニ、姓ヲ給人十二人、大臣ニノボル人、

能有ノ右大臣兼大將。清和ノ御子ニ姓ヲ給人十四人、大臣ニノボル人、十世ノ御スヱニ實朝ノ右大臣兼大將、コレハ貞純親王ノ苗裔ナリ。陽成ノ御子ニ姓ヲ給人三人。光孝ノ御子ニ姓ヲ給人十五人。宇多ノ御孫ニ姓ヲ給テ大臣ニノボル人、雅信ノ左大臣、重信ノ左大臣。トモニ敦實親王ノ男ナリ。醍醐ノ御子ニ姓ヲ給人、卄人。大臣ニノボル人、高明ノ左大臣兼大將。兼明ノ左大臣後ニハ親王トス、中務卿ニ任ズ。前中書王コレナリ。コノ後ハ皇子ノ姓ヲ給コトハタエニケリ。皇孫ニハアマタアリ。任大臣ヲ本トシルスニヨリテコトヾヽクノセズ。チカクハ後三条ノ御孫ニ有仁ノ左大臣兼大將。輔仁親王ノ男。白川院ノ御猶子ニテ直ニ三位セシ人ナリ。二世ノ源氏ニテ大臣ニノボレリ。カヤウニタマヽヽ大臣ニ至テモイヅシ（レ）カ二代ト相繼ル。ホトヽヽ納言以上マ（ニ）テツタハレルダニマレナリ。雅信ノ大臣ノ末ゾヲノヅカラ納言マデモノボリテノコリタル。高明ノ大臣ノ後、四代大納言ニテアリシモハヤク絶ニキ。イカニモユヘアルコトカトヲボヘタリ。皇胤ノ貴種ヨリ出ヌル人、蔭ヲタノミイト才ナンドモナク、アマサヘ人ニヲゴリ、モノニ慢ズル心モアルベキニヤ。人臣ノ礼ニタガフコトアリヌベシ。寛平ノ御記ニソノハシノミエハベリシ也。後ヲモヨクカヽミサセ給ケルニコソ。皇胤ハ誠ニ他ニコトナルベキコトナレド、我國ハ神代ヨリノ誓ニテ、君ハ天照太神ノ御スヱ國ヲ

タモチ、臣ハ天兒屋ノ御流君ヲタスケ奉ルベキ器トナレリ。源氏ハアラタニ出タル人臣ナリ。德モナク功モナク高官ニノボリテ、人ニヲゴラバ、二神ノ御トガメ有ヌベキコトゾカシ。ナカ〳〵、上古ニハ皇子皇孫モオホクテ諸國ニモ封ゼラレ、將相ニモ任ゼラレキ。崇神天皇十年ニ始テ四人ノ將軍ヲ任ジテ四道ヘツカハサレシモ皆コレ皇族ナリ。景行天皇五十一年始テ棟梁ノ臣ヲ置テ武内ノ宿禰ヲ任ズ。成務天皇三年ニ大臣トス、我朝大臣コレニ始ル。六代ノ朝ニツカヘ執政タリ。此大臣モ孝元ノ曾孫ナリキ。シカレド大織冠氏ヲサカヤカシ、忠仁公政ヲ攝セラレシヨリモハラ輔佐ノ器トシテ立カヘリ、神代ノ幽契ノマヽニ成ヌルニヤ。閑院ノ大臣冬嗣、氏ノ衰タルコトヲナゲキテ善ヲツミ、功ヲカサネ、神ニイノリ、佛ニ歸セラレケル其シルシモ相クハヽリ侍ケンカシ。此親王ゾマコトニ才モタカク德モオハシケルニヤ。其子師房姓ヲ給テ人臣ニ列セラレシ(ニ白)才藝古ニハヂズ、名望世ニ聞アリ。十七歳ニテ納言ニ任ジ、數十年ノ間朝道ノ故實ニ練ジ、大臣大將ニノボリテ懸車ノ齡マデツカウマツラル。親王ノ女祇子ノ女王ハ宇治關白ノ室ナリ。仍此大臣ヲバ彼關白ノ子ニシ給テ、藤氏ニカハラズ、春日社ニモマイリツカウマツラレケリトゾ。又ヤガテ御堂ノ息女ニ相嫁セラレシカバ、子孫

モミナ彼外孫ナリ。コノユヘニ御堂宇治ヲバ遠祖ノ如クニ思ヘリ。ソレヨリコノカタ和漢ノ稽古ヲムネトシ、報國ノ忠節ヲサキトスル誠アルニヨリテヤ此一流ノミタエズメ、十余代ニオヨベリ。ソノ中ニモ行跡ウタガハシク貞節オロソカナルタグヒハオノヅカラ衰テアトナキモアリ、向後ト云トモツヽシミ思給ベキコト也。大カタ天皇ノ御コトヲシルシ奉ル中ニ藤氏ノオコリハ所々ニ申侍ヌ。源ノ流モ久クナリヌル上ニ正路ヲフムベキ一ハシヲ心ザシテ、シルシ侍ル也。君モ村上ノ御流一トヲリニテ十七代ニ成シメ給。臣モ此御スエノ源氏コソ相ツタハリタレバ、タヾ此君ノ徳スグレ給ケルユヘニ餘慶アルカトコソアフギ申ハベレ。

第六十三代、冷泉院、諱ハ憲平、村上第二ノ子。御母、中宮藤原安子、左（右）大臣師輔ノ女也。丁卯年即位。戊辰ニ改元。コノ天皇邪氣オハシケレバ、即位ノ時、大極殿ニ出給コトモタヤスカルマジカリケルニヤ。紫宸殿ニテ其礼アリキ。二年バカリシテ讓國。六十三歳オハシマシキ。此御門ヨリ天皇ノ号ヲ申サズ。又宇多ヨリ後諡ヲタテマツラズ。遺詔アリテ國忌山陵ヲヽカレザルコトハ君父ノカシコキ道ナレド、尊号ヲトヾメラルヽコトハ臣子ノ義ニアラズ。神武以來ノ御号モ皆後代ノ定ナリ。持統元明ヨリ以來△避（遜）位或出家ノ君モ諡ヲタテ

マツル。天皇トノミコソ申メレ。中古ノ先賢ノ議ナレドモ、心ヲエヌコトニ侍ナリ。

第六十四代、第卅五世円融院、諱ハ守平、村上第五ノ子、冷泉同母ノ弟也。己巳年即位、庚午ニ改元。天下ヲ治給コト、十五年。禪讓尊号ツネノ如シ。翌年ノ程ニヤ、御出家。永延ノ比寛平ノ例ヲオフテ東寺ニテ灌頂セサセ給。御師ハスナハチ寛平ノ御孫弟子寛朝僧正ナリ。卅三歳オマシ〳〵キ。

第六十五代、花山院 諱ハ師貞、冷泉第一ノ子。御母皇后藤原懐子、摂政太政大臣伊尹ノ女也。甲申年即位、乙酉ニ改元。天下ヲ治給コト二年アリテ、俄ニ發心シ、花山寺ニテ出家シ給。弘徽殿ノ女御太政大臣爲光ノ女之。カクレテ悲歎マシケルオリヲエテ粟田關白道兼ノオトヾノイマダ藏人弁トキコエシ比ニヤソヽノカシ申テケルトゾ。山々ヲメグリテ修行セサセマシヽガ、後ニハ都ニカヘリテスマセ給ケリ。是モ御邪氣アリトゾ申ケル。四十一歳オマシ〳〵キ。

第六十六代、第卅六世、一条院、諱ハ懐仁、円融第一ノ子。御母皇后藤原詮子、後ニハ東三条院ト申。后宮院号ノ始之。摂政太政大臣兼家ノ女ナリ。花山ノ御門神器ヲステヽ、宮ヲ出給シカバ、太子ノ外祖ニテ兼家ノ右大臣オハセシカ、内ニマイリ諸門ヲカタメテ讓位ノ儀ヲオコナハレキ。新主モオ

サナクマシ〳〵シカバ、攝政ノ儀フルキガゴトシ。丙戌年即位、丁亥ニ改元。ソノ、チ攝政病ニヨリ嫡子內大臣道隆ニ讓テ出家、猶准三宮ノ宣ヲ蒙。執政ノ人出家ノ始也。ソノ比ハ出家ノ人ナカリシカバ、入道殿トナン申。仍源ノ滿中出家シタリシヲハヾカリテ新發トゾ云ケル。此道隆始テ大臣ヲ辭テ前官ニテ關白セラレキ。前官ノ攝政モコレコ始トス。病アリテ、其子內大臣伊周シバラク相カハリテ內覽セラレシガ、相續シテ、關白タルベキヨシヲ存セラレケルニ、道隆カクレテ、ヤガテ弟右大臣道兼ナラレヌ。七日ト云シニ、アヘナクウセラレニキ。其弟ニテ道長、大納言ニテオハセシガ、內覽ノ宣ヲカウブリテ左大臣マデイタラレシカド、延喜天曆ノ昔ヲオボシメシケルニヤ、關白ハヤメラレニキ。三条ノ御時ニヤ關白シテ、後一条ノ御世ノ初、外祖ニテ攝政セラル。兄弟オホクオハセシニ、此大臣ノナガレ一ニ攝政關白ハシ給ゾカシ。昔モイカナルユヘニカ、昭宣公ノ三男ニテ貞信公、〻〻〻ノ二男ニテ師輔ノ大臣ノナガレ、師輔ノ三男ニテ東三条ノオトヾ、東三条ノ三男ニテ道綱大將ハ一男歟。サレド、三弟ニコサレタリ。仍道長ヲ三男トシルス。コノオトヾ、ミナ父ノ立タル嫡子ナラデ、自然ニ家ヲツガレタリ。祖神ノハカラハセ給ヘル道ニコソ侍リケメ。イヅレモ兄ニコエテ、家ヲツタエラルベキユヘアリト申コトノアレド、コトシゲケレバシルサズ。此御代ニハサルベキ上達部諸道ノ家々顯密ノ僧マデモスグレタル人オホカリキ。サレバ、御門モワレ人ヲ得タルコ

トハ延喜天暦ニマサレリトゾ自歎セサセ給ケル。天下ヲ治給コト二十五年。御病ノ程ニ讓位アリテ、出家セサセ給。卅三歳オマシ〳〵キ。

第六十七代、三条院。諱居貞、冷泉第二ノ子。御母皇太后藤原超子、コレモ攝政兼家ノ女也。花山院世ヲノガレ給シカバ、太子ニ立給シガ、御邪氣ノユヘニヤ、オリ〳〵御目ノクラクオハシケルトゾ。辛亥年即位、壬子ニ改元。天下ヲ治給コト、五年。尊号アリキ。四十二歳オマシ〳〵キ。

第六十八代、後一条院。諱敦成、一条第二ノ(子)。御母、皇后藤原彰子、(後ニ上東門院ト申。)攝政道長ノ大臣ノ女也。丙辰年即位。丁巳ニ改元。外祖道長ノオトヾ攝政セラレシガ、ノチニ攝政ヲバ嫡子頼通ノ内大臣ニオハセシニユヅリ、猶、太政大臣ニテ天皇御元服ノ日、加冠理髪父子ナラビテ勤仕セラレシコソメヅラシク侍シカ。冷泉円融ノ兩流カハル〳〵シラセ給シニ、三条院カクレ給テノチ、御子敦明ノ御子、太子ニ井給シガ、心トノガレテ院号ヵウブリテ小一条院ト申キ。コレヨリ冷泉ノ御流ハタエニケリ。冷泉ハコノカミニテ御スエモ正統トコソ申ベカリシニ、昔天暦御時、元方ノ民部卿ノムスメ御息所、一ノミコ、廣平親王ヲウラミタテマツ

ル。九条殿ノ女御マイリ給テ、第二ノ皇子冷泉ニマシマス。イデキ玉ヒシ比ヨリ悪靈ニナリテ、コノミコモ邪氣ニナヤマサレマシキ。花山院ノ俄ニ世ヲノガレ、三条院ノ御目ノクラク、此東宮ノカクミヅカラシリゾキ給ヌルモ怨靈ノユヘナリトゾ。円融モ一腹ノ御弟ニオハシマセド、コレマデハナヤマシ中サヾリケルモシカルベキ繼躰ノ御運マシ〱ケルニコソ。東宮シリゾキ給シカバ、此天皇同母ノ御弟敦良親王立給キ。天皇モ御子ナクテ、彼東宮ノ御末ゾ繼躰セサセ給ヌル。天皇天下ヲ治給コト廿年。廿九歳オマシ〱キ。

第六十九代、第卅七世、後朱雀院、諱敦良、後一条同母ノ弟也。丙子年即位、丁丑ニ改元。天皇賢明ニマシ〱ケルトゾ。サレド、其比(執)柄、權ヲホシキマヽニセラレシカバ、御政ノアトキコエズ。無念ナルコトニヤ。長久ノ比、内裏ニ火アリテ神鏡燒給。猶靈光ヲ現シ給ケレバ、ソノ灰ヲアツメテ安置セラレキ。天下ヲ治給コト九年。三十七歳オマシ〱キ。

第七十代、後冷泉院、諱親仁、後朱雀第一ノ子。御母、贈皇太后藤原嬉子、本ハ尚侍 攝政道長ノオトヾ第三ノ女ナリ。乙酉年即位。丙戌改元。此御代ノスヱツカタ世ノ中ヤスカラズキコエキ。陸奥ニモ貞任、宗任ナド云シ者、國ヲミダリケレバ、源頼義ニ仰テ追討セラル。頼義陸奥守ニ任ジ、鎮守府ノ(將)

軍ヲ兼ヌ。彼家鎮守將軍ニ任ズル始之。曾祖父經基ハ征東副將軍タリキ。十二年アリテナムシヅメ侍ケル。此君御子マシマサザリシ上、後朱雀ノ遺詔ニテ、後三条、東宮ニ井給ヘリシカバ、繼躰ハカネテヨリサダマリケルニコソ。天下ヲ治給コト、廿三年。四十四歲オマシ〱キ。

第七十一代、第卅八世、後三条院、諱(ハ)尊仁、後朱雀第二ノ子。御母中宮、禎子内親王陽明門院ト申。三条院ノ皇女也。後朱雀ノ御素意ニテ太弟ニ立給キ。又三条ノ御末ヲモウケ給ヘリ。ムカシモカヽルタメシ侍キ。兩流ヲ内外ニ欽明天皇ノ御母白香ノ皇女仁賢天皇ノ御女仁德ノ御後之ウケ給テ、繼躰ノ主トナリマシマス。戊申年即位。己酉ニ改元。此天皇東宮ニテ久クオハシマシケレバ、シヅカニ和漢ノ文、顯密ノ數マデモクラカラズ、シラセ給。詩哥ノ御製モアマタ、人ノ口ニ侍メリ。後冷泉ノスエザマ、世ノ中アレテ民間ノウレヘアリキ。四月ヨリ位ニ井給シカバ、イマダ秋ノオサメニモオヨバスニ世ノ中ノナヲリニケル。有德ノ君ニテマシ〱ケルトゾ中傳ハベル。始テ記錄所ナント云所オカレテ、國ノオトロヘタルコトヲナヲサレキ。延喜天曆ヨリコナタニハマコトニカシコキ御コトナリケンカシ。天下ヲ治給コト、四年。太子ニユヅリテ尊号アリ。後ニ出家セサセ給。此御時ヨリ執柄ノ権オサヘラレテ君ノ御ミヅカラ政ヲシラセ給コトニ

欽明……御女まで割注とせず今改む

カヘリ侍ニシ。サレドソノコロマデモ讓國ノ後、院中ニテ政務アリトハミエズ。四十歳オマシ〳〵キ。

第七十二代、第卅九世、白河院、諱ハ貞仁、後三条第一ノ子。御母贈皇太后藤原茂子、贈太政大臣能信ノ女　實ハ中納言公成ノ女也。壬子年即位。甲寅ニ改元。古ノアトヲオコサレテ、野ノ行幸ナンドモアリ、又白河ニ法勝寺ヲ立、九重ノ塔婆ナドモ昔ノ御願ノ寺々ニモコエ、タメシナキホドゾツクリト、ノヘサセ給ケル。コノ、チ代ゴトニウチツヾキ（御）願寺ヲ立ラレシヲ造寺熾盛ノソシリ有キ。造作ノタメニ諸國ノ重任ナンド云コトオホクナリテ、受領ノ功課モタヾシカラズ、封戸庄園アマタヨセヲカレテマコトニ國ノ費トコソ成侍ニシカ。天下ヲ治給コト十四年。太子ユヅリテ尊号アリ。世ノ政ヲ、ハジメテ院中ニテシラセ給。後ニ出家セサセ給テモ猶ソノマ、ニテ御一期ハスゴサセマシ〳〵キ。オリ井ニテ世ヲシラセ給コト、昔ハナカリシナリ。孝謙脱屣ノ後ニゾ廢帝ハ位ニ井給バカリトミエタレド、古代ノコトナレバタシカナラズ。嵯峨、清和、宇多ノ天皇モタヾユヅリテノカセ給。円融ノ御時ハヤウ〳〵シラセ給コトモアリシニヤ、院ノ御前ニテ攝政兼家ノオトヾウケ玉ハリテ、源ノ時中朝臣ヲ、

參議ニナサレタルトテ小野宮ノ實資ノ大臣ナドハ傾申サレケルトゾ。サレバ上皇マシマセド、主上ヲサナクオハシマス時ハヒトヘニ執柄ノ政ナリキ。宇治ノ大臣ノ世トナリテハ三代ノ君ノ執政ニテ五十余年權ヲモハラニセラル。先代ニハ關白ノ後ハ如在ノ礼ニテアリシニ、アマリナル程ニナリニケレバニヤ、後三条院坊ノ御時ヨリアシサマニオボシメスヨシキコエテ、御中ライアシクテアヤブミオボシメスホドノコトニナンアリケル。踐祚ノ時、即關白ヲヤメテ宇治ニコモラレヌ。弟ノ二条ノ教通ノ大臣關白セラレシハ、コトノ外ニ、其權モナクオハシキ。マシテ此御代ニハ院ニテ政ヲキカセ給ヘバ執柄ハタヾ職ニソナハリタルバカリニナリヌ。サレド、コレヨリ又フルキスガタハ一變スルニヤ侍ケン。執柄世ヲオコナハレシカド、宣旨官符ニテコソ天下ノ事ハ施行セラレシニ、此御時ヨリ院宣、廳御下文ヲオモクセラレシニヨリテ、在位ノ君又位ニソナハリ給ヘルバカリナリ。世ノ末ニナレルスガタナルベキニヤ。又城南ノ鳥羽ト云所ニ離宮ヲタテ、土木ノ大ナル營アリキ。昔ハオリ位ノ君ハ朱雀院ニマシマス。コレヲ後院ト云。又冷然院ニモ（然字火ノコトニハマカリアリテ泉ノ字ニ改ム。）オハシケルニ、彼所々ニハスマセ給ハズ、白河ヨリノチニハ鳥羽殿ヲモチテ上皇御坐ノ本所トハサダメラレニケリ。御

子堀河ノミカド、御孫鳥羽ノ御門、御ヒコ崇德ノ御在位マデ五十余年、在位ニテ十四年、院中ニテ四十三年。世ヲシラセ給シカバ、院中ノ礼ナンド云コトモコレヨリゾサダマリケル。スベテ御心ノマヽニ久クタモタセ給シ御代也。七十七歳オマシ〳〵キ。

第七十三代、第四十世、堀河院、諱善仁、白河第二ノ子。御母、中宮賢子、右大臣源顯房ノ女、關白師實ノオトヾノ猶子之。丙寅ノ年即位。丁卯ニ改元。コノミカド和漢ノ才マシ〳〵ケリ。コトニ管絃郢曲、舞樂ノ方、アキラカニマシマス。神樂ノ曲ナドハ今ノ世マデ地下ニツタヘタルモコノ御說也。天下ヲ治給コト廿一年。廿九歳オマシ〳〵キ。

第七十四代、第四十一世、鳥羽院、諱ハ宗仁、堀川第一ノ子。御母贈皇太后藤原苡子、贈太政大臣實季ノ女也。丁亥ノ年即位。戊子ニ改元。天下ヲ治給コト十六年。太子ニ讓テ尊号アリ。白河代ヲシラセ給シカバ、新院トテ所々ノ御幸ニモオナジ御車ニテアリキ。雪見ノ御幸ノ日、御烏帽(ハ帽)子直衣ニフカ沓ヲメシ、御馬ニテ本院ノ御車ノサキニマシ〳〵ケル、世ニメヅラカナル事ナレバ、コゾリテミ奉リキ。昔拡仁ノ(太)上皇、嵯峨ノ院ニウツラセ給シ日ニヤ、御馬ニテミヤコヨリイデサセマシテ、宮城ノ内ヲモトヲラセ給ヘリト云コトノミエ侍シ、カヤウノ例ニヤ有ケン。御容儀メデタクマシ〳〵ケレバ、キラヲモコノマセ給ケルニヤ。装束ノコワクナリ、烏帽(帽)子ノヒタイナンド云コトモ其比ヨリ出來ニキ。花園ノ有仁ノオトド、又容儀アル人ニテオホセアハセア上下オナジ風ニナリニケルトゾ申メル。白河院カクレ給テ後、政ヲシラセ給。御孫ナガラ御子ノ儀ナレバ、重服ヲキサセ給ケリ。コレモ院中ニテ廿余年、ソノアヒダニ御出家アリシカド、猶、世ヲシラセ給キ。サレバ、院中ノフルキタメシニハ

白河鳥羽ノ二代ヲ申侍シ。五十四歳マシ〳〵キ。

第七十五代、崇德院、諱ハ顯仁、鳥羽第一ノ子。御母、中宮藤原璋子（待賢門院ト申。）入道大納言公實ノ女也。癸卯ノ年即位。甲辰ニ改元。（五年）戊申年、宋欽宗皇帝靖康三年ニアタル。宋ノ政ミダレシヨリ北狄（テキ）ノ金國起テ上皇徽（キ）宗幷ニ欽宗ヲトリテ北ニカヘリヌ。皇弟高宗江ヲワタリテ杭（カウ）州ト云所ニ都ヲタテ、在所トス。南渡ト云ハコレ也。此天皇天下ヲ治給コト、十八年。上皇ト御中ラヒ心ヨカラデ、シリゾカセ給キ。保元ニ事アリテ御出家アリシガ、讃岐國ニウツサレ給。四十六歳オマシ〳〵キ。

第七十六代、近衞院、諱ハ體（ナリ）仁、鳥羽第八ノ子。御母、皇后藤原得子（美福門院ト申。）贈左大臣長實ノ女也。辛酉年即位。壬戌ニ改元。天下ヲ治給コト、十四年。十七歳ニテ世ヲハヤクシマシ〳〵キ。

第七十七代、第四十二世、後白河院、諱ハ雅仁、鳥羽第四子、崇德同母ノ御弟也。近衞ハ鳥羽ノ上皇鍾愛ノ御子也シニ、早世シマシ〳〵ヌ。崇德ノ御子重仁親王ツガセ給ベカリシニ、モトヨリ御中心ヨカラデヤミヌ。上皇オボシメシワヅラヒケレド、コノ御門タヽセ給。立太子モ

ナクテスグニ井ザセ給。今ハ此御末ノミコソ繼躰シ給ヘバ、シカルベキ天命トゾオボエ侍ル。乙亥ノ年即位。丙子ニ改元、号ヲ保元ト云。鳥羽晏駕アリシカバ天下ヲシラセ給。左大臣頼長トキコエシハ知足院入道關白忠實ノ次郎也。法性寺關白忠通ノオトヾ、此大臣ノ兄ニテ、和漢ノ才タカクテ、父執柄ニテツカヘラレキ。コノ大臣モ漢才ハタカクキコエシカド、本性アシクオハシケルトゾ。父ノ愛子ニテ、ヨコサマニ申ウケラレケレバ、關白ヲヽキナガラ、藤氏ノ長者ニナリ、内覽ノ宣旨ヲ蒙ル。長者ノ他人ニワタルコト攝政關白ハジマリテハ其例ナシ。内覽ハ昔醍醐ノ御代ノハジメツカタ、本院ノ大臣ト菅家ト政ヲタスケラレシ時、アヒナラビテ、其号アリキト申メレドモ、本院モ關白ニハアラズ。其例タガウニヤ。兄ノオトヾハ本性オダヤカニオハシケレバ、オモヒイレヌサマニテゾスゴサレケル。近衞ノ御門カクレ給シコロヨリ内覽ヲヤメラレタリシニ恨ヲフクミ、大方天下ヲ我マヽニトハカラレケルニヤ。崇徳ノ上皇ヲ申スヽメテ、世ヲミダラル。父ノ法皇晏駕ノヽチ、七ケ日バカリヤアリケン。忠孝ノ道カケニケルヨト見エタリ。法皇モカ子テサトラシメ給ケルニヤ、平清盛、源義朝等ニメシ仰テ内裏ヲマボリ奉ルベキヨシ勅命アリキトゾ。上皇鳥羽ヨリイデ給テ、白河ノ

大炊殿ト云所ニテスデニ兵ヲアツメラレケレバ、清盛義朝等ニ勅テ上皇ノ宮ヲセメラル、官軍勝ニノリシカバ、上皇ハ西山ノ方ニノガレ、左大臣ハ流矢ニアタリテ奈良坂邉マデヲチユカレケルガ、ツヰニ客死セラレヌ。上皇御出家アリシカド、猶、讃岐ニウツサレ給。大臣ノ子共國々ヘツカハサル。武士ドモ、多ク誅ニフシヌ。ソノ中ニ源爲義トキコエシハ義朝ガ父也。イカナル御志カアリケン、上皇ノ御方ニテ、義朝ト各別ニナリヌ。餘ノ子共ハ父ニ屬シケルニコソ。軍ヤブレテ、爲義モ出家シタリシヲ義朝アヅカリテ誅セシコソタメシナキコトニ侍レ。嵯峨ノ御代ニ奈良坂ノタヽカヒアリシ後ハ都ニ兵革ト云コトナカリシニ、コレヨリミダレソメヌルモ時運ノクダリヌルスガタトゾオボエハベル。此君ノ御乳母ノ夫ニテ少納言通憲法師ト云シハ藤家ノ儒門ヨリ出タリ。宏才博覧ノ人ナリキ。サレド時ニアハズメ、出家シタリシニ、此御世ニ、イミジク用ラレテ、内々ニハ天下ノ事サナガラハカラヒ申ケリ。大内ハ白河ノ御代ヨリ久荒癈〔廢〕メ、里内ニノミマシ／＼シヲハカリゴトヲメグラシ、國ノツヰエモナクツクリタテ、タエタル公事ドモヲ申ヲコナヒキ。スベテ、京中ノ道路ナドモハラヒキヨメテ、昔ニカヘリタルスガタニゾアリシ。天下ヲ治給コト三年。太子ニユヅリテ例ノ

ゴトク尊号アリテ院中ニテ天下ヲシラセ給コト卅余年。ソノアヒダニ御出家アリシカド、政務ハカハラズ、白河鳥羽両代ノゴトシ。サレドウチツヾキ乱世ニアハセ給シコソアサマシケレ。五代ノ帝ノ父祖ニテ六十六歳オマシ〳〵キ。

第七十八代、二条院、諱ハ守仁、後白河ノ太子。御母贈皇太后藤原懿子、贈太政大臣經實ノ女也。戊寅ノ年即位、己卯ニ改元。年号ヲ平治ト云。右衛門督藤原信頼ト云人アリ。上皇イミジク寵セサセ給テ天下ノコトヲサヘマカセラルヽマデナリニケレバ、ヲゴリノ心キザシテ近衛大将ヲノゾミ申シヲ通憲法師イサメ申テヤミヌ。其時源義朝々臣ガ清盛朝臣ニヲサヘラレテ恨ヲフクメリケルヲアイカタラヒテ叛逆ヲ思クハダテケリ。保元ノ乱ニハ義朝ガ功タカク侍ケレド、清盛ハ通憲法師ガ縁者ニナリテコトノホカニメシツカハル。通憲法師清盛等ヲウシナイテ世ヲホシキマヽニセムトゾハカラヒケル。清盛熊野ニマウデケルヒマヲウカヾヒテ、先、上皇御坐ノ三条殿ト云所ヲヤキテ大内ニウツシ申、主上ヲモカタハラニヲシコメタテマツル。通憲法師ノガレガタクヤアリケン、ミヅカラウセヌ。其子ドモヤガテ國々ヘナガシツカハス。通憲モ才學アリ、心モサカシカリケレド、己ガ非ヲシリ、未萠ノ禍ヲフセグマ

デノ智分ヤカケタリケン。信頼カ非ヲバイサメ申ケレド、ワガ子共ハ顯職顯官ニノボリ、近衛ノ次將ナンドニサヘナシ、參議已上ニアガルモアリキ。カクテウセニシカバ、コレモ天意ニタガフ所アリト云コトハ疑ナシ。淸盛コノコトヲキヽ、道ヨリノボリヌ。信頼カタラヒヲキケル近臣コ〔ラ〕ノ中ニ心ガハリスル人々アリテ、主上、上皇ヲシノビテイダシタテマツリ、淸盛ガ家ニウツシ申テケリ。スナハチ信頼義朝等ヲ追討セラル。程ナクウチカチヌ。信頼ハトラハレテ首ヲキラル。義朝ハ東國ヘ心ザシテ、ノガレシカド、尾張國ニテウタレヌ。ソノ首ヲ梟(ケウ)セラレニキ。義朝重代ノ兵タリシウヘ、保元ノ勳功ステラレガタク侍シニ、父ノ首ヲキラセタリシコト大ナルトガ也。古今ニモキカズ、和漢ニモ例ナシ。勳功ニ申替トモミヅカラ退トモナドカ父ヲ申タスクル道ナカルベキ。名行カケハテニケレバ、イカデカツヰニ其身ヲマタクスベキ。滅ス〔ヌ〕ルコトハ天ノ理也。凡カヽルコトハ其身ノトガハサルコトニテ朝家ノ御アヤマリ也。ヨク案アルベカリケルコトニコソ。其比名臣モアマタ有シニヤ。又通憲法師專申ヲコナイシニ、ナドカ諫申ザリケル。大義ニ滅レ親ヲ云コトノアルハ石碏(シャク)ト云人、其子ヲコロシタリシガコト也。父トメ不忠ノ子ヲコロスハコトハリナリ。父不忠ナリト

モ、子トシテコロセト云道理ナシ。孟子ニタトヘヲ取テイヘルニ、舜ノ天子タリシ時、其父瞽叟人ヲコロスコトアランヲ時ノ大理ナリシ皐陶トラヘタラバ、舜ハイカヾシ給ベキトイヒテ〔ケルヲ、〕舜ハ位ヲステ、父ヲオヒテサラマシトアリ。大賢ノヲシヘナレバ、忠孝ノ道アラハレテ、ヲモシロクハベリ。保元平治ヨリ以來、天下ミダレテ武用サカリニ王位カロク成ヌ。イマダ太平ノ世ニカヘラザルハ名行ノヤブレソメシニヨレルコト、ゾミエタル。カクテシバシシヅマレリシニ主上、上皇、御中アシクテ、主上ノ外舅大納言經宗〔後ニメシカヘサレテ大臣大將マデナリキ。〕御メノトノ子、別當惟方等上皇ノ御意ニソムキケレバ、淸盛朝臣ニオホセテ、メシトラヘラレ、配所ニツカハサル。コレヨリ淸盛天下ノ權ヲホシキマヽニシテ程ナク太政大臣ニアガリ、其子大臣大將ニナリ、アマサヘ、兄弟左右ノ大將ニテナラベリキ。〔コノ御門ノ御世ノコトナラヌモアリ。ツイデニシルシノス。〕天下ノ諸國ハ半スグルマデ家領トナシ、官位ハ多ク一門、家僕ニフサゲタリ。王家ノ權サラニナキ(ガ)ゴトクニナリヌ。此天皇天下ヲ治給コト七年。廿三歳オマシ〳〵キ。

第七十九代、六条院、諱ハ順仁、二条ノ太子。御母、大藏少輔伊岐兼盛ガ女也。〔ソノシナイヤシクテ贈位マデモナカリシニヤ。〕乙酉ノ年即位。丙戌ニ改元。天下ヲ治給コト三年。上皇世ヲシラセ給シガ、二条ノ御

門ノ御コトニヨリ心ヨカラヌ御コトナリシユヘニヤ、イツシカ讓國ノ事アリキ。御元服ナドモナクテ十三歲ニテ世ヲハヤクシマシ〳〵キ。

第八十代、第四十三世、高倉院、諱ハ憲仁、後白河第五ノ御子。御母、皇后平滋子、建春門院ト申。贈左大臣時信ノ女也。戊子ノ年即位。己丑ニ改元。上皇天下ヲシラセ給コトモトノゴトシ。清盛權ヲモハラニセシコトハコトサラニ此御代ノコトゝ。其女德子入內シテ女御トス。即立后アリキ。末ツカタヤウ〳〵所々ニ反乱ノキコエアリ。清盛一家非分ノワザ天意ニソムキケルニコソ。嫡子內大臣重盛ハ心バヘサカシクテ父ノ惡行ナドモイサメトヾメケルサヘ、世ヲハヤクシヌ。イヨ〳〵ヲゴリヲキハメ、權ヲホシキマヽニス。時ノ執柄ニテ菩提院ノ關白基房ノ大臣オハセシモ中ライヨロシカラヌコトアリテ大宰權帥ニウツシテ、配流セラル。妙音院ノ師長ノオトヽモ京中ヲイダサル。ソノ外ニツミセラルヽ人オホカリキ。從三位源賴政ト云シモノ、院ノ御子以仁ノ王トテ元服バカリシ給シカド、親王ノ宣ナドダニナクテ、カタハラナル宮オハセシヲスヽメ申テ、國々ニアル源氏ノ武士等ニアヒフレテ平氏ヲウシナハントハカリケリ。コトアラハレテ皇子モウシナハレ給ヌ。賴政モホロビヌ。カヽレド、ソレヨ

リミダレソメテケリ。義朝臣ガ子頼朝前右兵衛佐従五位下、平治ノ比立位ノ蔵人タリシガ信頼事ヲオコシケル時任官ストゾ。平治ノ乱ニ死罪ヲ申ナダムル人アリテ伊豆國ニ配流セラレテ、オホクノ年ヲオクリシガ、以仁ノ王ノ密旨ヲウケ給。院ヨリモ忍テ、仰ツカハス道アリケレバ、東國ヲス、メテ義兵ヲオコシヌ。清盛イヨ／＼悪行ヲノミナシケレバ、主上フカクナケカセ給。俄ニ避位ノコトアリシモ世ヲイトハセマシ／＼ケルユヘトゾ。天下ヲ治給コト十二年。世ノ中ノ御イノリニヤ、平家ノトリワキアガメ申神ナリケレバ、安藝ノ厳嶋ニナムマイラセ給ケル。此御門御心バヘモメデタク孝行ノ御志フカヽリキ。管絃ノカタモスグレテオハシマシケリ。尊号アリテホドナク世ヲハヤクシ給。廿一歳オマシ／＼キ。

第八十一代、安徳天皇、諱言仁、高倉第一ノ子。御母中宮平徳子建礼門院ト申。太政大臣清盛女也。庚子ノ年即位。辛丑ニ改元。法皇猶世ヲシラセ給。平氏ハイヨ／＼オゴリヲナシ、諸國ハスデニミダレヌ。都ヲサヘウツスベシトテ摂津國福原トテ、清盛スム所ノアリシニ行幸セサセ申ケル。法皇上皇モオナジクウツシタテマツル。人ノ恨オホクキコエケレバニヤカヘシ奉ル。イクホドナク清盛カクレテ、次男宗盛其アトヲツギヌ。世ノ乱ヲモカヘリミズ、内大臣

ニ任ズ。天性父ニモ兄ニモヲヨバザリケルニヤ。威望モイツシカオトロヘ、東國ノ軍スデニコハク成テ平氏ノ軍所々ニテ利ヲウシナヒケルトゾ。法皇忍テ比叡山ニノボラセ給。平氏カヲオトシ、主上ヲス丶メ申テ、西海ニ沒落ス。中三トセバカリアリテ平氏コト〳〵ク滅亡。清盛ガ後室、從二位平時子ト云シ人此君ヲイダキ奉リテ、神璽ヲフトコロニシ寶劔ヲコシニサシハサミ海中ニイリヌ。アサマシカリシ乱世ナリ。天下ヲ治給コト三年。八歳オマシ〳〵キ。遺詔等ノサタナケレバ、天皇ト稱シ申ナリ。

第八十二代、第四十四世、後鳥羽院、諱ハ尊成、高倉第四ノ子。御母七条院藤原殖子 先代ノ母儀オホクハ后宮ナラヌハ贈后也。院号アリシハミナ先立后ノ、チノサダメ之。コノ七条院、立后ナクテ院号ノ初ナリ。但、先准后ノ勅アリ。 入道修理大夫信隆女也。先帝西海ニ臨幸アリシカド、祖父法皇ノ御世ナリシカバ、都ハカハラズ。攝政基通ノオトヾゾ平氏ノ縁ニテ供奉セラレシカド、イサヽメ申輩アリケルニヤ、九条ノ大路邊ヨリトヾマラレヌ。ソノホカ平氏ノ親族ナラヌ人々ハ御共ツカマツル人ナカリケリ。還幸アルベキヨシ院宣アリケレド、平氏承引申サズ。ヨリテ太上法皇ノ詔ニテ此天皇タヽセ給ヌ。親王ノ宣旨マデモナシ。先皇太子トシ、即受禪ノ儀アリ。翌年甲辰ニアタル年四月ニ改元、七月ニ即位。此同胞ニ高

倉ノ第三ノ御子マシ〳〵シカドモ法皇此君ヲエラビ定申給ケルトゾ。先帝三種ノ神器ヲアヒグサセ給シユヘニ踐祚ノ初ノ違例ニ侍シカド、法皇國ノ本主ニテ正統ノ位ヲ傳マシマス。皇太神宮、熱田ノ神アキラカニマボリ給コトナレバ、天位ツヾカマシマサズ。平氏ホロビテ後内侍所神璽ハカヘリイラセ給。寶劍ハツヰニ海ニシヅミテミエズ。其比ヲヒハ晝ノ御坐ノ御劍ヲ寶劍ニ擬セラレタリシガ、神宮ノ御告ニテ神劍ヲタテマツラセ給シニヨリテ近比マデノ御マボリナリキ。三種ノ神器ノ事ハ所々ニ申侍シカドモ、先内侍所ハ神鏡之。八咫ノ鏡ト申。正躰ハ皇太神宮ニイハヒ奉ル。内侍所ニマシマスハ崇神天皇ノ御代ニ鑄カヘラレタリシ御鏡ナリ。村上ノ御時、天德年中ニ火事ニアヒ給。ソレマデハ円規カケマシマサズ。後朱雀ノ御時、長久年中ニ、カサネテ火アリシニ灰燼(クワイジン)ノ中ヨリ光(ヒカリ)リサヽセ給ケルヲオサメテアガメ奉ラレケル。サレド正躰ハツヾカナクテ万代ノ宗廟ニマシマス。宝劍モ正躰ハ天ノ叢雲ノ劍(後ニハ草薙ト云。)ト申ハ熱田ノ神宮ニイワヒ奉ル。西海ニシヅミシハ崇神ノ御代ニオナジクツクリカヘラレシ劍也。ウセヌルコトハ末世ノシルシニヤトウラメシケレド熱田ノ神アラタナル御コト之。昔、新羅國ヨリ道行ト云法師來テヌスミタテマツリシカド神變ヲアラハシテ

我國ヲイデタマハズ。彼兩種ハ正躰昔ニカハリマシマサズ。代々ノ天皇ノトヲキ御マボリトノ國土ノアマネキ光トナリ給ヘリ。ウセニシ寶劔ハモトヨリ如在ノコトヽゾ申侍ベキ。神璽ハ八坂瓊ノ曲玉ト申ス。神代ヨリ今ニカハラズ、代々ノ御身ヲハナレヌ御マボリナレバ海中ヨリウカビ出給ヘルモコトハリ也。三種ノ御コトハヨク心エ奉ルベキナリ。ナベテ物シラスタグヒハ、上古ノ神鏡ハ天徳長久ノ災ニアヒ、草薙ノ寶劔ハ海ニシヅミニケリト申傳ルコト侍ニヤ、返々ヒガゴト也。此國ハ三種ノ正躰ヲモチテ眼目トシ、福田トスルナレバ、日月ノ天ヲメグラン程ハ一モカケ給マジキ之。天照太神ノ勅ニ寶祚ノサカヘマサンコトアメツチトキハマリナカルベシト侍レバ、イカデカ疑奉ルベキ。今ヨリユクサキモイトタノモシクコソオモヒ給レ。平氏イマダ西海ニアリシホド、源義仲ト云物マヅ京都ニ入。兵威ヲモテ世ノ中ノコトヲオサヘヲコナヒケル。征夷將軍ニ任ズ。此官ハ昔坂上ノ田村丸マデハ東夷征伐ノタメニ任ゼラレキ。其後將門ガミダレニ右衞門督忠文朝臣征東將軍ヲ兼テ節刀ヲ給シヨリコノカタ、久クタエテ任ゼラレズ。義仲ゾ初テナリニケル。アマリナルコトオホクテ、上皇御イキドヲリノユヘニヤ、近臣ノ中ニ軍ヲオコシ、退治セントセシニ、事不成ノ中々

アサマシキ事ナンイデキニシ。東國ノ頼朝、弟範頼義經等ヲサシノボセシカバ、義仲ハヤガテ滅ヌ。サテソレヨリ西國ヘムカヒテ平氏ヲバタイラゲシナリ。天命キハマリヌレバ巨猾モホロビヤスシ。人民ノヤスカラヌコトハ時ノ災難ナレバ、神モ力ヲヨバセ給ハヌニヤ。カクテ平氏滅亡ノシカバ、天下モトノゴトク、君ノ御マヽナルベキカトオボエシニ、頼朝勳功マコトニタメシナカリケレバ、ミヅカラモ權ヲホシキマヽニス。君モ又ウチマカセラレニケレバ、王家ノ權ハイヨ〳〵オトロヘニキ。諸國ニ守護ヲ、キテ、國司ノ威ヲオサヘシカバ吏務ト云コト名バカリニ成ヌ。アラユル庄園郷保ニ地頭ヲ補セシカバ本所ハナキガゴトクニナレリキ。頼朝ハ從五位下前右兵衛佐ナリシガ、義仲追討ノ賞ニ越階シテ正四位下ニ叙シ、平氏追討ノ賞ニ又越階從二位ニ叙ス。建久ノ初ニ、ハジメテ京上ノヤガテ一度ニ權大納言ニ任ズ、又右近ノ大將ヲ兼ス。頼朝シキリニ辭申ケレド、叡慮ニヨリテ朝獎アリトゾ。程ナク辭退ノモトノ鎌倉ノ館ニナンクダリシ。其後征夷大將軍ニ拜任ス。ソレヨリ天下ノコト東方ノマヽニ成ニキ。平氏ノミダレニ南都ノ東大興福寺ヤケニシヲ、東大寺ヲバ俊乘ト云上人スヽメタテケレバ、公家ニモ委任セラレ、頼朝モフカク隨喜ノ、ホトナク再興ス。供養ノ儀フル

キアトヲタヅ子テヲコナハレケル。アリガタキコトニヤ。頼朝モカサ子テ京上シケリ。カツハ結縁ノタメ、カツハ警固ノタメナリキ。法皇カクレサセ給テ、主上世ヲシラセ給。スベテ天下ヲ治給コト十五年アリシカハ、太子ニユヅリテ尊号レイノゴトシ。院中ニテ又廿余年シラセ給シガ、承久ニコトアリテ、御出家、隱岐國ニテカクレ給ヌ。六十一歳オマシ〳〵キ。

第八十三代、第四十五世、土御門院、諱ハ爲仁、後鳥羽ノ太子。御母承明門院源在子、内大臣通親ノ女也。父ノ御門ノ例ニテ親王ノ宣旨ナシ。立太子ノ儀バカリニテ、スナハチ踐祚アリ。戊午ノ年即位。己未ニ改元。天下ヲ治給コト十二年。太弟ニユヅリテ尊号例ノ如シ。此御門マサシキ正嫡ニテ、御心バエモタヾシクキコエ給シニ、上皇鍾愛ニウツサレマシケルニヤ、ホドナク讓國アリ。立太子マデモアラヌサマニ成ニキ。承久ノ乱ニ時ノイタラヌコトヲシラセ給ケレバニヤ、サマ〴〵イサメマシケレドモ、コトヤブレニシカバ、玉石トモニコガレテ阿波國ニテカクレサセ給。三十七歳オマシ〳〵キ。

第八十四代、順德院、諱ハ守成、後鳥羽第三ノ子。御母、修明門院藤原ノ重子、贈左大臣範季ノ女也。庚午ノ年即位。辛未ニ改元。此御時、征夷大將軍頼朝次郎實朝、右大臣右（左）大將マデ

ナリニシガ、兄左衛門督頼家ガ子ニ公曉ト云ケル法師ニコロサレヌ。又繼人ナクテ頼朝ガ跡ハナガクタエニキ。頼朝ガ後室ニ從二位平政子トテ時政ト云モノヽ女之シ、東國ノコトヲバオコナヒキ。其弟義朝兵權ヲトリシガ、上皇ノ御子ヲクダシ申テアフギ奉ルベキヨシ奏シケレド、不許ニヤ有ケン、九条攝政道家ノオトヾハ頼朝ノ時ヨリ外戚ニツヾキテヨシミオハシケレバ、其子ヲクダシテ扶持シ申ケル。大方ノコトハ義時ガマヽニナリニキ。天下ヲ治給コト十一年。讓國アリシガ、事ミダレテ佐渡國ニウツサレ給。四十六歳オマシ〳〵キ。

異本云

實朝 前右大將征夷大將軍頼朝卿二男之。建久十年正月頼朝薨。嫡男頼家可奉行諸國守護事由被宣下（于時左近中將正五位下）。建仁二年七月任征夷大將軍、同三年受病（病任）遷伊豆國修禪寺、翌年遭レ害。頼家受病之後爲母并義時等沙汰實朝令襲之、叙從五位下即日任征夷大將軍、次第昇進不能具記、建保六年十二月二日任右大臣（元内大臣右(今)大將大將辭之。）同七年（四月十二元承久元）正月廿七日爲拜賀參鶴岡八幡宮、實朝始中終遂不京上有其煩故之。云々。仍以參宮擬拜賀畢。而神拜早退出之處、彼宮別當公曉設刺客殺レ之。（年廿八云々。）

今日屬從八々

公卿

權大納言忠信卿坊門　左衛門督實氏（卿）西園寺　宰相中將國通（卿）高倉　平三位光盛（卿）池　刑部卿宗長（卿）難波

殿上人

權亮中將信能朝臣　文章博士仲章朝臣（同被殺云々）　右馬權頭能茂朝臣　因幡少將高經　伊与少將實種　伯耆前（司）師孝　右兵衛佐賴經

地下前駈

右京權大夫義時　修理大夫雅（維）義　甲斐右馬助宗泰　武藏守泰時　筑後前司賴時　駿河左馬助教利　藏人大夫重綱　藤藏人大夫有俊　長井遠江前司親廣　相模守時房　足利武藏前司義氏　丹波藏人大夫忠國　前右馬助行光　伯耆前司包時　駿河前司季時　信濃藏人大夫行國　相模前司經定　美作藏人大夫公近　藤勾當賴隆　平勾當時盛

隨身

府生秦兼峯　番長下毛野篤秀
近衛秦公氏　同兼村　播磨定文　中臣道任　下毛野爲光　同爲氏

隨兵十人

武田五郎信光　加々見次郎長淸　式部大夫　河越次郎　城介景盛　泉次郎左衛門尉賴定　長江八郎師景　三浦小太郎兵衛尉朝村　加藤大夫判官元定　隱岐次郎左衛門尉基行

廢帝、諱ハ懷成、順德ノ太子。御母、東一条院、藤原立子、故攝政太政大臣良經女也。承久三年春ノ比ヨリ上皇オボシメシタツコトアリケレバ、ニハカニ讓國シタマフ。順德御身ヲカロメテ合戰ノ事ヲモ一御心ニセサセ給ハン御ハカリゴトニヤ。新主ニ讓位アリシカド、即位登壇マデモナクテ、軍ヤブレシカバ、外舅攝政道家ノ大臣ノ九條ノ第ヘノガレサセ給。三種神器ヲバ閑院ノ内裏ニステヲカレニキ。讓位ノ後、七十七ケ日ノアヒダ、シバラク神器ヲ傳給シカドモ、日嗣ニハクワヘタテマツラズ。飯豐ノ天皇ノ例ニナゾラヘ申ベキニコソ。元服ナドモナクテ十七歳ニテカクレマシマス。サテモ其世ノ乱ヲ思ニ、マコトニ末ノ世ニハマヨフ心モアリヌベク、又下ノ上ヲシノグ端トモナリヌベシ。其イハレヲヨクワキマヘラルベキ事ニハベリ。頼朝勲功ハ昔ヨリタグヒナキ程ナレド、ヒトヘニ天下ヲ掌ニセシカバ、君トシテヤスカラズオボシメシケルモコトハリナリ。况ヤ其跡タエテ、後室ノ尼公、陪臣ノ義時ガ世ニナリヌレバ、彼跡ヲケヅリテ御心ノマヽニセラルベシト云モ一往イヒナキニアラズ。シカレド、白河、鳥羽ノ御代ノ比ヨリ政道ノフルキスガタヤウ〳〵オトロヘ、後白河ノ御時兵革オコリテ姧臣世ヲミダル。天下ノ民ホトンド塗炭ニオチニキ。頼朝一臂ヲフル井テ其乱ヲタイ

ラゲタル、王室ハフルキニカヘルマデナカリシカド、九重ノ塵モオサマリ、万民ノ肩モヤスマリヌ。上下堵ヲヤスクシ、東ヨリ西ヨリ、其徳ニ伏セシカバ、實朝ナクナリテモソムク者アリトハキコエズ。是ニマサル程ノ徳政ナクシテ、イカデタヤスククツガヘサルベキ。縦又ウシナハレヌベクトモ、民ヤスカルマジクハ、上天ヨモクミシ給ハジ。次ニ王者ノ軍ト云ハトガアルヲ討メキズナキヲバホロボサズ。頼朝高官ニノボリ、守護ノ職ヲ給。コレミナ法皇ノ勅裁也。ワタクシニヌスメリトハサダメガタシ。後室ソノ跡ヲハカラヒ、義時久ク彼ガ權ヲトリテ、人望ニソムカザリシカバ、下ニハイマダキズ有トイフベカラズ。一往ノイハレバカリニ追討セラレンハ上ノ御トガトヤ申ベキ。謀叛オコシタル朝敵ノ利ヲ得タルニハ比量セラレガタシ。カヽレバ、時ノイタラズ、天ノユルサヌコトハウタガヒナシ。但下ノ上ヲ尅スルハキハメタル非道ナリ。終ニハナドカ皇化ニ不レ順ベキ。先、マコトノ徳政ヲオコナハレ、朝威ヲタテ、彼ヲ尅スルバカリノ道アリテソノ上ノコトヽゾオボエハベル。且ハ世ノ治乱ノスガタヲヨクカヾミシラセ給テ、私ノ御心ナクバ、干戈ヲウゴカサルヽ歟、弓矢ヲオサメラルヽ歟、天ノ命ニマカセ、人ノ望ニシタガハセ給ベカリシコトニヤ。ツ井ニシテハ繼躰ノ道モ正

路ニカヘリ、御子孫ノ世ニ一統ノ聖運ヲヒラカレヌレバ御本意ノ末達セヌニハアラザレド、一旦モシヅマセ給シコソ口惜ハベレ。

第八十五代、後堀河院、諱ハ茂仁、二品守貞親王(後高倉院ト申。)第三ノ子。御母、北白河院、藤原陳子、入道中納言基家ノ女ナリ。入道親王ハ高倉第三ノ御子、後鳥羽同胞ノ御兄。後白河ノ御エラビニモレ給シ御コトニヤ。承久ニコトアリテ、後鳥羽ノ御ナガレノホカ、コノ御子ナラデハ皇胤マシマサズ。ヨリテ此孫王ヲ天位ニツケタテマツル、入道親王尊号アリテ太上皇ト申テ世ヲシラセ給。追号ノ例ハ文武ノ御父草壁ノ太子ヲ長岡ノ天皇ト申、淡路ノ帝御父舎人親王ヲ盡敬天皇ト申、光仁ノ御父施基ノ王子ヲ田原天皇ト申。早良ノ癈(廢)太子ハ怨霊ヲヤスメラレントテ崇道天皇ノ号ヲオクラル。院号アリシコトハ小一條院ゾマシケル。此天皇辛巳年即位。壬午ニ改元。天下ヲ治給コト十一年、太子ニ讓テ尊号例ノゴトシ。シバラク政ヲシラセ給シガ、廿一歳ニテ世ヲハヤクシオマシ〳〵キ。

第八十六代、四条院、諱ハ秀仁、後堀河ノ太子。御母、藻壁門院藤原ノ竴子、攝政左大臣道家女也。壬辰ノ年即位。癸巳ニ改元例ノゴトシ。一トセバカリ有テ上皇カクレ給シカバ、外祖ニ

テ道家ノオトヾ、王室ノ權ヲトリテ、昔ノ執政ノゴトクニゾアリシ。東國ニアフギシ征夷大將軍賴經モ此大臣ノ胤子ナレバ、文武一ニテ權勢オハシケルトゾ。天下ヲ治給コト十年。俄ニ世ヲハヤクシ給。十二歳オマシ〱キ。

第八十七代、第四十六世、後嵯峨院、諱ハ邦仁、土御門院第二ノ御子。御母、贈皇太后源通子、贈左大臣通宗ノ女、內大臣通親ノ孫女ナリ。承久ノミダレアリシ時二歳ニナラセ給ケリ。通親ノ大臣ノ四男、大納言通方ハ父ノ院ニモ御傍親、贈皇后ニモ御ユカリナリシカバ、收養シ申テカクシヲキタテマツリキ。十八ノ御年ニヤ大納言サヘ世ヲハヤクセシカバ、イトヾ無賴ニナリ給テ、御祖母承明門院ニナムウツロヒマシ〱ケル。廿二歳ノ御年、春正月十日、四条院俄ニ晏駕、皇胤モナシ、連枝ノミコモマシマサズ。順德院ゾイマダ佐渡ニオハシマシケルガ、御子達モアマタ都ニトヾマリ給シ、入道攝政道家ノオトヾ、彼御方ノ外家ニオハセシカバ、此御流ヲ天位ニツケ奉リ、モトノマ、ニ世ヲシラントオモハレケルニヤ。ソノヲモフキヲ仰ツカハシケレド、鎌倉ノ義時ノ子、泰時ハカラヒ申テ、コノ君ヲスヘ奉リヌ。誠ニ天命之、正理之、土御門院御兄ニテ御心バヘモオダシク、孝行モフカクキコエサセ給シカバ、天照太神ノ

冥慮ニ代テハカラヒ申ケルモコトハリ之。大方泰時心タヾシク政スナヲニシテ、人ヲハグヽミ、物ニオゴラズ、公家ノ御コトヲオモクシ、本所ノワヅラヒヲトヾメシカバ、風ノ前ニ塵ナクシテ天ノ下スナハチシヅマリキ。カクテ年代ヲカサ子シコトヒトヘニ泰時ガ力トゾ申傳タル。陪臣トシテ久シク權ヲトルコトハ和漢兩朝ニ先例ナシ。其主タリシ頼朝スラ二世ヲバスギズ。義時イカナル果報ニカ、ハカラザル家業ヲハジメテ、兵馬ノ權ヲトレリシ、タメシマレナルコトニヤ。サレドコトナル才德ハキコエズ。又大名ノ下ニホコル心ヤ有ケン、中二トセバカリゾアリシ。身マカリシカド、彼泰時アヒツギテ德政ヲサキトシ、法式ヲカタクス。己ガ分ヲハカルノミナラズ親族ナラビニアラユル武士マデモイマシメテ高官高位ヲノゾム者ナカリキ。其政次第ノママニオトロヘツ井ニ滅ヌルハ天命ノヲハルスガタナリ。七代マデタモテルトコロ彼ガ餘薫ナレバ恨トコロナシト云ツベシ。凡保元平治ヨリコノカタノミダリガハシサニ、頼朝ト云人モナク、泰時ト云者ナカラマシカバ、日本國ノ人民イカヾナリナマシ。此イハレヲヨクシラス人ハユヘモナク、皇威ノオトロヘ、武備ノカチニケルトオモヘルハアヤマリナリ。所々ニ申ハベルコトナレド、天日嗣ハ御讓ニマカセ、正統ニカヘラセ

給ニトリテ用意アルベキコトノ侍之。神ハ人ヲヤスクスルヲ本誓トス。天下ノ万民ハ皆神物ナリ。君ハ尊クマシマセド、一人ヲタノシマシメ、万民ヲクルシムル事ハ天モユルサズ、神モサイハイセヌイハレナレバ、政ノ可否ニシタガイテ、御運ノ通塞（トウソク）アルベシトゾオボエ侍ル。マシテ人臣トシテハ、君ヲタウトビ、民ヲアハレミ、天ニセクヽマリ、地ニヌキアシヽ、日月ノテラスヲアフギテモ心ノ黒（キタナク）シテ光ニアタラザランコトヲヲヂ、雨露ノホドコスヲミテモ身ノタト〔ダシ〕カラズメグミニモレンコトヲカヘリミルベシ。朝夕ニ長田狹田ノ稲ノタ子ヲクフモ皇恩也。晝夜ニ生井（イク）榮井（サク）ノ水ノナガレヲ飲モ神徳之。コレヲ思モイレズ、アルニマカセテ欲ヲホシキマヽニシ、私ヲサキトシテ、公（オホヤケ）ヲワスルヽ心アルナラバ、世ニ久キコトハリモハベラジ。イハンヤ國柄ヲトル仁ニアタリ兵權ヲアヅカル人トシテ正路ヲフマザランニヲキテイカデ其運ヲマタクスベキ。泰時ガ昔ヲ思ニハヨクマコトアル所有ケムカシ。子孫ハサ程ノ心アラジナレドカタクシケル法ノマヽニヲコナヒケレバ、オヨバズナガラ世ヲモカサ子シニコソ。異朝ノコトハ乱逆ニシテ紀（ノリ）〔紀〕ナキタメシオホケレバ、例トスルニタラズ。我國ハ神明ノ誓イチジルクシテ上下ノ分サダマレル〔リ〕。シカモ善悪ノ報アキラカニ、因果ノコトハ

リムナシカラズ、カツハトヲカラスコトヾモナレバ、近代ノ得失ヲミテ、將來ノ鑒誡トセラルベキナリ。抑、此天皇、正路ニカヘリテ日嗣ヲウケ給シ、サキダチテサマ〴〵奇瑞アリキ。又土御門院、阿波國ニテ告文ヲカ、セマシテ、石清水ノ八幡宮ニ啓白セサセ給ケル。其御本懷、スエトヲリニシカバ、サマ〴〵ノ御願ヲハタサレシモアハレナル御コトゾ。ツ井ニ繼躰ノ主トノ、此御スエナラヌハマシマサズ。壬寅ノ年御即位、癸卯ノ春改元。御身ヲツ、シミ給ケレバニヤ、天下ヲ治給コト四年、太子ヲサナクマシ〳〵シカドモ讓國アリ。尊号例ノゴトシ。院中ニテ世ヲシラセ給。御出家ノ後モカハラズ、廿六年アリシカバ、白河鳥羽ヨリコナタニハオダヤカニメデタキ御代ナルベシ。五十三歳オマシ〳〵キ。

第八十八代、後深草院、諱ハ久仁、後嵯峨第二ノ子。御母、大宮院、藤原ノ姞子、太政大臣實氏ノ女ゾ。丙午ノ年四歳ニテ即位。丁未ニ改元。天下ヲ治給コト十三年。后腹ノ長子ニテマシ〳〵シカドモ、御病オハシマシケレバ、同母ノ御弟恒仁親王ヲ太子ニタテ、讓國尊号例ノゴトシ。伏見ノ御代ニゾシバラク政ヲシラセ給シガ[バ]、御出家アリテ政務ヲバ、主上ニ讓リ申サセ給。五十八歳オマシ〳〵キ。

第八十九代、第四十七世、龜山院、諱ハ恒仁、後深草院同母ノ御弟也。己未ノ年即位、庚申ニ改元。此天皇ヲ繼躰トオボシメシヲキテケルニヤ、后腹ニ皇子ウマレ給シヲ後嵯峨トリヤシナヒマシテ、イツシカ太子ニ立給ヌ。後深草（其時新院ト申キ。）御子モサキ立テ生給シカドモ、ヒキコサレマシニキ。（太子ハ後宇多ニマシマス御年二、後深草ノ御子ニ、伏見、御年四歳ニナリ給ケル。）後嵯峨カクレサセ給テノチ、兄弟ノ御アハヒニアラソハセ給コトアリケレバ、關東ヨリ母儀大宮院ニタヅネ申ケルニ、先院ノ御素意ハ當今ニマシマスヨシヲオホセツカハサレケレバ、コトサダマリテ禁中ニテ政務セサセ給。天下ヲ治給コト十五年。太子ニユヅリテ尊号レイノゴトシ。院中ニテモ十三年マデ世ヲシラセ給。事アラタマリニシ後御出家。五十七歳オマシ〳〵キ。

第九十代、第四十八世、後宇多院、諱ハ世仁、龜山ノ太子。御母、皇后藤原佶子（後ニ京極院ト申。）左大臣實雄ノ女也。甲戌ノ年即位。乙亥改元。丙子ノ年、モロコシノ宋幼帝徳祐二年ニアタル。コトシ北狄ノ種、蒙古オコリテ元國ト云シガ、宋ノ國ヲ滅ス。（金國オコリニシヨリ宋ハ東南ノ杭州ニウツリテ百五十年ニナレリ。蒙古オコリテ先金國ヲアハセ、ノチニ江ヲワタリテ宋ヲセメシガ、コトシツヰニホロボサル。）辛巳ノ年（弘安四年ナリ。）蒙古ノ軍オホク船ヲソロヘテ、我國ヲ侵ス。筑紫ニテ大ニ合戰アリ。神明威ヲアラハシ、形ヲ現メフセガレケリ。大風ニワカニオコ

リテ數十万艘ノ賊船ミナ漂(漂ノ)倒破滅シヌ。末世トイヘドモ、神明ノ威徳不可思儀ナリ。誓約ノカハラザルコトコレニテヲシハカルベシ。コノ天皇天下ヲ治給コト十三年。オモヒノ外ニノガレマシ〳〵テ十余年アリキ。後二条ノ御門、立給シカバ、世ヲシラセ給。遊義門院カクレマシテ御歎ノアマリニヤ出家セサセ給。前大僧正禪助ヲ御師トメ、宇多円融ノ例ニヨリ東寺ニテ灌頂セサセ給。メヅラカニタウトキ事ニハベリキ。其日ハ後醍醐ノ御門、中務ノ親王トテ、王卿ノ座ニツカセ御ス。只今ノ心地ゾシハベル。後二条カクレサセ給シノチ、イトヾ世ヲイトハセタマフ。嵯峨ノ奧、大覺寺ト云所ニ、弘仁寛平ノ昔ノ御跡ヲタヅ子テ、御寺ナドアマタ立テゾヲコナハセ給シ。其後、ヽ醍醐ノ御門位ニツキマシ〳〵シカバ、又シバラク世ヲシラセ給テ三トセバカリ有テユヅリマシ〳〵キ。大方コノ君ハ中古ヨリコナタニハアリガタキ御コト、ゾ申侍ベキ。文學ノ方モ後三条ノ後ニハカホドノ御才キコエサセ給ハザリシニヤ、寛平ノ御誡ニハ帝皇ノ御學問ハ群書治要ナドニテタリヌベシ。雜文ニツキテ政事ヲサマタゲ給フ(ナ)トミエタルニヤ。サレド、延喜、天暦、寛弘、延久ノ御門ミナ宏才博覽ニ諸道ヲモシラセタマヒ、政事モ明ニマシ〳〵シカバ、先二代ハコトフリヌ、ツギテハ寛弘延久

ヲゾ賢王トモ申メル。和漢ノ古事ヲシラセ給ハヌバ、政道モアキラカナラズ、皇威モカロクナル、サダマレル理ナリ。尙書ニ堯舜禹ノ德ソ〔ヲ〕ホムルニハ古ニ若稽(シタガヒカンガフ)ト云。傅說(フエツ)ガ殷高宗ヲオシヘタルニハ、事古ヲ師トセズメ、世ニナガキコトハ說(エツ)ガキカザル所ナリトアリ。唐ニ丸〔仇〕士良トテ近習ノ官〔宦〕者ニテ、內權ヲトル極タル奸人也。其黨類ニヲシヘケレ〔ル〕ハ人主ニ書ヲミセタテマツルナ。ハカナキアソビタワブレヲメ御心ヲミダルベシ。書ヲミテ此道ヲ知タマワヾ、我トモガラハウセヌベシト云ケル、今モアリヌベキコトニヤ。寬平ノ群書治要ヲサシテノ給ケル、部セバキニ似タリ。但此書ハ唐大〔太〕宗、時ノ名臣魏徵ヲシテエラバセラレタリ。五十卷ノ中ニアラユル經史諸子マデノ名文ヲノセタル。全經ノ書、三史等ヲゾツ子ノ人ハマナブル。此書ニノセタル諸子ナンドハミル者スクナシ。ホト〳〵名ヲダニシラヌタグヒモアリ。マシテ万機ヲシラセ給ハンニ、コレマデマナバセ給コトヨシナカルベキニヤ。本經等ヲナラハセマシ〳〵ソニテハアルベカラズ。已ニ雜文トテアレバ、經史ノ御學問ノウヘ此書ヲ御覽メ、諸子等ノ雜文マデナクトモノ御心ナリ。寬平ハコトニヒロクマナバセ給ケレハニヤ。周易ノ古キ道ヲモ愛成ト云博士ニウケサセ給キ。延喜ノ御コト左右ニ

アタハズ。菅氏輔佐シタテマツラレキ。其後モ、紀納言、善相公等ノ名儒アリシカバ、文道ノサカリナリシコトモ上古ニヲヨベリキ。此御誡ニツキテ天子ノ御學問サマデナクトモト中人ノハベル、アサマシキコトナリ。何事モ文ノ上ニテヨク新簡アルベキヲヤ。此君ハ在位ニテモ政事ヲシラセ給ハズ、又院ニテ十余年閑居シ給ヘリシカバ、稽古ニアキラカニ、諸道ヲシラセ給ナルベシ。御出家ノ後モヲムゴロニヲコナハセマシ〳〵キ。上皇ノ出家セサセ給コトハ聖武、孝謙、平城、清和、宇多、朱雀、円融、花山、後三条、白河、鳥羽、崇徳、後白河、後鳥羽、後嵯峨、後）深草、龜山ニマシマス。醍醐、一条ハ御病ヲモクナリテゾセサセ給シ。カヤウニアマタキコエサセ給シカド、戒律ヲ具足シ、始終カクルコトナク、密宗ヲキハメテ大阿闍梨ヲサヘセサセ給シコトイトアリガタキ御コト之。コノ御スエニ一統ノ運ヲヒラカル、、有徳ノ餘薫トゾオモヒ給ル。元亨ノスエ、甲子ノ六月ニ五十八歳ニテカクレマシ〳〵キ。

第九十一代、伏見院、諱ハ煕仁、後深草第一ノ子。御母、玄輝門院、藤原愔子、左大臣實雄ノ女也。後嵯峨ノ御門、繼躰ヲバ、龜山トオボシメシ定ケレバ、深草ノ御流イカヾトオボエ〳〵シヲ、龜山、弟順ノ儀ヲオボシメシケルニヤ、此君ヲ御猶子ニメ、東宮ニスヱ給ヌ。ソノヽチ御心モ

ユカズ、アシザマナル事サヘイデキテ、踐祚アリキ。丁亥ノ年即位。戊子ニ改元。東宮ニサヘ此天皇ノ御子井給キ。天下ヲ治給コト十一年。太子ニユヅリテ尊号例ノ如シ。院中ニテ世ヲシラセ給シガ、程ナク時ウツリニシカド、中六トセバカリ有テ、又世ヲシリ給キ。關東ノ輩モ龜山ノ正流ヲウケタマヘルコトハシリ侍リシカド、近比トナリテ世ヲウタガハシク思ケレバニヤ、兩皇ノ御流ヲカハル〴〵スヱ申サント相計ケリトナン。ノチニ出家セサセ給。五十歳オマシ〳〵キ。

第九十二代、後伏見院、諱ハ胤仁、伏見第一ノ子。御母、永福門院藤原鏱子、入道太政大臣實兼ノ女ナリ。實ノ御母ハ准三宮藤原經子、入道參議經氏女也。戊戌ノ年即位。己亥ニ改元。天下ヲ治給コト、三年。推讓ノコトアリ。尊号例ノゴトシ。正和ノ比父ノ上皇ノ御讓ニテ世ヲシラセ給。時ノ御門ハ御弟ナレド、御猶子ノ儀ナリトゾ。元弘ノ世ノ中ミダレシ時、又シバラクシラセ給。事アラタマリテモ、カハラズ都ニスマセマシ〳〵シカバ、出家セサセ給テ四十九歳ニテカクレサセマシ〳〵キ。

第九十三代、後二条院、諱ハ邦治、後宇多第一ノ子。御母、西花門院、源基子、內大臣具守ノ女

ナリ。辛丑ノ年即位。壬寅ニ改元。天下ヲ治給コト六年有テ、世ヲハヤクシ給。廿四歳オマシ〳〵キ。

第九十四代ノ天皇、諱ハ富仁、伏見第三ノ子。御母、顯親門院藤原季子、左大臣實雄ノ女也。戊申ノ歳即位、改元。

裏書云

天子踐祚以禪讓年屬先代踰年即位是古礼之。而我朝當年即位翌年改元已爲流例。但禪讓年即位改元、又非無先例。和銅八年九月元明禪位 即日元正即位 改元爲靈龜 養老八年二月元正禪位即日聖武即位、改元爲神龜、天平感寶元年四月聖武禪位、同年七月孝謙即位、改元爲天平勝寶。神護景雲四年八月稱德崩 同年十月光仁即位、十一月改元爲寶龜。德治三年八月後二条崩、同年月新主即位十月改元爲延慶。又踰レ年ヲ不改元例 天平寶字二年淡路帝即位不改元。仁和三年宇多帝即位不改元、隔年改爲寬平。延久四年白河帝即位又不改元、隔年改爲承保等之。即位以前改元例壽永二年八月後鳥羽受禪、同三年四月改元爲元曆、七月即位、是非常例也

父ノ上皇世ヲシラセ給シガ、御出家ノ後ハ御讓ニテ御兄ノ上皇シラセマシマス。法皇カクレ給テモ諒闇ノ儀ナカリキ。上皇御猶子ノ儀トゾ。例ナキコトヽ。天下ヲ治給コト十一年ニテノガレ給。尊号例ノ如シ。世ノ中アラタマリテ出家セサセ給キ。

第九十五代、第四十九世、後醍醐天皇、諱ハ尊治、後宇多第二ノ御子。御母、談天門院藤原忠子、内大臣師繼ノ女、實ハ入道參議忠繼女ナリ。御祖父龜山ノ上皇ヤシナヒ申給キ。弘安ニ時ウツリテ龜山、後宇多世ヲシロシメサズナリニシヲタヒ〳〵關東ニ仰給シカバ、天命ノ理、カタジケナクオソレ思ケレバニヤ、俄ニ立太子ノ沙汰アリシニ、龜山ハコノ君ヲスヘ奉ラントオボシメシテ八幡宮ニ告文ヲオサメ給シカド、一ノ御子サシタルユヘナクテステラレガタキ御コトナリケレバ、後二条ノ（ゾ）井給ヘリシ。サレド、後宇多ノ御心ザシモアサカラズ。御元服アリテ、村上ノ例ニヨリ太宰帥ニテ節會ナドニ出サセ給キ。後ニ中務卿ヲ兼セサセ給。後二条世ヲハヤクシマシ〳〵テ父ノ上皇ナゲカセ給シ中ニモヨロヅコノ君ニゾ委附シ申サセ給ケル。ヤガテ儲君ノサダメアリシニ、後二条ノ一ノミコ邦良親王井給ベキカトキコエシニ、オボシメスユヘアリトテ、此親王ヲ太子ニタテ給。カノ一ノミコオサナクマシマセバ、御子ノ儀ニテ傳サセ給ベシ。モシ邦良親王早世ノ御コトアラバ、コノ御スエ繼躰タルベシトゾシルシヲカセマシマシケル。彼親王鶴膝（カクシツ）ノ御病アリテアヤウクオボシメシケルユヘナルベシ。後宇多ノ御門コソユヽシキ稽古ノ君ニマシマシヽニ、ソノ御跡ヲバヨクツギ申サセ給ヘ

リ。アマサヘモロ〳〵ノ道ヲコノミシラセ給コト、アリガタキ程ノ御コトナリケンカシ。佛法ニモ御心ザシフカクテム子ト眞言ヲナラハセ給。ハジメハ法皇ニウケマシマシケルガ、後ニ前大僧正禪助ニ許可マデウケ給ケルトゾ。天子灌頂ノ例ハ唐朝ニモミヘハベリ。本朝ニモ清和ノ御門、禁中ニテ慈覺大師ニ灌頂ヲオコナハル。主上ヲハジメ奉リテ、忠仁公ナドモウケラレタル、コレハ結緣灌頂トゾ申メル。此度ハマコトノ授職トヲボシメシ、ニヤ。サレド猶許可ニサダマリニキトゾ。ソレナラズ。諸流ヲモウケサセ給。又諸宗ヲモステタマハズ。本朝異朝禪門ノ僧徒マデモ內ニメシテトブラハセ給キ。スベテ和漢ノ道ニカ子テアキラカナル御コトハ中比ヨリノ代々ニハコエサセマシ〳〵ケルニヤ。戊午ノ年即位。己未ノ夏四月ニ改元、々應ト号ス。ハジメツカタハ後宇多院ノ御マツリゴトナリシヲ中二トセバカリアリテゾユヅリ申サセ給シ。ソレヨリフルキガゴトクニ記錄所ヲヲカレテ、夙ニヲキ、夜ハニオホトノゴモリテ民ノウレヘヲキカセ給。天下コゾリテコレヲアフギ奉ル。公家ノフルキ御政ニカヘルベキ世ニコソト、タカキモイヤシキモカ子テウタヒ侍キ。カヽリシホドニ、(後)宇多院カクレサセ給テ、イツシカ東宮ノ御方ニサブラフ人々ソバ〳〵ニキコエシガ、關

東ニ使節ヲツカハサレ、天位ヲアラソフマデノ御中ラヒニナリニキ。アヅマニモ東宮ノ御コトヲヒキ立申輩アリテ御イキドヲリノハシトナリヌ。元亨甲子ノ九月ノスエツカタ、ヤウ〳〵事アラハレニシカドモ、ウケタマハリオコナフ中ニ、イフカヒナキ事イデキニシカド、大方ハコトナクテヤミヌ。其後ホドナク、東宮カクレ給ヌ。神慮ニモカナハズ、祖皇ノ御イマシメニモタガハセ給ケリトゾオボエシ。今コソ此天皇ウタガヒナキ繼躰ノ正統ニサダマラセ給ヒヌレ。サレド坊ニハ後伏見第一ノ御子、量仁親王井サセ給。カクテ元弘辛未ノ年八月ニ俄ニ都ヲイデサセ給。奈良ノ方ニ臨幸アリシガ、其所ヨロシカラデ、笠置ト云山寺ノホトリニ行宮ヲシメ、御志アル兵ヲメシ集ラル。タビ〳〵合戰アリシガ、同九月ニ、東國ノ軍オホクアツマリノボリテ事カタクナリニケレバ、他所ニウツラシメ給シニ、オモヒノ外ノコトイデキテ、六波羅トテ承久ヨリコナタ、シメタル所ニ御幸アル。御共ニハベリシ上達部ウヘノヲノコドモ、アルイハトラレ或ハシノビカクレメ（タ）ルモアリ。カクテ東宮位ニツカセ給。ツギノ年ノ春隱岐國ニウツラシメマシマス。御子タチモアナタカナタニウツサレ給シニ、兵部卿護良親王ゾ山々ヲメグリ國國ヲモヨヲシテ、義兵ヲオコサントクワダテ給ケル。河内國ニ橘

正成ト云者アリキ。御志フカヽリケレバ、河内ト大和トノ境ニ、金剛山ト云所ニ城ヲカマヘテ、近國ヲオコ〔カ〕シタイラゲシカバ、アヅマヨリ諸國ノ軍ヲアツメテセメシカド、カタクマモリケレバ、タヤスクオトスニアタハズ。世ノ中ミダレ立ニシ。次ノ年癸酉ノ春、忍テ御船ニタテマツリテ隱岐ヲイデヽ、伯耆ニツカセ給。其國ニ源長年ト云者アリ。御方ニマイリテ船上ト云山寺ニカリノ宮ヲタテヽゾスマセタテマツリケル。彼アタリノ軍兵シバラクハキヲイテヲソヒ申ケレド、ミナヽビキ申ヌ。都チカキ所々ニモ御心ザシアル國々ノツハモノヨリ〳〵ウチイヅレバ、合戰モタビ〳〵ニナリヌ。京中サハガシクナリテハ、上皇モ新主モ六波羅ニウツリ給。伯耆ヨリモ軍ヲサシノボセラル。ココニ幾〔畿〕内近國ニモ御志アル輩、八幡山ニ陣ヲトル。坂東ヨリノボレル兵ノ中ニ、藤原ノ親光ト云者モ彼山ニハセクハヽリヌ。ツキ〳〵御方ニマイル輩オホクナリニケリ。源高氏トキコエシハ、昔ノ義家朝臣ガ二男義國（ト云ヒシガ後胤ナリ。彼義國）ガ孫ナリシ義氏ハ平義時朝臣ガ外孫ナリ。義時等ガ世トナリテ源氏ノ号アル勇士ニハ心ヲヽキケレバ、ニヤヲシスヘタルヤウナリシニ、コレハ外孫ナレバ、取立テ領スル所ナドモアマタハカラヒヲキ、代々ニナルマデヘダテナクテノミアリキ。

高氏モ都ヘサシノボセラレケルニ、疑ヲノガレントニヤ、告文ヲカキヲキテゾ進發シケル。サレド、冥顯（見）ヲモカヘリミズ、心ガハリシテ御方ニマイル。官軍力ヲエシマヽ、ニ、五月八日ノコロニヤ都ニアル東軍ミナヤブレテアヅマヘコヽロザシテオチユキシニ、兩院新帝オナジク御ユキアリ。近江國馬場ト云所ニテ御方ニ心ザシアル輩ウチイデニケレバ、武士ハタヽカフマデモナク、自滅シヌ。兩皇新帝ハ都ニカヘシ奉リ、官軍コレヲマボリ申キ。カクテ都ヨリ西ザマ程ナクシヅマリヌトキ・コエケレバ、還幸セサセ給。マコトニメヅラカナリシ事ニナン。東ニモ上野國ニ源義貞ト云者アリ、高氏ガ一族ニ。世ノ乱ニオモヒヲオコシ、イクバクナラヌ勢ニテ鎌倉ニウチノゾミケルニ、高時等運命キハマリニケレバ、國々ノ兵ツキシタガフコト風ノ草ヲナビカスガゴトクシテ五月ノ廿二日ニヤ高時ヲハジメトメ多ノ一族ミナ自滅シテケレバ、鎌倉又タイラギヌ。符契ヲアハスルコトモナカリシ（ニ）筑紫ノ國々、陸奥出羽ノオクマデモ同月ニシヅマリニケリ。六七千里ノアヒダ一時ニオコリアヒニシ、時ノイタリ、運ノ極ヌルハカヽルコトニコソト不思議ニモ侍シモノ哉。君ハカクトモシラセ給ハズ、攝津國西ノ宮ト云所ニテゾキカセマシ〳〵ケル。六月四日、東寺ニイラセ給フ。都ニア

ル人々マイリアツマリシカバ、威儀ヲト、ノヘテ本ノ宮ニ還幸シ給。イツシカ賞罰ノサダメアリシニ、両院新帝ヲバ、ナダメ申給テ都ニスマセマシノ＼ケル。（サレド）新帝ハ偽主ノ儀ニテ、正位ニハモチヰラレズ。改元ノ正慶ト云シヲモ本ノゴトク元弘ト号セラレ、官位昇進セシ輩モミナ元弘元年八月ヨリサキノマ、ニテゾアリシ。平治ヨリ後、平氏世ヲミダリテ廿六年。文治ノ初、頼朝權ヲモハラニセシヨリ父子アヒツギテ卅七年。承久ニ義時世ヲトリヲコナヒシヨリ百［三］十（三）年、スベテ百七十餘年ノアヒダ、オホヤケノ世ヲ一ニシラセ給コトタエニシ（ニ）、此天皇ノ御代ニ、掌ヲカヘスヨリモヤスク一統シ給ヌルコト宗廟ノ御ハカライモ時節アリケリト天下コゾリテゾ仰奉リケル。同年冬十月ニ先、アヅマノオクヲシヅメラルベシトテ、參議右近中將源顯家卿ヲ陸奥守ニナシテツカハサル。代々、和漢ノ稽古ヲワザトシテ朝端ニツカヘ、政務ニマジハル道ヲノミコソマナビハベレ。吏途ノ方ニモナラハズ、武勇ノ藝ニモタヅサハラヌコトナレバ、タビノ＼イナミ申シカド、公家スデニ一統シヌ。文武ノ道二ニアルベカラズ。昔ハ皇子皇孫、モシハ執政ノ大臣ノ子孫ノミコソオホクハ軍ノ大將ニモサ、レシカ。今ヨリ武ヲカヌテ、藩屛（ハンペイ）タルベシトオホセ給テ御ミヅカラ旗ノ銘ヲカ、シ

メ給、サマ〳〵ノ兵器ヲサヘクダシタマハル。任國ニオモムクダニタエテヒサシクナリニシカバ、フルキ例ヲタヅ子テ、罷申ノ儀アリ。御前ニメシ勅語アリテ、御衣御馬ナドヲタマハリキ。猶オクノカタメニモト申ウケテ御子ヲ一所トモナヒタテマツル。カケマクモカシコキ今上皇帝ノ御コトナレバ、コマカニハシルサズ。彼國ニツキニケレバ、マコトニオクノ方ザマ、兩國ヲカケテミナ、ビキシタガヒニケリ。同十二月左馬頭直義朝臣相摸守ヲ兼テ下向ス。コレモ（四）〔一字虫はみ。諸本にて補ふ〕品上野大守成良親王ヲトモナヒ奉。此親王、後ニシバラク征夷大將軍ヲ兼セサセ給。直義ハ高氏ガ弟ナリ。抑、彼高氏、御方ニマイリシ其功ハ誠ニシカルベシ。スヾロニ寵幸アリテ抽賞セラレシカバ、ヒトヘニ賴朝卿天下ヲシヅメシマヽノ心ザシニノミナリニケルニヤ。イツシカ越階シテ、四位ニ叙シ、左兵衛督ニ任ズ。拜賀ノサキニヤガテ從三位シテ、程ナク參議從二位マデノボリヌ。三ケ國ノ吏務、守護ヲヨビアマタノ郡庄ヲ給ル。弟直義左馬頭ニ任ジ、從四位ニ叙ス。昔賴朝タメシナキ勳功アリシカド、高官高位ニノボルコトハ乱政ナリ。ハタシテ子孫モハヤクタエヌルハ高官ノイタス所カトゾ申傳タル。高氏等ハ賴朝實朝ガ時ニ親族ナドヽテ優恕スルコトモナシ。タヾ家人ノ列ナリキ。實朝公八幡宮

〔直義ハ云々の割注底本本文となりをるを訂す〕

ニ拜賀セシ日モ地下前駈廿人ノ中ニ相加レリ。タトヒ賴朝ガ後胤ナリトモ、今サラ登用スベシトモオボエズ。イハムヤヒサシキ家人ナリ。サシタル大功モナクテカクヤハ抽賞セラルベキトアヤシミ申輩モアリケリトゾ。關東ノ高時、天命スデニ極テ、君ノ御運ヲヒラキシコトハ更ニ人力トイヒガタシ。武士タル輩、イヘバ、數代ノ朝敵之。御方ニマイリテ其家ヲウシナハヌコソアマサヘアル皇恩ナレ。サラニ忠ヲイタシ、勞ヲツミテゾ、理運ノ望ヲモ企(クワダテ)ハベルベキ。シカルヲ天ノ功ヲヌスミテヲノレガ功トオモヘリ。介子推ガイマシメモ習シルモノナキニコソ。カクテ高氏ガ一族ナラヌ輩モアマタ昇進シ、昇殿ヲユルサル、モアリキ。サレバ、或人ノ申サレシハ公家ノ御世ニカヘリヌルカトオモヒシニ、中〳〵猶武士ノ世ニ成ヌルトゾ有シ。オヨソ政道ト云コトハ所々ニシルシハベレド、正直慈悲ヲ本トシテ決斷ノ力アルベキ之。コレ天照太神ノアキラカナル御ヲシヘナリ。決斷ト云ニトリテアマタノ道アリ。一ニハ其人ヲエラビテ官ニ任ズ。官ニ其人アル時ハ君ハ垂拱シテマシマス。サレバ、本朝ニモ異朝ニモコレヲ治世ノ本トス。二ニハ國郡ヲワタクシニセズ、ワカツ所カナラズ其理ノマ、ニス。三ニハ功アルヲバ必賞シ、罪アルヲバ必ズ罰ス。コレ善ヲス、メ、惡ヲコロス

道ナリ。是ニ一モタガフヲ乱政トハイヘリ。上古ニハ勳功アレバトテ官位ヲスヽムコトハナカリキ。ツチノ官位ノホカニ勳位ト云シナヲヽキテ一等ヨリ十二等マデアリ。無位ノ人人ナレド、勳功タカクテ、一等ニアガレバ正三位ノ下、從三位ノ上ニツラナルベシトゾミエタル。又本位アル人ノコレヲ兼タルモ有ベシ。官位トイヘルハ、上三公ヨリ下諸司ノ一分ニイタル、コレヲ内官ト云。諸國ノ守ヨリ史生、郡司ニイタル、コレヲ外官ト云。天文ニカタドリ、地理ニノトリテオノ〱ツカサドル方アレバ、其才ナクテハ任用セラルベカラザルコトナリ。名與器ハ人ニカサズトモ云、天ノ工人其代トモイヒテ、君ノミダリニサヅクルヲ謬擧トシ、臣ノミダリニウクルヲ尸祿トス。謬擧ト尸祿トハ國家ノヤブルヽ階、王業ノ久カラザル基ナリトゾ。中古ト成テ平將門ヲ追討ノ賞ニテ藤原秀鄕正四位下ニ叙シ、武藏下野兩國ノ守ヲ兼ス。平貞盛正五位下ニ叙シ、鎭守府ノ將軍ニ任ズ。安倍貞任奥州ヲミダリシヲ源賴義朝臣十二年マデニタヽカヒ凱旋ノ日正四位下ニ叙シ、伊与守ニ任ズ。彼等其功タカシトイヘドモ、一任四五ヶ年ノ職ナリ。コレ猶上古ノ法ニハカハレリ。保元ノ賞ニハ義朝左馬頭ニ轉ジ、清盛太宰大貳ニ任ズ。此外受領撿非違使ニナレルモアリ。此時ヤスデニミダリガハシキ

始トナリニケン。平治ヨリコノカタ、皇威コトノホカニオトロヘヌ。清盛天下ノ權ヲ盜、太政大臣ニアガリ、子ドモ大臣大將ニ成シウヘハイフニタラヌ事ニヤ。サレド、朝敵ニナリテヤガテ滅亡セシカバ後ノ例ニハヒキガタシ。頼朝ハサラニ一身ノ力ニテ平氏ノ亂ヲタイラゲ、廿余年ノ御イキドヲリヲヤスメタテマツリシ。昔、神武ノ御時、宇麻志麻見ノ命ノ中州ヲシヅメ、皇極ノ御宇ニ大織冠ノ、我ノ一門ヲホロボシテ皇家ヲマタクセシヨリ後ハタグヒナキ程ノ勳功ニヤ。ソレスラ京上ノ時、大納言大將ニ任ゼラレシヲバカタクイナミ申ケルヲ、シテナサレニケリ。公私ノワザワイニヤ侍ケン。ソノ子ハ彼ガアトナレバ大臣大將ニナリテヤガテホロビヌ。更ニアト、云物モナシ。天意ニハタガヒケリトミエタリ。君モカヽルタメシヲハジメ給シニヨリテ大功ナキモノマデモ皆カヽルベキコト、思アヘリ。頼朝ハワガ身カヽレバトテ、兄弟一族ヲバカタクオサヘケルニヤ。義經五位ノ檢非違使ニテヤミヌ。範頼ガ三河守ナリシハ頼朝拜賀ノ日、地下ノ前駈ニメシクワヘタリ。オゴル心ミエケレバニヤ、コノ兩弟ヲモツ井ニウシナヒニキ。サナラヌ親族モオホクホロボサレシハヲゴリノハシヲフセギテ、世ヲモヒサシク、家ヲモシヅメントニヤアリケン。先祖經基ハチカキ皇孫ナリ

シカド、承平ノ乱ニ征夷將軍忠文朝臣ガ副將トシテ彼ガ節度ヲウク。其ヨリ武勇ノ家トナル。其子滿仲ヨリ頼信、頼義、義家、相續デ朝家ノカタメトシテヒサシク召仕ル。上ニモ朝威マシ〳〵、下ニモ其分ニスギズシテ、家ヲ全シ侍リケルニコソ。爲義ニイタリテ乱ニクミシテ誅ニフシ、義朝又功ヲタテントテホロビニキ。先祖ノ本意ニソムキケルコトハウタガヒナシ。サレバヨク先蹤ヲワキマヘ、得失ヲカムガヘテ、身ヲ立、家ヲマタクスルコソカシコキ道ナレ。ヲロカナルタグヒハ、淸盛頼朝ガ昇進ヲミテ、ミナアルベキコト、オモヒ、爲義義朝ガ逆心ヲヨミシテ亡タルユヘヲシラズ。近ゴロ伏見ノ御時、源爲頼ト云ヲノコ内裏ニマイリテ自害シタリシガ、カネテ諸社ニ奉ル矢ニモ、ソノ夜射ケル矢ニモ太政大臣源爲頼トカキタリシ、イトヲカシキコトニ申メレド、人ノ心ノミダリニナリ行スガタハコレニテヲシハカルベシ。義時ナドハイカホド〳〵モアガルベクヤアリケン。サレド正四位下、右京權大夫ニテヤミヌ。マシテ泰時ガ世ニナリテハ子孫ノ末ヲカケテヨクオキテヲキケレバニヤ、滅ビシマデモツ井ニ高官ニノボラズ、上下ノ礼節ヲミダラズ。近ク維貞トイヒシモノ、吹擧ニヨリテ修理大夫ニナリシヲダニイカガト申ケル、マコトニ其身モヤガテウセ侍リニキ。父祖ノヲキテニタガ

ウハ家門ヲウシナウシルシナリ。人ハ昔ヲワスル、モノナレド、天ハ道ヲウシナハザルナルベシ。サラバナド天ハ正理ノマ、ニオコナハレヌト云コトウタガハシケレド、人ノ善惡ハミヅカラノ果報之。世ノヤスカラザルハ時ノ災難ナリ。天道モ神明モイカニトモセスコトナレバ、邪ナルモノハ久シカラズシテホロビ、乱タル世モ正ニカヘル古今ノ理ナリ。コレヲヨクワキマヘシルヲ稽古ト云。昔、人ヲエラビ、モチヰラレシ日ハ先德行ヲツクス。德行オナジケレバ、才用アルヲモチヰル。才用ヒトシケレバ、勞効アルヲトル。又德義 淸愼、公平、恪勤ノ四善ヲトルトモミエタリ。格條ニハ朝ニ廝養タレドモ、夕ニ公卿ニイタルト云コトノ侍ルモ德行才用ニヨリテ不次ニモチヰラルベキ心ナリ。寛弘ヨリアナタニハマコトニ才カシコケレバ、種姓ニカ、ハラズ、將相ニイタル人モアリ。寛弘以來ハ譜第ヲサキトシテ、其中ニ才モアリ、德モアリテ、職ニカナヒヌベキ人ヲゾエラバレケル。世ノ末ニミダリガハシカルベキコトヲイマシメラル、ニヤアリケン。七ケ國ノ受領ヲヘテ、合格シテ、公文トイフコトカンガヘヌレバ、參議ニ任ズト申ナラハシタルヲ、白河ノ御時、修理ノカミ顯季トイヒシ人、院ノ御メノトノ夫ニテ時ノキラ並人ナカリシガ、コノ勞ヲツノリテ參議ヲ申ケルニ、院ノ仰ニ、

「ソレモ物カキテノウヘノコト」、アリケレバ、理ニフシテヤミヌ。此人ハ哥道ナドモホマレアリシカバ、物カヽヌ程ノコトヤハアルベキ。又參議ニナルマジキホドノ人ニモアラジナレド、和漢ノ才學ノタラヌニコソ有ケン。白河ノ御代マデハヨク官ヲオモクシ給ケリトキコエタリ。アマリ、譜第ヲノミトラレテ賢才ノイデコヌハシナレバ、上古ニヲヨビガタキコトヲウラムルヤカラモアレド、昔ノマヽニテ（ハ）イヨ〳〵ミダレヌベケレバ、譜第ヲオモクセラレケルモコトハリ也。但才モカシコク德モアラハニシテ、登用セラレムニ人ノソシリアルマジキ程ノ器ナラバ、今トテモカナラズ非重代ニヨルマジキ事トゾオボエ侍ル。其道ニハアラデ、一旦ノ勳功ナド云バカリニ、武家代々ノ陪臣ヲアゲテ高官ヲ授ラレムコトハ朝議ノミダリナルノミナラズ、身ノタメモヨクツヽシムベキコト、ゾオボエ侍ル。モロコシニモ漢高祖ハスヾロニ功臣ヲ大ニ封ジ、公相ノ位ヲモ授シカバ、ハタシテ奢ヌ。奢レバホロボス。ヨリテ後ニハ功臣ノコリナクナリニケリ。後漢ノ光武ハコノ事ニコリテ、功臣ニ封爵ヲアタヘケルモ其首タリシ鄧禹スラ封ゼラルヽ所四縣ニスギズ。官ヲ任ズルニハ文史ヲモトメエラビテ功臣ヲサシヲク。是ニヨリテ廿八將ノ家ヒサシク傳テ、昔ノ功モムナシカラズ、朝ニハ名士

オホクモチ井ラレテ、曠官ノソシリナカリキ。彼廿八將ノ中ニモ鄧禹ト賈復トハソノエラビニアヅカリテ官ニアリキ。漢朝ノ昔ダニ、文武ノ才ヲソナフルコトイトアリガタク侍リケルニコソ。次ニ功田ト云コトハ昔ハ功ノシナニシタガヒテ大上中下ノ四ノ功ヲ立テ田ヲアカチ給キ。其數シナサダマレリ。大功ハ世々ニタエズ。其下ツカタハ或ハ三世ニツタヘ、孫子ニツタヘ、身ニトヾマルモアリ。天下ヲ治ト云コトハ國郡ヲ專ニセズシテ、ソノコト、ナク不輪ノ地ヲタテラル、コトノナカリシニコソ。國ニ守アリ、郡ニ領アリ。一國ノウチ皆國命ノシタニテオサメシユヘニ法ニソムク民ナシ。カクテ國司ノ行迹ヲカムガヘテ賞罰アリシカバ、天下ノコト掌ヲサシテオコナイヤスカリキ。其中ニ諸院諸宮ニ御封アリ、親王大臣モ又カクノゴトシ。其外官田、職田トテアルモミナ官符ヲ給テ、其所ノ正稅ヲウクルバカリニテ、國ハミナ國司ノ吏務ナルベシ。但、大功ノ者ゾ今ノ庄園ナドシ(ト)テ傳ガゴトク、國ニイロハレズシテツタエケル。中古トナリテ庄園オホクタテラレ、不輸ノ所イデキショリ乱國トハナレリ。上古ニハコノ法ヨクカタカリケレバニヤ、推古天皇ノ御時蘇我大臣ワガ封戸ヲワケテ寺ニヨセント奏セシヲツ井ニユルサレズ。光仁天皇ハ永神社佛寺ニヨセラレシ地ヲモ永ノ字

ハ一代ニカギルベシトアリ。後三条院ノ御世コソ此ツイエヲキカセ給テ、記錄所ヲヽカレテ、國々ノ庄公ノ文書ヲメシテオホク停癈(廢)セラレシカド、白河鳥羽ノ御時ヨリ新立ノ地イヨ／＼オホクナリテ國司ノシリ(ル)所百分ガ一ニナリヌ。後ザマニハ國司、任ニオモムクコトサヘナクテ、其人ニモアラヌ眼代ヲサシテ國ヲオサメシカバ、イカデカ乱國トナラザラン。況ヤ文治ノハジメ、國ニ守護職ヲ補シ、庄園郷保ニ地頭ヲオカレシヨリコノカタハサラニ古ノスガタト云コトナシ。政道ヲオコナハルヽ道コト／＼クタエハテニキ。タマ／＼一統ノ世ニカヘリヌレバ、コノ度ゾ、フルキ費(ツヰエ)ヲモアラタメラレヌベカリシカド、ソレマデハアマサヘノコトナリ。今ハ本所ノ領ト云シ所々サヘミナ動功ニ混ゼラレテ累家モホト／＼其名バカリニナリヌルモアリ。コレミナ功ニホコレル輩君ヲオトシ奉ルニヨリテ、皇威モイトヾカロクナルカトミエタリ。カヽレバ、其功ナシトイヘドモ、フルクヨリ勢(イキヲイ)アル輩ヲナツケラレンタメ、或ハ本領ナリトテタマハルモアリ、或ハ近境ナリトテノゾムモアリ。闕所ヲモテオコナハルヽニタラザレバ、國郡ニツキタリシ地モシハ諸家相傳ノ領マデモキヲヒ申ケリトゾ。オサマラントメイヨ／＼ミダレ、ヤヽカラントシテマス／＼アヤウクナリニケル、末

世ノイタリコソマコトニカナシク侍レ。凡王土ニハラマレテ忠ヲイタシ、命ヲスツルハ人臣ノ道ナリ。必、コレヲ身ノ高名トオモフベキニアラズ、シカレドモ、後ノ人ヲハゲマシ、其アトヲアハレミテ賞セラル、ハ君ノ御政ナリ。下トメキヲモ〔ヒ〕アラソヒ申ベキニアラズニヤ。マシテサセル功ナクシテ過分ノ望ヲイタスコトミヅカラアヤブムルハシナレド、前車ノ轍ヲミルコトハマコトニ有ガタキ習ナリケンカシ。中古マデモ人ノサノミ豪強ナルヲバイマシメラレキ。豪強ニナリヌレバ、カナラズヲゴル心アリ。ハタシテ身ヲホロボシ、家ヲウシナフタメシアレバ、イマシメラル、モ理ナリ。鳥羽院ノ御代ニヤ、諸國ノ武士ノ源平ノ家ニ屬スルコトヲトヾムベシト云制符タビ〳〵アリキ。源平ヒサシク武ヲトリテツカヘシカドモ、事アル時ハ宣旨ヲ給リ諸國ノ兵ヲメシグシケルニ、近代トナリテ、ヤガテ肩ヲイル、族オホクナリシニヨリテ、此制符ハクダサレキ。ハタシテ今マデノ乱世ノ基ナレバ、云カヒナキコトニナリニケリ。此比ノコトワザニハ一タビ軍ニカケアヒ、或ハ家子郎從節ニシヌルタグヒモアレバワガ功ニヲキテハ日本國ヲ給、モシハ半國ヲ給テモタルベカラズナド申メル。マコトニサマデオモフコトハアラジナレド、ヤガテコレヨリミダル、端トモナル、又朝威ノ

カロ〳〵シサモヲシハカラル、モノナリ。言語ハ君子ノ樞機ナリトイヘリ。アカラサマニモ君ヲナイガシロニシ、人ニオゴルコトアルベカラヌコトニコソ。サキニシルシハベリシゴトク、カタキ氷ハ霜ヲフムヨリイタルナラヒナレバ、乱臣賊子ト云者ハソノハジメ心コトバヲツヽシマザルヨリイデクル之。世ノ中ノオトロフルト申ハ日月ノ光ノカハルニモアラズ、草木ノ色ノアラタマルニモアラジ。人ノ心ノアシクナリ行ヲ末世トハイヘルニヤ。昔許由ト云人ハ帝堯ノ國ヲ傳ントアリシヲキヽテ潁川ニ耳ヲアラヒキ。巣父ハコレヲキヽテ此水ヲダニキタナガリテワタラズ。其人ノ五臓六腑ノカハルニハアラジ。ヨクオモヒナラハセルユヘニコソアラメ。猶行スヱノ人ノ心オモヒヤルコソアサマシケレ。大方ヲノレ一身ハ恩ニホコルトモ、万人ノウラミヲノコスベキコトヲバ、ナドカカヘリミザラン。君ハ万姓ノ主ニテマシマセバ、カギリアル地ヲモテ、カギリナキ人ニワカタセ給ハンコトハヲシテモハカリタテマツルベシ。（若）一國ヅヽヲノゾマバ六十六人ニテフサガリナム。一郡ヅヽトイフトモ、日本ハ五百九十四郡コソアレ、五百九十四人ハヨロコブトモ千万ノ人ハ不悦。況、日本ノ半ヲ心ザシ皆ナガラノゾマバ、帝王ハイヅクヲシラセ給ベキニカ。カヽル心ノキザシ

テ・コトバニモイデ、ヲモテニハ恥ル色ノナキヲ謀反ノハジメト云ベキ也。昔ノ將門ハ比叡山ニノボリテ大内ヲ遠見シテ、謀反ヲオモヒクワダテケルモカ、ルタグヒニヤ侍ケン。昔ハ人ノ心正クテ、（オノヅカラ）將門ニミモコリ、キ、モコリナ（ケ）ン。今ハ人々ノ心カクノミナリニタレバ、此世ハヨクオトロヘスルニヤ。漢高祖ノ天下ヲトリシハ蕭何、張良、韓信ガ力ナリ。コレヲ三傑ト云。万人ニスグレタルヲ傑ト云トゾ。中ニモ張良ハ高祖ノ師トメ、ハカリゴトヲ帷帳ノ中ニメグラシテ勝コトヲ千里ノ外ニ決スルハコノ人ナリトノ給シカド、張良ハオゴルコトナクシテ留トイヒテスコシキナル所ヲノゾミテ封ゼラレニケリ。アラユル功臣オホクホロビシカド、張良ハ身ヲマタクシタリキ。チカキ代ノコトゾカシ。頼朝ノ時マデモ文治ノ比ニヤ、奥ノ泰衡ヲ追討セシニ、ミヅカラムカウコトアリシニ、平重忠ガ先陣ニテ其功スグレタリケレバ、五十四郡ノ中ニ、イヅクヲモノゾムベカリケルニ、長岡ノ郡トテキワメタル小所ヲノゾミタマハリケルトゾ。コレハ人々ニヒロク賞ヲモオコナハシメンガタメニヤ、カシコカリケルオノコニコソ。又貞實ト云ケル者ニ一所ヲアタヘタマフ下文ニ日本第一ノ甲ノ者ナリト云（書）テ給テケリ。一トセ彼下文ヲ持テ奏聞スル人ノ有ケルニ、褒美ノ詞ノハ

ナハダシサニアタヘタル所ノスクナサ、マコトニ名ヲオモクシテ利ヲカロクシケル、イミジキコト、口〱ニホメアヘリケル、イカニ心エテ、ホメケントイトオカシ。是マデノ心コソナカラメ。事ニフレテ君ヲオトシ奉リ、身ヲタカクスル輩ノミ多クナレル〔リ〕。アリシ世ノ東國ノ風儀モカハリハテヌ。公家ノフルキスガタモナシ。イカニナリヌル世ニカトナゲキ侍ル輩モアリトキコエシカド、中一トセバカリハマコトニ一統ノシルシトオボエテ天ノ下コゾリ集テ都ノ中ハヘ〱シクコソ侍リケレ。建武乙亥ノ秋ノ比、滅ニシ高時ガ餘類謀反ヲオコシテ鎌倉ニイリヌ。直義ハ成良ノ親王ヲヒキツレ奉テ參河國マデノガレニキ。兵部卿護良親王コトアリテ鎌倉ニオハシマシケルヲバ、ツレ申ニヲヨバズ、ウシナヒ申テケリ。ミダレノ中ナレド、宿意ヲハタスニヤアリケン。都ニモカ子テ陰謀ノキコエアリテ嫌疑セラレケル中ニ、權大納言公宗卿召ヲカレシモコノマギレニ誅セラル。承久ヨリ關東ノ方人ニテ七代ニナリヌルニヤ。高時モ七代ニテ滅ヌレバ、運ノシカラシムルコト、ハオボユレド、弘仁ニ死罪ヲトメラレテ後、信頼ガ時ニコソメヅラカナルコトニ申ハベリケレ。戚里ノヨセモ久シクナリ、大納言以上ニイタリヌルニ、オナジ死罪ナリトモ、アラハナラヌ法令モアルニ、ウケ給

オコナフ輩ノアヤマリナリトゾキコエシ。高氏ハ申ウケテ、東國ニムカヒケルカ、征夷將軍ナラビニ、諸國ノ惣追捕使ヲ望ケレド、征夷將軍ニナサレテ悉クハユルサレズ。程ナク東國ハシヅマリニケレド、高氏ノゾム所達セズシテ謀反ヲオコスヨシキコエシガ、十一月十日アマリニヤ、義貞ヲ追討スベキヨシ奏シタテマツリ、スナハチ討手(ウツテ)ノボリケレバ、京中騷動ス。追討ノタメニ、中務卿尊良親王ヲ上將軍トシテ、サルベキ人々モアマタツカハサル。武家ニハ義貞朝臣ヲハジメテ、オホクノ兵ヲクダサレシニ、十二月ニ官軍ヒキシリゾキヌ。關々ヲカタメラレシカド、次ノ年丙子ノ春正月十日官軍又ヤブレテ朝敵スデニチカヅク ヨリテ比叡山東坂本ニ行幸シテ日吉社ニゾマシマシケル。內裏モスナハチ燒ヌ、累代ノ重寶モオホクウセニケリ。昔ヨリタメシナキホドノ乱逆ナリ。カヽリシアヒダニ陸奥守鎭守府ノ將軍顯家卿、コノ乱ヲキヽテ親王ヲサキニ立奉リテ、陸奥出羽ノ軍兵ヲ卒シテセメノボル。同十三日近江國ニツキテコトノ由ヲ奏聞ス。十四日ニ江ヲワタリテ坂本ニマイリシカバ、官軍大ニカヲエテ、山門ノ衆徒マデモ万歲ヲヨバヒキ。同十六日ヨリ合戰ハジマリテ、卅日ツ井ニ朝敵ヲ追落ス。ヤガテ其夜還幸シ給。高氏猶攝津國ニアリトキコエシカバ、カサネテ諸將

ヲツカハス。二月十三日又コレヲタイラゲツ。朝敵ハ船ニノリテ、西國ヘナムオチニケリ。諸將ヲヨビ官軍ハカツ〱カヘリマイリシヲ、東國ノ事オボツカナシトテ親王モ又カヘラセ給ベシ、顯家卿モ任所ニカヘルベキヨシオホセラル。義貞ハ筑紫ヘツカハサル。カクテ親王元服シ給、直ニ三品ニ叙シ、陸奥太守ニ任ジマシマス。彼國ノ太守ハ始タルコトナレド、タヨリアリトテゾ任ジ給。勸賞ニヨリテ同母ノ御兄、四品成良ノミコヲコエ給。顯家卿ハワザト賞ヲバ申ウケザリケルトゾ。義貞朝臣ハ筑紫ヘクダリシガ、播磨國ニ朝敵ノ黨類アリトテマヅコレヲ退（對）治スベシトテ日ヲオクリシ程ニ、五月ニモナリヌ。高氏等西國ノ凶徒ヲアヒカタラヒテ、カサネテセメノボル。官軍利ナクシテ都ニ歸參セシホドニ、同廿七日ニ又山門ニ臨幸シ給。八月ニイタルマデ度々合戰アリシカド、官軍イトスヽマズ。仍テ都ニハ元弘僞主ノ御弟ニ三ノ御子豐仁ト申ケルヲ位ニツケ奉ル。十月十日ノ比ニヤ主上都ニ出サセ給。イトアサマシカリシコトナレド、又行スヱヲオボシメス道アリシニコソ。東宮ハ北國ニ行啓アリ。左衛門督實世ノ卿以下ノ人々、左中將義貞朝臣ヲハジメテサルベキ兵モアマタツカウマツリケリ。主上ハ尊号ノ儀ニテマシ〱キ。御心ヲヤスメ奉ランタメニヤ、成良親王ヲ東

宮ニスヘタテマツル。同十二月ニシノビテ都ヲ出マシ〳〵テ河内國ニ正成トイヒシガ一族等ヲメシグシテ、芳野ニイラセ給ヌ。行宮ヲツクリテワタラセ給。モトノゴトク在位ノ儀ニテゾマシ〳〵ケル。内侍所モウツラセ給、神璽モ御身ニシタガヘ給ケリ。マコトニ奇特（特）ノコトニコソ侍シカ　芳野ノミユキニサキダチテ義兵ヲオコス輩モハベリキ。臨幸ノ後ニハ國々ニモ御心ザシアルタグヒアマタキコエシカド、ツギノ年モクレヌ。又ノ年、戊寅ノ春二月鎮守大將軍顯家卿又親王ヲサキダテ申、カサ子テウチノボル。海道ノ國々コトヾヽクタイラギヌ。伊勢伊賀ヲヘテ大和ニ入、奈良ノ京ニナンツキニケル。ソレヨリ所々ノ合戰アマタヽビニ勝侍リシニ、同五月和泉國ニテノタヽカヒニ、時ヤイタラザリケン、忠孝ノ道コヽニキハマリハベリニキ。苔ノ下ニウヅモレヌ（モノトテハ）タヾイタヅラニ名ヲノミゾトヾメテ（シ）。心ウキ世ニモハベルカナ。官軍猶コヽロヲハゲマシテ男山ニ陣ヲトリテ、シバラク合戰アリシカド、朝敵忍テ社壇ヲヤキハラヒシヨリコトナラズシテ引シリゾク。北國ニアリシ義貞モタビ〳〵メサレシカド、ノボリアヘズ、サセルコトナクテムナシクサヘナリヌトキコエシカバ、云バカリナシ。サテシモヤムベキナラズトテ陸奥ノ御子又東ヘムカハセ給ベ

キ定アリ。左少將顯信朝臣中將ニ轉ジ、從三位ニ叙シ、陸奥ノ介、鎭守將軍ヲ兼テツカハサル。東國ノ官軍コト〳〵ク彼節度ニシタガフベキ由ヲ仰ラル。親王ハ儲君ニタヽセ給ベキムヲ、申キカセ給、道ノ程モカタジケナカルベシ、國ニテハアラハサセ給ヘトナン申サレシ。異母ノ御兄モアマタマシ〳〵キ。同母ノ御兄モ前東宮恒良ノ親王、成良親王マシ〳〵シニカクサダマリ給ヌルモ天命ナレバカタジケナシ。七月ノ末ツカタ伊勢ニコエサセ給テ神宮ニコトノヨシヲ啓テ御船ヲヨソヒシ、九月ノハジメ、トモヅナヲトカレシニ、十日ゴロノコトニヤ、上総ノ地チカクヨリ空ノケシキオドロオドロシク海上アラクナリシカバ、又伊豆ノ崎ト云方ニタヾヨハレ侍シニ、イトヾ浪風オビタヾシクナリテ、アマタノ船ユキカタシラズハベリケルニ、御子ノ御船ハサハリナク、伊勢ノ海ニツカセ給。顯信朝臣ハモトヨリ御船ニサブラヒケリ。同風ノマギレニ、東ヲサシテ、常陸國ナル内ノ海ニツキタル船ハベリキ。方々ニタヾヨヒシ中ニコノ二ノフ子オナジ風ニテ東西ニフキワケヽル、末ノ世ニハメヅラカナルタメシニゾ侍ベキ。儲ノ君ニサダマラセ給テ、例ナキヒナノ御スマ井モイカヾトオボエシニ、皇太神ノトヾメ申サセ給ケルナルベシ。後ニ芳野ヘイラセマシ〳〵テ御目ノ前ニテ天位ヲ

ヅガセ給シカバ、イトヾオモヒアハセラレテタウトク侍ルカナ、又常陸國ハモトヨリ心ザス方ナレバ御志アル輩アヒハカラヒテ義兵コハクナリヌ。奥州野州ノ守モ次ノ年ノ春カサ子テ下向シオノ〳〵國ニツキハベリニキ。サテモ旧都ニハ戊寅ノ年ノ冬改元シテ暦應トゾ云ケル。芳野ノ宮ニハモトノ延元ノ号ナレバ、國々モオモイ〳〵ノ号ナリ。モロコシニハカヽルタメシオホケレド、此國ニハ例ナシ。サレド四トセニモナリヌルニヤ。大日本嶋根ハモトヨリノ皇都也。内侍所神璽モ芳野ニオハシマセバ、イヅクカ都ニアラザルベキ。サテモ八月ノ十日アマリ六日ニヤ、秋霜〔霧〕ニオカサレサセ給テ、カクレマシ〳〵ヌトゾキコエシ。ヌルガ中ナル夢ノ世ハイマニハジメヌナラヒトハシリナガラ、カズ〳〵メノマヘナル心チシテ老涙モカキアヘ子バ、筆ノ跡サヘトヾコホリヌ。昔仲尼ハ獲麟ニ筆ヲタツトアレバコヽニテトヾマリタクハベレド、神皇正統ノヨコシマナルマジキ理ヲ申ノベテ素意ノ末ヲモアラハサマホシクテ、シ井テシルシツケ侍ルナリ。カ子テ時ヲモサトラシメ給ケルニヤ、マヘノ夜ヨリ親王ヲバ左大臣ノ亭ヘウツシ奉ラレテ三種ノ神器ヲ傳申サル。後ノ号ヲバ仰ノマヽニテ後醍醐天皇ト申。天下ヲ治給コト廿一年。五十二歳オマシ〳〵キ。昔、仲哀天皇熊襲ヲセメサ

セ給シ行宮ニテ神サリマシ〳〵キ。サレド神功皇后程ナク三韓ヲタイラゲ、諸皇子ノ乱ヲシヅメラレテ、胎中天皇ノ御代ニサダマリキ。コノ君聖運マシ〳〵シカバ、百七十余年、中タエニシ一統ノ天下ヲシラセ給テ、御目ノ前ニテ日嗣ヲサダメサセ給ヌ。功モナク、徳モナキヌス人世ニオコリテ四トセ餘ガホド宸襟ヲナヤマシ、御世ヲスグサセ給ヌレバ、御怨念ノ末ムナシク侍リナンヤ。今ノ御門マタ天照太神ヨリコノカタノ正統ヲウケマシ〳〵ヌレバ、コノ御光ニアラソヒタテマツル者ヤハアルベキ。中〳〵カクテシヅマルベキ時ノ運トゾオボエ侍ル。

第九十六代、第五十世ノ天皇、諱（ハ）義良、後醍醐ノ天皇第七御子、御母、准三宮藤原ノ廉子。コノ君ハラマレサセ給ハントテ、日ヲイダクトナン夢ニ見申サセ給ケルトゾ。サレバアマタノ御子ノ中ニタヾナルマジキ御コト、ヅカ子テヨリキコエサセ給シ。元弘癸酉ノ年、アヅマノ陸奥出羽ノカタメニテオモムカセ給。甲戌ノ夏立親王。丙子ノ春、都ニノボラセマシ〳〵テ内裏ニテ御元服、加冠左ノオトヾナリ。スナハチ三品ニ叙シ、陸奥ノ太守ニ任ゼサセ給。オナジキ戊寅ノ年春、又ノボラセ給テ芳野宮ニマシ〳〵シガ、秋七月伊勢ニコエサセ給。カ

サチテ東征アリシカド、猶伊勢ニカヘリマシ、己卯ノ年三月又芳野ヘイラセ給。秋八月中ノ五日ユヅリヲウケテ天日嗣ヲツタヘオマシマス。

本云

此記上中下三卷北畠大納言入道（親房卿建武三年叡山臨幸時於行宮叙一位出家之後云々又其後於南朝芳野殿蒙准三后宣旨云々）於南山述作之

元元集解題と凡例

元元集　八巻　北畠親房卿の著である。尾崎雅嘉の群書一覽に

開闢より伊勢太神宮の由來　地神出生、神器傳受等の記の事までを記せり。第八の巻闕本なり。今の刊本第八巻御遷幸の圖は後人の附會せしもの也。さるによりて寶龜二年阿倍東人の跋をのせたり。云々。第八巻御遷幸 指圖の奥書に云　右此御遷幸 指圖者元々集秘藏繪卷也、卒爾不レ可レ有ニ他見一可レ秘々々云々

と云ひ又

元元集八巻寫本　一巻

此寫本を以て刊本遷幸 圖の巻に易べきものなり

と云つてゐる。

本書は題號に示せる如く我が國の元元即ち根本の事を明かにする爲に、其の材料を分類聚集して編纂し少しく意見を述べたものである。著者北畠親房卿は我が「大日本者神國也」と神皇正統記の卷頭に喝破した人で、日本精神 國體宣揚の第一人者であることは余輩の喋々する必要はない。皇位繼承と三種の神器の授受と云ふ事は親房卿が正統記で最も力を盡して論ぜられた處である。其神器の傳來の根源は最も我が國としては大切な事である。本書は其點に力を込められてあるのである。

本書は承應二、癸巳仲春吉旦とある版本の一種があるのみで、德川時代でもあまり人々に研究せられなかつた本であり、明治大正時代にも飜刻に成つたと云ふ事を聞かぬが、しかし其に私の寡聞の爲かも知れない。とにかく私は見てゐない。其で正統記に添へて出版する事と定めたのであるが、此承應二年版はかなり誤脱の多い

本と思はれる。其一部の古寫本を拙藏してゐるが、其とくらべて見ても隨分誤脫の有る事が知られる（もとより古寫本にも誤脫が多い）其で今校訂するに當りても寫本の善本を得たかつたのであるが、私の知合には此寫本の持合せの有る人が無かつた。やむなく拙藏の古寫本（缺本）の外はつとめて原本にさかのぼりて校訂したのであるが、全部の書籍が座右に無く、かつ有る本も中々引用の處を見あてかねなどして、時間と勞力を消費した割合によい本には成らなかつた。慙愧の外はない。

刊本卷八は後人の附會せしものと群書一覽にも見えてゐるし、古くから然云ひ傳へられてゐる。然し今直ちに此卷を削除するのもどうかと思はれるから、猶刊本のまゝに添へておいた。而して其の眞本と云はるる八卷の寫本一卷を其の終に添へる事にした。然して此卷八の一卷がはたして今添へた一卷にて間違ないかどうかと云ふ事も或は研究せねばならぬかも知れぬが、とも角も拙藏の本で加へた。元來此の元元集はまだ近世の學者達の研究を經ぬ本であるからして疑問もあるわけであるが、其等の研究は後の學者に俟つことゝして出版したのである。私が今かりに眞本と呼べる異本の卷八に神宮下とあるが、神宮上と云ふ事は上の七册のうちには見えない。其はどう云ふわけか。群書一覽にも眞本の卷八は何篇であると云ふ說明が缺けてゐる。佐村八郎氏の國書解題にも何等の言葉も加へられてゐぬ。私は私の藏せる一本を見たのみで、其他の寫本を見ぬ事であるから、其處に如何なる缺陷が有るかも知れない。田舍にあつて何一つ調査の便宜をもたぬ私としては今どうする事も出來ない。之れまた慙愧の至りである。

私が校訂に用ゐた本の事及び其の次第の事を畧記しておく必要がある。

先づ拙藏の古寫本の事を云ふ。此本は一二三の三册のみの缺本であるが、德川初期の寫本と思はれて、美濃紙袋綴りであつて、野紙であるが、其の野は活版式である。もと北畠治房男の所藏本で北畠文庫の藏印がある。

此の本と今の版本と比較するに相等の異同が有つて、其の異同の處を今の流布本の日本書紀などとくらべてみるに、版本よりは寫本の方が合致する場合が多いやうである。此の寫本が相應に善本たる事を示してゐる。但し古寫本の多くが版本よりは平均して誤字が多い例にもれず此本も誤脱は多々ある。眞本卷八は土佐の學者谷垣守の自筆寫本であつて、拙藏である。寫本としては極めて丁寧なものである。此の卷八の善寫本は稀である上に垣守翁の自筆であるから寫眞版とした。

各引用書の校訂には多くは國史大系本、群書類從活版本に據つたが、舊事紀は寛永版本、延佳校本を以て校し、古語拾遺は前田家の亮順本を參考し神皇實錄は拙藏の寫本によつた。校訂の樣式は本全集の常に用ゐる形によつた。底本の改訂はさけて、異同は多く頭註にしておいた。つとめて原本に當らんとしたが手許に無い本もあり、見當りかねた處もあり、全く校訂を了し得ざりし事を遺憾に思ふ。

終に育德財團から前田家本の古語拾遺の複製本を寄贈せられた事を深謝する。

昭和九年八月廿八日

正　宗　敦　夫

元元集

元元録

元元集目錄

附錄

元始不 元初ニ作ル

元元集卷第一

○天地開闢篇

昔者渾沌未分、唯有元氣。有氣便通、所以爲一陰一陽也。暨于淸陽者上升、重濁者下降、天先成地後定、兩儀之稱由此而起。于時天地之間生一物、或云如葦牙、或云如浮膏。蓋狀貌難言、强字之者也。其中有精、謂之神聖、能祖宗于万物、主掌于兩儀、即是所以成三才也。元元人元始、本本任本心、心在於此焉。

日本書紀曰、古天地未割、陰陽不分、渾沌如鷄子、溟涬而含牙。及其淸陽者薄靡而爲天、重濁者淹滯而爲地、精妙之合搏易、重濁之凝竭難。故天先成而地後定。然後神聖生其中焉。故曰開闢之初、洲壤浮漂、譬猶游魚之浮水上也。于時天地之中生一物、狀如葦牙。便化爲神、號國常立尊。至貴曰尊 自餘曰命 亦曰、天地初判、一物在於虛中、狀貌難言。其中自有化生之神、號國常立尊。亦曰國底立尊。

亦曰、古國稚地稚之時、譬猶浮膏而漂蕩。于時國中生物狀如葦牙之抽出也。因此有化生之神號可美葦牙彥舅尊。

亦曰、高天原所生神名曰天御中主尊

亦曰、天地未生之時、譬猶海上浮雲无所根係。其中生一物、如葦牙之初生泥中也。便化爲人。號國常立尊。

亦曰、天地初判有物、若葦牙生於空中。因此化神号天常立尊。

先代舊事本紀曰、古者元氣渾沌天地未割、猶鷄卵子溟涬含牙。其後淸氣漸登薄靡爲天、浮濁重沉淹滯爲地、所謂洲壤浮漂開闢別割是也。譬猶游魚之浮水上。于時天先成而地後定云云

（別イ判）

天地麗氣府錄曰、蓋聞壞劫後過二十空、已一切有情業增上力、故空中漸有微細風、是世間將成前相也。是風漸增成世界。最初第三禪器世界成、次第二禪及初禪六欲天、四大洲次第皆成也。凡成劫之時雖无有一有情、第四禪天人壽業盡故從彼沒已生第三禪。如是次第三禪天沒生第二禪中。第二禪中有一有情、壽業盡器從彼沒生初梵世中爲大梵王。而唯獨一

（空ノ下劫アリ）

曰〔イ〕名

記〔イ〕紀

神人〔イ〕人神ニ作ル次々モ同

位而懷不悅、即作是念、當何令餘有情亦來生此間作此念時、第二禪天壽盡故生初禪中。如是展轉六天宮殿及四大洲悉生也。

論云、劫盡燒壞時一切皆空、故生福德因緣力。故十方風至相觸能持大水、水上有一千頭人、二千手足、名爲葦綱、是人臍中出千葉金色妙寶蓮華。其光明大如万日俱照。華中有人結跏趺坐。人復有无量光明、名曰梵天王。此梵天王心生八子、八子生天地人民也。

寶基御靈形文圖曰、天地開闢基有大光明、其中有精氣、名曰神亦曰心、介時爲万物應化神、假名号廣大慈悲大御神也。掛畏以天津御策用拖一、而天地與陰陽同節同和合敬合愛、顯五常文圖悟八子給。修應化身照神道可也。云云

豐受皇太神宮御鎭座本紀曰、天地初發之時、大海之中有一物、浮形如葦牙、其中神人化生、名曰天御中主神。故号豐葦原中國。亦因以曰豐受皇太神也。云云

大和葛城寶山記曰、蓋聞天地成意水氣變爲万物。天地十方風至相對相觸能持大水、水上神聖化生、有千頭二千手足、名常住慈悲神王、爲葦綱、是神人臍中出千葉金色妙寶蓮華。其光明大如万日俱照。花中有神人、結跏趺座。此神人復有无量光明、名曰梵天王。此梵天

養〔イ〕生

英〔イ〕葉

心柱ノ上〔イ〕日アリ

孔穎云々ノ上〔イ〕曰、繫辭易有太極是生兩アリ

王心生二八子一、八子生二天地人民一也。此名二天神一、亦稱二天帝之祖神一也。亦曰、水則爲二道之源流万物之父母一、故長二養森羅万像一。當レ知天地開闢嘗水變爲二天地一以降、高天海原有二獨化靈物一、其狀如二英芽一、不レ知二其名一。尒時靈物。中四理志天、神聖化生、名之曰二天神一、亦曰二大梵天王一。逮二于天帝代一名二靈物一稱二天瓊玉戈一、亦名二金剛寶杵一、爲二神人之財一。至二于地神代一謂二之天御量柱國御量柱一。因レ茲興二于大日本洲中央一名爲二常住慈悲心王柱一。此則正覺正智寶座也。故名二心柱一也。

易曰、上繫辭文闔レ戶謂二之坤一、闢レ戶謂二之乾一、一闔一闢謂二之變一、往來不レ窮謂二之通一、見乃謂二之象一、形乃謂二之器一、制而用之謂二之法一、利レ用出入民咸用之謂二之神一。是故易有二太極一是生二兩儀一、兩儀生二四象一、四象生二八卦一。八卦定二吉凶一、吉凶生二大業一。王弼註曰、太極即神也、兩儀天地也、四象四時也。孔穎達疏曰、太極謂二天地未分之前一、元氣混而爲二一氣一、既分之後陽氣居レ上爲レ天、陰氣居レ下爲レ地。居レ上者輕清、居レ下者重濁。亦曰、神无方而易无躰、一陰一陽之所レ成之者善也、成之者性也。

序卦曰、有二天地一然後有二萬物一、有二萬物一然後有二男女一、有二男女一然後有二夫婦一、有二夫婦一然後

有父子、有父子然後有君臣、有君臣然後有上下。云云

古今帝王年代暦曰、天地未形謂之太易、元氣始萌、謂之太初。形氣始端、謂之太始。形變有質、謂之太素。形質已具、謂之太極。五氣運通爲天地之二靈。清以陽發升而爲天、濁以陰凝降而爲地。天地形別謂之二儀。人生其間謂之三才。云云

周子曰、无極而太極。太極動而生陽、動極而靜。靜而生陰、靜極復動。一動一靜互爲其根。陰陽兩儀立焉。陽變陰合而生水火木金土。五氣順布四時行焉。五行一陰陽、陰陽一太極也。太極本无極也。五行之生各一其性。无極之眞二五合而凝、乾道成男坤道成女。二氣交感化生万物、變化无窮焉。

其根ノ下不分陰分陽兩儀立焉

陽ノ下囧也アリ

老子道經曰、有物混成、先天地生、寂兮寥兮、獨立而不改、周行而不殆、可以爲天下母。吾不知其名、字之曰道、強爲之名曰大。河上公註曰、我不見道之形容、不知當何以名之見万物皆從道之所生、故字之曰道也。不知其名強曰大、大者高而无上、羅而无外无不包容、故曰大。

亦曰、無名天地之始、有名万物之母。

亦曰玄牝之門是謂ニ天地根一。根无也、言鼻口之門、是乃天地之元之元、氣所從來也。

> 元之元氣、イ元氣ニ作ル

同德經曰、道生レ一 道始所レ生者一也 一生レ二 一生ニ陰與ニ陽也 二生レ三 陰陽生ニ天地人一也 三生ニ万物一 天地人共生ニ万物一也 昔之得レ一者天得レ一以清、地得レ一以寧、神得レ一以靈。

同述義曰、經云、天下之初生ニ於有一、有天下也。又曰、有生ニ於無一、无道也。一在ニ有無之間一、對レ道爲レ有對ニ天地一爲レ無、即德也。惟道德之寥廓、人物之有待。形雖ニ生滅一神固常在。故列子等說、混沌未 離即稱ニ万物已備一、則万物之性照ニ於混沌之前一、不レ可三万物之始於ニ開闢之後一、理必然矣。

> 之ノ下イ寒アリ

> 氣、イ本熱ニ作

淮南子曰、天地襲精爲ニ陰陽一、陰陽之搏精爲ニ四時一、四時之精爲ニ万物一、積陰之•氣反者爲レ水、積陽之•氣反者爲レ火。水雖ニ陰物一陽在ニ其中一、故水躰內明。火雖ニ陽物一陰在ニ其中一、故火躰內暗。木爲ニ少陽一、其躰亦含ニ陰氣一、故內空虛外有ニ花葉一、敷榮可レ觀。金爲ニ少陰一、其躰剛利殺性在レ外、內亦光明可レ照。土包ニ四德一、故其躰能兼ニ虛實一。

五行大義曰、經云、天生レ一始ニ於北方水一。地生レ二始ニ於東方木一。時生レ四始ニ於西方金一。五行生レ五、始ニ於中央土一。始天生レ一者因レ一而生レ天、非レ生レ一也。故云三一生レ二、二生レ三、三生ニ

万物一。地生レ二者亦因レ二而生レ地、因レ三生レ人、因レ四生レ時。五行皆出二一而生。數至二於五一土最在レ後、得レ五而生二五行一也。五行同出而異レ時者出雖二其親一有レ所二配偶一。譬如下人生亦同二元氣一而生、各出二一家一配爲二夫妻一化中生子息上。故五行皆相順而成也。五行同レ胎而異レ居有二前後一耳。

繋辭亦曰、天一地二天三地四天五地六天七地八天九地十。天數五地數五、二伍相得各有レ合。天數二十有五、地數三十、凡天地之數五十有五、此所下以成二變化一而行中鬼神上也。

元命包曰、水之爲レ言準也。陰化淖流施二潜行一也。故立レ字兩人交レ一以中出者爲レ水。一者數之始、兩人譬二男女一、陰陽交以起レ一也。水者五行之始焉元氣之湊液也。

三五暦記曰、未レ有二天地一之時、混沌狀如二雞子一。溟涬始牙濛鴻滋萠。淸輕者上爲レ天、濁重者下爲レ地、沖和氣者爲レ人。故天地含レ精万物化生。云云

易曰、陰陽不レ測之謂レ神。王曰、測レ陰非レ陰測レ陽非レ陽。故曰、陰陽不レ測、亦一陰一陽之義也。云云

老子述義曰、神者生之本也。形者生之具也。

再刊冊ニ作ル下モ同シキアリ

又曰、原二我性命一受二化於心一、心受二之於意一、意受二之於精一、精受二之於神一。形體消而神不レ毀、性命既而神不レ終、形躰易而神不レ變、性命化而神常然。

又曰、天地之間有二眞氣一、大和之氣是也。有二正氣一陰陽之氣是也。有二邪氣一錯亂之氣是也。人之行各有レ所レ感、感二眞氣一者爲二聖人一、感二正氣一者爲二賢人一、感二邪氣一者爲二小人一。感應之差千殊万端、異方之心而安有二紀量一哉。

莊子曰、純素之道唯神是守、守而勿レ失與レ神爲レ一。一之精通合二于天倫一。野語有之、曰衆人重レ利、廉士重レ名、賢士尙レ志、聖人貴レ精。故素也者謂二其无レ所二與雜一也。純也者謂二其不レ虧二其神一也。能體二純素一謂二之眞人一。

亦曰、古之人在二混芒之中一與二一世一而得二澹漠一焉。當二是時一也陰陽和靜鬼神不レ擾、四時得レ節万物不レ傷、群生不レ夭。人雖レ有レ知無レ所レ用之此之謂二至一一。

○本朝造化篇

國常立尊以還、天神六代之間形器未レ明、非レ有非レ無、或存或否。伊弉諾伊弉再之二尊下二巨靈

先ノ下イ以アリ書紀モ同ジ
渡（イ）度

之手、爲造化之首。久代承天祖之敕、賜天瓊矛、探蒼溟、其滴瀝之潮凝爲磤馭盧嶋。則以天瓊矛立於其上、稱天柱國柱是也。二神降居化作八尋殿、共住於是。然後生大八洲國、次生山川草木矣。

日本書紀曰、伊弉諾尊伊弉再尊立於天浮橋之上、共計曰、底下豈無國歟。廼以天之瓊（瓊玉也此云努）矛、指下而探之、是獲滄溟。其矛鋒滴瀝之潮凝成一嶋、名之曰磤馭盧嶋。二神於是降居彼嶋、因欲共爲夫婦產生洲國、便以磤馭盧嶋爲國中之柱、（柱此云美簸旨羅）而陽神左旋、陰神右旋。分巡國柱、同會一面。時陰神先唱曰、憙哉、遇可美少男焉。（少男此云烏等孤）陽神不悅曰、吾是男子、理當先唱、如何婦人反先言乎。事既不祥、宜以改旋。於是二神却更相遇。是行也陽神先唱曰、憙哉、遇可美少女焉。（少女此云烏等咩）因問陰神曰、汝身有何成耶。對曰、吾身有一雌元之處。陽神曰、吾身亦有雄元之處。思欲以吾身元處合汝身之元處。於是陰陽始遘合爲夫婦。及至產時、先以淡路洲爲胞、意所不悅。故名之曰淡路洲。廼生大日本（日本此云耶麻騰、下皆效此）豐秋津洲。次生伊豫二名洲。次生筑紫洲。次雙生隱岐洲與佐渡洲。世人或有雙生者象此也。次生越洲。次生大洲。次生吉備

ニ作ル書紀モ同ジ

八尋ノ下[イ]之アリ

卜合[イ]ト卜定ニ作ル

子洲。由是始起大八洲國之號焉。即對馬嶋壹岐嶋及處々小嶋皆是潮沫凝成者矣。亦曰水沫凝而成也。

一書曰、天神謂伊弉諾尊伊弉冉尊曰、有豐葦原千五百秋瑞穗之地、宜汝往脩之。廼賜天瓊戈。於是二神立於天上浮橋、投戈求地。因畫滄海而引擧之、即戈鋒垂落之潮結而爲嶋、名曰磤馭盧嶋。二神降居彼嶋、化作八尋殿、又化竪天柱。陽神問陰神曰、汝身有何成耶。對曰、吾身具成而有稱陰元者一處。陽神曰、吾身亦具成而有稱陽元者一處。思欲以吾身陽元合汝身之陰元。云尒即將巡天柱、約束曰、妹自左巡、吾當右巡。既而分巡相遇。陰神乃先唱曰、姸哉可愛少男歟。陽神後和之曰、姸哉可愛少女歟。遂爲夫婦先生蛭兒。便載葦船而流之。次生淡洲。此亦不以充兒數。故還復上詣於天具奏其狀。時天神以太占而卜合之、乃教曰、婦人之辭其已先揚乎、宜更還去。乃卜定時日而降之。故二神改復巡柱、陽神自左、陰神自右。既遇之時陽神先唱曰、姸哉可愛少女歟。陰神後和之曰、姸哉可愛少男歟。然後同宮共住而生兒、号大日本豐秋津洲。次淡路洲、次伊豫二名洲、次筑紫洲、次億岐三子洲、次佐度洲、次越洲、次吉備子洲。由此謂之

大八洲國矣。

神ノ柱

一書曰、二神立于天霧之中曰、吾欲得國乃以天瓊矛指垂而探之得破馭盧嶋。則拔矛而喜之曰、善乎國之在矣。

亦曰、乃以天瓊矛畫成破馭盧嶋。

亦曰、乃以天瓊矛探成一嶋、名曰破馭盧嶋。

一書曰、遂將合交而不知其術。時有鶺鴒飛來搖其首尾。二神見而學之、即得交道。

一書曰、先以淡路洲爲胞生大日本豐秋津洲。次伊豫洲、次筑紫洲、次雙生億岐洲與佐度洲。次越洲、次大洲、次子洲。

亦曰、先生淡路洲。次大日本豐秋津洲、次伊豫二名洲、次億岐洲、次佐度洲、次筑紫洲、次壹岐

嶋ノ洲

洲、次對馬嶋。

亦曰、以破馭盧嶋爲胞生淡路洲。次大日本豐秋津洲、次伊豫二名洲、次筑紫洲、次吉備子洲、次雙生億岐洲與佐度洲。次越洲。

亦曰、以淡路洲爲胞生大日本豐秋津洲。次淡洲、次伊豫二名洲、次億岐三子洲、次佐度洲、

次筑紫洲、次吉備子洲、次大嶋。

大嶋〔正〕大洲

亦曰、陰神先唱曰、妍哉可愛少男乎。便握陽神之手、遂爲夫婦生淡路洲。次生蛭兒。

舊事本紀曰、天祖詔伊弉諾伊弉再二尊曰、有豐葦原千五百秋瑞穗之地、宜汝往脩之。則賜天瓊戈而詔寄賜也。伊弉諾伊弉再二尊奉詔立於天浮橋之上、共計謂、有物若浮膏、其中蓋有國乎。廼以天瓊矛而探之獲滄海。則投下其矛而因畫滄海而引上之時、自矛末落垂滴瀝之潮凝結而爲嶋、名曰磤馭盧嶋矣。則以天瓊矛立於磤馭盧嶋之上以爲國中之天柱也。伊弉諾伊弉再二尊天降其嶋、則化竪八尋殿、共住同宮矣。伊弉諾尊問伊弉再尊曰、汝身有何成耶。伊弉再尊對曰、吾身者成成而有不成合處一處耶。伊弉諾尊詔曰、吾身者成々而有成餘處一處耶。故以吾身成餘處刺塞汝身不成合處以爲産國土如何。伊弉再尊對曰、然善矣。伊弉諾尊詔曰、吾與汝廻天御柱而行逢遘合。如此約束曰、汝者自左吾者自右廻逢。約竟分巡天柱同會一面矣。伊弉再尊先唱曰、喜哉遇可美少男焉。伊弉諾尊次對曰、喜哉遇可美少女焉。伊弉諾尊告伊弉再尊曰、吾是男子、理當先唱。而婦人先唱、事既不祥。雖然共爲夫婦而生子。因陰陽始遘合爲夫婦、產生之

相逢爲御合イ相逢而爲御娵

生イ出

路イ道

兒水蛭子。是子入葦船而流也。次生淡洲、亦是不入子例也。伊弉諾伊弉再二尊議曰、今吾所生之子不良、宜還復上詣於天具奏此狀。則共還復上詣於天而奏聞也。天祖詔以太占而卜合之詔曰、先舉婦言是不良乎、宜更亦改降。乃卜定時日而降矣。伊弉諾尊詔曰、吾與汝矣改往巡柱。吾矣自左汝矣自右巡柱、相逢爲御合。如此約束竟矣。伊弉諾尊先唱曰、妍哉可愛少女歟。伊弉再尊後和曰、妍哉可愛少男歟。伊弉諾尊問伊弉再尊曰、汝身有何成耶。伊弉再尊對曰、吾身具成而有不成合雌元之處耶。伊弉諾尊詔曰、吾身具成而有成餘雄元之處耶。思欲以吾身成餘處雄元之處刺塞汝身不成合雌元之處以爲産國土如何。伊弉再尊對曰、宜然善矣。於是雌雄初會欲將交會産生國土、而不知其術。于時鶺鴒飛來搖其首尾、二神見而學之、而得交通之術矣。先產生淡路洲爲胞意所不快、故曰淡路洲。即謂吾恥也。

謂淡道之穗之狹別。本書別所之文也。今依次書此矣。

次生伊豫二名洲、謂此嶋者身一而有面四、每面而有名。伊豫國謂愛止比賣、西南角。讚岐國謂飯依比賣、西北角。阿波國謂大宜都比賣、東北角。土佐國謂速依別、東南角。次生筑紫洲、以下文

坐ノ下不之アリ　姫ノ下不嶋アリ　詔不諸古事記寛永本ハ詔　塥イ本塩ニ作ル

隱岐之三子嶋列生。謂身一而有面四、毎面有名。筑紫國謂白日別。豐國謂豐日別。肥國謂書日別。日向國謂豐久士比泥別。次生壹岐洲、（下文態襲國、一云、佐渡嶋與或伊岐）謂天比登都柱。次生對馬洲（或津嶋）謂天之狹手依比賣。次生隱岐洲、謂天之忍許呂別。次生佐渡洲、謂建日別。次生大日本豐秋津洲、謂天御虛空豐秋津根別。因斯以先所生謂大八洲。然後還•坐時生吉備兒嶋、謂建日方別。次生小豆嶋、謂大野手止比賣。次生大嶋、謂大多麻止流別。次生•姫（或云女嶋）謂天一根。次生血鹿嶋、謂天之忍男。次生兩兒嶋謂天兩屋。合六嶋矣。凡產生十四嶋。其處處小嶋皆是水沫潮凝而成者也。

古事記曰、天神諸命以詔伊耶那伎命伊耶那美命二柱神、修理固成是多陀用幣流之國、賜天沼矛而言依賜也。故二柱神立天浮橋而投下其沼矛以畫者、塥許々袁々呂々畫鳴而、引上時自其矛末垂落塩之累積成嶋、是淤能基呂島、於其嶋天降坐而見立天之御柱見立八尋殿（此以下大概同舊事本紀說）

亦曰、御合生子淡道之穗之狹別嶋。次生伊與之二名嶋。此嶋者身一而有面四。毎面有名。故伊與國謂愛止比賣。讃岐國謂飯依比古。粟國謂大宜都比賣。土佐國謂速依別。次生

渡イ度

判注、天兩屋ノ下イ嶋アリ
海際イ匿海

隱岐之三子嶋一。亦名ニ天之忍許呂別一。次生ニ筑紫嶋一。此嶋亦身一而有ニ面四一。毎レ面有レ名。故筑紫國謂ニ白日別一、豐國謂ニ豐日別一、肥國謂ニ建日向日豐久士比泥別一、熊曾國謂ニ建日別一。次生ニ伊岐嶋一。亦名謂ニ天比登都柱一。次生ニ津嶋一、亦名謂ニ天之狹手依比賣一。次生ニ佐渡嶋一。次生ニ大倭豐秋津嶋一。亦名謂ニ天御虛空豐秋津根別一。故因ニ此八嶋一先所レ生謂ニ大八嶋國一。然後還坐之時、生ニ吉備兒嶋一。亦名謂ニ建日方別一。次生ニ小豆嶋一。亦名謂ニ大野手比賣一。次生ニ大嶋一。亦名謂ニ大多麻流別一。次生ニ女嶋一。亦名謂ニ天一根一。次生ニ知訶嶋一。亦名謂ニ天之忍男一。次生ニ兩兒嶋一。亦名謂ニ天兩屋一。自ニ吉備兒嶋一至ニ天兩屋一幷六嶋

和漢春秋曰、括地志云、和國武皇后改曰ニ日本一國在ニ百濟南海際一、依レ嶋而居。

日本私記曰、日本國從ニ大唐一東方万餘里、日出ニ東方一昇ニ于扶桑一、故云ニ日本一。

或書曰、日本國者自ニ大唐一而所レ名也。斯國自ニ大唐一東方万餘里居ニ于東極一。日出ニ東方一昇ニ于扶桑一、已近ニ日所一レ出。故云ニ日本一也。仍又号ニ扶桑國一也。

亦曰、舊說云、古者今謂ニ之倭國一、倭義取ニ稱レ我之音一、漢人所レ名之字也。此國之人昔到ニ彼國一、而問云、汝國之名稱如何。答曰、和奴國耶、和奴猶レ言レ吾也。自後謂ニ之倭奴國一也。通云ニ山

天皇[イ]皇興　日日本紀因ニ作ル可從　丘ノ下[イ]而アリ　近[イ]迮ニ作ルニヨル　蛉ノ下[イ]之アリ　古日本紀呫ニ作ル　國ノ下[イ]者アリ　石[イ]磯　本ノ下[イ]元字アリ

跡一。山謂二之耶麻一、跡謂二之土一。音登戶反。夫天地割判泥濕未レ慘、是以栖レ山往來、因多レ蹤、故曰二耶麻土一。又古謂二居住一爲レ止、言三止住據二於山一也。

日本書紀曰、神武天皇三十有一年夏四月乙酉朔、天皇巡幸、因登二腋上嗛間丘一、廻二望國狀一曰、姸哉國之獲矣。雖二內木綿之眞近〔迮イ〕國一猶二蜻蛉臀古一焉。由レ是始有二秋津洲之号一也。

神祇譜天圖曰、一云、日本國浦安國。亦曰、細戈千足國。亦曰、石輪上秀眞國。亦曰、玉垣內國。

天地麗氣府錄曰、于レ時爲三下化二衆生一天王如來天御中主尊詔二伊弉諸伊弉再一、宜二汝往修一レ之賜二天瓊矛一、而詔寄賜也。天柱尊奉レ詔立二於天浮雲上一共計謂、有二一物一若二浮膏一、其圓中有レ國乎。廼以二天瓊戈一〔天獨杵〕探之、獲二八葉滄海靑形一。則投二下其矛一而因畫二滄海一、而引上之時、自二矛末一垂落滴瀝之潮凝結爲レ島〔印明本●〕名曰二磤馭盧島一。〔娑婆世界〕則以二天瓊矛一指二下於磤馭盧嶋之上一、以爲二國中之天柱一也。天瓊杵謂二眞如界變成金剛寶杵一。々々變成二風氣一、々々轉成レ神、神變成レ生、生轉成二魂魄一、魂魄轉成二人躰一、枚八葉蓮臺坐自在安樂也。是如意赤玉德也。元神用化也。伊弉諸伊弉再二尊天降其嶋一化二竪八尋殿一、共住二同宮一矣。号曰二大日本高見國一。〔大日本者三光殿本名〕

攷イ文
日以冂
因以ニ冂
ヨルベ
シ

瑞相鎮守仙宮秘文曰、自レ弋落滴瀝之潮（如意寶珠表形）凝結爲レ嶋、名曰二磤馭盧嶋一矣。神明降跡國、万寶聚所歸之地也。日以爲名也。

則以二天之瓊文一（金剛智劍亦名天御量柱也）指二立磤馭盧嶋上一、以爲二國中之天之柱國之柱一也。此云心御柱自是起也。是諸尊能生本原、万法所歸物躰也。

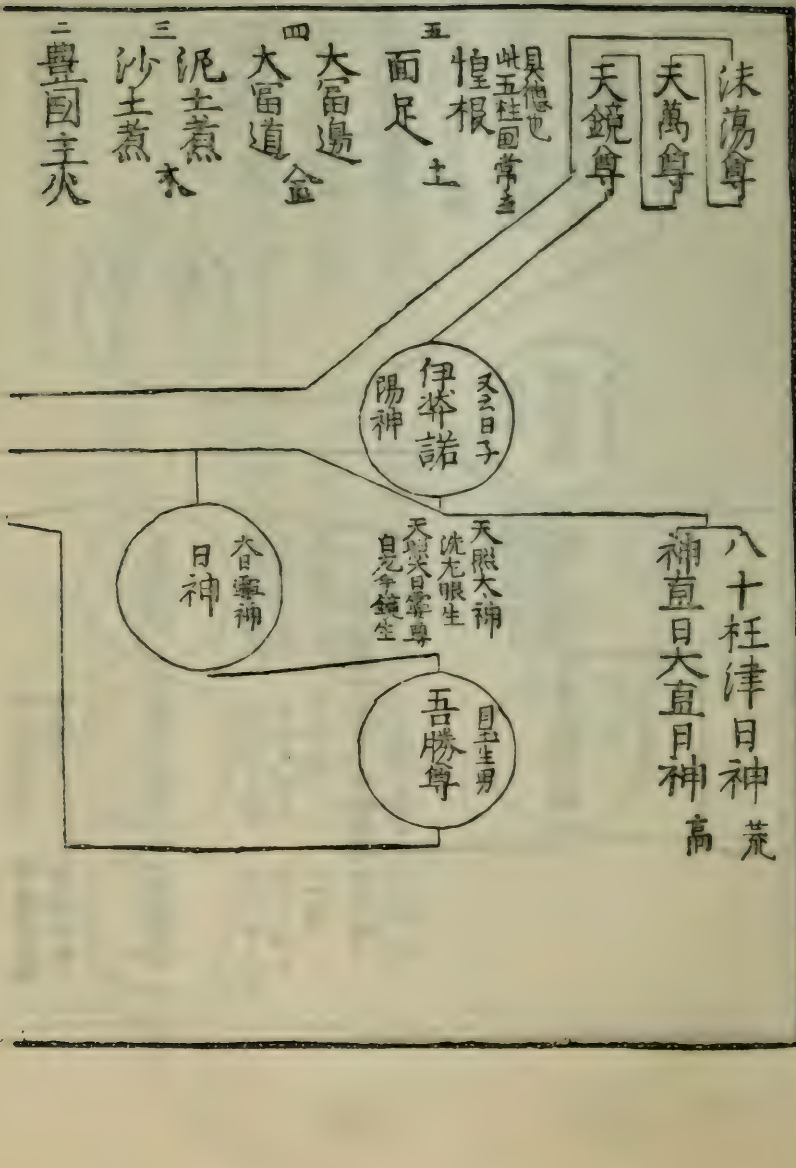
天地靈覺秘書曰、大日本國者大八洲也。惟大日靈貴治國也。亦八葉蓮花也。即金剛胎藏諸會大日宮世界國土也。凡世界自レ本本覺也。自レ本无明也。本又法界也。本是衆生也。本是佛也。本者法然道理也。

或書曰、磤馭盧嶋唵吽嚧々々、神明召請之國也。

神紀曰、天地初發之時、大海之中有二一物一、浮形如二葦牙一。其中神人化生。名曰二天御中主神一。故号二豐葦原中國一。

○神皇紹運篇

天祖勅ニ伊弉諾伊弉再尊ニ曰、有ニ豐葦原千五百秋瑞穗之地ニ宜ニ汝往修ニ之。天照太神勅ニ皇孫尊ニ曰、葦原千五百秋之瑞穗國、是子孫可レ王之地也。宜尒皇孫就而治焉。行矣。寶祚之隆當與ニ天壤ニ无レ窮。二祖勅命懇懃如レ此。雖レ經ニ幾千万世ニ不レ可レ渝者此盟也。皇孫降臨以來、紹運已九十余代、繼躰五十余世、積年一百七十九万四千五百有余歲焉。



沫蕩尊
天萬尊
天鏡尊
具德也
此五柱國常主
惶根
五
面足
土
大苫邊
四
大苫道
金
泥土煮
三
沙土煮
木
二
豊國主
火
又云日子
伊弉諾
陽神
八十枉津日神
荒
神直日大直日神
高
天照大神
洗左眼生
天照大日孁尊
自左手鏡生
大日孁神
日神
日生男
吾勝尊

一国狹槌水

一天八下霊

二天三降霊

三天万合霊

四天八百日霊

五天八十万魂霊

此五柱天御中主具徳也

国常立
天御中主

陰神
伊弉再
又云月子

日 天譲日国禅月 月

陽 天狹霧国禅霧 陰

豊秋津姫

皇御孫

治三十万八千五百三十三年

彦火々出見

母木花開耶山神女也

治六十三万七千八百九十二年

不葺合

母豊玉姫海神女也

治八十三万六千四十三年

合一百七十九万二千四百七十六年

月神
月夜見

自右手鏡生
月弓尊

洗右眼生月讀尊
持鏡時向生素盞尊
又洗鼻生

高皇産靈尊
思兼命
天手力雄命

神皇産靈尊
天太玉命

津速産靈尊
天兒屋命

神日本磐余彥天皇
母日玉依姫海童小女也
第一　治七十六年　神武
十五立爲太子　第四子
吾平津媛爲妃五十二歳即位

綏靖
第二治三十三年
第一子
神渟名川耳尊

安寧
三　治三十八年
第二子太子
磯城津彥玉手看

四 懿德
大日本彦耜友
治三十四年
第二子

五 孝昭
觀松彦香殖稻
治八十三年
太子第二子

六 孝安
日本足彦國押人
治百二年
第二子

七 孝靈
大日本根子彦太瓊
治七十六年
太子第二子

八 孝元
大日本根子彦國牽
治五十七年
太子

九 開化
稚日本根子彦大日日
治六十年
第三子

彦坐命 — 大筒城眞稚皇

十 崇神
御間城入彦五十瓊殖
治六十八年
第二子

活目入彦五十狹茅天皇
第三子
十一代垂仁
治九十九年
母御間城姫
大彦命女也

景行 大足彦忍代別 十二代 治六十年 第三子

日本武尊

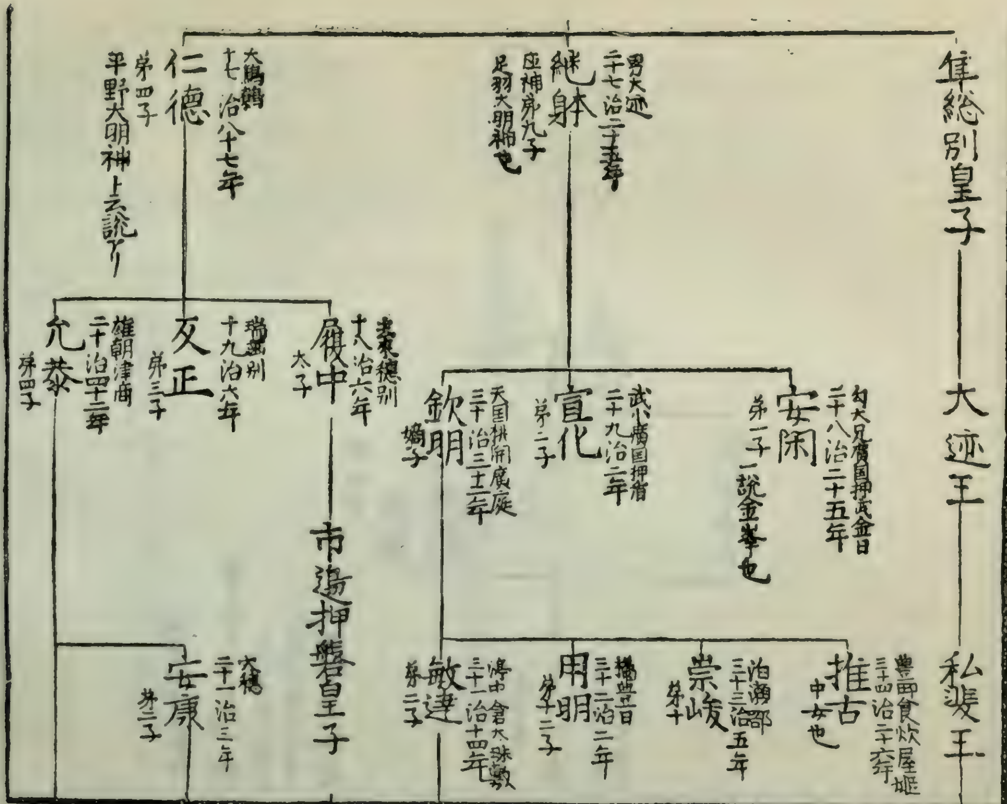
成務 稚足彦 十三 治六十年 第四子

仲哀 足仲彦 十四 治九年 第二子 氣比大明神是也

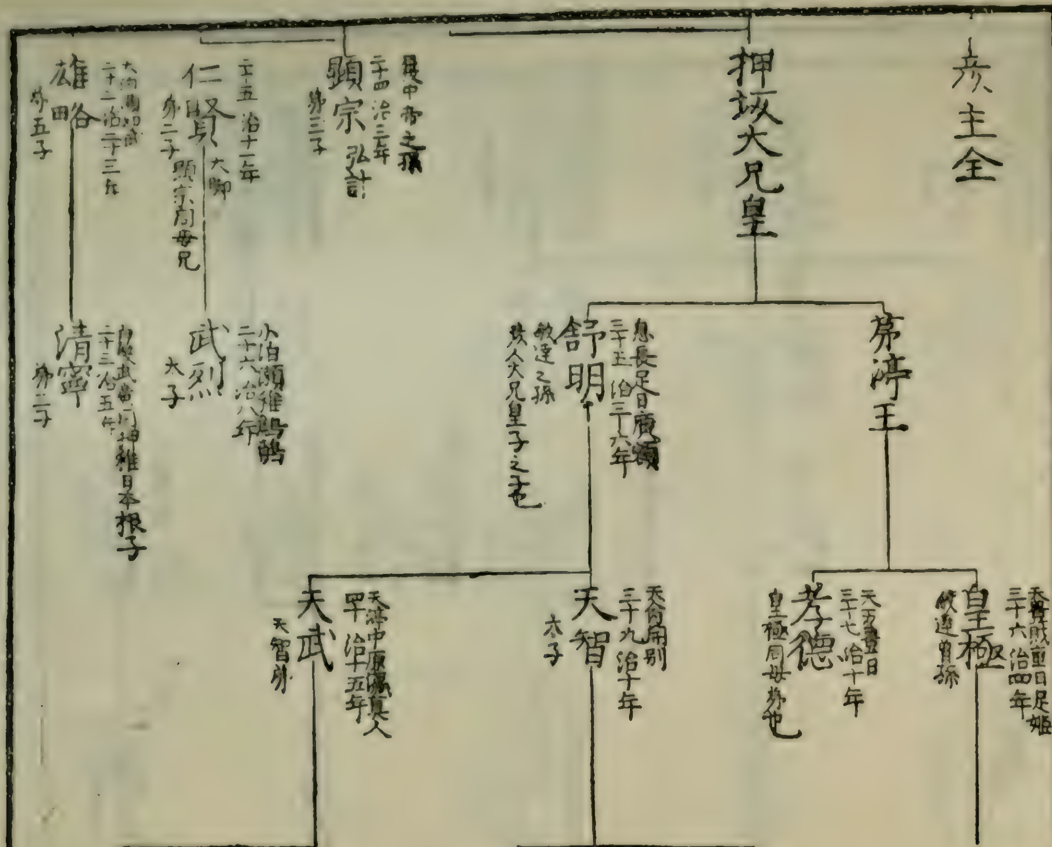
應神 十六 治四十一年 第四子 香椎大明神也

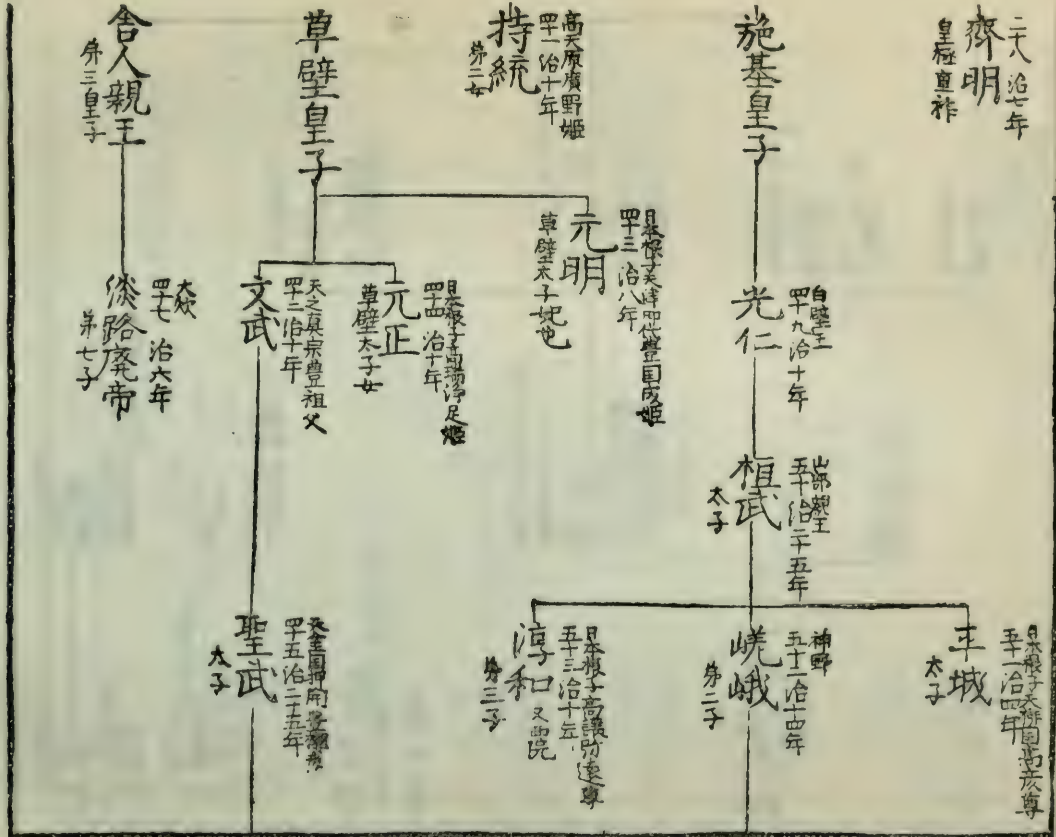
開化帝曾孫 氣長宿祢王之女也

神功 氣長足姫尊 十五代 治六十九年 香椎大明神是也



隼総別皇子
大迹王
私斐王
継躰
男大迹
二十七治二十五年
応神弟九子
足羽大明神也
仁徳
大鷦鷯
十七治八十七年
弟四子
平野大明神上云説アリ
履中
去来穂別
大治六年
太子
反正
瑞歯別
十九治六年
弟三子
允恭
雄朝津間
二十治四十二年
弟四子
市邊押磐皇子
安康
穴穂
二十一治三年
弟二子
安閑
勾大兄広国押武金日
二十八治二十五年
弟一子
一説金峯也
宣化
武小広国押盾
二十九治二年
弟二子
欽明
天国排開広庭
三十治三十二年
嫡子
推古
豊御食炊屋姫
三十四治三十六年
中女也
崇峻
泊瀬部
三十三治五年
弟十
用明
橘豊日
三十一治二年
弟二子
敏達
渟中倉太珠敷
三十治十四年
弟二子


押坂大兄皇
茅渟王
顕宗 弘計
履中帝之孫
二十四 治三年
弟三子
仁賢 大脚
二十五 治十一年
弟二子 顕宗同母兄
雄略 大泊瀬幼武
二十二 治二十三年
弟五子
清寧 白髪武廣国押稚日本根子
二十三 治五年
弟三子
武烈 小泊瀬稚鷦鷯
二十六 治八年
太子
舒明 息長足日廣額
三十五 治十三年
敏達之孫 彦人大兄皇子之子
皇極 天豊財重日足姫
三十六 治四年
敏達曽孫
孝徳 天万豊日
三十七 治十年
皇極同母弟也
天智 天命開別
三十九 治十年
太子
天武 天渟中原瀛真人
四十 治十五年
天智弟



齊明 皇極重祚 二十八 治七年
施基皇子
光仁 白壁王 四十九 治十年
桓武 山部親王 五十 治二十五年 太子
平城 日本根子天推国高彦尊 五十一 治四年 太子
嵯峨 神野 五十二 治十四年 弟二子
淳和 日本根子高譲弥遠尊 五十三 治十年 又西院 弟三子
持統 高天原廣野姫 四十一 治十年 弟二女
元明 日本根子天津御代豊国成姫 四十三 治八年 草壁太子妃也
草壁皇子
元正 日本根子高瑞浄足姫 四十四 治十年 草壁太子女
文武 天之真宗豊祖父 四十二 治十年
聖武 天璽国押開豊桜彦 四十五 治二十五年 太子
舎人親王 弟三皇子
淡路廢帝 大炊 四十七 治六年 弟七子

仁明　日本根子天璽豊聡慧尊　五十四　治十七年　第二子

文德　道康　五十五　治八年　第一子

清和　惟仁　五十六　治十八年　第四子

陽成　貞明　五十七　治八年　太子

光孝　時康　五十八　治三年　第三子

宇多　定省　五十九　治十年　第三子

醍醐　敦仁　六十　治三十三年　太子

孝謙　阿閉内親王　四十六　治十年　聖武女

稱德　法基尼　四十八　治五年　重祚

朱雀 寛明 六十一 治十六年 第十一子

村上 成明 六十二 治二十一年 第十四子

冷泉 憲平 六十三 治二年 第二子

圓融 守平 六十四 治十五年 第二子

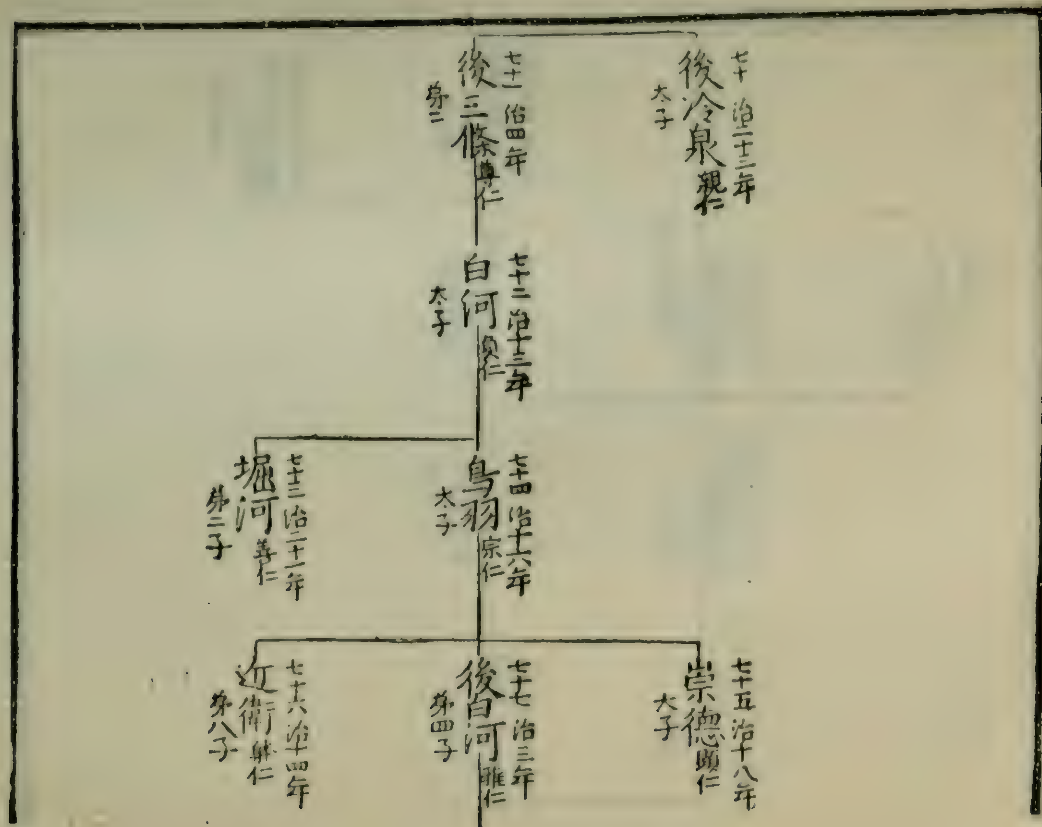
花山 師貞 六十五 治二年 太子

三條 居貞 六十七 治五年 第二子

一條 懷仁 六十六 治二十五年 太子

後朱雀 敦良 六十九 治九年 後一條弟

後一條 敦成 六十八 治二十年 第二子


七十 後冷泉 親仁 治二十三年 太子
七十一 後三條 尊仁 治四年 弟二
七十二 白河 貞仁 治十三年 太子
七十三 堀河 善仁 治二十一年 弟二子
七十四 鳥羽 宗仁 治十六年 太子
七十五 崇德 顕仁 治十八年 太子
七十六 近衛 體仁 治十四年 弟八子
七十七 後白河 雅仁 治三年 弟四子

二條 七十八 治七年 守仁 太子

六條 七十九 治三年 順仁 太子

高倉 八十 治十二年 憲仁 第四子

安德 八十一 治三年 言仁 太子

後高倉 代數不入 守貞親王也

後鳥羽 八十二 治十五年 尊成 初顯德院

土御門 八十三 治十二年 為仁 太子

順德 八十四 治十一年 守成 第三子

八十五 後堀川 治十二年 茂仁 太子

八十六 四條 治十年 秀仁 太子

八十七 後嵯峨 治三年 邦仁 第二子

八十八 後深草 治十三年 久仁 第二子

八十九 龜山 治十六年 恒仁 後深草同母弟也

九十 後宇多 治十三年 世仁 太子

九十一 伏見 治十一年 熙仁 第二子

花園 富仁 九十四 治十一年 第三子

後伏見 胤仁 九十二 治三年 太子

後醍醐 尊治 九十五 治十三年 第二子

後二條 邦治 九十三 治六年 太子

今上 九十六

神武—綏靖—安寧—懿德—孝昭—孝安

孝霊—孝元—開化（已上四代神与帝同殿宮物不分六年九月奉移天照大神於別）—崇神—垂仁（二十五年丁巳三月奉遷天照大神於五十鈴川上自神武元年至今一千三百）—景行

成務—仲哀—神功（應神之母開化五世孫）—應神—仁德—履中

反正—允恭—安康—雄略（二十二年戊午七月外宮自垂仁二十六年至今四百八十二年）—清寧—顕宗（市邊押磐皇子之子）

仁賢—武烈—繼體（五世孫）—安閑—宣化—欽明

敏達—用明—崇峻—推古—舒明—皇極

齊明　孝德　天智　天武　持統　文武

草壁皇子　元明　元正　聖武　孝謙　稱德　廢帝

光仁　桓武　平城　嵯峨　淳和　仁明

文德　清和　陽成　光孝　宇多　醍醐

朱雀　村上　冷泉　圓融　花山　一條

三條　後一條　後朱雀　後冷泉　後三條　白河

堀河 — 鳥羽 — 崇德 — 近衛 — 後白河 — 二條

六條 — 高倉 — 安德 — 後鳥羽 — 土御門 — 順德

後高倉院

後堀河 — 四條 — 後嵯峨 — 後深草 — 龜山 — 後宇多

伏見 — 後伏見 — 後二條 — 後醍醐 — 今上

元元集卷第一　終

元元集卷第二

○天神化現篇

天地初判神聖在於其中焉。号國常立尊。次國狹槌尊、次豊斟渟尊、次埿土煑沙土煑尊、次大戸之道大苫邊尊、次面足惶根尊、次伊弉諾伊弉冉尊、謂之天神七代矣。或云、形質未顯乘元氣而神、國常立尊是也。形質已具心生八子、天御中主神是也。其德各有五、國狹槌尊等五代地水火風空五大也。天八下尊等五靈水火木金土五行也。隱顯雖殊其實一也。至伊弉諾伊弉冉二神者、陰陽相合有夫婦之術。其初生國土及山川草木、其終生日神月神素戔烏尊。君臣父子之道吉凶禍福之端此時已著矣。

國常立尊——

天御中主尊——

日本書紀曰、開闢之初洲壤浮漂譬猶游魚之浮水上也。于時天地之中生一物、狀如葦牙便化爲神、号國常立尊。

此所大ニ異ナレリ

時ノ上ニ之アリ

一書曰、天地初判、一物在於虚中。狀貌難言。其中有化生之神。號國常立尊。亦曰國底立尊。亦云可美葦牙彥舅尊。亦云天常立尊。

又曰、高天原所成神名曰天御中主尊。

舊事本紀曰、于時天先成而地後定。然後於高天原化生一神、号曰天讓日天狹霧國禪月國狹霧尊。自厥以降獨化之外、倶生二代、耦生五代。所謂神世七代是也。一代、倶生天神、天御中主尊等云云。又曰天祖天讓日天狹霧國禪月國狹霧爲(餘カ)二代、倶生天神、天御中主尊。

古事記曰、天地初發之時、於高天原成神名天之御中主神。次高産巢日神、次神産巢日神、此三柱神者並獨神成坐而隱身也。次國稚如浮脂而久羅下那洲多陀用幣流時、如葦牙因萠騰之初而成神名宇摩志阿斯訶備比古遲神。次天之常立神。此二柱神亦獨神成坐而隱身也。上件五柱神者別天神。次成神名國之常立神等。云云

古語拾遺曰、天地割判之初、天中所生神名曰天御中主神。

神皇系圖曰、天先成而地後定、然後神聖生其中焉。号國常立尊矣。亦名無上極尊。亦名常住毘尊。謂惟三世常住妙心法界躰相大智也、故天神地祇本妙藏大千世界大導師是尊也。

鎭[イ]鎭　下同ジ
都ノ下[イ]神アリ
到ノ上[イ]則アリ
具[イ]俱

所レ形曰二天御中主神一。亦尸棄大梵天王。故則爲二大千世界主一矣。

裏書曰、尸棄大梵者初禪梵王也。此尸棄在二大千之中一故爲二娑婆世界主一非三統二鎭大千一云云。見二佛祖統記一。大千統鎭者摩醯首羅天王也。

天御中主尊（神風伊勢百船度會山田原大神坐）

元氣所化水德變成レ因爲レ果、而所露名二天御靈神一。由二水德一亦名二御氣都一。是水珠所成即月珠是也。亦云二大葦原中津國主豐受皇太神一也。凡以二一心一分二大千一、形レ躰顯レ言爲レ陰陽矣。蓋從二虛无一到二化變一、天月地水感應道交、故在二名字相一。

神皇實錄曰、天先成而地後定、然後於二高天原一化生一神号曰二天讓レ日（陽神日神）國禪レ月（陰神月神）皇神一。亦名二天御中主尊一也。天地具生神坐、是諸天降靈之本致、一切國王之大宗也。

亦曰、國常立尊無レ名無レ狀神、所化神名二天御中主神一也。謂大易者虛无也、因レ動爲二有之始一、故曰二大初一。有レ氣爲二形之始一、故曰二大始一。炁形相分生二天地人一也。大方道德者虛无之神。天地沒而道常在矣。原二性命一受二化於心一、心受二之意一、意受二之精一。精受二之神一。形躰消而神不レ毀、性命既而神不レ終。形躰易而神不レ變、性命化而神常然。因以名二國常立尊一以レ初爲二

天ノ上イ日アリ主ノ下イ神アリ

記ノ下イ日アリ

形ノ下云云トアリテ割注、同ヨリ始マル

常義一者也。

亦曰、應化神名二天御中主一、未ニ顯露一名ニ國常立尊一。亦稱ニ國底立尊一。又曰、天地開闢之始含ニ精氣ニ而應化之元神故初禪梵宮居焉。視ニ天下ニ而式ニ時候一、授ニ諸天子一。照ニ臨天地之間ニ而以ニ一水之德ニ利ニ万品之命一、故名曰ニ御氣都神ニ也。神語曰、御義理也。古語天津御氣國津御氣、亦曰ニ天狹霧國狹霧。是水氣易レ形、因以天氣下降、地氣上騰。天地和同草木萠動、惟水道德矣。

寶基本記曰、天地開闢基在ニ大光明一、其中有ニ精氣一、名曰レ神、亦曰レ心。尒時爲ニ万物應化神一、假名号ニ廣大慈悲大御神ニ也。見上

豐受皇太神御鎭坐本紀曰、天地初發之時、大海之中有ニ一物一、浮形如ニ葦牙一。其中神人化生、名曰ニ天御中主神一。故号ニ豐葦原中國一、亦因以曰ニ豐受皇太神ニ也。見上。

大田命傳曰、古記大海之中有ニ一物一、浮形 云同上文也。但此傳先述ニ伊弉諾伊弉再尊生ニ大八洲ニ之後、水德未レ露之時、以ニ瑞玉ニ捧ニ九宮ニ所化神號ニ止由氣皇太神ニ之由。然者異ニ上來諸記ニ神祇譜天圖同レ之

天口事書曰、天御中主神神語曰、天讓レ日國禪月皇神也。

太崇秘府曰、高天海原初出之故天御義理利舉之八重雲以天於坐而成神号ニ天讓日國禪月皇神一。

之ノ下〔イ〕名アリ
日〔イ〕名

亦御中主尊也。
太神宮秘文（弘法作）曰、天地之起在二水氣之用一。其清陽爲レ天、其重濁爲レ地。故從二上高天海一至二下根底一而同時成立也。尒時水氣高天海初出之故、謂二之天讓日國禪月天狹霧國狹霧尊一。（亦曰元氣諸神性、亦稟氣壞靈也。）是无レ有二身形一、但有二心性一。故曰二無色界一。（高天原寂上也。）
葛城寶山記曰、天御中主尊無宗無上而獨能化。故曰二天帝之神一、亦号二天宗廟一。到二天下一則以二三身即一無相寶鏡一崇二神躰一、祭二伊勢止由氣宮一也。
仙宮秘文曰、尸棄大梵天皇此曰二天御中主神一。亦名二伊勢國天照坐豐受皇太神宮一是也。
又曰、天地開闢之元神、故一大三千界主座也。
國狹槌尊
日本書紀曰、亦國狹立尊。
舊事本紀曰、二代俱生天神國常立尊。亦云二國狹立尊一、亦云二國狹槌尊一、亦云二葉木國一。豐國主尊。亦云二豐斟淳尊一、亦云二豐香節野尊一、亦云浮經野豐買尊、亦云豐齒別尊。別天八下尊獨化天神第一世之神也。

但ノ下不始アリ

神皇實錄曰、水藏戸也。

豐斟渟尊

日本書紀曰、亦曰豐組野尊、亦曰豐香節野尊、亦曰、浮經野豐買尊、亦曰、豐國野尊、亦曰豐齧野尊、亦曰葉木國野尊、亦曰見野尊。

亦曰、凡三神矣、（謂國常立尊、國狹槌尊、豐斟渟尊也。）乾道獨化、所以成此純男。

古事記曰、次成神名國之常立神。次豐雲上野神、（五神化生後也。但於國常立計七代也。）此二柱神亦獨神成坐而隱身也。

神皇實錄曰、火藏戸也。

埿土煑尊　沙土煑尊　埿（奴禮反深泥也）

日本書紀曰、埿土煑尊（埿土此云于毘尼）沙土煑尊（沙土此云須毘尼。亦曰埿土根尊、沙土根尊。）

舊事本紀曰、三代耦生天神、角樴尊、亦云角龍魂尊、妹活樴尊。別天三降尊獨化天神第二世之神也。

亦曰、四代耦生天神埿土煑尊、亦云埿土根尊。妹沙土煑尊、亦云沙土根尊。別天合尊、亦云天

次ノ下〔イ〕妹アリ

止ハ上ノ誤カ

一ノ上〔イ〕亦曰アリ

鏡尊、獨化天神第三世之神也。此記以ニ豐斟渟ニ混ニ第一世ー故有ニ此不同ー。

古事記曰、次成神名ニ宇比地迩止神、次須比智迩去神ー。

神皇實錄曰、木藏戸也。沙土煮尊稱生荒魂云云

大戸之道尊　大苫邊尊

日本書紀曰、大戸之道尊、一云大戸之邊　大苫邊尊、亦曰ニ大戸广彥尊、大戸广姬尊ー。亦曰ニ大富道尊大富邊尊ー。

●一書曰、男女耦生之神先有ニ埿土煮尊沙土煮尊ー。次有ニ角樴尊活樴尊ー、次有ニ面足尊惶根尊ー、次有ニ伊弉諾尊伊弉再尊ー。據ニ此一說ニ者略ニ大戸之道ー也。樴質力反

舊事本紀曰、五代耦生天神大苫彥尊、亦云ニ大戸之道ー、亦云ニ大富道ー、亦云ニ大戸摩彥　妹大苫邊尊ー、亦云ニ大戸之道ー、亦云ニ大富邊ー、亦云ニ大戸摩姬ー。　別天八百日尊獨化天神第四世之神也。

古事記曰、次角杙神、次妹活杙神、二柱　次意富斗能地神、次妹大斗乃弁神、據ニ此說ニ者畧ニ狹槌ニ之故埿土煮沙土煮尊大戸之道大苫邊尊之中間有ニ角杙活杙神ー也。

神皇實錄曰、金藏戸也。大苫邊尊稱生荒魂云云

面足尊惶根尊

夜ノ下囗上（小字）アリ
彌神皇實錄ニ亂坐ニ作ル
也ノ下囗故乾坤之道相參而化所以成此男女形矣アリ

日本書紀曰、亦曰、吾屋惶根尊、亦曰二忌橿城尊一、亦曰二青橿城根尊一、亦曰二吾屋橿城尊一。
舊事本紀曰、六代耦生天神青橿城根尊、亦云二沫蕩一、亦云二面足一。妹吾屋惶城根尊、亦云二惶根一、
亦云二蚊鴈姫一。別八十萬魂尊獨化天神第五世之神也。
古事記曰、次於母陀流神、次阿夜訶志古泥神。
神皇實錄曰、土藏戸也　惶根尊對耦荒魂云云
亦曰、件五代八柱天神光彌也。雖レ有二名相一未レ現二形躰一五大府中坐。故名二天地耦生神一也。
應化神名曰二天御中主神一、未二顯露一名二國常立尊一。亦稱二國底立尊一。天地之間稟レ氣之靈蒙二一大五種之神力一、受二天地父母之生身一以二言語一授二世人一也。依レ之得二一切智心一利二益万物生化一也。
神皇系圖曰、右八柱神者俱生之神、陰陽與耦生之神也。
一伊弉諾尊伊弉再尊　舊本或作冊誤歟
日本書紀曰、凡八神矣。私謂十煮至二伊弉再一也　乾坤之道相交而化、所以成二此男女一。自二國常立尊一迄二伊弉諾尊伊弉再尊一、是謂二神世七代一者矣。

從ノ上イ伊弉諾尊（天降陽神名日子也亦彌大自在天子）妹伊弉再尊（天降陰神名月子也亦彌大自在天子アリ

一書曰、伊弉諾尊伊弉再尊、此二神青橿城根尊之子也。

一書曰、國常立尊生天鏡尊、天鏡尊生天萬尊、天万尊生沫蕩尊、沫蕩尊生伊弉諾尊。沫蕩此云阿和那伎。

舊事本紀曰、七代耦生天神、伊弉諾尊、天降陽神。妹伊弉再尊、天降陰神。別高皇產靈尊、亦名高魂尊、亦名高木命。獨化天神第六世之神也。

古事記曰、次伊耶那岐神、次伊耶那美神。上件自國之常立神以下、伊耶那美神以前、并稱神世七代。上二柱獨神各云一代、次雙十神各合二神云一代也、

神皇實錄曰、耦生天神一代、天神第七代、陰陽定位万物形也。從國常立尊至惶根尊天神六代之間、則有名字未現尊形五位神坐。其後轉變而合陰陽有男女形、應化相生而尊心珠、神以清淨爲先神態興焉。伊弉諾伊弉再二尊承天御中主神詔、即以天瓊戈指立於磤馭盧嶋之上、以爲中國中之天柱。則化竪八尋殿共住生大八洲。次大小嶋合十四ケ嶋、其後處々小嶋皆是水沫潮凝而成者也。

神皇系圖曰、從國常立尊迄伊弉諾伊弉再尊謂天神七代矣。爰蒙天祖天御中主高產靈

天イ小
矛イ有寄セ
海イ溟
欲ノ上イ因アリ異興
田イ出
天イ乃ナシ
各イ名
可從
而ノ下不イ氣アリ可從

尊之宣命、天以授天獨矛、而諸尊立於天浮橋之上、二神共計曰、底下豈無國歟。遂以天獨矛指下而探之、獲滄海。其矛鋒滴瀝之潮凝成一嶋、名之磤馭盧嶋。二神於是降居此嶋、興八尋殿。社記曰、大日本高見國神籬曾田今此處也。欲共爲夫婦産生洲國及山川草木神等。又曰、伊弉諾尊則東方善持藏愛護普遍田賀神、梵所名之伊耶那天。伊弉再尊則南方妙法藏愛蓮行識神、亦名之伊舍那后也。自從自性淨妙藏乃至邪蛇地、爲下化衆生隨順方便故假所化義與生滅形依无爲行滿、即行正果大慈大悲神盧也。

葛城寶山記曰、伊弉諾伊弉再二柱尊、第六天宮主、大自在天王生。尒時任皇天宣、受天瓊戈、以咒術力加持山川草木、能現種種々未曾有事。往昔大悲願故而作日神月神照四天下矣。

天八下靈神　天三降靈神　天合靈神　天八百日靈神　天八十万魂神

舊事本紀曰、云云見上矣。

神皇實錄曰、府中五魂坐五靈五常各五大神也。作万生質也。又曰、地大水大火大風大空大也。如次　又曰作五柱神則受天地之精氣而形質具而未相離、名稱五大魂、是中府藏坐神也。

兒字不及舊事紀ニヨリテ補フ

故謂神者生之本形者生之具也。古語謂稱ニ獨化神一也。

神皇系圖曰、前五柱神者是生化五大尊座也。

高皇產靈神　神皇產靈神　津速產靈神

日本書紀一書曰、高天原所成神名ニ天御中主尊一。次高皇產靈尊、次神皇產靈尊。此云ニ美武須毘一

舊事本紀曰、七代耦生天神、別高皇產靈尊、亦名ニ高魂尊一、亦名ニ高木命一。獨化天神第　世之神也。兒天思兼命、天ニ降信濃國一阿智祝部等祖。

次天太玉命、忌部等祖。次天忍日命、大伴連等祖、亦云ニ神狹日命一。次天押立命、山代久我直等祖。

次神皇產靈尊、亦曰ニ神魂尊一。兒天御食持命、紀伊直等祖。次天道根命、河瀨造等祖。次天神玉命、葛野鴨縣主等祖。次生魂命、猪使連等祖。

次津速魂尊。兒市千魂命　(兒イ)興登魂命。兒天兒屋命、中臣連等祖。

　裏書曰、日本書紀云、中臣連遠祖、興台產靈兒天兒屋命。

次武乳遺命、添縣主等祖。

風イ川ニ作ル宮ノ下舊事紀主字アリ

天ノ上[イ]日アリ

神女[イ]女神：實錄同ジ

八行と九行[イ]前後ス但十行ノ祖也マデハ行ノ下ニアリ

次振魂尊、　兒前玉命、掃部連等祖。　次天忍立命、纏向神主等祖。

次萬魂尊、　兒天剛風（川イ）命　高宮神官（主舊アリ）等祖

古語拾遺曰、亦天地割判之初、天中所生神、名曰天御中主神。其子有三男。長男、高皇產靈神。古語、多賀美武須比、是爲皇親神留伎尊。即伴佐伯等祖也。　次津速產靈神。是爲皇神留彌尊、即中臣朝臣等祖也。　次神皇產靈神、此紀直祖也。　其高皇產靈神、所生之女子、名曰栲幡千千姬命、天津彥尊之母也。其男名天忍日命、大伴宿禰等祖也。　又男名天太玉命。齋部宿禰等祖也。

神皇實錄曰、高皇產靈神、皇祖神、故亦名高貴神。天御中主神長男也。　其女子云栲幡豐秋津姬命。皇孫尊母也。高貴神女。

次云思金命。智性靈坐、相殿姫神兒、云天手力雄神。

神皇產靈神。八咫烏并伊勢朝臣祖神也。

津速產靈神。中臣朝臣上祖也。　件三柱靈神者天御中主神所化神。名爲子、父子之道今時露現矣。

神皇系圖曰、高皇產靈神。皇祖神座　神皇產靈神。大神主祖神也　津速產靈神。天兒屋命祖神也　都八柱神者　私云天八下靈生津速產靈也　天御中主神變座之內獨化神也。明百億須彌、百億日月、百億四天下、而爲天地人民化生元祖也。

鏡、萬、蕩ノ下(イ)尊アリ日本紀ニモアリ

神鏡始ノ下(イ)元三光面月明…トアリ

明ノ上實錄靈アリ

天地麗氣府錄曰、論云、梵天王心生二八子一生　天地人民一。云々見上

天鏡尊

天萬尊

沫蕩尊

日本書紀曰、一書曰、國常立尊生二天鏡尊一。天鏡生二天萬尊一。天萬生二沫蕩尊一。沫蕩生二伊弉諾尊一。

舊事本紀曰、六代耦生天神、青橿城根尊。亦云二沫蕩一、亦云二面足尊一。

神皇實錄曰、天鏡尊、獨化神、天津水鏡神三座、是神鏡始二三光自明白此時也　天萬尊、獨化神、天鏡尊、次生也。伊弉諾靈明坐。　沫蕩尊、獨化神、天萬尊、次生也。伊弉再尊明坐。　件三柱神者、天御中主神出現之時、三魂鬼荒魂坐續命神坐云。(云イ)亦名稱二三諦明神一也。

大田命傳曰、凡神代靈物之義、猿田彥神謹白。夫天地開闢之後、雖二万物已備一、而莫レ照二於混沌之前一。因レ茲万物之化若存若亡。而下々來々志天自不レ尊。于時國常立尊所化神、以二天津御量支一地輪之精金白銅撰集、地大水大火大風大神變通和合給比天三才相應之三面眞經津寶鏡乎鑄造表給利。故此鑄顯神名二天鏡尊一。神明之道明現天文地理以存矣。

亦曰、祟神天皇御宇、止由氣皇大神天降坐、天照皇大神與一處雙坐。于時從天上御隨身之寶鏡是也。神代大御中主神授白銅鏡也。是國常立尊所化神、天鏡尊月殿居所鑄造鏡也。三才三面之内一面是也。今二面者天鏡尊子、天萬尊傳持之。次沫蕩尊、次伊弉諾伊弉再尊傳持天、神賀吉詞白賜。日神月神所化乃眞經津鏡是也。天地開闢之明鏡也。三才所顯之寶鏡也。常受之以清淨、求之以神心、視之以无相无住。因以爲神明之正躰也。今祟祭一面、荒祭宮御靈、一面多賀宮御靈坐也。

舊事本紀曰、伊弉諾伊弉再二尊、既生國竟、更生神十柱。

大事忍男神　　石土比古神

石巣比賣神　　大戸日別神

天之吹上男神　　大屋比古神

風木津別之忍男神　　海神 名大綿津見神 亦名少童神。

水戸神 名速秋津彥神、亦名速秋日神。　　速秋津姬神

復、速秋津彥速秋津姬二神。因河海持別生神十柱。

比煮女舊事紀比奢母ニ作ル止モ上

沫那藝神　沫那美神
頰那藝神　頰那美神
天之水分神　國之水分神
天之久比煮女〔比奢母カ〕道神　國之久比煮女〔比奢母カ〕道神
山神　名大山上〔上カ〕津見神、亦云大山祇神、　野神　名鹿屋姫神、亦云野椎神。
復、大山祇神、野椎神。因二山野一持別生神八柱。
天之狹土神　國之狹土神
天之狹霧神　國之狹霧神
天之闇戸神　國之闇戸神
大戸惑子神　大戸惑女神
復生レ神。名鳥之石楠船神。亦名天鳥船神。
復生二大宜都比女神一。
伊弉諾尊曰、我所レ生之國唯有二朝霧一而薫滿矣。乃吹撥之氣化爲レ神。是謂二風神一也。

風神 亦云級長津彦神、次級長戸辺神。
次生飢時兒 稲倉魂命
次生草祖 見上、再云如何 草姫 亦云野槌
次生水門神 同 速秋津日命
次生木神 句句廼馳神
次生土神 埴山姫命 亦云埴安姫神
然後悉生万物焉。
伊弉諾伊弉冉二尊共議曰、吾已生大八洲及山川草木。何不生天下之主者歟。
先生日神、号曰大日孁貴 亦云天照大神、亦云大日孁尊。
此子光華明彩明徹於六合之内。故二神喜曰、吾息雖多、未有若此霊異之兒。不宜久留此國。自當早送于天而授以天上之事。是時天地相去未遠。故以天柱挙於天上矣。
次生月神。号曰月讀尊。亦云月夜見、亦云月弓。

流〔イ〕ナシ舊事紀寛永本ニハアリ

諸〔イ〕再舊事紀モ同ジ可從

女ノ下〔イ〕神アリ

其光綵亞レ日。可三以配レ日而治二。故亦送二于天一矣。

次生二素戔烏尊一。

此尊可レ治二天下一。而此神勇悍以忍安。且常以二哭泣一爲レ行。故令二國内人民一以大折、復使三青山一變二枯山一。復河海悉泣乾矣。是以惡神之音如二狹蠅一流、皆滿。万物之妖如二吹風一皆登矣。

次生二蛭兒一

雖二已三歲一而脚尙不レ立。初二神巡レ柱之時、陰神先發二喜言一。既違二陰陽之理一。所以初終生二此兒一矣。

次生二鳥磐櫲樟船一。即以二此船一乃載二蛭兒一流放棄矣。

伊弉諾尊欲生二火之產靈迦具突智一。（亦云火燒速男神、亦云火火燒炭〔彥〕神。）之時、因二此子一美蕃登見レ炙而病臥矣。

且神避之時、悶熱懊惱。因爲レ吐。此化二爲神一。名曰二金山彥神一。

次金山姬神、次小便。亦尿、化二爲神一。名曰二罔象女一。次大便。亦屎。化二爲神一。名曰二埴山彥、埴山姬一。

火神：産時[イ]生火神：之時

五行ノ次ニ[イ]亦曰此文欄說在卷末

宙[イ]宙

乃ノ上[イ]即化「出」化

記之三柱矣アリテ乃以ナシ

生[イ]出

次生天吉葛。次生稚産靈日神。

此神之子謂豐宇氣比女神。火神軻遇突智、娶土神埴安媛、生稚皇産靈神。此神頭上生蠶與桑、臍中生五穀。火神軻遇突智産時、見焦即神退坐矣。

伊弉諾伊弉再二尊共所生嶋十四。神三十五柱也。

其磤馭慮嶋者非所生。亦水蛭子、亦淡嶋不入子例。

伊弉諾尊詔曰、吾欲生御宇之珍子。乃以左手持白銅鏡、則有化出之神、是謂大日靈尊。右手持白銅鏡、則有化生之神、是謂月弓尊。又廻首顧眄之間、則有化出之神、是謂素戔嗚尊。即大日靈尊及月弓尊、並是質性明麗。故使照臨天地。素戔嗚尊是性好殘害。故令下治根國。

日本書紀曰、次生海、次生川、次生山、次生木祖句句廼馳、次生草祖草野姬。亦名野槌。既而伊弉諾尊伊弉再尊共議曰、吾已生大八洲國及山川草木、何不生天下之主者歟。於是共生日神、号大日孁貴。

一書曰、天照大神、一書曰天照大日孁尊。

此子光華明彩、照徹於六合之内。故二神喜曰、日〔イナシ〕吾息雖多、未有若此靈異兒。不宜久留此國。自當早送于天、而授以天上之事。是時天地相去未遠、故以天柱擧於天上也。次生月神。

一書云、月弓尊、月夜見尊、月讀尊。

其光彩亞日、可以配日而治。故亦送之于天。次生蛭兒。雖已三歳、脚猶不立。故載之於天磐櫲樟船、而順風放棄。次生素戔烏尊。

一書云、神素戔烏尊、速素戔烏尊。

此神有勇悍以安忍。且常以哭泣爲行。故令國内人民多以夭折。復使青山變枯。故其父母二神勅素戔烏尊、汝甚無道、不可以君臨宇宙。固當遠適之於根國矣。遂逐之。

一書曰、伊弉諾尊曰、吾欲生御宙之珍子。乃以左手持白銅鏡、則有化出之神、是謂大日孁尊。右手持白銅鏡、則有化生之神、是謂月弓尊。又廻首顧眄之間、則有化神、是謂素戔烏尊。即大日孁尊及月弓尊、並是質性明麗。故使照臨天地。素戔嗚尊是性好殘害。故令下治根國。已上文同舊事本紀一説矣

宙〔イ〕寓

其ノ上[不]亦云火產靈アリテ六行ニ此六字ナシ

智イ鮑

一書曰、日月既生。次生蛭兒。此兒年滿三三歲一脚尚不レ立。初伊弉諾伊弉冉尊巡レ柱之時、陰神先發二喜言一、既違二陰陽之理一。所以今生二蛭兒一。次生二素戔烏尊一。此神性惡、常好二哭恚一。國民多死、青山爲レ枯。故其父母勅曰、假使汝治二此國一、必多レ所二殘傷一。故汝可三以馭二極遠之根國一。次生二鳥磐櫲樟船一、輙以二此船一載二蛭兒一、順レ流放棄。次生二火神軻遇突智一。時伊弉冉尊爲レ焦而終矣。其且レ終之間、臥生二土神埴山姬及水神罔象女一。即軻遇突智娶二埴山姬一生二稚產靈一。此神頭上生二蠶與一レ桑。臍中生二五穀一。亦曰、生二火產靈一。又生二天吉葛一。亦曰、悶熱懊惱因爲レ吐。此化二爲神一、名曰二金山彥一。次小便化二爲神一、名曰二罔象女一。次大便化爲神、名曰二埴山媛一。

一書曰、伊弉諾尊與二伊弉冉尊一共生二大八洲國一。然後伊弉諾尊曰、我所レ生之國唯有二朝霧一而薰滿之哉。乃吹撥之氣化二爲神一、号曰二級長戶邊命一。亦曰、級長津彥命、是風神也。又飢時生兒号二倉稻魂命一。又生二海神等一、号二少童命一。山神等号二山祇一。水門神等号二速秋津日命一。木神等号二句句廼智一。土神号二埴安神一。然後悉生二万物一焉。至二於火神軻遇突智之生一也、其母伊弉冉尊見レ焦而化去。

妹[イ]妹
吾乎延喜式ニモアリ
水延喜式ニモナシ

延喜式、鎭火祭祝詞曰、伊佐奈伎伊佐奈美命、妹妋二柱嫁繼給天、國乃八十國嶋乃八十嶋生給比、八百万神等乎生給弖、麻奈弟子爾火緒神生給弖、美保止被燒弖石隱坐弖、夜七夜晝七日、吾乎奈見給比曾、吾奈妋乃命止申給比支。此七日爾波不足弖、隱坐事奇弖見所行須時、火乎生給弖、御保止乎所燒坐支。如是時爾、吾名妹乃命乃、吾乎見給布奈止申乎、(吾乎イ)見阿波多志給比津止申給弖、吾名妹乃命波、上津國乎所知食倍志、吾波下津國乎所知牟止申給弖、石隱給弖、與美津枚坂爾至坐弖所思食久、吾奈妋乃命乃所知食上津國爾、心惡子乎生置弖來奴止宣弖、返坐弖、更生子。水神、水(イ水ナシ衍カ)匏、川菜、埴山姬、四種物乎生給弖、此心惡子乃心荒比留波、水匏埴山姬川菜乎持弖鎭奉禮止事教悟給支。

日本書紀一書曰、伊弉諾尊恨之曰、唯以二一兒一替二我愛之妹一者乎。則匍二匐頭邊一、匍二匐脚邊一而哭泣流涕焉。其淚墮而爲レ神、是卽畝丘樹下所居之神。號二啼澤女命一矣。遂拔二所帶十握劍一、斬二軻遇突智一爲二三段一、此各化二成神一也。

一書曰、其一段是爲二雷神一。一段是爲二大山祇神一。一段是爲二高龗一。復劍刃垂血、是爲二天安河邊所在五百箇磐石一也。卽此經津主神之祖矣。

一書曰、其血激染二於天八十河中所在五百箇磐石一。而因化二成神一、号曰二磐裂神一。次根裂神兒

磐筒男神。次磐筒女神兒、經津主神。復劍鐔垂血激越爲レ神、號曰二甕速日神一。次熯速日神、其甕速日命神、是武甕槌神之祖也。亦曰二甕速日命、次熯速日命、次武甕槌神也。

三四ノ南行イナシ

亦云、劍頭垂血激越爲二三神一。名曰二闇龗、次闇山祇、次闇罔象。是時斬血激灑染二於石礫樹草一。此草木沙石自含二火之緣也。

回イ廻

日本書紀　書曰、伊奘諾尊追二伊奘冉尊一入二於黃泉一而及之、共語時、伊奘冉尊曰、吾夫君尊何來之晚也。吾已飡泉之竈矣。雖然吾當寢息、請勿視之。伊奘諾尊不レ聽、陰取二湯津爪櫛一、牽二折其雄柱一以爲二秉炬一而見之者、則膿沸虫流。今世人夜忌二一片之火一、又夜忌レ擲レ櫛、此其緣也。時伊奘諾尊大驚之曰、吾不レ意到二於不須也凶目汚穢之國一矣。乃急走回歸。于時伊奘冉尊恨曰、何不レ用二要言一。今吾恥辱、乃遣二泉津醜女八人一（一云、泉津日狹女。）追留之。故伊奘諾尊拔レ劍背揮以逃矣。因投二黑鬘一、此即化二成蒲陶一。醜女見而採噉之、噉了則更追。伊奘諾尊又投二湯津爪櫛一。此即化二成筍一。醜女亦以拔噉之、噉了則更追。後則伊奘冉尊亦自來追。是時伊奘諾尊已到二泉津平坂一。一云、伊奘諾尊乃向二大樹一放尿、此即化成巨川一。泉津日狹女將レ渡二其水一之間、伊奘諾尊已至二泉津平坂一。故便以二千人所引磐石一塞二其坂路一。与二伊奘冉尊一相向而

泂門逢

立、遂建絕妻之誓。時伊奘再尊曰、愛也吾夫君、言如此者、吾當縊殺汝所治國民日將千頭。伊奘諾尊乃報之曰、愛也吾妹、言如此者吾則當產日將千五百頭。因曰、自此莫過。卽投其杖。是謂岐神也。又投其帶、是謂長道磐神。又投其衣、是謂煩神。又投其褌、是謂開囓神。又投其履、是謂道敷神。其於泉津平坂。或所謂泉津平坂者、不復別有處所。但臨死氣絕之際是之謂歟。所塞磐石是謂泉門塞之大神也。亦名道返大神矣。

一書曰、伊奘諾尊欲見其妹、乃到殯斂之處。是時伊奘再尊猶如生平出迎共語。已而謂伊奘諾尊曰、吾夫君尊請勿視吾矣。言訖忽然不見。于時闇也。伊奘諾尊乃擧一片之火而視之。時伊奘再尊脹滿太高、上有八色雷公。伊奘諾尊驚而走還。是時雷等皆起追來。時道邊有大桃樹。故伊奘諾尊隱其樹下。因採其實以擲雷者雷等皆退走矣。此用桃避鬼之緣也。時伊奘諾尊乃投其杖曰、自此以還雷不致來。是謂岐神。此本号曰來名戶之祖神焉。所謂八雷者、在首曰大雷、在胸曰火雷、在腹曰土雷、在背曰稚雷、在尻曰黑雷、在手曰山雷、在足上曰野雷、在陰上曰裂雷。

亦曰、伊奘再尊恥恨之曰、汝已見我情、我復見汝情。時伊奘諾尊亦慙焉。因將出返。于時

不直默歸而盟之曰、族離。又曰、不負於族。乃所唾之神号曰速玉之男。次掃之神号泉津事解之男。凡二神矣。及其與妹相鬪於泉平坂也、伊弉諾尊曰、始爲族悲及思哀者、是吾之怯矣。時泉守道者白云、有言矣。曰吾與汝已生國矣。奈何更求生乎。吾則當留此國。不可共去。是時菊理媛神亦有白事。伊弉諾尊聞而喜之。乃散去矣。

舊事本紀曰、伊弉再尊脹滿太高膿沸虫流。其上有八雷、居於頭者大雷、居於胸者火雷、居於腹者黒雷、居於陰者裂雷、居於左手者稚雷、居於右手者土雷、居於左足者鳴雷、居於右足者伏雷。

又曰、伊弉諾尊逃行、於後其八雷神副千五百之黄泉軍令追。尒拔所御佩十握劍、而後手布岐都々逃走矣。此間所生神同日本書紀（一イ）書等說、不更錄。粗拾遺而已。

又曰、伊弉諾尊逃到黄泉平坂、則立隱桃樹、採其桃子三箇待擊者、黄泉雷軍皆悉逃矣。凡厥用桃避鬼尤是其緣也。伊弉諾尊勅桃子曰、汝如助吾、於葦原中國所有顯見蒼生之落苦瀨而患惚之時可助。而賜名曰意富迦牟都美神。

又曰、伊弉再尊曰、吾當縊殺汝所治國民日將千頭矣。伊弉諾尊乃報曰、吾當產生日將千五

曰ノ下[イ]葬アリ可從　到ノ下[イ]於アリ可從　之身[イ]身之。可從　於[イ]ナシ

百頭ニ矣。是以一日千人必死矣、一日千五百人必生也。

又曰、伊弉再尊者葬下於出雲國與ニ伯耆國一堺比婆之山上也。

又曰、紀伊國熊野之有馬村焉。土俗祭ニ此神之魂一者、花時以レ花祭。復用ニ鼓吹幡旗一歌儛而祭矣。日本書紀據ニ後說ニ也

日本書紀一書曰、伊弉諾尊既還、乃追悔之曰、吾前到ニ不須也凶目汚穢之處一、故當滌ニ去吾之身濁穢一。則往至ニ筑紫日向小戸橘之檍原ニ而秡除焉。遂將レ盪ニ滌身之所一汚、乃興言曰、上瀬是太疾。下瀬是太弱。便濯ニ之於中瀬一也。因以生神号曰ニ八十枉津日神一。次將レ矯ニ其枉一而生神号曰ニ神直日神一。次大直日神、又沈ニ濯於海底一。因以生神号曰ニ底津少童命一。次底筒男命、又潛ニ濯於潮中一。因以生神号曰ニ中津少童命一。次中筒男命、又浮ニ濯於潮上一。因以生神号曰ニ表津少童命一。次表筒男命。凡有ニ九神一矣。其底筒男命、中筒男命、表筒男命、是卽住吉大神矣。底津少童命、中津少童命、表津少童命、是阿曇連等所祭神矣。然後洗ニ左眼一、因以生神号曰ニ天照太神一。復洗ニ右眼一、因以生神号曰ニ月讀尊一。復洗レ鼻、因以生神号曰ニ素戔嗚尊一。凡三神矣。已而伊弉諾尊勅ニ任三子一曰、天照太神者可ニ以治ニ高天原一也。月讀尊者可ニ以治ニ滄海原

神ノ下〔イ〕者アリ可從

時ノ下〔イ〕ニヨリ所ヲ補

內〔イ〕爪舊事紀ノ一本豆。內ハ誤ナリ

潮之八百重一也。素戔嗚尊者可三以治二天下一（也イ）。是時素戔嗚尊年已長矣。復生二八握鬚髯一、雖然不レ治二天下一、常以啼泣恚恨。故伊弉諾尊問之曰、汝何故恒啼二如此一耶。對曰、吾欲レ從二母於根國一只爲泣耳。伊弉諾尊惡之曰、可以任情行矣。乃逐之。

一書曰、伊弉諾尊勅二任三子一曰、天照太●神可三以御二高天之原一也。月夜見尊者可三以配レ日而知二天事一也。素戔嗚尊者可三以御二滄海之原一也。

一書曰、親見二泉國一、此既不祥。故欲レ濯二除其穢惡一、乃往見二粟門及速吸名門一。然此二門潮既太急。故還二向於橘之小門一而拂濯也。于時入レ水吹二生磐土命一、出レ水吹二生大直日神一。又入吹二生底土命一、出吹二生大綾津日神一。又入吹二生赤土命一、出吹二生大地海原之諸神一矣。

舊事本紀曰、到二日向橘之小門檍原一而祓二契御身一時（所レイ）成神十二柱。

投二棄御杖一時所成神名二衝立船戸神一。

投二棄御帶一時所成神名二道長乳齒神一。

投二棄御裳一時所成神名二時量師神一。

投二棄御衣一時所成神名二和●內良比能●守斯能神一。

守舊事。紀字可從

渡彥「イ」度｜彥ニ作ル｜ハ畧字、ノ印舊事。ハ那紀佐彥懸作リニナシ渡

投ニ棄御褌一時所成神名ニ道俣(チマタノ)神一。

投ニ棄御冠一時所成神名ニ飽坐之宇斯能(アキマスノウシノ)神一。

投ニ棄左御手之纒一時所成神名ニ奧疎(ヲキウトノ)神一。号曰奧津那藝佐渡彥神●。

次奧津甲斐辨羅(カヒワケラ)神。

投ニ棄右御手之纒一時所成神名ニ邊津神一。号曰邊津那藝佐彥神

次邊津甲斐辨羅神。

伊弉諾尊詔、上瀨者速、下瀨者弱、而初於中瀨潛(スヽギタマフ)滌之時(所イ)成神二柱。(神名イ)

八十禍津日神　次大禍津日神

復爲レ直ニ其禍一而(所イ)成神三柱。(神名イ)

神直日神　次大直日神　次伊豆能賣(イツノメ)神

復入レ水吹ニ生磐土命一　出レ水吹ニ生大直日神一

復入吹ニ生底土命一　出吹ニ生大綾津日神一

復入吹ニ生赤土命一出吹ニ生大地海原之諸神一矣。

所イナシ舊事記寛永本ハアリ

延喜式ハ九卷ナリ

吉ノ下不坐アリ

復沈濯於海底一時、因以生二三神一号曰二

底津少童命　次底筒男命一

復潜濯於潮中一時、因以生二三神一号曰二

中津少童命　次中筒男命一

復浮濯於潮上一時、因以生二三神一号曰二

表津少童命　次表筒男命一

凡有二九神一矣。

底津少童命　中津少童命　表津少童命

此三神者、阿曇連等齊祠筑紫斯香神。

底筒男命　中筒男命　表筒男命

此三神者津守連等齊祠住吉三所前神。

私云、延喜式十云、筑前國糟屋郡、志加海神社三座。並名神大。同國那珂郡住吉神社三座。並名神大。攝津國住吉郡住吉神社四座。並名神大。

此イ地ニ作可從

姓氏錄第十五云、右京神別下此(地イ)神
安曇宿禰海神綿積豐玉彥神子、穗高見命之後也。海犬養海神綿積命之後也。凡海連同神男穗
高見命之後也。
同十八云、攝津國神別地祇
凡海連安曇宿禰同祖阿曇犬養連海神大和多羅神三世孫穗已都久命後也。又云天孫津守宿禰
尾張宿禰同祖火明命之後也。

渡イ濟　舊事紀濟

伊弉諾尊滌ニ御身ニ之時、所生之神三柱洗ニ左御目ニ時、所成之神名ニ天照太御神ニ。洗ニ右御目ニ時
所成之神名ニ月讀命ニ。並坐五十鈴川上ニ。謂伊勢渡大神
私云、延喜式第四云、伊勢太神宮。太神宮三座、在ニ度會郡宇治鄉五十鈴川上ニ。天照太神一座
相殿二座。荒祭宮一座。太神荒魂、去ニ太神宮北二十四丈。月讀宮二座。去ニ太神宮北ニ三里ニ。
月夜見(命イ)一座。荒魂命一座。
洗ニ御鼻ニ之時、所成之神、名ニ速素戔嗚尊ニ。坐ニ出雲國熊野杵築神宮ニ矣。
私云、延喜式第十云、出雲國意宇郡熊野坐神社。名神大。同國出雲郡杵築大神。名神大。

召　舊事紀耶ニ作ル

後　舊事紀復ニ作ル本アリ　常ノ下不以アリ

伊弉諾尊大歡喜詔曰、吾生之子而於生終時得三貴子。召(〇即カ)其御頸珠之玉緒母由良介取由良迦斯而賜。詔其御頸珠名謂御倉板擧神。伊弉諾尊詔天照太神云、汝命者所知高天原矣詔寄賜矣。次詔月讀命、汝命者所知夜之食國矣詔寄賜矣。次詔素戔烏命云、汝命者所知海原矣詔寄賜矣。故各隨寄賜命所知看之中、速素戔烏命不治所命之國而、八擧鬚至于心前常泣矣。已上抄

亦曰、伊弉諾尊勅任三子曰、天照太神可以御治高天之原也。月讀尊者可以治滄海原之潮八百重也。後紀曰而知天宴所知夜之食國也。素戔烏尊者可以治天下後滄海之原也。素戔烏尊年已長矣。復生八握(握イ)鬚髯。雖然不治所寄天下、常啼泣恚恨。伊弉諾尊問之曰、汝何故恒啼如此耶。素戔烏尊對曰、吾欲從母國於根國、只爲泣耳。伊弉諾尊惡之曰、可以任情行矣、乃退矣。又伊弉諾尊勅素戔烏尊曰、何由不治所寄之國、泣啼之矣。素戔烏尊曰、欲罷妣國根之堅洲國、故泣矣。伊弉諾尊大忿怒詔曰、汝甚无道、不可以君臨宇宙、不可任此國、當遠適於根國逐逐矣。重抄錄

私云、本書八拳鬚云(至イ)心前常泣矣云云。伊弉諾尊詔曰、吾欲生御宇之珍子云云。見

神ノ下（イ）也アリ　路ノ下（イ）國アリ　岐（イ）使　尊ノ下（イ）者アリ

日本書紀、此文載二橿原秡除之前一、又此紀上文云、吾之生子而於二生終時一得二三貴一云云。然者橿原秡除後不レ可レ有二所生神一。然乃爛脫之說也。不レ可レ據レ文、而守次（歟イ）仍上六（止イ）已抄此焉

又曰、素戔烏尊請曰、吾今奉レ教將レ就二根國一。故欲下暫向二於高天原一與レ姉相見而後永退上矣。勅レ許之。乃昇二詣於天一也。伊弉諾尊功既至矣。德亦大矣。神功既畢、登二于天一報命。留二宅於日之少宮一。後（復イ）靈運當遷。是以構二幽宮於淡路之洲一、寂然長隱。亦坐淡路之多賀者矣。

日本書紀曰、於是素戔烏尊請曰、吾今奉レ教將レ就二根國一。云云同上矣。

私云　延喜式第十云、淡路津名郡、淡路伊佐奈岐神社。名神大。

是後伊弉諾尊神功既畢、靈運當遷。是以構二幽宮於淡路之洲一、寂然長隱者矣。亦曰、伊弉諾尊功既至矣。德亦大矣。於是登レ天報命。仍留二宅於日之少宮一。矣イ）

又一書曰、伊弉諾尊勅二任三子一曰、天照太神者可三以御二高天之原一也。月夜見尊可三以配レ日而知二天事一也。素戔鳴尊者可三以御二滄海之原一也。既而天照太神在二於天上一曰、聞二葦原中國有一

保食神。宜尒月夜見尊就候之。月夜見尊受勅而降。已到于保食神許。保食神乃回首嚮國、則自口出飯。又嚮海、則鰭廣鰭狹、亦自口出。又嚮山、則毛麁毛柔亦自口出。夫品物悉備、貯之百机而饗之。是時月夜見尊忿然作色曰、穢哉鄙矣。寧可以口吐之物敢養我乎。廼拔劍擊殺。然後復命、具言其事。時天照太神怒甚之曰、汝是惡神。不須相見。乃与月夜見尊一日一夜隔離而住。是後天照太神復遣天熊人往看之。是時保食神實已死矣、唯有其神之頂化爲牛馬。顱上生粟、眉上生蠒、眼中生稗、腹中生稻、陰生麥及大豆小豆。天熊人悉取持去而奉進之。于時天照太神喜之曰、是物者則顯見蒼生可食而活之也。乃以粟稗麥豆爲陸田種子、以稻爲水田種子。又因定天邑君。卽以其稻種、始殖于天狹田及長田。其秋垂穎八握莫々然甚快也。又口裡含蠒、便得抽絲。自此始有養蠶之道焉。

舊事本紀曰、伊弉諾伊弉冉二尊、相生火神迦具突智与土神埴安姫二神。相生稚皇産靈命。則頭生桑蠶、臍中生五穀矣。蓋保食神歟。

神皇實錄曰、伊弉諾伊弉冉二尊俱議曰、吾已生大八洲及山川草木。何不生天下之主者歟。

光ノ上囮大梵光明大梵下座時名之戸棄アリ

先生ニ日神ヲ号曰ニ大日孁貴ト。亦曰ニ天照大神ト、亦曰ニ大日孁尊ト、已下同日本紀　亦曰、天照大神奉レ擧ニ天上ニ故曰ニ大日孁尊ト也。亦曰ニ伊勢太神宮ト、日本國大廟坐。此皇帝宗祖万姓大元也。又曰、天照大神一座亦曰大日孁貴、亦曰天照皇帝。天照大神天地大冥之時、現ニ日月星辰像ヲ照ニ虚空ニ之代、神足履レ地而興ニ于天瓊戈於葦原中國ト、上去下來而鑒ニ六合ヲ治ニ天原ヲ耀レ天紘。

神皇系圖曰、二神共計曰、云云後生ニ一女日神三男、月神、蛭子、素戔嗚尊。或爲レ日爲レ月永懸而不レ落、爲レ神爲レ皇常存而无レ窮矣。

亦曰、大日孁貴天照皇神、神風伊勢國玉揆(クマキハル)五十鈴河上座。諸尊持ニ左手金鏡ヲ陰生、月神持ニ右手銀鏡ヲ陽生。日神因以日神月神所ニ化生ス也。謂火珠水珠ニ果由王變成ニ三昧ト、世界建立日月是座。凡上座時名ニ之戸棄ト光天女天照太神遍照智光法陰法陽兩部不二平等一心同殿同床二神卽一所座戸棄大梵尸棄光天女杵獨大王　私云杵獨王者皇孫尊名也、上文未レ詳ニ其義ヲ。

天地麗氣曰、伊弉諾伊弉冉二神尊持ニ左手金鏡ヲ陰生。月神持ニ右手銀鏡ヲ陽生。日神曰、日天子月天子是一切衆生眼目坐。故一切火氣變成レ日、一切水氣變成レ月、三界建立日月是也。于時以ニ寳都(フキツノ)鏡、邊都(ヘツ)鏡爲ニ國璽(シン)尊ト、而日神月神自匿ニ于六合ニ給矣。

都ノ下[イ]一アリ（へ鏡字ノ異字カ）　左[イ]右

露ノ下イ志アリ小字アリ右ヨセ

亦曰、御餘寶十種神財者瀛都鏡一面（天字在輪形 豐受皇大神）邊都鏡一面（地字圓形外緣八咫形天照皇太神）此外神財載ニ別篇一。

灌頂天女傳曰、瀛都邊都二面奉レ授ニ天孫ニ天降時、尒時一面淡路地八大竜神奉レ鎮、一面日向宮奉レ祟也。

太神宮秘文曰、大八洲開闢之後伊弉諾伊弉冉二柱尊曰、吾欲レ生ニ御寓之珍子一、乃以ニ左手一持ニ眞經津鏡一有ニ化出之神一、是謂ニ大日孁貴一。此御子光華明彩照ニ徹於六合之内一、故二神喜曰、吾息雖レ多未レ有 若此靈異之兒一、不レ宜ニ久留ニ此國一、自當早送ニ于天一而授以 天上事一。日神留ニ宅於日之少宮一、遍照ニ十方一而令レ利ニ衆生一能除ニ諸闇一焉。

大田命傳曰、一記曰、伊弉諾伊弉冉尊（古語曰伊舍那天伊舍那天姬）先生ニ大八洲一、次生ニ海神一、次生ニ河神一、次生ニ風神等一。以降雖ニ經ニ廻一万余歳一水德未レ露ニ天下一、天下飢餓。于時二柱神天之御量事以、瑞八坂瓊之曲玉手捧ニ九宮一所化御名号ニ止由氣皐太神一支、千變万化一水之德生ニ續命之術一、故曰ニ御饌都神一也。古語曰大海之中有ニ一物一、浮形如ニ葦牙一。其中神人化生、名曰ニ天御中主神一。故号ニ豐葦原中國一、亦因以曰ニ止由氣皐太神一也。故天地開闢之初、神寶日出之時、御饌都神天御中主尊與ニ大日孁貴天照太神一二柱大御神豫結ニ幽契一永治ニ天下一免、或爲レ日爲レ月永懸而不レ落、

草川(イ)河草

上ノ下[不]之アリ

或爲レ神爲レ皇常存而无レ窮矣。光華明彩照二徹於六合之内一矣。
神祇譜傳圖記曰、豐受皇太神、亦名倉稻魂神、亦曰御饌都神、亦曰天御中主神。天下飢餓、于時伊弉諾伊弉冉二柱尊以二瑞八坂瓊曲玉一捧二九宮一所化神名号二御饌都神一、亦名二豐宇介皇太神一也。或書曰、伊弉諾伊弉冉以二天鏡一捧二九宮一所化神名号二天御中主神一、是止由氣太神靈鏡也。
亦曰、日神謂二大日孁貴一、亦曰二天照太神一、亦号二天照大日孁尊一。伊弉諾尊曰、吾欲レ生二御寓之珍子一、乃以二左手一持二白銅鏡一。則有二化出之神一、是謂二大日孁貴一。神代上曰、伊弉諾伊弉冉尊共議曰、吾已生二大八洲國及山草川木一、何不レ生二天下之主者一歟。於是共生二日神一号二大日孁貴一。
云云
亦曰、天照太神與二豐受太神一則无上宗神而尊无レ与レ二。故異二於天下諸社一。是則天地精明之本源也、无相无爲之大祖也。故不レ起二佛見法見一以二无相鏡一假二表妙躰一也。和二其光一同二其塵一現二五濁國一隨二順群生一扶二持万物一使レ終二其性命一、誰撓二其神一豈于二其慮一乎。
葛城寶山記曰、伊弉諾尊伊弉冉尊此二柱尊者第六天宮主、大自在天王坐。尒時任二皇天宣一受二瓊戈一以二咒術力一加二持山川草木一、能現二種々未曾有事一。往昔大悲願故而作二日神月神一照二四天

下矣。

元亨釋書卷第二終

元元集卷第三

地神出生篇

諸神事隨所見錄此卷末

裏書

靈　國語云、在ㇾ男曰ㇾ覡、在ㇾ女曰ㇾ巫。郎丁切。說文云、巫以ㇾ玉事ㇾ神本作ㇾ靈。从二玉霝聲一、玉古玉字。大戴禮云、陽氣爲ㇾ精陰氣爲ㇾ靈、或从ㇾ巫作ㇾ靈。一云善也。古作ㇾ霝、霝从ㇾ言俗作ㇾ靈非ㇾ是。

孁　玉篇云、郎丁切、女也。廣韻同。今案可二與ㇾ靈通一。

○地神出生篇上

伊弉諾伊弉再二尊共議曰、吾已生二大八洲國及山川草木一、何不ㇾ生二天下之主者一歟。於是共生二日神一、号二大日孁貴一、光華明彩照二徹於六合之內一、二神喜授以二天上之事一。次生二月神一、光彩亞ㇾ日、故亦送二于天一。次生二蛭子一、次生二素戔烏尊一。一云、伊弉諾伊弉再尊曰、吾欲ㇾ生二御寓之珍子一、乃以二左手一持二白銅鏡一、有二化出之神一、是謂二大日孁尊一。右手持二白銅鏡一、有二化生之神一、是謂二

月弓尊。並是質性明麗、故使照臨天地。或書曰、二尊曰、吾欲生御宇之珍子、乃右手持白銅鏡、有化生之神、是謂大日孁貴。亦一云、二神持左手金鏡陰生、持右手銀鏡陽生。又廻首顧眄之間則有化神、是謂素戔嗚尊。一云、伊弉諸尊往至小戸橘之檍原、而祓除洗左眼、因以生神号天照太神、洗右眼因以生神号曰月讀尊。復洗鼻、因以生神号曰素戔嗚尊。凡三神矣。已而伊弉諸尊勅任三子曰、天照太神者可以治高天原也。月讀尊者可以治滄海原潮之八百重也。復可配日而知天事所知夜之食國也。素戔嗚尊者可以治天下也。此尊常以啼泣恚恨、故伊弉諸尊問之曰、汝何故恒啼如此耶。對曰、吾欲從母於根國、只爲泣耳。伊弉諸尊惡之曰、可以任情行矣、乃逐之。於是素戔烏尊請曰、吾今奉教將就根國、故欲暫向於高天原與姉相見而後永退矣。勅許之乃昇詣於天。于時天照太神疑其有黑心、因共誓約而生正哉吾勝々速日天忍穗耳尊。初素戔烏尊乞取天照太神所纒八坂瓊五百箇御統、濯於天眞名井、齧然咀嚼而吹弃之氣噴狹霧所生之神也。或云、素戔烏尊昇天也、櫛明玉命奉迎獻以瑞八坂瓊之曲玉、轉以奉日神、仍感其玉生吾勝尊。云云 此尊娶高皇產靈尊女栲幡豐秋津姬命、生天津彥々火瓊々杵尊。皇祖天照太神高皇產靈尊共議降爲豐葦原中國主、火瓊々杵尊娶大山祇

女木花開耶姬生彥火々出見尊。此尊娶海神女豐玉姬生彥波瀲武鸕鷀草葺不合尊。謂之地神五代也。

天照太神　伊弉諾伊弉冉尊子也

日本書紀曰、始素戔嗚尊昇天之時、溟渤以之鼓盪、山岳爲之鳴呴。此則神性雄健使之然也。天照太神素知其神暴惡、至聞來詣之狀、乃勃然而驚曰、吾弟之來豈以善意乎。謂當有奪國之志歟。夫父母既任諸子、各有其境。如何棄置當就之國、而敢窺窬此處乎。乃結髮爲髻、縛裳爲袴、便以八坂瓊之五百箇御統纏其髻鬘及腕、又背負千箭之靫與五百箭之靫、臂著稜威之高鞆、振起弓彇、急握劍柄、蹈堅庭而陷股、若沫雪以蹴散、奮稜威之雄誥、發稜威之嘖讓、而徑詰問焉。素戔嗚尊對曰、吾元無黑心。但父母已有嚴勅、將永就乎根國。如不與姉相見、吾何能敢去。是以跋涉雲霧、遠自來參、不意阿姉飜起嚴顏。于時天照太神復問曰、若然者將何以明爾之赤心也。對曰、請與姉共誓。夫誓約之中必當生子。如吾所生是女者、則可以爲有濁心。若是男者、則可以爲有清心。於是天照太神乃索取素戔嗚尊十握劍、打折爲三段、濯於天眞名井、齧然咀嚼而吹棄氣噴之

既乃訖先。紀同。可從。

狹霧所生神号曰田心姬。次湍津姬、次市杵嶋姬、凡三女矣。

一云、日神乃設丈夫武備、躬帶十握劍九握劍八握劍、● 既食所帶十握劍、生兒、号瀛津嶋姬。又食九握劍、生兒、号湍津姬。又食八握劍、生兒号田心姬。凡三女神矣。

一云、日神先食其十握劍、化生兒瀛津嶋姬命。亦名市杵嶋姬命、又食九握劍、化生兒湍津姬命。又食八握劍、化生兒田霧姬命。凡三女神矣。既而素戔嗚尊乞取天照太神髻鬘及腕所纏八坂瓊之五百箇御統、濯於天眞名井、齰然咀嚼而吹棄氣噴之狹霧所生神号曰正哉吾勝勝速日天忍穗耳尊。次天穗日命、是出雲臣土師連等祖也 次天津彥根命、是凡川內直山代直等祖也 次活津彥根命、次熊野櫲樟日命、凡五男矣。

一云、素戔嗚尊以其頸所嬰五百箇御統之瓊、濯于天渟名井、亦名去來之眞名井 而食之。乃生兒、号正哉吾勝勝速日天忍骨尊。次天津彥根命、次活津彥根命、次天穗日命、次熊野忍蹈命凡五男神矣。故素戔嗚尊既得勝驗。於是日神方知素戔嗚尊固无惡意。

一云、素戔嗚尊含其左髻所纏五百箇御統之瓊、而着於左手掌中、便化生男矣。則稱之曰、正哉吾勝、故因名之曰勝速日天忍穗耳尊。復含右髻之瓊、着於右手掌中、化生天穗日

命。復含嬰頸之瓊著於左臂中、化生天津彥根命。又自右臂中化生活津彥根命。又自左足中化生熯速日命。又自右足中化生熊野忍蹈命。亦名熊野忍隅命。其素戔嗚尊所生之兒皆已男矣。故日神方知素戔嗚尊元有赤心、便取其六男以爲日神之子、使治天原。云云

一云、素戔烏尊乃轠轤然解其左髻所纏五百箇御統之瓊綸、而瓊響瑲々濯浮於天渟名井、囓其瓊端置之左掌、而生兒正哉吾勝勝速日天忍穗根尊。復囓右瓊置之右掌、而生兒天穗日命。此出雲臣武藏國造土師連等遠祖也 次天津彥根命、此茨城國造額田部連等遠祖也 次活津彥根命、次熯速日命、次熊野大隅命、凡六男矣。

是時天照太神勅曰、原其物根、則八坂瓊之五百箇御統者是吾物也。故彼五男神悉是吾兒。乃取而子養焉。又勅曰、其十握劍者是素戔烏尊物也。故此三女神悉是尓兒、便授之素戔嗚尊。此則筑紫胸肩君等所祭神是也。

一云、(以ィ)日神所生三女神令降於筑紫洲。國(因ィ)教之曰、汝三神宜降居道中、奉助天孫、而爲天孫所祭也。

一云、三女神者使降居于葦原中國之宇佐嶋矣。今在海北道中、號曰道主貴。此筑紫水沼君等祭神是也。

一云、市杵嶋姬命是居于遠瀛者也。田心姬命是居于中瀛者也。湍津姬命是居于海濱者也。

一書曰、素戔嗚尊將昇天時、有一神號羽明玉。此神奉迎而進以瑞八坂瓊之曲玉。故素戔嗚尊持其瓊玉而到之於天上也。是時天照太神疑弟有惡心、起兵詰問。素戔嗚尊對曰、吾所以來者實欲與姉相見。亦欲獻珍寶瑞八坂瓊之曲玉耳。不敢別有意也。時天照太神復問曰、汝言虛實將何以爲驗。對曰、請吾與姉共立誓約。誓約之間生女爲黑心、生男爲赤心。乃掘天眞名井三處相與對立。是時天照太神謂素戔嗚尊曰、以吾所帶之劍今當奉汝。汝以汝所持八坂瓊之曲玉可以授予矣。如此約束共相換取。已而天照太神、則以八坂瓊之曲玉浮寄於天眞名井、嚙斷瓊端而吹出氣噴之中化生神、號市杵嶋姬命。是居于遠瀛者也。又嚙斷瓊中而吹出氣噴之中化生神號田心姬命。是居于中瀛者也。又嚙斷瓊尾而吹出氣噴之中化生神號湍津姬命。是居于海濱者也。凡三女神。於

是素戔嗚尊以所持劍浮寄於天眞名井、囓斷劍末、而吹出氣噴之中化生神、号天穗日命。次正哉吾勝勝速日天忍骨尊。次天津彥根命。次活津彥根命。次熊野櫲樟日命。凡五男神云介。云々

舊事本紀曰、素戔嗚尊將昇天之時有一神、号羽明玉。此神奉迎而進以瑞八坂瓊之曲玉矣。素戔嗚尊持其瓊玉而昇天之時、溟渤以之鼓盪、山岳爲之鳴呴。此則神性健雄使之然也。於天上誥之時、天鈿賣命見而告言於日神矣。云々　素戔嗚尊對曰、請與姉共誓約之中必當生子。如吾所生是女者可以爲有濁心。若是男者可以爲有淸心。則堀天之眞名井三處矣。天照太神與素戔嗚尊共隔天之安河而相對乃立、誓約曰、汝若有奸賊之心者、汝所生之子必女矣。如生男者朗以爲子令治天原矣。天照太神素戔嗚尊共誓約曰、吾以所纒之玉可以授汝矣。汝以所帶之劍可以授吾矣。如此約束相共換取已畢。天照太神乃以素戔烏尊所帶十握劍（亦云十握劔爲三段化生三神）振濯於天眞名井（亦云去來眞那井）。齰然咀嚼而吹棄氣噴狹霧之中化生　女之神。十握劍化生之神号曰瀛津嶋姬命。（亦云田心姬亦云田霧姬）九握劍化生之神号、曰湍津嶋姬命。八握劍化生之神号曰市杵嶋姬命。素戔嗚尊以天照太神御手所纒髻鬘

右〔實〕左　六ノ下〔イ〕神アリ　者ノ下〔イ〕是アリ　與〔イ〕興下同　嶋〔イ〕ナシ

八坂瓊五百箇御統玉、濯浮於天眞名井、齧然咀嚼而吹弃氣吹狹霧之中化生六男之神、乃含左御髻玉、左手掌中化生之神号曰正哉吾勝勝速日天忍穗別尊。復含右御髻玉、右手掌中化生之神号曰天穗日命。復含左御髻玉著於左臂中化生之神号曰天津彥根命。復含右御髻玉著於右臂中化生之神号曰活津彥根命。復含左御手腕玉、自左足中化生之神号曰熯速日命。復含右御手腕玉、自右足中化生之神号曰熊野櫲樟日命。天照太神勅曰、原其物根、則玉者是吾物也。故化生六男悉是吾兒。乃取而子養令治天原也。其劍者汝物也。故吾所生三女是尒兒也。授素戔烏尊、則降居于葦原中國也。

亦云、三女宜降居於筑紫國宇佐嶋、在北海道中、号曰道主貴。因敎之曰、奉助天孫而爲天孫所祭。則宗像君所祭之神。一云、水沼君等祭神也。瀛津嶋姫命者（是イ）所居于遠瀛者、此田心姫命也。邊津嶋姫命者（是イ）所居于海濱者、此湍津嶋姫命也。中津嶋姫命者（是實）所居于中嶋者、此市杵嶋姫命也。

亦云、田心姫命亦名興津嶋姫命、亦瀛津嶋姫命、坐宗像興津宮也。市杵嶋姫命亦名佐依姫命、亦云中津嶋姫命、坐宗像中津宮也。湍津姫命亦名多岐姫命、亦名邊津嶋姫命、坐宗像

七行ト八行ノ間ノ欄外ヨリ素戔烏神爲行无状也、日神閉磐戸而幽居ノ一行アリ
齊〔イ〕齋下ニモアリ

邊津宮一也。

延喜式第十云、筑前國宗像郡宗像神社三座 亦〔並イ〕名神大云々

古語拾遺曰、素戔烏神欲レ奉二辭日神一、天照太神 〔曰〕〔〇曰ナシ〕昇レ天之時、櫛明玉命 私云、舊事本紀曰、伊弉諾尊兒也云々 奉レ迎獻以二瑞八坂瓊之曲玉一。素戔烏神受之轉奉二日神一。仍共約誓即感二其玉一、生二天孫吾勝尊一。是以天照太神育二吾勝尊一特甚鍾愛、常懷二腋下一。稱曰二腋子一。今俗號二稚子一云二和哥古一是轉語也。

神皇實錄曰、云云一同二古語拾遺文一也。

神皇系圖曰、正哉吾勝々速日天忍穂耳尊者 天照太神太子。釰霧之化生云云

日本書紀曰、是後素戔嗚尊之爲行也甚无狀。何則天照太神以二天狹田長田一爲二御田一。時素戔嗚尊春則重播種子、重播種子、此云二璽枳广枳一。且毀二其畔一、毀此云波那豆。秋則放二天班駒一使レ伏二田中一。復見二天照太神當新嘗時一、則陰放二戻於新宮一。又見下天照太神方織二神衣一居中齋服殿上、則剝二天班駒一穿二殿甍一而投納。是時天照太神驚動、以レ梭傷レ身。由レ此發慍乃入二于天石窟一、閉二磐戸一而幽居焉。故六合之内常闇而不レ知二晝夜之相代一。

一書曰、是後稚日女尊坐于齋服殿一、而織二神之御服一也。素戔嗚尊見之、則逆二剝班駒一投二

意ノ傍訓ココヲは本のまゝ

入之於殿內。稚日女尊乃驚而墮機以所持梭傷體而神退矣。故天照大神謂素戔嗚尊曰、汝猶有黑心。不欲與汝相見。乃入于天石窟而閉著磐戶焉。云云

一書曰、日神尊以天垣田爲御田。時素戔嗚尊、春則塡渠毀畔、又秋穀已成則冒以絡繩。且日神居織殿時、則生剝班駒納其殿內。凡此諸事盡是無狀。雖然日神恩親之意不慍不恨。皆以平心容焉。及至日神當新嘗之時、素戔嗚尊則於新宮御席之下、陰自送糞。日神不知徑坐席上。由是日神擧體不平。故以恚恨、廼居于天石窟閉其磐戶。

一書曰、是後日神之田有三處焉。號曰天安田、天平田、天邑幷田。此皆良田。雖經霖旱無所損傷。其素戔嗚尊之田亦有三處。號曰天樴田、天川依田、天口鋭田。此皆磽地。雨則流之、旱則焦之。故素戔嗚尊妬害姉田。春則廢渠槽、及埋溝、毀畔、又重播種子。秋則捶籤伏馬。凡此悪事曾无(无イ)息時。雖然日神不慍、恒以平恕相容焉。云云。至於日神閉居于天石窟也。云云

舊事本紀曰、天照太神天垣田爲御田。亦御田有三處。同上 素戔烏尊田有三處。同上 素戔烏尊

悉［イ］平心
女［イ］姫
次行［同］

耕畝［イ］耕種
蠶織の下［イ］ハタヲルとあり

之爲行也。甚以无狀。妬害姉田之時、春則重播種子、且毀其畔、揷籤、放樋、壓渠埋溝也。秋則放天班駒、使伏田中、胃以絡繩、揷籤、伏馬也。復見天照太神甞大甞亦新甞時。則於新宮御席之下放尿送糞。日神不知徑坐席。凡厥諸事一日无息、盡是无狀。雖然日神思親之意、不慍、不恨、皆以悉容焉。天照太神方織神衣居齊服殿。則天班駒生剝逆剝穿殿甍而投納之時天照太神驚動以梭傷身矣。一說織女稚日女尊乃驚而墮機、以所持梭傷躰而神退矣。其稚日女尊者天照太神之妹也。天照太神詔素戔烏尊曰、汝猶有黑心。不欲與汝相見。乃入于天窟閉磐戸而幽居焉。故高天原皆闇、亦葦原中國、六合之內常闇不知晝夜之殊。故万神之聲、如狹蠅鳴万妖悉發、往常世國。故群神憂迷、手足罔措。
凡厥庶事燎燭而辨矣。

古語拾遺曰、其後素戔烏尊（神イ）奉爲日神行甚无狀。種々凌侮、所謂毀畔、古語、阿波那知 埋溝、古語、美曾宇女 放樋、古語、斐波那知 重播、古語、志伎麻岐 刺串、古語、久志佐志 生剝、逆剝、屎戸 如此天罪者、素戔烏神當日神耕畝之節竊往其田刺串相爭。重播種子、毀畔、埋溝、放樋。當新嘗之日以屎塗戸、當織室之時逆剝生駒以投室內。此天罪者今中臣祓詞也。蠶織之源起於神代也。于時天照太神赫怒入于天石窟、閉磐戸而幽居焉。尒乃六合常闇晝夜不分。群神愁迷手足罔措。凡厥庶事燎燭而

于時ヨリ八紀ノ文ナリ
會ノ下匹合アリ
其ノ下不祈アリ
祈イナシ

辨。于時八十万神會於天安河邊、計其可禱之方。故思兼神深謀遠慮、遂聚常世之長鳴鳥使互長鳴。亦以手力雄神立磐戸之側、而中臣連遠祖天兒屋命、忌部遠祖太玉命、掘天香山之五百箇眞坂樹、而上枝懸八坂瓊之五百箇御統、中枝懸八咫鏡、（一云、眞經津鏡）下枝懸青和幣白和幣、相與致其祈禱焉。又猿女君遠祖天鈿女命、則手持茅纏之矟、立於天石窟戸之前、巧作俳優、亦以天香山之眞坂樹為鬘、以蘿為手繦、而火處燒、覆槽置、（覆槽、此云于該）顯神明之憑談。是時天照太神聞之曰、吾比閉居石窟、謂當豐葦原中國必為長夜。云何天鈿女命嘘樂如此者乎。乃以御手細開磐戸窺之。時手力雄神則奉承天照太神之手、引而奉出。於是中臣神忌部神則界以端出之繩、（左繩端出、此云、斯梨俱梅儺波）乃請曰、勿復還幸。

一云、會八十万神於天高市而問之。時有高皇產靈之息思兼神者、有思慮之智。乃思而白曰、宜圖造彼神之象而奉招禱也。故即以石凝姥為冶工、採天香山之金以作日矛。又全剝眞名鹿之皮以作天羽鞴。用此奉造之神、是則紀伊國所坐日前神也。

一云、于時諸神憂之、乃使鏡作部遠祖天糠戸者造鏡。忌部遠祖太玉者造幣、玉作部遠祖豐玉者造玉。又使山雷者採五百箇眞坂樹八十玉籤。野槌者採五百箇野薦（鷹イ）八十玉籤。

河ノ下囝々アリ

瑞囝端共ニ誤ニテ寶ニヨルベシ

於ノ上ニ囝其瑕アリ

凡此諸物皆來聚集。時中臣遠祖天兒屋命、則以神祝祝之。於是日神方開磐戸而出焉。是時以鏡入其石窟者、觸戸小瑕。其瑕於今猶存。此卽伊勢崇秘之大神也。

一云、諸神遣中臣連遠祖天兒屋命（興台産靈兒）、而使祈焉。於是天兒屋命掘天香山之眞坂木、而上枝懸以鏡作遠祖天抜戸兒所作八咫鏡、中枝懸以玉作遠祖天明玉（伊弉諾尊兒）所作八坂瓊之曲玉、下枝懸以粟國忌部遠祖天日鷲所作木綿。乃使忌部首遠祖太玉命執取、而廣厚稱辭祈啓矣。于時日神聞之曰、頃者人雖多請、未有若此言之麗美者也。乃細開磐戸而窺之。是時天手力雄神侍磐戸側、引開之者、日神之光滿於六合。故諸神大喜。

舊事本紀曰、于時八百万神於天八湍河原神會集、而議計其可祈謝之方矣。高皇產靈兒思兼神、有思慮之智、深謀遠慮、議曰、聚常世之長鳴鳥、遞使長鳴。遂聚令鳴矣。復宜當造日神御像奉招祈禱矣。復鏡作祖石凝姥命爲冶工、則採天八瑞河之川上天磐堅石、復全剝眞名鹿皮、以作天之羽鞴矣。復採天金山之銅、令鑄造日矛。此鏡少不合。則紀伊國所坐日前神是也。復使鏡作祖天糠戸神（石凝姥命之子也）採天金山之銅、使當造日像之鏡。其狀美麗矣。而觸窟戸有小瑕、於今猶存。卽是伊勢崇秘大神。所謂八咫鏡、亦名眞經津鏡是也。

令ノ下 宜ヤ一 リ 卒イ譯 綏宜後 造淺 謂器器 云こ八 謂一大 小量普 器類 名ト 延本ニ アルニ ヨリベ シ但ン 頭彩ハ 割注カ 太ノ上 宜天ア リ 突ルナ シ之 時ニ作 ル

復令玉作祖櫛明玉神、(伊弉諾尊之子)作八坂瓊之五百箇御統之珠矣。復令天太玉神率諸部神造幣者。復令麁績祖長白羽神種麻以爲青和幣。(今俗稱白羽此其縁也。)復令津咋見神種殖穀、木綿、以作白和幣。(並一夜蕃茂)復令粟忌部祖天日鷲神造木綿者、復令綏文造祖天羽槌雄神織文布者、復令天棚機姫神織神衣。所謂和衣者、(亦云爾伎多倍)復令紀伊忌部遠祖手置帆負神爲作笠者。復令彥狹知神爲作楯者、復令玉作部遠祖豐珠玉屋神爲造玉者。復令天目一箇神爲造雜刀斧及鐵鐸者(謂佐那伎)復令野槌者採五百箇野薦(蘆イ)八十玉籤。復令手置帆負彥狹知二神以天御量(大小量雜器之名)(不宜注ニス)復伐大峽小峽之材而造瑞殿。(古語、美豆乃美阿可)復令山雷者堀天香山之五百箇眞賢木、(古語、左祐岐々自乃祐古自)上枝懸八咫鏡、(亦名眞經津鏡)中枝懸八坂瓊之五百箇御統之玉、下枝懸白(青イ)和幣青(白イ)和幣。凡厥種々諸物儲備之支具如所謀也。復令中臣祖太兒屋命、忌部祖太玉命二而內拔天香山之眞牡鹿之肩拔、而取天香山之波々迦而令占矣。復令手力雄神(命イ)隱侍窟戶之掖矣。復令天太玉命捧持稱辭白、亦令天兒屋命相副祈啓矣。復天太玉命以廣厚稱辭啓白。吾之所持寶鏡明麗恰如汝命之(乞イ)開戶而御覽焉。仍天太玉命天兒屋命共致其祈禱矣。復天鈿賣命以天香山

作、延侶。可從。胸ノ上、延掛出ニアルニヨルベシ。於、[イ]押ニ作ル。可從。咲、[イ]哥。手ノ上、延令アリ。事ノ下、[イ]之アリ。

之眞坂樹爲鬘、以天香山之天日蘿懸爲手繦矣。（〇以下[イ]ナシ）以天香山之眞坂樹爲鬘、以天香山之天日蘿懸爲手繦而（〇以上ノ衍）以天香山之小竹葉爲手草、手持著鐸之矛、立天石窟戸之前、擧庭燎、巧作俳優。火處燒覆槽置而踏登杼作許斯、顯神明之憑談而、胸乳裳緒於垂於番登之時、高天原動而八百万神倶咲之。時天照太神中心獨謂、比吾幽居、天下皆闇、葦原中國必爲長夜。而何由天鈿賣命嘘樂如此、八百万神諸咲、以爲奇恠、細開窟戸、問爲如此。天鈿賣命答曰、汝命至貴神坐、故歡喜咲樂如此矣。天太玉命、天兒屋命、指出其鏡奉示天照太神之時、天照太神逾思奇而聊細開磐戸而窺之。手力雄神奉承其御手引而奉出。引啓其扉遷座新殿。則天兒屋命、天太玉命以日御綱繩廻懸其御後、界以端出之左繩矣。復令大宮賣神侍於御前。（天太玉命久志備所生之神。如今世内侍善言美詞和君臣間令宸襟悦懌焉）復令豐磐間戸命、櫛磐間戸命二神守護殿門。並天太玉命之子也。天照太神從天窟出坐之時、高天原及葦原中國自得照明矣。當斯之時天初晴、謂阿波礼、（言天晴也）阿那於茂斯侶、（古語事之甚切皆稱阿那、言衆面明白。）阿那佗能斯、（言伸手而儛、今指樂事謂之太乃之、此意。）阿那佐夜憩、（竹葉之聲也）飫憩、（木名振其葉之詞也）尒乃二神共請曰、復勿還幸也。

以ノ下イ竹葉アリ可從

之イナシ

吉及ビ凶ノ下ニ爪アリ可從

古語拾遺曰。云云。一書同舊事本紀。但事有先後。詞存異也。異說石凝姥神天糠戸命之子云云。又云。上枝懸玉。中枝懸鏡。云云。又云。天鈿女命以飫(餝)忍木葉為手草云云。又云。從思兼神之議。令石凝姥神鑄日像之鏡。初度所鑄少不合意。(是紀伊國日前神也。)次度所鑄其狀美麗。(是伊勢太神也。)然後諸神歸罪過於素戔烏尊。而科之以千座置戸。遂促徵矣。至使拔髮以贖其罪。亦曰。拔其手足之爪贖之。已而竟逐降焉。

一云。科罪於素戔烏尊。而責其祓具。是以有手端吉棄物、足端凶棄物。亦以唾為白和幣。以洟為青和幣。用此解除竟。遂以神逐之理逐之。

一云。即科素戔烏尊千座置戸之解除。以手爪為吉棄物。以足爪為凶棄物。乃使天兒屋命掌其解除之太諄辭而宣之焉。世人慎收己爪者此其緣也。既而諸神嘖素戔烏尊曰。汝所行甚無賴。故不可住於天上。亦不可居於葦原中國。宜急適於底根之國。乃共逐降去。于時霖也。素戔烏尊結束青草以為笠蓑。而乞宿於衆神。衆神曰。汝是躬行濁惡而見逐謫者。如何乞宿於我。遂同距之。是以風雨雖甚。不得留休。而辛苦降矣。自爾以來。世諱著笠蓑以入他人屋內。又諱負束草以入他人家內。有犯此者必債解除。

賣イ女

此太古之遺法也。舊事本紀說同之

一書曰、日神之田有三處云云。見上。至於日神閉居于天石窟也。諸神遣中臣連遠祖興台産靈兒天兒屋命而使祈焉云云。見上。既而諸神嘖素戔烏尊曰、云云。見上。是後素戔烏尊曰、諸神逐我、我今當永去、如何不與我姉相見而擅自徑去歟。廼復扇天扇國上詣于天。時天鈿賣見之而告言於日神也。日神曰、吾弟所以上來非復好意。必欲奪我之國者歟。吾雖婦女何當避乎。乃躬裝武備云云。於是素戔烏尊誓之曰、吾若懷不善而復上來者、吾今嚙玉生兒、必當爲女矣。如此則可以降女於葦原中國。如有清心者、必當生男矣。如此則可以使男御天上。且姉之所生亦同此誓。於是日神先嚙十握劍云云。素戔嗚尊乃轠轤然解其左髻所纏五百箇統之瓊綸、云云。見上、此已下文見舊事本紀。於是素戔烏尊白日神曰、吾所以更昇來者、衆神處我以根國、今當就去。若不與姉相見、終不能忍離〔離イ〕。故實以清心復上來耳。今則奉觀已訖、當隨衆神之意自此永歸根國矣。請姉照臨天國、自可平安。且吾以清心所生兒等亦奉於姉、已而復還降焉。

舊事本紀曰、諸神嘖素戔烏尊曰、汝所行甚無頼、故不可住於天上。亦不可居於葦原

鼻ノ上イ而アリ

物イ而

中國。宜急適於底根之國。乃其逐降之時、乞食物於大御食都姬神。大御食都姬神、自鼻口尻取出種々味物・種々樂具而奉進之時、素戔烏尊立伺其態、爲穢物奉進。因殺其大御食都姬神。其所殺之神於身生物。於頭生蠶、於二目生稻種、於二耳生粟、於鼻生小豆、於陰生麥、於尻生大豆。故是神皇產靈尊令取茲成種云云。

公イ翁

日本書紀曰、是時素戔烏尊自天而降到於出雲國簸之川上。時聞川上有啼哭之聲。故尋聲覓往者、有一老公與老婆。中間置一少女、撫而哭之。素戔烏尊問曰、汝等誰也、何爲哭之如此耶。對曰、吾是國神、号脚摩乳、我妻号手摩乳、此童女是吾兒也。号奇稻田姬。所以哭者、往時吾兒有八箇少女、每年爲八岐大蛇所呑。今此少童且臨被呑。無由脫免、故以哀傷。素戔烏尊勅曰、若然者、汝當以女奉吾耶。對曰、隨勅奉矣。故素戔烏尊立化奇稻田姬

捶イ摽

爲湯津爪櫛、而捶於御髻。乃使脚摩乳・手摩乳釀八醞酒、并作假庪八間、各置一口槽、而盛酒以待之也。至期果有大蛇、頭尾各有八岐、眼如赤酸醬。松栢生於背上而蔓延於八丘八谷之間。及至得酒頭各一槽飮醉而睡。

一書曰、素戔烏尊自天而降到於出雲簸之川上。則見稻田宮主簀狹之八箇耳女子、号稻田

降ノ下
不到アリ
在 延名

媛一云云。

一書曰、是時素戔烏尊下二到於安藝國可愛之川上一也。彼處有レ神、名曰二脚摩手摩一。其妻名曰二稻田宮主簀狹之八箇耳一。此神正在姙身。夫妻共愁、乃告二素戔烏尊一曰、我生兒雖レ多、每レ生輙有二八岐大蛇一來呑、不レ得二一存一。今吾且レ産、恐亦見レ呑、是以哀傷。素戔烏尊乃敎之曰、汝可下以二衆菓一釀中酒八甕上。吾當爲レ汝殺レ蛇。二神隨レ敎設レ酒。至二産時一必彼大蛇當レ戶將レ呑レ兒焉。素戔烏尊勅レ蛇曰、汝是可畏之神也。敢不レ饗乎、乃以二八甕酒一每レ口沃入。其蛇飮レ酒而睡。

一書曰、素戔烏尊欲レ幸二奇稻田媛一而乞之。脚摩乳手摩乳對曰、請先殺二彼蛇一、然後幸者宜也。彼大蛇每レ頭各有二石松一、兩脇有レ山、甚可畏也。將何以殺之。素戔烏尊乃計釀二毒酒一以飮之。蛇醉而睡。

舊事本紀曰、素戔烏尊帥二其子五十猛神一降二於新羅曾尸茂梨之處一矣。乃興言曰、此地吾不レ欲レ居。遂以二埴土一作レ船、乘レ之東渡、到下于出雲國簸之川上(不到アリ)安藝國可愛之川上所在鳥上之峯上矣。素戔烏尊到二於出雲國簸之川上在鳥髮地一之時、自二其川上一箸流下者矣。素戔烏尊以二爲人在二其川上一、而尋覔上往者、聞二河上有二啼哭之聲一。故尋レ聲往上。有二一老翁與二老婆一、中

々 仆ナシ

吉備 仆
寸簸

閒置小女而哭矣。以上同日本書紀

時素戔烏尊乃拔所帶十握劍寸々斬其蛇。至尾劍刃少缺。故割裂其尾視之、中有一劍。此所謂草薙劍也。素戔烏尊曰、是神劍也。吾何敢私以安乎。乃上獻於天神也。

一云、本名天叢雲劍、蓋大蛇所居之上常有雲氣。故以名歟。至日本武皇子改名曰草薙劍。

一云、草薙劍此今在尾張國吾湯市村。卽熱田祝部所掌之神是也。其斷蛇劍号曰蛇之麁正。此今在石上也。

一云、裂尾而看、卽別有一劍焉。名爲草薙劍。此劍昔在素戔烏尊許。今在(於ル)尾張國也。其素戔烏尊斷蛇之劍、今在吉備神部許也。出雲簸之川上山是也。

一云、素戔烏尊帥其子五十猛神、降到於新羅國、居曾尸茂梨之處。乃興言曰、此地吾不欲居。遂以埴土作舟、乘之東渡到出雲國簸川上所在鳥上之峯。時彼處有呑人大蛇。素戔烏尊乃以天蠅斫之劍斬彼大蛇。時斬蛇尾而刃缺。卽擘而視之、尾中有一神劍。素戔烏尊曰、此不可以吾私用也。乃遣五世孫天之葺根神、上奉於天。此今所謂草薙劍矣。

舊事本紀曰、素戔烏尊乃拔所帶十握劍寸斬其蛇。此蛇爲八段。毎段成雷。惣爲八

雷一飛躍昇レ天。是神異之甚矣。簸河變レ血而流。至レ斬ニ其尾一劍乃少缺。故割ニ裂其尾一而視之、中有ニ一劍一、名ニ天叢雲劍一。蓋於ニ大蛇所レ居之上一、常有ニ雲氣一、故以名焉。素戔烏尊曰、是神劍也。吾何敢私以安乎。乃遣ニ五世孫天之葺根神一、上ニ奉於天一。其後日本武尊征東之時 以 其劍一号曰ニ草薙劍一矣。今在ニ尾張國吾湯市村一、卽熱田神社所レ崇之神。其斬レ蛇之劍今則在ニ吉備神部許一。到ニ出雲簸之河上一是也。亦云、斷レ蛇之劍号曰ニ蛇之麁正一。今在ニ石上神宮一也。

古語拾遺曰、素戔烏尊自レ天而降到ニ於出雲國簸之川上一以ニ天十握劍一（其名、天羽斬、今石上神宮也。古語大蛇謂ニ之羽一言斬レ蛇也。）斬ニ八岐大蛇一。其尾中得ニ一靈劍一、其名曰ニ天村雲一（大虵之上、常有ニ雲氣一、故以爲レ名。倭武尊東征之年、到ニ相模國一遇ニ野火難一、卽以ニ此劍一薙レ草得レ免、更名ニ草薙劍一也。）（乃獻ニ上於天神一也イ）

亦云、至ニ于磯城瑞垣朝一畏ニ神威一、同殿不レ安。私云、卽位六年乙丑秋九月 於倭笠縫邑殊立ニ磯城神籬一奉レ遷ニ天照太神一、乃草薙劍一。令ニ皇女、豐鋤入姬一奉レ齊焉。洎ニ乎卷向玉城朝（垂仁）一令ニ皇女、倭姬命一奉レ齊ニ天照太神一。仍隨ニ神教一立ニ其祠於伊勢國五十鈴川上一。（私云、卽位二十六年丁巳冬）云云。至ニ纏向日代朝（景行）一令ニ日本武命征 討東夷一。仍枉レ道詣ニ伊勢神宮一辭 見倭姬命一以ニ草薙劍一後〔授イ〕ニ日本武命一而教曰、愼莫レ怠也。日本武命、既平ニ東夷〔虜イ〕一還、至ニ尾張國一納ニ宮簀媛一淹留踰レ月、解レ劍置レ佗〔宅イ〕徒行登ニ膽

村（イ）叢

乃イ及　可從

姬ノ下（イ）命アリ

纏ノ上（イ）於アリ

神(イ)ナシ
最(イ)尤

吹山中毒而神䯊。其草薙劍今在尾張國熱田社。亦云、草薙(神イ)劍者、最是大靈。自日本武尊凱旋年、留在尾張國熱田社。外賊偸逃、不能出境。私云、新羅國僧道行偸盜云云 神物靈驗、以此可觀云云。

延喜式第九曰尾張國愛智郡熱田神(社イ)名神大云云 亦云大和國山邊郡石上坐布都(御イ)魂神社名神大云云

然後行覓將婚之處、遂到出雲之清地焉。清地、此云素鵝 乃言曰、吾心清々之。此今呼此地曰清。於彼處建宮。或云、時武素戔烏尊歌之曰

夜句茂多菟伊都毛夜覇餓岐菟磨語味爾
夜覇餓枳都俱盧贈迺夜覇餓岐廻

舊事本紀曰、遂到出雲之清地、亦云、須賀須賀斯。乃詔曰、吾心清々之。於彼處建宮之時、自其地雲立騰矣。因作御歌曰、云云 乃相與遘合而生兒大己貴神。因勅之曰、吾兒宮首者、即脚摩乳手摩乳也。故賜號於二神、曰稻田宮主神。已而素戔烏尊遂就於根國矣。

一云、稻田媛生兒、號清之湯山主三名狹漏彥八嶋篠。

一云、清之繫名坂輕彥八嶋手、又云清之湯山主三名狹漏彥八嶋野。此神五世孫、即大國主神、

還〔イ〕遷 可從

鄕〔イ〕國

是〔イ〕卽

一云、是後以稻田宮主簀狹之八箇耳生兒、眞髮觸奇稻田媛。還置於出雲國簸川上。而長養焉。然後素戔烏尊以爲妃、而所生兒之六世孫、是曰大己貴命。

一云、大國主神、亦名大物主神、亦号國作大己貴神。亦曰葦原醜男、亦曰八千戈神。亦曰大國玉神。亦曰顯國玉神。

一云、素戔烏尊帥其子五十猛神、降到於新羅國。云云 初五十猛神天降之時、多將樹種而下。然不殖韓地。盡以持歸、遂始自筑紫、凡大八洲國之內莫不播殖而成青山焉。所以稱五十猛命爲有功之神。卽紀伊國所坐大神是也。

一云、素戔烏尊曰、韓鄕之島是有金銀。若使吾兒所御之國不有浮寶者未是佳也、乃拔鬚髯散之。卽成杉。又拔散胸毛、是成檜。尻毛是成柀。眉毛是成櫲樟。已而定其當用。乃稱之曰、杉及櫲樟此兩樹者可以爲浮寶。檜可以爲瑞宮之材。柀可以爲顯見蒼生奧津棄戶將臥之具。夫須噉八十木種皆能播生。于時素戔烏尊之子、号曰五十猛命、妹大屋津姬命、次抓津姬命。凡此三神亦能分布木種。卽奉渡於紀伊國也。然後素戔烏尊居熊成峯、而遂入於根國者矣。已上舊事本紀說同之

大(イ)太
●(イ)復アリ
葛木郡ノ木(イ)上
出雲國ノ上ニ延喜式十云出雲國出雲郡大穴持神社小杵築大神名神大アリ

素戔烏尊別名、日本書紀一書云、神素戔烏尊、速素戔烏尊。

舊事本紀云、又名建速素戔烏尊、出雲國熊野杵築神宮。延喜式第十云、出雲國意宇郡熊野坐神社、名神大。出雲郡杵築大神。名神大。

亦云、奇稲田姫爲レ妃所生之兒大己貴神。一云、坐ニ倭國城上郡大三輪神社。復娶ニ大山祇神女名神大市姫ー生ニ二神ー。兒大年神、次稲倉魂神、亦云、宇迦能御玉神。復兒五十猛神、亦云、五十撫揺神。亦云、大屋彦神。妹大屋姫命、次抓津姫命、凡三神、亦能分ニ布八十木種ー。木種則奉レ渡ニ於紀伊國ー即此國所祭之神是也。

延喜式第十云、紀伊國名草郡伊大祈曾神社、名神大。大屋都比賣神社。同。都麻(都イ)比賣神社。同。

私云、大屋都姫、都麻都姫二神者、(是イ)伊太祈曾末社也。所謂伊太祈曾者五十猛神社歟。●

兒支八十神。大己貴神之兒也。云々 次須勢理媛(神イ) 大三輪神之嫡后也。次葛木一言主 坐ニ倭國葛木郡ー

延喜式第九云、大和國葛上郡葛木(坐イ)一言主神社。名神大。復宗像三女神。此尊爲ニ天照太神之子ー見上矣 大己貴神。

此云、於褒阿娜武智、大穴持命。● 出雲國造神賀詞云、大穴持命。云々 云ニ八百丹(丹イ)杵築宮ー尓靜坐 云々共云、具載左。

日本書紀云、奇稲田姫相與遘合而生ニ兒大己貴命ー。因勅之曰、吾兒宮首者即脚摩乳手摩乳也。故賜ニ号於二神ー曰ニ稲田宮主神ー。

此ノ下[イ]神アリ

一[イ]ナシ

尊[イ]神

亦[イ]一

大ノ下[イ]國アリ

一云、生兒号清之湯山主三名狹漏彥八嶋篠。一云清之繫名坂輕彥八嶋手命。又云清之湯山主三名狹漏彥八嶋野。此五世孫卽大國主神。又云、六世孫是曰大已貴命。一云大國主神、亦名大物主神、亦号國作大已貴命。亦曰葦原醜男、亦曰八千戈神、亦曰大國玉神、亦曰顯國玉神。其子凡有一百八十一神。

舊事本紀云、大已貴命、亦名八嶋士奴美神、亦名大國主神、亦名清之湯山主三名狹漏彥八嶋篠、亦名清之繫名坂輕彥八嶋手命、亦名清之湯山主三名狹漏彥八嶋野。

亦云、大己貴命、亦名大國主神、亦云大物主神。亦云國造大穴牟遲命、亦云大國玉神、亦云顯見國玉神、亦云葦原醜雄(神イ)、（亦葦原色許男）亦云八千矛(神イ)並有八名乎。其子凡有一百八十一神也。

古語拾遺云、素戔烏尊自天而降到於出雲國簸之川上。云云 娶國神女生大己貴神、（古語於保那武智神）遂就於根國矣。大己貴神、（一名大物主神、亦名大國主神、一名大魂神者、大和國城上郡坐大三輪神是也。）與少彥名神（高皇產靈尊之子、遁常世國也）共勠力一心經營天下。云云

亦云天照大神 高皇產靈尊、崇養皇孫欲降爲葦原中國主。仍遣經津主神 武甕槌神斯

命[イ]神

輪ノ下[不]之アリ

除、平定。於是大己貴命、及其子事代主皆奉避。仍以平國矛楯授二神。曰、吾以此矛卒有治功。天孫若用此矛治國者、必當平安。今我將隱去矣。亦云、勅大物主神宜領八十万神永爲皇孫奉護焉。

舊事本紀又云、大己貴坐倭國城上郡大三輪神社。大物主神。

延喜式第九云、大和國城上郡大神大物主神社。名神大。

日本書紀一書曰、大己貴興言曰、夫葦原中國本自荒芒。至及磐石草木咸能強暴。然吾已摧伏莫不和順。遂因言、今理此國唯吾一身而已。其可與吾共理天下者蓋有之乎。于時神光照海、忽然有浮來者。曰、如吾不在者、汝何能平此國乎。由吾在故、汝得建其大造之績矣。是時大己貴神問曰、然則汝是誰耶。對曰、吾是汝之幸魂、奇魂也。大己貴神曰、唯然、廼知汝是吾之幸魂、奇魂。今欲何處住耶。對曰、吾欲住於日本國之三諸山。故即營宮彼處、使就而居。此大三輪神也。此神之子、即甘茂君等、大三輪君等、又姫蹈鞴五十鈴媛命云云

亦云、大己貴神躬被瑞之八坂瓊而長隱者矣。故經津主神、以岐神爲鄉導周流削平。有

察イ密　鉤イ鈞　之ノ下祇命之アリ

逆命者即加斬戮。歸順者仍加褒美。是時歸順之首渠者、大物主神及事代主神。乃合八十万神於天高市、帥以昇天陳其誠款之至。時高皇産靈尊勅大物主神、汝若以國神爲妻、吾猶謂汝有疏心。故今以吾女三穗津姫配汝爲妻。宜領八十万神、永爲皇孫奉護。乃使還降之。

舊事本紀云、大己貴命興言曰、（同日本書紀說）幸魂、奇魂、對曰、欲住日本國青垣三諸山。則大倭城上郡座是也。是故隨神願奉齋於青垣三諸山。即營宮使就而居、此大三輪大神。其神之子即甘茂君大三輪君等是也。

亦云、大己貴神乘天羽車大鷲、而覓妾覓妻儞下（々イアリ）行於茅渟縣、娶大陶祇女子、活玉依姫爲妻。往來之時人非所知。而密往來之間、女爲姙身之時、父母疑怪問曰、誰人來耶。女子答曰、神人狀來自屋上零、入來坐、共覆臥耳。尒時父母忽欲察顯、績麻作綜以針鉤係神人短裳。而明旦隨係（絲カ）尋覓。起越自鎰穴、經茅渟山入吉野（山イ）、留三諸山。當知大神。則見其綜遺只有三縈、号三輪山、謂大三輪神社矣。

姓氏錄曰、大神朝臣、素佐能雄命六世孫、大國主之後世（也イ）。而初大國主神、娶三嶋溝杭耳

田ノ下兀々アリ

子ノ上イ名アリ可從

突イ牢

治イ遅

之女玉櫛姫、夜來曙去、來會日〔イナシ〕耆到。於是玉櫛姫績苧係衣、至明隨苧尋覓、經於茅渟縣陶邑、直指〔指イ〕大和國眞穗御諸山、還視苧遺、唯有三縈。因之號姓大三縈。亦云 賀茂朝臣、大神朝臣同祖、大國主神之後也。大田田禰古命孫、大賀茂都美命、一名大賀茂。是奉齊賀茂神社也。私云 賀茂朝臣氏神〔○以下モ〔イ〕書註ナリ。從フベシ〕者、葛上郡鴨都波八重事代主神二座、名神大。同郡高鴨阿治須岐彥根命大〔イ、シ〕命神社四座。亦〔並イ〕名神大。已上二社此爲二氏神 同郡葛木御歲神社。名神大。同彼氏沙汰。云云。

延喜式八、出雲國造神賀詞云、出雲國乃青垣山內仁、下津磐根尓宮柱太敷〔知イ〕立、高天原尓千木高知坐須、伊射那伎乃日眞子、加夫呂伎熊野大神、櫛御氣野命、國作坐大穴持命、二柱神乎始弖、百八十六社坐皇神等、云云。亦云、大穴持命乃申須〔久イ〕皇御孫命乃靜坐牟大倭國申弖、己命和魂乎、八咫鏡尓取託〔詫イ〕天、倭大物主、櫛𤭖玉八〔命イ〕止名〔介イ〕稱天、大御和乃神奈備尓坐、己命乃御子阿治須伎高彥根命乃御魂乎、葛木乃〔鴨イ〕神奈備尓坐、事代主命乃御魂乎、宇奈提尓坐、賀夜奈流美命乃御魂乎、飛鳥神奈備尓坐天、皇御孫命乃近守神止貢置天、八百丹杵築宮尓靜坐、云云。

高云々（不）高市郡高市御縣坐鴨……トアリ

大己貴神子凡有二百八十一神一、先娶二宗像奧都嶋神田心姫命一生二一男一女一。兒味鉏高彦根命、坐二倭國葛上郡一高鴨神。云云。

拾篠社延喜式　見上

妹下照姫命、坐二同郡雲櫛社一。

次娶下坐二邊津宮一高降（アマクリマス）姫神上生二一男一女一、兒（都イ）味歯八重事代主神。

坐二倭國高市郡高市社一、亦云、甘南備飛鳥社。

延喜式云、高市御縣（ミアカタノ）鴨事代主神社、名神大。又飛鳥神社四座。並名神大。

妹高照光姫大神命。

坐二倭國葛上郡一御歳神社。延喜式　見上。

次娶二稻羽八上姫一生二一兒一。（兒イ）御井神。亦名木俣神。

大己貴神兄弟八十神也。兄（弟）二神各有下欲レ婚二羽稻八上姫一之心上。云云　後八上姫雖二戀（率）〔一〕來一而畏二其嫡妻須勢理姫一、而所生之子判二夾木俣一、名二其子一云二木俣神一。亦名（謂二）御井神一也。

次娶高志河沼姫生一男、兒建御名方神。

坐信濃國諏方郡諏方神社。

延喜式云、諏方郡、南方刀美神社二座。名神大。

水内郡有健御名方富命彦神別神社。名神大。

已上舊事本紀所載抄錄之。粗勘合式文。

事代主神 都味齒八重事代主神、或積羽、又號代主

日本書紀曰、大己貴神對曰、當問我子然後將報。是時其子事代主神遊行在於出雲國三穗三穗、此云美保之碕以釣魚爲樂。云云 事代主神謂使者曰、今天神有此借問之勅、我父宜當奉避。吾亦不可違。因於海中造八重蒼柴籬、蹈船枻而避之。舊事本紀亦同之。又一書云、大己貴神云云 吾將自此避去、即躬被瑞之八坂瓊而長隱者矣。是時歸順之首渠者大物主神及事代主神 云云

又云、事代主神化爲八尋熊鰐通三嶋溝樴姫。或云、玉櫛姫而生兒姫蹈鞴五十鈴姫命、是爲神日本磐余彦火火出見天皇之后也。

一行ノ次ニ行神皇實錄云〻事代主神大已貴神兒八万四千鬼類大將軍坐也アリ

尊寶耳天皇次彥八井耳命是也トアリ

神皇系圖云、事代主神素戔烏尊之子、大已貴神長子也。

舊事本紀云、素戔烏尊、兒大已貴神、孫都味齒八重事代主神、化ニ爲八尋熊鰐一、通ニ三嶋溝杭女活玉依姬一、生ニ一男一女一。兒天日方奇日方命。此命、橿原朝御世勅爲ニ食國政申大夫一、供ニ奉。妹姬鞴五十鈴命、此命、同朝立爲ニ皇后一、誕ニ生二兒一。卽神渟名河尊、妹五十鈴依姬命 云云 三世孫天日方奇日方命。亦名阿田都久志尼命、 四世孫、健飯勝命。五世孫、健甕尻命。亦名健甕槌命亦健甕之尾命、 六世孫、豐御氣主命。亦名健甕依命、 七世孫大御氣主命。八世孫、阿田賀田須命。和迩君等祖

姓氏錄云、和仁古、大國主六世孫、阿大賀（太イ）須之後也。

裏書姓氏錄說

第十七、大和國神別地祇

大神朝臣　素戔烏尊六世孫、大國主之後也。初大國主神、娶ニ三嶋溝杭耳之女玉櫛姬一、夜未曙去、未ニ曾晝到一、於是玉櫛姬績レ苧係レ衣、至レ明隨レ苧尋覓、經ニ於茅渟縣陶邑一、直指ニ大和國眞穗御諸山一。還觀ニ苧遺一、唯有ニ三縈一。因レ之號ニ姓大三縈一。

賀茂朝臣

大神朝臣同祖、大國主神之後也。大田祢古命孫、大賀茂都美命、一名大賀茂足尼 奉レ齊ニ賀茂神社一。

主ノ下兀神アリ

或ノ下イ不云大國主或云アリ

也イナシ

シ

イ注年訓神ナク一香山戸神一ヲ大字トス

和仁古、大國主六世孫、阿（太脱カ）賀太須命之後也。據二此說一以二事代主一稱二大國主一歟。然者至二阿（大イ）賀太須命一六世也。賀茂朝臣氏神者、葛上郡鴨都美（イナシ）波八重事代主神也。高鴨味鉏（鋤イ）高彥根神、葛木御歲（下照姬云云）同爲二彼氏神一云云 愚按、味鋤御歲神、共素戔烏尊子也。不レ可レ謬說（秘謂イ）賀氏之祖至二事代主神一者尤二異說一。但通二見諸說一大三輪神者、大已貴御魂也。或云、大國主（又云、大國主者、或云世六世孫也。）又通二三嶋溝杭耳女玉櫛姬一、或事代主兩說也。今據二姓氏錄說一不レ云二事代主一直稱二大國主一乎。九世孫大田々禰古命、（亦名、大直禰古命。）十世孫大御氣持命、生二三男一。十一世孫、大鴨積命、（此命、石瓜（讖城）瑞籬朝、賜二賀茂君姓一。）弟大友手命、（同朝、賜二大神君姓一。）弟田々彥命。（同朝、賜二神部直大神部直姓一。）私云、依レ有二異說一附錄之一。弟（イナシ）大年神、（素戔烏尊御子、九十六神。）先娶二須沼比神女伊怒姬一爲レ妻（イナシ）生二子五柱一。

大國御魂神、（大和神也）

延喜式（第九）云、大和國山邊郡、大和坐、大國魂神社三座（並名神大。）

次韓神、次曾富理神、次白（イ自、向ノ）日神、次聖神、（娶二賀用亦（姬イ）一生二一兒一。年龍神、次香山戶神。）次御年神、（娶二天知迦流美豆姬一生二九兒一。奧津日神、奧津姬神。此二神者、諸人拜二祠竈神一者也（奧字以下大字））次大山上咋神、此神者、坐二近江叡山一。亦坐二葛野郡松尾一

〔イ〕二行ノ日吉ノ傍ニ私云一座也ノ注アリ

三行日吉ノ傍ニ〔イ〕裏書ト注ス

者ノ下〔イ〕比叡明神者アリ

年〔イ〕歳

鳴鏑者也。

延喜式第十云、近江國滋賀郡、日吉神社。名神大。

同九云、山城國葛野郡、松尾神社二座並名神大。日吉、大比叡、小比叡、聖眞子号二兩所三聖一云云

常說、大比叡者、三輪神坐。小比叡者地主、非二當所地主一、日本國地主也。然者、地主者大物主也。依二此記一者、●素戔烏尊孫、大年神座。云云

又澄憲法印山王講式、聖眞子者、和州三輪神。云云重所二勘合一之。

次庭津日神、次阿須波神、次波比岐神、次香山戸神、次羽山戸神、次須庭高津日神、次大土神。亦名土之御祖神。羽山戸神、子八柱。娶二大氣都姫神一爲レ妻、所生兒、若山咋神、若年神、妹若沙那賣神、弥豆麻岐神、夏高津日神亦名夏之女神。秋比女神、冬〔〇久久ノ誤カ〕年神、冬〔〇久久カ〕記若室葛根神。

古語拾遺云、昔在神代大地主神、營レ田之日、以二牛完一食二田又〔人イ〕一。于時御年神之子、至二〔於前〕其田一唾レ饗而還以レ狀告レ父、御歳神發レ怒以レ蝗入〔放イノ〕二於其田一苗葉忽枯損似二篠竹一。於是、大地主神、令片巫志止止鳥肱巫今俗竈輪及米占也占二求其田〔由前〕一御歳神爲レ祟。宜レ獻二白猪、白馬、白鷄一、

々之前阿不氣トス
是所前可トス
從ノ上仍アリ
是ノ下前今アリ

以解其怒。依教奉謝御歳神答曰、實吾意也。宜以麻柄作排々之。乃以其葉掃之、以天押草押之、以烏扇扇之。若如此不出去者、宜以牛宍置溝口作男莖形(以イ)加之。是所以厭其心也。以薏子、蜀椒、呉桃葉、及塩班(班置イ)其畔、從其教苗葉復茂、年穀豐稔。是神祇官、以白猪、白馬、白鷄祭(御イ、)歳神之縁也。

少彦名神 高皇産靈尊子也。大己貴神爲子。

日本書紀一書云、初大己貴神之平國也、行到出雲國五十狹々之小汀而且當飲食。是時海上忽有人聲、乃驚而求之、都無所見。頃時有一箇小男、以白蘞皮爲舟、以鷦鷯羽爲衣、隨潮水以浮到。大己貴神即取置掌中而翫之、則跳囓其頰。乃怪其物色、遣使白於天神。于時高皇産靈尊聞之而曰、吾所産兒凡有一千五百座、其中一兒最惡、不順教養。自指間漏墮者必彼矣。宜愛而養之。此即少彦名命是也。

亦云、夫大己貴命與少彦名命戮力一心經營天下。復爲顯見蒼生及畜産、則定其療病之方。又爲攘鳥獸昆虫之災異、則定其禁厭之法。是以百姓至今咸蒙恩頼。嘗大己貴命謂少彦名命曰、吾等所造之國、豈謂善成之乎。少彦名命對曰、或有所成、或有不成。

談〔行〕語

校云「且久白言」ハ〔行〕本ハ〇ヲシテ傍ニ「本ノ如ク」トセリ。蓋シ原本脫アリシナリ。舊事紀ヲ校スルニ「多邇爾且久白言」トアリ。「且」ハ具カ。

是談也蓋有二幽深之致一焉。其後少彥名命、行至二熊野之御崎一、遂適二於常世鄉一矣。亦曰、至二淡嶋一而緣二粟莖一者、則彈渡而至二常世鄉一矣。自後國中所レ未レ成者、大己貴神獨能巡造。遂到二出雲國一云云。

舊事本紀說同レ上。初雖レ問二其名一不レ答。且雖レ問二所レ從諸神一皆爲レ不レ知。且久白言、久延彥必知レ之。即之二久延彥一問時、答曰、此者神皇產靈神之御子少彥名神。故白二上於大神一。時、高皇產靈尊聞之曰、云云 所謂久延彥者、於今者山田之曾富騰者也。此神雖レ不レ行而盡知二天下一之神者也。

元元集卷第三　終

元元集卷第四

○地神出生篇下

正哉吾勝々速日天忍穗耳尊天照太神之子也。

日本書紀曰、正哉吾勝々速日天忍穗耳尊、娶高皇產靈尊之女𣑥幡千々姬一生二天津彥々火瓊々杵尊一。故皇祖高皇產靈尊、特鍾二憐愛一以崇養焉。遂欲下立二皇孫天津彥々火瓊々杵尊一以爲中葦原中國之主上。

一云、天照太神、以二思兼神妹万幡豐秋津媛命一、配二正哉吾勝々速日天忍穗耳尊一爲レ妃。令レ降二之於葦原中國一。是時勝速日天忍穗耳尊、立二于天浮橋一而臨睨之曰、彼地未平矣。不須也頗傾凶目杵之國歟、乃更還登具陳二不レ降之狀一。故天照太神復遣二武甕槌神及經津主神一先行驅除。云云 二神乃昇レ天復命而告之曰、葦原中國皆已平竟。時天照太神勅曰、若然者方當三降二吾兒一矣。且將降間、皇孫已生、号曰二天津彥々火瓊々杵尊一。時有レ奏曰、欲下以二此皇孫一代降上。云云

長ノ下之アルベキカ

一云、天照太神手持二寶鏡一、授二天忍穗耳尊一而祝之曰、云云。則以二高皇産靈尊之女、号万幡姬一配二天忍穗耳尊一、爲レ妃降之。故時居二於虛天一而生レ兒、号天津彥火瓊々杵尊一。因欲下以二此皇孫一代レ親而降上。云云。

一云、天忍穗根尊娶二高皇産靈尊女子栲幡千千姬万幡姬命一。亦云、高皇産靈尊兒、火之戸幡姬兒、千々姬命、而生二兒天火明命一。次生二天津彥根火瓊々杵根尊一。其天火明命兒天香山、是尾張連等遠祖也。

一云、高皇産靈尊之女、天万拷幡千幡姬。一云 高皇産靈尊兒、万幡姬兒、玉依姬命。此神爲二天忍骨命妃一、生二兒天之杵火々置瀨尊一。一云、勝速日命兒、天大耳尊、此神娶二丹舄姬一、生二兒火瓊々杵尊一。一云、神皇産靈尊之女、拷幡千幡姬、生二兒火瓊々杵尊一。一云 天杵瀨命娶二吾田津姬一、生二兒火明命一。次火夜織命、次彥火々出見尊。

一云、正哉吾勝々速日天忍穗耳尊、娶二高皇産靈尊之女 天万栲幡千幡姬一爲レ妃 而生レ兒。号二天照國照彥火明命一。是尾張連等遠祖也。次天饒石國饒石天津彥火瓊々杵尊。

舊事本紀云、天照太神詔曰、豐葦原之千秋長五百秋長瑞穗國者、吾御子正哉吾勝々速日天押穗

損坐 坐 頭去亡ニ作ル

校云 使速 命上ル 反上復 命云ニ作ル

天明 天 火明 尊ニ作ル

耳尊可知之國。言寄詔賜之國也。而吾以爲多有道速荒國之神。復磐根木株草之垣葉猶（能ル）言語。夜者若熛螢火而喧響之、晝者如五月蠅而沸騰之。令（今ル）欲令撥平於葦原中國之邪鬼。當遣誰者宜也。是何神之。天祖詔、乘天磐船而天降坐於河内國河上哮（哮ル）峯。則遷坐於大倭國鳥見白庭山。所謂乘天磐船而翔行於大虛（空ル）巡睨是鄉而天降坐矣。所謂虛空見日本國是歟。饒速日尊使娶長髓彥妹御炊屋姬爲妃令姙胎矣。未及產時、饒速日尊既（神ル）損坐矣。而不復上天之時。高皇產靈尊詔速飄神曰、吾神御子饒速日尊所使於葦原中國。而有疑恠思耶。故汝能降可復白矣。于時速飄神命奉勅降來。當（而ル）見神損去坐矣。則使速飄命去。神御子者即（既ル）神（殞ル）去亡坐矣。高皇產靈尊以爲哀泣。則使速飄命以命（此ル）將上於天上。處其神屍骸。日七夜七以爲遊樂。哀泣。斂於天上矣。

亦云、正哉吾勝々速日天押穗耳尊、高皇產靈尊女、（萬幡ル）豐秋幡豐（此ル）秋津師姬栲幡千（千ル）姬命爲妃、誕生天照國照彥天火明櫛玉饒速日尊矣。亦名天火明命、亦名天照國照彥天明尊。亦云饒速日命、（亦イ）名膽杵磯丹杵穗命。天照太神高皇產靈尊相共所生。故謂天孫、亦稱皇孫（矣ル）天祖以天璽瑞寶十種授

饒速日尊一。則此尊稟二天神御祖詔一、乘二天磐船一而天降二坐於河內國河上哮（哮ル）峯一。則遷二坐大倭國鳥見白庭山一。云云

亦云、万幡豐秋津師姬命、亦名栲幡千々姬命爲レ妃、誕二生二男一矣。兄天照國照天火明櫛玉饒速日尊。弟天饒石國饒石天津彥々火瓊々杵尊。亦云、天照太神詔（謂ル）豐葦原之千秋長五百秋長之瑞穗國者、我御子正哉吾勝々速日天押穗耳尊可レ王之地。詔賜而、天降之時、於天浮橋立而臨睨之曰、豐葦原之千秋長五百秋長之瑞穗國者、於聞二喧擾之響一。彼地未レ平矣。不須也頗傾凶目杵之國歟。乃更還登二復於上天一、具陳二不レ降之狀一也。高皇產靈尊召二集八百万神於天八瑞河之川原一而問二思兼神一以二天照太神詔一曰、此葦原中國者、吾御子可レ知之國詔賜之國也。云云　亦云、天照太神手持二寶鏡一授二天忍穗耳尊一而祝之曰云云。同二日本書紀一。

亦云、天押穗耳尊以二高皇產靈尊女栲幡千々姬万幡姬命一爲レ妃。居二於虛天一而生レ兒　号二天津彥彥火瓊々杵尊一。同（因ル一）欲下以二（此ル）皇孫一代レ親而降上矣。天照太神詔二任レ曰（白）可レ降矣。宜以二天兒屋命、天太玉命及諸部神等一皆悉相授。亦（且）服御之物（一ル）依レ前授矣。然後天忍穗耳尊更還二復於天一矣

瑞實滿可從

古語拾遺曰、天祖吾勝尊納高皇產靈神女、栲幡千々姬命生天津彥尊、号曰皇孫命、（天照太神、高皇產靈神、二神之孫、故曰皇孫。）旣而天照太神、高皇產靈尊崇養皇孫欲降爲豐葦原中國主。

神皇實錄云、天照太神之太子正哉吾勝々速日天押穗耳尊、娶皇祖天御中主尊長男、高皇產靈尊之女、栲幡豐秋津姬命生天津彥々火瓊々杵尊。故皇祖高皇產靈尊特鍾憐愛以崇養焉。因以受皇大尊号、稱皇御孫尊也。遂欲以皇孫尊爲大葦原中國之主矣。然彼地多有螢火光神及蠅聲邪神。復有草木咸能言語。故高皇產靈尊召集八十諸神而問之曰、欲令撥平葦原中國之邪鬼。當遣誰者宜也。惟尒諸神勿隱所知。僉曰、天穗日命是神之傑也。可不試歟。於是俯順衆言卽以天穗日命往平之。然此神佞媚於大己貴神比及三年尙不報聞。故仍遣其子大背飯三熊之大人（大人、此云于志）亦名武三熊之大人、此亦還順其父遂不報聞。

天穗日命天照太神子也　見上。

舊事本紀云、高皇產靈尊召集八百万神於天八瑞河之川原（而ル）問思兼神以天照太神詔（曰ク）、此葦原中國者我御子可知之國詔賜之國也。而吾以爲多有道速振（ル）荒（振ル）國之神。

主延喜式王ニ作ル可從

復磐根木株草之垣葉猶（能ル）言語。夜者若熛螢（火ル）而喧響之、晝者如五月蠅而沸騰之。令（今ル）欲令撥平於葦原中國之邪鬼。當遣誰者宜也。是何神遣便（使ル）將言趣矣。思兼神、八百万神僉曰、天穗日命可遣。此神之傑也。即隨衆言遣天穗日命令往平之。然此神媚附於大己貴神、比及三年尚不復命矣。遣三熊大人不見此記也。

延喜式ハ遷却崇神詞云、高天之原尓神留坐之弖亨始給神漏岐神漏美乃命乎以弖、天之高市尓八百万神等乎神集々給比、神議々給弖、我皇御孫之尊波、豐葦原乃水穗之國乎安國止平久所知食登、天之磐座放弖、天之八重雲乎伊豆之千別尓千別弖、天降所寄奉之時尓、誰神（乎ル）先遣波（志ル）水穗之國乃荒振神等乎、神攘攘平介武止、神議（々）給時尓、諸神等、皆量申久、天穗日之命乎遣而平介武止申•弖（支ル）是以天降遣時尓此神波返言不申支。次遣之健三熊之命（毛ル）隨父亨弖、返言不申。云々

出雲國造神賀詞云、高天乃神主高御魂、神魂命乃皇御孫命尓、天下大八島國乎亨避奉之時、出雲臣等我遠神、天穗日命乎國躰見尓遣時尓、天（能ル）八重雲乎押別弖、天翔、國翔弖、天下乎見廻弖返亨給•弖（久ル）豐葦原乃水穗國波、晝波如五月蠅水沸支、夜波如火瓫光神在利。磐根木立青水沫毛

神式ナシ 故高皇産靈尊云々以下ハ日本書紀ノ文ナリ。其事脱セルカ

専問且、荒國在神利。云云 故高皇産靈尊更會諸神問當遣者。僉曰、天國玉之子天稚彦是壯士也。宜試之。於是、高皇産靈尊賜天稚彦天鹿兒弓及天羽々矢以遣之。此神亦不忠誠也。來到卽娶顯國玉之女子下照姫（亦名高姫、亦名稚國玉。私云、顯國玉者、大己貴神一名也。此神娶宗像奧津島神田心姫命生一男一女。兒味鉏高彦根神、妹下照姫命云云並見。）因留住之。曰、吾亦欲馭葦原中國。遂不復命。是時高皇産靈尊恠其久不來報、乃遣無名雉伺之。其雉飛降止於天稚彦門前所植湯津杜木之杪。（杜木此云可豆邏。）時天探女見而謂天稚彦曰、奇鳥來居杜杪。天稚彦乃取高皇産靈尊所賜天鹿兒弓、天羽々矢射雉斃之。其矢洞達雉胸而至高皇産靈尊之座前也。時高皇産靈尊見其矢曰、是矢則昔我賜天稚彦之矢也。血染其矢。蓋与國神相戰而然歟。於是取矢還投下之。其矢落下則中天稚彦胸上。于時天稚彦新嘗休臥之時也。中矢立死。此世人所謂反矢可畏之緣也。天稚彦之妻、下照姫哭泣悲哀聲達于天。是時天國玉聞其哭聲、則知夫天稚彦已死。乃遣疾風擧尸致天。便造喪屋而殯之。以燦鳥任（喪云々。）而八日八夜啼哭悲哥。先是天稚彦在葦原中國也。与味耜高彦根神友善。（私味耜高彦根神、昔大己貴子、下照姫同母兄也。並見上。）故味耜高彦根神昇天弔喪。時此神容貌正類天稚彦平生之儀。故天稚彦親屬妻子皆謂、吾君猶在。則攀牽衣帶、且喜且慟。時

校云　惡…已上マデ衍ナラン

味耜高彦根神忿然作色曰。朋友之道理宜ニ相弔一、故不レ憚ニ汚穢一遠自起哀。何爲誤ニ我（於ㇾ）已（亡ル）者。則拔ニ其帶劍大葉苅一、亦名神戸劒、以切ニ臥喪一　惡以生誤死支　上已（屋ル）一。此卽落而爲レ山。今在ニ美濃國藍見川之上一（喪ル）山是也。世人惡ニ以レ生誤ゾ死此其緣也。

一云、天照太神勅ニ天稚彦一曰、豐葦原中國、是吾兒可レ王之地也。然慮有ニ殘賊强暴横惡之神一者、汝先往平之。乃賜ニ天鹿兒弓及天眞鹿兒矢一遣之。云々。經ニ八年一無以報命。故天照太神乃召ニ思兼神一問ニ其不來之狀一。時思兼神思而告曰、宜ニ且遣レ雉問一之。於是從ニ彼神謀一、（乃ル）使ニ雉往候一之。其雉飛下居ニ于天稚彦門前湯津杜樹之杪一而鳴之曰、天稚彦何故八年之間未レ有ニ復命一。時有ニ國神一号ニ天探女一。見ニ其雉一曰、鳴聲惡鳥在ニ此樹上一可レ射之。云云。

亦云、天神見ニ其矢一曰、此昔我賜ニ天稚彦一之矢也。今何故來。乃取レ矢而咒之曰、若以ニ惡心一射者、則天稚彦必當遭害。若以ニ平心一射者、則當无害（羔ル）。因還投之。卽其矢落下中ニ于天稚彦之高胸一。因以立死。云々。諸說皆高皇産靈尊所落下之矢也。據今說者天照太神下給之。

亦云、味耜高彦根神光儀華艶映ニ于二丘二谷之間一。故喪會者哥之曰、或味耜高彦根之妹、下照媛欲レ令ニ衆人一知上。云云。

阿妹奈屢夜、乙登多奈婆多廼、河奈藏努屢、多磨廼弥素磨屢廼（御統也）、阿奈（穴也）陀磨（玉也）波夜（早也）、弥（谷也）多介輔佗和佗

校云、預テ无、凡ハ預ニ作ル、日ノ上无勅アリ、雉雄无、雌雉

羅須、阿泥素尒多伽遲顧祢。又哥之曰、阿麿佐箇屢、避奈菟謎廼、以和多羅素西渡、以嗣箇播箇陀輔智、箇多輔智尒、阿弥播利和陀嗣、妹盧簡嗣尒、簡嗣預利據禰、以嗣箇播箇陀輔智。此兩首歌辭今号夷曲。

一云、高皇產靈尊曰、昔遣天稚彥於葦原中國、至今所以久不來者、蓋是國神有强禦之者、乃遣无名雌雉往候之。此雉降來因見粟田豆田、則留而不返。此世所謂雉頓使之緣也。故復遣无名雌雄〔雉〕、此鳥下來爲天稚彥所射。中其矢而上報云云。

舊事本紀云、高皇產靈尊更會諸神問、當遣何神矣。僉曰、天津國玉神子、天稚彥是壯〔士〕也。宜試也。高皇產靈尊賜天稚彥於天之鹿兒弓天之羽々矢而遣之。云々。天照太神高皇產靈尊、勅問諸神等曰、昔遣天稚彥於葦原中國、至今所以久不來者、云々。思兼神諮神答曰、可遣无名雉亦鳩。因遣无名雉鳩而往就之。此雉亦鳩降來見粟田豆田、則留而不返。是所謂雉頓使、亦豆見落居鳩、是其緣也。復遣無名雌雉。云々。天稚彥持天神所賜弓矢、便射其雉之時、矢達雉胸、逆射上、逮坐天安河之河原天照太神高皇產靈尊御前矣。云々。高皇產靈尊咒曰、若以惡心射者天稚彥必當遭害。若以平心射者不中天稚

校云、是後以下ハ日本紀ノ文ト合シ、舊事紀トハ少異アリ

彦一。即取二其矢一自レ空返下者、其矢落下中二天稚彦高胸一而死矣。云々。是後高皇産靈尊更會二諸神一選下當レ遣二於葦原中國一者上。僉曰、磐裂根裂神之子、磐筒男磐筒女所生之子、經津（此云賦都）主神是將レ佳也。時有下天岩窟所レ住神稜威雄走神之子、甕速日神。々々々々之子熯速日神。熯速日神之子武甕槌神上。此神進曰、豈唯經津主神獨爲二丈夫一。而吾非二丈夫一者哉。其辭氣慷慨（故紀アリ、）以即配二經津主神一令レ平二葦原中國一。二神於是降二到出雲國五十田狹之小汀一。則拔二十握劍一倒植二於地一、踞二其鋒端一而問二大己貴神一曰、高皇産靈尊欲下降二皇孫一君中臨此地上。故先遣二我二神一駈除平定、汝意何如。當須避不。時大己貴神對曰、當レ問二我子一、然後將二返報一。是時其子事代主神遊行在二於出雲國三穗之崎一。以二鈎魚一爲レ樂、故以二熊野諸手船一（亦名天鴿船）載二使者稻背脛一遣之。而致二高皇産靈勅於事代主神一、且問二將報之辭一。時事代主神謂二使者一曰、令（今紀）天神有二此借問之勅一、我父宜當奉避、吾亦不レ可レ違。因於海中造二八重蒼柴籬一、踏二船枻一而避之。使者既還報命。故大己貴神則以二其子之辭一白二於二神一曰、我怙之子既避去矣。故吾亦當レ避、如吾防禦者、國內諸神必當同禦。今我奉レ避誰復敢有二不レ順者一。乃以二平レ國時所杖之廣矛一授二二神一曰、吾以二此矛一卒有二治功一。天孫若用二此矛一治レ國者、必當平安。今我當於百

便ル使
齊スベテ齋ニ作ル太書ハ齋ト齊ア混用ス
手ル乎
孫ル神
篠ノ下ヤアリ

不足之八十隈將隱去矣。言訖遂隱。於是二神誅諸不順鬼神等、果以復命。

一云、二神遂誅邪神及草木石類、皆已平了。其所不服者、唯星神香香背男耳。故加遣倭文神建葉槌命者則服。故二神登天也。

一云、吾兒當代主射鳥遊在三津之碕。云々

一云、天神遣經津主武甕槌神、使平定葦原中國。時二神曰、天有惡神。名曰天津甕星。亦名天香香背男。請先誅此神、然後下撥葦原中國。是時齋主神號齋之大人。此神今在于東國檝取之地也。既而二神降到出雲五十田狹之小汀。而問大己貴神曰、汝將以此國奉天孫耶以不。對曰、疑汝二神非是吾處來者。故不須許也。於是經津主神則還昇報告。（時）高皇産靈尊乃還遣二神、勅大己貴神曰、今者聞汝所言、深有其理。故更條條而勅之。夫汝所治顯露之事、宜是吾孫治之。汝則可以神事。又汝應住天日隅宮者、今當供造。即以千尋栲繩結爲百八十紐。其造宮之制者、柱則高大、板則廣厚。又將田供佃。又爲汝往來遊海之具、高橋浮橋及天鳥船亦將供造。又爲汝於天安河亦造打橋。又供造百八十縫之白楯。又當主汝祭祀者天穗日命是也。於是大己貴神報曰、天神勅教慇懃如此。敢

將ノ下或退アリ

者ノ下或仍アリ

不從命乎。吾所治顯露叓者、皇孫當治、吾將治幽叓。乃薦岐神於二神曰、是將代〔當〕我而奉從也。吾將自此避去、即躬被瑞之八坂瓊而長隱者矣。故經津主神以岐神爲鄕導周流削平。有逆命者、即加斬戮。歸順者、加褒美。是時歸順之首渠者大物主神及叓代主神。乃合八十万神於天高市、帥以昇天陳其誠款之至。時高皇產靈尊勅大物主神、汝若以國神爲妻、吾猶謂汝有䟽心。故令〔今ル〕以吾女三輪〔穗ル〕津姬配汝爲妻、宜領八十万神永爲皇孫奉護。乃使還降之。

校云、尾羽張神ノ下、一本ニ時答白云恐供奉トアリ

舊叓本紀曰、思兼神及諸神僉曰、天〔冗ナシ〕座天安河上天窟稜威尾羽張神是可遣矣。若且非此者、其神之子武甕雷〔男寛〕神可遣。其尾羽張神者、逆塞〔塞ル〕上於天安河之水、而塞〔塞〕道居。故他神不得行。故別遣天迦具神可問。故尒使天迦具神問尾羽張神。答曰供奉。然於此道〔者ル〕僕子武雷神可遣。乃貢進矣。亦云、僉曰、磐裂根裂之子、磐筒男磐筒女所生之子、經津主神是將佳也。于時天窟所住之神稜威雄走之神之子、武甕槌神進曰、唯經津主神獨爲丈夫、而吾非丈夫者哉。其詞氣慷慨。故即配經津主神而遣之。一云、天鳥船神副武甕槌神而遣也。天照太神、高皇產靈尊、遣經津主〔神寛〕武甕槌神、先行駈使除〔顛倒〕

我ノ下貫我アリ

平定於葦原云云。已上同本紀一書說 亦曰、二神則拔十握劍倒刺立於地、踞其鋒端而問大己貴神云云。大己貴命對曰、當問我子事代主神、然後將報。同日本紀說 尓問大己貴神令汝子事代主神如此白訖。亦有可白之子乎。對曰、汝白之。且我子有建御名方神。除此者無也。如此白問、建御名方神、千引之石指捧手末而來言、誰來我國而忍々如此言者。然欲爲力競。故我先故取其手。故令取切其手者、即成立氷、亦取成劍刀。故尓懼而退居。尓欲取建御名方神手。乞歸而取者、如取若葦搤批而投離即逃去。因追往而追到於科野國州羽海將殺之時、建御名方神白、恐矣、莫殺我、除此地者不行他處。亦不違我父大國主神之命。不違兄八重事代主神之言。此葦原中國者隨天神御子命獻矣。故更且還來、問大國主神。汝子等事代主神建御名方神者、隨天神御子命勿違白訖。故汝心奈何。答曰、僕子等二神隨白僕之不違。此葦原中國者隨命既獻也。云云。乃以平國之時所杖之廣矛授二神曰、吾以此矛卒有治功。云云。同上說

裏書云、經津主神香取坐伊波比主命。日本書紀云、齊主神号齊之大人是也。式第八云、春日

校云于時高皇產靈尊以下日本書紀の文

吾ノ上四於アリ

祭祝詞曰、鹿島坐健御賀豆智命、香取坐伊波比主命、牧岡坐天之子八根命、比賣神四柱乃皇神等廣前尓白云々。

古語拾遺云、仍遣經津主神、(是磐筒女神之子、命(今ル)下總國香取神是也。)武甕槌神、(是甕速日神之子、令(今ル)常陸國鹿島神是也。)駈除平定。於是大己貴神、及其子事代主(神)、並皆奉避。仍以平國矛授二神曰、(吾ル)以此矛卒有治功。天孫若用此矛治國者、必當常前平安。今我將隱去矣。辭訖遂隱。於是、二神誅伏諸不順鬼神等、果以復命。(裏書云、建甕槌之男神、亦云、建布都神。舊事本紀曰、建甕槌神、亦名豐布都神。今坐常陸國鹿島大神、石上布都大神是也。云云。)

于時高皇產靈尊、(以ル)眞床追衾覆於皇孫天津彥々火瓊々杵尊使降之。皇孫乃離天磐座、且排分天八重雲、稜威之道別々々、而天降於日向襲之高千穗峯矣。既而皇孫遊行之狀也(四ナシ)者、則自槵日二上天浮橋立於浮渚在平處、而旅肉(胷ル)、完之空國自頓丘覓國行去、到吾田長屋笠狹之碕矣。其地有一人、自號事勝國勝(四ナシ)長狹。皇孫問曰、國在耶以不。對曰、此焉有國、請任意遊之。故皇孫就而留住。云々。吾勝尊且將降間皇孫已生云云。奏曰、欲此皇孫代降次文也。

一云、天照太神乃賜天津彥々火瓊々杵尊八坂瓊曲玉、及八咫鏡、草薙劍三種寶物、又以中臣

詳ル達

皇名ル名是

抑ノ上无將アリ

問ノ上无復アリ

上祖天兒屋命、忌部上祖太玉命、猿女上祖天鈿賣命、鏡作上祖石凝姥命、玉作上祖玉屋命、凡五部神使配侍焉。因勅皇孫曰、葦原千五百秋之瑞穗國、是吾子孫可王之地也。宜爾皇孫就而治焉。行焉行（无シ）矣。寶祚之隆當與天壤無窮者矣。已而且降之間、先驅者還白、有一神居天八達之衢。其鼻長七咫、背長七尺餘。當言七尋。且（口ル）尻明耀、眼如八咫鏡、而赩然似赤酸醬也。即遣從神往問。時有八十万神、皆不得目勝相問。故特勅天鈿女曰、汝是目勝於人者、宜往問之。天鈿女乃露其胸乳、抑裳帶於臍下、而咲噱向立。是時衢神問曰、天鈿女汝爲之何故耶。對曰、天照太神之子所幸道路、有如此居之者誰也、敢問之。衢神對曰、聞天照太神之子今當降行。故奉迎相待。吾是名猿田彥太神。時天鈿女復問曰、汝將先我行乎、抑我先汝行乎。對曰、吾先啓行。天鈿女問曰、汝何處到耶。皇孫何處到耶。對曰、天神之子則當到筑紫日向高千穗槵觸之峯。吾則應到伊勢之狹長田五十鈴川上。詣（无シ）因曰、發顯我者汝也。故汝可以送我而致之矣。天鈿女還詣報狀。皇孫於是脫離天磐座、排分天八重雲、稜威道別々々而天降之也。果如先期、皇孫則到筑紫日向高千穗槵觸之峯。其猿田彥神者則到伊勢之狹長田五十鈴川上。即天鈿女命隨猿田彥神

所乞ニ。遂以侍送焉。時皇孫勅ニ天鈿女命一、汝宜下以ニ所顯神名一爲中姓氏上焉。因賜ニ猿女君之号一。故猿女君等男女皆呼爲レ名(匹君)此其緣也。

一云、以ニ紀國忌部遠祖手置帆負神一定爲ニ作笠者一。彥狹知神爲ニ作盾者一。天目一箇神爲ニ作金者一。天日鷲神爲ニ作木綿者一。櫛明玉神爲ニ作玉者一。乃(使ル)ニ太玉命一以ニ弱肩被ニ太手襁一而代御手以祭ニ此神一者始起ニ於此一矣。且(且ル)天兒屋命主ニ神事一之宗源者也。故俾下以ニ太占之卜事一而奉中仕焉。高皇産靈尊因勅曰、吾則起ニ樹天津神籬及天津磐境一、當爲ニ吾孫一奉レ齊矣。汝天兒屋命太玉命宜持ニ天津神籬一、降ニ於葦原中國一亦爲ニ吾孫一奉レ齊焉。乃使ニ二神一陪ニ從天忍穗耳尊一以降之。是時天照太神手持ニ寳鏡一、授ニ天忍穗耳尊一而祝之曰、吾兒視ニ此寳鏡一當レ猶レ視レ吾。可ニ与同レ床共レ殿以爲ニ齊鏡一。復勅ニ天兒屋命太玉命一、惟尓二神亦同侍ニ殿内一善爲ニ防護一。又勅曰、以ニ吾高天原所御齊庭之穗一亦當ニ御於吾兒一。則以ニ高皇産靈尊之女号万幡姬一配ニ天忍穗耳尊一爲レ妃降之。故時居ニ於虛天一而生レ兒、号ニ天津彥々火瓊々杵尊一。因欲下以ニ此皇孫一代レ親而降上。故以ニ天兒屋命太玉命及諸部神等一悉以皆相授。且服御之物一依レ前授。然後天忍穗耳尊復ニ還於天一。故天津彥火瓊々杵尊降ニ到於日向槵日高千穗之峯一。而膂宍胸副國自ニ頓

紀ノ下匹伊アリ

悉ノ下匹以ナシ

浮ノ上ル於アリ

丘覓國行去、立於浮渚在平地。乃召國主事勝國勝長狹而訪之。對曰、是有國也。取捨隨勅。時皇孫因立宮殿、是焉遊息。

一云、高皇産靈尊以眞床覆衾裹天津彦國光彦火瓊々杵尊、則引開天磐戸、排分天八重雲以奉降之。于時大伴連遠祖天忍日命、帥來目部遠祖天槵津大來目、背負天磐靫、臂著稜威高鞆、手捉天梔弓・天羽々矢、及副持八目鳴鏑、又帶頭槌劍、而立天孫之前。遊(行降ル)來、到於日向襲之高千穗槵日二上峯天浮橋、而立浮渚在之平地、膂宍空國自頓丘覓國行去、到於吾田長屋笠狹之御碕。時彼處有一神、名曰事勝國勝長狹。是伊弉諾尊子也。亦名鹽土老翁。故天孫問其神曰、在國耶。對曰、在也。因曰、隨勅奉矣。故皇(天ル)孫留住彼處。

一云、是時高皇産靈尊乃用眞床覆衾裹皇孫。故稱此神曰天國饒石彦火瓊々杵尊。于時降到之處者、呼曰日向襲之高千穗添山峯矣。及其遊行之時也云々。到于吾田笠狹之御碕、遂登長屋之竹島。乃巡覽其地者彼有人焉。名曰事勝國勝長狹。天孫因問之曰、此誰國歟。對曰、是長狹所住之國也。然今乃奉上天孫矣。

窮ノ下匹矣アリ

石ノ上匹神アリ

舊事本紀云、以紀伊國忌部遠祖云々。同上。且天兒屋命主神事之宗源者也云云。同上。高皇産靈尊勅曰、吾則起樹天津神籬云々。同上。時、天照太神手持寶鏡授天忍穗耳尊而祝之曰、吾兒視此寶鏡當猶視吾。可与同床共殿以為齋鏡。寶祚之隆當与天壤無窮。則授八坂瓊曲玉及八咫鏡草薙劒三種寶物永為天璽。矛玉自從矣。詔天兒屋命天太玉命曰、惟尒二神亦同侍殿內善為防護焉。又曰宜以吾高天原所御齋庭之稻穗亦當御於吾兒矣。宜天太玉命率諸部神供奉。其儀如天上儀。仍令諸神亦陪從矣。詔天鈿賣命曰、同使配侍焉。詔常世思金神手力雄命天石門別神云、此鏡者專為我御魂如拜吾前奉齋矣。次思金神者取持前事為政。此神者拜祭佐劉〔匹ナシ衍カ〕古久斯侶五十鈴宮。次豐受神。此豐受大神御事大違常說 此坐外宮渡會神。次天太玉命。忌部上祖。次天兒屋命。中臣上祖。次天石戸別神。亦名櫛石窓神。亦曰石窓神。此者御門之神也。次手力雄神。此者坐佐那之縣也。次天鈿賣命。猿女上祖。次天石凝姥命。鏡作上祖。次玉作祖〔匹ナシ衍カ〕玉屋命。玉作上祖

已上五部伴領神使配侍焉。

次大伴連遠祖天忍日命、帥來目部遠祖天槵津大來目云々。同上。詔大物主神、宜領八十万神永為皇孫奉護矣。

及音乃
鏡音寶
陪音倍
帥音師

正哉吾勝々速日天押穂耳尊、以高皇産靈尊女、栲幡千々姫万幡姫命為妃。居於虚天而生兒号天津彦々火瓊々杵尊。因欲以皇孫代親而降矣。天照太神詔任曰（白）可降矣。宜以天兒屋命天太玉命及諸部神等皆悉相授。亦（且）服御之物一依前授矣。然後天忍穂耳尊更還復於天上矣。

古語拾遺云、于時天祖天照太神、高皇産靈尊及相語曰、夫葦原瑞穂國者、吾子（孫）可王之地。皇孫就而治焉。寶祚之隆、當与天壤无窮矣。即以八咫鏡及草薙劍二種神寶、授賜皇孫、永為天璽。（所謂神璽鏡劍是也。）矛、玉自從、即勅曰、吾兒視此寶鏡、當猶視吾。（可與）同床共殿以為齊鏡。仍以天兒屋命太玉命天鈿女命、使配侍焉。因又勅曰、（吾）則起樹天津神籬、及天津磐境、當為吾孫奉齊矣。汝天兒屋命太玉命二神、宜持天津神籬、降於葦原中國、亦為吾孫奉齊焉。惟尓二神共侍殿内、能為防護。且以吾高天原所御、齊庭之穂（是稲種也。）亦（尓）當御於吾兒矣。宜太玉命率諸部神、供奉其職、如天上儀。仍令諸神亦与陪從。復勅大物主神、宜領八十万神、永為皇孫奉護焉。仍（使）大伴遠祖、天忍日命帥来目部遠祖、天槵津大来目、帶仗（杖）前驅云々。亦云、既而且降之間、先驅還白、有一神居天八達

璽ノ上寫天アリ

道寫導ニ作ル又寫ヨリ神也マデ御注

之衢云云。同日本書紀說。

神皇實錄云、天照太神手持寶鏡授天皇孫尊、而祝之曰、視此寶鏡當猶視吾。可与同床共殿以爲齋鏡。寶祚之隆當与天壤无窮矣。則授八坂瓊曲玉、及八咫鏡、草薙劍三種寶物、永爲璽。矛玉自從矣。惟皇祖天御中主神与大日孁尊盟宣久、天皇孫尊如八咫瓊之勾以曲妙治天下。且如白銅鏡以分明看行山川海原、乃提是靈劍平天下矣。詔天兒屋命天太玉命曰、惟尓二神亦同侍殿內善爲防護焉。亦詔天鈿賣命、同使配侍焉。皇孫尊天之磐座押放天之八重雲伊豆千別而千別矣筑紫日向之高千穗槵觸之峯天降居奉道猿田彥太神也。吾將顯伊勢乃狹長田五十鈴河上也。以天逆戈爲宮處璽宣旨矣。

神皇系圖云、天照皇神誓曰、太子如八咫瓊之勾以曲妙御宇且如白銅鏡以分明看行山川海原、乃提神劍平天下焉。肆以名之三種神璽也。汝敬承吾壽乎抱流鈴以御无窮无念尓祖、吾在鏡中焉。式臨寶位以鎭元元、上則答乾靈授國之德、下則弘皇孫養正之心、然後兼六合以開都掩八紘而爲帝宅詔給矣。

天口事書云、皇親神魯伎神魯美命以弖、皇御孫之命乎天津高御座尓坐、天津璽乃劍鏡乎捧持賜言

壽宜（古語云、天神壽辭之詞）皇我宇都（珍當大寶）御子皇御孫之尊、若天津瓊玉戈曲妙尓天津高御座坐且、天津日嗣乎万千秋乃長秋（神當此其義也）大八洲乃豐葦原瑞穗之國（古語云、瑞穗者豐穗也）安國（古語浦安）平知食言寄奉賜云云。亦云、皇天盟宜久、天皇如二八坂瓊之勾一久尓以二曲妙一天治二御宇一乃政、且如二眞經津鏡一久尓以二分明一看二行山川海原一與、即提二是靈劍一天平二天下一天利二万民一度言壽布

豐受太神御鎭坐本紀云、天地初發之時、大海之中有二一物一浮、形如二葦牙一。其人（中大）神人化生、名号二天御中主神一。故号二豐葦原中國一。亦因以曰二（大）豐受皇太神一（也）。与二天照大日孁尊一（舉大）、此（以二大）八坂瓊之曲玉、八咫鏡、及草薙劍三種之神財一、而授二（賜大）皇孫一、爲二天璽一視二此寶鏡一當レ（猶大）レ視レ吾。可下与同レ床共レ殿以爲二齋鏡一。寶祚之隆、當下與二天壤一无上レ窮宜焉。皇孫天津彦火瓊々杵尊、伴神天兒屋命、以天津詞辭之太祝詞一令レ掌二解除一。太玉命、捧二大幣一天村雲命、取二太玉串一奉レ仕。天神地祇前後尓相從且、闢二天關一（披大）披二雲路一（介大）駈仙蹕比、（天之）八重雲（乎大）伊頭千別尓千別天筑紫日向高千穗槵觸之峯尓天降到居焉。

倭姫命世記云、于時以八坂瓊之曲玉、八咫鏡（大）及草薙劍三種之神財一且、授二賜皇孫一、永爲二天璽一上、視二此寶鏡一古止、當レ（猶大）視レ吾。可下與同レ床共レ殿（之且）以爲中齋鏡上志、寶祚之隆、當下與二

天壤ニ无キ等志比宣比伎。即天津彦火瓊々杵尊止、伴神天兒屋命掌ニ解除ニ。云云。太玉命捧ニ青和幣白和幣ニ(介大)天牟羅雲命取ニ太玉串ニ天、三十二神前後仁相副從(比大)天、各關ニ大關ニ破、披ニ雲路ニ介弖、駈仙蹕(比大)天之八重雲(乎大)伊頭之千別介千別天、筑紫日向高千穗槵觸之峯介天降到給比弖、治ニ天下ニ三十一万八千五百卅(卅大)三年。

天地麗氣府錄云、尓時八十諸神達議曰、中國初葉天下无レ王、非レ應レ命者不レ能治之。能王之者其在ニ誰神ニ乎。諸神議曰、皇孫杵獨王也。吾勝尊異名也。皇孫名亦如レ此。神尊以爲レ然曰、中國初定万物有ニ靈所以草樹稱宮魔神競扇。令ニ以レ杵就之爲ニ中國王ニ。賜ニ玄龍車(ニタヘノヲクルマ)、追眞床之緣錦衾(ウヘノキヌ)、八尺流大鏡、赤玉寶鈴、草薙八握劍ニ。而壽レ之曰、嗟呼汝杵敬承ニ吾壽ニ、抱ニ流鈴ニ以御無レ窮无レ念ニ尓祖ニ、吾在ニ鏡中ニ矣。尓時御祖天王如來御中主神極天祖高皇產靈皇神授ニ天璽瑞寶十種於杵獨王ニ給矣。私云瑞寶十種爰舊事本紀所レ載具ニ神器篇ニ、以ニ今說ニ可レ爲レ異乎　天照皇太神持ニ寶鏡而祝之宣久、吾兒視ニ此寶鏡ニ當猶レ視レ吾。可ニ與同レ床共レ殿以爲ニ齊鏡ニ。寶祚之隆、當與ニ天壤ニ无レ窮矣。又授ニ八坂瓊曲玉、及八咫鏡、草薙劍三種寶物ニ。永爲ニ天璽ニ、矛、玉自從矣。盟言如ニ八咫瓊之勾ニ、以ニ曲妙ニ治ニ天下ニ、且如ニ白銅鏡ニ以ニ照兩眼ニ、看ニ行海原ニ、乃提ニ是靈劍ニ平ニ天下惡宴ニ矣。以ニ天兒屋命ニ爲ニ奉レ禱大將軍

忍寶押

之寶ナシ

押寶神

神ハ天太玉命爲ニ掌レ幣神ハ天鈿女爲ニ納レ珠神ハ石凝姥爲ニ納レ鏡神ハ玉屋爲ニ納レ玉神ハ乃使レ陪ニ皇孫ニ而降之。

三十二神者、舊事本紀三曰、天照太神詔曰、豐葦原之千秋長五百秋長之瑞穗國者、吾御子正哉吾勝々速日天忍穗耳尊可レ知之國者〔ル「シ」〕。言寄詔(賜寶)而天降之時、高皇産靈尊兒思兼神妹万幡豐秋津師姫栲幡千(千寶)姫命爲レ妃、誕ニ生天照國照彥(天寶)火明櫛玉饒速日之尊ニ之時、正哉吾勝々速日天押穗耳尊奏曰、僕欲レ將レ降裝束之間所レ生之兒。以レ此可レ降矣。詔而許レ之。天神御祖詔、授ニ天璽瑞寶十種一。具載ニ別卷一。高皇産靈尊勅曰、若有下葦原中國之敵、拒ニ神人一而待戰者上。能爲ニ方便一誘レ欺防拒而令ニ治平一。(令ハ)三十二人並爲ニ防衞一天降供奉矣。

天香語山命。尾張連等祖。 天鈿賣命。猨女君等祖。 天太玉命。忌部首等祖。 天兒屋命。中臣連等祖。 天櫛玉命。鴨縣主等祖。 天道根命。川瀨造等祖。 天神玉命。三島縣主等祖。 天椹野命。中島(跡寶)直等祖。 天糠戶命。鏡作連等祖。 天明玉命。玉作連等祖。 天村雲命。度會神主等祖。 天背男〔神立カ〕命。山背久我直等祖。 天御陰命。凡河內連〔直寶〕等祖。 天造日女命。阿曇連等祖。 天世手命。久我直等祖。 天斗麻彌命。額田部湯坐連等祖。 天背男命。尾張中嶋海部直等祖。 天玉櫛彥命。間人連等祖。 天湯津(彥寶)命。安藝國造等祖。 天押魂命。

名（寛）根　酒人（寛）須尺　供（寛）共

葛野鴨縣主等祖。天三降命。豐田宇佐國造等祖。天日神命。縣主〔延ナシ〕對馬縣主等祖。天乳速日命。已下或本無天字廣湯〔湍延〕神麻續連等祖。天八坂彥命。
伊勢神麻續連等祖。天伊佐布魂命。倭久〔文延〕連等祖。天伊岐志邇保命。山城國造等祖。天活玉命。新田部直等祖。天少彥名
命。鳥取連等祖。天支湯彥命。宛〔坂寛〕尾連等祖。天表春命。八意思兼兒也。信乃阿智祝部等祖。天下春命。武藏秩父國造等祖。天月神命。
壹岐縣主等祖。副二五部人一爲レ從天降供奉。物部造〔造寛〕等祖天津麻良。笠縫部等祖天曾蘇。
爲奈部等祖天津赤古〔占寛〕。十市部首等祖富々侶。筑紫弦田物部等祖天津赤星。五部
造爲二伴領一率二天物部一天降供奉。二田造。大庭造。舍人造。遺〔魚蒸〕造。坂戶
造。天物部等二十五部人。同帶二兵杖〔仗延〕一天降供奉。二田物部。當麻物部。芹田
物部。鳥見物部。横田物部。島戶物部。浮田物部。卷〔巷寛〕宜物部。忌〔足寛〕
田物部。酒人物部。田尻物部。赤間物部。久米物部。狹行〔竹寛〕物部。大豆物
部。眉〔眉寛〕野物部。羽束物部。尋津物部。布都留物部。住跡物部。讃岐三野
物部。相槻物部。筑紫聞物部。播磨物部。筑紫贄田物部。船長同供率二領梶取
等一天降供奉。船長跡部首等祖天津羽原。梶取阿刀造等祖天麻良。船子倭鍛師等祖天

津眞浦。
饒速日尊稟天神御祖詔、乘天磐船而天降坐於河內國河上哮峯。則遷坐於大倭國鳥見白庭山。所謂乘天磐船而翔行於大虛空、巡睨是鄕而天降坐矣。所謂虛空日本國是歟。饒速日尊便船（舊本無船）娶長髓彥妹御炊屋姬爲妃。令姙胎矣。未及産時、饒速日尊既神去坐矣云々。亦云、天照太神手持寶鏡、授天忍穗耳尊、而祝之曰云云。具載上。天押穗耳尊、以高皇産靈尊女栲幡千千姬万幡姬命爲妃。居於虛天生兒号天津彥彥火瓊々杵尊。因欲以（此實）皇孫代親而降矣。天照太神詔任曰（白實）可降矣。（宜實）以天兒屋命天太玉命及諸部等皆悉相授。亦（且實）服御之物一依前授矣。然後天忍穗耳尊更還復於天上矣。
亦云、栲幡千々姬命爲妃誕生二男矣。況（兄實）天照國照彥天火明櫛玉饒速日尊、弟天饒石國饒石天津彥々火瓊々杵尊。
亦同五曰、天照國照彥天火明櫛玉饒速日尊、亦名天火明命、亦名天照國照彥天火明尊、亦云饒速日命。亦名膽杵磯丹杵穗命。天照太神高皇産靈尊相共所生。故謂天孫亦稱皇孫（矣實）
天祖以天璽瑞寶十種、授饒速日尊。則此尊稟天神御祖詔、乘天磐船而天降坐於河內國河

哮延哮

大ノ上寳於アリ

記寳紀

校云此處誤脫アルカ

燭ノ上匹故アリ

上哮峯。則遷坐大倭國鳥見白庭山。天降之儀明天神記。云々。　三十二神事、日本書紀无所見。舊事本紀具言之。初天照太神高皇産靈尊相議欲降天忍穗耳尊爲葦原中國主。依皇孫之誕生、所代親而降也。而據舊事本紀說、皇孫有兩人。先降饒速日尊、後降彥火瓊々杵尊也。於三十二神者、有從饒速日之文。无伴瓊々杵尊之所見。但見別所說天香語山命者、饒速日命在天上時、娶天道日命所生也。隨御祖天孫尊自天降坐於紀伊國熊野也。云々。伴命專爲三十二神之首、隨父神者偏難稱伴類。加之隨御祖天孫尊天降云々。以之思之自余伴神同奉從瓊々杵尊云可无妨歟。或書之說不載如此之委曲、直言瓊々杵尊伴神、似不盡其理也。時彼國有美人。名曰鹿葦津姬、亦名神吾田津姬、亦名木花之開耶姬皇孫問此美（人。曰カ）誕生所代而降也。而據舊事本紀皇孫有兩人、先降饒速日尊。幸之即一夜而有娠。皇孫未之信曰、雖復天神何能一夜之間令人有娠乎。汝所懷者必非我子歟。鹿葦津姬忿恨。乃作無戶室入居其內。而誓之曰、妾所娠若非天孫之胤必當焦滅。如實天孫之燭（胤カ）火不能害。即放火燒室。始起烟末生出之兒号火闌降命。是隼人等始祖也。次避熱而居生出之兒号彥火々出見尊。次生出之兒号火明命。是尾張連等始祖也、私云天火明命者、吾勝尊兒、尾

吾ノ上𠘧亦アリテ上ノ久ナシ

炎ノ上𠘧火アリ又𠘧ナシ

頭通等遠祖。云一書說是上篇異耳 凡三柱子矣。久之天津彥々火瓊々杵尊崩。因葬筑紫日向可愛（此云埃）之山陵。

一云、復（後ル）遊幸海濱見一美人。皇孫問曰、汝是誰之子耶。對曰、妾是大山祇神之子、名神吾田鹿葦津姫、亦名木花開耶姫。因白、吾姉磐長姫在。皇孫曰、吾欲以汝爲妻如之何。對曰、妾父大山祇神在、請以垂問。皇孫因謂大山祇神曰、吾見汝之女子。欲以爲妻。於是大山祇神及（乃ル）使二女持百机飲食奉進。時皇孫謂、姊爲醜不御而罷。妹有國色引而幸之。則一夜有身。故磐長姫大慙而詛之曰、假使天孫不斥妾而御者、生兒永壽有如磐石之常存。今既不然。唯弟獨見御。故其生兒必如木花之移落。一云、磐長姫恥恨而唾泣之曰、顯見蒼生者、如木花之俄遷轉當衰去矣。此世人短折之緣也。是後神吾田鹿葦津姫見皇孫曰、妾孕天孫之子、不可私以生也。皇孫曰、雖復天神之子如何一夜使人娠乎。抑非吾之兒歟。云々。燄初起時共生兒號火酢芹命、次火滅（盛ル）時生兒號火明命、次生兒號彥火々出見尊、亦號火折尊。

一云、初火燄明時生兒、火明命、次炎盛時生兒、火進命、又云火酢芹命。次避火炎時生兒、火折彥々火火出見尊、凡三子火不能害。及母亦无所少損。時以竹刀截其兒臍。其所棄竹刀終成

竹林。故号彼地曰竹屋。時神吾田鹿葦津姫以卜定田、号(曰)狹名田。以其田稻釀天甜酒嘗之。又用渟浪田稻爲飯嘗之。

一云、天孫幸大山祇神之女子、吾田鹿葦津姫。則一夜有身。遂生四子。故吾田鹿葦津姫抱子而來進曰、天神之子寧可以私養乎。故告狀知聞。是時天孫見其子等嘲之曰、妍哉吾皇子者聞喜而生之歟。故吾田鹿葦津姫乃慢曰、何爲嘲妾乎。天孫曰、心之疑矣、故嘲之、何則雖復天神之子豈能一夜之間使人有身者哉。固非我子矣云々。其火初明時躡誥出兒自言、吾是天神之子、名火明命。吾父何處坐耶。次火盛時躡誥出兒亦言、吾是天神之子、名火進命、吾父及兄何處在耶。次火炎衰時躡誥出兒亦言、吾是天神之子、名火折尊、吾父及兄等何處在耶。異說　次避火熱時躡誥出兒亦言、吾是天神之子、名彥火々出見尊、吾父及兄等何處在耶。然後母吾田鹿葦津姫自火燼中出來就而稱之曰、妾所生兒及妾身自當火難无所少損。天孫豈見之乎。報曰、我知本是吾兒。但一夜而有身、慮有疑者、欲使衆人皆知是吾兒、并亦天神能令一夜有娠、亦欲明汝有靈異之威、子等復有超倫之氣。故有前日之嘲辭也。

經織[四] 織社

子ノ下[元]女アリ

哥ノ下[元]之アリ又歌ノ文字少シ異ル

時ノ下[元]既アリ

一云、天孫又問曰、其於二秀起浪穗之上一起二八尋殿一、而手玉玲瓏經織之小女者是誰之子耶。答曰、大山祇神之女等、大号二磐長姫一少号二木花開耶姫一、亦号二豐吾田津姫一。則一夜而有身。皇孫疑之云々。遂生二火酢芹命一、次生二火折尊一、亦号二彥火々出見尊一。母誓已驗、方知實是皇孫之胤。然豐吾田津姫恨二皇孫一不二與共言一。皇孫憂之。乃爲哥曰、憶企都茂播、陛尒播譽戻耐母、佐禰耐據茂、阿黨播怒介茂譽、播磨都智耐理譽。

一云、天忍骨命生二天之杵火々置瀨尊一、杵瀨尊娶二吾田津姫一生レ兒、火明命、次火夜織命、次彥火火出見尊。

一云、娶二木花開耶姫一而生レ兒、号火酢芹命、次彥火々出見尊。

或書云、治二天下一三十一万八千五百三十三年彥火々出見尊。天津彥々火瓊々杵尊子也。

日本書紀曰、兄火闌降命、自有二海幸一。幸此云二左知一。弟彥火々出見尊自有二山幸一。始兄弟二人相語〈謂ル〉曰、試欲レ易レ幸。遂相易之。各不レ得二其利一。兄悔之乃還二弟弓箭一而乞二己釣鉤一。弟時失二兄鉤一无レ由二訪覓一、故別作二新鉤一與之〈兄ル〉、兄不二肯受一而責二其故鉤一。弟患之即以二其橫刀一鍛二作新鉤一、盛二一箕一而與レ之。兄忿之曰、非二我故鉤一雖レ多不レ敢〈取ル〉。益復急責。故彥火々出見

(尊)憂苦甚深。行吟海畔。時逢塩土老翁(伊弉諾尊子也見)。々々問曰、何故在此愁乎。對以憂之本末。老翁曰、勿復憂苦(匹ナシ)。吾當爲汝計之。乃作无目籠内彥火々出見尊於籠中沈之于海。即自然有可怜小汀。於是寄(棄)籠遊行。勿(忽)至海神之宮。其宮也雉堞整頓、素(匹ナシ)臺宇玲瓏。門前有一井、々上有一湯津杜樹枝葉扶疏。時彥火々出見尊就其樹下徙倚彷徨。良久有一美(人)排闥而出。遂以玉鋺來當汲水。因擧目視之。乃驚而還入、白(其)父母(曰)有一希客者在門前樹下。海神於是鋪設八重席薦以延内之。坐定。因問其來意。時彥火々出見尊對以情之委曲。海神乃集大小之魚逼問之。僉曰、不識。唯赤女(赤女、鯛魚名也、一云口女、々々即鯔魚也。海神制曰、儞口女從今以往不得呑餌。又得預天孫之饌。即以口女魚所以不進御者此其緣也。)比有口疾而不來。固召之、探其口者果得失鉤。已而彥火々出見尊因娶海神女豐玉姬。仍留住海宮已經三年。彼處雖復安樂猶有憶鄕之情。故時復太息。豐玉姬聞之謂其父曰、天孫悽然數歎。蓋懷土之憂乎。海神乃延彥火々出見尊從容語曰、天孫若欲還鄕者、吾當奉送。便授所得鉤。因誨之曰、以此鉤与汝兄時、則陰呼此鉤曰貧鉤、然後与之。復授潮滿瓊及潮涸瓊而誨之曰、漬潮滿瓊者則潮亦(忽)滿。以此沒溺汝兄。若兄悔而祈者、還

潰潮涸瓊、則潮自涸、以此救之。如此逼悩玉、則汝兄自伏。及將歸去、豐玉姫謂天孫曰、妾已娠矣。當產不久、妾必以風濤急峻之日出到海濱、請爲我作產室相待矣。彥火々出見尊已還宮、一遵海神之敎。時兄火闌降命、旣被厄困、乃自伏罪曰、從今以後、吾將爲汝俳優之民、請施恩活。於是隨其所乞遂赦之。其火闌降命卽吾田君小橋等之本祖也。後豐玉姫果如前期、將其女弟玉依姫、直冒風波來到海邊。逮臨產時、請曰、妾產時幸勿以看之。天孫猶不能忍、竊往覘之。豐玉姫方產化爲龍。而甚慙之曰、如有不辱我者、則使海陸相通、永无隔絕。今旣辱之、將何以結親昵之情乎。乃以草裹兒棄之海邊。閉海途而徑去矣。故因以名兒曰彥波瀲武鸕鷀草葺不合尊。後久之彥火々出見尊崩。葬日向高屋山上陵。

一云、豐玉姫化爲八尋大熊鰐、匍匐逶蛇。遂以見辱爲恨。則徑歸海鄕、留其女弟玉依姫持養兒焉。所以兒名稱彥波瀲武鸕鷀草葺不合尊者。以彼海濱產屋全用鸕鷀羽爲草葺之。而甍未合時兒卽生焉。故因以名焉。

一云、火酢芹命乃伏罪曰、吾已過矣。從今以後吾子孫八十連屬、恒(當)爲汝俳人。一云、

婦ノ上乃姫アリ

狗人請哀之、弟還出涸瓊則潮自息。於是、兄知弟有神德、遂以伏事其弟。是以火酢芹命苗裔諸隼人等、至今不離天皇宮墻之傍、代吠狗而奉事者矣。世人不債失針此其緣也。

一云、彥火々出見尊已還鄕。即以鸕鷀之羽葺爲產屋。屋甍未及合、豐玉姫自馭大龜將女弟玉依姫光海來到。時孕月已滿產期方急。由此不待葺合徑入居焉。云云。而知天孫視其私屏深懷慙恨。既兒生之後、天孫就而問曰、兒名何稱者當可乎。對曰、宜號彥波瀲武鸕鷀草葺不合尊。言訖乃涉海徑去。于時彥火々出見尊乃歌之曰。飫企都鄧利。軻茂豆句志磨介、和我謂禰志。伊茂播和素邏珥。譽能據鄧馭鄧母。亦云、取婦人爲乳母湯母及飯嚼湯坐。凡諸部備行以奉養焉。于時權用他婦以乳養皇子焉。此世取乳母養兒之緣也。是後豐玉姫聞其兒端正心甚憐重欲復歸養。於義不可。故遣女弟玉依姫以來養者也。于時豐玉姫命寄玉依姫而奉報歌曰、阿軻娜磨廼。比訶利播阿利登、比鄧播伊珮耐。企弭我譽贈比志。多輔妬句阿利計利。凡此贈答二歌〔首ル〕号曰舉歌。

一云、置兒於波瀲者非也。豐玉姫命自抱而去。久之曰、天孫之胤不宜置此海中。乃使玉依姫持之送出焉。　或書云、治天下六十三万七千八百九十二年。

彥波瀲武鸕鷀草葺不合尊、彥火々出見尊子也。日本書紀曰、其姨玉依姫爲レ妃、生ニ彥五瀨命ー。次稻飯命、次三毛入野命、次神日本磐余彥天皇（尊ル）。凡生ニ四男ー、久之彥波瀲武鸕鷀草葺不合尊崩ニ於西洲之宮ー。因葬ニ日向吾平山上陵ー。

一云、先生ニ彥五瀨命ー、次稻飯命、次神日本磐余彥尊（九シ）火々出見尊、次稚三毛野命。

一云、先生ニ五瀨命ー、次三毛野命、次稻飯命、次磐余彥尊。

一云、先生ニ彥五瀨命ー、次磐余彥火々出見尊、次彥稻飯命、次三毛入野命。

一云、先生ニ彥五瀨命ー、次稻飯命、次三毛入野命、次狹野尊、亦号ニ神日本磐余彥尊ー。所レ稱狹野者、是年少時之号也。後撥ニ平天下ー奄ニ有八洲ー。故復加レ号曰ニ神日本磐余彥尊ー。

或書云、彥波瀲武鸕鷀草葺不合尊、治ニ天下ー八十三万六百四十二年。

已上三代治天下都盧一百七十九万二千四百七十六年云々

元元集卷第四　終

元元集卷第五

○神器傳受篇

豐葦原千五百秋之瑞穗國者、大八洲未レ生以前已有二其名一、雖レ有二名字一而無二形相一、强字二其形一爲二天瓊矛一者也。大八洲國者即瓊矛之所レ成其中心号曰二大日本日高見一、又号曰二天御虛空豐秋津根別一。後分爲二數國一。大八洲國又各有二名字一、今俗所下以惣二合八洲一名中大日本上者、由二大日孁貴降靈一故自有二此名一。以二八咫寶鏡一鎭二于此地一。即是表二其心府一者也。凡我國之所二以殊二諸方一者、以二神國一也。神國之所二以有二靈異一者、以二寶器一也。是故天地開闢以來神器靈物往々以存。初於二天瓊矛一至二三種神璽一、出處緣起大底見二先篇一、爲レ擊二愚蒙一重以廣レ之而已。

天瓊矛

裏書云。

戈　玉篇云、古禾切、平頭戟、長六尺六寸。韻會云、說文戈平頭戟也。以二弋一一橫レ之象形也。徐云、謂戟小支向則爲レ戟、平之則爲レ戈。一曰、戟偏距爲レ戈。禮記注疏、鉤子戟如レ戟而橫安レ刄、但頭彎レ上爲レ鉤也。周禮注、戈長六尺四寸、廣二寸、肉倍

レ之胡三レ之、援四レ之 以其形勾曲有レ旁刃 箋云、君令二鶴鳴戟一、又疏云、戈両刃、長六尺六寸。

矛

玉篇云、莫侯切、酋矛長二丈、建二兵車一、古文𢦏。

韻會云 說文曰酋矛也。建二於兵車一。長二丈、象形。徐曰、句兵也 酋矛長矛也、了矛也。引其上所註

鹿車建者邪建立之也。周禮、酋矛長常有、又十六尺爲レ常也。詩二矛注、矛奠之間謂二之鋋一、音蟬、或謂二

之鋋一、音蟬、或謂二之鏦一、音錯紅切、集韻、或作レ𢦏、鉾、音贊説刻作レ鉾。字林云、鉾古矛字。

日本書紀曰、伊弉諾尊伊弉冉尊、立二於天浮橋之上一共計曰、底下豈無レ國歟。廼以二天之瓊（瓊玉也、此云レ努）矛一指下而探レ之。是獲二滄溟一、其矛鋒滴瀝之潮、凝成二一嶋一、名レ之曰二磤馭慮嶋一。二神於是降二居彼嶋一、因欲下共爲二夫婦一産中生洲國上。便以二磤馭慮嶋一爲二國中之柱一。（柱、此云二美簸旨邏一。）

脩ル循
類史八
今ト同
ジ

同一書曰、天神謂二伊弉諾尊伊弉冉尊一曰、有二豐葦原千五百秋瑞穗之地一。宜二汝往脩一之。廼賜二天瓊戈一。於是二神立二於天上浮橋一、投レ戈求レ地。因畫二滄海一而引擧之。即戈鋒垂落之潮、結而爲レ嶋、名曰二磤馭慮嶋一。二神降二居彼嶋一、化二作八尋殿一、又化二竪天柱一。

亦曰、二神立二于天霧之中一曰、吾欲レ得レ國。乃以二天瓊矛一指垂而探レ之、得二磤馭慮嶋一。則拔レ矛而喜之曰、善乎國之在矣。

亦曰、以二天瓊矛一畫成二磤馭慮嶋一。

亦曰、以天瓊矛探成嶋、名曰磤馭盧嶋。

舊事本紀曰、天祖詔伊弉諾伊弉再二尊曰、有豐葦原千五百秋瑞穗之地、宜汝往脩之。則賜天瓊矛而詔寄賜也。伊弉諾伊弉再尊奉詔、立於天浮橋之上、共計謂、有物若浮膏、其中蓋有國乎。迺以天瓊矛而探之。獲(是覓)滄海。則投(指延)下其矛、而因畫滄海而引上之時、自矛末落垂滴瀝之潮凝結而爲嶋、名曰磤馭盧嶋矣。則以天瓊矛(指覓)立於磤馭盧嶋之上、以爲國中之天柱也。

尊　正福寺本命ニ作ル

古事記曰、天神諸(諸)命以、詔伊耶那伎尊、伊耶那美命二柱神、脩理固成是多陀用幣流之國。賜天沼矛而、言依賜也。故二柱神立天浮橋而、投(指)下其沼矛以畫者、塩許々袁(袁)々呂々迩畫鳴而、引上時、自其矛末垂落塩之累積成嶋。是淤能碁呂嶋。於其嶋天降坐而、見立天之御柱、見立八尋殿。

塩之　大之塩ニ作ル本ハ今ト同シ

神皇系圖曰、爰蒙天祖天御中主高皇產靈尊之宣命、天、以授天獨矛而、諸尊立於天浮橋之上、二神共計曰、底下豈无國歟。遂以天獨矛指下而探之、獲滄溟。其矛鋒滴瀝之潮凝成一嶋、名云磤馭盧嶋。二神於是降居此嶋、興八尋殿。社記曰、大日本日高見國神祇齊川今此處也。

与天先出 日名 天瓊ヲ 逆ニ作 リ上ニ 亦稱尸 梵大梵 天王ア リ 因慈ト ナシ 柱ノ下 也アリ 立ニ乎 鎧本 天上 ニ于ア リ

神皇實錄曰、伊弉諾伊弉冊二尊、承天御中主神詔、卽以天瓊戈指立於磤馭盧嶋之上、以爲國中之天柱。則化竪八尋殿共住。

大和葛城山記曰、夫水則爲道之源流、万物之父母。故長養森羅万像、當知天地開闢當水變爲天地。以降高天海原有獨化靈物。其狀如葦牙、不知其名。尒時靈物中円理志大神聖化生。名之曰天神。亦曰大梵天王。建于天地代名靈物稱天瓊玉戈。亦名金剛寶杵。爲神人之財。至于地神代謂之天御量柱、國御量柱。因慈興于大日本洲中央、名爲常住慈悲心王柱。此則正覺正智寶坐也。故名心柱。天地人民東西南北、日月星辰、山川草木、惟是天瓊玉戈乃所變、不二五等妙躰也。法起主宣、心柱是獨古三昧耶形、金剛寶杵。所謂獨一法身智劍也。

亦曰、以昔日子伊弉諾尊月子伊弉冊尊從吾天勅宣、天、受天瓊玉戈立山跡中央爲國家心柱、造八尋殿。

亦曰、獨古變成御衞（今宮所則當世宮殿內奉納、俗曰、五十鈴川宮瀧祭寶瓦座御座瀧祭宮是也。名瀧宮城也。亦号備宮也、）神語神寶形大洲入法性海中、用天瓊玉戈、而降伏從顚妄想、到秘藏淸淨本地。故一心不亂、万法无咎、只切忌不淨猛

群寶山是峯是　也　十群百　宮群ナ　シ　名群上ニ是アリ　大ノ下群八アリ　列秘群至穩　咎群外　只ノ下是アリ　戈ノ下群亦名天逆矛アリ　柱ノ下群國御量柱

利人ニ耶。夫天瓊玉戈、亦名ニ魔反戈ニ、亦名ニ金剛寶劍ニ、亦名ニ天御量柱ニ、亦名ニ常住心柱ニ、亦名ニ忌柱ニ也。惟是天地開闢之圖形、天御中主神寶、獨股變形神、佛神通群靈心識、正覺正智金剛坐也、亦名ニ心蓮ニ也。

天口事書曰、此書一卷、舒明天皇壬辰、大神主調書寫、推古天王庚戌太子及大臣令錄國秘記神殿本紀等云云　八坂瓊戈天地開闢始、浮ニ高天海原ニ神寶是也。神語破者古語天逆桙、天逆大刀。俗曰、魔返杵、亦名ニ天乃登保言ニ、此名ニ天璽ニ也。又云、天御量柱者、天瓊戈異名同躰坐也。

鉾　類書
頭會云、鉾、古矛字。
私云、從禾之字未ㇾ見

行基作
大宗秘府曰、天瓊玉戈、亦名天逆矛、亦金剛寶劍、亦天御量柱、亦心御柱也。惟是天地開闢之圖形、天御中主神寶、獨股變形坐也。諸佛菩薩一切群靈心識之根本、一切國王之父母也。

弘法作
神宮秘文曰、當知天瓊玉戈雨乃度保古、是天神手持物也。梵言云ニ縛曰羅ニ。本書云、天之瓊玉戈雨之万賀惠保古佛說觸古、亦名ニ天之逆杵ニ雨之万賀惠度之、亦云ニ天之逆大刀子ニ。雨之美計波志羅、亦云ニ天御量柱ニ、亦名ニ心御柱ニ焉。蓋瓊玉者、心珠之表德万寶藏也。杵者神靈智劍、能伏ニ衆魔ニ也。所謂万法一心性、柱者天地象、神明鎮府、大象無ㇾ形現ニ獨一靈ニ也。都以名之曰ニ天瓊玉戈ニ。故万化根本、

貼群結
佛ノ上群譜アリ
正覺群ナシ
皇ノ上此アリ

五智元宗是也。

仙宮秘文曰、天皇孫尊、天降居之時、平鬼神治天下靈異物、有三百六十種之神寶。所謂天之八坂瓊曲玉戈玉裳比禮大衣白銅鏡類是。三百六十種之中、用以天瓊玉戈爲最長。而立國御量柱也。惟是初禪梵王應化之種、法界躰性智所顯露來也。稱獨古是形也。故名号心御柱。即是三千界大惣相妙躰也。所謂心性不生不滅 一切諸法唯是一心故現心相名神主也。

又云、天八坂瓊曲玉者、皇大之心珠、覺王寶珠也。天瓊戈者（亦名天逆戈、天神降靈之本致也。）大日覺王之獨股變成也。

舊事本紀曰、天照太神手持寶鏡授天忍穗耳尊而祝之曰、云云 則授八咫瓊曲玉、及八咫鏡、草薙劒三種寶物、永爲天璽。矛玉自從矣。

又云、欲以皇孫代親而降矣。天照太神詔任曰（白寶）可降矣。服御之物一依前授矣。云云。（並見于先奏）

古語拾遺曰、天照太神、高皇產靈尊、仍相語曰、夫葦原瑞穗國者、吾子孫可王之地也（匹ニシ）。皇

大系頭注云、板本作世非トシテ卅トス二百ナシ祭ノ下止ノ小字アリ

孫、就而治焉。寶祚之隆、當与天壤无窮矣。即以八咫鏡、及草薙劍二種神寶授賜皇孫、永(爲ル)天璽。所謂神璽劍鏡是也　矛、玉自從矣。

神皇實錄曰、天照太神手持寶鏡、授天皇孫尊而祝之曰云云、則授八坂瓊曲玉、及八咫鏡、草薙劍三種寶物、永爲天璽。矛玉自從矣。又云、皇孫尊天之磐座押放、天之八重雲伊豆千別而千別矣筑紫日向之高千穗槵觸之峯矣天降居奉導猿田彥大神也。吾將顯伊勢乃狹長田五十鈴河上也。以天逆戈爲宮處璽宣旨矣。

大倭姬命世紀曰、猿田彥神裔宇治土公祖大田命參相支。汝國名何問給尔、佐古久志呂宇遲之國止白弖、御止代神田進支。倭姬命問給久、有吉宮處哉。答白久、左古久志呂宇遲之五十鈴之河上者、是大日本國之中仁殊勝靈地尔侍奈利。其中、翁世二百八万歲之間仁毛未現知留靈物。照耀如日月奈利、惟少緣物不在志。定主出現御座、尔時可進止念比天彼處尔禮祭中勢利。即彼處仁往到給天、御覽介礼波、惟昔大神誓願給天、豐葦原瑞穗國之內仁、伊勢加佐波夜之國波、有美宮處利止見定給比、從天上志天投降坐比志天之逆大刀、逆鉾、金鈴等是也。其甚喜於懷比弖言上給比岐。

大田命傳云　二所皇太神御鎭座本紀曰、今歲垂仁天王二十年春三月　猿田彥大神壽覺白久、南大峰有美宮處、佐古久志呂

是ナシ
十ノ下太五アリ
壽ノ上太參乃言アリ
珍太彌
現太袒

宇遲之五十鈴之河上者、大八洲之內珍奇(メヅラキ)靈地也。隨翁之出現二百八(万)余歲之前尓毛、未現知留有靈物利。照耀如大日輪(也)、惟鏃之物尓不在須。定主出現御座耶念太。倭姬命曰、理實灼(灼大)然。惟久代天地之大祖、天照皇太神、天御中主神。并神魯岐、神魯美命、誓言(弖)、豐葦原瑞穗國之內仁、伊勢加佐波夜之國波、有美宮殿(處大)利度、見定給比天、自天上志天、投降居給布、天之逆大刀、天之逆鉾、大小之金鈴五十口、日之小宮之圖形文形等是也度天、天之平手乎拍給(比大)(弖)甚喜於懷●喩給、於此處仁遷造日(之)小宮給。

花嚴經菩薩住處品云、海中有處名金剛山現菩薩名曰法起云々

行基菩薩曰菩薩止住故三災不壞也當獄不動故云々

或記曰法起菩薩常住說法故名轉法輪山天照太神取點着故名朝熊獄八百万神達天降元故名神福山大日本國爲大福山云々

或記曰葛城峯之內有四十九所之伽藍此都率四十九重广尼寶殿即金剛界之大漫荼羅也云々

天地麗氣府錄曰、天瓊矛、天逆戈、天逆大刀件神寶藏瀧祭仙宮者也。亦号常世神、是瀧祭宮也。

寶山記曰、此寶杵則常世宮殿內奉納、俗曰、●五十鈴川瀧祭靈地底津寶宮是也。是名龍宮城

十 百

也。亦号二仙宮一也。見上

寛本 延喜式第九、大和國平群郡、龍田坐天御柱、國御柱神社二座。並名神大
延暦儀式帳　瀧祭神社、元(无カ)寶殿、延喜式不レ載之

倭姫命世記曰、瀧祭神。无二寶殿一。在二下津底一水神也。一名澤女神。亦名美都波神。或記曰、瀧祭神、廣瀨龍田神、則同躰異名水神也。故廣瀨龍田神名、号二天御柱、國御柱一。是天逆戈守護縁也。

亦云、酒殿天逆大刀、逆鉾、金鈴、藏納之

上件瓊矛者、天神所持之獨杵也。所謂先二天地一而自然成者也。所在雖レ未レ審、或云納二瀧祭仙宮一、或云納二五十鈴宮酒殿一、留二于神宮一已是炳焉。不レ可二强成一レ疑者也。一云、磤馭盧嶋者寶山也。昔陰陽二神持二天瓊矛一降居之地也。彼矛之神、化二成天御柱國御柱神一歟。更同

平國矛

則因便

日本書紀云、大己貴神則以二其子之辭一白二於二神一曰、我怙之子既避去矣。故吾亦當レ避。如吾防禦者國內諸神必當二同禦一。今我奉レ避誰復敢有二不順者一。乃以二平レ國時所杖之廣矛一授二二神一曰、吾以二此矛一卒有レ治レ功。天孫若用二此矛一治レ國者、必當二平安一。今我當於百不レ足之八十隈

校云 限の下 將隱去

云云

舊事本紀曰云云同上

古語拾遺曰、大己貴神及其子事代主（神並）皆奉避。仍以平國矛授二神曰、吾以此矛卒有治功。天孫若用此矛治國者、必當（常）平安。上件廣矛者地神所持之平國矛也。未知其留所。天孫降臨之日矛玉自從云云。天瓊矛與平國歟、管見不覃者也。

五十鈴

日本書紀一書曰、猿田彥太神對曰、吾先啓行。則應到伊勢之狹長田五十鈴川上。

大田命傳云、五十鈴之川上者、大洲之內珍圖之靈地也。亦云、大小之金鈴五十口云云。見上

裏書曰傳云、大小五十者非也。有秘說。云云。十字不可讀也。

三才三面鏡裏書一面者豐受宮、一面荒祭內宮、一面多賀宮外宮。

大田命傳云、凡神代靈物之義、猿田彥神謹白久、夫天地開闢之後、雖萬物已備、而莫照於混沌之前。因茲万物之化若存若亡、而下々來々、志天自不尊。于時國常立尊所化神、以天津御量事地輪之精金白銅撰集、地大水大火大風大神變通和合給比天、三才相應之三面眞經津寶鏡呼

此〔大〕ナシ
名ノ下〔大〕日アリ
神明ノ上〔大〕其時アリ
明ノ上〔大〕明知アリ
尊〔大〕神
歲〔大〕年
吉〔大〕與
饗〔大〕貪
以〔大〕ナシ

鑄造表給倍利。故此鑄顯神名天鏡尊。神明之道明現、天文地理以存矣。亦曰、崇神天皇御宇、止由氣皇太神天降坐天、天照皇太神與一處雙坐。于時從天上御隨身之寶鏡是也。神代天御中主尊所授白銅鏡也。是國常立尊所化神天鏡尊、月殿居所鑄造鏡也。三才三面之内、一面是也。亦云、御間城入彥五十瓊殖（殖大）天皇卅九歲壬戌、天照太神遷幸但波乃吉佐宮。積四年奉齊、今歲止由氣之皇神天降坐弖、合明齊德給、如天小宮之義志天、一處雙坐須。于時和久產巢日神子、豐宇氣姬命、稻靈神也奉備御神酒、亦丹波道主貴素戔烏尊孫、粟御子神是也。奉備朝大御饗、夕大御氣奉仕矣。其功已辭竟天止由氣大神復上高天原支。此處仁志天以白銅寶鏡弖、道主貴八小男童天日別命崇祭奉焉。

上代本紀云、天照太神伊勢國尓向幸給、止由氣太神復昇高天原天、日之小宮座。于時以吾天津水影乃寶鏡以留居吉佐宮給。

鎭座本紀云、泊瀨朝倉御宇天皇廿一年丁巳十月朔、倭姬命夢敎覺給云云。明年戊午秋七月七日、以大佐々命奉布理留。大佐々命、小和志理命、奉戴正躰興魂命、道主貴、奉戴相殿（神ル）斷仙蹕比、錦蓋覆、日繩曳、天御翳日御翳屛、奉行幸。尓時若雷神天之八重雲（平ル）四

校云、今二面以下八御匣ノ傳記ノ文住內位

津ノ下因師アリ

方尓薄靡天、爲ニ御垣ニ天、從ニ丹波國吉佐宮ニ遷ニ幸倭國宇太乃宮ニ。云云。秋九月望、從ニ解宮ニ遷ニ幸山田原之新殿ニ。具載別卷 今二面者、天鏡尊子、天万尊傳持(給ル)之。次沫蕩尊、次伊弉諾伊弉再尊傳(持給ル)天、神賀告詞白賜(旦ル)日神月神所レ化乃眞經津鏡是也。天地開闢之明鏡也。三才所顯之寶鏡也。當下受レ之以ニ清淨ニ(而ル)求レ之以ニ神心ニ。視レ之以中无相无住上。因々(无ナシ)以爲ニ神明之正躰ニ也。今崇祭一面荒祭宮御靈。一面多賀宮御靈坐也。云云。

十種瑞寶

舊事本紀曰、天照太神詔(日ル)、豐葦原之千秋長五百秋長之瑞穗國者、吾御子正哉吾勝々速日天押穗耳尊可レ知之國。言寄詔賜而天降之時、高皇産靈尊兒思兼神妹、万幡豐秋津姫栲幡千々姫命爲レ妃、誕ニ生天照國照彥天火明櫛玉饒速日尊ニ之時、正哉吾勝々速日天押穗耳尊奏曰、僕欲ニ將降ニ裝束之間所レ生之兒。以レ此可レ降矣。詔而許レ之。天神御祖詔、授ニ天璽瑞寶十種ニ。謂瀛都鏡一、邊都鏡一、八握劍一、生玉一、死反玉一、足玉一、道反玉一、蛇比禮一、蜂比禮一、品物比礼一是也。天神御祖教詔曰、若有ニ痛處ニ者、令ニ茲十寶ニ謂ニ一二三四五六七八九十ニ而布瑠部。由良由良止布瑠部。如此爲レ之者、死人反生矣。是則所レ謂布瑠之言本矣。

損（延）殞　下同ジ

神ノ下殞アリ　以命（延）ナシ

天ノ上（延）亦アリ

有（延）ナシ

見（延）美

饒速日尊稟天神（御祖寛）詔、乘天磐船而天降坐於河內國河上哮峯。則遷坐於大倭國鳥見白庭山。所謂乘天磐船而翔行於大虛空、巡睨是鄉而天降坐矣。所謂虛空見日本國（是寛）歟。饒速日尊便娶長髓彥妹御炊屋姬、爲妃令姙胎矣。未及產時、饒速日尊既神損去坐矣。而不復上天之時、高皇產靈尊詔速飄神曰、吾神御子饒速日尊所使於葦原中國。而有疑恠思耶。故汝能降可復白矣。于時速飄神（命寛）奉勅降來。即見神損去坐矣。則反上復命云、神御子者既神去亡坐矣。高皇產靈（尊寛）以爲哀泣（泣寛）、則使速飄命以命將上於天上。處其神死骸、日七夜七以爲遊樂、哀泣（泣寛）、斂於天上矣。亦曰、饒速日尊便娶長髓彥妹御炊屋姬爲妃、誕生宇麻志麻治命矣。先經姙身而未產之時、饒速日尊命婦女言、汝有姙胎、若有男子者、号味間見命、[矣]（寛等ナシ）若有女子者、号色麻彌命。既而所產男子矣。目（因寛）号味間見命矣。饒速日尊既神損去坐（云云）。饒速日尊以夢教（於妻寛）御炊屋姬曰、汝子如吾形見物。既授天璽瑞寶矣。天羽（羽寛）弓天羽々矢。復有神衣帶手貫三物、々々（寛ナシ）墓（葬寛）斂乃（寛ナシ）於登利（寛ナシ）見白庭邑、以此爲墓者也。亦曰、天照國照彥天火明櫛玉饒速日尊、天道日女命爲妃。天上誕生天香語山命、御炊屋姬爲妃。天下（寛ナシ）降

天孫ノ下字寛ナシ

誕ニ生宇摩志麻治命一。亦云、味間見命。亦云、可美眞手命。物部連等祖也。

亦云、天香語山命。天降右于騰東彦命。亦云卒(手寛)栗彦、高倉下命。尾張連等祖。此命、隨ニ御祖天孫尊一、自レ天降ニ生、坐ニ於紀伊國熊野邑一之時、磐余彦尊、發レ自ニ西宮一親師(帥寛)ニ船軍一、東征之時、往々逆レ命者、(者寛)蜂起未レ伏。中州豪雄長髓彦、勒レ兵相距。天孫連戰不レ能レ戡也。前到ニ于紀伊國熊野邑一。悪神吐レ毒人物咸萃(咸瘁寛)。天孫患レ之、不レ知レ出レ計。爰高倉(下命寛)在ニ此邑中一、夜夢天照太神謂ニ武甕槌神一曰、葦原瑞穗國猶聞ニ喧擾之響一、宜汝更往而征レ之。武甕槌神對曰、雖ニ予不一レ行、而下ニ吾平レ國時劍一、則自將レ平矣。乃謂ニ高倉下命一曰、予劍韴靈命、(今寛)當レ置ニ汝庫裏一。宜ニ取而獻ニ於天孫一矣。高倉下命稱ニ唯々一。寤而明日、且(旦寛)開レ庫視レ之、果有レ劍。倒ニ立於倉底一。因而獻焉。天孫適寐、忽然而寤(天孫ヽ)曰、予何長眠在ニ此乎。尋而中レ毒士卒悉復醒起矣。皇師起矣師(寛ナシ衍)趣ニ中洲一。天孫得レ劍、日增ニ威(稜寛)一。勅ニ高倉下一、褒爲ニ侍臣一也。

内ノ下寛取アリ

自寛日

裏書舊事本紀曰、建甕槌之男神、亦曰ニ建布都神一、亦名ニ豐布都神一、今坐ニ常陸國一、鹿嶋大明神也。石上布都大明神是也。

私云、布都主劍者、依ニ天照太神勅一、武甕槌神奉レ獻ニ神武天皇一之劍也。當味間見命功故賜之

推ノ上寛本アリ

劍ノ下寛師靈劍アリ

也。此劍乃爲二武甕神御靈一。仍以奉レ稱二布都主劍一大明神也。遷二坐鹿嶋一之年記、追可二勘見一也。

素戔烏尊斬レ蛇之劍号二天斬一。又名二蛇之麁正一在二劍神一何哉、同可二勘知一吏也。右石上社云云

一說在二吉備神部所石上一

延喜式第九云、大和國山邊郡石上布都御魂神社。名神大。

舊吏本紀云、宇麻志麻治命六世孫、武建大尼命云云。磯城瑞籬宮御宇遷二建布都太神社於大倭國山邊郡石上邑一云云。

亦云、天孫天御(津寛)彥火瓊々杵尊孫磐余彥尊、欲レ平(寂寛)二天下一、興レ師東征、(往々寛)逆レ命者、蜂起未レ伏。中洲豪雄長髄彥、推二饒速日尊兒宇麻志麻治(命寛)、以(爲寛)レ君奉焉。(至寛)此乃曰、天神之子豈有二兩種一乎、吾不レ知レ有レ他。遂勒レ兵距レ之。天孫軍違(戰是)不レ能レ戡也。于時宇麻志麻治命、不レ從二舅謀一、誅二殺狼戾一、師(帥寛)レ衆歸順之。時天孫詔二宇麻志麻治命一曰、長髄彥爲レ性狂迷。兵勢猛饒(鋭寛)、至二於敵戰一誰敢堪レ勝。而不レ據二舅計一、帥レ軍歸順。遂欵二官軍一。朕喜二其忠節一、特加二褒寵一授以二神劍一、答二其大勳一。凡厥神劍刀、亦名布都主神魂刀。亦

嘉（寛喜）
始ノ上（寛而アリ下同）
最（寛尤）
已（寛乙ト訂ス）

云佐土（土寛）布都。亦云建布都。亦云豊布都神是矣。復宇麻志麻治命、以天神御祖授饒速日尊天璽瑞寶十種。而奉獻於天孫。（天孫寛）大嘉、（特寛）増寵異矣。復宇麻志麻治命率天物部而剪夷荒逆。（亦寛）帥軍平定海内而奏之。

大歳辛酉正月庚辰朔云云。宇麻志麻治命先獻天瑞寶。亦云、布都主劍大神奉齋殿内。即藏天璽瑞寶以爲天皇鎭祭之時、天皇寵異特甚。詔曰、近宿殿内矣。因号足尼。其号（寛ナシ）足尼之起朝臣之（寛二字ナシ）号自此始矣。十一月（丙子）朔、庚寅、初齋瑞寶、奉爲帝后鎭祭御魂、祈請壽祚。其鎭魂之祭、自此始矣。詔宇麻志麻治命曰、先考饒速日尊、自天受來天璽瑞寶、以此爲鎭。毎年仲冬中寅爲例。有司行事。永爲鎭祭矣。所謂鎭祭是也。凡厥鎭祭之日、猨女君等主其神樂。擧其言、大謂一二三四五六七八九十。而神樂歌儛。最縁瑞寶蓋謂斯歟。二年春二月甲辰朔、己巳、天皇定功行賞。詔宇麻志麻治命曰、汝之勳功矣。念（惟寛）大功也。公之忠節焉、思惟至忠矣。是以先授神靈之劍、崇報不世之勳。今（今寛）配股肱之職、永傳不忒（之寛）矣（美寛）。（自寛）今已後、生々世々子々孫々八十聯綿、必胤此職、永爲龜鏡云云。凡厥奉齋瑞寶、而祈鎭壽祚、兼崇靈劍、而治護國家。如此之事、裔孫

相承、奉レ齋二太神一、其作如レ右（右、左寛）。

六世孫武建大尼命云云。磯城瑞籬（宮寛）御宇、遷二建布都大神社於大倭國山邊郡石上邑一。則天祖授二饒速日尊一、自レ天受來天璽瑞寶、同共藏齊。号曰二石上大神一。七（世寛）孫建膽心大祢命云云。經向珠城宮御宇、賜二物部連公姓一。

十七世孫物部連公麻侶云云。此連公、淨御原（朝御寛）世、天下万姓改二定八色一之日、改二連公一、賜二物部朝臣姓一。同朝御世、（改寛）賜二石上朝臣姓一。上件十種瑞寶者、天神御祖初授二饒速日尊一、其子味間見命傳之、奉二神日本磐余彥天皇一後、納二石上神宮一、彼命子孫奉レ齋二石上神宮一者也。布瑠之言本者、所謂布瑠神乎。

天地麗氣府錄云、尒時八十諸神達日中國初業天下无レ主非レ應レ命者、不レ能レ治之。能王之者、其在二誰神一乎。諸神議曰、皇孫杵獨王也（私云、吾勝尊是也。）尒時御祖天王如來天御中主神、極天高皇產靈皇神詔授二天璽瑞寶十種於杵獨大王一給云云。據二此書一者、天祖以二十種瑞寶一授二吾勝尊一也。見二本紀先後一有下授二饒速日一之文上无下傳二吾勝尊一之驗上。若是古來異說歟。須研二覈衆說一矣。但至二于瑞寶一者、磐余彥天皇納而爲二官物一、鎮祭之日用二一二三四五等咒文一云云。證據灼然不レ可

カ二八三

校云、說文ノ文錯誤カ、五色金也、黃爲ニ之長一、久薶不レ生レ衣、百鍊不レ輕、從レ革不レ違、西方之行、生ニ於土一、從レ土、左右注、象ニ金在ニ土中一形、今聲、

レ生レ疑者也。

八咫鏡　附日前神鏡

鏡　音景 居慶切、說文景也、从レ金竟聲、釋名有光(光カ)、景也、𤥨湖偏也

金字　居吟切、說文、金五色金也。以出左右(注)象ニ金在ニ上(土)中一(形)、今聲。本作レ金五金黃爲ニ之長一(久)薶不レ生レ長(衣)、百鍊不レ輕、從レ革不レ違。西方之行、坐(生)於土一。徐曰、五色黃白赤青黑也。又禹貢、金三品、孔註云、金銀銅、鄭云、銅三色。前漢食貨志師古註云、金居(者カ)五色、黃金、白銀、赤銅、青錯、黑鐵。

竟　居慶切、樂曲盡曰レ竟、从レ音从レ人。律曰樂人曲所レ終也。廣韻終也。𤥨韻已也。

日本書紀曰、天照太神驚動、以レ梭傷レ身、由レ此發レ慍、乃入ニ于天石窟一。閉ニ磐戶一而幽居焉。故六合之內常闇而不レ知ニ晝夜之相代一。于時(八十ル)萬神會ニ(合ル)於大安河邊一、計ニ其可レ禱之方サマ一。故思兼神深謀遠慮、遂聚ニ常世之長鳴鳥一使ニ互長鳴一。亦以ニ手力雄神一立ニ磐戶之側一、而中臣連遠祖天兒屋命、忌部遠祖太玉命、掘ニ天香山之五百箇眞坂樹一、而上枝懸ニ八坂瓊之五百箇御統一、中枝懸ニ八咫鏡一、一云ニ眞經津鏡一。下枝懸ニ青和幣白和幣一、相与致ニ其祈禱一焉。

日本書紀曰、有ニ高皇產靈之息思兼神(ニ云ル)者一、(有)ニ思慮之智一、乃思而白曰、宜ニ圖ニ造彼神之

象ニ而奉ニ招禱一也。故卽以ニ石凝姥一爲ニ冶工一、採ニ天香山之金一、以作ニ日矛一。又全ニ剝眞名鹿之皮一以作ニ天羽鞴一。用レ此奉レ造之神、是卽紀伊國所坐日前神也。云云。

日本書紀曰、天兒屋命、而使レ祈焉。於是天兒屋命握ニ天香山之眞坂樹一、而上枝懸ニ以鏡作遠祖天拔戸兒已凝戸邊所作八咫鏡一。中枝貝（懸ル）ニ以玉作遠祖伊弉諾尊兒天明玉所作八坂瓊之曲玉一。下枝懸ニ以粟國忌部遠祖天日鷲所作木綿一。云云。

日本書紀曰、是時天照太神手持ニ此（四ナシ）寶鏡一、授ニ天忍穗耳尊一而祝之曰、吾兒視ニ此寶鏡一當レ猶レ視レ吾。可ニ與同レ床共レ殿以爲ニ齊鏡一。復勅ニ天兒屋命太玉命一、惟爾二神亦同侍ニ殿內一善爲ニ防護一。又勅曰、以ニ吾高天原所御齊庭之穗一亦當ニ御於吾兒一。則以ニ高皇產靈尊之女號萬幡姬一配ニ天忍穗耳（尊ル）一爲レ妃降之。故時居ニ於虛天一而生レ兒、號ニ天津彥火瓊々杵尊一。因欲下以ニ此皇孫一代レ親而降上。故以ニ天兒屋命太玉命及諸部神等一悉皆相授。且服御之物一依レ前授。云云。

舊事本紀曰、鏡作祖石凝姥命爲ニ冶工一、則採ニ天八瑞（滿寬）河之川上矣（天寬）堅石一。云云。復採ニ天金（香山）山之銅一、令レ鑄ニ造日矛一。此鏡少不レ合レ意。則紀伊國所坐日前神社（是寬）也。復使ニ鏡作祖天糠戸神（石凝姥命之子也。）將（採寬）ニ天香山之銅一、使レ圖ニ造日像之鏡一。其狀美麗矣。而觸ニ窟

是ノ下詳則アリ崇ノ下祭アリ

戸ニ有ニ小瑕一。其瑕於レ今猶（寛）存。即是伊勢崇祕大神。所謂八咫鏡、亦名ニ眞經津鏡一是也。復天太玉命以廣厚稱辭啓曰（白也）。吾之所持寶鏡明麗恰如ニ汝命一、乞開戸而御覽焉。仍天太玉命、天兒屋命共致ニ其新禱一。天太玉命天兒屋命、指ニ出其鏡一、奉レ崇（示也）ニ天照太神一之時、天照太神逾思レ奇而聊細開ニ磐戸一而窺之。

古語拾遺曰、從ニ思兼神議一令ニ石凝姥神一（天糠戸命之子）鑄ニ日像之鏡一。初度所レ鑄少不レ合レ意。（是紀伊國日前神也。）次度所レ鑄其狀美麗。（是伊勢太神也）

大田命傳曰、一面者八百万神等以ニ石凝姥神一奉レ鑄寶鏡、是崇ニ伊勢太神宮一也。云云。一面者日前宮坐也。石凝姥神鑄造鏡也。初度所レ鑄不レ合ニ諸神意一、紀伊國日前神是也。

阿波良波命傳曰、天御中主高貴高皇神勅曰、令ニ石凝姥神一取ニ天香山銅一以鑄ニ日像之鏡一。其狀美麗。今崇ニ祭伊勢ニ太神御靈是也。

舊事本紀曰、天照太神手持ニ寶鏡一授ニ天忍穗耳尊一而祝之曰、吾兒視ニ此寶鏡一當レ猶レ視レ吾。可下與同レ床共レ殿以爲中齋鏡上。寶祚之隆、當下与ニ天壤一无中窮矣。云云。欲下以ニ（此大）皇孫一代レ親而降上。云云。服御之物一依レ前授矣。

之 寫本ナシ
境ハ鏡ノ誤。寫本ニヨル

古語拾遺曰、即勅曰、吾兒視此寶鏡、當猶視吾。(可)與同床共殿以爲齋鏡。
神皇實錄曰、天照太神手持寶鏡、授天皇孫尊而祝之曰、視之此寶境(鏡)、當猶視吾。可與同床共殿以爲齋鏡。寶祚之隆當與天壤無窮矣。
神皇系圖曰、天照皇太神誓曰云云。無念介祖、吾在鏡中焉。
仙宮秘文曰、神鏡謂諸法併移清淨鏡。故亘三世而常遍十方、以不改變。凡鏡是三身具足見其形者、應身之躰也。窺其影者、化身之相也。觀其空者、法身之理也。與虛空等於一切世間中而現。不出不入不失不壞。常住一心妙躰、故一切得法、一切不能染智體不動具足。無漏動衆生、故以清鏡奉崇神體、而遍照衆生之心、以令歸大道。故圓鏡瑩意光明遍照。故心離無明。是名大日。生死長夜此時永曉。自相不可得妙解無過斯焉。

八坂瓊曲玉

瓊 韻書 葵營切、說文赤玉也。从玉瓊(夐)聲。詩註玉之美者、集韻或作琁、亦作璚。錢氏曰、諸(詩)言玉以瓊名者多矣。[箸]〻花〻英〻瑩[木瓜]〻瑤瓊琚〻玖皆謂玉色之美爲瓊、非玉之名也。許叔里(重)云、瓊赤玉也。然木瓜所謂瓊玖乃星(里)玉亦非赤也。玉字虞欲切。說文玉、石之美有五德。本作王、象三王之連、〻其貫(貫)也。徐曰王中書(畫)近上。玉釋勾也。類篇曰始如(加)點以引(別)於帝(王)字。集韻古作

管聚賢史圖ニ作ル

八瓊曲玉八坂口傳

日本書紀曰、素戔烏尊昇ニ天之時、云云。素戔嗚尊以ニ其頸所嬰五百箇(イホツ)御統之瓊一濯ニ于天渟名井、亦名去來之眞名井ニ而食レ之。乃(チ)生(ル)レ兒、號ニ正哉吾勝々速日天忍骨尊一。次天津彦根命、次活津彦根命、次天穂日命云云。天照太神勅曰、原ニ其物源一則八坂瓊之五百箇(イホツ)御統者是吾物也。故彼五男神悉是吾兒。乃取而子養焉。既而素戔嗚尊、乞ニ取天照大神髻鬘及腕所纏八坂瓊之五百箇(イホツ)御統一。濯ニ於天眞名井一、然咀嚼而吹棄氣噴之狹霧所生神號、曰ニ正哉吾勝々速日天忍穂耳尊一云云。天照大神素知ニ其神暴惡一、至レ聞ニ來詣之狀一。乃勃然而驚曰、云云。便以ニ八坂瓊之五百箇(イホツ)御統一(御統、此云ニ美須磨屢一。)纏ニ其髻鬘及腕一。云云。

一書曰、素戔嗚尊持ニ其瓊玉一而到ニ之於天上一也。是時天照大神疑ニ弟有ニ惡心一起レ兵詰問。素戔嗚尊對曰、吾所ニ以來一者、實欲ニ與レ姉相見一。亦欲レ獻ニ珍寶瑞八坂瓊之曲玉一耳。不ニ敢則有一レ意也。云云。天照大神、則以ニ八坂瓊之曲玉一浮ニ寄於天眞名井一、嚙ニ斷瓊端一而吹出氣噴之中化生神、号ニ市杵嶋姫命一。是居ニ于遠瀛一者也。又嚙ニ斷瓊中一而吹出氣噴之中化生神、号ニ田心姫命一。是居ニ于中瀛一者也。又嚙ニ斷瓊尾一而吹出氣噴之中化生神、号ニ湍津姫命一。是居ニ于海濱一者

堀八堀

也。凡三女神。云云。

舊事本紀曰、素戔烏尊將レ昇レ天之時有二一神一、号二羽明玉一。此神奉レ迎而、進以二瑞八坂瓊之曲玉一矣。素戔烏尊持二其瓊玉一而昇レ天。云云。天照太神乃以二素戔烏尊所レ帶三劍一、（亦云十握劔爲二三段一化二生三神一。）振二濯於天眞名井一云云。素戔烏尊以下天照太神御手所レ纏二（髻ル）鬘一八坂瓊五百箇（箇ル）御統玉上濯二浮於天眞名井一、齧然咀嚼而吹棄氣吹狹霧之中化生六男之神。云云。

古語拾遺曰、素戔烏神（尊前）欲三奉二辭日神一、昇レ天之時、櫛明玉神（命ル）奉レ迎獻以二瑞八坂瓊之曲玉一。素戔烏神受レ之轉奉二日神一。仍共約誓卽、感二其玉一、生二天祖吾勝尊一。

神皇實錄曰　同レ上。

日本書紀亦曰、天照太神入二于天石窟一閉二磐戶一而幽居。堀二天香山之五百箇（箇ル）眞坂樹一而上枝懸二八坂瓊之五百箇（箇ル）御統一。一云諸神憂之、玉作部遠祖豐玉者造レ玉。一云中枝懸二以玉作遠祖天明玉（伊弉諾尊兒）所作八坂瓊之曲玉一。

舊事本紀曰、復令二玉作祖櫛明玉神一（伊弉諾尊之兒也）作二八坂瓊之五百箇（箇寬）御統玉（珠寬）一矣。復令下玉作部遠祖豐珠玉屋神一爲上レ造レ玉者。云云。掘（堀延）二天香山之五百箇（箇寬）眞賢木一、上枝懸二八

枝云以下枝以下の文は古語拾遺と合せず

咫之鏡、亦名眞經津鏡。中枝懸八坂瓊之五百箇（箇）御統之玉。

古語拾遺曰、令石凝姥神（天糠戶命之子、鏡作遠祖也）取天香山銅以鑄日像之鏡。（出雲國忌部玉作祖也。）令櫛明玉神作八坂瓊五百箇（箇）御統玉、其物既備（掘）天香山之五百箇（箇）眞賢木而上枝懸玉、中枝懸鏡、下枝懸八坂瓊曲玉。出處有二、一者素戔嗚尊昇天之時、櫛明玉命（又名羽明玉、又名天明玉、伊弉諾尊子也。）奉迎所獻之玉轉以奉日神是也。（或云日神遂生此玉、生吾勝尊云云。）二者天磐戶之時、懸眞賢木枝之玉、卽是櫛明玉所造也。於皇孫傳持之玉者、未見何是焉。但溫其根元、不可出兩種、夫懸上枝者、石凝姥神鑄造之靈鏡。懸中枝櫛明玉所作之瑞玉也。靈鏡已爲天照同時捧持之玉、寧不備神器哉。神劍是出於素戔嗚神之所。同神持所之轉在日神之御手、隨而有感生天孫之文。是又不謂寶玉哉。兩端之疑愚蒙竊惑矣。抑又溫此玉須有兩義也。一書說云、（阿波良岐命傳神宮所在書也）天照坐止由氣皇太神一座、相殿三座云云。左一座皇御孫尊御靈形。云云。右一座天兒屋命靈形。云云。太玉命靈形、瑞八坂瓊之曲玉奉藏圓筥也。是天祖吾勝尊所化寶玉是也。亦五百箇御統玉奉懸眞賢木枝也。寶玉內納珍寶也。是天地人福田也。奉納曲玉圓筥三合、崇其物偏專有効。亦五百箇乃在金玉鎊寶珠等天戶閉之時、太玉命

捧持寶玉是也。云云。亦号玉串、內人奉仕眞賢木五百箇御統玉之其緣也。

案據此說、復有疑端。吾勝尊出生之寶玉者、初出於櫛明玉神、傳于素戔嗚。轉以爲大日靈尊之神寶。然乃難稱太玉命之靈形也。五百箇御統玉者、諸神相議懸以眞賢木枝、所供天照太神、又是匪太玉之神物也。云恰云給其理不的當。矧又皇孫傳持之玉、不出此兩種者、崇神天皇御宇无遷坐之文改造之簿（シンブミ）。尤溫其元出處已幽妙、安置又有深旨歟。或云三種、或云二種、或云矛玉自從、又有踐祚之日獻神璽鏡劔之文。是乃寶玉自從之義也。若然者、未曾離歷代帝王御身之靈璽也。但此玉者、蒼生之福田、万物之所由生、以在天下爲眼精、以不亡失爲心肝。縱在神宮不足加巨難焉。

裏書　或曰玉已有兩類其說炳焉。然乃一者留神宮、一者隨帝王御身歟。鏡无種類、仍改造之。曲玉有二之故無改作之儀哉。云云。又曰社記阿波頁波命傳曰、太玉命靈形、瑞八坂瓊之曲玉奉納圓宮也。天凪吾勝所化寶玉也。云云。而太玉命靈形者、一面鏡也。藏篋中由見瑞器記等、以吾勝所化之曲玉雖稱太玉靈形。但於彼曲玉者、現在神宮。說據灼然有口傳。昔与鏡劔共被渡之哉。至帝王護身之瑞玉者、可謂懸眞賢木之曲玉歟。又太玉命懸眞賢木枝捧持之五百箇御統玉在之　寶玉內納修（珍カ）寶也。天地（人カ）福田也。云云。是又今現在歟　已上依家行神主口說錄之。又曰云曲玉云靈鏡共納圓宮也。

鈹云、刀刪鉅為刃、俗作刃非の誤か

草薙劍 附石上神劍

裏書 劍 居欠切、說文云人所帶兵也。从刃僉聲。釋名、撿、所以防撿非常。籀天作劍作劒非云刃而根切、說文南刀堅也。象刀有刃之形。徐曰、若今刀刃(皆)別鑄剛鐵、故从一指事、刀刃距爲刃命俗刃。僉平七廉切、咸也、皆也。

日本書紀曰、素戔嗚尊自天而降到於出雲國簸之川上。云云。至期果有大蛇、頭尾各有八岐。眼如赤酸醬、赤酸醬、此云阿箇箇知。松栢生於背上。而蔓延於八丘八谷之間。及至得酒、頭各一槽飲醉而睡。時素戔嗚尊乃拔所帶十握劍寸斬其蛇。至尾劍刃少缺。故割裂其尾視之、中有一劍。此所謂草薙劍也。云云。素戔嗚尊曰、是神劍也。吾何敢以私(兀上下ス)安乎。乃上獻於天神也。

一云、草薙劍、此今在尾張國吾湯市村。私云、今愛智郡是也。即熱田祝部所掌之神是也。其斷蛇之(兀ナリ)劍号曰蛇之麁正。此今在石上也。

一云、裂尾而看、即別有一劍焉。名爲草薙劍。此劍昔在素戔嗚尊許。今在(於ル)尾張國也。其素戔嗚尊斷蛇之劍、今在吉備神部許也。出雲簸之川上山是也。

校云此文當御於吾孫（兒）

一云、尊戔烏尊曰、此不レ可ニ以吾私用一也。乃遣ニ五世孫天之葺根神一。上ニ奉於天一。此今所謂草薙劒矣。云云。

舊事本紀曰、至レ斬ニ其尾一、劒刄少缺。故割ニ裂其尾一而視レ之、中有ニ一劒一名ニ天叢雲劒一。蓋於ニ大蛇所居之上一、常有ニ雲氣一。故以名焉。素戔烏尊曰、是神劒也。吾何敢私（以寬）安乎。乃遣ニ五世孫天之葺根神一、上ニ奉於天一。（其寬）後日本武尊征レ東之時、以ニ其劒一号曰ニ草薙一矣。今在ニ尾張國吾湯市村一。即熱田（神寬）社所レ崇之神。其斬レ蛇之（劒寬）号曰ニ蛇之麁正一。今在ニ石上神宮一也。

古語拾遺曰、素戔嗚神、自レ天而降ニ到於出雲國簸之川上一、以ニ天十握劒一（其名、天羽斬、今在ニ石上神宮一。古語、大虵謂ニ之羽羽一。言斬レ蛇也。）斬ニ八岐大蛇一。其尾中得ニ一靈劒一。其名曰（圖ナシ）ニ天叢雲一（大蛇之上常有ニ雲氣一、故以爲レ名。倭武尊、東征之年、到ニ相模國一遇ニ野火難一、即以ニ此劒一薙レ草得レ免、更名ニ草薙劒一也。）乃獻ニ（上寬）於天神一也。

○神籬建立篇

高皇産靈尊（因ル）勅曰、吾則起ニ樹天津神籬及天津磐境一、當爲ニ吾孫一奉レ齊（矣ル）。汝天兒屋命太玉命宜持ニ天津神籬一降ニ於葦原中國一、亦爲ニ吾孫一奉レ齊焉。天照太神勅曰、以ニ吾高天原所御

まで日本紀の文也。古語拾遺、舊事紀の文もほぼ同じ

詔 舊謂

皇 舊ナシ

門 舊ナシ

巫 舊坐

摩ノ下 舊嶋アリ

敬イ

齋庭之穗、亦當御於吾孫（見上）矣。是則起樹神籬、不缺蒸嘗禮之緣也。其鎭祭之儀以八魂神門神生嶋大宮地靈神等爲首、具如列于左也。

古語拾遺曰、逮于神武天皇東征之年、云云。妖氣既晴無復風塵。建都橿原、經營帝宅。云云。爰仰從皇天二祖之詔、建樹神籬。所謂高皇産靈神、皇産靈、魂留産靈、生産靈、足産靈、大宮賣神、事代主神、御膳神、已上今御巫所奉齋也。櫛磐間戸神、豐磐間戸神、已上今御門巫所奉齋也。生嶋、是大八洲之靈、今生嶋巫所奉齋也。坐摩、是大宮地之靈、今坐摩巫所奉齋也。

神皇系圖曰

天皇鎭魂八神

高皇産靈神 此舊揖天之神皇帝也

神皇産靈神 八咫烏

魂留産靈神 玉作

生産靈神 生魂

足産靈神 生嶋足覔 道反覔

大宮賣神 傳女

御膳神 保食神

事代主神 素盞烏尊子大己貴神長子也

右八柱則八洲守護驗神、八齋靈命、八心府神坐。故式爲皇帝之鎭魂神矣。謂夫水氣清淨海水

共ノ下寫本生アリ

即大祖元神性也。陽氣者濁世生類不清實執也。故清淨神氣祭、則人魂陽氣鎭也。故有ニ鎭魂氣ー也。陽者氣也、亦光明也。故名曰レ魂也。凡一氣化現名ニ神靈ハ是生化魂也。故陽氣散已即爲レ死、即佛ニ本居ニ吾哉々々。皇天壽曰(スヘラコトホキテ)、而布留部由良都止布留部云云。惟是天元極太神咒也。

神皇實錄曰

神日本磐余彥天皇、甲子四年春二月壬戌朔甲申詔曰、我皇祖之靈也、自レ天降鑒光ニ明朕躬ー今諸虜已平、海內无レ事。可ニ以レ郊祭ニ祀天神ー、用甲ニ大孝ー者也。乃立ニ靈畤(マツリノニハヲ)於鳥見(トミ)山中ー。其地号ニ上少野榛原、下少野榛原ー。用祭ニ皇祖天神ー焉。任ニ皇大乃嚴命ー齊ニ八柱靈神ー、而式爲ニ鎭御魂神ー、爲ニ天皇乃玉躰ー。春秋二季齊祭也。惟魂元氣也。清氣上升爲レ天、濁氣沉下爲レ地。清濁之氣通而爲ニ陜陜五行ー。陰陽共於万物之形、是水火精陽氣生因以名レ魂爲レ心。故以ニ安靜ー爲レ命、是道大也。神語大者人靈也。云久志備ー名レ之号レ魂。顯露形也惣以ニ八洲八齊八心ー、因以爲ニ大象ー者也。古語陽氣爲レ心、爲レ神。故名レ魂也。陰氣爲レ意、爲レ性。故名ニ精魄ー也。因レ茲祭ニ八齊神靈ー。則世苦樂皆是自在大神之作用、廣大慈悲之八心、則續生之相、眞實而无レ畏。鎭ニ座大元神地ー、如ニ湯津石村ー長生不死之神慮、謹請再拜國家幸甚々々。

烏ノ下寫本之アリ

世ノ下寫本聞アリ

誰寫本讚

高皇産靈　神武天皇以二高皇産靈尊一躬親作顯齋。用二汝道臣命一爲二齋主一。

神皇産靈　八咫烏靈坐、亦伊勢朝臣上祖、神日本磐余彥天皇、欲レ向二中洲一之時、山中嶮絶、跋涉失レ路。於是神魂命孫鴨武津之身命化二如大烏一、翔飛奉導、遂達二中洲一。天皇喜二其功一、特（原トアリ厚カ）褒賞天八咫烏。○号從レ此始（也）。故道（導）徳靈坐。

魂留産靈　元氣精靈坐

生産靈　生氣化現精魂靈坐

足産靈　大地主、大己貴神、大巳才天所化坐

大宮賣神　天照辰玉、亦名二傳女一是從二諸宮一、是太玉命靈神、如二今世內侍一。

裏書

舊事本紀云、天大玉命久志備所生之神。如二今世內侍一、善言美詞和二君臣間一令二宸衿一悦懌一焉。

御膳神　粟國祖神、大御食都姬神、世○名二保食神一是也。神語供（神）物名曰二由加物一也。

亦誰器讚同爲二由加物一也。故神語名二御食津一稱二由賀神一。其此緣也。

事代主神　大己貴兒八万四千鬼神類大將軍坐也。

件八神、則八洲守護驗神、八齊靈命、八心府神、因以合ニ大象一、是生化靈明也。國家福田也。故式（爲）ニ皇帝一乃鎭御魂崇祭一矣。依ニ神祇官請美（奏）一、諸司鱗ニ祭斷（新）一、宮主御巫供ニ奉御食新一稻二束。其日御巫於ニ神祇官齋院一舂稻、鍜（以ニ麁）苔（莒）、炊以ニ朝（韓竈）竈（擧（畢））即盛ニ蘭笥一納レ積（櫃）居レ案、神部二人、執向ニ祭所一供レ之。于時加ニ大直日神一座一也。天種子命招魂、續魄秡ニ除不祥一也。

御井神。五星變易八龍神同居作井名也

生井神　　福井神　　綱長井神

水神　　●鳴●香（鳴雷カ）神　主氷司坐神是也。水響（饗）御子也。

御門神　　櫛石窓神　　豐石窓神

四面門各（一カ）座。十二月祭

造酒司坐神、黑御酒、白御酒、甕腹作滿奉レ饗也。

酒彌豆男神　黑御酒作神　　酒彌豆女神　白御酒作神

大膳職坐神

校云、以麁の二字は神皇實錄によりて補ふ。但し麁は庶に誤る。今訂す。若は宮の訛

校云、御門神ノ下、玉女神變化分坐の注あり

校云、造酒司の條の終に

一件二神根倉神子也大年神苗裔八十神苗裔孫あり也

御食津神　　火雷神　　高倍神　鋤持神化

件三(柱)神者、素戔烏尊苗裔、稻倉魂、名二宇賀能賣神一。亦稱二御食津神一也。亦大年神子、奧津比賣命、(大戸比賣命。)是竈神坐也。君子合二諸大道一、春禘、秋嘗。凡祭有二四時一、春祭曰レ礿、夏祭曰レ禘、秋祭曰レ嘗、冬祭曰レ蒸。礿禘陽義也。嘗蒸陰義也。夫祭二天於圜丘一祭二地(於)方澤一云(々)々。乃后土也。魂氣歸二于天一形、魄(氣)歸二于地一形(ナシ)、故祭求二諸陰陽一之義也。

延喜式九日

宮中神

神祇官西院坐巫等祭神廿三座。御巫祭神八座。並大。月次新嘗。中宮東宮御巫亦同。

神産日神　　高御産日神　　玉積(産ル)日神

生産日神　　足産日神　　大宮賣神

御食津神　　事代主神

座摩巫祭神五座。並大。月次新嘗。

生井神　　福井神　　綱長井神

校云。宮内省坐神。「園神社。韓神社二座」と延喜式にあり

波比祇神　阿須波神

御門巫祭神八座。並大。月次新嘗。

櫛磐窓神。四面門各一座。　豊磐窓神　四面門各一座。

生嶋巫祭神二座。並大。月次新嘗。

生嶋神　足嶋神

宮内省坐神三座。

大膳職坐神三座。並小。

御食津神社　火雷神社　高倍神社

本朝月令云、安房大神爲二御食神一者、今大膳職祭神也。

私云、古語拾遺云、天富命立二太玉命社一。今謂二之安房社一云々 建二月令説一歟

造酒司坐神八（六ル）座。大四座。小四（二ル）座。

大宮賣神社四座。並大。月次新嘗。

酒殿神社二座。並小。

酒彌豆男神　酒彌豆女神

主水司坐神一座小。　鳴雷神社

式第八祝詞曰、大御巫能辭竟奉皇神等能前尓白久、神魂、高御魂、生魂、足魂、玉留魂、大宮乃賣、大御膳都神、辭代主登御名者白弖辭竟奉者、云云座摩乃御巫乃辭竟奉皇神等能前尓白久、生井、榮井、津長井、阿須波波比支登御名者白弖(云々)御門能御巫能(稱)辭竟奉皇神等能前尓白久、櫛磐間戸命、豐磐間戸命登御名者白弖、(云々)生嶋能御巫能辭竟奉皇神等能前尓白久、生國、足國登御名者白弖辭竟奉者、皇神能敷坐嶋(能)八十嶋者、谷蟆能狹度極、塩沫乃留限、狹國者廣久、峻國者平久、嶋能八十嶋墮事无、皇神等能依(左ル)志奉故、皇御孫命能宇豆乃幣帛乎稱辭竟奉久止宣。

亦云、至於纒向日代朝令日本武命征討東夷。仍枉道詣伊勢神宮辭見和姫命。以草薙劍授日本武命、而教曰、愼莫怠也。日本武命既平東夷虜還至尾張國納宮簀媛淹留踰月。解劍置宅徒行登膽吹山中毒而薨。其草薙劍今在尾張國熱田社。

已上謂之三種寶物。天照太神所傳于皇孫尊之神財也。惟夫國家始業以來、神寶瑞器其類寔多。雖以天瓊矛爲其根元、事已幽妙、不可得而量也。至于三種之寶物者、正是傳

國之神璽、无物之可比方焉。或云二種、或云矛玉自從。書紀異說具列于上。謹尋神皇傳受之素意、三種之寶缺一則不可也。上古之世神与皇同床共殿、官物神物又无分別矣。又皇第十代崇神天皇朝漸畏神威、同殿不安、即六年奉遷鏡劍於別宮。神与皇之初也。更造鏡劍爲護身之璽。八坂瓊曲玉者自從而不改。當知有深以也。

裏書

鑄改鏡劍事　古語拾遺曰、至(于前)磯城瑞垣朝漸畏神威、同殿不安。故更令齊部氏率石凝姥神裔、天目一箇神裔(二氏前)更鑄(鏡前)造劍、以爲護身御璽。是今踐祚(天前)之日、所獻神璽鏡劍也。仍就於倭笠縫邑殊立磯城神籬、奉遷天照太神及草薙劍、令皇女豐鍬入姫命奉齊焉。云云。洎乎卷向玉城朝、令皇女倭姫命奉齊天照大神。仍隨神教立其祠於伊勢國五十鈴川上。因興齊宮令倭姫命居焉。云云。

逮于垂仁天皇御宇、以天照太神天叢雲劍初奉鎭五十鈴宮。景行天皇御世神劍遷以留坐尾張國。稱熱田神宮是也。斥厥神器之在天下、不異三辰在天上。鏡乃日精也。玉乃月精也。劍乃衆星之精也。衆星之中、北辰爲首、金輪則其表也。輪有八輻、是八劍之形也、三精之義也。更同之。

星、參經切、說文万物之精上列爲星、本作曐从晶生聲。徐曰古作曐品象星、星形

點注ニ其中ー偶與レ晶同。今者作レ星。春秋說題云、星之爲言精也。陽之榮也。陽爲レ日、日分爲レ星。故其字爲レ星。釋名云、散也。言列位而布散。前漢書天文志云、星者金之散氣、其本曰レ人。孟康曰、星名石也。金石相生、人與レ星氣相應。

然則三種見在爲ニ國家之鎭衞ー。神皇九十余代一百七十九万四千五百余載之間、君臣有レ序、繼體无レ差。惣是吾國地勢之令レ然也。抑又三種神器之所レ護也。亂臣賊子不レ日即亡。國之有レ靈不レ可ニ忽諸ー焉。天照太神勅ニ皇孫尊ー曰、行矣。寶祚之降、當下与ニ天壤ー无上レ窮矣。貴也哉。

○神國要道篇

古欲下御ニ大道ー明中明德上者、先脩ニ其身ー。欲レ脩ニ其身ー者、先正ニ其心ー。欲レ正ニ其心ー者、在ニ于致ーレ知。學者傳習分レ派異レ流、雖レ云ニ釋氏金口之八万字、老玄言之五千ー、大底不レ出ニ此義ー也。天儒之道ー說ニ理世安民之業ー。天堯以往不レ可ニ得而聞ー。堯傳レ舜、舜傳レ禹、禹傳レ湯、湯傳ニ文武周公ー。文武周公傳ニ孔子ー。即此道也。至レ解ニ釋其意ー分中散其義上者、充ニ溢四表ー彌ニ綸八荒ー矣。弊余稚穉翔、北平ニ三韓ー、西通ニ吳會ー。尒降使譯往來、學校欝起、以爲下傳ニ未習ー得中未聞上。殊不

レ知二我神國本有二其訓傳一也。

皇祖天照太神手持二三種寶器一、口傳二三句要道一與二日月一倶懸、與二天地一不レ朽者也。傳二瓊玉一者、欲レ使下脩二其身一克妙上。傳二寶鏡一者、欲レ使下正二其心一克明上也。傳二神劍一者、欲レ使下致二其知一克斷上也。脩レ身如レ瓊無二傷害之厄一、正レ心如レ鏡無二毫釐之邪一、致レ知之道無レ他、所レ向必於レ仁。无慾舍レ己不レ怠不レ荒、爲レ民有レ功者、以二無私一而即賞。爲レ國有レ害者、以二无私一而即罰。造次顚沛不レ主二喜怒之情一。仁而中レ道、此以爲レ得也。伏冀御宇之聖皇有官之八十氏人等、留二心於此道一与レ神齋二其明一者、安二諸天下一在二於掌中一焉。

日本書紀曰、天照太神乃賜二天津彦火瓊々杵尊八坂瓊曲玉、及八咫鏡、草薙劍三種寶物一、因勅二皇孫一曰、葦原千五百秋之瑞穗國、是吾子孫可レ主之地也。宜爾皇孫就而治焉。行矣。寶祚之隆當與二天壤一無レ窮者矣。

神皇實錄曰、皇天御中主神、与二大日孁尊一盟宣久、天皇孫尊、如二八坂瓊之勾一以二曲妙一治二天下一、且如二白銅鏡一以二分明一看二行山川海原一乃提二是靈劍一平二天下一矣。

神皇系圖曰、天照皇太神誓曰、吾日太子如二八坂瓊之勾一以二曲妙一御レ宇、且如二白銅一以二分明一

看行山川海原。乃提神劍平天下焉。肆以名之三種神璽也。
天口事書曰、皇大盟官久、天皇如八坂瓊之勾尓以曲妙治御宇乃政兔、且如眞經津鏡尓以
分明看行山川海原与、即提是靈劍弖平天下天、利万民止言壽市皇天之受命也、不可
以智爭、不可以力競焉。印度支那王種不常、至擠瓊籤者、皆承於天。況於繼日神之
體居天皇之尊哉。傳三種寶器、首八洲之神靈。此非少緣也。

事書

倭國（倭、島不同、通會云、女王國名、在東海中。前漢地理志、樂浪海中有倭人分爲百餘國、在帶方東南大海中、依山島內爲國、度海千里復有國、皆倭種、唐東夷傳、日本古倭奴也。去京師万四千里、其俗多女少男、小嶋五十餘皆自名國、而臣謝附之）

轉輪王之世、七寶具足、雖爲福力之所感、非傳子孫寶符。夏商周之世、以九鼎爲寶。此
鼎乃夏后氏之所鑄造也。秦漢以來有傳國之璽。始皇之所制、李斯之所書也。至我國靈
器者、神也。又妙也。傳之者即神聖齋之。即天津掛畏　御宇珍子可自貴者此理也。或曰、
神明之所无不通、所以運有修短時有明昧者何也。夫天地人之三才其氣一也。其性一
也。元氣渾沌者、寂然无心　一物已生、謂之神明、神明即是天地生心之初也。至于万物流形
群類異生者、神不知所以生彼。々不知所以神生。神欲世之常治、欲人之感正。感上

淸之氣一者甚少、稟ニ重濁之氣一者倍多。禍福理亂自作之理。非ニ神之爲一。皇王之道宜レ然。先云レ備ニ其位一、未云レ同ニ其德一也。是故非ニ自知發明一而元レ元本レ本者失ニ却精明一去レ道轉遠焉。凡厥神皇之相稟寧徒然乎。爲レ使下ニ万姓一復ニ於天性一通中於物理上也。仁以懷レ之、財以育レ之、皆是導レ俗之初也。非下獨富ニ有四海一役ニ使黎民一之謂上也。及于傳ニ其要道一者以ニ曲妙一治ニ天下一、以ニ分明一看ニ行山川海原一、山川海原者、物謂ニ大八洲蒼生一也。書云、海隅蒼々然生ニ草木一此之謂乎。提ニ鏡劍一以平ニ天下一是也。天祖傳レ國之志大也哉。至也矣。

元元集卷第五　終

元元集卷第六

○內宮鎮坐篇

高天原者天神樂集之齋庭也。其廣不レ可レ測也。天照大日孁貴、天上之寶宮在ニ於此處ニ焉。復爲レ照ニ四州群類之晦冥ニ現ニ日輪之相ニ周ニ于天中ニ、稱ニ日之小宮ト、蓋此之謂歟。復爲レ護ニ皇孫之祚ニ同ニ万姓之塵ニ、垂ニ迹於天下ニ留ニ神於眞經津鏡中ニ。手持ニ此寶鏡ニ授ニ天孫尊ニ曰、視ニ此寶鏡ニ當猶レ視レ吾、可ニ與同レ床共レ殿以爲ニ齋鏡ニ。寶祚之隆當ト与ニ天壤ニ无カル窮矣。又曰、无レ念ニ祭祖ニ、吾在ニ鏡中ニ。又勅ニ思金神、手力雄神、天石門別神等ニ曰、此鏡者専爲ニ我御魂ニ如レ拜ニ吾前ニ奉レ齋。云々。是以天孫天津彦々火瓊々杵尊降ニ臨葦原中國ニ以來至ニ開化天皇御世ニ、神与レ皇並ニ坐于一處ニ。崇神天皇御宇漸畏ニ神威ニ、初奉レ遷ニ磯城神籬ニ。垂仁天皇二十六年、遂鎮ニ坐神風伊勢國ニ号ニ五十鈴宮ニ是也。

皇太神宮　　天照太神御靈也

古語拾遺曰、天照太神、高皇産靈尊、乃相語曰、夫葦原瑞穗國者、吾子孫可レ王之地。皇孫、就而

今（前）命
伊佐登保志：：須我頁尔までか衎
弓（前）ナシ
今（前）令
熊ノ下（前）皮アリ

治焉。寶祚之隆、當与天壤无窮矣。即以八咫鏡、及草薙劍二種神寶、授賜皇孫、永爲天璽。所謂神璽、劍鏡（寶劍前）是也。矛玉自從。即勅曰、吾兒視此寶鏡、當猶視吾。可與同床共殿以爲齋鏡云云。逮于神武天皇東征之年云云。妖氣既晴、无復風塵。建都橿原、經營帝宅云云。天富命率諸齋部捧持天璽鏡劍奉安正殿云云。當此之時帝之与神、其際未遠。同殿共床、以此爲常。故神物官物亦未分別。宮中立藏、号齋藏。令齋部氏永任其職云云。至于磯城瑞籬朝、漸畏神威、同殿不安。故更令齋部氏率石凝姥神裔天目一箇神裔二氏更鑄鏡造劍、以爲護身御璽。是今踐祚（天前）之日、所獻神璽鏡劍也。仍就於倭笠縫邑、殊立磯城神籬、奉遷天照太神、及草薙劍。令皇女豐鋤入姫命奉齋焉。其遷祭之夕、宮人皆參、終夜宴樂歌曰、

伊佐登保志由伎能與呂志茂於保與須我良介

美夜比登能、於保與須我良介、伊佐登保志、由伎能與呂志茂、於保與須我良介。今俗哥曰、美夜比止乃、於保與曾許侶茂　比佐止保志、由伎乃與侶志茂、於保與曾許侶茂。詞之轉也。又六年、祭八十万群神。仍定天社國社、及神地神戶、始令貢男弓弭之調、女手末之調。今神祇之祭用熊鹿皮角布等、此緣也。洎于卷向玉城朝、令皇女倭

始（一本如）

神（一本ナシ）

以下何年云云トアルハ貼紙

姫命。天皇第二皇女、母皇后狹穗姫。奉齋天照太神。仍隨神敎立其祠於伊勢國五十鈴川上。因興齋宮令倭姫命居焉。●始在天上、預結幽契衢神、先降深有以矣。此御世始以弓矢刀祭神祇、更定神地神戸。

倭姫命世記曰、凡神倭伊波禮彥天皇已下、稚日本根子彥大日々天皇以往九代（帝大）、歷年六百卅余歲。當此時帝与神其際未遠。同殿共床以此爲常。故神物官物亦未分別焉。

麗氣記曰、御間城入彥五十瓊殖天皇、（大倭國磯城瑞籬宮、）即位六年乙丑秋九月、倭國笠縫邑立磯城神籬、奉遷天照太神及草薙劍、令皇女豐鋤入姫命奉齋。以往雖同殿共床漸畏神勢共住不安志天別興神籬天。後石凝姥神裔天目一箇●神裔二氏更鑄造鏡劍以爲護身璽焉。（踐祚之日所獻之神璽鏡劍也。）

世記曰、奉遷天照太神及草薙劍、令皇女豐鋤入姫命奉齋焉。其遷祭之夕、宮人皆參、終夜宴樂歌舞。然後隨太神之敎國々處々尓大宮處乎求給倍利。三十九年壬戌三月三日、遷幸但波乃吉佐宮。雲聳現榎下坐。秋八月十八日作瑞籬積四年奉齋矣。

記ト大畧合ス世記ノ文八月日ナク又畧アリ

十ノ上物部アリ

私記、今歳豐宇介神天降、合レ明合レ德一所雙坐。委見ニ于外宮御迁座篇一也。
四十三年丙寅九月九日、迁ニ倭國伊豆加志本宮一。現レ劍坐(〇因ニ字ナシ)八年奉レ齊。
五十一年甲戌四月八日迁ニ木乃國奈久佐濱宮一。河底岩上紺瑠璃鉢坐。三年奉レ齊。
世記曰、于時紀伊國造進ニ舍人紀麻呂、良地口御田一
五十四年丁丑遷ニ吉備國名方濱宮一。神崎岩上殘水御壺坐。四年奉レ齊
世記曰 于レ時吉備國造。進ニ釆女吉備都比賣、又地口御田一。
五十八年辛巳遷ニ倭弥和乃御室嶺上宮一。留ニ於杜中一圓輪鏡坐。二年奉レ齊
世記曰、是時、豐鋤入姫命吾日足止白支、介時姪倭比賣命事依奉利、御杖代止定弖從レ此倭姫命奉レ戴ニ天照太神一而行幸。相殿神、天兒屋命、太玉命、御戸開(闢大)神、天手力男命、拷幡姫命、御門神、豐石窓櫛石窓命、幷五部伴神、相副奉レ仕矣。
倭姫命 卷向玉城朝天皇第二皇女、母皇后狹穗姫。
儀式帳曰、內宮 美和乃御諸原尒造ニ齋宮一出奉天齊始奉支。介時倭姫內親王太神乎頂奉弖願給國求奉時尒、從ニ美和乃御諸宮一發弖令レ出坐支。介時御送驛使阿部武渟河別命、和珥彥國葺命、中臣大鹿嶋命、十千根命、大伴武日命、合五柱命等爲レ使弖令レ入坐支。彼時宇太乃阿貴宮坐

給因詔

佐ノ下天加アリ

六十年癸未二月十五日遷二于大和宇多秋志野宮一。自座上居二寶鏡一。四年奉齊

世記曰、于レ時倭國造、進二采女香刀比賣、地口御田一。倭姬命乃御夢尓、高天之原坐而吾見之國尓吾乎坐奉止悟教給(比)支。從レ此東向而(因ナシ)乞宇氣比弖給久。我思刺弖往處、吉有奈良波、未嫁レ夫童女相止祈精幸行。其時、佐々波多我門尓、童女參相。則問給久、汝誰。答曰、奴吾波天見通命乃孫仁八(一名佐々波多)佐支刀部我兒、宇太乃大采(因ナシ)祢奈止白岐。亦詔曰、御共從仕奉哉。答曰、仕奉。即御共從奉レ仕。件童女於大物忌止定給比弖、天乃磐戶乃鑰預賜利弖、無二黑心一志天、以二丹心一天、清潔久齊愼美、左物於不レ移レ右須、右物於(因ナシ)不レ移レ左志弖、左レ左、右レ右、左返右廻事毛、万事違事奈久志弖、大神奉仕。元レ元、本レ本故也。又弟大荒命同奉レ仕。從二宇多秋篠宮一幸行而、佐々波多宮坐焉。

六十四年丁亥霜月廿八日遷二幸伊賀國隱市守宮一。雲霞中寶鏡坐。二年奉レ齊

六十六年己丑冬十二月一日遷二于同國穴穗宮一。稻倉上居二寶鏡一四年奉レ齊

世記曰、尒時伊賀國造、進二箆山葛山戶、幷地口御田、細鱗魚取淵、梁作瀨等一。朝御氣夕御氣供進矣。

敢〈群散〉ニ作ルハ誤ナラン　其ノ上群又アリ　安〈群案〉　神ノ上群現アリ　鏑〈群鍋〉

麗氣曰、崇神天皇治二天下一六十八年。
活目入彥五十狹茅天皇〈纏向珠城宮、〉即位元年癸巳夏四月四日迁二于伊賀國敢都美惠宮一。八重雲聳
同滿靈鏡坐。二年奉レ齊。
儀式帳曰、阿閇柘殖宮
四年乙未夏六月晦日遷二淡海甲可日雲宮一。ミ成二屛風一、其上赤雲帶靈鏡坐。四年奉レ齊。
世記曰、淡海國造進二地口御田一。
八年己亥秋七月七日迁二于同國坂田宮一。千木高廣敷板上現二靈鏡一坐。二年奉レ齊。
世記曰、于レ時坂田君等進二地口御田一。
十年辛丑秋八月一日遷二幸于美濃國伊久良河宮一御船形上安二樓臺一神靈坐。四年奉レ齊。
次遷二于尾張國中嶋宮一聳レ雲垂二錦蓋一現二神靈一坐。兩鹿守護之。〈鹿嶋香取兩社也。〉三十日〈群三箇月〉奉
レ齊。
世記曰、倭姬命國保伎給。于レ時美濃國造等、進二舍人市主、地口御田一。幷御船一隻進〈支〉。同美
濃縣主角鏑之作而、進二御船二隻一捧〈天、〉天〈ナシ〉船者、天之曾己立、抱船者、地〈天〉之御都張〈止〉白而

進支。采女忍比賣又（進大）ニ地口御田一［進］故忍比賣之子繼。天平瓮八十枚作進
十四年乙巳秋九月一日遷ニ幸于伊勢國桑名野代宮一。棕杜三株中現ニ神靈一坐。四年奉レ齊。
伊勢國風土記曰、天日別命、奉レ勅東入數百里。其邑有レ神、名ニ（曰補之）伊勢津彥一。天日別命問曰、汝國獻ニ於天孫一哉。答曰、吾覓ニ此國一居住日久。不ニ敢聞一レ命矣。天日別命發レ兵欲レ戮ニ其神一。于レ時畏伏啓云、吾國悉獻ニ於（補之）天孫一、吾不ニ敢居一矣。天日別命令レ問曰、汝之去時、何以爲レ驗。啓云、（吾補之）以ニ今夜一起ニ八風一吹ニ海水一、乘ニ波浪一將ニ東入一。此則吾之却由也。天日別命勅止（令整補之）レ兵窺レ之。比レ及ニ中夜一大風四起、扇ニ舉波瀾一、光ニ曜如レ日。陸（國補之）海共朗（ホカラカ）。遂乘レ波而東焉。故（ナシ）古語曰ニ神風伊勢常世波寄國一者、蓋此謂之也。

勢ノ下國アリ

次鈴鹿奈具波志忍山尓神宮造奉天遷ニ神靈一給。六ケ月奉レ齊

世記曰、于レ時國造大若子命、一名大幡主命。參相御共仕奉。國內風俗令レ白支。又國造建日方命參相支。汝國名何問賜（給大）。答（大ナシ）白久、神風伊勢國止白。進ニ舍人弟伊尓方命、又地口御田、幷神戶一。又大若子命、進ニ舍人弟乙若子命一。次河（川大）俣縣造祖大比古命參相支。汝國名何問賜。答（大ナシ）白久。味酒鈴鹿國奈具（其大）波志忍山白支。然神宮造奉レ令ニ幸行一。又神田幷神戶進

大大ナシ

造ノ上大奉アリ

支。次阿野縣造祖眞桑枝大命尓、汝國名何問賜。白久、草蔭阿野國白旦、進ニ神田幷神戸一。次市
師縣造祖建此古命尓、汝國名何問賜。白久、完往（害行大）阿佐賀國白。進ニ神戸幷御田一。
十八年己酉夏四月十六日遷ニ于阿佐加藤方片樋宮一。葛蔭卷纏中升形上現ニ神靈一坐。四年奉レ齊。
世記曰、是時尓阿佐加乃弥乎（子大）尓坐而伊豆速布留神。百往人者、五十人取死。四十往人者
（因ナシ）二十人取死。如レ此伊豆速布留時尓、倭比賣命於ニ朝庭（廷大）一大若子（命）乎進上而、彼神
事乎申之（上大）者、種々大御手津物彼神進。屋波志々豆目不奉止、詔遣下給支。于レ時、其神乎、
阿射加乃山嶺社作定而、其神乎夜波志々都米上奉支（天大）勞祈支。尓時（倭比賣命大）宇禮志止詔
天、其處乎名天、宇禮志止号。

射因佐
祈因祀

注曰、一書云、安佐賀山有ニ荒神一、百往人者、亡ニ五十人一、四十往人者、亡ニ二十人一。因レ茲倭姬命、
不レ入ニ坐度會郡宇遲村五十鈴河上之宮一、奉レ齊ニ藤方片樋宮一。于レ時安佐賀荒惡神爲行乎、倭姬
命遣ニ中臣大鹿嶋命、伊勢大若子命、忌部玉櫛命一、奏ニ聞天皇一。天皇詔、其國者、大若子命先祖、
天日別命所レ平山也。大若子命祭ニ平其神一、令下ニ倭姬命一奉レ入中五十鈴宮上。即賜ニ種々幣一而、返ニ
遣大若子命一。祭ニ其神一。已保平立（定大）。即社ニ於安佐駕（賀大）一以祭者矣。而後倭姬命即得ニ入

校云、然度坐云々よりは一書にあらで前文につゞく

答次ナシ

坐一。然度坐時尓、阿佐加々多尓多氣連等祖、宇加乃日子之子、吉志比女、次吉彥二人參相支。此問給久。汝等我阿佐留物者、奈尓曾止問給支。答曰久、皇太神之御贄之杯(林大)奉上。倭佐宇(乎天)阿佐留止白支。于レ時白事恐止詔而、其倭佐天(乎二)令レ進二大神御贄一而、佐々牟乃木枝乎割取(二)而生比伎尓宇氣比伎良世給(時二)尓其火伎理出而、釆女忍比賣我作之天平瓮八十枚(持二)而伊波比戸尓仕奉支。尓時(二)吉志比女、地口御田、幷(御大)廳國進。二十二年癸亥(丑歟)冬十二月二十八日遷二飯野高宮一。奉レ齊編二懸障泥形屋一四箇年世記曰、于レ時飯高縣造祖、乙加豆知命乎(爾大)汝國名何問賜。白久、意須比飯高國止白而、進二神田幷神戶一、倭姬命、飯高志止白事貴止悅賜支。次佐奈縣造祖彌志呂宿禰命尓、汝國名何問賜。答白久、許母理國志多備之國、眞久佐牟毛久佐向國白弖、進二神田神戶一。又大若子命乎(爾)汝國名何問賜。白久、百張蘇我乃國、五(ナシ)百枝刺竹田之國止白支。其處尓御櫛落給支。其處乎櫛田止号給。櫛田社定賜支。從二是(其)處一志弖、御船乘給弖幸行。其河後江尓到坐。于レ時魚自然集出天、御船參乘支。尓時倭姬命見悅給弖、其處尓魚見社定賜支。從レ其幸行奈留。御饗奉神參相支。汝國名何問賜(給)。白久、白濱眞名胡國申。其所眞名胡神社定賜支。又乙若子命、以二麻績藥等一、

神ノ下凡宮アリ
鹿ノ下瀬アリ
天仁

進二倭姫命一。而令二祓解一及二陪從之人一、留二弓劍兵一、共入二座飯野高宮一、遂得レ向二五十鈴宮一。自レ尒以來、天皇之太子齋宮、如及二驛使國司人等一、到二此等河一爲二解除一、止二鈴聲一之。此其儀也。從レ其幸行弖、佐々牟江御船泊給比。其處尒佐々牟江宮造令レ坐給支。大若子命白鳥之眞野國止國保伎白支。其處尒佐々牟江社定給支。從二其處一幸行間尒、无二浪風一(風浪)志弖海塩大与度尒与度美弖、御船令二幸行一。其時倭姫命悦給弖、其濱尒大与度社定給支。

裏書云、延喜式第四云、凡驛使入二大神堺一者、到二于飯高郡下樋小川一止二鈴聲一云々

二十五年丙辰春三月、從二飯野高宮一遷二幸于伊蘇宮一令レ坐支。于レ時倭姫命南山末見給天止、御宮處覔尒、奉レ戴二天照太神一天、宇久留士仁志天、御船尒奉天、過二狹田坂手一寒河尒御船留天、過二相鹿瀧原和比野久求國相目弖野積良(ツフラ)山澤路一天、向田仁天奉二于御船一天、小濱仁志天御水御饗奉天、二見濱見津仁御船留天、山末河内見廻給天、鹿乃見与利家田々上宮遷幸支。尒レ時大田命參弖、五十鈴之河上宮處仁禮祭陪(勢)止申利。即彼處尒往給天甚喜給。

日本書紀曰、活目入彦五十狹茅天皇、垂仁二十五年三月丁亥朔丙申、離二天照太神於豐耜姫命一、託二于倭姫命一。爰倭姫命求下鎭二坐太神一之處上。而詣二菟田篠幡一篠、此云二佐々一。更還之入二近江國一、東

神ノ上瓦盖アリ

廻美濃到伊勢國。時天照太神誨倭姬命曰、●神風伊勢國、則常世之浪重浪歸國也。傍國可怜國也。興齋宮于五十鈴河上。是謂磯宮。則天照太神始自天降之處也。一云、天皇以倭姬命爲御杖貢奉。於天照太神。是以倭姬命以天照太神鎮坐於磯城嚴橿之本而祠之。然後隨神誨、取丁巳年冬十月甲子、遷于伊勢國渡遇宮。

世記曰、從飯野高宮遷幸于伊蘇宮。令坐支。于時大若子命問給久、汝此國名何。白久、百船渡會國、玉拾伊蘇國止白。●久(天)御鹽濱并林定奉支。此宮坐天供奉、●御水(井)在所波、●御井國(ナシ)止号支。于時倭姬命詔久、南山末見給波、吉宮處可有見由止詔天、御宮處覓尓、大若子命乎遣支。

其ノ上大從アリ可從

倭姬命波、皇太神乎奉戴天、小船乘給、御船仁雜神財并忌楯梓等乎留置天、從小河幸行支。●其河志天御船後立支。尓(時)驛使等御船字久留止白支。其處乎宇久留止号支。從其處幸行、速河彥諸相支。汝國名何問給。白久、畔廣之狹田國止白且、佐々上神田進支。其處速河狹田社定給支。從其處幸行。高水神參相支。汝國名何問給。白久、岳高田深坂手國止白且、田上御田進支。

社ノ上医神アリ

其處坂手社定給支。從其處幸行。河盡(支)。其河之水寒有支。則寒河止号(支)。其處御船留給且、即其處(仁)●御船社定給支。從其處幸行時、御笠服給支。其處乎加佐伎止号支。●御(大)

處因瀨　可因ナシ　從延任本ニテ補

河瀨乎〔ナシ〕渡給〔止爲〕尒、鹿完流相支。是惡詔〔天〕不ニ度坐一。其處乎相鹿瀨止号〔支〕從ニ其處一指ニ河上一乎〔弖〕幸行波、破〔砂〕流速瀨有支。尒ㇾ時眞奈胡神參相、度奉支。其瀨眞奈胡御瀨止号弖、御瀨社定給支。從ニ其處一幸行、美地到給奴。眞奈胡神尒國名何問給支。大河之瀧原之國止白支。其處乎宇太之大宇祢奈乎爲天、荒草令ニ苅掃一天、宮造令ㇾ坐支。此地波皇太神之欲給地尒波不ㇾ可ㇾ有悟給支。其時大河自（大ノ上ニ移ス）南道、宮處覔尒幸行尒、美野尒到給弖、宮處覔伲賜比天、其處乎和比野止号支。從ニ其處一幸行尒、久求都彥參相支。汝國名何問給支。白久、久求小野止白支。倭姬命詔久、御宮處乎久求小野〔止〕号給〔賜〕弖、其處尒久求社定賜。于ㇾ時久求都彥白久、吉大宮處有白支。其處幸行志天園作神參相天、御園地進支。其處悅給、園相社定給支。從ニ其處一幸行尒、美小野有支。倭姬命目弖給天、即其處乎目弖野止号支。又其處仁、圓奈留有ニ小山一支。其處乎都不良止号支。從ニ此處一幸行、澤道野在支。其處乎澤道小野号支。其時大若子命從ニ〔大〕河一御船乎〔ナシ〕擧、御向參相支。于ㇾ時倭姬命大悅給天、大若子問〔給〕久、吉宮處在哉。白久、佐古久志呂宇遲之五十鈴河上尒、吉御宮處在白支。亦悅給天、問給久、此國名何。白久、御船向田國白支。〔從ニ諸〕ニ其處一御船乘給幸行支。其忌楯桙種々神寶物留置所名波、忌楯小野号支。從ニ其處一幸行波、有ニ小濱一。其處

水ノ上又其アリ
悲又慈
問ノ上又何アリ
濱又島
字ノ上又名アリ
田ノ上又家アリ

取レ鷲老(公。曰)在支。于レ時倭姫命御水飲止詔久、介老尓、何處尓吉水在止問給支。其老以二寒御水一御饗奉支。于レ時讃賜(給)。水門尓水饗神社定賜支。其濱名、鷲取小濱号支。然而二見濱御船坐。于レ時大若子命仁、國名何問給。白久、速兩二見國白支。介時其濱御船留給天坐時、佐見都日女參相支。汝國名何問給支。御詔不レ聞、御答毛不レ白旦、以二堅塩一多御饗奉支。倭姫命悲給。堅多社定給支。時乙若子命、其濱乎御塩井御塩山定奉支。從二其處一幸行旦、五十鈴(河)後之入江入坐支。時佐美留(川)(日)子參相支。問給久、此河名何。白久五十鈴(河)後白支。其處江社定給支 又荒崎姫參相。國名問給。白久、皇太神御前荒崎白支。恐志止詔。神前社定給。此其江上幸行。御船泊志處名、号二御津浦一支。從二其上一幸行。小濱在支。其嶋坐旦山末河内見廻給旦、如二大屋門前一在レ地支。其處上坐天、其處名号二大屋門一支。從二其處一幸行、神淵河原坐波、苗草戴者女參相支。(問給)。汝(何)爲。者女白久、我兵二苗草一女、宇遲都日女止白久(支)、又問給久、奈止加々久爲。者女白久、此國波鹿乃見毛爲止白支。其處乎鹿乃見止号支。何是問給尓(登)、止可賣白支。其處乎止鹿乃淵止号支。從レ其矢田宮幸行支。次家田田上宮遷幸支。其宮坐時、度會大幡主命、皇太神乃朝御氣夕御氣處(乃)御田定奉支。宇遲田々上尓在。名二拔穗田一是

也。從其幸行奈六(尾)之根宮座(給)。于時出雲神子吉雲建子命、一名伊勢津彦(彦)神。一名櫛玉命。并其子大歳神(子)櫻大刀(自)命　山神大山罪命(子)朝熊水神等、五十鈴河後江天尓奉御饗(支)。于時猿田彦神裔宇治土公祖大田命參相支。汝國名何問給尓、佐古久志呂宇遲之國止白弖、御止代神田進支。倭姫命問給久。有吉宮處哉。答白久、佐古久志呂宇遲之五十鈴之河上

現因視

者、是大日本國之中仁殊勝靈地侍奈利。其中、翁世(卅)八万歳之間仁毛未現知留有靈物。照耀(輝)如日月奈利。惟少縁之物不在志。定主出現御座。尓時可進(獻)止念比天、彼處尓禮祭申勢利。即彼處仁往到給天、御覽介礼波、往(惟)昔太神誓願給比天、豐葦原瑞穗國之内仁伊勢加佐波夜之國波、有美宮處利止見定給比天(ナシ)、從天上志天授降坐志天之逆太刀、逆鉾、金鈴等是(ナシ)也。甚喜於懷比天言上給比志(支)云云。

校云　御鎮座傳記の文

御鎮座本紀曰　狹長田之猿田彦大神訓悟白久、吾是天下之土君也。故号國底立神也。吾是應時從機比、化生出現之。故号氣神。吾亦根國底國利与麁備疎備來物仁、相率守護之神(ナシ)。故名鬼神。吾復爲生氣(仁)授与壽福之。故名大田神。吾能返魂魄之。故号興玉神。悉皆自然之名也。云々。

珍図彌

久ノ下內代アリ

今歲、猿田彥大神參。乃言壽覺白久、南大峯有美宮處。佐古久志呂宇遲之五十鈴之河上者、大八洲之內珍圖之靈地也。隨翁之出現二百八万余歲之前毛尓、未視知留在靈物利。照耀如大日輪也。惟少綠之物尓不在須。定主出現御座耶念比木。倭姬命曰、理實灼然。惟久大地大祖、天照皇大神、天御中主神、幷神魯岐神魯美命、誓宜(比)弖、豐葦原瑞穗國之內尓、伊勢加佐波夜之國波、有美宮處度利、見定給比天、自天上志天、投降居給布。天之逆太刀。天之逆鉾、大小之金鈴五十口。日之小宮之圖形文形等是也度弖、天之平手乎拍給(比弖)、甚壽喜於懷給。(於)此處尓、

岐太岐

遷造日小宮給。大宮柱太敷立於下津磐根、太田命以納輪精金底津(磐)根磐敷之。岐崎搏風於高天之原。(弖)、

廿六年ヨリ八 倭姬命世記ノ文

廿六年丁巳冬十月甲子、奉遷于天照太神於度遇五十鈴河上留。今年、倭姬命詔大幡主命、物部八十友諸(緒)人等、五十鈴原乃荒草木根苅掃比、大石小石造平弖、遠山近山乃大峽小峽尓立並木(材)乎、齋部之齋斧乎以(天)伐採天、本末乎波山祇尓奉祭弖、中間乎持出來天、齋鉏乎以(天)、(天)齊柱立、一名天御柱、一名心御柱。高天原仁千木高知利、下都磐根尓大宮柱廣敷立弖、天照太神幷荒魂(宮)和魂宮止奉鎭座。于時美船神朝熊水神等、御船仁乘奉利天、五十鈴之河上仁遷幸。于時河際仁志天、

展氏張

窣因來

懸ノ下氏伎アリ

倭姫命御裳裔長計加禮侍於介留洗給倍利。從レ其以降、号二御裳須會河一也。釆女忍比賣造二天平賀八十枚一、令下三天富命孫作二神寶鏡大刀小刀矛楯弓箭木綿等一。備中神寶大幣上矣。尒時皇太神倭姫命乃御夢喩給支(久)、我高天原尒坐、砥戸押砥原、如見々志、眞伎志國宮處波是(處)也　鎭理定理給止覺給支。于レ時倭姫命、幷御送驛使安倍武渟川別命、和珥彥國葺命、中臣國摩大鹿嶋命、物部十千根命、大伴武日命、並度會大幡主命等仁、御夢狀具令二教知一給支。于レ時大幡主命悅白久、神風伊勢國、百船度會縣、佐古久志呂宇治五十鈴河上鎭理坐皇太神止、國保伎奉支。終夜宴樂舞歌。如二日小宮之儀一志。爰倭姫命、朝日奉向國夕日來向國　浪音不レ聞國、風音不レ聞國、弓矢鞆音不レ聞國、打摩志賣留國、敷浪七保(國)之吉國、神風伊勢國之、百傳度會縣之。佐枍(拆)久志呂五十鈴宮尒、鎭理定理給止、國保伎給支。于レ時送驛使朝廷還詣天(上)、倭姫命御夢狀細返事白(支)。于レ時天皇聞食弖、即大鹿嶋命祭宮定給支。大幡主(命)神國造兼大神主定賜支。神舘造立、物部八十友諸(緒)人等率、雜神事取惣奉(惣捧)天、太玉串供奉。因興二齋宮于宇治縣五十鈴河上大宮際一。令二倭姫命居一焉。即建二八尋機屋一、令二天棚機姫神孫、八千千姫命一令レ織二大神御衣一。譬猶下在二天上一之儀上焉。

狹ハ狹カ

延喜式第四曰、太神宮三座。在度會郡宇治(鄉)五十鈴河上。

天照太神一座。　相殿神二座。

禰宜一人。從七位官。　大內人四人。　物忌九人。童男一人。童女八人。　父九人。　小內人九人。

同第九曰、度會郡大神宮三座。　相殿坐神二座。　並大。

麗氣曰、神躰八咫鏡座也。

延喜式第八奉幣　皇太神祝詞

天皇我御命以弖度會乃宇治乃五十鈴河上乃下津石根爾稱辭竟奉留皇太神乃大前爾申久、云々。　又云、度會乃宇治乃五十鈴川上爾大宮柱太敷立弖、高天原爾千木高知弖、稱辭竟奉留天照坐皇太神(乃)大前爾申久、云々。

天地麗氣記曰、下津宇津河照尊。兩鐵劍出神。是天照皇太神向下隨順天疎向津媛命

火珠神。上天神號名曰大日孁貴天照太神。下天神號名曰天疎向津媛命。

水珠神。上天神號名曰天御中主尊。下天神號名曰豐受大神。

熱田大神

古語拾遺曰、至於纏向日代朝景行天皇令日本武命征討東夷。仍枉(狂)道詣伊勢神宮。辭見倭

姫命一以二草薙劍一授二日本武命一而教曰、愼莫怠也。日本武命、既平二東虜一還至二尾張國一納二宮簀媛一淹留踰レ月。解レ劍置レ宅徒行登二膽吹山一中レ毒而薨。其草薙劍（今ル）在二尾張國熱田社一。云々。草薙神劍者、尤是天璽。自二日本武尊愷旋之年一、留在二尾張國熱田社一。外賊偸逃、不レ能レ出レ境。神物靈驗以レ此可レ視。

内宮相殿神

左天手力雄神。開天磐戸神

右拷幡豐秋津姫命　皇御孫尊母也

麗氣曰、天手力男命亦名二開神一神躰、八葉靈鏡、神寶弓坐。拷幡豐秋津姫命、神躰劍坐。

三十二神

見二前卷一、皇孫降臨之時御伴神也。云々　今号二内宮御伴神一、供二進朝夕御膳一云々

別宮

荒祭宮

式曰、荒祭宮一座。大神荒魂。去二大神宮北一廿四丈。又云荒祭宮大。

儀式帳曰、荒祭宮、稱大神荒魂。御形鏡坐。

舊事本紀曰、伊弉諸尊向日向橘小戸檍原祓除時所成神名八十禍津日神。次大禍津日神。復爲直其禍所成神名神直日神。次大直日神。

日本書紀曰、伊弉諸尊、滌去吾身之濁穢。則往至筑紫日向小戸橘檍原祓除時、所成神号曰八十枉津日神。次將矯其枉而生神号曰神直日神。次大直日神。

舊事本紀四座、日本書紀三座也。

倭姬命世記曰、荒祭宮一座。皇大神荒魂、伊弉那伎神所生神。名(八)十枉津日神。御形鏡坐。

舊事本紀又曰、伊弉諸尊滌去其身之濁穢時所生神三柱。洗左御目時、所生之神、名天照大御神。洗右御目時、所生之神、名月讀命。並坐五十鈴河上。謂伊勢齋大神。素戔烏尊事畧之

日本書紀曰、洗左眼因以生神号天照太神。洗右眼因以生神号月讀命。

太田命傳曰、荒祭宮一座。皇大神荒魂也、伊弉諸尊到筑紫日向小戸橘之檍原而祓除之時、洗左眼因以生日天子大日靈貴也。天下化生名曰天照太神荒魂。荒祭神是也。多賀宮一座。止由氣皇太神荒魂伊弉諸尊到筑紫日向小戸橘之檍原而、祓除之時洗右眼因以生月天子天御中主靈貴也。

也。天下化生名曰ニ止由氣大神之荒魂一。多賀宮是也。
神記曰、阿波良波命傳 荒祭宮一座。天照大日靈貴荒魂靈御形鏡坐。伊弉諾尊洗ニ左眼一因以生神号曰ニ天照荒魂一。亦名ニ瀨織津イ比咩神一也。
或書曰、神祇本源 今案、橘小戸祓除之時、洗ニ左御眼一以所生神稱ニ荒祭宮一。洗ニ右御眼一以所生神稱ニ多賀宮一也。荒祭宮者八十禍津日神、大禍津日神也。多賀宮者、神直日神、大直日神也。天照皇太神五十鈴河上御鎭坐之時、荒祭宮、多賀宮爲ニ攝社一同時御鎭坐也。云々 並坐ニ五十鈴河上ニ之由舊事本紀載之歟。不レ可レ成ニ疑惑一者哉。云々。
太田命傳又曰、國常立尊所化神天鏡尊、月殿居所ニ鑄造一鏡、三才三面之內、云々 今二面者、天鏡尊子、天万尊傳持給之。次沫蕩尊、次伊弉諾伊弉再尊傳持(給)之。(天)神賀告(吉)詞白賜旦、日神、月神所化乃眞經津鏡是也。今崇祭一面、荒祭宮御靈、一面多賀宮御靈坐。具見ニ前卷。
阿波良波命傳、又曰 天照荒魂、亦瀨織津比咩神。見上。天鏡尊、月殿居焉所ニ鑄造一之寶鏡三面之內、二面者伊弉諾伊弉再尊傳持天神賀告詞白賜旦、日神、月神所化眞經津鏡一面座也。云

々

伊佐奈岐宮

式曰、伊佐奈岐宮二座。去二太神宮北一三里。伊佐諾尊一座。伊佐再尊一座。又云、伊佐奈岐宮二座、並大。

倭姫命世記曰、伊弉諾尊靈御形鏡坐。左方 伊弉再尊靈御形鏡坐 右方。

社記曰、貞觀九年八月丁亥朔二日戊辰勅伊勢國伊佐奈伎伊佐奈弥神改レ社稱レ宮。

月讀宮

式曰、月讀宮二座。去二太神宮北一三里。月夜見命一座。荒魂命一座。第九又云月讀宮二座。並大。

倭姫命世記曰、月夜見命二座。形馬乘男形也。

一書云、御形、馬乘男形。（著二紫御衣一、金作帶二太刀一佩也

荒魂命。右方。 形鏡坐。飛鳥宮御宇丙寅年十一月十一日、（遷）二魚見神社一也。

社記曰、寶龜三年八月甲寅幸二難波一、内親王第是日異レ常、風雨拔レ樹發レ屋下レ之。伊勢月讀神爲レ祟。於是每年九月准二荒祭神一奉レ馬。又荒御玉命、伊佐奈岐命、伊佐奈弥命、入二於宮社一。貞觀九年八月丁亥改二社号一稱レ宮。卷向宮御代、豐玉姫命、承二神託一而刻二木馬一、顯二天童

形ニ奉レ獻ニ大神財一是也。（各一疋、左右坐。）荒魂命靈、元是鏡坐。依ニ神宣一奉レ遷ニ魚見社一。以後宮号之時、以ニ木馬一爲ニ神靈一者也。月夜見命靈、豐玉姬命所レ作木童天童、荒魂命靈、同命所レ作木馬座。云云。

瀧原宮

式曰、瀧原宮一座。（太神宮（ナシ下同）遙宮。在下伊勢與ニ志摩一堺山中上。去ニ大神宮西一九十里。）瀧原並宮一座。（大神宮遙宮。在ニ瀧原宮地內一。又云瀧原宮大。云々。）

儀式帳曰、瀧原宮。（伊勢志摩兩國堺、大山中在ニ大神宮以西一。相去九十二里。）稱ニ天照太神遙宮一。御形鏡坐。

世記曰、瀧原宮一座。靈御形鏡坐。水戸神。名ニ速秋津日子神一是也。

太田命傳曰、伊弉諾伊弉再所生河神名曰ニ水戸神一。

又曰、並宮一座。靈御形鏡坐。速秋津日子神妹秋津比賣神是也。此二神因ニ河海一持別而生神八柱。

神記曰。（神寶日出秘府）瀧原神鏡、（倭姬命御時龍奉獻寶鏡坐。猿田彥所化乃靈。石爲ニ正躰一也。三盞坐也。是龍神應變也。朱注云、白龍上石是也。云々。）

伊雜宮

式曰、伊雜宮一座。（大神宮遙宮。在ニ志摩國答志郡一。去ニ太神宮一南八十三里。）

宮ノ下頭註本以南ノ二字アリモ下儀式帳八物紙全書頭注本ニヨル

麿内麻

稲因穂

右諸別宮、新年、月次、新甞等祭供レ之。就中瀧原並宮、伊雑宮、不レ預二月次一。其宮別各内人二人。其一人用二八位已上并蔭子孫内人一人一物忌、父各一人。但月讀宮加二御巫内人一人一。又云、志摩國答志郡粟嶋坐、伊射波神社二座。並大。

儀式帳曰、伊雑宮在二志摩國答志郡伊雑村一。大神宮●相去八十二里。稱二天照太神遙宮一。御形鏡坐。

倭姫命世記曰、伊雑宮一座。天牟羅雲命裔。天日別命。玉柱屋姫命是也。御（ナシ）形鏡坐。大歳神一座。國津神子。御（ナシ）形石坐。●

同記曰、廿七年戊午秋九月。鳥鳴聲高聞弖、晝夜不レ止囂。此異止宣弖。大幡主命舍人紀麿良止差、使遣。令レ見二彼鳥鳴處一。罷行見波、嶋國伊雑方上葦原中在二稲一●（二一六）基一。生本波一基尓爲弖、末千穗茂也。彼稲、白眞名鶴咋持廻乍鳴支。此見顯、其鳥鳴聲止支。返事申支。尓時倭姫命宣久、恐志、事不レ問奴鳥須良、田作皇太神尓奉物乎止詔弖、物忌始給弖、彼稲伊佐波登美神乎爲弖、拔穗尓令レ拔弖、皇太神乃御前懸●久（寫、大本大字）眞懸奉始支。則其稲大幡主女子乙姫尓、淸酒令レ作、御饌仁奉始支。千税奉始事、因レ茲也。彼稲生地千田止号支。●在二嶋國伊雑方上一。其處伊佐波登美之神宮造奉爲●（寫字因宮ノ下ニアリ）二皇太神攝宮一。伊雑宮此也。彼鶴眞鳥乎号二大歳神一。同處祝●宛、定、奉也。又其神、皇太神之坐朝熊河後之葦原中、石尓志弖坐。彼神小朝熊山嶺

社造奉、祝宛(定)令坐。大歲神稱是也。

已上、內宮六所別宮是也。今加風宮爲七所別宮也。

風宮

神記曰、神祇譜天齒 風神 謂志那加都比古神。廣瀨龍田同神。

日本書紀一書曰、伊弉諾尊与伊弉冉尊共生大八洲國。然後伊弉諾尊曰、我所生之國唯有朝霧而薫滿之哉。乃吹撥之氣化爲神号曰級長戸邊命。亦曰級長津彥命。是風神也。

社記曰、正應六年三月廿日官符改社号奉授宮号、預官幣二宮同前也。依異國降伏之御祈禱也。嘉元正迁宮之時被增作寶殿。

內宮別宮辭竟。

內宮者或記云、古事記釋 舊記云、內宮号者、內者宇遲鄉本名也。故就處地因以稱內宮也。

興玉神

无神殿、皇太神座正宮之西北角大地輪之中臺祝祭也。云々

世記曰 无神殿。衢神猿田彥大神是也。一書曰、衢神孫大田命。(是)土公氏遠祖神。五十

鈴原地主神也。

瀧祭神

无ニ神殿一

世記曰、无ニ寶殿一。在ニ下津底一水神也。一名澤女神、亦名美都波神。

府錄曰、天瓊矛者獨古變成也。天逆矛、天逆大刀者、大梵天王牙也。件神寶藏ニ瀧祭仙宮一者也。亦号ニ常世鄕一。是龍宮也。

寶山記曰、此寶杵則常世宮殿內奉レ納。俗云、五十鈴川瀧祭靈地、底津寶宮是也。是名ニ龍宮城一也。亦号ニ仙宮一也。

北ヲ西

儀式帳曰、在ニ太神宮北川邊一无ニ御殿一。

或書（神祇本源）曰、瀧祭神与ニ廣瀨龍田神一則同躰異名水氣神也。故廣瀨龍田神名号ニ天御柱國御柱一。是天逆戈守護緣也。云々

酒殿神

世記曰、天逆大刀、逆鉾、金鈴藏納之。

大田命傳曰、神靈器座。

御倉神

專女也

大田命傳曰、素戔烏尊子、宇賀之御魂神、亦專女(タウメ)三狐神

御門神

豐石窓　櫛石窓神

四至神

卅四前。　宮中祭レ之。

大田命傳曰、夜叉神大將石座

攝社

延喜式曰、太神宮所攝廿四所〔座〕。

朝熊社。

社記曰、在二宇治鄕一前社

校云大系本二座とし一の誤とす本書及寫本一なり

大田命傳曰、朝熊神社六座。倭姫命崇祭之神社也、

櫛玉命一座。倭姫命瑞寶奉ㇾ造之。亦曰ニ服匠一、御靈石坐。

於保止志神一座。倭姫命御代崇祭之神社。寶名鎭所化御靈石坐也。

懸税靈(神)

櫻大刀神一座。靈衣(無、花)未遲(座一)(也)。大八洲櫻樹始從ニ天上一降居也、因以爲ニ花開姫命一、一座大山祇雙坐也。

苔虫神一座。•櫻大刀子、神與合ㇾ力、大刀子小刀子鉾頭(等)造ニ進之一。靈石坐也。

大山祇神一座。寶鏡鑄造功神也。靈石(座)也。櫻神与並座也。

朝熊水神一座。寶鏡鑄造功神也。靈石坐也。

件神社之寶鏡二面、是則日天月天之所化白銅神鏡。依ニ神託一倭姫命之御制作也。

凡天照太神御入座之時、大年神、大山津見、山祇、朝熊水神等奉ㇾ饗ニ此之處一。故神社定給也。

儀式帳曰、小朝熊神社、稱ニ神櫛玉命兒、大歲兒 櫻大刀自一。形石坐。又苔虫神、形石坐。又

大山罪命子、朝熊水神。形石坐。倭姫内親王御世定祝。

園相社

知ヲ和ニ作ル是カ

（式第九神）社記曰、在二沼木鄉積良一前社
帳曰、稱二大水上兒、曾奈比々古命一。形石坐。同內親王定祝。

鴨社
（式第九神）社記曰、在二城田鄉山上村一前社。在二同鄉狩田村一。
帳曰、稱二大水上兒、石己呂知居命一。形石坐。同內親王定祝。

田乃家社
（式第九神）社記曰、在二同鄉矢野村一前社
帳曰、稱二大神滄川神一。形鏡坐。大長谷天皇御宇定祝。

蚊野社
（式第九神）社記曰、在二田邊鄉蚊野村一前社
帳曰、稱二大神御蔭川神一。形鏡坐。同御宇定祝。

湯田社
（式第九神）社記曰、湯田村。

電ヲ雷
處ノ下
社アリ

比ノ下
古アル
ニヨル

帳曰、稱₌鳴震雷₋。又大歳御祖命。形无。同御宇定祝。已上六ケ處造神宮使造作奉也。

大土御祖社

（式外九神）社記曰、在₌宇治鄕₋。

帳曰、稱₌國生神兒、大國玉命₋。次水佐々良比(古)命。次佐々良比賣命。形石坐。倭姬内親王定祝。

國津御祖社

（式外九神）社記曰、在₌同鄕₋。

帳曰、稱₌國生神兒、宇治比賣命₋。形石坐。又村田比賣命。形无。同親王御世定祝。

朽羅社

（式外九神）社記曰、在₌田邊原村₋。

帳不レ載之。

伊佐奈弥社

社記曰、長寛實錄文云、无₌寶殿敷地₋。

帳不レ載之。

津長社（式第九津長大水神社）

社記曰、在ニ宇治鄕一。

帳曰、稱ニ大水上皃、●栖比女命一。形石坐。同御世定祝。

大水社

（式第九神）社記曰、在ニ同鄕一。

帳曰、稱ニ大山罪乃御祖命一。形无。同御世定祝。

大國玉比賣社

（式第九神）社記曰、長寬實錄文云、无ニ寶殿敷地一。

帳不レ載之。

江神社

（式第九神）社記曰、在ニ二見鄕一。

帳曰、稱ニ天須婆（留）女命兒、長口女命一。形在レ水。●之大歳御祖命、形无。又宇加乃御玉、同

栖ヲ柄

御世ヲ內親王ニ作ル下同ジ

婆ノ下留アルニヨル

之ヲ又ニ作ル可從

分乎ヲ乃乎ニ作ル可従

古ノ下命アルニヨル

御世定祝。

神前社

社記曰、（式第九神）在二宇治郷下松下一。

帳曰、稱二國生神兒、荒前比賣命一。形石坐。同御世定祝。

粟皇子社

社記曰、（式第九神）在二伊介嶋一。

帳曰、稱二須佐分乎〔乃乎〕命御玉道主命一。形石坐。同御世定祝。

久具都比賣社

社記曰、（式第九久々都比賣神社）在二城田郷久具村一前社。

帳曰、稱二大水上神御子、久々都比女命一。又久々都比古（命）形石坐。同御世定祝。

奈良波良社

社記曰、（式第九神）在二同郷宮子村一前社。

帳曰、稱二大水上兒、那良原比女命一。形石坐。同

拵ハ棒ノ誤カ

代ナシ

同以下ナシ

拵原社
（式第九神）社記曰、在二田邊鄉一前社
帳曰、稱二大須婆留女命御玉一。形无。良奈朝廷御世定祝。

御船社
（式第九大神乃御船神社）社記曰、在二有介鄉止羽村一前社
帳曰、稱二大神乃御蔭川神一。形无。倭姫内親王代定祝。

坂手國生社
（式第九神）社記曰、在二田邊鄉氏社北岡一前社
帳曰、稱二大水上兒、高水上一。形石坐。同内親王定祝。

狹田國生社
（式第九神）社記曰、在二湯田鄉狩田村一前社
帳曰、稱二須麻留女神兒、速川比古、速川比女、山末御玉三柱一。形无。同内親王定祝。

多伎原社　帳瀧原

末ノ下入アリ

藤ヲ葭ニ作ル儀式帳

社記（式第九載）曰、在二三瀨村一。

帳曰、稱二𪉩奈胡乃神一。形石坐。同御世定祝。

河原社

社記（式第九載）曰、在二沼木鄕佐八村一。

帳曰、稱二月讀神御玉一。形亡。同御世定祝。

已上所レ載二延喜式一之次第也。以二記并儀式帳一注二在所名字等一。式第九伊勢國度會郡五十八座内同在レ之。

帳曰、度會郡神社合四十處之中、官帳社廿五處、•末官帳社十五處。

或記曰、儀式帳廿五處內瀧原神社無殿舍

久𪉩良比社　宇治山田社　堅田社已上四社雖レ載二儀式帳一不レ載二神祇式一。

帳曰、末官帳入田社云々

一末官帳十五社

鴨下神社　津布良神社　•藤原神社

小社神社　許母利神社　新川神社

石井神社　宇治乃奴鬼神社　加努弥神社
河相神社　熊淵神社　荒前神社
那自賣神社　葦立弖神社　牟弥乃神社
右神社倭比賣乃御時仁祝、并御刀代田宛奉也。
一田邊氏社
荒木田氏祖、天御中主尊廿世孫、天見通命是也。
延喜十一年正月廿八日官符預二四度案上幣一畢。
私云、件年官符内外宮相殿神支歟。田邊氏社事重可レ勘也。

元元集卷第六　終

按云 治、沼。魚、眞。に作る本あり

○外宮遷坐篇

雄略天皇御宇即位二十一年丁巳冬十月朔、皇太神告二倭姫命一曰、吾如二天之小宮坐一尓於二天下一毛一所耳不レ坐、御饌毛安不二聞食一乃。丹波國與佐之小見比治之魚井之原坐道主子八乎止女乃齊奉御氣都神、止由氣皇太神乎、我坐國欲度誨覺給支。倭姫命差使奏二聞朝廷一。天皇乃相夢矣。明年戊午秋七月奉レ迎。九月望遷坐度會山田原之新宮一。其五十鈴宮鎭坐以來、隔年四百八十有四歳也。皇太神託宣、吾祭奉仕之時、先須レ祭二止由氣太神宮一。然後我宮祭事可二勤仕一。故則諸祭事以二止由氣宮一爲レ先矣。

豐受太神宮　天御中主神御靈也。

大田命傳曰、御間城入彦五十瓊殖天皇三十九歳壬戌、天照太神(乎)遷二幸但波乃吉(與)佐宮一。積二四年一奉レ齊。今歳、止由氣之皇神天降坐天、合レ明齊レ德給。如二天小宮之儀一志天、一處雙坐支。于時和久產巢日神子、豐宇氣姫命・稲靈神也奉レ備二御神酒一。

ロ因ナシ

注云、今世謂二丹後國竹野郡奈具社座、豐宇賀能賣神一是也。

神祇式丹後國加佐郡奈具神社。竹野郡奈具神社。云云

和久產巢日神

舊事本紀云、伊弉冉尊欲レ生二火之產靈迦具突智一之時、云云。生二稚產靈日神一。又云、火神軻遇突智、娶二土神埴土姬一、生二稚產靈神一。此神頭上生二蠶与レ桑、臍中生二五穀一。亦云、此神之子謂二豐宇氣比女神一。

亦丹波道主貴（素盞嗚尊孫、御子神是也。）築奉レ備二朝大御饗夕大御饗一奉仕矣。其功已辭竟天、止由氣太神復二上高天原一支。此處仁志天以二白銅寶鏡一旦、道主貴八小男童天日別命崇祭奉焉。

上代本紀曰、御間城入彥五十瓊殖天皇三十九歲壬戌、天照太神遷二幸但波乃吉佐宮一。今歲止由氣之皇太神結二幽契一天降居。（于レ時、大御食津臣命、速（建）御食（倉）命、（中臣祖也）屋船命、（草木靈、今号二度相郡坐清野井庭神社一也、）宇賀之御魂稻女神、（今号二小俣神社一也、）宇須乃女神、（五穀靈。号二宇須野神社一也）須摩留賣命、（今号二須摩留賣神社一是也）宇賀乃大土御祖神、（素盞烏尊子也。度相山田原地護神也〔ナシ〕）若雷神、（今世号二北御門大明神一是也）彥國見賀岐建与來（束）命、（号二度

相國見神 社一是也 天日起命、伊勢大神 主祖神也 振鬼命、玉出大 內八祖 相從以戻止矣。尒時天照皇太神与二止由氣皇太神一、
合レ明齊レ德居焉。如二天上之儀一、一處雙坐焉。和久産巣日神子、豐宇賀能賣命、屋船稻 靈神也 生二五
穀一而善釀レ酒、奉二御饗一。御炊神氷沼道主、素戔烏尊孫也。（亦）名二粟御子神一。今世号二御炊（物忌）一其縁也 挙二四九三十六竈神一、
而、朝大御氣、夕大御氣於炊備天、奉二御饗一 詔。丹波道主貴、大日々天皇之子、彦坐王子也。今世（號二大物忌（子））一此縁也 爲二御杖
代一天、品物備二貯之百机一而、奉二神帯一焉。諸神所レ作祭レ神之物、五穀既成、百姓饒矣。其功（已）
辞竟天、天照太神伊勢國仁向（幸）給。止由氣太神復昇二高天原一弖、日之小宮座。于レ時以二吾天
津水鏡乃寶鏡一、留二居吉佐宮一。云云
注云、天地開闢之降、雖二万物已備一。而莫レ照二於混沌之元一。因レ茲万物之化若レ存若レ亡。而下
々來々自不レ尊。于レ時國常立尊所化神、汎二形於天津水影一、以二天御量事一眞經津寶鏡三面鑄
表。寔是自然之靈物、天地感應。當二此時一神明之道明、而天文地理以自存者也。故鏡作神
名 号二天鏡神（尊）一其縁也。
即起二樹大津神籬於魚井原一、秘二藏黄金樋代一天、道主貴八小童大日起命、豐宇賀能賣命、備二御
饌一奉レ齊焉。于レ時高貴大神勅宣、以二皇孫尊靈一、宜レ崇二大祖止由氣皇太神乃前社一。云云 仍爲二相

命ノ下因子アリ

飯ノ上大御アリ

殿神一座。靈形鏡坐也　皇孫尊金鏡也。

大田命傳曰、泊瀨朝倉宮御宇天皇廿一年丁巳冬十月一日、倭姬命夢教覺給久、皇太神吾如天之小宮（坐）尓、天下仁志天毛一所耳（ナシ）（不）坐爪、御饌安不聞食爪。丹波國與佐之小見比沼之魚（眞）井原尓坐、道主子八乎止女乃奉齋、御饌都神豐受皇太神乎、我坐國欲度誨覺給支。尓時大若子命差使弖、朝庭（廷）尓御夢之狀乎令言給支。即天皇勅、（汝）大若子使罷往天、布理奉宣支。故率手置帆負、彥狹知二神裔、以齊斧齊鉏等、始採山材、構立寶殿弖、明年戊午秋七月七日、以大佐々命、弟若子命子、尓佐布命子、彥和志理命子、阿波良波命、從丹波國余佐郡魚井原之天、奉迎豐受皇太神、度會山田原乃下都磐根如五十鈴宮（地）、大田命奉敷之大宮柱号忌柱、亦云天（天）御量柱。亦云心御柱。是則皇帝之命、國家之固、神明之德也。故龍王（神）土神各一座、爲守護神。廣敷立天、高天原尓千木高知弖、鎭理定理坐止稱辭竟奉支。亦撿納神寶、卜兵器爲神幣矣。更定神地神戶弖、二所皇太神宮乃朝大御氣、夕大御氣乎、日別尓齋敬供進之。亦隨天神（之）訓、以土師之物忌造天平瓮乎、丹波道主命令（ナシ）物忌職奉備（仕）。飯炊（滿）供進之。皇太神重託宣、吾祭奉仕之時、先須祭止由氣太神宮（ナシ）（也）。然後我宮祭事可勤仕也。故則諸祭事以止由氣宮爲先也。

御鎮坐本紀曰、泊瀬朝倉宮御宇天皇廿一年丁巳十月朔、倭姫命夢教覺給天(久)、皇太神吾如天之小宮坐尓、於天下弖毛一所弖坐止(波)御饌毛安不聞食爪、丹波國與佐之小見比沼之魚井之原坐、道主子八乎止女乃奉齋、御饌都神

注云、是止由氣太神者、水氣元神坐。千變万化、受一水之德、生續命之術。故名(曰)御饌都神也。亦古語、水道曰御饌都神(也 亦天照太神與豐受太神一所尓雙御坐之時、陪從諸神等奉(御)饗、其緣也。

止由氣皇太神乎、吾坐國欲度誨覺給支。尓時大若子命(乎)一名大幡主命。御間神社是也差使弖、朝庭(廷)尓御夢之狀乎令言給支。即天皇祚御夢。則天皇今日相夢矣。汝大若子使罷往弖、布理奉宣支。今歲、物部八十氏之人等、挙手置帆負彥狹知二神之裔、以齊斧齊鉏等、始採山材天、隨太(ナシ)神教度相山田原尓(乃)地形廣大(亦)麗。於是地、大田命以金石天、下津底根尓敷立弖、搆立寶殿弖、明年戊午秋七月七日、以大佐々命奉布理留。共從神、中臣祖大御食津命、坐度相郡、號御倉社小和志理命、事代命、佐部支命、御倉命、屋和古命、野古命、乙野古命、河上命、速(建)御倉命、興魂命、各前後左右尓相副從奉仕。大佐々命、小和志理命、奉戴正體。興玉命、道主貴、

今因爾ニ改ム

天ノ下因之アリ

奉レ戴ニ相殿神一。駈仙蹕比、錦蓋覆、日繩曳天、天御翳日御翳屏、奉ニ行幸一。尓時若雷神天之八重雲乎四方尓薄靡天、爲ニ御垣一天、從ニ但波國吉佐宮一遷ニ幸倭國宇太乃宮一。御一宿坐　次伊賀國穴穗宮御二宿、于レ時朝夕御饌、箕造竹原、并箕藤黑葛生所三百六十町。亦年魚取瀨（淵）、梁作瀨一處。亦御栗栖三町。國造等貢進。仍二所皇太神之朝大御氣、夕大御氣之料所尓定給支。次伊勢國鈴鹿神戸御一宿、次山邊行宮御一宿、今号ニ壹志郡新家村一是也　次遷ニ幸渡相沼木平尾一。與ニ于行宮一天三箇月坐焉。号ニ今處一（天名ニ）離宮一也。夜々天人降臨而供ニ神樂一。今世号ニ豐明一其緣也。來目命裔屯倉神（ナシ）男女小男童神宴焉。戊午秋九月望　從ニ離宮一遷ニ幸山田原之新殿一。奉レ鎭ニ御船代御樋代之內一。以ニ天衣一奉レ錺レ之、如ニ日小宮儀一也。

注云、樋代則天小宮之日座儀也。故謂ニ天御蔭日御蔭登隱坐一祝言緣也。船代則謂ニ天材木屋船之靈一。故瑞舍号ニ屋船一緣也。天御翳日御翳隱坐古語也。

依ニ天照太神御詫宣一、太神第一攝神多賀宮奉レ傍ニ止由氣宮一也。亦天照太神（御託宣）、相殿坐神二前、止由氣宮相殿神皇孫命尓奉ニ陪從一留。故号ニ止由氣宮相殿一。（而）東西座給。

自レ爾以來（往）、以ニ天手力男神、万幡豐秋津姫命一、爲ニ天照太神乃相殿神一座。中臣祖大御食津

瀰呂ノ内一字ハ衍ナルベシ

臣命稱辭竟、神寄(カンヨセ)、奉ニ祝詞一言佐久。度遇乃山田原乃、下都磐根尓、大宮柱廣敷立天、高天原尓千木高知、皇御孫乃命乃稱辭定奉留、天照(坐)須止由居乃皇太神乃廣前尓、恐美恐美毛申給久、天照皇太神、神魯岐神呂瀰美命尓言寄任、天(之)小宮之寶殿乎、此靈處尓奉ニ移鎮(造)一留(利)、以ニ今日一天奉ニ移鎮一利御坐須状於、平久安久令ニ知食一度申給止、言壽鎮居白支(久)、宮人皆參、終夜宴樂。猿女祖天鈿女裔哥女舞嬢、來目命裔屯倉小男童笛生琴生簫生箏生(ナシ)築生諸命等、一時起哥舞。其絲竹音鏗鏘(サウサウ)而滿ニ六合一。天神地祇受ニ和氣一而隨ニ實用一、天下榮樂、海内太平焉。

措[illegible]

凡神樂起、在昔素戔鳴神奉ニ爲日神一行甚无状種々陵侮(シノギアナヅル)。于ㇾ時天照太神赫怒、入ニ天石窟一閉ニ磐戸一而幽居焉。尓乃六合常闇、晝夜不ㇾ分。群神愁迷、手足罔ㇾ措。ㇾ厥庶事、燎ㇾ燭而式辨。

[illegible]ナシ

天御中主神(止由氣皇太神是也)太子高皇産靈神命宣、會ニ八十万神於天八瑞(満ノ)河原一(雲漢是也)深思遠慮、於ニ天石窟戸前一、擧ニ庭火一、舉作ニ俳優一。猿女君祖天鈿女命採ニ天香山竹一、其虛節間離ニ風孔一、通ニ和氣一(今世号ㇾ笛類是也)亦天香弓與並叩ㇾ絃。(今世謂ニ和琴一其緣(也))木々合々而備ニ安樂聲一。(移ノ)ニ和風一顯ニ八音一。

校云、天復無風、風ヲ太天、無復有風既

即猿女神伸ㇾ手抗ㇾ聲、或哥或舞。顯ニ清淨之妙音一、供ニ神樂曲調一。當ニ(此)時一、歎解ニ神怒一、妖氣既明、天復無ニ風塵一。以來風雨時若、日月全ㇾ度、一陰一陽万物之始也。一音一聲万樂基也。神道

續因續ニ改ム

之奥續、天地之靈粹、絃竹之要、八音之曲、已以爲レ貴。故依ニ舊氏之權一、猿女氏率ニ來目命孫屯倉男女一轉ニ神代之遺迹一、而今供ニ三節祭一、永爲ニ後例一也。

或書曰、神寶日出秘府云々　人長者猿女君祖、天鈿女命也。依ニ高貴尊勅命一負ニ沖天氣字一、即時八百万神等集會坐。故手持物名ニ之沖一也。古語婆娑羅　御笛神善龍王採ニ天香山金竹一其空節間雕ニ風孔一融ニ通和氣一、抗ニ安樂聲一矣。御歌神本聲曲、天兒屋根命末音曲、太玉命御琴神、金鵄命長白羽命、一云神鵄命曩孫長白琴云々　用ニ天香弓六張一叩レ絃、亦金色靈鵄飛來止ニ于弓之弭一、其鵄曄煜狀如ニ流電一、由レ是作ニ其尾形一也。乃有ニ手置大小及音聲亘細妙音一、古之遺式乃天表也。今世号ニ鳥名子一、則金鷄長鳴緣也。天皇倭姫命詔宣久、男弓弭之物、大刀小刀弓矢楯梓鹿皮角猪皮忌鍬忌鋤類是。女手末之物、麻桶綿柱天機具荒妙衣和妙衣荷前御調類是。都合天地生長之土毛。云云仍撿ニ納神寶一卜ニ兵器一爲ニ神財一。亦更立ニ神地神戸一二所大神宮乃朝大御氣、夕大御氣乎、日別尓齊敬供奉。亦隨ニ天神之訓一以ニ土師氏一爲ニ物忌職一、造ニ天平瓮、諸土器類天、供進。亦開化天皇孫子、丹波道主貴苗裔八小童女寶殿御鑰賜天奉レ開ニ寶殿一。亦素戔烏尊子氷沼道主率ニ御竈神火神嚴香來雷水戸神嚴罔象女薪神嚴山雷一而御飯炊滿供奉、今号ニ御炊物忌父子一其緣也、舂女炊女是　亦度相河邊有ニ一漁人一、名号ニ天忍海人一、今謂ニ之掃守氏一　取ニ年魚一蓄ニ神膳食一矣。天照皇太神重詑宣久、吾祭奉レ仕

之時、先須祭止由氣皇太神宮也。然後我宮祭事可勤仕也。故則諸祭事以止由氣宮爲先也。亦止由氣太神一處御鎭坐、乃今卜食事、天皇勅曰、宜本記宗神之續以高皇產靈神苗裔大佐々命兼行二所皇太神宮之大神主職奉仕矣。

倭姬命世記曰、受皇神詫宣久、其造宮之制者、柱則高大、板則廣厚礼。是皇天之昌運、國家之洪(吉止)啓發宜助神器之大造奈利。即承皇天之嚴命天、移日小宮之寶基造伊勢兩宮焉。

神皇實錄曰、豐受宮四座（在度會郡沼木郷山田原 大一座 前二座 繩）相殿。天御中主皇神一座

御間城入彥五十瓊殖天皇卅九歲壬戌(戊)、天照太神遷幸但波乃吉佐宮。今歲、止由氣(之)皇太神結幽契天降居矣。

泊瀨朝倉宮御宇天皇廿一年丁巳冬十月一日、倭姬命夢敎覺給久、皇(太)神吾如天之小宮坐尓、天下仁志(天毛)一處耳坐瓦(波)、御饌毛安不聞食瓦。丹波國與佐之小見比沼之魚井之原坐、道主王子八乎止女(乃)齊奉。御饌都神止由氣皇太神乎、我坐國欲度誨覺給支。尓時大若子命(乎)差使亘、朝廷尓御夢之狀乎令言給支。即天皇勅汝大若子使罷往天、布理奉宜支。故率手置帆負彥狹知二神之裔、以齊斧齊鋤等始採山材構立寶殿亘、明年戊(戊)午秋七月七日、以大佐々

校云古事記裏書を作治ニ沼可従

相ノ上即アリ古事記裏書

命ニ率ニ諸神等ニ從ニ丹波國與佐郡眞井原ニ奉ㇾ迎ニ止由氣大神ㇵ度遇乃山田原之下都磐根尓大宮柱廣敷立天、高天原尓千木高知天、鎭理定理居坐祝祢辭竟天奉仕。天照太神託宣諸祭事以ニ止由氣宮ニ爲ㇾ先也。

但波國與謝郡比沼之魚井原、與謝郡今在ニ丹後國ニ。比沼眞井神社今在ニ同國丹波郡ニ。

奈具神社　豐宇賀能賣命也

丹後國風土記曰、比●沼山頂有ㇾ井、其名云ニ眞井ニ今既成ㇾ沼。此井天女八人降來浴ㇾ水。于ㇾ時有ニ老夫婦ㇵ其名曰ニ和奈佐老夫、和奈佐老婦ニ。此老等至ニ此井ニ而竊取ニ藏天女一人衣裳ニ。即有ニ衣裳ニ者皆(天)飛上。但无ニ衣裳ニ女娘一人(留)即身隱ㇾ水而獨懷愧居。爰老夫謂ニ天女ニ曰、吾无ㇾ兒。請ニ天女娘ニ。汝爲ㇾ兒。天女答曰、妾獨留ニ人間ㇵ何敢不ㇾ從。請許ニ衣裳ニ。老夫曰、天女娘何存ニ欺心ニ。天女云、凡天人之志、以ㇾ信爲ㇾ本。何多ニ疑心ㇵ不ㇾ許ニ衣裳ニ。老夫答曰、多ㇾ疑无ㇾ信、率土之常。故以ニ此心ニ爲ㇾ不ㇾ許耳。遂許即相副而往ㇾ宅。●相住十餘歲、爰天女善爲ㇾ釀ㇾ酒。飲ニ一杯ニ吉万病除之。其一坏之直財積ㇾ車送之。于ㇾ時其家豐ニ土形富。故云ニ土形里ニ。此自ニ中間ニ至ニ于今時ニ便云ニ比沼里ニ。後老夫婦等謂ニ天女ニ曰、汝非ニ吾兒ㇵ暫借住耳。宜ニㇾ早出

去。於是天女仰天哭慟、俯地哀吟。卽謂老夫等曰、妾非以私意來。是老夫等所願、
何發猒惡之心、忽存出去之痛。老夫增發瞋願去。天女流涙微退門外。謂鄕人曰、久
沉人間不得還天。復無親故。不知由所居吾何々々哉。拭涙嗟歎、仰天哥曰。阿
麻能波良布理佐氣美禮婆加須美多智伊幣治麻土比天由久幣志良受母。遂退去而至荒塩村。
卽謂村人等云、思老夫老婦之意、我心无異荒塩者。仍云比沼里荒塩村、亦至丹波里哭
木村據槻木而哭。故云哭木村。復至竹野郡船木里奈具村。卽謂村人等云、此處我心
(成)奈具志久、古事平善者云奈具志。乃留居此村。斯所謂竹野郡奈具社坐豐宇賀能賣命也。
或書曰、神祇本源神道玄義篇云云 問以豐受皇太神稱御氣津神其義如何。答謂、御氣津者水德号也。秘
府實錄曰天御中主視天下而式時候撫諸天子照臨天地之間而以一水之德利万品之
命。故亦名曰御氣津神也。神語曰、御義理也。古語天津御氣國津御氣文。或又御饌都書之。
御氣津古語也。水者略語也。故古語謂水通、而如卜氏勘草者、以奈具社神豐宇賀能賣命
大膳職御食津神以下十八社神、爲外宮分座之旨載之。致以无正當也。豐宇賀能賣命者、
豐受宮之酒殿神也。御食津神保食神也 卽爲月讀尊被傷害神也。今非當宮之分座。古語拾遺

曰、天照太神者、惟祖惟宗、尊无與(ナシ)二(日前)。自余諸神(者)、乃子乃臣、孰能敢抗。文。天照太神者二宮通稱也。祖卽外宮、宗卽內宮也。故皇御孫尊者、奉敬天照太神(內宮)天照太神者、奉敬豐受宮(外宮)。仍祭吾之時、先可奉祭豐受宮之旨、內宮神勅祭然也。自尒以來諸祭所先外宮也。是則豐受宮者、天神始天照太神祖也。以常宮豈可類素戔嗚尊苗裔保食神等哉。問、御食津神事指南雖分明、愚昧猶有疑云、爲月讀尊被傷害之篇云、御食津神各別之義見何書乎。答、於傷害篇者、見舊事本紀第三卷也。此故天照大神怒甚之曰、汝是惡神。不須相見。乃与月夜見尊一日一夜隔離而住　文。自尒以來晝夜永隔。次御氣津神各別之義、秘府寶錄曰、御膳神(粟國祖大御食都姬神、世間保食神是也。神語供進物名曰由加物也。亦雜器贅同爲由加物也。故神語名御食津稱由賀神、其此緣也)大膳職坐神(御食津神、火雷神、高倍神、鋤持神所化也。)件三柱神者、素戔嗚尊苗裔、稻倉魂名宇賀能賣命。亦稱御食津神也。亦大年神子奧津比賣命、大戶比賣命、是竈神坐也。文。仍彼御食津與宇賀能賣命同躰也。卽坐于當宮酒殿也。如載右御氣津者、古語水也。水者御氣津之略語也。御食津者、御饗津也。非水之儀、出化時代與文義之道理、最可令分別。若以御氣津雖有書御食津、是說者之謬也。不足于爲本也。云云

少西小

延喜式第四曰、度會宮四座。在二度會郡沼木鄕山田原一。去二太神宮西一七里。
豐受太神一座。相殿神三座。
禰宜一人。從八位官。大内人四人。物忌六人。父六人。小内人八人。
又曰、凡二所太神宮禰宜、大少内人物忌、諸別宮内人物忌等、並任二度會郡人一。又曰、凡元日、諸宮禰宜内人等各奉レ拜二神宮一。即供二進白散御酒一。其白散國司進之 訖皆會二集御厨一。太神宮司擧二諸宮禰宜、内人、及神郡司等一遙二拜諸宮一。先拜二度會宮一、次太神宮、次諸宮。 訖即朝拜。然後賜レ宴。云云
同第九曰、度會郡、度會宮四座。相殿坐神三座。並大。云々
神皇實錄曰、豐受之宮二座。在二度會郡沼木鄕山田原一。大二座、前二座(稱)二相殿一。
天御中主皇神一座。
天津彥々火瓊々杵尊一座、名二東相殿一神座也
天兒屋根命天太玉命二座 名二西相殿一神是也
神皇系圖曰、天御中主尊、神風伊勢百船度會山田原太神座。

古事記釋註曰、外者遠儀也。是天地開闢始神座。故因レ遠号二外宮一。若曰二立古之君一。太田命傳曰、國常立尊所化神、以二天津御量事一。云云 三才相應之三面眞經津寶鏡乎鑄造表給倍利。

故此鑄顯神名、曰二天鏡尊一。一面者云々崇ニ祭止由氣皇太神宮一是也。從二天上一御隨身寶鏡是也。神代天御中主神所レ受白銅鏡也。是國常立尊所化神也。天鏡尊月殿居所ニ鑄造ニ鏡、三才三面之內一面是也。

阿波良波命傳曰、御靈形鏡坐也。國常立所化神以二天津御量事一天三面乃眞經津乃寶鏡鑄顯給倍利。

彼三面寶鏡之內第一之御鏡是也。圓形坐。奉レ藏二黃金樋代一焉。

相殿神　左皇孫尊

上代本紀曰、高貴太神勅宣爲二相殿神一座。靈形鏡坐也。金鏡也。云々

御鎭坐本紀曰、戊午秋七月七日以二大佐、命一奉二布理一留。與魂命、道主貴奉レ戴二相殿一云々。已上

具上

麗氣曰、左皇孫尊、天上玉杵命二柱一座、神躰鏡二面。云々

阿波良波命傳曰、左一座皇御孫尊、御靈形鏡坐。二面大西小東以レ西爲レ上。同御船代內座是神

意異靈
鈎異頭
切異功
日ノ下異女アリ

代靈異物也。以二二面一爲二一座一居道主貴奉レ齊神是也。大物忌内人奉仕其緣也。
瑞器記曰、以二天香山金一葺不合尊制作也。謂攝津國與二播磨國一合レ境乃世天尓志奉レ鑄之
右天兒屋命天太玉命
神皇實錄曰、詔二二神一侍二同殿内一善爲二防護一矣。故名皇孫尊之前坐也。亦名西相殿是也。
瑞器記曰、外宮右相殿靈鏡二面、葺不合尊制作也。取意
麗氣曰、右天兒屋命前後太玉命前後天兒屋命亦八意思兼釼神、亦名二左右上下神一、亦名二頭振女神一、
亦名二百大龍王神一。神躰切金方笏御靈鏡、太玉命、亦名二大日荒神一、亦名二月絃神一、亦名二月讀命一。
神躰一輪寶靈鏡莖中藏レ之。又云、靈鏡外寶珠劍柞牙笏賢木神寶奉レ餝レ之崇祭。
阿波良波命傳曰、天兒屋命靈形、笏坐牙像也。珠玉一隻、賢木一枝坐。天石戸開之時、天兒屋
命捧持祝詞敬拜鎭坐笏賢木是也。太玉命靈形、瑞八坂瓊之曲玉奉レ藏二圓筥一也。是天祖吾勝
尊所化寶是也。亦五百箇御統玉奉レ懸二眞賢木枝一也。奉レ納二曲玉一圓筥三合、靈異物觸事有レ効、
亦五百箇乃在金玉餝寶珠等、天石戸開之時、太玉命捧持寶玉是也。圓筥則混沌之形也。故藏二
万物種子一是也。亦玉串内人奉仕眞賢木、五百箇御統玉之其緣也。

寶玉事具載二前卷一。靈氣說以二靈鏡一藏二筐中一爲二神躰一。云云 神記以二曲玉一納二圓筥一也。云云 兩說不レ同尋レ之。云二靈鏡一云二曲玉一納筥也。云云

社記曰、天兒屋命太玉命者、元者內宮相殿也。而外宮御遷坐以後、依二內宮御詫宣一奉レ傍二外宮一者也。

三十二神

天潛尾命　水潛尾命　地潛尾命
木潛尾命　火潛尾命　土潛尾命
石潛尾命　金潛尾命　天日尾命
天月尾命　天子尾命　地子尾命
天破塔命　天破法命　天破仁命
天破神命　國加利命　國加富命
國加國命　國加賀命　愛鑒尾命
愛護尾命　解法尾命　學耳尾命

上法神尊　下法神尊　中言神尊
天鏡神命　地鏡神尊　百鏡神尊
千鏡神尊　万鏡神命

降臨次第麗氣記曰、豐受皇太神于時大日本國天降、淡路三上嶽三十二大眷屬從。庚申年迄二春秋一（古止）五十五万五千五百五十五年。（神号如上）遷二佐倉宮一自二丙申一迄二年月一五十六万六千六百六十六年。八輪嶋宮迁戊申年積年五十七万七千七百七十七年。八國嶽迁庚申歲五十八万八千八百八十八年。丹波乃與謝之郡比沼山頂麻那井原迁。壬申歲五十九万九千九百九十九年。與佐宮迁庚申六十一万千八百十年。（神社本源私勘、已上六箇所御迁坐都廣一百九十万六千百七十年歟云云）

神皇實錄曰、部類神五十二坐列也。（具見二御形文篇一）

別宮

多賀宮

式第曰、多賀宮一座。（豐受大神荒魂。去二神宮南一六十丈。又九曰、高宮大。）

大田命傳曰、伊吹戸主神、天照太神第一攝社也。依二神誨一奉レ傍二止由氣宮一也。

神祇譜天圖曰、件神天下四方國人夫等諸事漏落事悉神直日命、大直日命聞直見直給安久平久所知食也。

神祇本源私記曰、元者荒祭宮一所並坐。東多賀宮、西荒祭宮。此故至于今荒祭宮東西迁宮違本宮迁座例也。

阿波良波命傳曰、多賀宮一座。止由氣皇太神荒魂也。伊弉諾尊復洗右眼因以生月天子天御中主靈貴也。天下降居而名止由氣太神之荒魂。多賀宮是也。亦曰、伊吹戸主神也。御靈形鏡坐也。是天鏡尊所造、三面寶鏡、伊弉諾尊右手仁令捧持天、月神所化乃眞經津鏡是也。此傳所見非一也。

御靈形事　神直日大直日神事、已上具于荒祭宮之段也。

土宮

在下神宮与高宮中上東面座。

式第九曰、大土御祖神社。私云、案式文内宮所攝神事也。

大田命傳神記曰、山田原地主大土御祖神一座。大年神子大國魂神子宇賀之御魂神一座。素戔烏尊子土乃御祖神一座。亦衢神大田命。神寶石寶形一面座。是神財也。

寶氣瑞器記曰、攝社大土祖神、亦名五道大神、號五所大明神座也。山田原地主神也。亦号鎮護神。大年神子大國玉神子宇賀神一座、大土御祖一座、御躰瑠璃壷一口、靈鏡二面、花形坐云々 神寶名石一面、日象扇一枚。

私云、石青色有白文字 其字口傳。

御鎮座本紀曰、素戔烏尊孫大土祖一座。衢神大田命一座。宇賀魂大年神一座。山田原之地護神定祝祭也。注云、大土祖靈鏡坐。大田命靈銘石坐。宇賀魂、靈瑠璃壷座也。

社記曰、大治三年六月五日宮号宣下爲度會河堤守護也。

月讀宮

在神宮北、御靈形鏡坐。

式第四曰、月夜見社。度會宮所攝十六座内也。

社記曰、承元四年五月廿一日宮号宣下依神官請也。

已上外宮三所別宮是也。今加風宮爲四所別宮也。

風宮

齊以下六字因ナシ

在二神宮南土宮東一。但南向座。御靈形鏡坐。

社記曰、正應六年三月廿日官符改二社号一奉レ授二官号一預二官幣一。依二異國降伏之御祈禱一也。

北御門神

倭姬命世記曰、一名曰二若雷神一。賀茂祖同神也。形砥坐。

調御倉神

大田命傳曰、宇賀能美多麻神座、是伊弉諾伊弉再二柱尊處レ生神也。亦号二大宜都比賣神一。亦名二保食神一。神祇官社内座御膳神是也。亦神服機殿祝祭三狐神同座神也。故亦名二專女神一也。齊王專女神也。齊王專女此緣也。亦稻靈宇賀能美多麻神坐。西北方敬拜祭也。尊形座。各一座也。

御鎮座本紀曰、稻靈豐宇賀能賣命、宇賀能美多麻神、保食神、尊形一坐、以二白龍一爲二守護神一也。凡王子八柱同座給也。

酒殿神

大田命傳曰、伊弉諾伊弉再所レ生和久產巢日神兒、豐宇賀能賣神、亦名二姮娥一。亦名二昇女一。

會ノ下因夜アリ

御鎮座傳記ニ文と異同多し御鎮座本紀の文と大躰合す

從二月天一降坐、善釀レ酒。飲二一坏一吉万病除也。其一坏之直千金。財積レ車送レ之。今号二神酒一。驛家使及齊宮人節會賜（給）二酒宴（立女）一布此之緣也。

亦曰、丹波國与謝郡比沼山頂有レ井、其名号二眞那井一。此處居神、則竹野郡奈具神（社）是也。故豐宇賀能賣神、靈石坐也。亦酒造天之匯一日、大神靈器也。以敬拜祭也。古語（曰）二吉祥一、甕腹滿二甘露酒一、名号二神酒一、獻二三節祭一。（也）

丹後國風土記曰、見上

御鎮座本紀曰、亦名二姮娥昇女一。稻靈、電光所變也。五穀種所レ化神保食分身。善釀レ（清）酒、靈形石坐。甕名二賀多普器一。軍陀利夜叉神所化也。亦以二大土祖宇賀魂神一爲二根倉甕里神一。供二神酒一。今号二根倉甕一是也。

御井神

大田命傳曰、御井水、天孫降臨以來、天村雲命堲（理）二治于琥珀之鉢一（金剛夜叉神所化也。徑一尺八寸。）天降居留也。（爲二守護一七星十二神羅列坐、光明如二明星一坐也。）皇太神皇孫之命天降坐時尓、天村雲命乎御前尓立天、天降仕奉。于レ時皇孫之命天村雲命召詔久、食國之水波未熟、荒水尓在介利。故御祖天御中主神之御許尓參上、

太ノ上因皇アリ
吾ノ上因正哉アリ
水ノ下因於アリ

校云。此文御鎭座傳記と合す

此由言天來止詔。卽天村雲命參登弖、天孫之御祖之天照太神、天御中主神之御前尓、皇御孫之申上宣事乎、子細申上時尓、御祖天照太神、天御中主皇太神、吾勝尊神魯岐、神魯美尊神議詔久、雖尓奉牟政者、行奉下弖在度母、水取政道波於遣天、天下復飢餓久在介利。何神乎加奉レ下度牟思間尓、勇乎志天參登來止詔天、天忍石乃長井乃水乎取、八盛天壽給久、此水持下弖、皇太神乃御饌尓八盛獻天、遣水波、天忍石水止術云天、食國乃水尓灌和天、朝夕御饌尓奉獻礼。卽時日向高千穗宮乃御井定崇居爲奉レ仕矣。自レ尓以來、但波眞井原（石）井尓鎭移居　水戸神奉レ仕支。其後從二眞井原一遷二于止由氣宮乃御井一居止焉。二所（皇）大神乃朝大御氣、夕大御氣度、八盛移居、每レ日二時供進矣。凡此御井水者、專不レ干、恒出。異恠之事不レ過二於是社一。亦他用更不レ用レ之。亦道主裔大物忌父御井掃淨奉。亦御井与二御炊殿一往還間道一百二十丈、橋一十五丈（黑木九橋）此月每修理掃淨、雜人等不レ通志天愼敬仕奉。

御鎭座本紀曰、天忍水止云天、食國乃水尓灌和天獻物（物）又御伴尓天降奉レ仕五伴神、三十二神、八十友乃諸人尓毛、（斯水乎）令レ飲詔天下奉支。

亦同本紀曰、皇御孫命詔久、何道与利曾參上止之問給。申久、大橋波皇太神幷皇御孫命乃天降坐乎

恐美、後乃小橋与利参上之止申。時尓皇御孫命詔久、後尓母恐奉仕事勇止詔天、天村雲命大二登命、後小橋命止云三名負給支。後朝夕供奉御膳乃御井、止由氣宮坤方岡片頬尓御井堀天、没供奉。其水大旱魃尓毛不涸、其下二丈許下天庭仁有水田、其田波旱魃仁損須礼止毛此御井乃水波尊不干、恒出異権之事不過於是、又他用更不用之。

攝社

延喜式曰、度會宮所攝十六座。

月夜見社　承元宮号見上

社記曰、坐沼木郷山田村。

草名伎社

社記曰、坐同村大間社西南標御伏云云

大間國生社

社記曰、坐同村東大間西國生、同玉垣内坐、大若子乙若子命云々

度會國御神社

式第九内
社記曰、坐㆓同村㆒天日別命子彥國見賀岐建与見命

度會大國玉比賣社
式第九内
社記曰、坐㆓繼橋鄉字宮山㆒、高神山南尾崎大己貴命佐々良比賣命

田上大水社
式第九内
社記曰、坐㆓同鄉字宮崎㆒、東田上西大水二座同玉垣内坐也。在前社大神主小事

志等美社
式第九内
社記曰、坐㆓沼木鄉山幡村㆒、打懸神同玉垣内座。一名葦野井庭神木神
帳曰、葦野井庭神社、云々　志等美社者未官帳云云

大河内社
式第九内
社記曰、坐㆓同村㆒、山祇神、大山罪乃神

清野井庭社
式第九内
社記曰、坐㆓同鄉山田村㆒、大間社東野草野姬命

高河原社

式内 社記曰、坐同村國生神月讀宮東

神名式曰、川原坐國生神社。 月夜見神御玉云云

河原大社

式内 社記曰、坐箕曲郷勾村字三津社也。 河神水神

河原淵社

式内 社記曰 坐同村河原社南、字塩坪向也 澤姫神

山末社

式内 社記曰、坐繼橋郷字宮山御田口社西也。小奥谷。 山祇大山津姫命

宇須乃野社

式内 社記曰、坐高向郷高向村五穀靈神二座同玉垣内云云

小俣社

式内 社記曰、坐湯田郷小俣村字賀神、一名稻女大明神

簀元食 御饗社。

社記曰、坐二箕曲鄉大口村一、

一名水戸御食都神、速秋津日子神。

帳曰、水戸御食都神社。云云

已上、所レ載二延喜式第四一之次第也。以二社記一注二在所名字等一。

式第九伊勢國度會郡五十八座内同座於二風宮一者内外共不坐

儀式帳曰、右十六社官幣帛宛奉。又曰、月讀草奈伎、大間國生等三所神社、造宮使造奉。十

三社者國宛料令二造奉一也。

一伊我理神社　撫懸神社　打懸社

井中社　志等美社　毛理社

大津社　志貴屋社

帳曰、右八社未レ載二官帳一。

一宮崎氏社　坐二度會郡宮崎一、度會氏祖。

天牟羅雲命　一名天二上命。一名後小橋命。

天御中主尊十世孫也云云。

元元集卷第七　終

元元集巻第八

御遷幸指圖

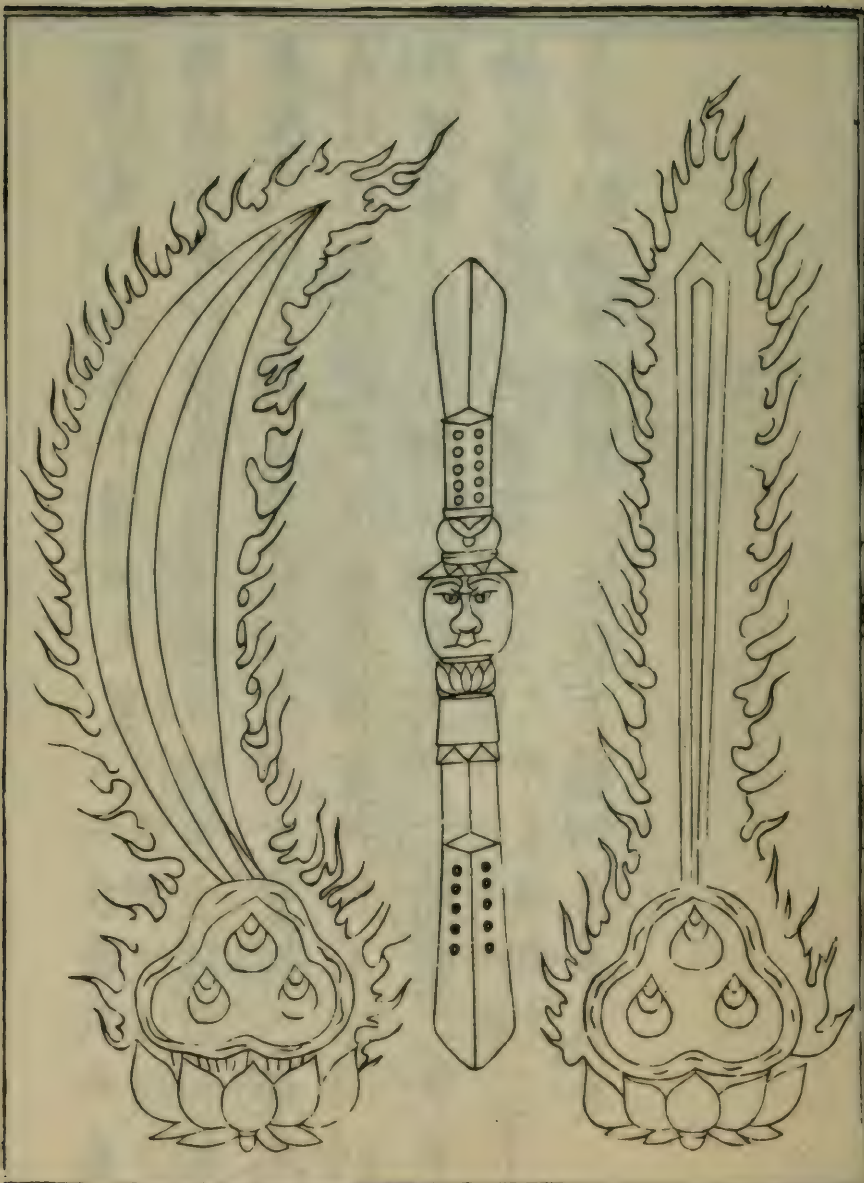
二所天照皇太神遷幸時代抄高天原坐神達
勅弖志經津主命（下総國香取社 春日第二社）健雷命（常陸國鹿嶋社 春日第一社）二柱乎遣弖葦原之中國乎平定弖天
祖神當猶視吾弖止授給倍留三種神財乎為天璽
三十二神前後尓相從天津彥々火瓊々杵尊
皇御孫尊筑紫日向高千穗槵觸之峯尓天降給弖
治天下卅一万八千五百卅二歳（陵在日向國愛山也）



天祖當猶視吾授賜之故以八咫鏡奉崇敬
天照太神御霊形也彦火々出見尊治天下六
十三万七千八百九十二歳陵在日向國高屋山



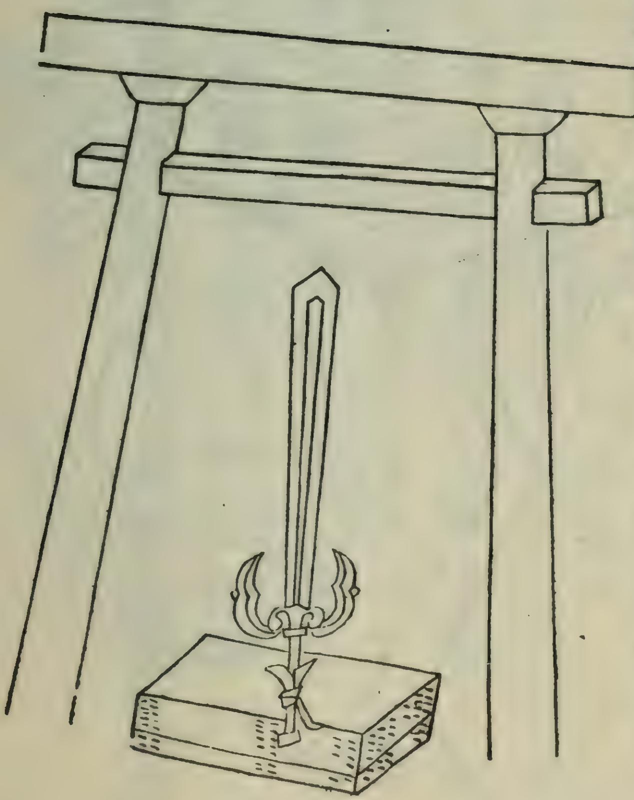
彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊 彦火々出見尊太子母豊玉姫海童之女
治天下八十三方六千卌二年 陵在日向國吾平山以
上地神五代之内神日本磐余彦天皇 大和國橿原宮
号神武人皇始元年甲寅歳冬十月發向日本國也 東征是也
即位八年建都橿原經營帝宅天四方國乎安
國止平久知食須天津璽乃劔鏡乎捧持賜天
稱辭竟奉弖九帝者帝与神同殿共床故神物
官物未分別 九帝者神武綏靖安寧懿德孝昭孝安孝霊孝元開化天皇也
以往九帝治天下歴年六百卌余歳也



御間城入彦五十瓊殖天皇大和國磯城瑞籬宮䅗神天皇是也即位六年己巳秋九月倭國笠縫邑立磯城神籬奉遷天照太神及草薙劔令皇女豊鋤入姫奉斎以往雖同殿共床漸畏神霊共住不安別與神籬後石凝姥神裔天目一箇裔二氏更鑄造鏡劔以為護身璽是踐祚之日所献之神璽鏡劔也二十九年壬戌遷幸但波乃吉佐宮積四年奉斎矣



祇三年丙寅遷倭國伊豆加志本宮八年奉斎



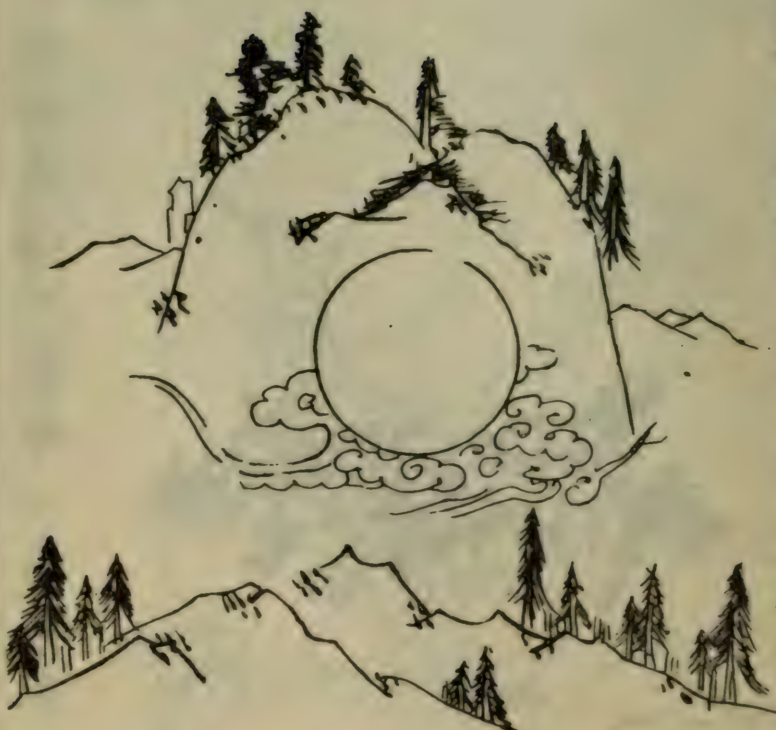
五十一年甲戌遷于乃國奈久佐濱宮積三年奉齋



五十四年丁巳遷吉備國名濱宮四年奉齋



五十八年辛巳遷倭弥和乃御室嶺上宮二年奉斎



豊鋤入姫命尓時姪倭比賣命仁事依奉利御杖代止定給



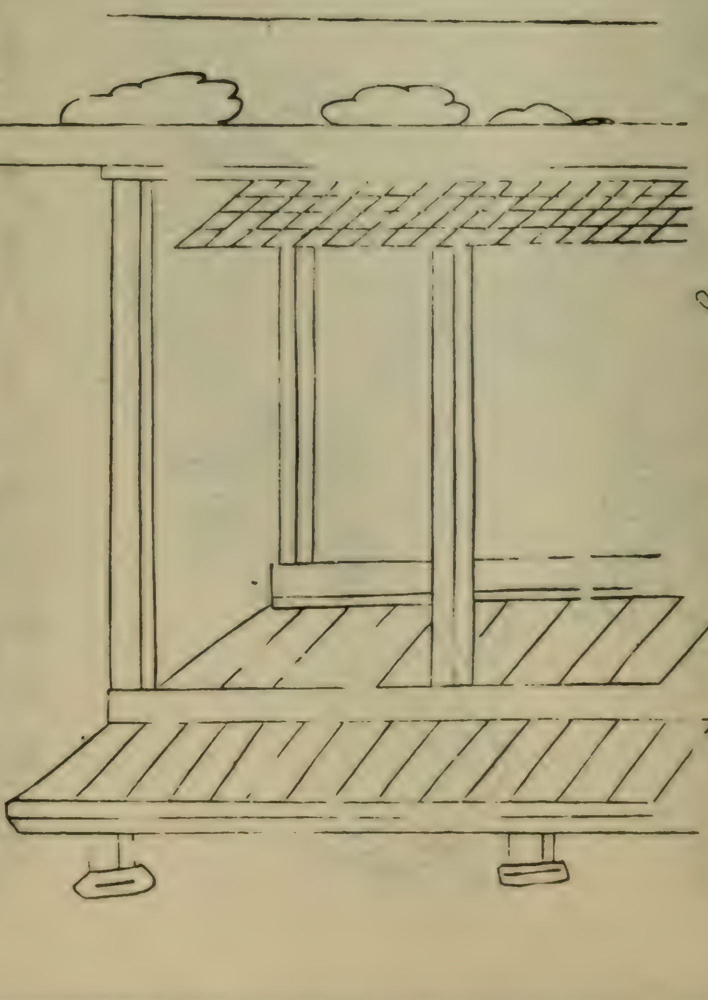


六十年䅝遷于大和宇多秋志野宮積四年奉斎

六十四年丁未遷幸伊賀國隱市守宮ニ二年奉齋



六十六年巳遷于同國穴穗宮積四年奉斎



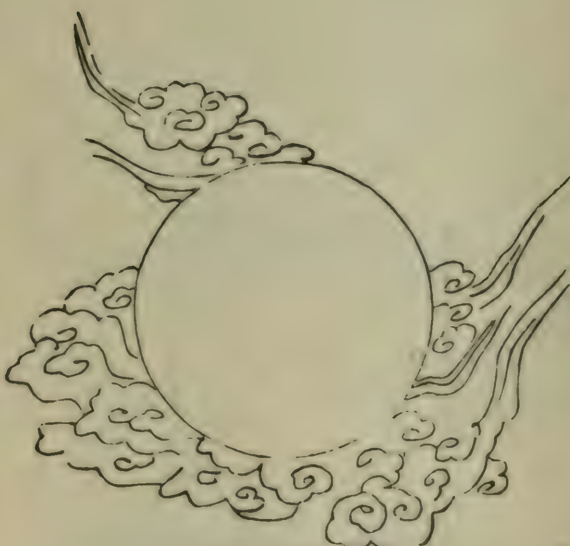
崇神天皇治天下六十八年

陵在ニ大和ノ國城上ノ郡山ノ邊ノ郊ニ

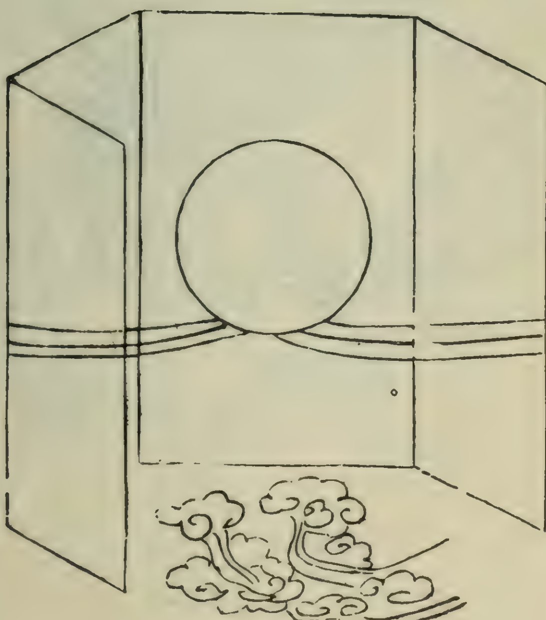


活目入彦五十狭茅天皇纏向珠城宮垂仁天皇是也即位

元年癸巳遷于伊賀國敢都美恵宮二年奉斎

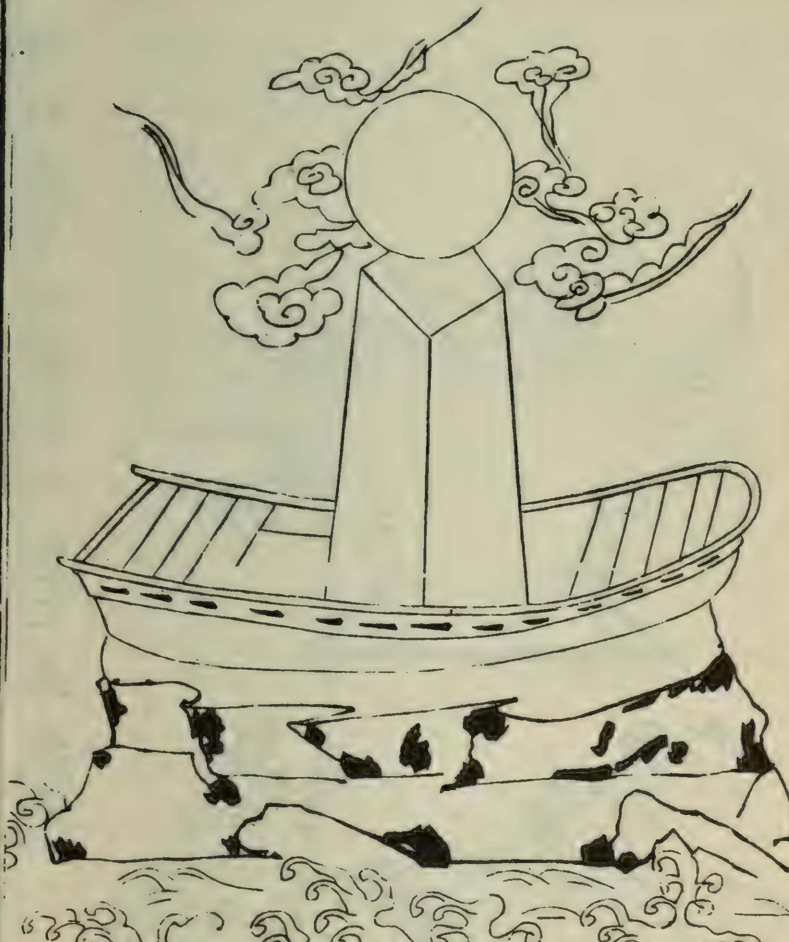


四年乙未遷ニ淡海ノ甲可ノ日雲ノ宮ニ四年奉ル斎キ



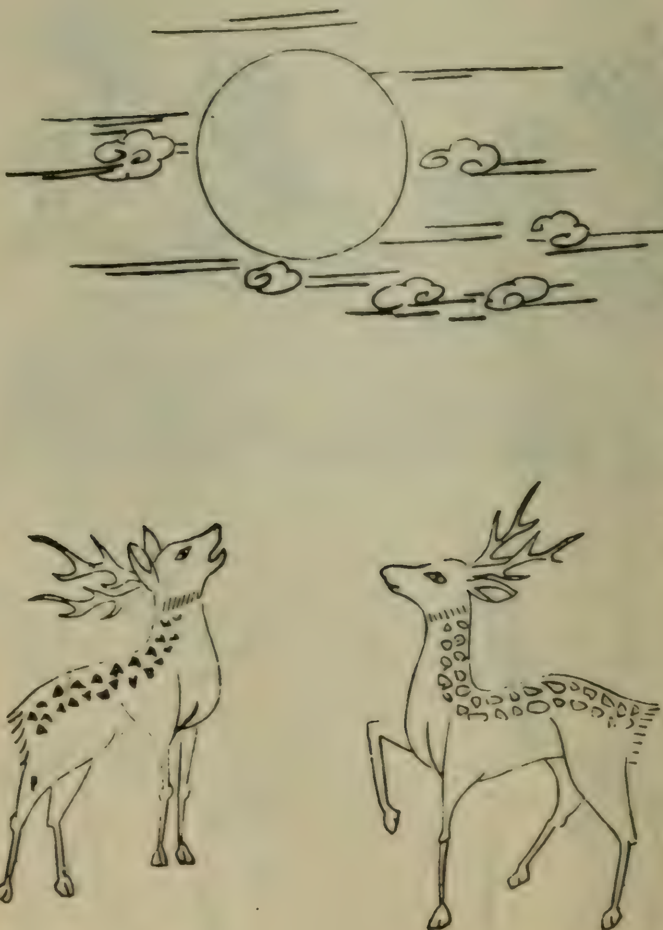
八年起遷于同國坂田宮二年奉齋

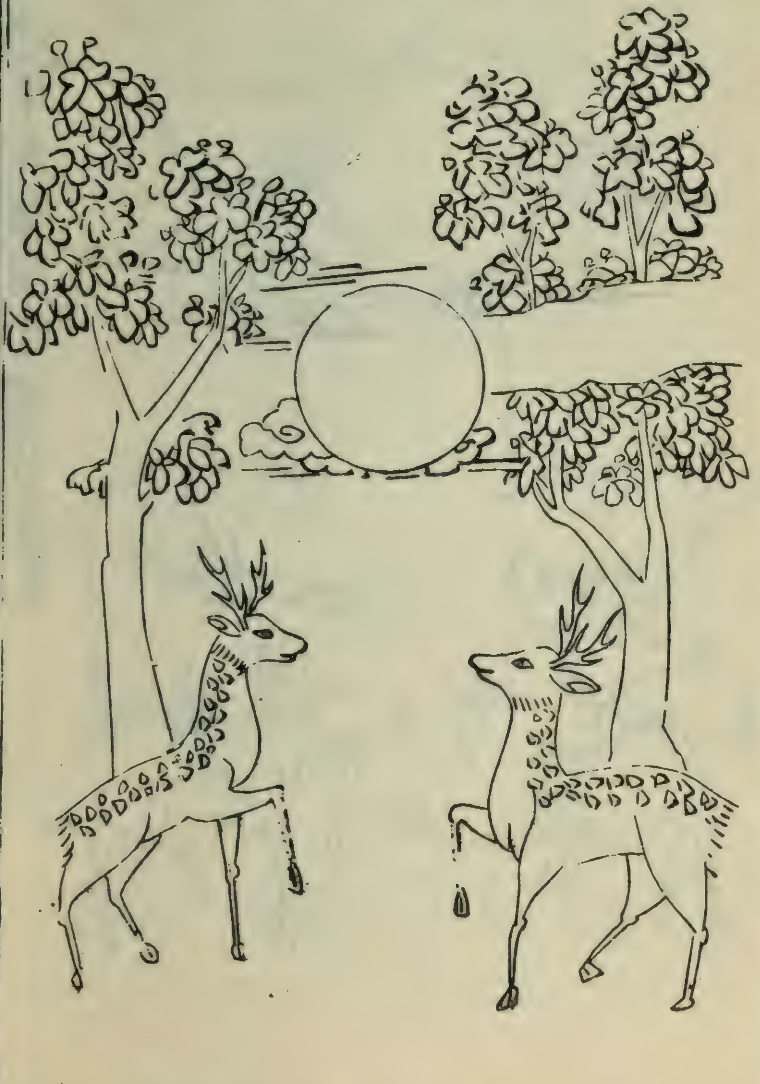




十年辟遷幸于美濃國伊久良河宮四年奉斎

次遷于尾張國中嶋宮座也



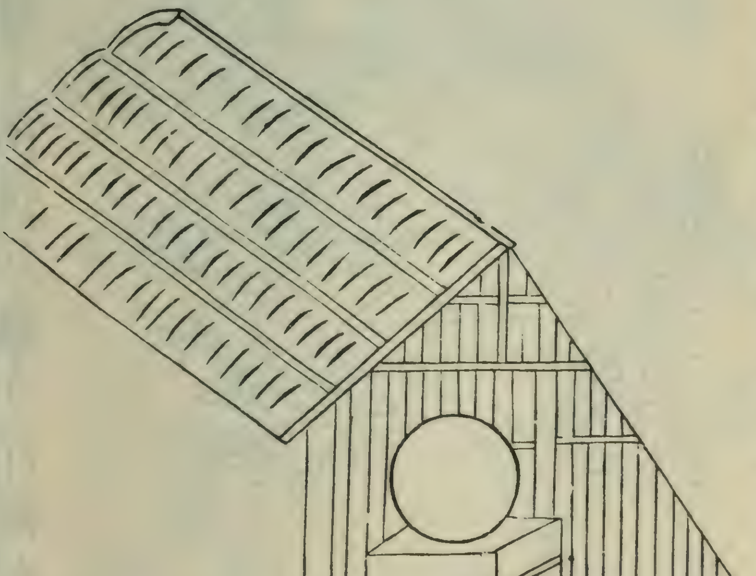


十四年乙巳遷幸于伊勢國桑名野代宮四年奉斎

十八年遷于阿佐加藤方片樋宮四年奉斎

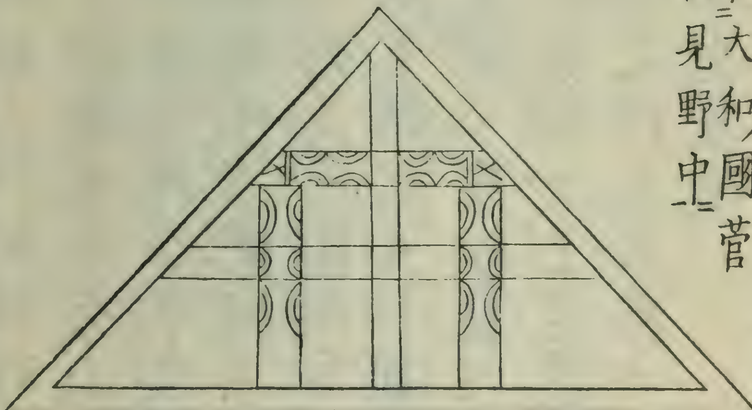


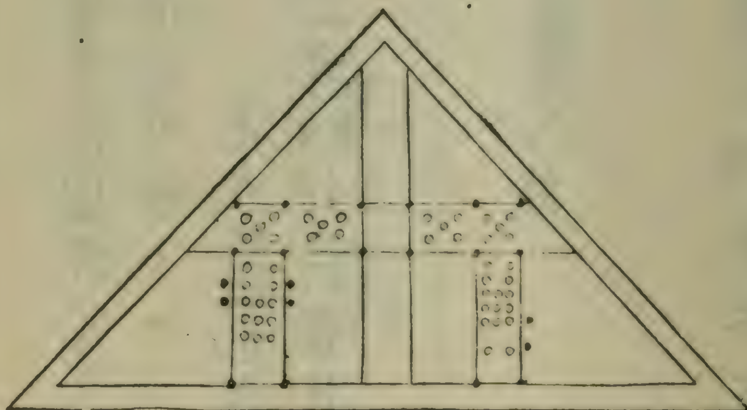
二十二年癸巳遷飯野高宮四年奉齋



廿五年丙辰春三月從飯野高宮遷幸于伊蘓宮
令坐支于時倭姫命南山末見給止弖御宮處覔
尓奉戴天照太神弖宇久留士仁志御船仁奉
弖過狭田坂手弖寒河尓御船留弖過相鹿瀬
滝原和比野久求園相目弖野積良山澤路弖
向田仁弖奉于御船弖小濵仁志御水御饗奉弖
二見濵見津仁御船留弖山末河内見廻給弖
康乃見利家田々上宮遷幸支尓時大田命参
弖五十鈴之河上宮處仁礼条倍止申勢利即彼處
仁往給天甚喜給
廿六年丁巳冬十月甲子奉遷于天照太神於度遇

五十鈴ノ河上ニ御鎮坐垂仁天皇治天下九十九歳（陵ハ在大和ノ國菅原ノ伏見野中ニ）





右此御遷幸指圖者元元集秘極繪卷也率尓
不可有他見可秘々々
尤大史外正六位上阿倍志斐連東人
寳亀二年辛亥卯月吉日

元元集巻第八終

承應二癸己仲春吉且

元々集

元元集 巻第八 異本 神宮下

天御量柱篇

天御量柱者表天瓊矛之刑（形歟）也昔陽神陰神造化磤馭盧嶋以彼瓊矛立於其上此為天柱國柱矣今造二所大神宮建柱於中心名

之心柱ト一ニ名天御柱ト亦名忌柱即又号天御量柱皆此義也 又イ

天口事書曰 第五卷之注也 此書一卷舒明天皇壬辰大神主調書爲推古天皇庚戌太子及大臣令録國祕神殿本紀云云

八坂瓊戈形

天地開闢始浮高天海原神寶是也神語破者古語云天逆桙天逆太刀俗曰天乃魔返桙亦名天乃登保言此名天璽也

天御量柱者天瓊戈異名同體坐也以一基

分天地而爲内外心御柱也故大人者與天
地合其德而利萬物者也
御鎮座本記曰
心御柱 一名天御柱　亦名忌柱　亦天御量柱
謂應天四德地五行徑四寸長五尺御柱
坐以五色絶奉纏之以八葉榊奉餝之是
是則伊弉諾伊弉冊尊鎮府陽變通之本
基諸神化生之心臺也都合天心而與本

德歸皇化而助國家故皇帝曆數天下之

固常磐堅磐无動三十六禽十二神常住（王八大龍神）

住守護坐依損失右天下危

（行基作）大宗祕府曰夫天瓊玉戈亦名天逆矛（亦名金剛宝劍）

亦名天御量柱亦心御柱也惟是天地開闢

之圖形天御中主神寶也（獨股変形座也諸佛菩薩一切群霊心識之根本一切國王之父母也）云云上則金星慧

星輪星鬼星水星風星南斗北斗五鎮大星（心御柱呪字明）

國主星三公星百官星如此諸星各々應護（是）（擁護）

是獨古形三部五部一體不二妙體一万法所生心體者示常住之心蓮臺之上顯一大三千界ノ妙理也此八葉蓮花上有日輪是眞如理也理即智也獨古獨一法身妙體一切衆生得種也所以三万六千盛書其長ケ一丈二尺者一丈表二所衆生也故曰現ハ大龍王十二部三寶常住安穩坐

坐變成形勝輿義是也亦名白木坐鉾木也爲正

形文深釋曰心御柱者天瓊戈表物也亦云

亦曰心御柱者一氣始一心妙法万化種子也

仙宮祕文曰吾聞以代承皇天天御中主詔語

命天皇孫尊天降居之時平鬼神治天下

靈異物三百六十種之神寶所謂天之八坂

瓊曲玉戈白銅鏡神劒類是三百六十種之

中用以天瓊玉戈爲最長而立國御量柱也

云云

惟是初禪梵王應化之種法界體性智所顯露来稱獨古是形也故名
号心御柱即是三千界大慈相妙體也所謂心性不生不滅一切諸法
唯是一心故現心相名神主也

寶山記曰夫水則爲道源流万物父母故長
養森羅万像當知天地開闢當水變爲天地
以降高天海原在獨化靈物其狀如葦牙不
知其名爾時靈物乃中神聖化生名之曰天

書 四理志天

神逮于天帝代名靈物稱天瓊玉戈爲神人

亦曰大梵天王亦称尸棄大梵天王

之財至于地神代謂之天御量柱國御量柱

亦名金剛宝杵

第五說

因輿于大日本州中央名心柱也 云云

天地麗氣府錄曰心柱者元初皇帝御靈也云云

御形文圖篇

倭姬命模天之小宮樹二所之神籬削其端殿也顯玉圖於棟梁稱神靈之御形々相幽奇而非凡人之所識量也雖然後代採內證之祕賾合外相之符契者其傳多存聊拾要樞式爲篇次焉

寶基御靈形文圖曰大和姬皇女承皇天嚴命移高天原之宮而造神風伊勢內外兩宮

社顯御形於棟梁用作化之龜鏡生與心柱
於金石以治國家之福壽天神地祇頓首再
拜天下幸甚

五十鈴宮御靈形者天瓊玉杵象表也是天
地初發萬象根本也所謂王巻須賀利太刀
小刀子此其緣形也惟能摧破諸災患而神
心不亂三神一體靈智神財是也故亦名天
逆戈逆太刀也白銅鏡八百者大八洲靈神

居座也部類三十二神居也
此田原宮御靈形者五位圖形座也是則五
常圓滿智光表理也一輪中合万象五常百
行悉皆一圓常住應化元神座也金鏡十四
面座部類神五十二座
伊勢兩宮炁現美麗之威儀顯御形之珎圖
給是大元之靈明也是禀氣之靈大智也蓋
百千尊号天津御量之功名也故聖神曰內

外不二常一體天神地皆一｜

天口事書曰凡經緯法者君臣上下天地父母大宗形表也於是現大傳珎圖以通神明之德照萬物之情乃成之神通悟諸不遠也天照珎圖者心神華臺之中天地八尊圓鏡坐豊受珎圖者天地父母二儀之中五尊光照金鏡坐俗常以金鏡喩明道也

天神皇珎圖狀者天地之位象四時之行治

天下四時行有寒有暑聖人之法故有文有
武天地之位有前有後有左有右聖人之法
以建經緯春生於左秋殺於右夏長於前冬
藏於後生長之事文也收藏之事武也故文
事在左武事在右

御鎭座本記曰

寶宮棟梁天表御形文

天照太神宮御形象日　天尊位坐也

止由氣太神宮御形象月天尊位坐也
惟天神地祇明元八洲利物形體故皇天久
坐而配日月照宇内之昏衢國家合天地而
寶曆長久天眞之明道鬼神變通人民式幸
甚々々

仙宮祕文云云
寶基本記曰皇太神宮者日天圖形衣合之
心體獨存任天眞故明白也五行中火性五

色中白也故以白銅奉餝之
豐受宮者月天形八洲之中平等圓備之心
體緣五行中水性五色中赤色故以金銅奉
餝之黄金種智圓明義也
御靈形文圖別記曰
內宮御形文圖花臺形各鏡形一面坐八道
中照四海八挺表也白銅鏡形金東西左右
卅二面也

外宮御形文圖五圖形坐黄金鏡形金東西
左右五十二面也
御形者正殿梁上宇立之左右横竪版
如丁字内御形者横竪版上各四華臺形
其上又各右一面之銀鏡（以銀薄瑩之也）一方左
右合右十六華臺十六銀鏡東西都盧三十
二華臺形三十二面銀鏡也外御形者横
版上右五々二十五月輪形其間又右五

金鏡以金薄瑩之也竪版上有五六三十月輪其間又有八金鏡一方左右合有一百十月輪二十六面金鏡東西都盧二百二十月輪形五十二面金鏡也

神宣禁誡

皇祖天神經營天下詔勅教令炳乎如日書紀相傳以至於今逮人皇之世鎮坐之末幽明已膈鬼神難通其所傳若非託人之詞者

便是入夢之誨也亶之虚實又須在其人焉
倭姫命奉齋大神五百余年與玉神自稱出
世二百八万歲當知匪直也人仰受其言以
備奉神之鑑誡抑又神代語先哲之訓有
便干禁誡者附以錄此矣
舊事本紀二曰天神御祖詔授天璽瑞寶十
種謂嬴都鏡一邊都鏡一八握劒一生玉一
死反玉一足玉一道反玉一蛇比礼一蜂比

乱一品物比乱一是也天神御祖教詔曰若
有痛處者令茲十寶謂一二三四五六七八
九十而布瑠部由良由良止布瑠部如此爲
之者死人反生。矣部讀様口傳是則所謂布瑠之言
本矣亦曰五天孫磐余彥尊欲平天下興師
東征云云饒速日尊兒宇摩志摩治命以天
神御祖授饒速日尊天璽瑞寶十種而奉獻
於天孫大喜增寵異矣云云大歲辛酉十一

月朔庚寅初齊瑞寶奉爲帝居鎭祭御魂祈
請壽祚其鎭魂之祭自此始者矣云云凡厥
鎭祭之日猨女君等主其神樂擧其言大謂
一二三四五六七八九十而神樂哥舞尤縁
瑞寶蓋謂斯歟
件瑞寶及咒文者天祖授饒速日命也雖
然神武天皇御世納爲官物鎭魂之儀又
自此始云於咒文者尤可爲祈壽祚之神

語也其瑞寶則藏石上神社云云
神皇系圖曰天皇鎭魂八神高皇産靈神此尊者極天之祖皇帝也神皇産靈神八咫烏祖魂留産靈神玉作
生産靈神生魂足産靈神生魂足魂道反魂大宮賣神
傳女御膳神保食神事代主神素盞嗚尊子大已貴神長子也右
八柱神則八洲守護驗神八齋靈命八心府
神坐故式爲皇帝之鎭魂神矣謂夫水氣者
清淨海水卽本祖元神性也湯氣者濁世生

類不清實執也故清淨神氣祭則人魂陽氣鎭也故有鎭魂也陽者氣也亦光明也故名曰魂也凡一氣化現名号神靈是生化魂也故陽氣散也即爲死即拂去居善哉皇天壽曰而布留都由良都止布瑠都云云惟是皇天元極大神咒也都舊事本紀部字也今爲都不審天兒屋命雲驛咒文曰

諸神等各念此時清淨偈諸法如影像清淨

先假織取說不可得皆從因業生文 裏書云愚案此咒文眞僞都未決蒙竊惑者也云云

倭姬命世記曰

御間城入彥五十瓊殖天皇六十年云云佐々波多我門爾童女參相則問給久汝誰答曰奴吾波天見通命孫仁八佐加支刀部兒宇多乃大乗禰奈止白岐亦詔曰御共從仕奉哉答曰御供從奉仕件童女於大物忌

止定給比弖天磐戸乃鑰預賜弖利无黒心弖志以

丹心天清潔久齋愼美左物於不移右須右

物不移左志天左左右右左返右廻事萬事違

事奈久志天大神奉仕元元本本故也

雄略天皇即位廿二年

倭姫命磯宮坐冬十一月新嘗祭之夜深天

雜人等退出之後神主部物忌等宣久吾今

夜承皇太神茲止由氣皇大神勅所託宣汝

正明聞給倍人乃天下之神物也莫傷心神

神垂以祈禱爲先冥加以正直爲本任其本心皆令得大道故神人守混沌之始屏佛法之息崇神祇散齋致齋內外潔齋之日不得弔喪問疾食宍不判刑殺不決罰罪人不作音樂不預穢惡事不散失其正致其精明之德左物不移右兵器无用不聞鞆音口不言穢惡目不見不淨鎭專謹愼之誠宜致如在之禮矣于時大神主阿波良波命承宣記之

神主部物忌等承神宣以爲訓傳各齋持不
顯靈（露）深藏以神祕焉
倭姬命召集於宮人及物部八十氏等宣久
神主部物忌等諸聞吾久代大神託宣摩志万志
木　心神則天地之本基身體則五行之化生
奈利　肆元元入元初本本任本心與神垂以祈
禱爲先冥加以正直爲本利　夫尊天事地宗
神敬祖則不絶宗廟經綸天業又屏佛法息

奉再拜神祇礼日月廻四洲雖照六合須照
正直頂止詔命明矣
御鎭座本記曰（イナレ此一行）
倭姬內親王（雄略御宇廿二年秋九月）託宣久各念天地大冥之時日
月星神像現於虛空之代神足履地而與于
天御量於中國而上去下來而來見六合天
照大神悉治天原耀天統皇孫尊治葦原中
國受日嗣聖明所覃莫不砥屬宗廟社稷之

靈得一无二之盟百王之鎮護孔昭是以從
人本天地續命禮皇祖標德深其根源恭宗
祖神令朝四方之國以觀天位之貴弘大業
明天下夫逆天則无道逆地則无德外走本
居没落根國齊情於天地乖想於風雲者爲
從道之本爲守神之要將除万言之雜說而
擧一心之定準配天命而嘗神氣理實灼然
故祭神清淨爲先我鎮以得一爲念也神主

物忌等諸祭齋日不觸諸穢惡事不行佛法
言不食宍迄至神嘗會日不食新飯常謐心
愼攝掌敬拜齋仕矣　亦曰――
大田命傳
與王神託宣久天照坐皇大神則大日靈貴
故号日天子以虛空爲正體焉故曰天照大
神亦止由氣皇神則月天子也亦名天御中
主神以水德利萬品故亦名御饌都神惟諸
神福田生化壽命也汝等受天地之靈氣而

種神明之光亂誰撓其神心誰干其慮耶謹請再拜言壽竟神祇令曰凡散齋之內諸司理事如舊不得弔喪問病（謂有重親喪病者不可預祭之限）食宍亦不判刑殺不決罰罪人不作音樂（謂不作絲竹哥舞之類也）不預穢惡之事（謂穢惡者不淨之物鬼神所惡）致齋唯爲祀事得行自餘悉斷其致齋前後兼爲散齋格曰（弘仁三六）改仰齋日事右據今條祭祀所司預申官官散齋日平旦頒告諸司其散齋

之内不得弔喪問疾食宍不判刑殺不決罸

罪人不作音樂不預穢惡之事今被右大臣（内麻呂）

宣稱奉勅散齋之日頒告諸司未承事之前

或有犯禁忌之徒宜改今条散齋之前一日

亦曰定准犯科祓例支

○頒告諸司自今以後下不為例

一　大祓斷物廿八種事　目略之

右闕怠大嘗祭事及同祭齋月内弔喪問疾

判署刑殺文書決罸食宍預穢惡之事者宜

料大嘗所輸雜物具如前官人兼解見任

一

上嘗新物廿六種 色目略之

右闕怠新嘗祭鎭魂祭神嘗祭祈年祭月次

祭神衣祭等事歟伊勢太神宮禰宜内人及

穢御膳並新嘗等諸祭齋日犯弔喪問疾等

六色禁忌者宜料上嘗輸物如右

延喜 宮式 第五 齋 曰凡忌詞内七言佛稱中子經

稱染紙塔稱阿良々伎寺稱瓦葺僧稱髮長

尼稱女髮長齋稱片膳外七言死稱奈保留

病稱夜須美哭稱鹽垂血稱阿世打稱撫宍

稱菌墓稱壤又別忌詞堂稱香燃優婆塞稱

角筈

神記大田命傳曰雄略天皇廿一年秋九月種々

事忌定給內七言外七言云云一同式文

造式之日神宮齋宮等式守本宮行來例

歟內七言外七言一同神記之說卽其證

據也抑如神記者雄畧御宇倭姫命定給
云云 佛法未渡此土之前定內七言禁忌
可謂未來記別乎事已有疑 云云
應神仁德世盛傳漢家之典籍撿其時代當
漢末三國之間明帝以後歷多年運然乃雄
畧天皇御宇倭姫命在世之間何不傳佛法
名字哉知又神宣也不足爲恠矣

神宮職掌服假禁忌事

延喜式第四神宮曰禰宜大内人雜色物忌父小
内人遭親喪不敢觸穢及著素服卅九日之後
祓清復任其服闋之間侍候外院不預供祭
物亦不參入内院傍親服中亦同但物忌父死者子
解任子死者父又子解任並非復任之限
佛法僧尼禁忌事 神祇本源所引用也
二所皇太神御鎮座記曰雄略天皇即位廿
二年大土祖衢神告覺曰高貴神託宣久又

詔布神主部物忌職掌人等諸祭齋日爾不觸穢惡事不見不聞不吊不言佛法言忌亦不食宍迄神嘗日爾不食新飯齋身謐心愼攝掌以敬拜祭矣

亦曰神人守混沌之始屏佛法之息倭姫世記同之

豊受皇太神御鎭座記曰倭姫命託宣諸祭齋日不觸諸穢惡事不行佛法言

神祇式三日祈年賀茂月次神嘗新嘗等祭

前後散齋之日僧尼及重服奪情從公事之輩不得參入内裏雖輕服人致齋散齋（齋イニ）之日不得參入自餘諸祭皆同此例

或書神祇本源曰被行神事之（文按中字脫歟）内裏猶以不被入僧尼何況伊勢太神宮者宗廟中之大庿也任神宜勅語不可不忌僧尼矣云云

以上元々集八巻目

右元々集神宮下一巻者流布印本所闕
之而世間希有之祕冊也享保丙申仲冬
初八粤給寫功惟夫傳寫謬(誤原本)誤頗不少今
舉一二正之以朱點尚至有疑者蓋闕如
併期來日

高辺文

享保七壬寅端午之天衣笠老人之以御本一挍畢

政整（花押）

右秘冊政整丈秘藏書也享保十三戊申秋九月令懇望一日ニテ寫畢

重秋（花押）

右一冊

享保十七年壬子首夏初七　謄寫畢　谷垣守

神皇正統記　元元集　日本古典全集之内

編纂者　正宗敦夫

發行者　東京市豊島區長崎東町三丁目一六一
合資會社　日本古典全集刊行會
代表社員　長嶋東一

印刷者　東京市豊島區長崎東町三丁目一五八
不二製版印刷所　高瀬清吉

發行所　東京市豊島區長崎東町三丁目一六一
合資會社　日本古典全集刊行會
振替東京七三〇三二

【非賣品】

昭和九年九月十日印刷
昭和九年九月廿日發行